

茨城県教育財団文化財調査報告 XIII

石岡都市計画事業南台土地区画整理 事業地内埋蔵文化財調査報告書

兵 崎 遺 跡 大谷津A遺跡 対馬塚遺跡
大谷津B遺跡 大谷津C遺跡 外山遺跡

(財)茨城県教育財団調査課

受理年月日

57. 6. 1.

受理番号

82- 64

寄贈機関

昭和 57 年 3 月

財団法人

茨 城 県 教 育 財 団

序

住宅・都市整備公団による「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」は時代の要請に基づくものでありますが、一方、地域開発と文化財の保護をどのように調和させていくかが大切になっております。

このような時、事業地内に存在する埋蔵文化財について記録保存するため、昭和54年度より財団法人茨城県教育財団が、日本住宅公団（現住宅・都市整備公団）から委託を受けて発掘調査を実施いたしました。この調査により、原始古代の遺構・遺物等多くの資料が検出され、郷土の歴史の解明に大きな成果をあげることができました。

この報告書は、昭和54年度後半から昭和56年度初頭にかけて発掘調査を実施した「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」地内の遺跡について、本年度に整理・執筆したものであります。この報告書が上梓されるまで種々御協力をいただいた住宅・都市整備公団、石岡市教育委員会、地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育委員会の各位に対し、深甚なる感謝の意を表します。

おわりに、本書が学術研究の資料としてはもとより、教育・文化の向上の一環として広く活用されますことを期待いたします。

昭和57年3月




財団法人 茨城県教育財団

理事長 大 金 新 一

例 言

- 1 本書は、財団法人茨城県教育財団が日本住宅公団（現住宅・都市整備公団）との委託契約に基づいて、昭和54年12月～56年6月にわたって実施した「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 昭和54～56年度の「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査」に関する組織は、次のとおりである。

理事長	竹内 藤男 大金 新一	(茨城県知事 昭和52年4月～昭和56年11月) (昭和56年12月～)	調査第1班	青木 義夫 (昭和54年度班長)
副理事長	古橋 靖	(茨城県教育長 昭和54年6月～)		荒堀 彰夫 (昭和54・55年度調査)
常務理事	川野辺四郎	(昭和52年4月～)		和田 雄次 (昭和54・56年度調査)
事務局長	大内 秀夫 小林 義久	(昭和52年4月～55年3月) (昭和55年4月～)		高村 勇 (昭和54年度調査)
調査課長	川俣吉之助 大塚 博 寺内 寛	(昭和52年4月～55年3月) (昭和55年4月～56年3月) (昭和56年4月～昭和55年度 調査第1班々長)		根本 康弘 (昭和54年度調査)
				山本 静男 (昭和55年度調査, 昭和56年度整理・執筆)
企画管理班	坪 秀雄 鈴木 三郎 海野 孝志 綿引 良人	(昭和54年4月～班長) (昭和52年4月～) (昭和53年4月～56年3月) (昭和56年4月～)	倉本富美男 (昭和56年度班長)	
			安藏 幸重 (昭和56年度調査)	

- 3 本書における土層及び土器の色相は、『新版標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用し、実測図内には記号化して表した。
- 4 遺構実測図において、炉跡を  ・焼土を  と表した。石器実測図においては、磨痕を  と表した。
- 5 本報告書で使用したレベル値は海拔高であり、住居跡・土壙・ピットなどの深さは、それぞれの確認面からの計測値である。
- 6 本報告書で使用した記号は、下記のとおりである。
S I—住居跡 S K—土壙 S X—方形周溝状遺構 S D—溝状遺構 P—ピット
- 7 発掘調査後の資料の整理や報告書の執筆・作成は、各関係者の協力を得て、山本静男が実施した。
- 8 発掘調査や出土遺物の整理等に際して、御指導や御協力を賜った関係諸機関・各位に深く感謝の意を表したい。

目 次

序	
例 言	
目 次	
第 1 章 調査経緯	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の経過	1
(1) 調査区画と調査方法	1
(2) 調査経過	2
第 2 章 位置と環境	3
1 地理的環境	3
2 歴史的環境	7
3 層序	8
第 3 章 遺構と遺物	12
第 1 節 兵崎遺跡	13
1 竪穴住居跡	14
2 土壌	16
3 方形周溝状遺構	18
4 溝	20
第 2 節 大谷津A 遺跡	25
1 竪穴住居跡	26
2 土壌	27
3 方形周溝状遺構	42
第 3 節 対馬塚遺跡	46
1 竪穴住居跡	46
2 土壌	53
第 4 節 大谷津B 遺跡	63
1 竪穴住居跡	63
2 土壌	78
第 5 節 大谷津C 遺跡	86

1	土壙	87
第6節	外山遺跡	90
1	竪穴住居跡	91
2	土壙	274
3	方形周溝状遺構	299
第4章	まとめ	305

第1章 調査経緯

1 調査にいたる経過

常磐線と鹿島鉄道銚田線に囲まれた筑波山に見える丘陵地に、景観道路・菜園付住宅地等を計画し、また研究学園的施設等を誘致することによって特徴づけられた住宅市街地を形成し、石岡市の市街地整備の一端を担おうとする「石岡都市計画事業南台土地区画整理事業」が、当時の日本住宅公団により昭和49年に計画された。施行地区に含まれる区域は、茨城県石岡市大字石岡及び東田中の各一部である。この74.3haに及ぶ南台土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の状況については、昭和49年に茨城県教育委員会が分布調査を実施した。

茨城県教育委員会は、開発の著しい地域における埋蔵文化財包蔵地の現況について、昭和53年に再度分布調査を兼ねた確認調査を実施した。この調査結果に基づき、茨城県教育委員会・石岡市教育委員会・日本住宅公団が南台土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて協議を重ねた結果、「兵崎遺跡」・「新池台遺跡」・「対馬塚遺跡」・「大谷津A遺跡」・「大谷津B遺跡」・「大谷津C遺跡」・「外山遺跡」について現状保存が困難なため、記録保存をとることで合意した。

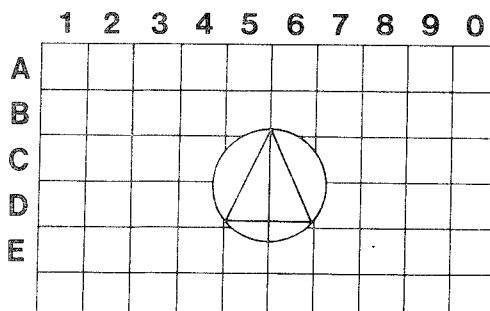
これに基づいて、昭和54年4月に日本住宅公団と茨城県教育財団との間で、石岡南台地区に存在する埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査業務についての委託契約を締結し、茨城県教育財団は、調査第1班を配置して南台地区の上記遺跡の発掘調査を実施することにした。

尚、日本住宅公団は、昭和56年10月1日付をもって宅地開発公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い、従来の契約によって生じた権利・義務は、そのまま新公団に承継されることになった。

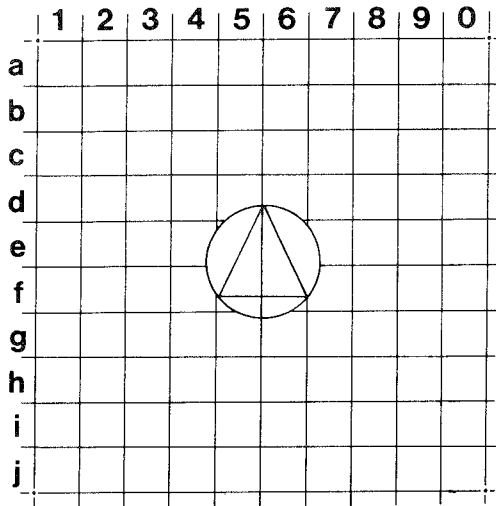
2 調査の経過

(1) 調査区画と調査方法

調査区設定は、調査対象区域内に設定されている日本住宅公団杭（A17）を基準として定め、真北線上にX軸、東西にY軸の40m四方の大調査区を設定し、さらにその大調査区内を4m四方の小調査区に分割した。すなわち、40m四方の一大調査区に100



第1図 大調査区名称図



第2図 小調査区名称図

表した。

発掘方法は分層調査で実施し、さらに遺構の場合、竪穴住居跡については原則的に四分法、土壙等については二分法で実施した。

(2) 調査経過

調査担当者は、日本住宅公団南台地区開発課事務所や石岡市教育委員会などと連絡をとりながら、発掘調査に携わる作業員の募集、調査事務所の建設、発掘器材の搬入、調査区の設定等の諸準備を進め、昭和54年12月11日より作業員を投入して「兵崎遺跡」の発掘調査を開始し、続いて「大谷津A遺跡」、昭和55年度には、「対馬塚遺跡」、「大谷津B遺跡」、「大谷津C遺跡」、「外山遺跡」、昭和56年度は、前年度からの継続調査となった「外山遺跡」の発掘調査を実施し、6月末日で終了した。

遺跡名	所在地	面積 (㎡)	昭和54年度			昭和55年度												昭和56年度		
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
兵崎遺跡	石岡市大字石岡字兵崎3703-7他	10,000	□																	
大谷津A遺跡	石岡市大字石岡字大谷津4122-5他	5,000	□	□																
対馬塚遺跡	石岡市大字石岡字対馬塚4075-4他	2,315				□														
大谷津B遺跡	石岡市大字石岡字大谷津4094-2他	5,479				□														
大谷津C遺跡	石岡市大字石岡字大谷津4087-1他	660							□											
外山遺跡	石岡市大字東田中字外山1496-6他	13,212										□						□		

個の小調査区が設定されるわけである。調査対象遺跡内の調査区設定は全てこのように定めた。

また調査区名称は、大調査区において北から南へアルファベット大文字で「A」・「B」・「C」……、西から東へ数字で「1」・「2」・「3」……と表現し、小調査区においても北から南へアルファベット小文字で「a」・「b」・「c」……「i」・「j」、西から東へ数字で「1」・「2」・「3」……「9」・「0」と表現し、小調査区の固有名称を「A1a1」・「B2d3」・「C3d0」のように

第2章 位置と環境

1 地理的環境

石岡市は茨城県のほぼ中央にあり、筑波連山の東方、霞ヶ浦の北西端に位置し、東西12.9km、南北10.4km、総面積63.3km²を有し、北は八郷町・美野里町、南は出島村、東は玉里村、西は千代田村に接し、国道6号線が市中央部を通っている。

当市は、市の西部にある竜神山から霞ヶ浦沿岸にかけての石岡台地と、霞ヶ浦の高浜入江の南側にあたる筑波山系の南端が東にのびきった末端台地の三村・関川台地と、この二つの台地にはさまれた恋瀬川の河口である高浜入江の低地を含めた地域からなっている。さらに石岡台地は、柿岡盆地から東南流して霞ヶ浦に注ぐ恋瀬川と右方の園部川とにはさまれた標高25m前後のほぼ平坦な洪積台地であるが、市北西部の柏原池を水源として市内中央部を流れ、高浜地区で霞ヶ浦に流れこむ山王川によって二分されている。この台地は、それら河川の支谷によってさらに樹枝状に刻まれて浅い沖積低地が形成されたり、谷頭には水田が開かれている。

このたび発掘調査を実施した「兵崎遺跡」ほか6つの遺跡が存在する石岡南台地区は、この石岡台地部に属し、東京都心から北東約70km、水戸から南西約27km、石岡市街地中心部から南東約1.5kmの位置にあって、北側は鹿島鉄道銚田線、南側は国鉄常磐線に接している。標高は6m～26mで、緩やかな台地と樹枝状に入りこんだ低地からなっている。地質は、台地部は関東ロームに覆われ、以下粘土層・砂層で構成され、低地部は腐植土層に覆われ、以下沖積粘土層・砂層で構成されている。現況は、畑・田・山林が主で85%を占め、その他は公共用地や原野等に利用されている。特にめだつ植生群はないが、樹種としては、一部の台地傾斜部にアカマツ・シラカシなどがみられる。

「兵崎遺跡」は、山王川に半島状に突き出した舌状台地の縁辺部に位置し、南台地区開発地域内の北西部にあたる。南西側に国鉄常磐線をはきんで茨城の住宅地が、北側に鹿島鉄道銚田線をはきんで兵崎の集落が形成されている。本遺跡は、標高約24mでほぼ平坦をなしているが、南西側は低地に向かって急傾斜を呈す。現況は畑地であるが、周辺は山林となっている。

「対馬塚遺跡」・「大谷津A遺跡」・「大谷津B遺跡」・「大谷津C遺跡」は、大谷津の集落から北東へ約300m、山王川より入りこんだ谷津の奥部、同一台地上の東縁辺部にそれぞれ位置し、標高は約24mでほぼ平坦をなしているが、低地との比高は10～15mあり、台地部から低地に向かって傾斜を呈す。各遺跡内は畑地として利用されており、「大谷津B遺跡」はゴボウ耕作のトレンチャーによる攪乱がみられ、遺構・遺物の保存状態はよくない。

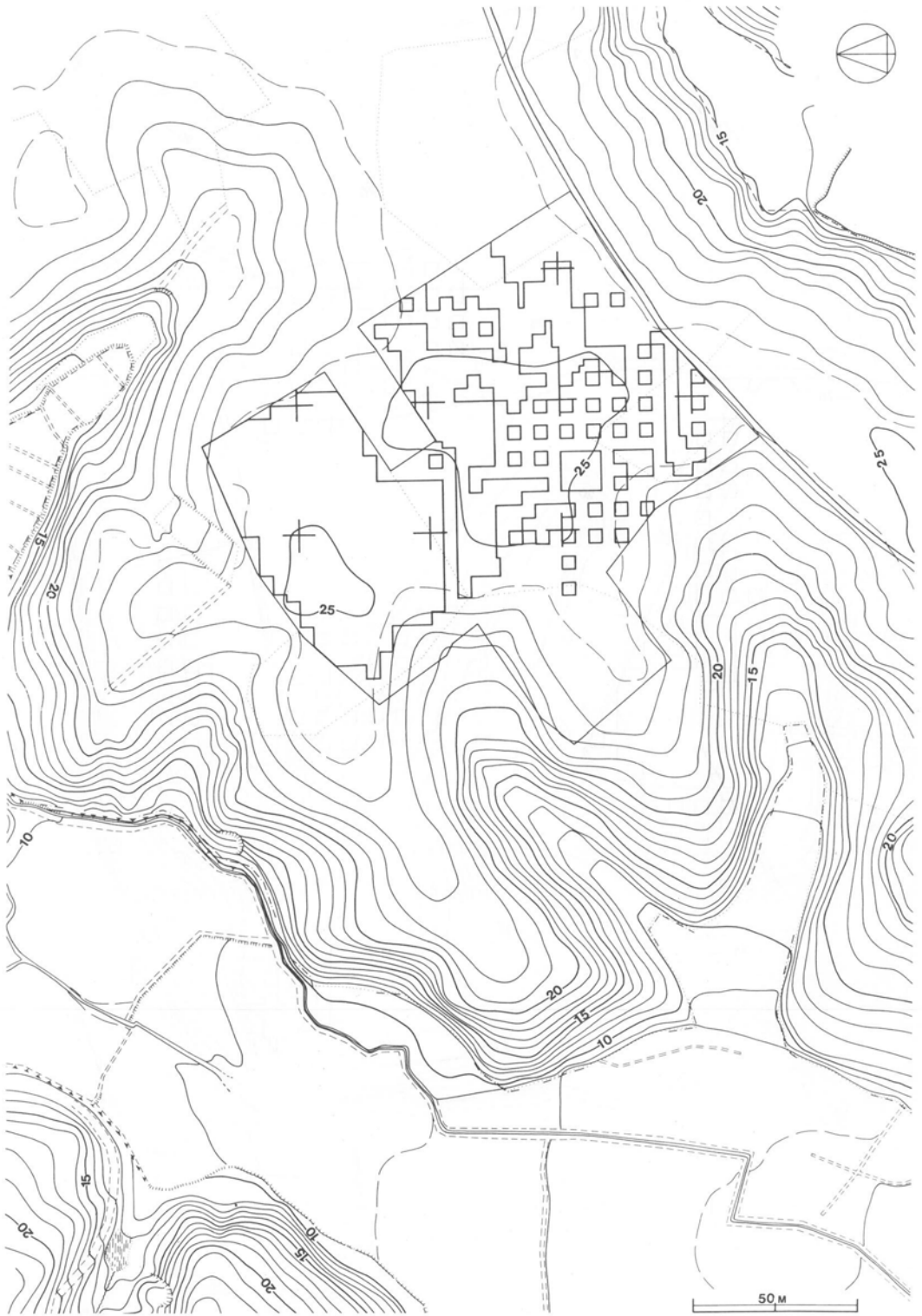
「外山遺跡」は、山王川に突出する半島状の台地突端部に位置し、南台地区開発地域内の東南



第3図 兵崎遺跡全体図



第4図 大谷津A遺跡・対馬塚遺跡・大谷津B遺跡・大谷津C遺跡全体図



第5図 外山遺跡全体図

端にあたる。現況は畑地であるが、周辺は栗畑や荒地・山林となっている。小支谷をはきんで北方に「大谷津A遺跡」・「大谷津C遺跡」が望見でき、南方には「ぜんぶ塚古墳」や「東田中貝塚」が存在する。

2 歴史的環境

霞ヶ浦沿岸は歴史の宝庫といわれ、古くから考古学的調査の対象となり、先史文化の解明に大きな役割を果たしてきた。

石岡市史によると、洪積世の先土器時代の遺物が「宮平遺跡」から発見されたといい、「正月平遺跡」からはナイフ形石器が採集された。

洪積世から沖積世にうつり縄文時代に入ると、支谷の奥部や台地の縁辺部付近に多くの遺跡の存在がみられる。昭和54年度に茨城県教育財団（以下「当財団」という）により発掘調査がなされた「宮部遺跡」からは縄文草創期の表裏縄文土器が出土している。縄文早期の遺跡としては、田戸下層式土器を出土した「染谷遺跡」、茅山式土器を出土した「高根貝塚」や「三村地藏窪貝塚」が存在し、縄文前期の遺跡としては、恋瀬川水系台地上の「狐塚遺跡」からは前期前半の関山式土器や石鎌およびその剥片が多量に出土されている。また、山王川の沖積地がみえる半島状の台地上にある「北ノ谷遺跡」や、園部川にのぞむ台地上に位置する「根当西遺跡」からは諸磯式土器や浮島式土器が出土している。南台地区の各遺跡の縄文遺構・遺物は、この時期に比定できる。縄文中期の遺跡としては、恋瀬川にのぞむ台地上の「餓鬼塚遺跡」、国府跡発掘調査により確認された「元真地遺跡」、竜神山麓の「波付岩遺跡」などが存在し、阿玉台～加曾利E式土器を出土している。また、園部川右岸にのぞむ台地上に位置する「東大橋原遺跡」は、昭和52年から石岡市教育委員会により発掘調査が実施され、フラスコ状土壙群を有する遺跡で、時期的にも阿玉台～加曾利E式土器を出土している。縄文後期は、霞ヶ浦周辺の台地上に貝塚を伴って営まれ、広範囲にわたって土器の散布が認められている。堀之内式土器を出土している「御前山遺跡」、「海老坪遺跡」、「下宮遺跡」などの存在がみられる。しかし、縄文晩期の遺跡・遺物は現在確認されていない。

弥生時代の遺跡・遺物は極めて少ないが、東田中に見える丘陵の縁辺で今は畑地となっている「関戸遺跡」から脚台付甕形の弥生土器が出土している。当財団が発掘調査を実施した「外山遺跡」からは弥生の住居跡が検出されている。現状では、弥生時代の遺跡数は少ないが、分布調査によって増加することは予想される。

古墳時代から奈良時代にかけては、霞ヶ浦北部地域一帯は茨城県下でも遺跡分布が最も密なところとして知られ、特に石岡市は、常陸国府として栄え、「国衙」・「国分寺」・「国分尼寺」

などがおかれたところで、常陸国の政治・文化の中心地であった。また、竜神山麓にある「染谷古墳群」、土師器や須恵器の出土がみられる「狐塚遺跡」・「泉台遺跡」・「下坪遺跡」、恋瀬川に面する台地には、県内最大の大きさを誇る前方後円墳の国指定史跡「舟塚山古墳」、そこから約300mの距離をもって相對している前方後円墳の「愛宕山古墳」、白鳳時代末期に建立されたと推定されている小日代の「茨城廃寺跡」など遺跡が多い。さらに、昭和54年度から当財団が発掘調査を実施した「鹿の子C遺跡」は、8世紀から9世紀の国府関係遺跡とみられる。いずれも、常陸国の中枢地としてこの地が台頭してくる素因を語る遺跡といえる。そして、その背景には、霞ヶ浦沿岸から恋瀬川・園部川の流域を含めた肥沃豊穰な穀倉地帯をもととした生産力の高揚があったことと考えられる。

参考文献

「石岡市史」

「日本地誌5」 関東地方総論 茨城県 栃木県 二宮書店 昭和50年3月

「石岡市東大橋原遺跡」 石岡市教育委員会

「仏教芸術」103号 文化庁文化財保護部記念物課 三輪嘉六

「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 昭和52年3月

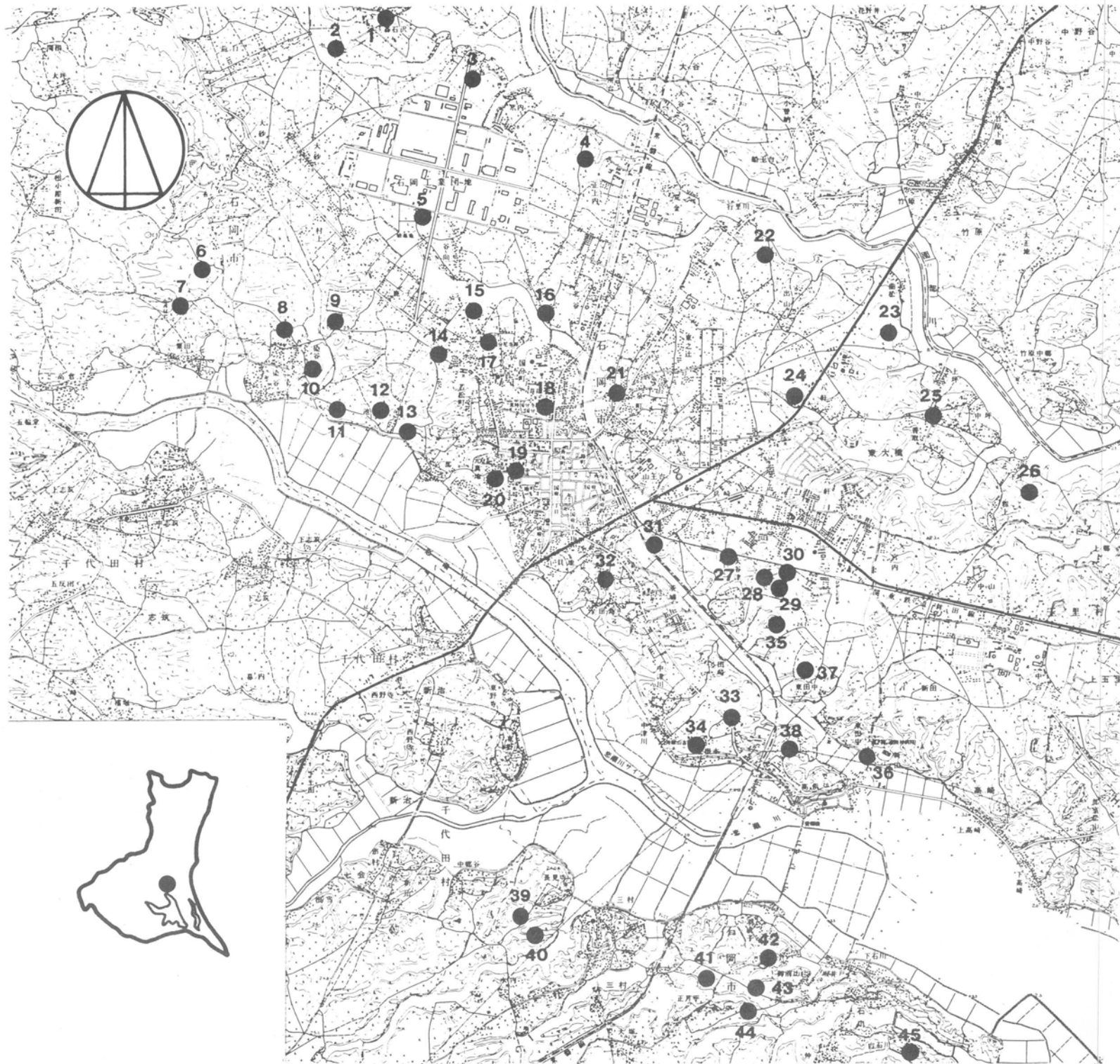
3 層序

石岡市南台地区の各遺跡は比較的平坦な台地上の突端部に位置している。ローム層までは比較的浅く単純な層序をしている。しかし、褐色土は赤みがかっているものとやや黒みがかっているものがあり、遺構を確認するにあたり困難をきたした。また、最近まで畑地として利用されていたため、表土層つまり耕作土の堆積が相対的に多い。基本的層序はⅠ層（耕作土）・Ⅱ層（褐色土）・Ⅲ層（暗褐色土）・Ⅳ層（ローム）の4つの層から成り立っており、縄文時代の遺構はⅢ層目、弥生・古墳・歴史時代の遺構はⅡ層目で確認されている。

本調査の中で検出された住居跡・土壌の覆土は下記のように分類して、図中に数字とアルファベット小文字で表現した。

尚、土層の締り・粘性等については、遺構の説明文の中で述べることにした。

色調	含有物
1 褐色土	┌ a ローム粒子 └ a' 多量のローム粒子
2 暗褐色土	
3 極暗褐色土	┌ b ローム（小）ブロック └ b' 多量のローム（小）ブロック
4 黒褐色土	



番号	遺跡名	種類	時代
1	基石沢遺跡	包蔵地	縄文(中)
2	村上遺跡	製鉄跡	土師・須恵
3	根当西遺跡	集落跡	縄文(前)
4	正上内遺跡	包蔵地	縄文(前)
5	柏原西遺跡	包蔵地	縄文
6	宮平遺跡	集落跡	先土器・縄文(中・後)
7	波付岩遺跡	包蔵地	縄文(中)
8	染谷古墳群	古墳	古墳
9	染谷遺跡	包蔵地	縄文(早)
10	狐塚遺跡	包蔵地	縄文(前)・土師・須恵
11	高根貝塚	貝塚	縄文(早)
12	餓鬼塚遺跡	集落跡	縄文(早)
13	宮部遺跡	集落跡	縄文(草創・早・前)
14	鹿の子A遺跡	集落跡	歴史
15	鹿の子C遺跡	集落・工房跡	歴史
16	北ノ谷遺跡	包蔵地	縄文(前)・土師・須恵
17	常陸国分尼寺跡	寺院跡	歴史
18	常陸国分僧寺跡	寺院跡	歴史
19	元真地遺跡	集落跡	縄文(中)
20	国府跡	国術跡	歴史
21	泉台遺跡	包蔵地	土師・須恵
22	行里川遺跡	包蔵地	縄文(前)
23	根小屋遺跡	包蔵地	縄文(中)
24	上人塚遺跡	包蔵地	縄文(前)
25	東大橋原遺跡	集落跡	縄文(中)
26	下坪遺跡	包蔵地	土師・須恵
27	新池台遺跡	集落跡	縄文(前)
28	大谷津A遺跡	集落跡	縄文(前)
29	大谷津B遺跡	集落跡	縄文(前)
30	対馬塚遺跡	集落跡	縄文(前)
31	兵崎遺跡	集落跡	縄文(前)・歴史
32	茨城廃寺跡	寺院跡	歴史
33	舟塚山古墳	古墳	古墳
34	愛宕山古墳	古墳	古墳
35	外山遺跡	集落跡	縄文(前)・弥生・古墳
36	ぜんぶ塚古墳	古墳	古墳
37	東田中貝塚	貝塚	縄文
38	関戸遺跡	包蔵地	縄文・弥生
39	地藏平遺跡	包蔵地	縄文
40	三村地藏窪貝塚	貝塚	縄文(早)
41	正月平遺跡	集落跡	先土器・縄文(中・後)
42	下宮遺跡	包蔵地	縄文(後)
43	御前山遺跡	包蔵地	縄文(中・後)
44	海老坪遺跡	包蔵地	縄文(中・後)
45	富士台遺跡	包蔵地	縄文・弥生・土師

第6図 石岡市内遺跡位置図および遺跡名一覧表

5	明褐色土	c	ローム粒子・ローム（小）ブロック
6	黒色土	d	ローム（粒子・ブロック）・焼土粒子・炭化粒子
7	暗赤褐色土	e	ローム（粒子・ブロック）・焼土粒子（焼土）
8	赤褐色土	f	ローム（粒子・ブロック）・炭化粒子（炭化材）
9	にぶい赤褐色土	g	ローム（粒子・ブロック）・焼土・炭化材
10	極暗赤褐色土	h	ローム
11	明赤褐色土	i	焼土
12	赤色土	j	その他
13	攪乱		

第3章 遺構と遺物

遺構について

1 竪穴住居跡


- 調査区の表示は、その遺構の確認された最も広い部分を占める調査区名を1つだけ表示した。
- 方位・規模の表示は、主軸方向の明確なものは「主軸方向」、楕円形状のものは「長径方向」と表現した。規模は掘りこみ面をもって計測した数値を記述した。
- 壁高およびピット等の深さは、それぞれの現存計測値である。
- ブランの不明瞭なものは、その推定範囲を-----で表示した。
- 遺構実測図のレベルの掲載については、同一遺構は同レベルとし、一つの記載をもって表示した。

2 土壙

- 大谷津C遺跡以外の各遺跡の検出土壙については、すべて一覧表にして表現した。
- 形状・規模は、開口部（上部掘りこみ面）の状態とその計測値である。
- 壁面については、70～90°の角度で外傾して立ちあがる場合は「垂直」と表現した。
- 一覧表中の関連図版は、図一遺構実測図を指している。

遺物について

1 土器・土製品

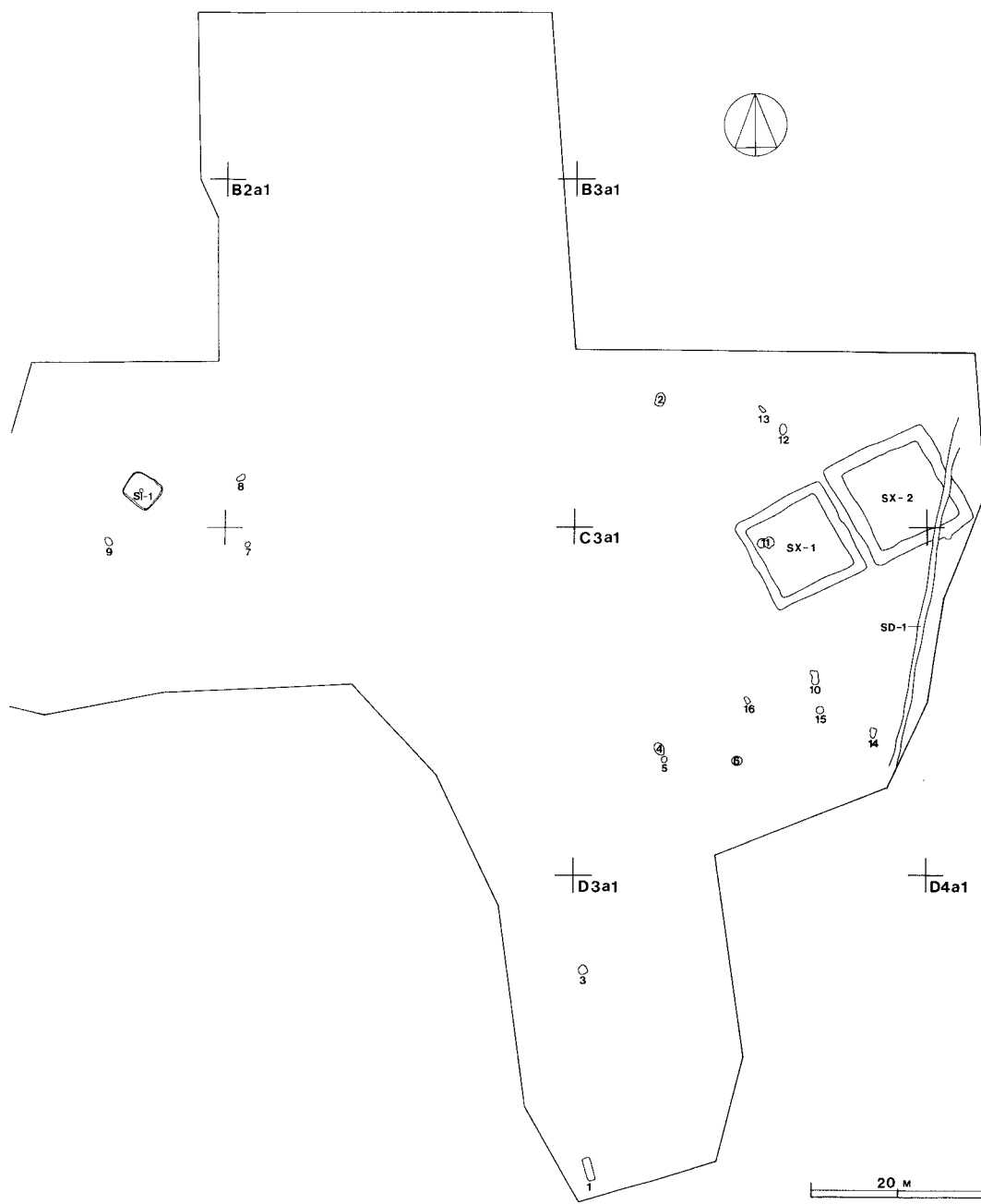
- 実測したものについては、遺構別に一覧表にまとめた。拓影図については、一括的に簡潔な表現で記述した。
- 遺物実測一覧表中の表現は、下記の通りである。
 - ・ 法量 A - 口径 B - 現高 C - 底径を指し、単位はcmである。尚、（ ）は推計値である。
 - ・ 特徴 口 - 口縁部 頸 - 頸部 胴 - 胴部 底 - 底部を指している。
 - ・ 備考 完存率を表した。
- 遺物拓影図断面のは、繊維を含んでいることを示している。

2 石器類

- 第4章「まとめ」のところで述べてある。

3 遺物写真については縮尺 $\frac{1}{2}$ を原則とし、それ以外の縮尺はそれぞれ表示した。（例 $S = \frac{1}{4}$ ）

第1節 兵 崎 遺 跡



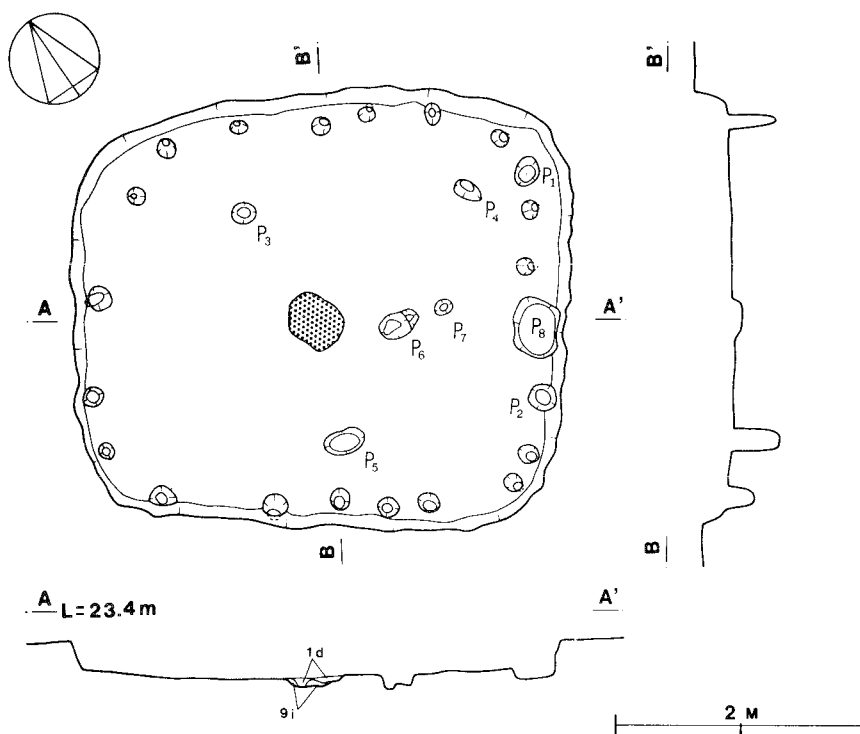
第7図 兵崎遺跡遺構配置図

1 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第8図)

本住居跡はB118調査区を中心に確認されたもので、遺跡西端に位置し、南西側約5mのところに13号土壙が存在する。

主軸方向は $N-51^{\circ}W$ を指し、長軸3.95m・短軸3.45mの隅丸方形を呈している。壁高は北側で20~27cm、南側で13~16cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。南壁が低いのは、地形が南側に向かって傾斜しているためである。床面はロームで平坦であるが、竪穴周辺がやや低くなっている。これは踏み固められたものと考えられる。竪穴はほぼ中央に検出され、長径48cm・短径38cmの不整楕円形を呈し、床面を7cm程掘り窪めた地床炉で、焼土ブロックを含み床は硬く焼けている。ピットは壁下に位置する群と壁から離れて位置する群とに分けられる。前者は22か所検出され、ピット間の距離は一定していないが、一周している。ほとんどは径13~20cm・深さ11~22cmを測るが、 P_1 は径25cm・深さ46・5cm、 P_2 は径22cm・深さ53cmと大きく深い。15か所の掘り方が内側に傾いており、柱が内側に向かって傾斜して立てられていたものと考えられる。後者は5か所検出され、 $P_3 \sim P_5$ は主柱穴と考えられるが、 $P_6 \cdot P_7$ は判然としない。南東壁



第8図 第1号住居跡実測図

下中央やや南寄りに位置するP8は貯蔵穴で、長径45cm・短径35cm・深さ11cmの楕円形を呈す。住居跡内の覆土は大きく3層に分かれ、上層に暗褐色土、中・下層に褐色土が自然堆積している。

遺物は縄文早・前期の土器片が覆土中から、弥生土器片が床面近くから出土している。いずれも量的には極少量である。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。



第9図 第1号住居跡出土土器拓影図

出土遺物 (第9図)

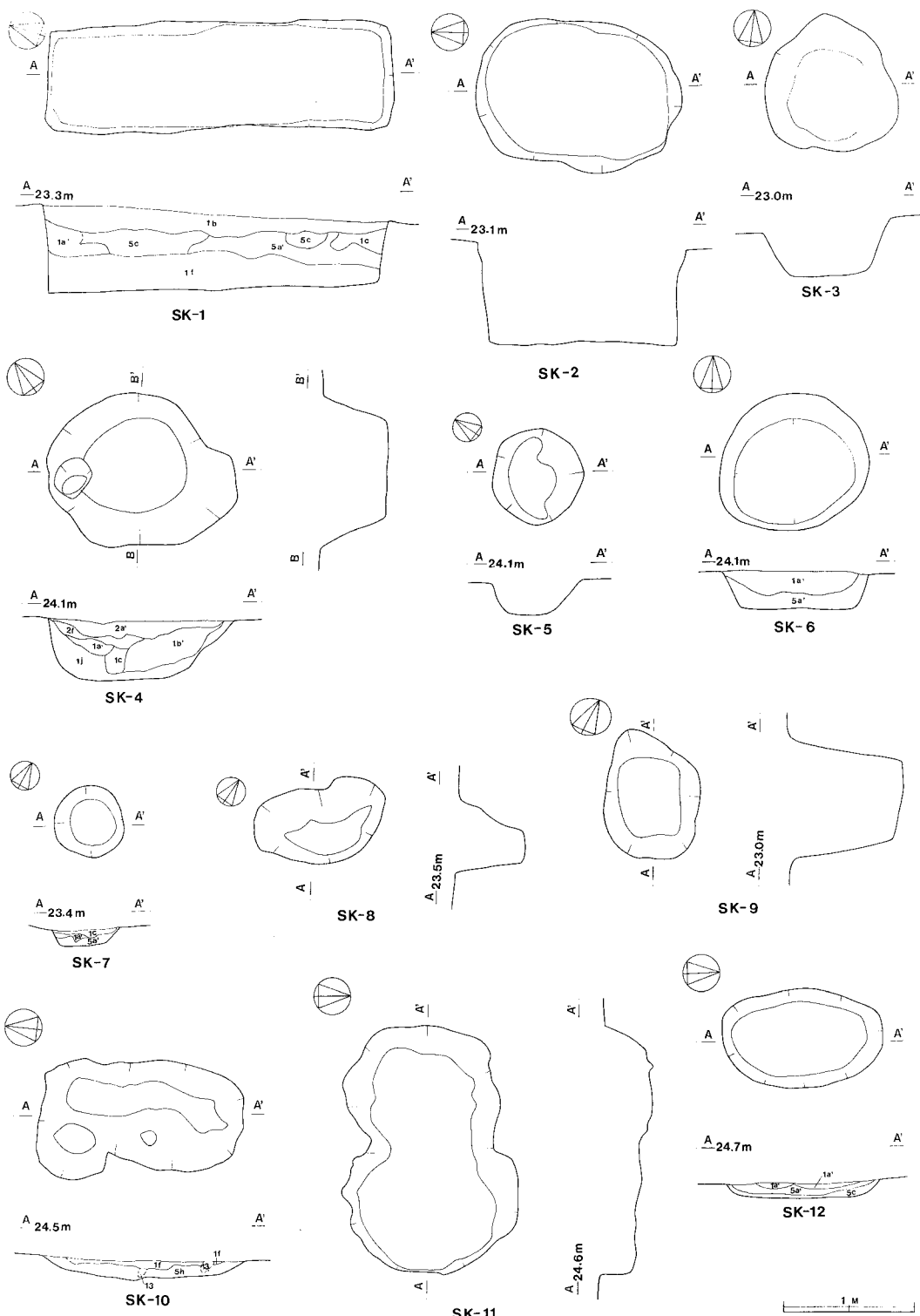
1～4は弥生土器の長岡式に比定されるものと思われる。1は壺形土器の胴部で、器厚は5mmで二次焼成をうけている。頸部は4本の櫛歯状具による鋸歯状文、胴部には付加条縄文が施文されている。2～4は胴部の小破片で、付加条縄文が施文されている。5～7は縄文早期後葉の広義の茅山式に比定される土器で、胎土中に繊維を含み、厚手である。表裏器面が若干剥落しているが、5・7は表裏とも条痕文が施文され、6は内側に繊維痕を有す。8はまばらな捺糸文を、9は波状文の上に半截竹管具による刺突文を縦位に配している。

2 土壌

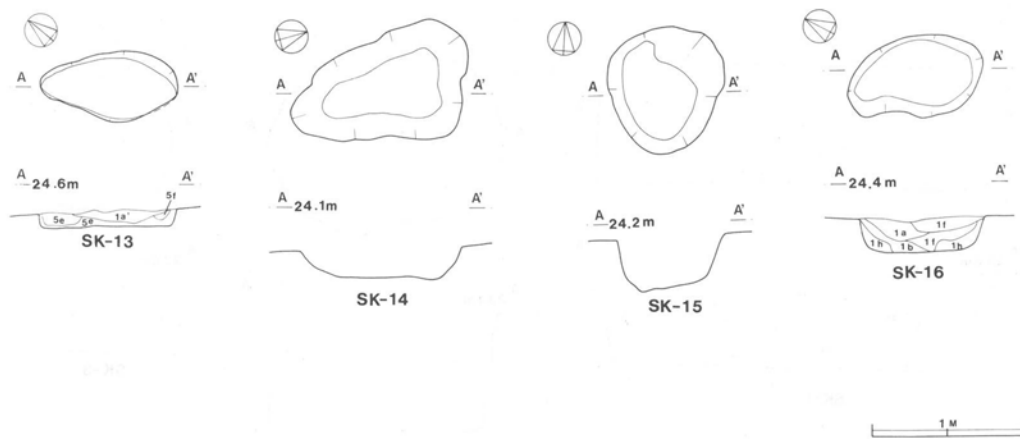
本遺跡で調査した土壌は115基にのぼったが、ほとんどが現代に掘られたものであった。そのため、それらを除いた16基の土壌をここでは取り扱うことにし、順次土壌番号を整理し、一覧表と実測図作成を行った。遺物の出土もなく、時期不明なものが多い。

土 壌 一 覧 表

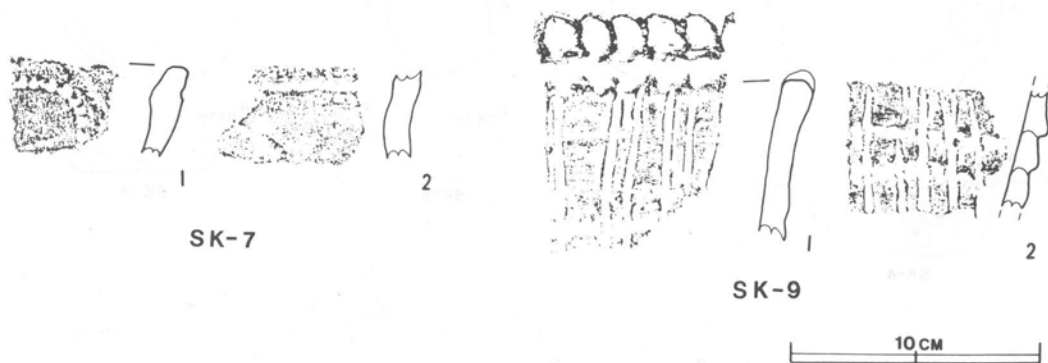
土壌番号	調査区	規模(m)	形状	長径方向	深さ(cm)	ピット数	底面	壁面	出土遺物(時期)	関連図版
1	D3i1	2.63×0.82	長方形	N-15°-W	58	0	水平平坦	垂直		第10図
2	B3g3	1.54×1.15	楕円形	N-3°-W	79	0	水平平坦	垂直		第10図
3	D3c1	1.06×0.93	不整円形	N-22°-W	38	0	水平平坦	ゆるやか		第10図
4	C3g3	1.48×1.16	不整楕円形	N-49°-E	50	1	水平平坦	ゆるやか		第10図
5	C3g3	0.72×0.67	円形	N-52°-E	25	0	皿状	ゆるやか		第10図
6	C3g5	1.18×1.03	円形	N-57°-E	32	0	水平平坦	ゆるやか		第10図
7	C2a1	0.54×0.53	円形	N-30°-W	20	0	皿状	ゆるやか	縄文土器片2点 (阿玉台)	第10・ 12図
8	B2i1	1.03×0.59	不整楕円形	N-44°-E	51	0	水平平坦	垂直		第10図
9	C1a7	1.03×0.78	不整楕円形	N-49°-W	89	0	坂状平坦	垂直	縄文土器片2点	第10・ 12図
10	C3e7	1.54×0.78	不整楕円形	N-8°-W	17	0	起伏あり	ゆるやか		第10図
11	C3a6	1.88×0.95	不整楕円形	N-90°-W	37	0	起伏あり	ゆるやか		第10図
12	B3h6	1.21×0.76	楕円形	N-3°-E	12	0	水平平坦	ゆるやか		第10図
13	B3g6	0.91×0.45	長楕円形	N-36°-W	13	0	水平平坦	垂直		第11図
14	C3e9	1.25×0.68	不整楕円形	N-6°-W	24	0	皿状	ゆるやか		第11図
15	C3f7 f8	0.85×0.73	不整円形	N-0°	35	0	起伏あり	垂直		第11図
16	C3e5 f5	0.93×0.55	不整楕円形	N-44°-W	27	0	水平平坦	垂直		第11図



第10图 土壤实测图



第11図 土 壙 実 測 図



第12図 第7・9号土壙出土土器拓影図

3 方形周溝状遺構

第1号方形周溝状遺構 (第14図)

本遺構は大調査区B3・C3区にかけて確認されたもので、遺跡の東側に位置し、北東側に2号方形周溝状遺構が隣接して存在する。

南北方位はN-28°Wを指し、平面形状は、長軸11.5m・短軸11.2mと南北・東西ともほぼ等しい正方形を呈している。外辺・内辺とも直線的で、各コーナーは隅丸形を呈す。北西コーナーの内周が攪乱のため段状になっている。掘りこみ方は「U」形で、溝は完全に一周する。周溝の上幅は90~140cm、底面の幅は40~55cm、深さは55~70cmを測る。底面は中央部がやや深くなっており、方体部側のたちあがり外周部側より急である。溝内の覆土は、多量のローム粒子を含む褐色土と上層の一部に暗褐色土が自然堆積している。

方体部の北西コーナー付近に1基の土壌がみられるが遺物の出土はなく、土壌の性格は不明であり主体部となるかどうかは判断としない。その他に7か所の土壌状落ちこみがみられるが、調査の結果、いずれも現代に掘られたものであった。

遺物は、溝内・方体部からわずかに縄文土器の小破片が数点出土しただけである。本遺構に係る遺物の出土がみられないので時期や性格は不明であるが、形態などから2号方形周溝状遺構と同一時期のものであろう。

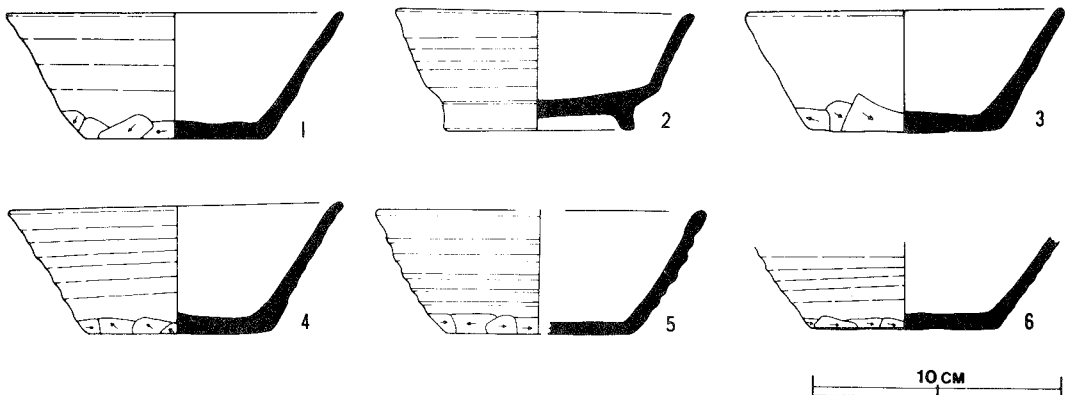
第2号方形周溝状遺構（第15図）

本遺構は大調査区B3・B4・C3・C4区にかけて確認されたもので、遺跡の東端に位置し、南東側が1号溝と重複し、西側に1号方形周溝状遺構が隣接して存在する。重複遺構の新旧関係は、溝が新しい。

南北方位はN-25°Wを指し、平面形状は、長軸12.6m・短軸12.2mと南北・東西ともほぼ等しい正方形を呈している。南北コーナー付近の外周がやや曲線的だが、ほとんど外辺・内辺とも直線的で、各コーナーは隅丸形を呈す。しかし、各辺とも攪乱をうけている。掘りこみ方は「U」形で、溝は完全に一周する。周溝の上幅は120~160cm・底面の幅は60~100cm・深さは40~60cmを測る。底面はほぼ平坦で、方体部側の立ちあがり外周部側より急である。溝内南西コーナー付近に小ヒットが2か所検出されている。また、東溝の中央と南溝の東側が南北に1号溝によって切りこまれている。溝内の覆土は、ローム粒子を含む褐色土と土層の一部に暗褐色土が自然堆積している。

方体部、溝内に土壌状落ちこみが10か所みられたが、調査の結果、いずれも現代に掘られたものであり、主体部は確認できなかった。

遺物は、溝内南西コーナー付近から底面より浮いた状態で須恵器の坏が出土している。墳丘土の崩れとともに遺物も転落したものであろう。



第13図 第2号方形周溝状遺構出土遺物実測図

第2号方形周溝状遺構出土遺物解説表

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SX-2	1	坏(須恵)	A 13.2	口 - 内彎ぎみに開き、先端はつまみ上げられて薄くなる。内面の体部と底部への移行部は稜をつくっている。底部は全体的に上げ底で底部の厚さは体部に比して厚くなっている。	体部下端 - 幅の狭いヘラケズリ 底 - ヘラ切り痕	良好・砂粒・灰 石英 長石	100% 第13図-1
			B 5.0				
			C 7.1				
	2	高台付坏(須恵)	A 11.6	口 - わずかに内彎ぎみに開き、胴下半で大きく屈曲して立ち上がる。	水挽痕	良好・砂礫・黄灰	95% 第13図-2
			B 4.7				
			C 7.6				
3	坏(須恵)	A (12.4)	口 - 内彎ぎみに開き、先端はつまみ上げられて薄くなる。内面の体部と底部への移行部は稜をつくっている。底部の厚さは体部に比して厚くなっている。	体部下端 > ヘラケズリ 底	良好・長石・灰	60% 第13図-3	
		B 4.8					
		C (7.2)					
4	坏(須恵)	A 13.3	口 - 内彎ぎみに開き、先端はつまみ上げられて薄くなる。内面の体部と底部への移行部は稜をつくっている。底部の厚さは体部に比して厚くなっている。	体部下端 > ヘラケズリ 底	良好・石英・緑灰 長石	100% 第13図-4	
		B 5.1					
		C 7.4					
5	坏(須恵)	A (12.6)	口 - 内彎ぎみに開き、先端はつまみ上げられて薄くなる。内面の体部と底部への移行部は稜をつくっている。底部の厚さは体部に比して厚くなっている。	水挽痕 体部下端 > ヘラケズリ 底	良好・砂礫・黄灰 長石	45% 第13図-5	
		B 4.95					
		C (7.6)					
6	坏(須恵)	B 3.4	胴上半が膨らみ、上半がわずかに外反する。	底 - ヘラケズリ	良好・砂粒・灰 オリブ	40% 第13図-6	
		C 7.5					

4 溝

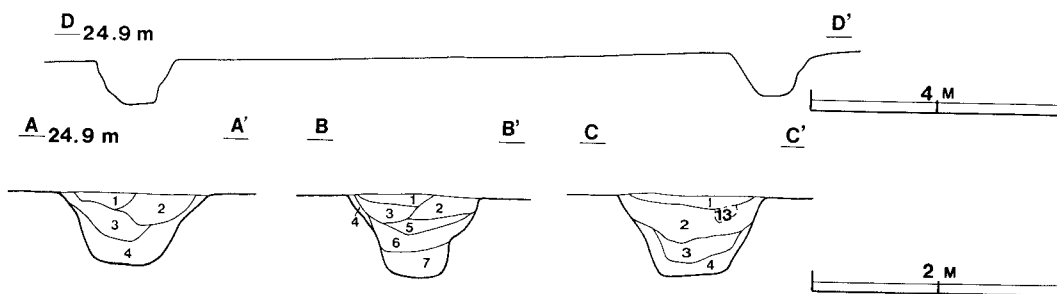
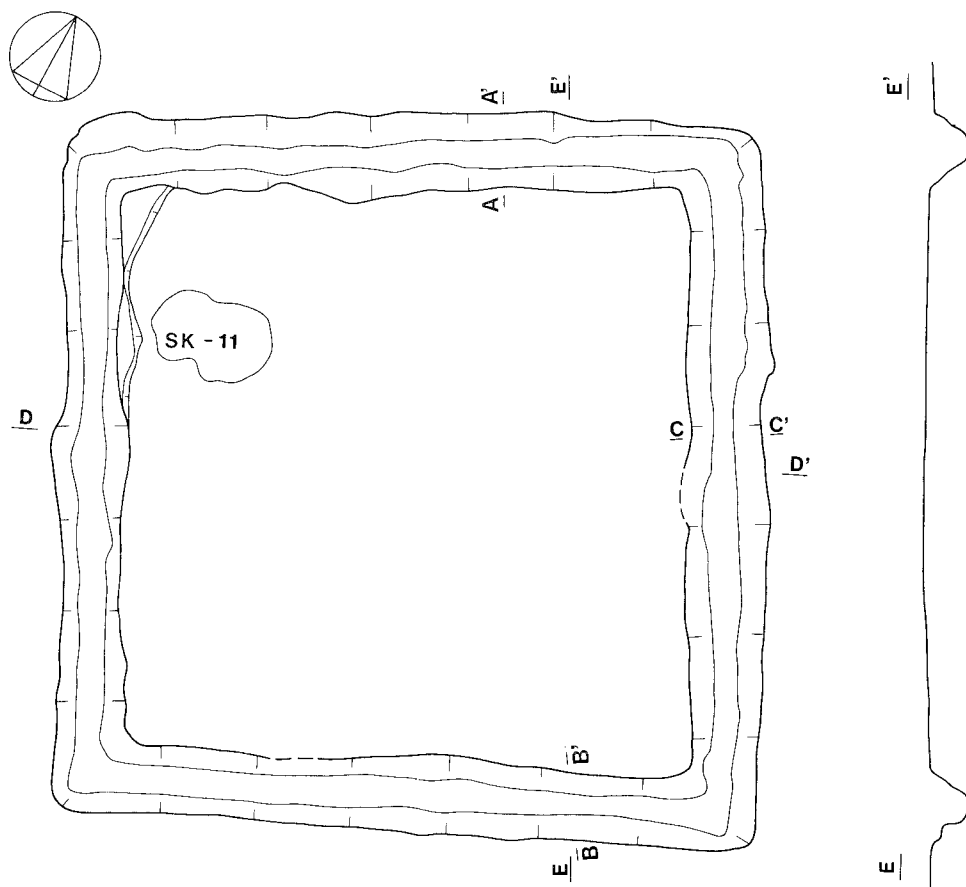
第1号溝(第16図) 本溝は大調査区B4・C3・C4区で確認され、遺跡東端を北から南南西に伸び調査区域外へも伸びている。第1層の表土層を除去すると不明確であるが褐色土の落ちこみが確認され、第2層が掘りこみ面となっている。

B4区のエリア内に確認された溝の始まり部の主軸方向はN-9°Eを指し、南方へ3m程のところからN-20°Eにかわり、5.5mぐらいのところからほぼ南方へほとんど直線的に伸びている。C3・C4区で2号方形周溝状遺構を切りこみ、さらにC3go調査区付近から南側の谷津に向かって急に落ちこんでいる。

溝の上幅は30~80cm程で、掘りこみ面から底面までの深さは25~40cmを測る。壁はいずれも70~80°の傾きで立ちあがり、底面はローム質土でほとんど皿状を呈し、それほど硬くは締っていない。南側で傾斜部を掘りこんでいるため底面のレベルが異なり、北端と南端の高低差は1.2mあり、北から南へ向かって低く傾斜をなしている。

溝内の覆土はいずれも自然堆積の状態を示し、褐色土が堆積している。ローム粒子・ローム小ブロックと極少量の炭化粒子・炭化物等を含育し、上層部に比較的締っているところもみられるが全体的には締りは弱い。

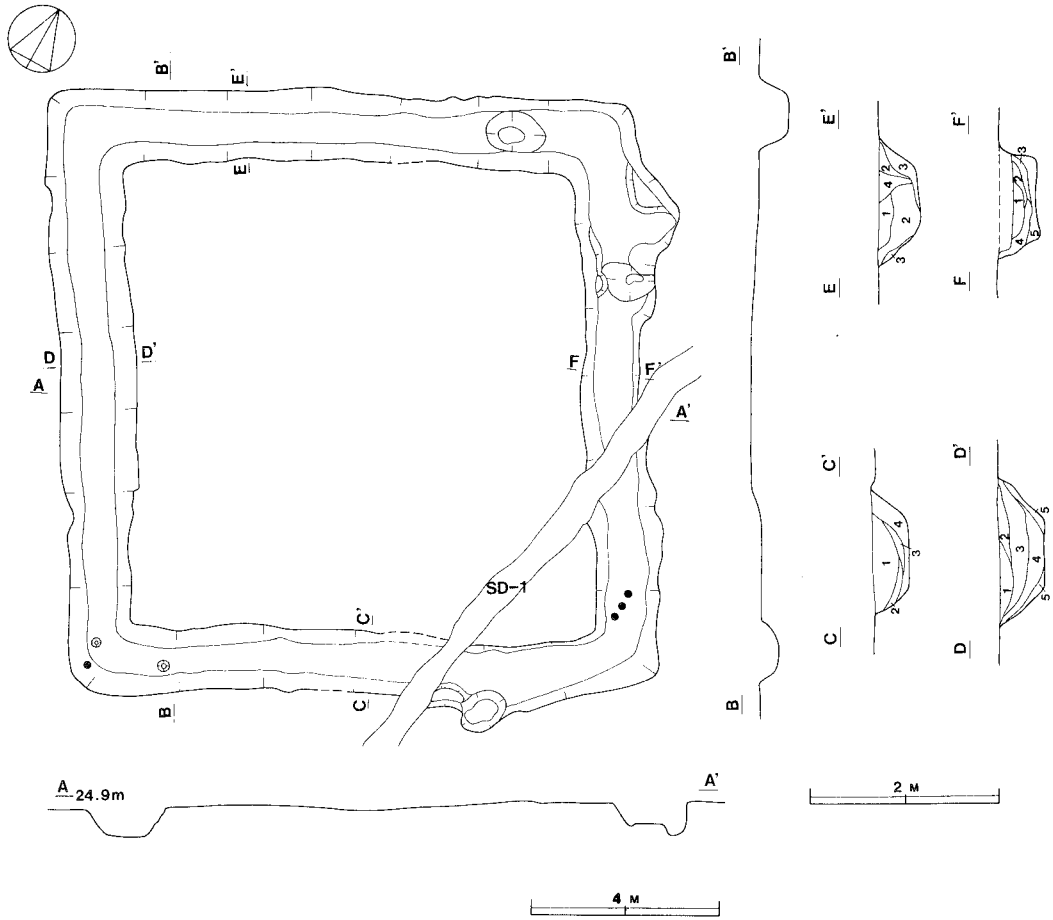
溝内からの遺物の出土はなく遺構の性格については不明である。時期的には2号方形周溝状遺構との重複関係から、国分期以後に掘られたものであろうと考えられる。



第1号方形周溝状遺構土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|--------|---------------------------------|
| A-A' | | 5. 褐色 | ローム粒子・イエローパミスを含む。 |
| 1. 褐色 | ローム粒子・黒色土粒子・イエローパミスを含む。 | 6. ♪ | ローム粒子(多量)・黒色土ブロックを含む。 |
| 2. 暗褐色 | ローム粒子・黒色土粒子(多量)・イエローパミスを含む。 | 7. ♪ | ローム粒子(多量)・ロームブロックを含む。 |
| 3. 褐色 | ローム粒子・黒色土粒子・イエローパミス・黒色土ブロックを含む。 | C-C' | |
| 4. 褐色 | ローム粒子・黒色土ブロックを含む。 | 1. 暗褐色 | ローム粒子・黒色土粒子・黒色土ブロック・イエローパミスを含む。 |
| B-B' | | 2. 褐色 | ローム粒子・黒色土粒子・黒色土ブロック・イエローパミスを含む。 |
| 1. 暗褐色 | ローム粒子・黒色土粒子(多量)・イエローパミスを含む。 | 3. ♪ | ローム粒子(多量)・黒色土粒子を含む。 |
| 2. 褐色 | ローム粒子(多量)・イエローパミスを含む。 | 4. ♪ | ローム粒子・黒色土粒子を含む。 |
| 3. ♪ | ローム粒子・黒色土粒子(多量)・イエローパミスを含む。 | | |
| 4. ♪ | ローム | | |

第14図 第1号方形周溝状遺構実測図



第2号方形周溝状遺構土層解説

C-C'

1. 褐色 ローム粒子・黒色土粒子・イエローハミス・黒色土ブロックを含む。
2. ♪ ローム粒子(多量)・黒色土粒子・黒色土ブロックを含む。
3. ♪ ローム粒子・黒色土粒子・黒色土ブロックを含む。
4. ♪ ローム粒子(多量)・ローム小ブロックを含む。

D-D'

1. 暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子(多量)・イエローハミス・黒色土ブロックを含む。
2. 褐色 ローム粒子(多量)・黒色土粒子・イエローハミスを含む。
3. ♪ ローム粒子・黒色土粒子・イエローハミス・黒色土ブロックを含む。
4. ♪ ローム粒子(多量)・黒色土粒子・黒色土ブロックを含む。
5. ♪ ローム粒子(多量)・黒色土粒子・黒色土ブロックを含む。

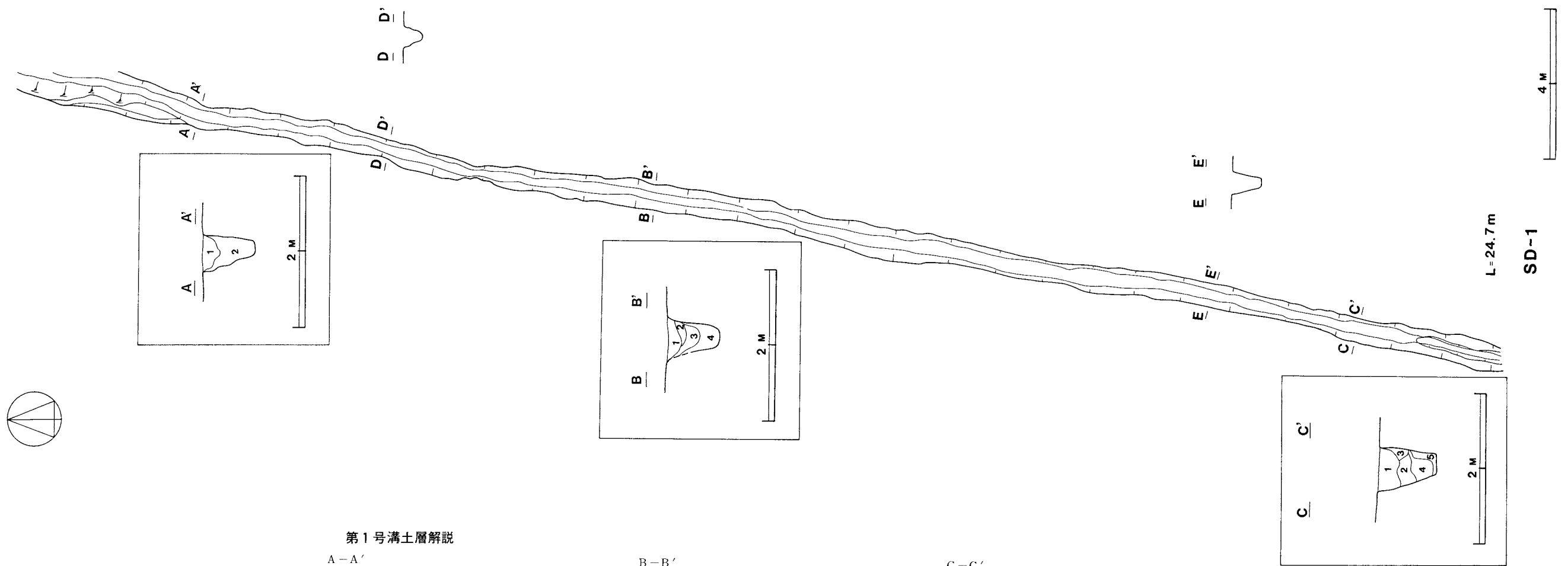
E-E'

1. 暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子・イエローハミス・黒色土ブロックを含む。
2. 褐々色 ローム粒子(多量)・黒色土粒子・黒色土ブロックを含む。
3. ♪ ローム粒子・黒色土粒子を含む。
4. 攪乱

F-F'

1. 褐色 ローム粒子・黒色土粒子・黒色土ブロックを含む。
2. ♪ ローム粒子・黒色土粒子・イエローハミス・黒色土ブロックを含む。
3. ♪ ローム粒子・黒色土粒子・イエローハミス・黒色土ブロックを含む。
4. ♪ ローム粒子・黒色土粒子(多量)を含む。
5. ♪ ローム粒子(多量)・黒色土粒子・黒色土大ブロックを含む。

第15図 第2号方形周溝状遺構実測図



第1号溝土層解説

A-A'

- 1. 褐色 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。縮りが有る。
- 2. ♪ ローム粒子・ローム小ブロック(多量)を含む。縮りは弱い。

B-B'

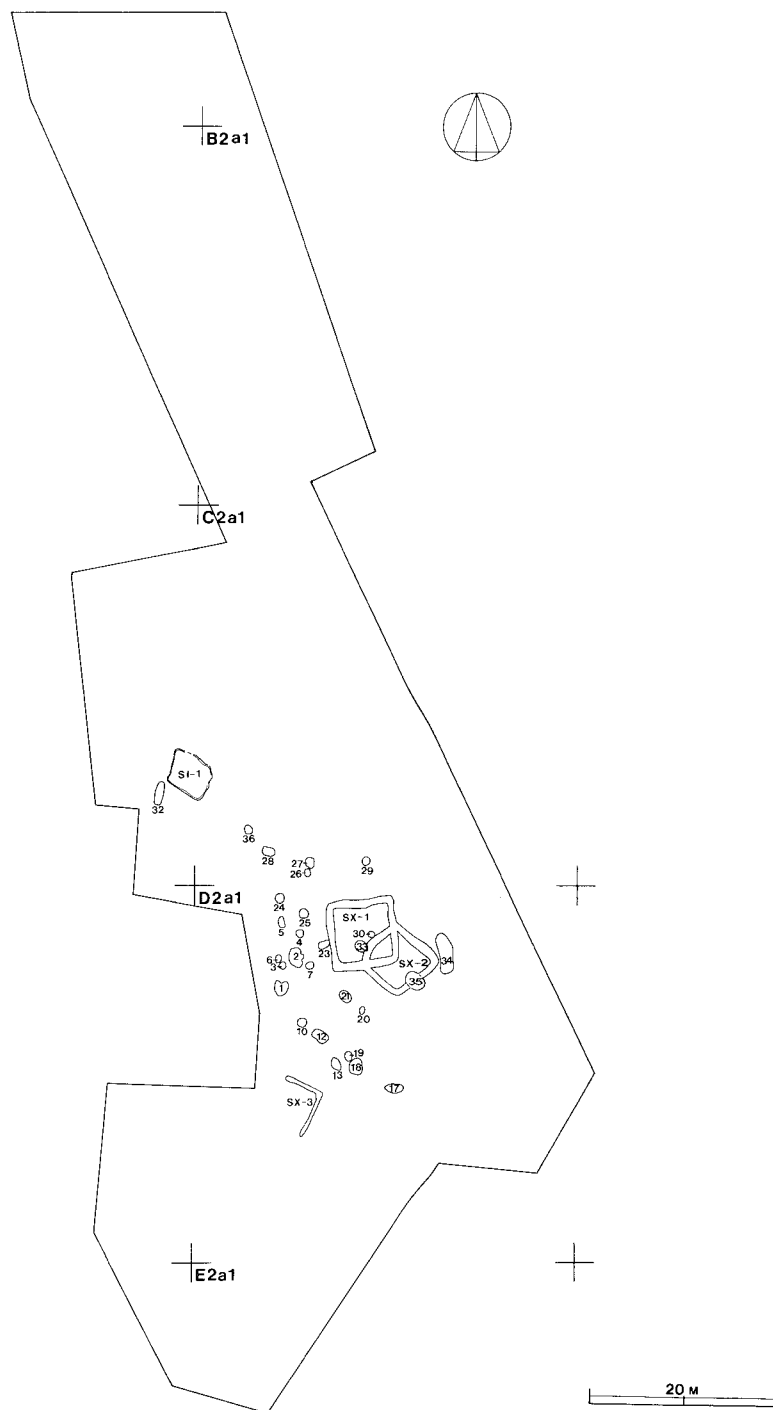
- 1. 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物を含む。
- 2. ♪ ローム粒子・炭火粒子(多量)を含む。
- 3. ♪ ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子を含む。
- 4. ♪ ローム粒子・ローム小ブロック(多量)を含む。

C-C'

- 1. 褐色 ローム粒子を含む。
- 2. ♪ ローム粒子・炭化物を含む。
- 3. ♪ ローム
- 4. ♪ ローム粒子(多量)・ローム小ブロックを含む。
- 5. ソフトローム

第16図 第1号溝実測図

第2節 大谷津 A 遺跡



第17図 大谷津 A 遺跡遺構配置図

1 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第18図)

本住居跡はC1f1調査区を中心に確認されたもので、遺構群の北西端に位置し、南西側に32号土壌が隣接して存在する。

主軸方向はN-53°Wを指し、長軸4.7m・短軸3.7mの不整四辺形を呈している。東壁の立ちあがりにははっきりしているが、北壁の一部は攪乱をうけて削り取られている。壁面はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は全体的に柔らかいが、か跡周辺は硬く締っており、ほぼ平坦である。か跡は中央よりやや東側に検出され、長径115cm・短径65cmの楕円形状を呈し、床面を20cm程掘り窪めた地床かで、焼土を含みか床は硬く焼けている。か跡内に小ピット4か所有す。床面上に24か所のピットが検出されたが、支柱穴は不明である。ピットの最深部は先細りが多い。住居跡内の覆土は、褐色土が自然堆積している。

遺物は多量の縄文前期の土器片が出土している。主に、中央部から北側にかけての出土が多くみられ、南側からの出土はほとんどない。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の浮島期に比定される遺構と思われる。

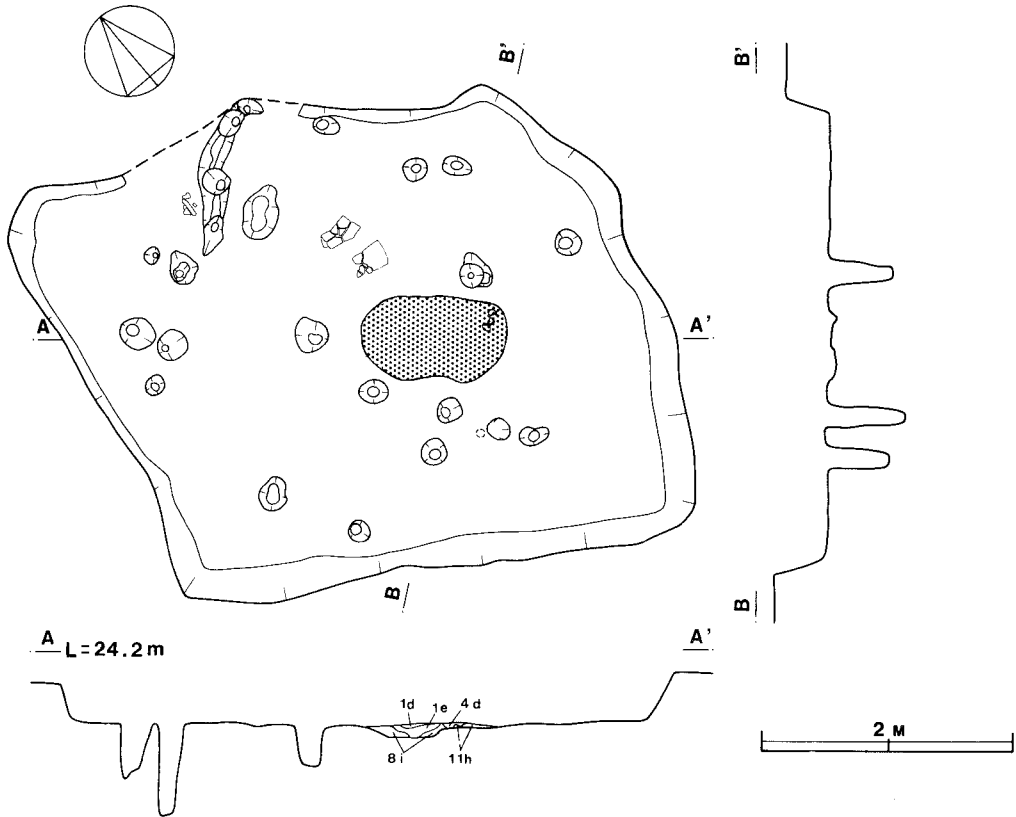
出土遺物 (第19～24図)

出土遺物解説表 (第19図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-1	1	深鉢形土器 (縄文)	A (41.1) B 17.3	波状口縁を呈し、口縁に沿って連続爪形文、頸部は半截竹管具による細い平行沈線文を多条に施文、頸部と胸部を区画するために連続爪形文を施している。	内面一ナデ	普通・砂粒・橙スコリア 砂礫	口縁部25% 第19図-1
	2	深鉢形土器 (縄文)	A (42.2) B 19.4	口唇部若干内彎。口一連続爪形文。頸一半截竹管具による細い平行沈線文を斜格子状。胴一貝殻文。頸部と胸部を区画するために連続爪形文。	内面一ナデ	普通・砂粒・橙	口縁部30% 第19図-2
	3	深鉢形土器 (縄文)	A (27.8) B 11.4	輪積痕が認められ、その上に棒状具による圧痕。胴一貝殻文。		普通・砂粒・内一に黄橙外一黄橙	口縁部20% 第19図-3
	4	深鉢形土器 (縄文)	B 12.7 C 9.5	胴下半一無文。	内面一ヘラケズリ 外面一ヘラミガキ 底部と胸部の境目は整形なし	普通・砂粒・内一スコリア外一灰褐外一橙	底部100% 内面に煤付着 第19図-4

第20図1・2は輪積痕を残し、その下端にヘラ状具による刺突文を加えている。3～6は平行沈線文を横引き・鋸歯状・弧状に施文している。7～18と第21図1～15は変形爪形文を有しており、第20図7～9・12・13・17・18と第21図1～4・9は平行沈線文、第21図13～15は刺突文とそれぞれ組合せて文様を構成している。16～22と第22図1～11は連続爪形文を有しており、平行沈線文・貝殻文・刺突文等と組合せて文様を構成している。第22図12・13は3本の沈線文の上に

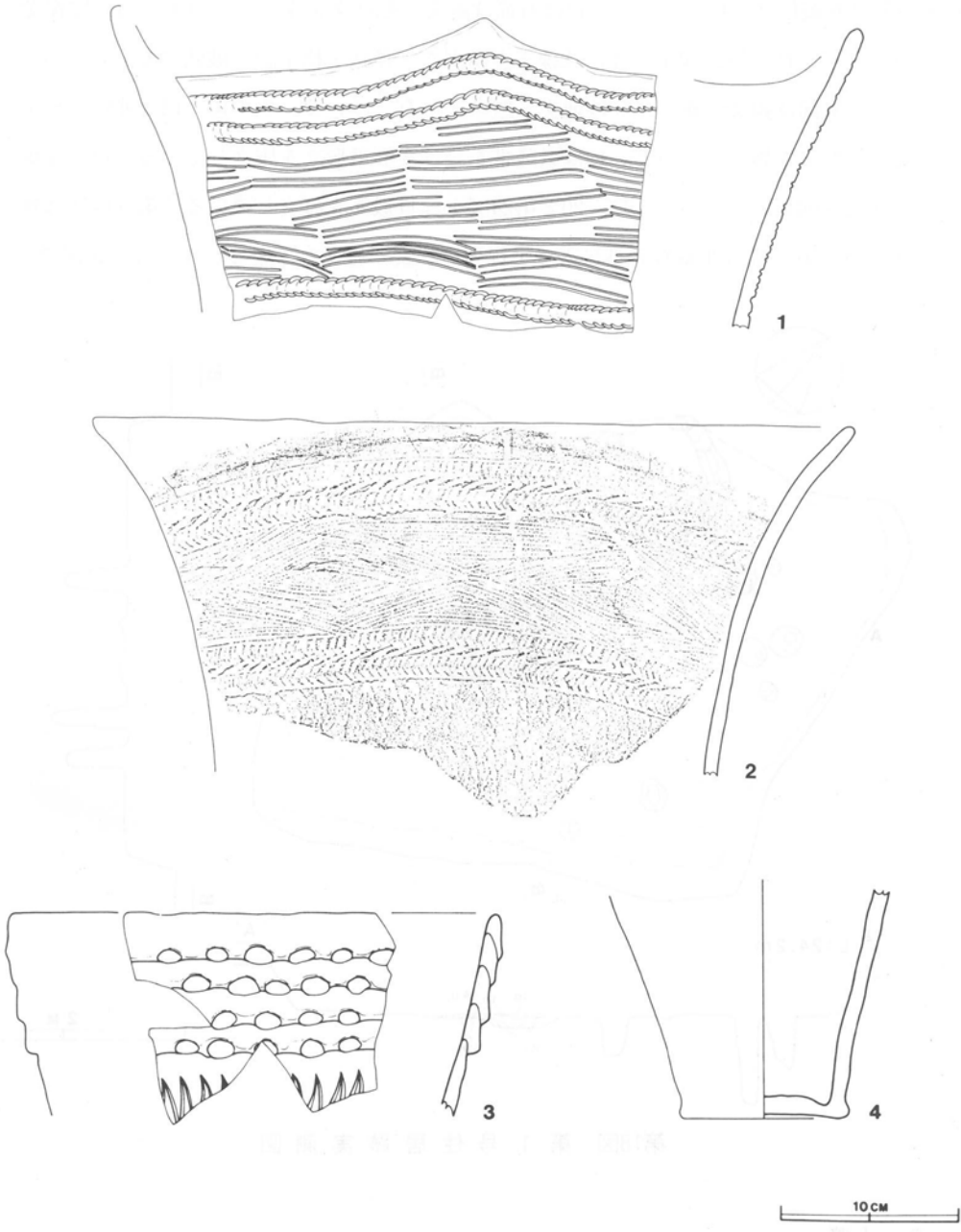
円形竹管文を縦位に押捺している。14は有節沈線文と弧状文を施し、その上に円形竹管文を押捺している。15～19と第23図1～3は沈線文を横引き・弧状・格子状・波状に施文している。第23図4～6は有節沈線文を施し、5は地文に撚糸文を有している。7・10～12は連続爪形文、8・9は変形爪形文を施文している。13は微隆帯を設け変形爪形文を施文している。14は浮線文の上にヘラ状具を回転させている。15～20と第24図1は貝殻文を施文している。第24図2は無文でヘラナデがみられ、3は半截竹管具による平行列点状文が施されている。4～22は底部である。



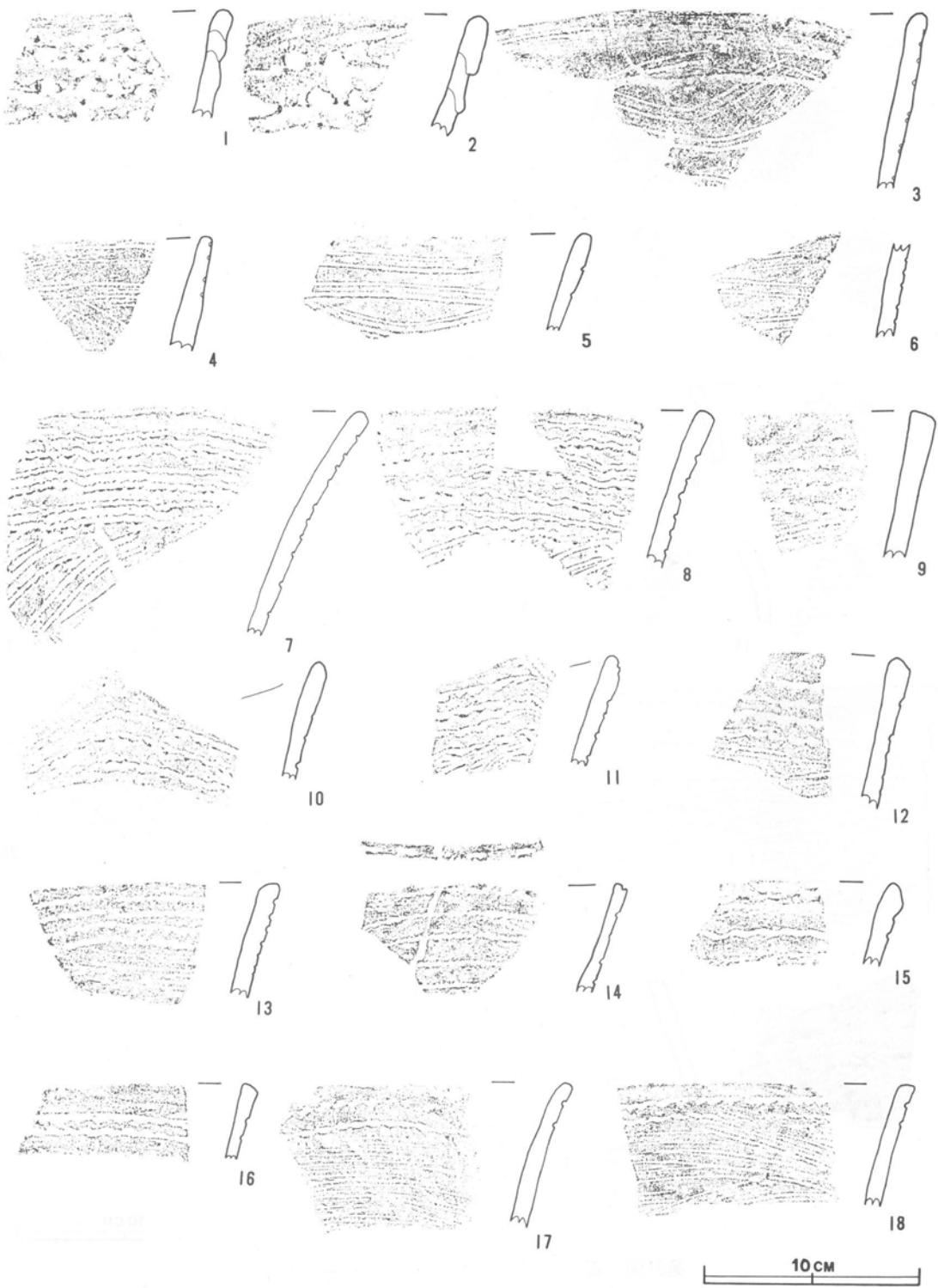
第18図 第1号住居跡実測図

2 土壌

本遺跡で発掘調査された土壌は36基であったが、調査の結果、開墾などの時に掘られたものを除いて、ここでは27基の土壌をとり扱い、一覧表を作成した。取り除いたものは欠番とした。土壌群はほぼ遺跡中央に集中して検出され、比較的浅いものが多かった。尚、遺物の出土量は少ないが、縄文土器片が出土している。覆土中からの出土であるので時期は不明である。(8・9・11・14・15・16・22・31は欠番)



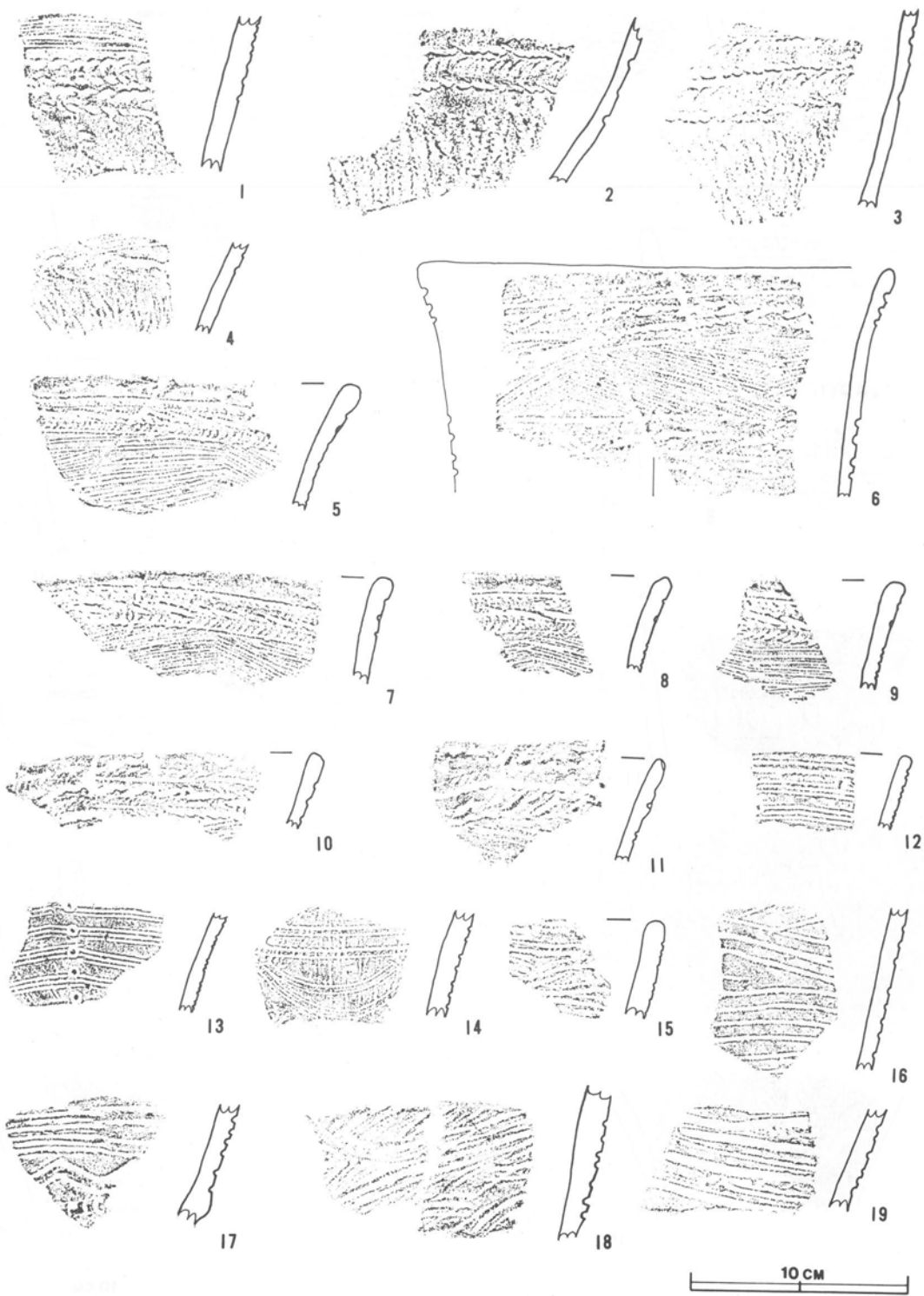
第19图 第1号住居跡出土遺物実測図



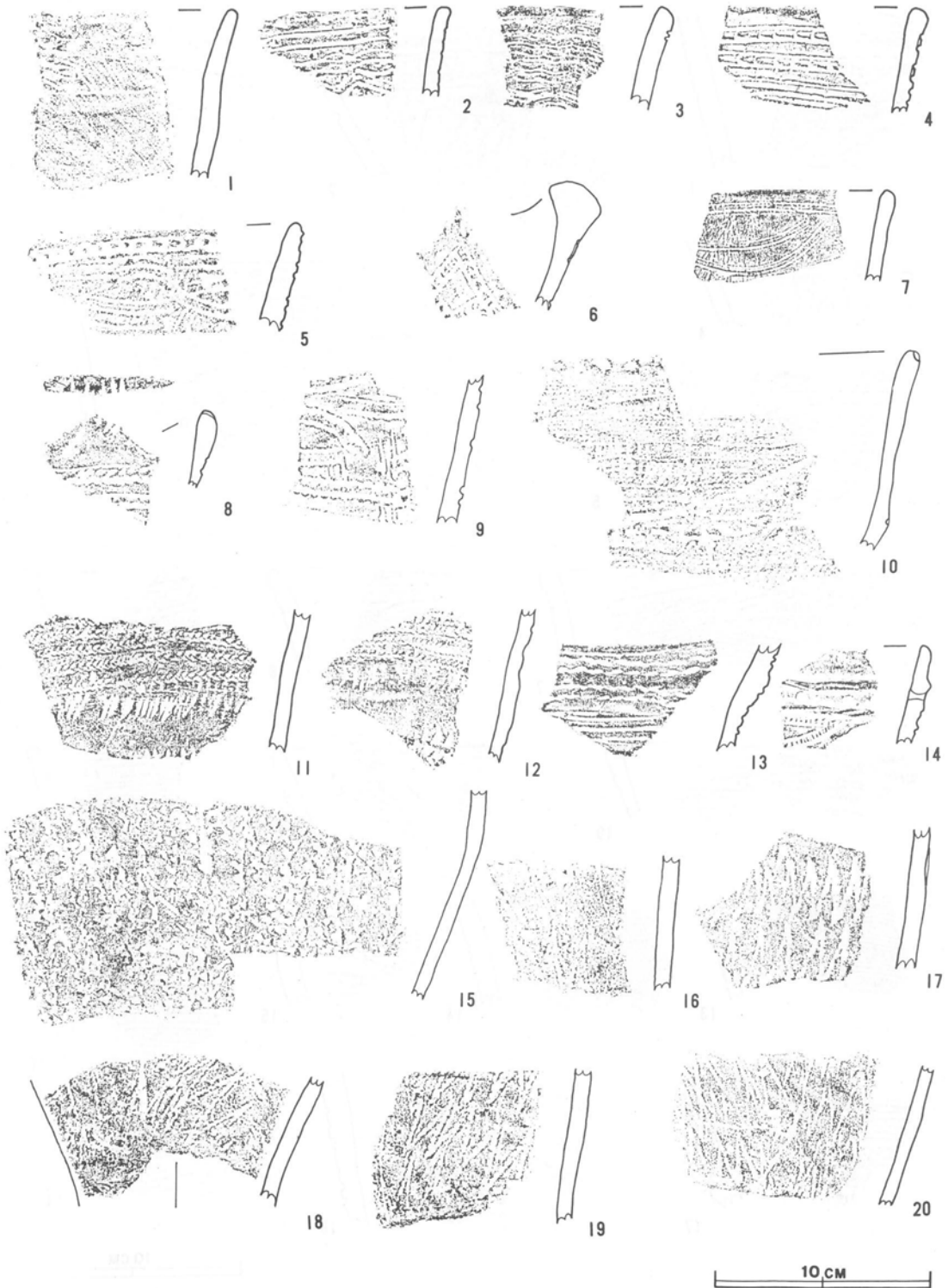
第20号 第1号住居跡出土土器拓影图



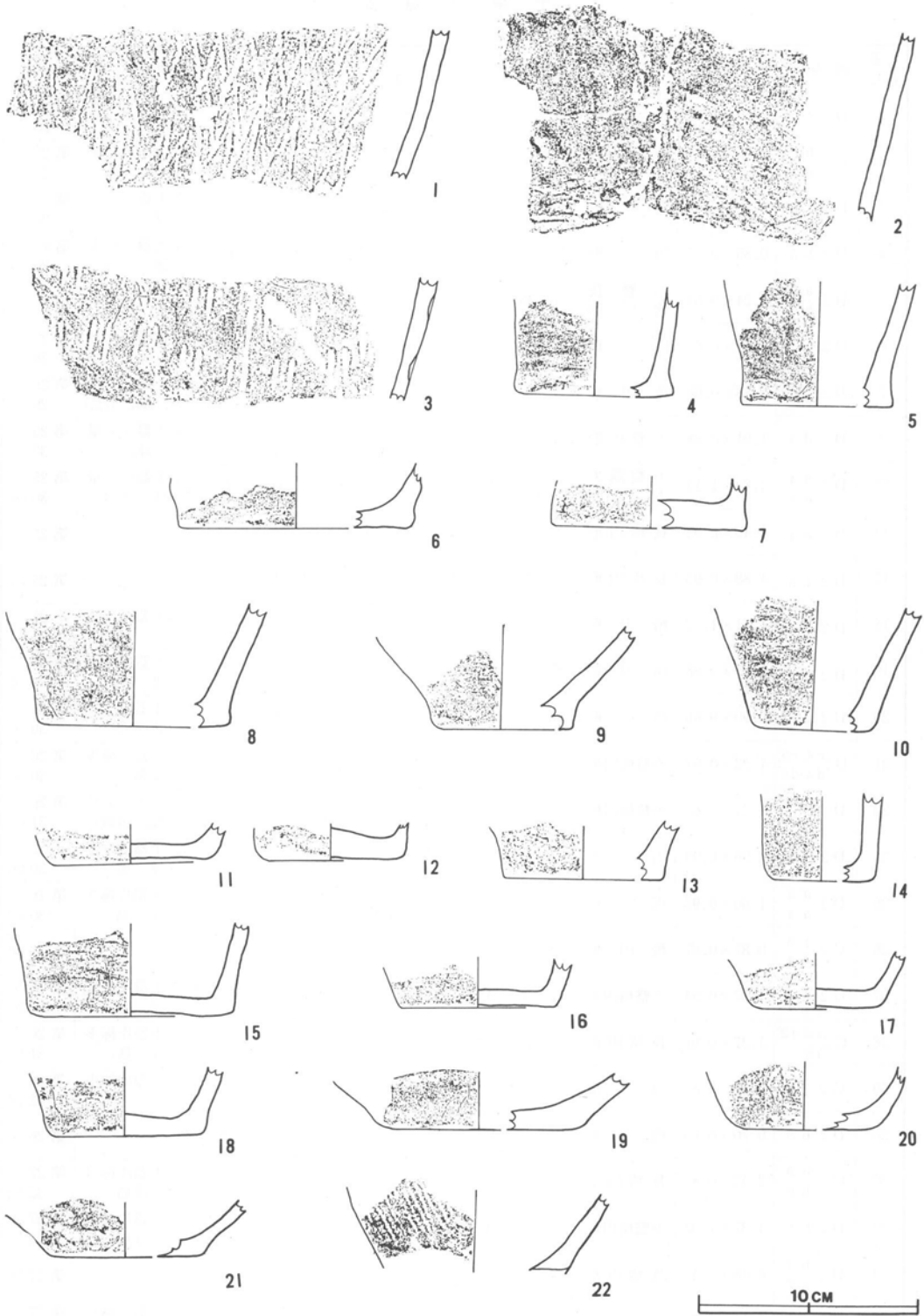
第21图 第1号住居跡出土土器拓影图



第22图 第1号住居跡出土土器拓影图



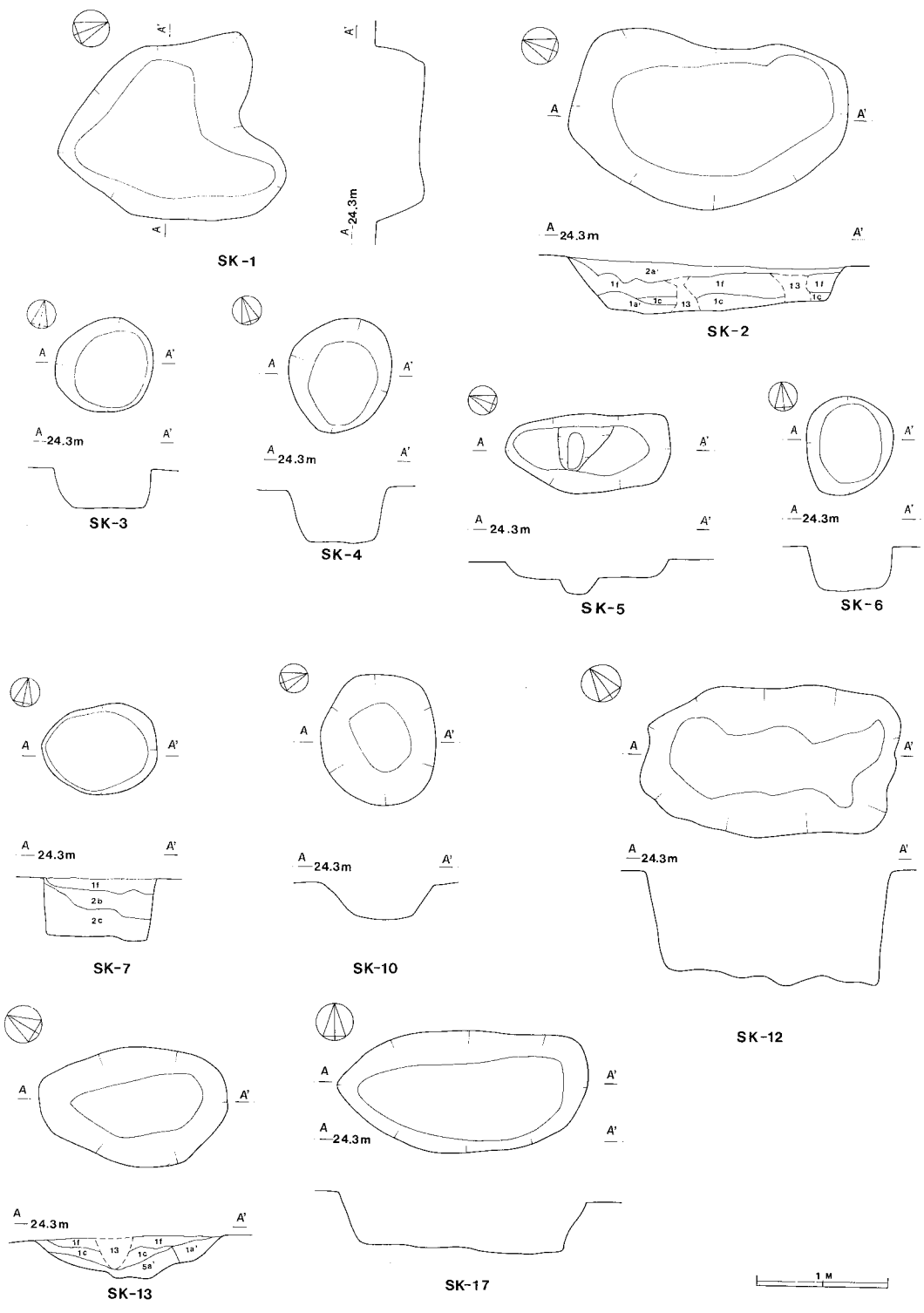
第23图 第1号住居跡出土土器拓影图



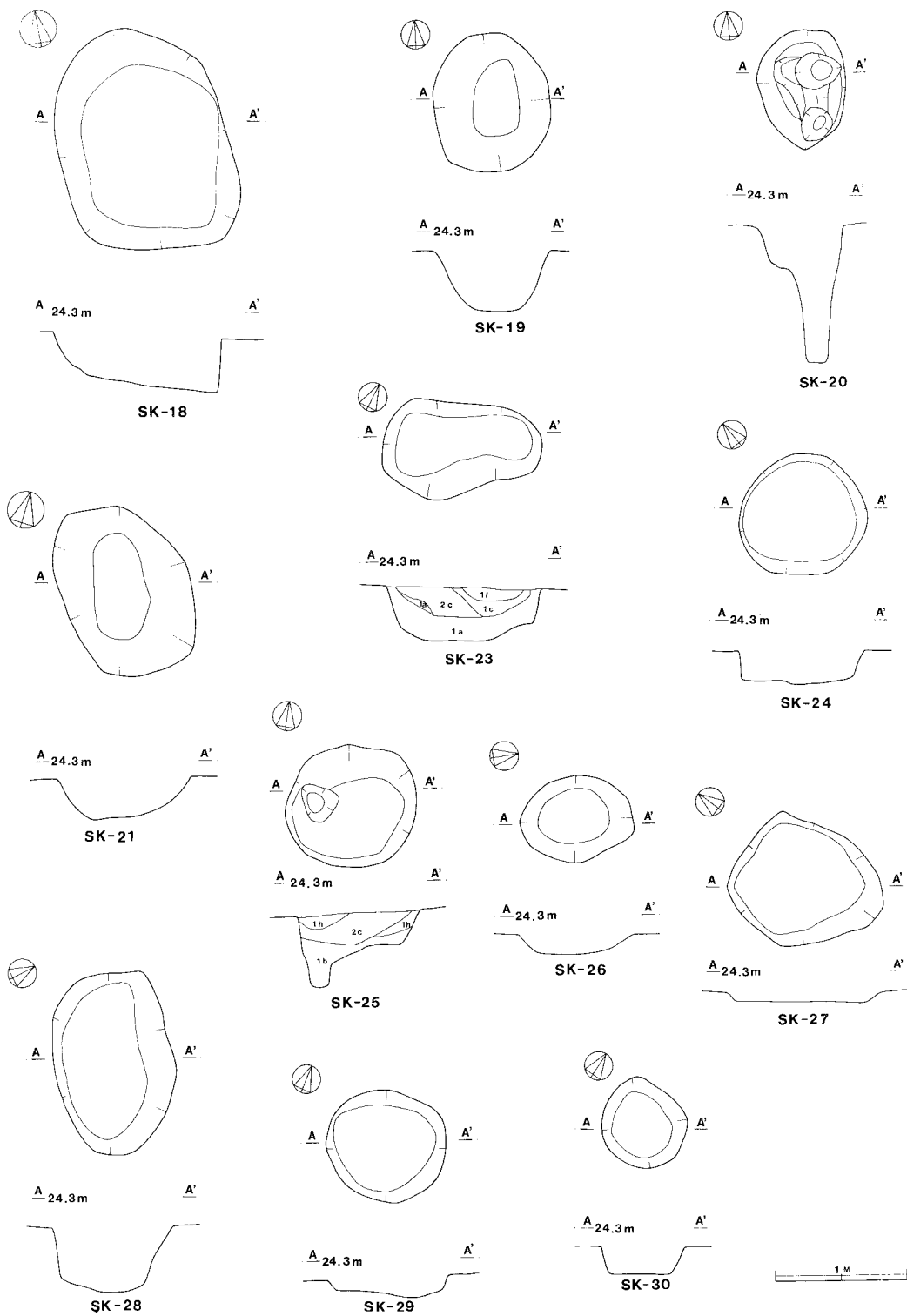
第24图 第1号住居跡出土土器拓影图

土 壌 一 覧 表

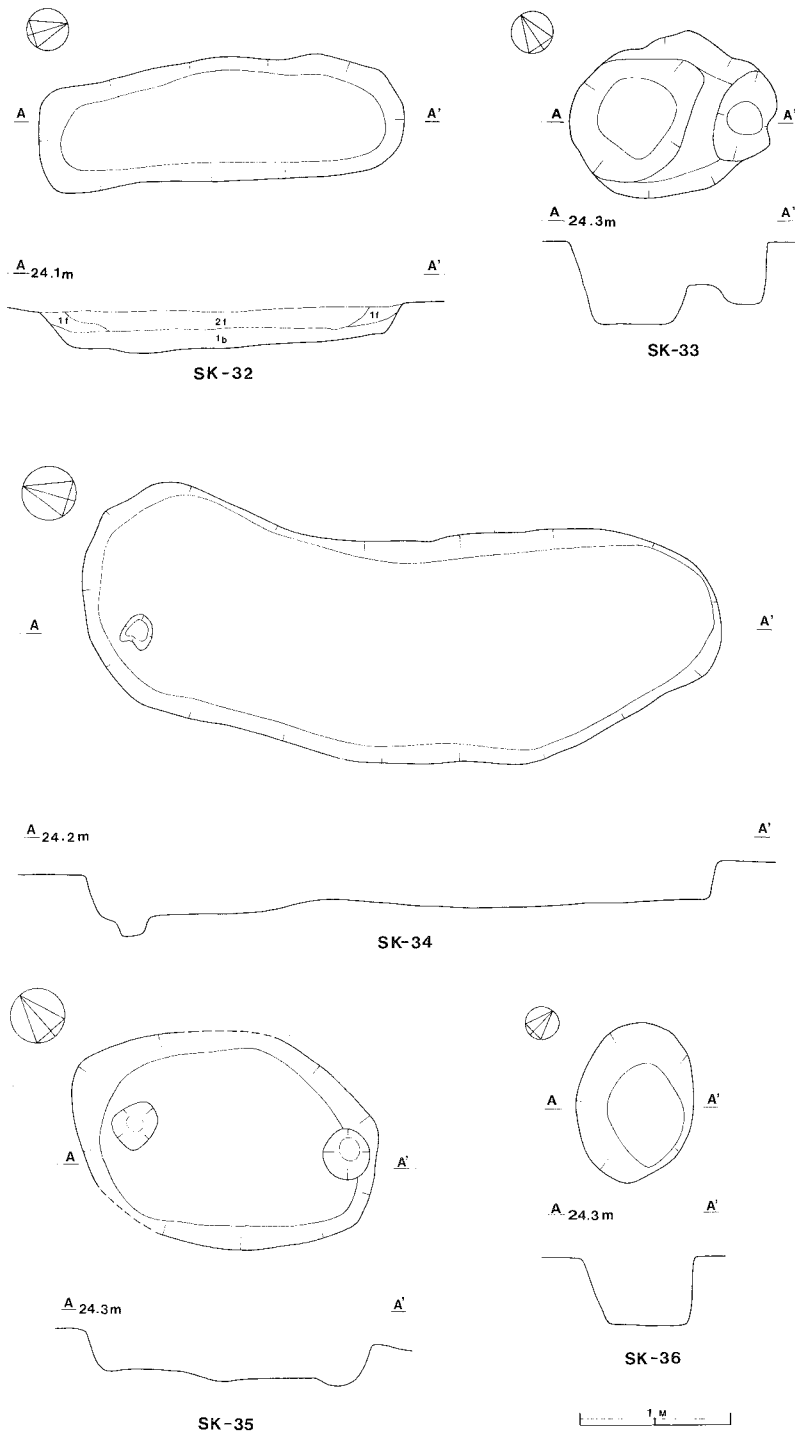
土壌 番号	調 査 区	規 模 (m)	形 状	長径方向	深さ (cm)	ヒ ト 数	底 面	壁 面	出土遺物(時期)	関連図版
1	D 2 c 3	1.69×1.37	不 定 形	N - 3° - E	37	0	水平平坦	垂 直	縄文土器片 (黒浜, 浮島)	第 25・ 28 図
2	D 2 ^b _c 3	2.10×1.53	不整楕円形	N - 19° - W	42	0	水平平坦	ゆるやか	縄文土器片 (黒浜, 浮島)	第 25・ 28 図
3	D 2 c 3	0.76×0.70	円 形	N - 46° - E	30	0	水平平坦	垂 直	縄文土器片極少 量(浮 島)	第 25・ 28 図
4	D 2 b 3	0.85×0.77	円 形	N - 19° - E	41	0	水平平坦	垂 直	縄文土器片極少 量(諸 磯)	第 25・ 29 図
5	D 2 ^a _b 3	1.24×0.61	不 整 長 楕 円 形	N - 18° - W	50	1	水平平坦	ゆるやか		第 25 図
6	D 2 ^b _c 3	0.76×0.65	円 形	N - 20° - E	34	0	水平平坦	垂 直	縄文土器片極少 量(浮 島)	第 25・ 29 図
7	D 2 ^c _c 4	0.88×0.68	楕 円 形	N - 76° - E	47	0	水平平坦	垂 直	縄文土器片多量 (黒浜, 諸磯, 浮島)	第 25・ 29 図
10	D 2 d 3	1.01×0.88	不 整 円 形	N - 75° - W	28	0	皿 状	ゆるやか	縄文土器片少量 (浮 島)	第 25・ 30 図
12	D 2 ^d _e 4	1.88×1.13	不 整 隅 丸 方 形	N - 56° - W	87	0	起伏あり	垂 直	縄文土器片少量 (浮島, 諸磯)	第 25・ 30 図
13	D 2 e 4	1.43×0.92	長 楕 円 形	N - 34° - W	48	0	皿 状	ゆるやか		第 25 図
17	D 2 f 6	1.88×0.93	長 楕 円 形	N - 89° - W	42	0	水平平坦	垂 直		第 25 図
18	D 2 ^e _f 5	1.81×1.32	楕 円 形	N - 21° - W	41	0	坂状平坦	ゆるやか	縄文土器片極少 量	第 26・ 30 図
19	D 2 e 5	1.05×0.88	楕 円 形	N - 7° - W	46	0	皿 状	ゆるやか	縄文土器片 1 点 (諸 磯)	第 26・ 30 図
20	D 2 d 5	0.90×0.66	楕 円 形	N - 5° - E	32	2	坂状平坦	垂 直	縄文土器片 1 点 (諸 磯)	第 26・ 30 図
21	D 2 ^c _d 4 - ^c _d 5	1.32×0.97	不 整 楕 円 形	N - 38° - W	28	0	皿 状	ゆるやか	縄文土器片極少 量(浮島)	第 26・ 30 図
23	D 2 b 4	1.21×0.67	不 整 楕 円 形	N - 59° - E	48	0	坂状平坦	ゆるやか	縄 文 土 器 片 (浮島, 諸磯)	第 26・ 31 図
24	D 2 a 3	0.96×0.93	円 形	N - 49° - W	23	0	坂状平坦	垂 直	縄文土器片極少 量(浮 島)	第 26・ 30 図
25	D 2 ^a _a 3	1.00×0.93	円 形	N - 76° - E	26	1	水平平坦	ゆるやか	縄文土器片極少 量(浮 島)	第 26・ 30 図
26	C 2 ^j _j 3	0.87×0.67	楕 円 形	N - 10° - E	16	0	皿 状	ゆるやか		第 26 図
27	C 2 ^j _j 3	1.17×0.94	不 整 楕 円 形	N - 36° - W	8	0	水平平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (浮 島)	第 26・ 31 図
28	C 2 ⁱ _j 2 - ^j _j 2	1.37×0.91	長 楕 円 形	N - 65° - W	52	0	坂状平坦	垂 直	縄文土器片極多 量(浮 島)	第 26・ 31 図
29	C 2 j 4	0.91×0.85	円 形	N - 71° - E	17	0	坂状平坦	ゆるやか	縄文土器片極少 量	第 26・ 32 図
30	D 2 b 5	0.70×0.65	円 形	N - 47° - W	22	0	水平平坦	垂 直		第 26 図
32	C 1 ^h _h 9	2.42×0.83	長 楕 円 形	N - 17° - E	28	0	皿 状	ゆるやか	縄文土器片極少 量(浮島)	第 27・ 32 図
33	D 2 b 5	1.37×1.03	不 整 楕 円 形	N - 70° - W	53	0	起伏あり	垂 直	縄文土器片極少 量(浮島)	第 27・ 32 図
34	D 2 ^b _c 7	4.18×1.47	長 楕 円 形	N - 17° - W	41	1	水平平坦	垂 直		第 27 図
35	D 2 c 6	2.10×1.40	楕 円 形	N - 30° - W	55	2	坂状平坦	ゆるやか	縄文土器片極少 量(黒浜, 浮島)	第 27・ 32 図
36	C 2 i 2	1.06×0.78	楕 円 形	N - 31° - W	46	0	坂状平坦	垂 直	縄文土器片極少 量(浮島)	第 27・ 32 図



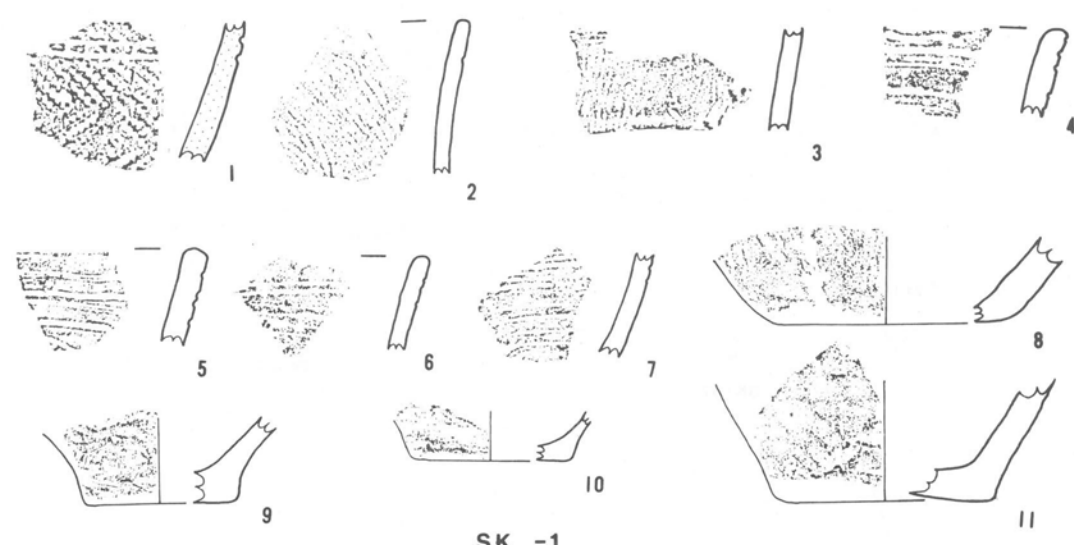
第25図 土壤実測図



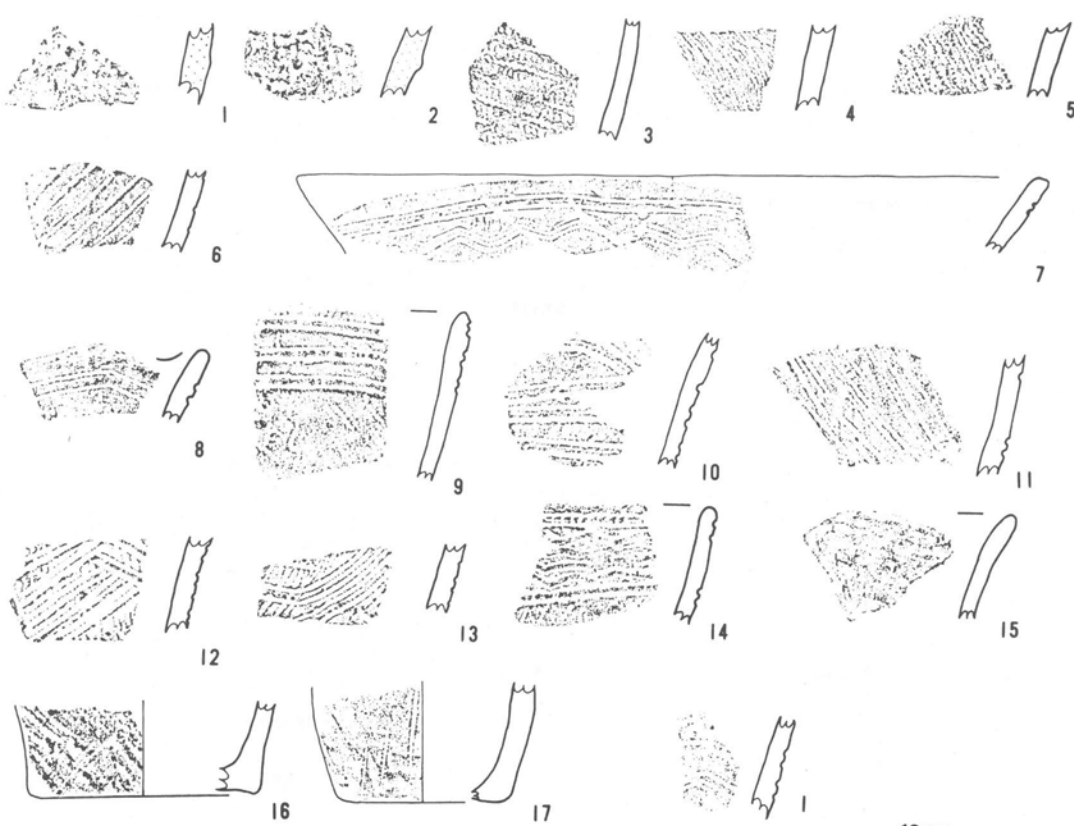
第26図 土壤実測図



第27図 土 壙 実 測 図



SK - 1



SK - 2

SK - 3

10 CM

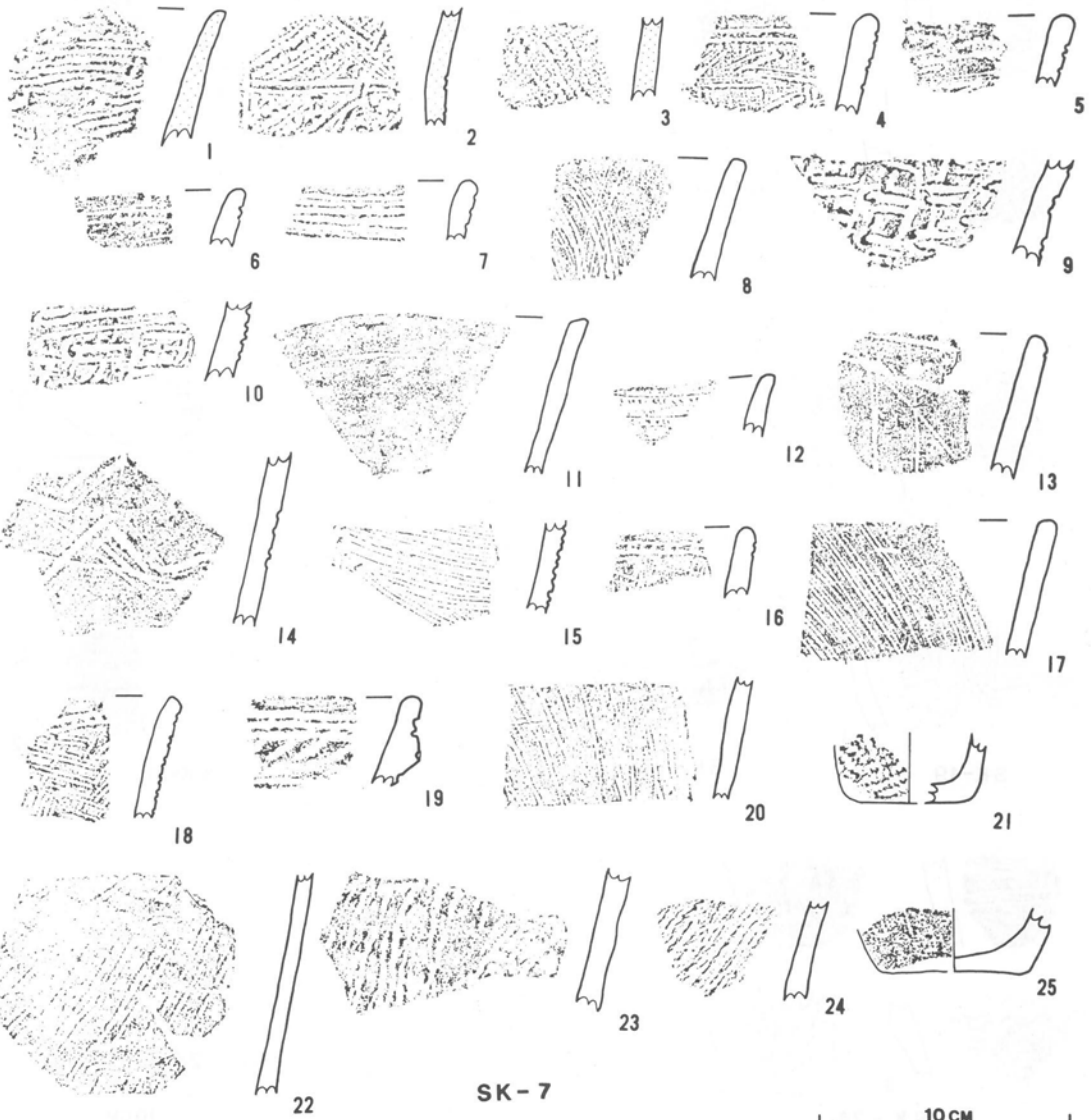
第28图 土壤出土土器拓影图



SK-4



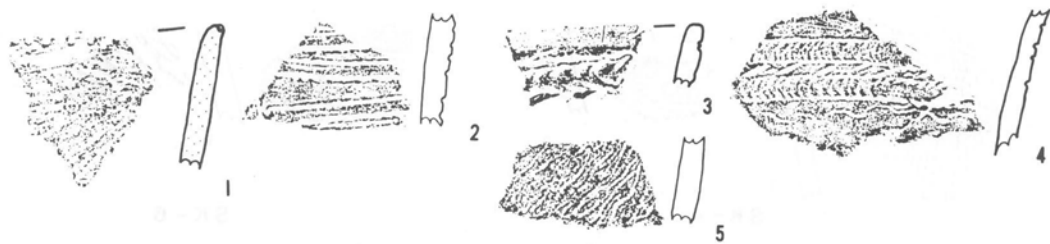
SK-6



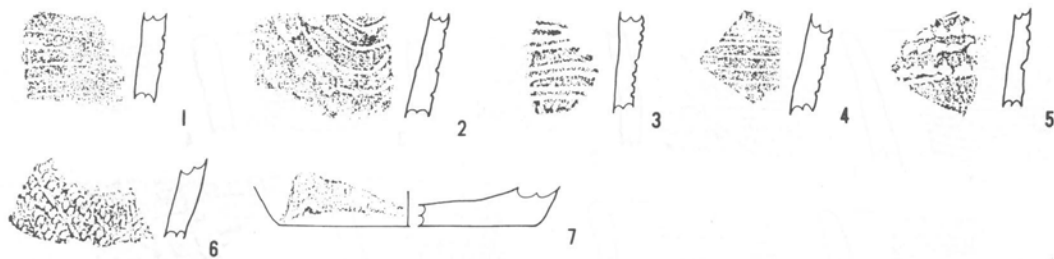
SK-7

10CM

第29图 土壤出土土器拓影图



SK-10



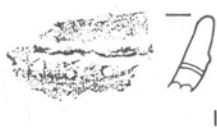
SK-12



SK-18



SK-19



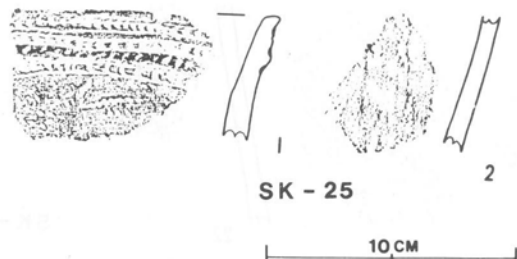
SK-20



SK-21

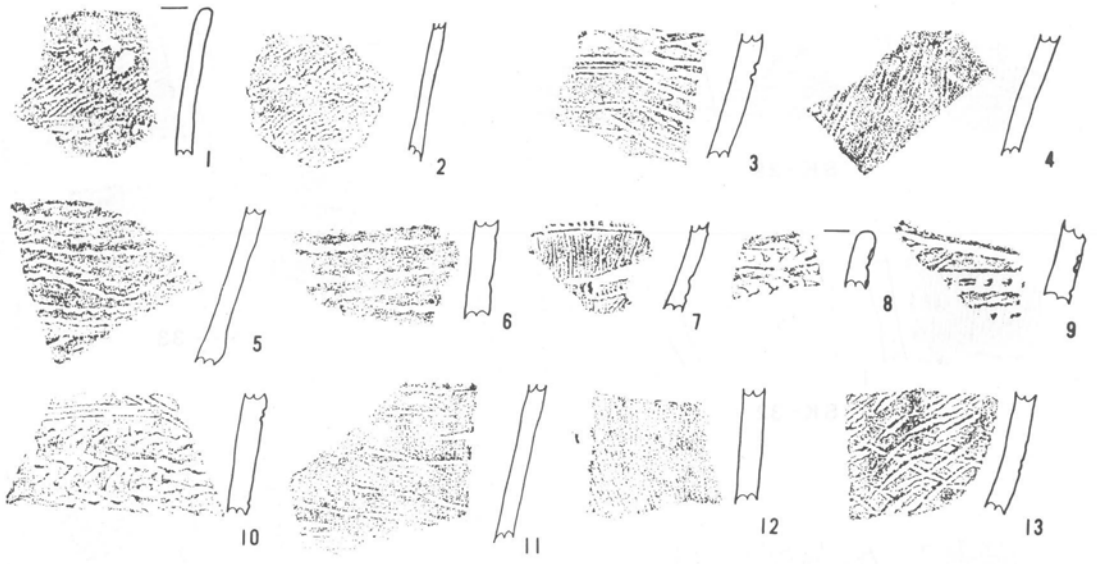


SK-24



SK-25

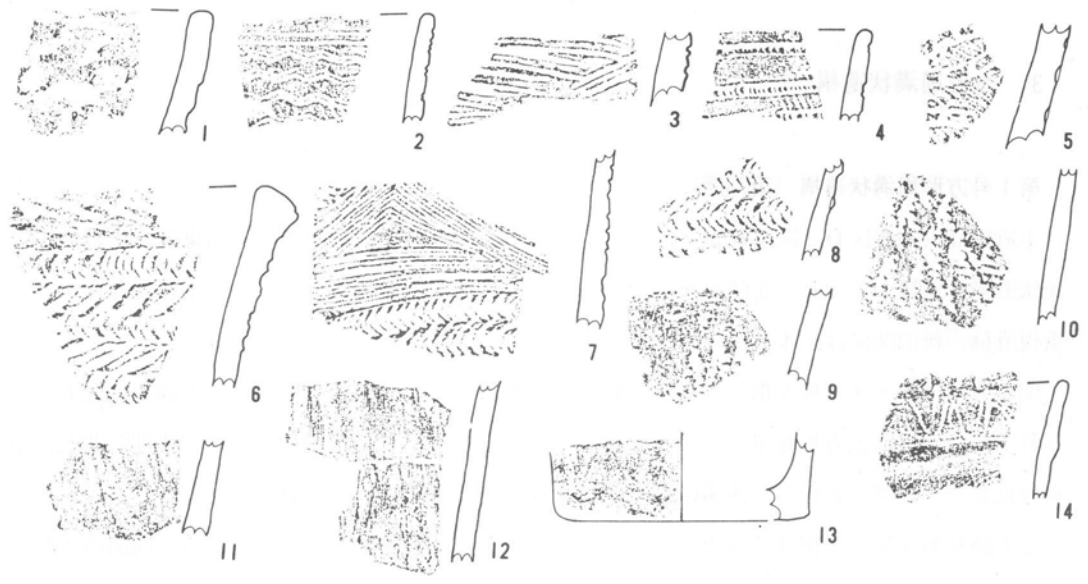
第30图 土壤出土土器拓影图



SK-23

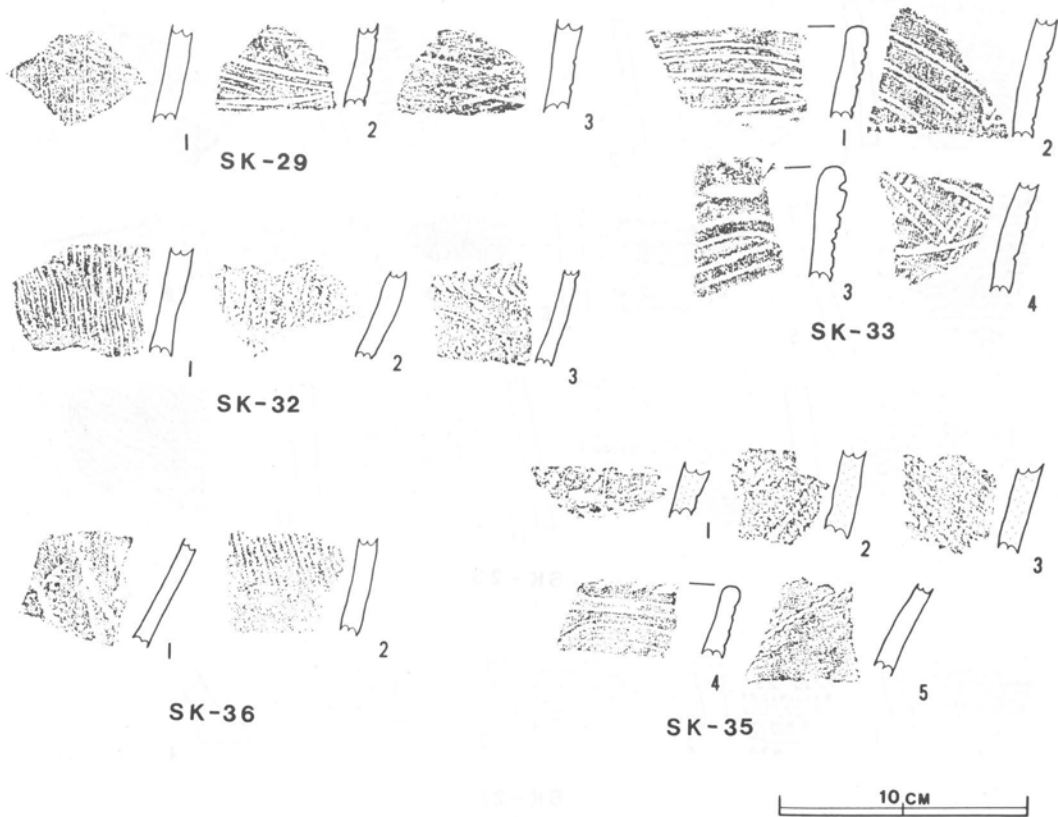


SK-27



SK-28

第31图 土壤出土土器拓影图



第32図 土 壤 出 土 土 器 拓 影 図

3 方形周溝状遺構

第1号方形周溝状遺構 (第33図)

本遺構は大調査区D2区に確認されたもので、遺跡のほぼ中央に位置し、南東部が2号方形周溝状遺構と重複しており、北側4mのところには29号土壙、西側に隣接して23号土壙が存在する。重複遺構の新旧関係は、本遺構の方が新しい。

南北方位はN-8°-Wを指し、平面形状は、長軸14.8m・短軸14.4mと東西方向が南北方向より若干長いがほぼ正方形を呈している。外辺・内辺ともに概して直線的だが、方体部の北辺は中央付近がやや内側に蛇行し、西溝の外辺中央部がやや内側にはり出し細くなっている。各コーナーとも隅丸形を呈す。掘りこみ方は「U」形で、溝は切れることなく一周する。周溝の上幅は55~95cm・深さは45~70cmを測る。底面は平坦であり、溝の立ちあがりはゆるやかである。溝内の覆土は大きく4層に分かれ、黒褐色土・暗褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックや少量の炭化材・炭化粒子等を含む。一般的にサラサラ

していて締りは弱いですが、底面付近は粘性を帯びている。

方体部に2基の土壙(30・33号)が存在するが、遺物の出土もなく積極的に主体部として認定できない。

遺物は北溝と南西コーナー付近から多量の縄文土器片が出土しているが、本遺構に関する遺物の出土がみられないので時期や性格は不明である。

第2号方形周溝状遺構(第33図)

本遺構は大調査区D2区に確認されたもので、遺跡のほぼ中央に位置し、北西部で1号方形周溝状遺構と重複しており、東側に34号土壙が存在する。

南北方位はN-45°Wを指し、方体部対角線がほぼ磁北に近い向きを示す。平面形状は、長軸12.8m・短軸12.4mと長さがほぼ等しい正方形を呈している。北西溝の外辺・内辺ともにやや弧状を描いているが、他の辺はほぼ直線的である。北西溝の外辺と東コーナーの外辺の一部が攪乱をうけている。東コーナーは直角に近いが他の3つのコーナーは隅丸形を呈す。掘りこみ方は「∟」形で、溝は完全に一周する。南西溝の中央付近は攪乱をうけている。周溝の上幅は130～170cm・底面の幅は20～90cm・深さ60～65cmを測る。底面はほぼ平坦で、方体部側の立ちあがり外周部側より急である。溝内の覆土は、暗褐色土・褐色土が自然堆積しているが、一部に黒褐色土とにぶい黄褐色土の堆積もみられる。

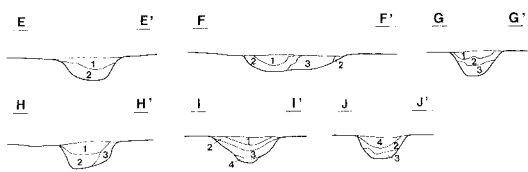
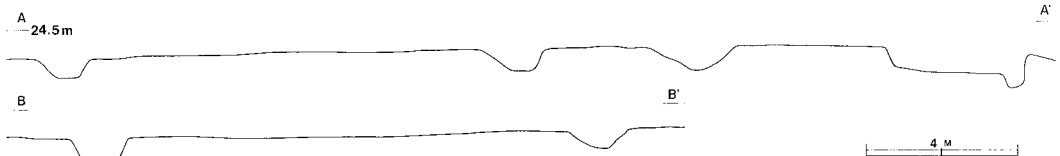
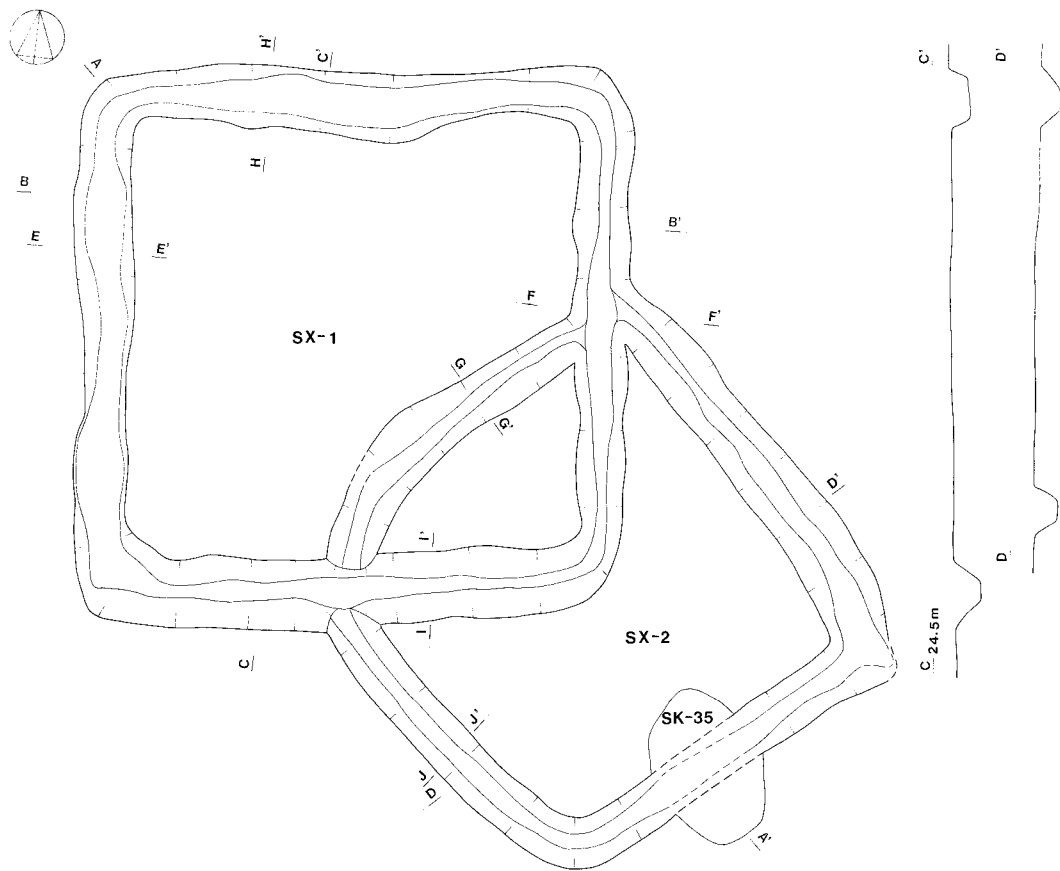
方体部上には土壙等は検出していない。南西溝中央に35号土壙があるが、セクションで見ると溝が土壙を切っていることがわかる。また、遺物の出土もなく土壙の性格は不明で主体部とは考えられない。

遺物は縄文土器片が少量出土しているが、本遺構に関する遺物の出土がみられないので時期や性格は不明である。

第3号方形周溝状遺構(第34図)

本遺構は大調査区D2区に確認されたもので、遺構群の最南端に位置し、北東側に13号土壙が存在する。

本遺構は上部の削平が激しく、かろうじて溝が確認できた程度であり、周囲には風倒木を中心とした攪乱が多い。そのため不明瞭な点が多く、溝は北と東の2辺が検出されただけである。溝の上幅は30～40cm・深さは12cm前後を測る。外辺・内辺ともに直線的で、北東コーナーは直角に近い。掘りこみ方は「∟」形で、底面は中央部がやや低くなっている。コーナー付近に2か所小ピットを有す。外周側の立ちあがりはややゆるやかであるが、方体部側はほぼ垂直となっている。溝内の覆土は、よく締ったローム質の褐色土・黄褐色土が堆積しており、底面付近はハード



第1号方形周溝状遺構土層解説

- E-E'
1. 暗褐色 黒色土粒子・ハードローム小ブロックを含む。
 2. 褐色 ハードローム小ブロックを含む。
- F-F'
1. 暗褐色 ハードローム小ブロック・イエローハミスを含む。
 2. 〃 ハードローム小ブロック・ソフトローム小ブロックを含む。
 3. 褐色 炭化粒子を含む。

第2号方形周溝状遺構土層解説

- G-G'・J-J'
1. 黒褐色 炭化物・イエローハミスを含む。
 2. 褐色 炭化物・ソフトローム小ブロック(多量)を含む。
 3. にぶい黄褐色 炭化物を含む。
 4. 褐色 炭化物を含む。

- H-H'
1. 褐色 ハードローム小ブロックを多量に含む。
 2. 〃 ハードローム大ブロックを含む。
 3. 〃 炭化物・ハードローム粒子を含む。

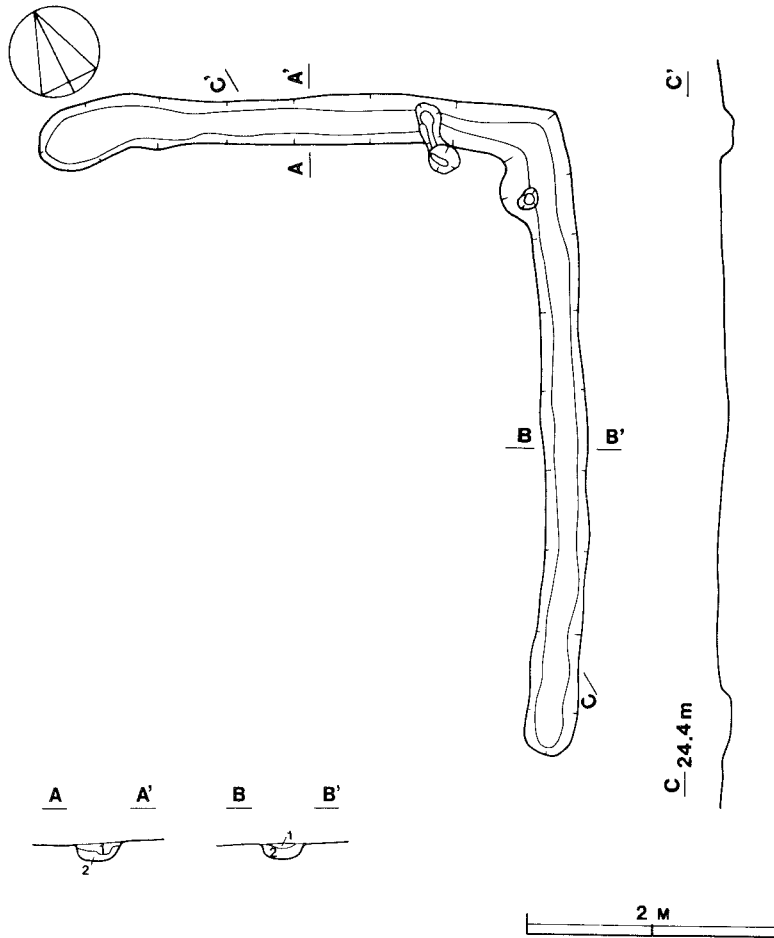
- I-I'
1. 黒褐色 イエローハミス・炭化物を含む。
 2. 暗褐色 ローム質、ハードローム小ブロックを含む。
 3. 褐色 ローム粒子を含む。
 4. にぶい黄褐色 ローム粒子を多量に含む。

第33図 第1・2号方形周溝状遺構実測図

ローム小ブロックを含んでいる。

方体部中央に土壙状の落ちこみがみられたが、調査の結果、現代に掘られたものであった。また、墳丘と思われるところが削平されていて主体部は確認できなかった。

出土遺物はなく、時期等不明である。



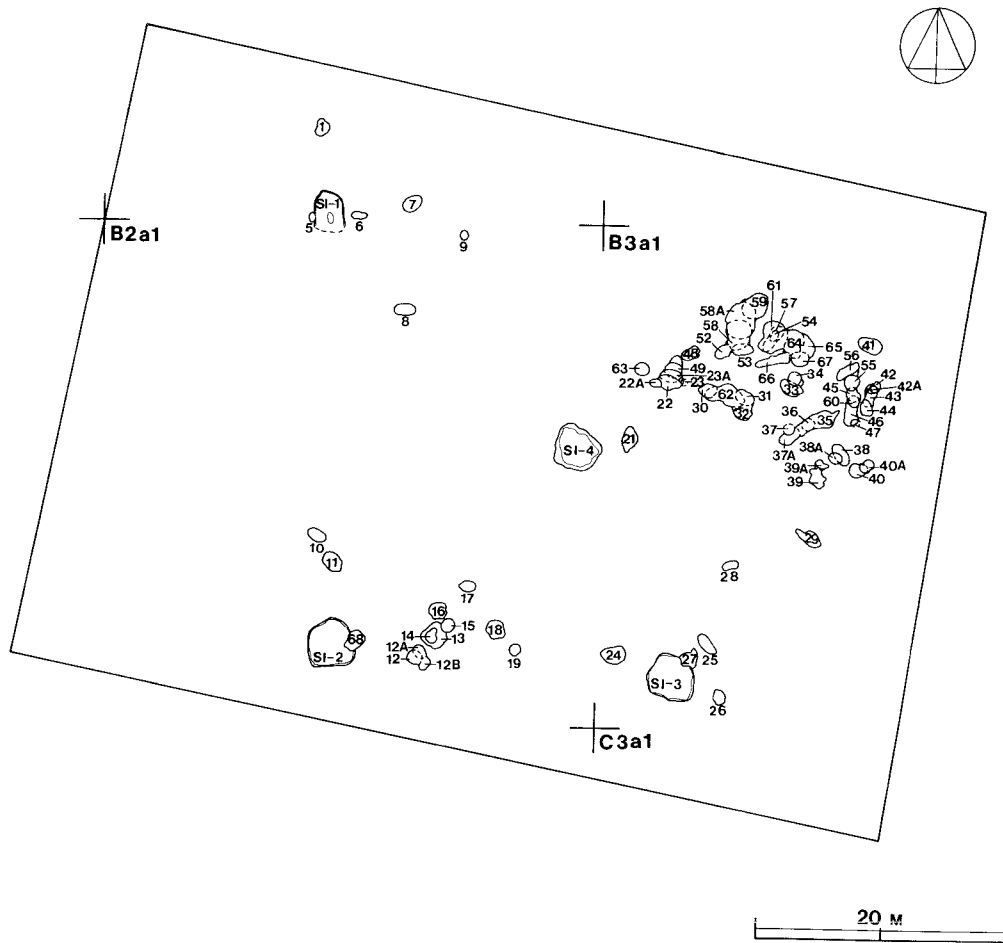
第3号方形周溝状遺構土層解説

A-A'・B-B'

1. 褐色 ローム質
2. 黄褐色 ローム質，ハードローム小ブロックを含む。

第34図 第3号方形周溝状遺構実測図

第3節 対馬塚遺跡



第35図 対馬塚遺跡遺構配置図

1 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第36図)

本住居跡はA2j5調査区を中心に確認されたもので、遺跡北西側に位置し、西側が5号土壙と重複しており、東側70cmのところに6号土壙が存在する。本住居跡の南側部分は現代に掘られた穴によって切断されており、その穴は埋め戻されていなかった。

残存状況から、長径方向はN-2°-Wを指し、長径約3.2m・短径2.3mの南北方向が長く北西部が外側にはり出している不整楕円形を呈しているものと思われる。壁高は北側と東側で15cm・

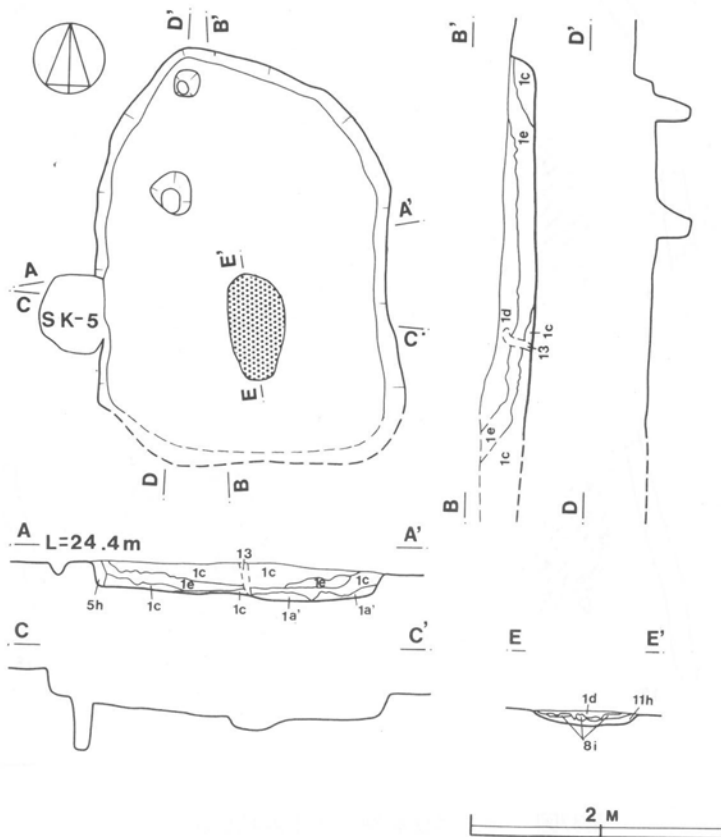
西側で20cmを測り、壁はやや外傾して立ちあがっている。床質はロームで部分的に踏み固められており、床面は中央部がわずかに低くなっているがほぼ平坦である。炉跡は中央よりやや南側に検出され、長径85cm・短径45cmの楕円形を呈し、炉跡の長径方向は本住居跡の長径方向とほぼ同じ向きを指している。床面を約12cm程掘り窪めた地床炉で、焼土・焼土粒子を含み炉床は皿状をなし硬く焼けている。ピットは北西側に2か所検出され、深さは27cm前後を測る。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む締りのある褐色土が自然堆積している。また、一部壁際に明褐色土の堆積もみられる。

遺物は少量の縄文土器片が出土しているが、主として中央から北側にかけての出土が多く、ほとんどが小破片である。床面に密着した状態で縄文前期の繊維土器がみられる。

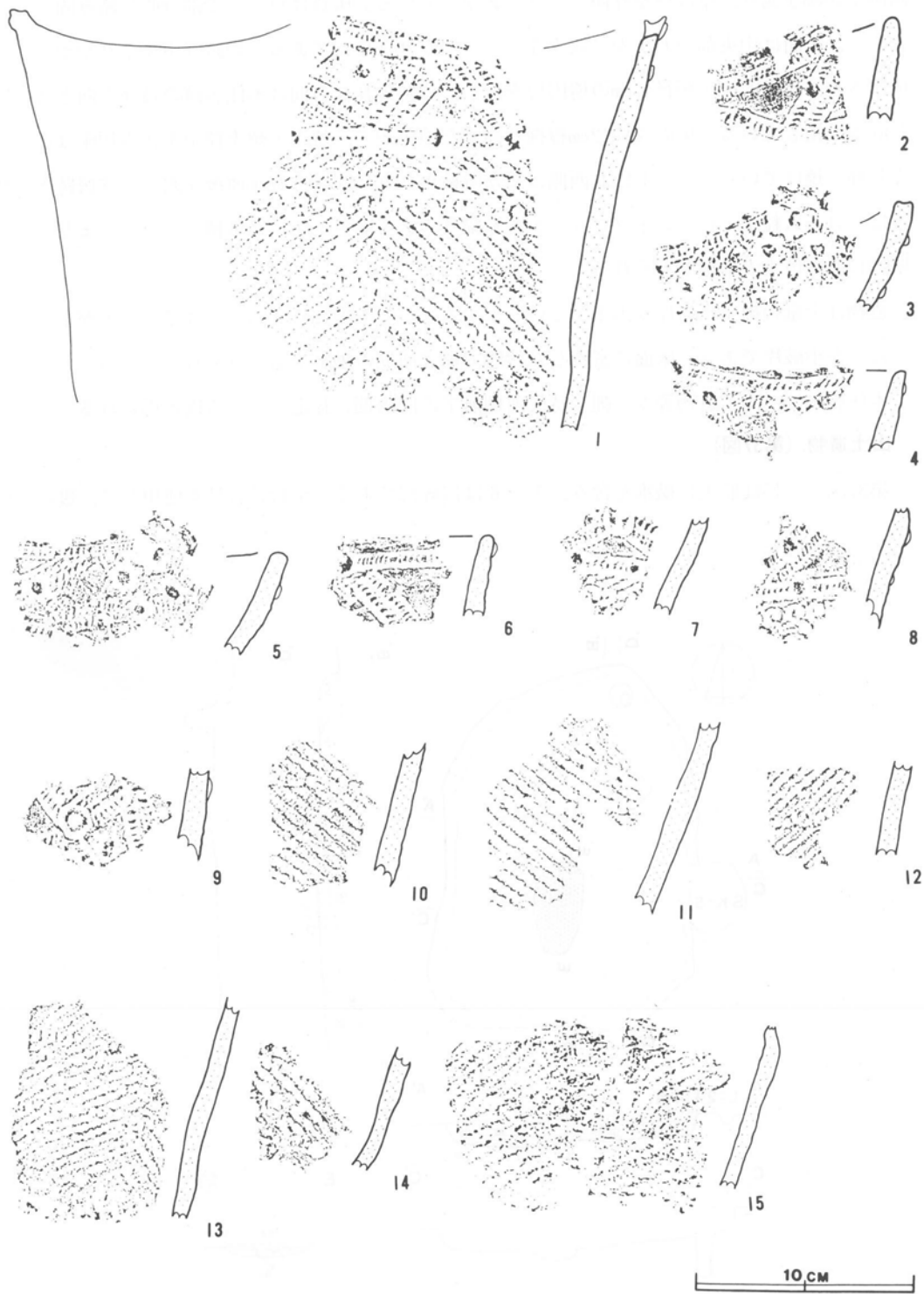
本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期前半の関山期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第37図)

第37図1～15は胎土に繊維を含み、1～6は口縁部である。半截竹管具を使用して、幾何学的



第36図 第1号住居跡実測図



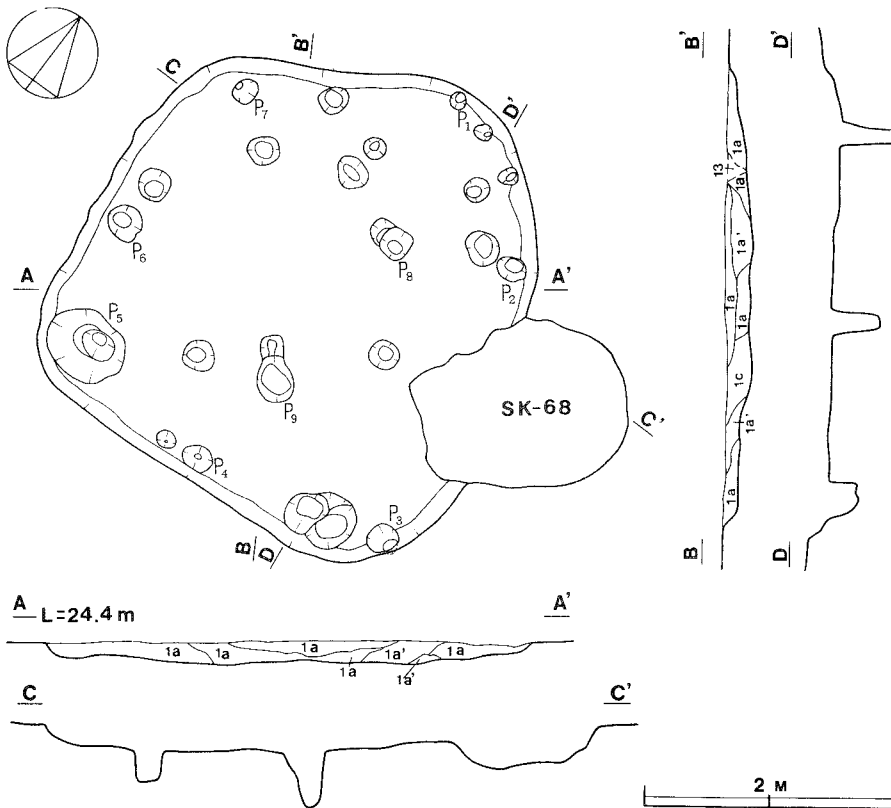
第37图 第1号住居跡出土土器拓影图

な沈線文・コンハス文・平行沈線文などを組み合わせ、瘤状貼付文を施している。縄文の末端にループ文を伴う。

第2号住居跡（第38図）

本住居跡は B215 調査区を中心に確認されたもので、遺跡の南端に位置し、東側が68号土壙と重複しており、北側4 mのところには11号土壙が存在する。

主軸方向は $N-10^{\circ}W$ を指し、長・短軸3.5 m の北壁東側が外へはり出した不整隅丸方形を呈している。壁高は北側と西側で10cm前後、南側と東側で15cmを測る。壁は柔らかく明確でないが、ゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は硬く、中央に向かってやや低くなっていくがほぼ平坦である。がは有さない。ピットは25か所検出され、壁下群とやや内側に位置する群とに分けられるが、深さは20~50cmを測る。前者は最深部が先細くなるものが多い。前者の $P_1 \sim P_7$ と後者の $P_8 \cdot P_9$ は主柱穴と考えられる。東壁下中央にも主柱穴があったと思われるが、68号土壙に切り



第38図 第2号住居跡実測図

こまれていて確認できなかった。住居跡内の覆土は、ローム粒子を含む締りのある褐色土が自然堆積している。

遺物は縄文土器の小破片5点が覆土中から出土しているが、4片は微細なため資料とはならなかった。

出土遺物 (第39図)

1は口縁部で、内彎しており、口唇部にいたるまで縄文が施文されている。器厚は12mmでにぶい褐色を呈し、胎土に多量の砂礫を含んでいる。二次焼成をうけている。縄文中期に比定される土器である。



第39図 第2号住居跡出土土器拓影図

第3号住居跡 (第40図)

本住居跡はB3i2調査区を中心に確認されたもので、遺跡南東部に位置し、北東側が27号土城と重複しており、南東側1.7mのところと26号土城、北西側2mのところと24号土城が存在する。

主軸方向はN-75°Wを指し、長軸3.6m・短軸3.3mの南辺が長い隅丸台形状を呈している。壁高は東側で17cm、他で10cm前後を測り、ゆるやかに外傾して立ちあがっている。北東コーナーは、27号土城に切りこまれていて不明である。床面は北東側がやや低くなっている。炉は有さない。ピットは18か所検出され、不規則に位置している。深さは15~70cmを測るが比較的浅いものが多く、50cm以上の深さをもつものは内側にある3つのピットだけである。支柱穴は不明である。東壁下南側に位置する直径75cm前後・深さ15cm程の円形状ピットは貯蔵穴と考えられる。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロック・暗褐色土粒子を含む締りのある褐色土が堆積している。

遺物の出土は皆無であるため時期は不明であるが、平面形状・規模が4号住居跡と似ているので同時期のものであろう。

第4号住居跡 (第41図)

本住居跡はB2eo調査区を中心に確認されたもので、遺跡のほぼ中央に位置し、東側1.5mのところと21号土城が存在する。

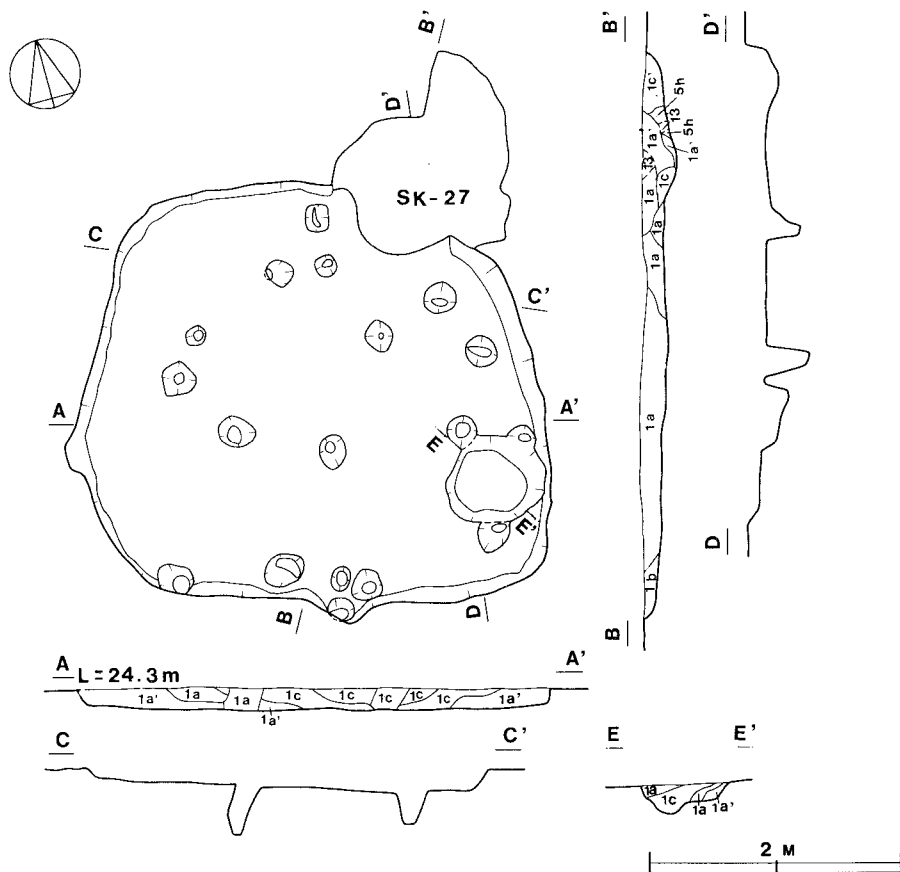
主軸方向はN-56°Wを指し、長軸3.5m・短軸3.2mの北東辺が長い隅丸台形状を呈している。壁高は北東側が30cm・東側と西側が25cm・南側が20cmを測り、ゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は全体的に軟弱でほぼ平坦をなしているが、南西側コーナーが若干高くなっている。炉は有さない。ピットは22か所検出されたが比較的浅く、支柱穴は不明である。ピット内には黒味がかかった暗褐色土が堆積していたが、いくつかは木の根による攪乱ピットであろう。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む締りのある褐色土が堆積しているが、東側と西

側の壁際には暗褐色土の堆積もみられる。

遺物は少量の縄文土器片が覆土中より出土している。出土状況はほとんどが南側からの出土である。出土遺物が少なく、しかも覆土中からの出土であるので時期は不明である。

出土遺物（第42図）

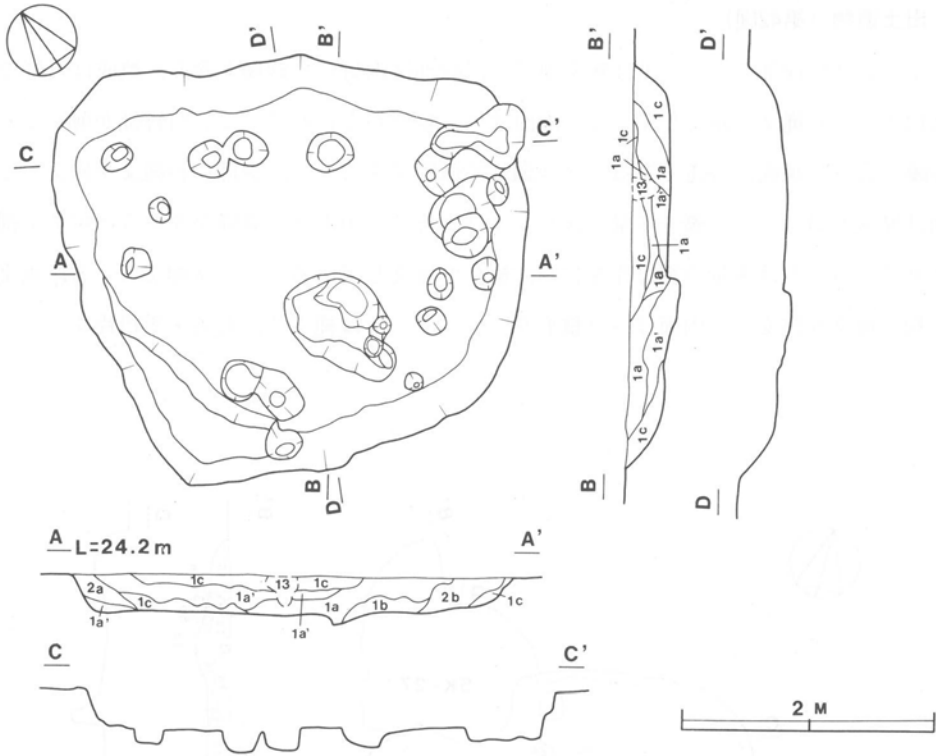
1・2は口縁部である。1は無文地で、口縁部は内彎し、砂礫を含み、焼成は良好である。2は口辺まで斜縄文を施文している。内面はヘラ整形がなされている。口唇部が薄くなる。胎土は砂礫を含み、焼成は普通である。3は頸部で微隆帯をもうけ、胴部に斜縄文を施文している。内面は摩滅が激しい。砂礫を多量に含む。4は胴部で、中央部に微隆帯をもうけ付加条縄文を斜行させている。5は多量の雲母片を含み、縄文を施文している。太い沈線文による区画文あり。6は粗い縄文を施文し、内面はヘラ整形をしている。7は縄文で、石英・雲母片を含む。8は多量



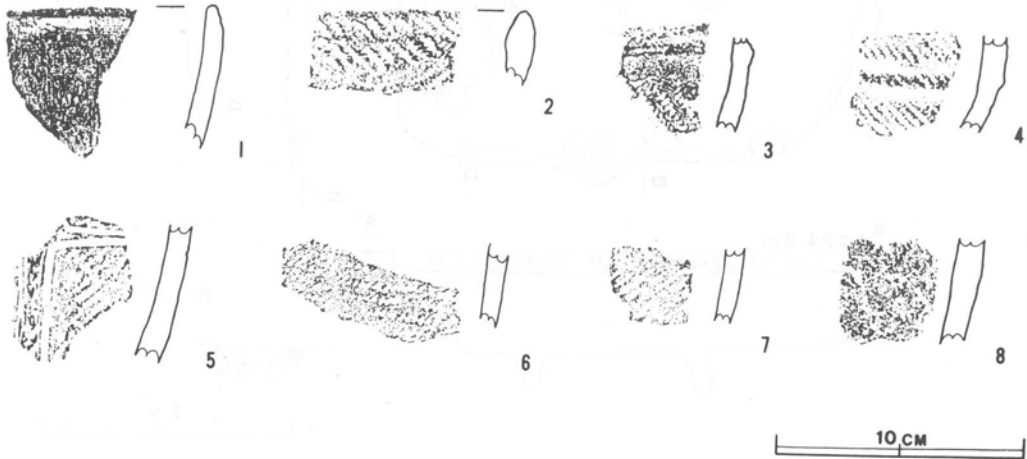
第40図 第3号住居跡実測図

の石英と雲母片を含む。無文である。

これらの土器は、縄文中期の阿玉台式土器に比定される。



第41図 第4号住居跡実測図



第42図 第4号住居跡出土土器拓影図

2 土壌

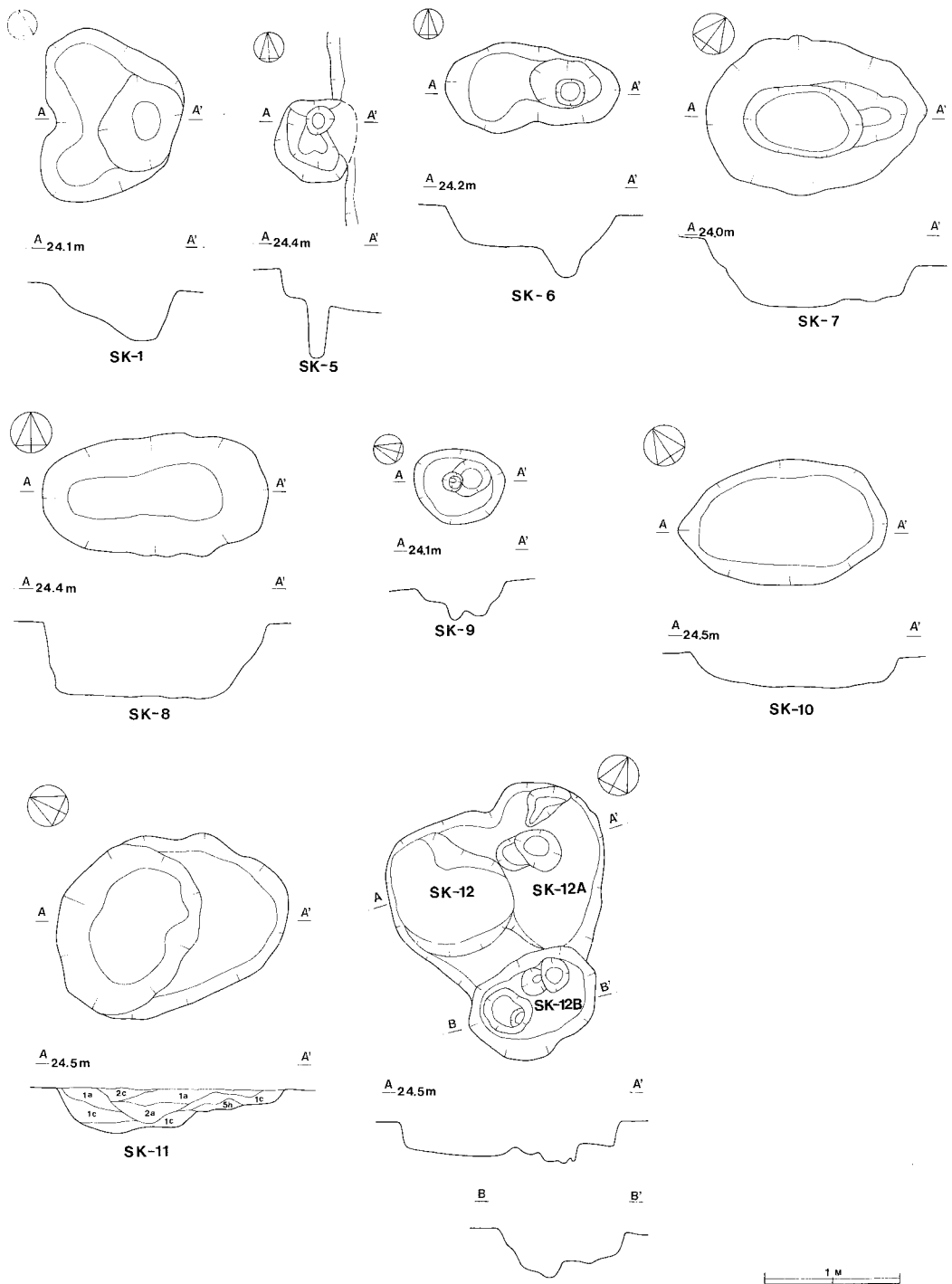
本遺跡で発掘された土壌は68基である。しかし精査の結果、遺跡北西端の傾斜地に位置する2・3・4号土壌は、壁や底面が検出されず、土層も北側谷津部と同じような腐植土が堆積しており、遺構と判断できないので欠番とした。また、1つの土壌を調査していくうちに、壁面の拡大や底面の高低差がみられるものがあった。このうち、明らかに重複している土壌と思われるものには、その土壌番号に順次A・B・C……というような土壌番号をつけていった(例、SK-12A)。したがって、実際には71基の土壌が存在している。しかも大半が遺跡の北東側に集中して検出されている。土壌からの遺物の出土は皆無に等しく、時期等は不明であるが、本遺跡の住居跡や同一台地上に位置する他の遺跡から判断すると、縄文時代の前期から中期前半にかけての土壌群であろうと推定される。(2・3・4・20・50・51は欠番)

土 壌 一 覧 表

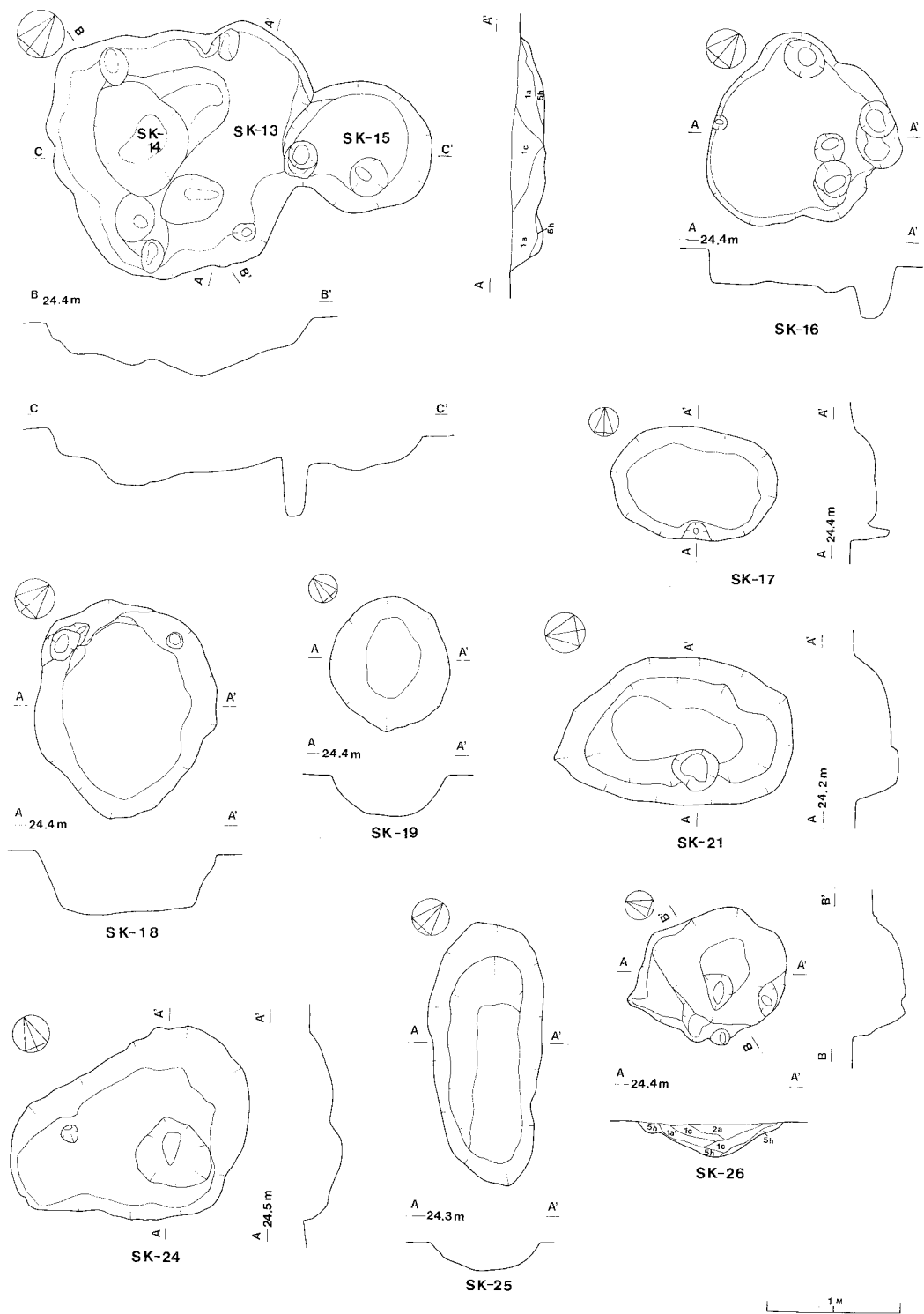
土壌番号	調査区	規模(m)	形状	長径方向	深さ(cm)	ピット数	底面	壁面	出土遺物(時期)	関連図版
1	A 2 ^{h5} _{i5}	1.24×0.96	不定形	N-12°-E	37	0	坂状平坦	ゆるやか	縄文土器片1点 繊維土器	第43・50図
5	A 2 ^{j5} _{j5}	0.62×0.55	不整円形	N-21°-E	17	1	坂状平坦	垂直		第43図
6	A 2 ^{j5} _{j6}	1.27×0.54	楕円形	N-88°-W	24	1	水平平坦	ゆるやか		第43図
7	A 2 ^{j6} _{j7}	1.58×1.13	楕円形	N-54°-E	42	0	起伏あり	ゆるやか		第43図
8	B 2 ^{b6} _{b7}	1.65×0.89	楕円形	N-90°-W	58	0	水平平坦	ゆるやか		第43図
9	B 2 a _g	0.67×0.55	楕円形	N-13°-W	12	2	坂状平坦	ゆるやか		第43図
10	B 2 g ₅	1.55×0.91	楕円形	N-57°-W	25	0	皿状	ゆるやか		第43図
11	B 2 g ₅	1.73×1.27	楕円形	N-44°-W	32	0	起伏あり	ゆるやか		第43図
12	B 2 i ₇	1.25×1.11	不整楕円形	N-45°-W	24	0	皿状	ゆるやか		第43図
12A	B 2 i ₇	1.25×0.88	楕円形	N-32°-W	24	2	坂状平坦	垂直		第43図
12B	B 2 i ₇	0.95×0.75	楕円形	N-50°-E	23	4	起伏あり	ゆるやか		第43図
13	B 2 ^{h7-h8} _{i7-i8}	2.10×2.00	不定形	N-7°-W	28	6	坂状平坦	段状		第44図
14	B 2 i ₇	1.10×0.66	不整楕円形	N-14°-E	44	0	起伏あり	ゆるやか		第44図
15	B 2 ^{h7-h8} _{i7}	1.12×0.99	不整楕円形	N-50°-E	24	2	水平平坦	ゆるやか		第44図
16	B 2 h ₇	1.49×1.42	不定形	N-62°-E	23	6	水平平坦	垂直		第44図
17	B 2 h ₈	1.26×0.84	楕円形	N-88°-E	28	1	起伏あり	ゆるやか		第44図
18	B 2 ^{h8-h9} _{i8-i9}	1.60×1.35	不整楕円形	N-53°-W	49	2	水平平坦	垂直	縄文土器片1点 (黒浜)	第44・50図

土城番号	調査区	規模 (m)	形状	長径方向	深さ (cm)	ピット数	底面	壁面	出土遺物(時期)	関連図版
19	B 2 i 9	1.00×0.89	円形	N-43°-E	31	0	皿状	ゆるやか		第44図
21	B 3 ^{d1} / _{d2}	1.80×1.15	不整楕円形	N-8°-W	28	1	皿状	ゆるやか	縄文土器片3点	第44・50図
22	B 3 ^{c2} / _{d2}	1.95×1.14	不整楕円形	N-68°-W	48	1	坂状平坦	垂直		第45図
22 A	B 3 ^{d1} / _{d2}	0.73×0.59	不整楕円形	N-89°-E	113	0	平坦	袋状		第45図
23	B 3 d 2	0.70×0.59	不整楕円形	N-18°-W	65	0	平坦	袋状		第45図
23 A	B 3 ^{c2} / _{d2}	1.95×1.03	不整楕円形	N-74°-W	48	0	水平平坦	段状		第45図
24	B 3 i 1	1.91×1.27	不整楕円形	N-85°-E	19	2	水平平坦	ゆるやか		第44図
25	B 3 i 3	1.99×0.82	長楕円形	N-49°-W	22	0	皿状	ゆるやか		第44図
26	B 3 j 3	1.25×0.95	不整楕円形	N-33°-W	26	3	皿状	ゆるやか		第44図
27	B 3 i 2	1.65×1.33	不定形	N-51°-W	27	2	坂状平坦	ゆるやか		第45図
28	B 3 g 3	1.27×0.67	不整楕円形	N-72°-E	17	0	皿状	ゆるやか		第45図
29	B3 ^{f4-g} / _{g5}	2.31×1.00	不定形	N-60°-W	49	0	起伏あり	垂直		第46図
30	B 3 ^{d2} / _{d3}	1.32×0.95	楕円形	N-82°-E	91	0	起伏あり	段状		第46図
31	B 3 d 3	1.79×1.18	楕円形	N-78°-W	71	0	起伏あり	ゆるやか		第46図
32	B 3 d 3	1.35×0.91	不整楕円形	N-65°-W	110	0	平坦	袋状		第46図
33	B3 ^{c4-d4} / _{d5}	1.68×0.74	不整長楕円形	N-59°-W	32	5	坂状平坦	ゆるやか		第45図
34	B 3 ^{c4} / _{d4}	1.05×0.98	不整円形	N-40°-E	32	0	起伏あり	ゆるやか		第45図
35	B 3 d 5	1.70×1.33	楕円形	N-76°-E	81	0	水平平坦	垂直		第46図
36	B 3 ^{d5} / _{e5}	0.96×0.94	円形	N-33°-W	62	0	坂状平坦	ゆるやか		第46図
37	B 3 ^{d4} / _{e4}	1.77×1.03	不整楕円形	N-60°-E	63	0	皿状	垂直		第46図
38	B 3 e 5	1.95×0.95	長楕円形	N-27°-W	35	1	坂状平坦	ゆるやか		第45図
38 A	B 3 e 5	1.12×0.77	不整楕円形	N-74°-W	55	0	坂状平坦	垂直		第45図
39	B 3 ^{e5} / _{f5}	1.61×1.12	不定形	N-30°-W	47	0	起伏あり	垂直		第47図
39 A	B 3 e 5	0.99×0.59	不整楕円形	N-77°-W	34	1	皿状	段状		第47図
40	B 3 ^{e5} / _{e6}	1.29×1.13	不整円形	N-89°-E	72	0	起伏あり	垂直		第46図
40 A	B 3 e 6	1.16×0.79	不整楕円形	N-62°-E	77	0	起伏あり	垂直		第46図
41	B 3 c 6	1.91×1.24	楕円形	N-63°-W	69	0	皿状	垂直	縄文土器片1点	第47・50図
42	B 3 d 6	1.07×0.66	不整楕円形	N-33°-E	63	0	平坦	袋状		第47図
42 A	B 3 d 6	1.15×0.87	不整楕円形	N-55°-E	115	0	起伏あり	垂直		第47図

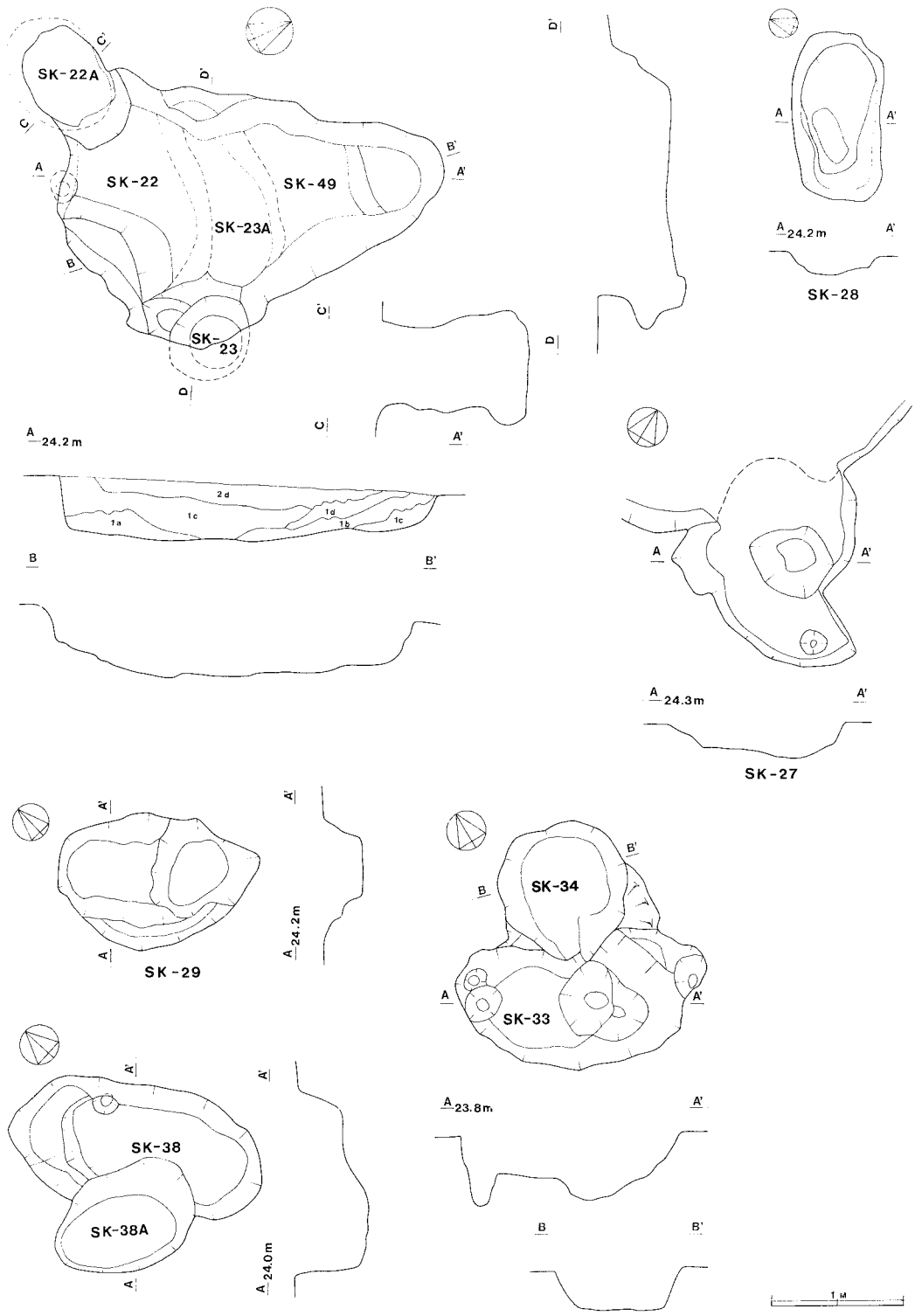
土壌 番号	調査区	規模(m)	形 状	長径方向	深さ (cm)	ピツ ト数	底 面	壁 面	出土遺物(時期)	関連図版
43	B 3 d 6	1.62×0.60	長楕円形	N-18° E	48	0	坂状平坦	垂 直		第 47 図
44	B 3 d 6	1.33×0.92	楕 円 形	N-22° W	106	0	平 坦	袋 状		第 47 図
45	B 3 $\begin{smallmatrix} d \\ d \\ d \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 5 \\ 6 \\ 6 \end{smallmatrix}$	1.13×1.06	円 形	N-82° W	77	0	起伏あり	段 状		第 47 図
46	B 3 $\begin{smallmatrix} d \\ d \\ d \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 5 \\ 6 \\ 6 \end{smallmatrix}$	2.33×1.04	長楕円形	N-2° E	70	1	起伏あり	ゆるやか		第 47 図
47	B 3 $\begin{smallmatrix} d \\ d \\ d \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 5 \\ 6 \\ 6 \end{smallmatrix}$	0.68×0.36	楕 円 形	N-60° E	85	0	平 坦	袋 状		第 47 図
48	B 3 c 2	1.45×0.83	不整楕円形	N-62° E	40	0	坂状平坦	ゆるやか		第 47 図
49	B 3 $\begin{smallmatrix} c \\ d \\ d \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 2 \\ 2 \\ 2 \end{smallmatrix}$	2.05×1.33	不整楕円形	N-8° E	49	0	水平平坦	垂 直		第 45 図
52	B 3 c 3	1.21×1.04	不整楕円形	N-47° E	82	0	坂状平坦	ゆるやか		第 48 図
53	B 3 c 3	1.66×0.99	長楕円形	N-90° W	70	0	坂状平坦	ゆるやか		第 48 図
54	B 3 $\begin{smallmatrix} b \\ c \\ c \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 4 \\ 4 \\ 4 \end{smallmatrix}$	2.43×0.84	不 定 形	N-39° E	72	1	起伏あり	ゆるやか		第 49 図
55	B 3 $\begin{smallmatrix} c^5 \cdot c^6 \\ d^5 \cdot d^6 \end{smallmatrix}$	1.36×1.18	不整楕円形	N-2° E	82	0	起伏あり	垂 直		第 47 図
56	B 3 $\begin{smallmatrix} c \\ c \\ c \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 5 \\ 6 \\ 6 \end{smallmatrix}$	1.93×0.69	長楕円形	N-56° E	99	0	平 坦	袋 状		第 47 図
57	B 3 c 4	1.02×0.61	楕 円 形	N-17° E	73	0	起伏あり	垂 直		第 49 図
58	B 3 $\begin{smallmatrix} b \\ c \\ c \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 3 \\ 3 \\ 3 \end{smallmatrix}$	2.73×1.87	不整楕円形	N-11° W	55	1	水平平坦	垂 直		第 48 図
58 A	B 3 $\begin{smallmatrix} b \\ c \\ c \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 3 \\ 3 \\ 3 \end{smallmatrix}$	3.03×2.28	不整楕円形	N-16° E	42	3	起伏あり	段 状		第 48 図
59	B 3 b 3	2.42×1.63	不整楕円形	N-40° E	65	1	起伏あり	ゆるやか		第 48 図
60	B 3 $\begin{smallmatrix} d \\ d \\ d \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 5 \\ 6 \\ 6 \end{smallmatrix}$	0.90×0.85	円 形	N-21° W	75	0	水平平坦	段 状		第 47 図
61	B 3 $\begin{smallmatrix} b \\ c \\ c \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 4 \\ 4 \\ 4 \end{smallmatrix}$	2.63×1.47	不 定 形	N-38° E	73	2	起伏あり	ゆるやか		第 49 図
62	B 3 $\begin{smallmatrix} d \\ d \\ d \end{smallmatrix} \begin{smallmatrix} 2 \\ 3 \\ 3 \end{smallmatrix}$	3.67×1.06	不 整 長 楕 円 形	N-78° W	82	0	起伏あり	ゆるやか		第 46 図
63	B 3 c 1	1.09×0.97	不 整 円 形	N-85° E	105	0	起伏あり	袋 状		第 48 図
64	B 3 c 4	2.32×1.11	不 定 形	N-7° W	86	0	起伏あり	袋 状		第 49 図
65	B 3 c 4	2.99×2.33	不 定 形	N-7° W	83	0	起伏あり	垂 直		第 49 図
66	B 3 c 4	2.81×0.50	長楕円形	N-72° E	69	0	水平平坦	ゆるやか		第 49 図
67	B 3 c 4	1.40×0.88	楕 円 形	N-90° W	70	0	起伏あり	垂 直		第 49 図
68	B 2 i 5	1.76×1.36	不 定 形	N-65° E	38	2	坂状平坦	ゆるやか		第 48 図



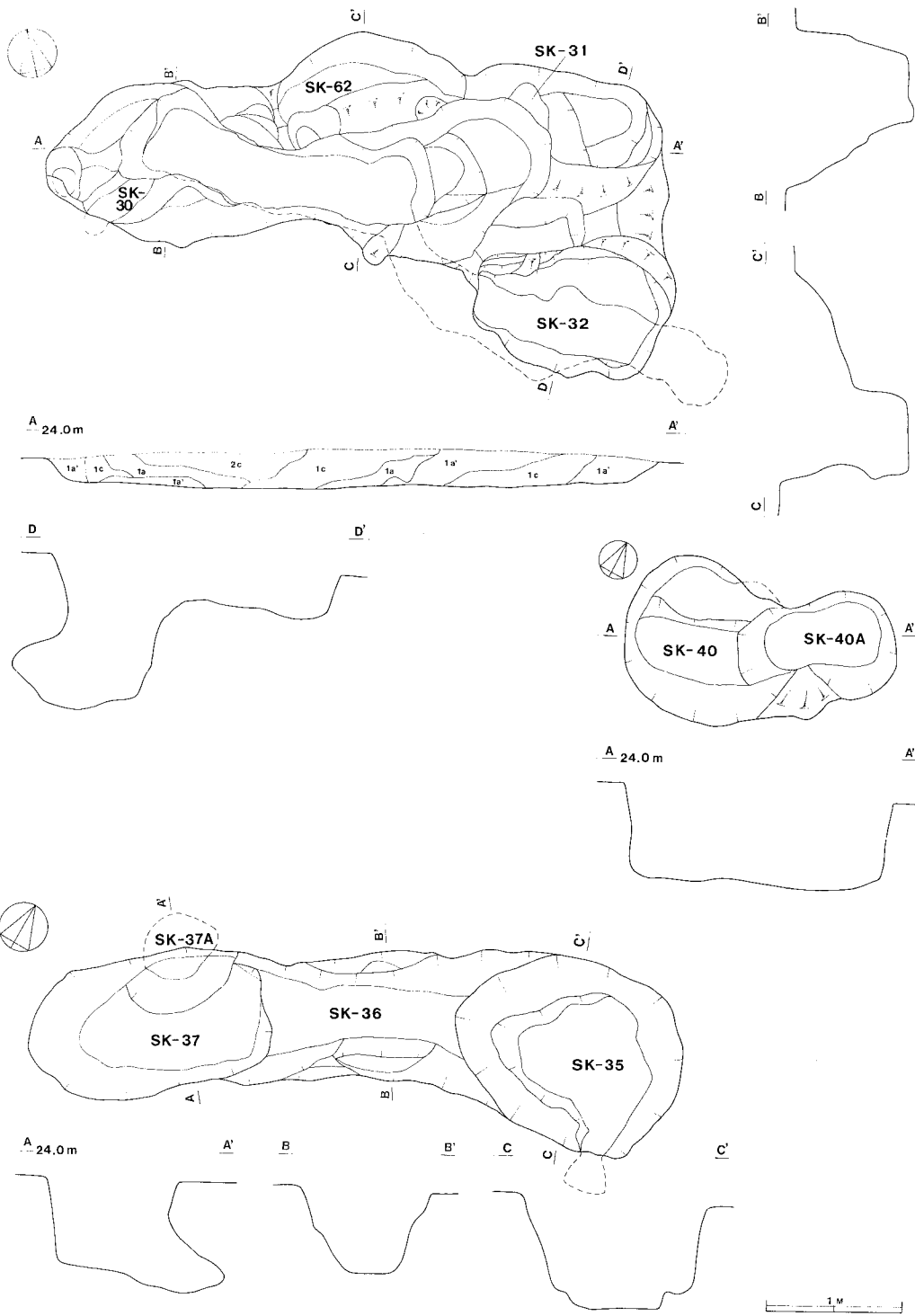
第43図 土 壤 実 測 図



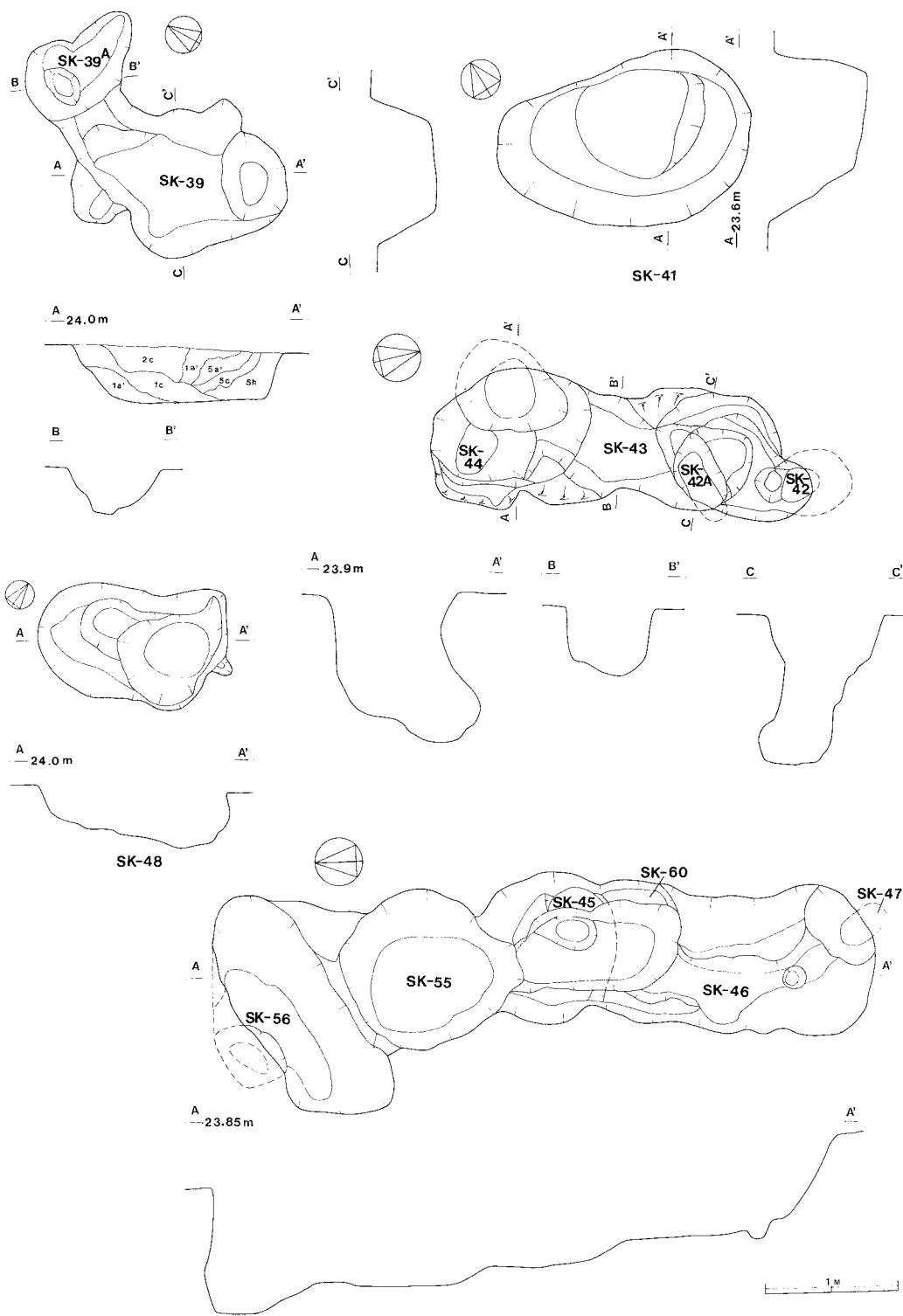
第44图 土壤实测图



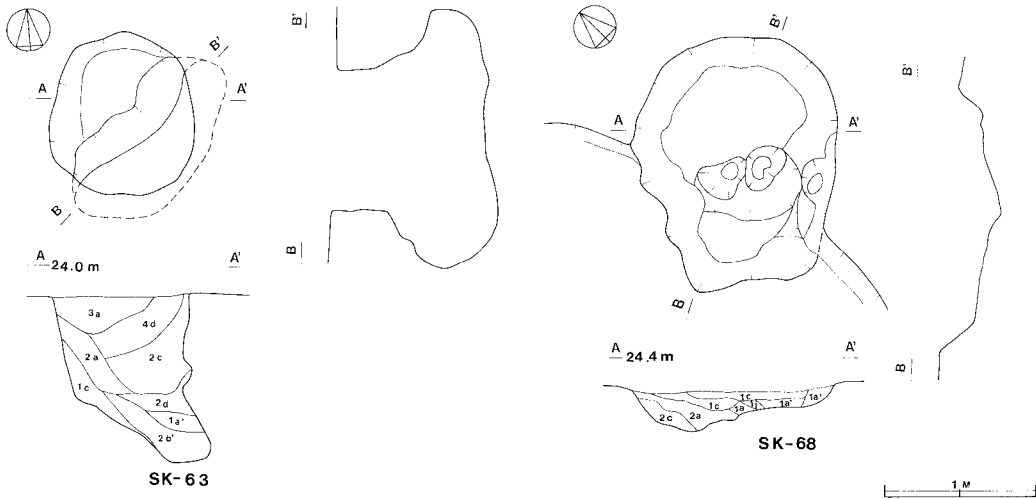
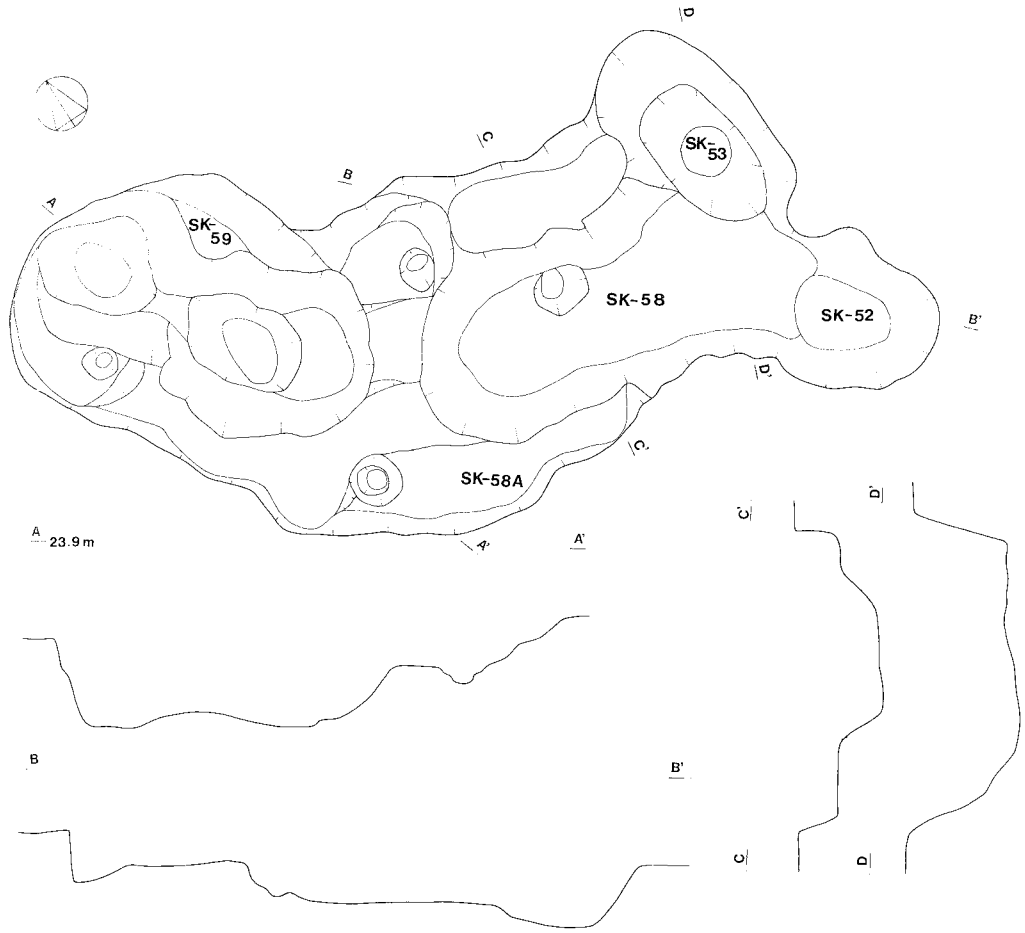
第45图 土壤实测图



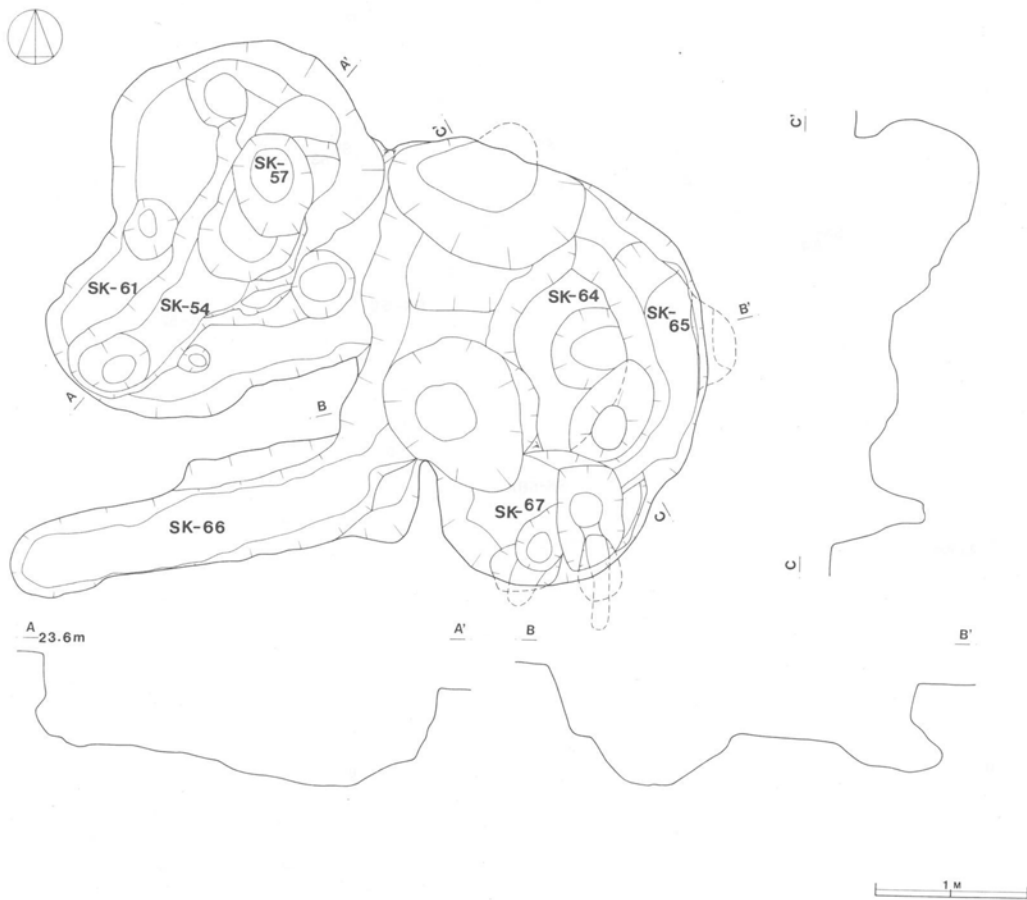
第46図 土 壤 実 測 図



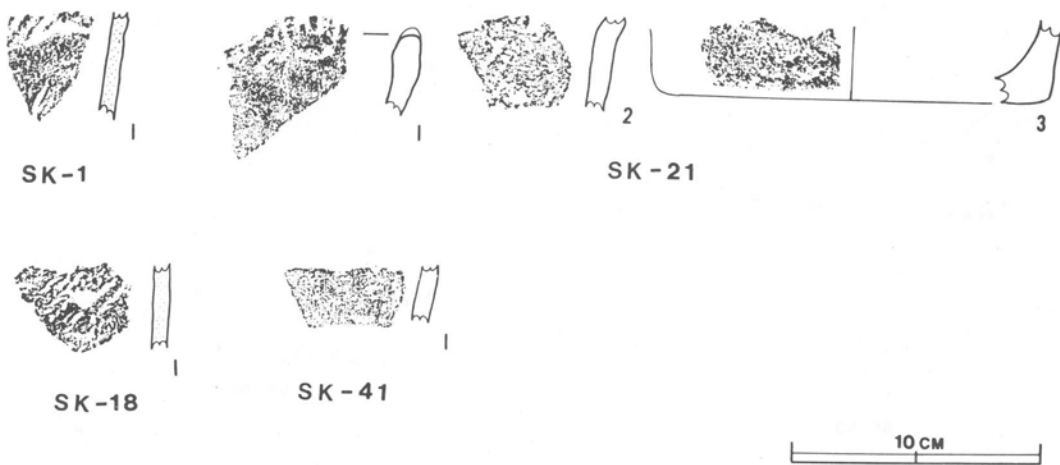
第47図 土 壤 実 測 図



第48図 土 壤 実 測 図

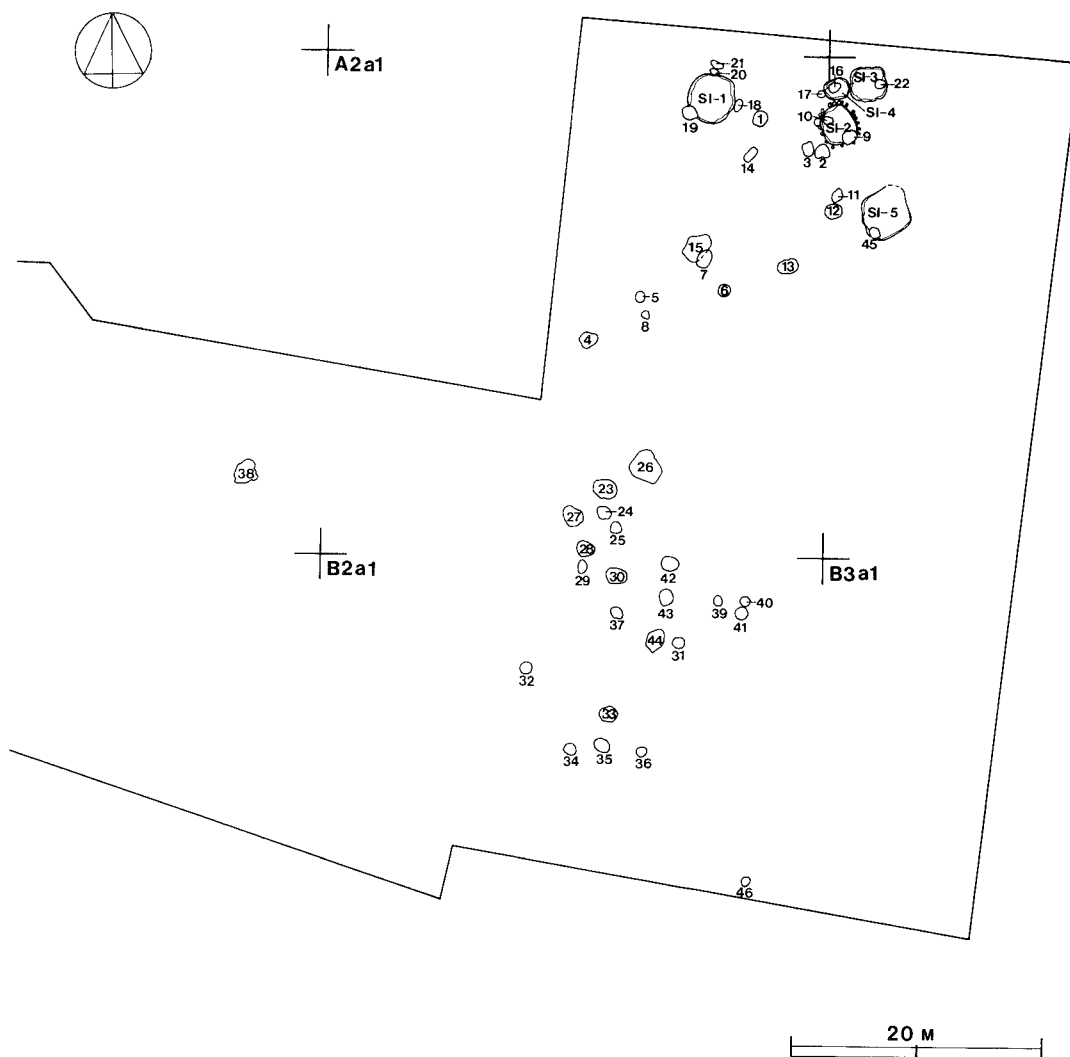


第49図 土 壙 実 測 図



第50図 土 壙 出 土 土 器 拓 影 図

第4節 大谷津B遺跡



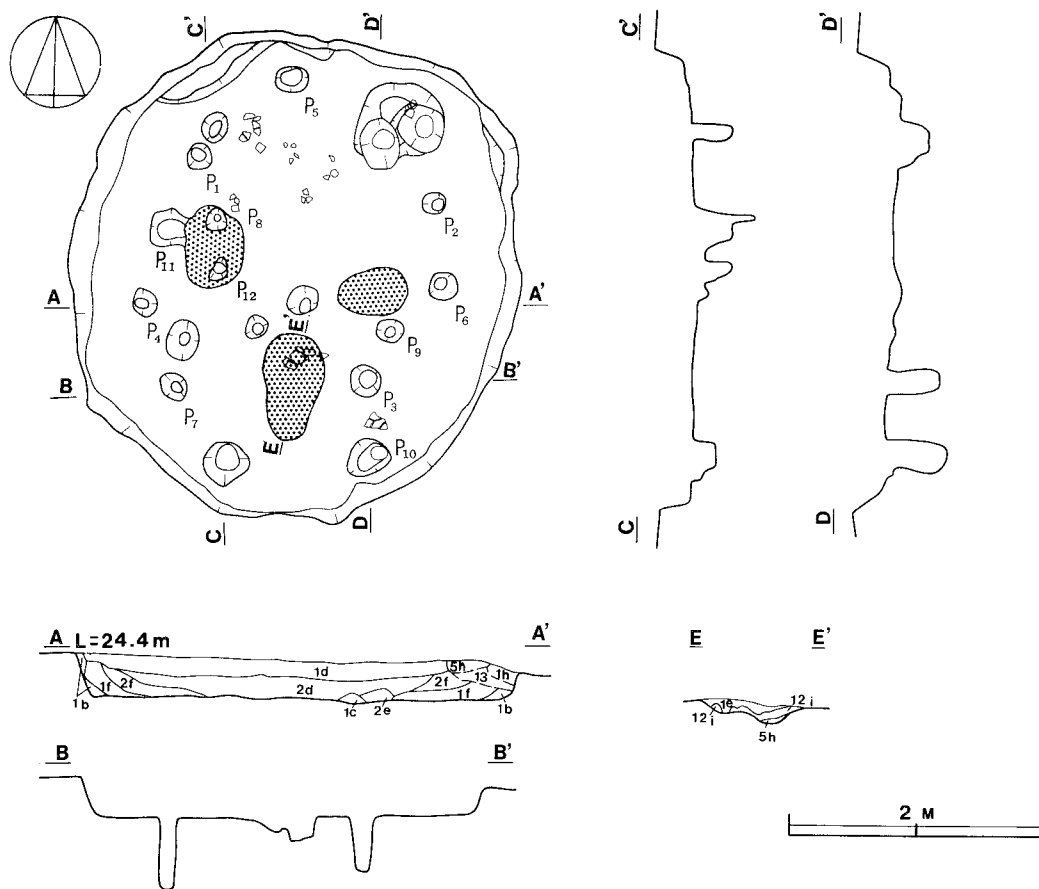
第51図 大谷津B遺跡遺構配置図

1 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第52図)

本住居跡はA2a8調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北端部に位置し、南西側が19号土塼と重複しており、北側に20・21号土塼、東側に18号土塼が隣接して存在する。

平面形状は、直径3.7m 前後のほぼ円形を呈している。壁高は北側と南側で25cm、東側で20cm、西側はやや高く35cmを測る。壁はしっかりしており、ほぼ垂直に立ちあがっている。床はトレンチャーによる攪乱をうけて遺存状態は良くないが、ローム面を約35cm程掘りこみ、踏み固めたものと推考される。床面は中央がやや低くなっている。また、北西側が約4cm高くなっている。炉跡は3か所検出され、便宜上、南壁に近い方をF₁号、西壁に近い方をF₂号、東壁に近い方をF₃号と仮称しておく。F₁号は長径83cm・短径45cmの楕円形を呈し、床面を約10cm掘り窪めた地床炉である。F₂号は長径65cm・短径48cmの楕円形を呈し、床面を約9cm掘り窪めた地床炉である。F₃号は長径56cm・短径38cmの楕円形を呈し、床面を約9cm掘り窪めた地床炉である。いずれも焼土粒子・焼土ブロックを含み炉床は焼けている。F₂号はP₁₁を切断し、P₈・P₁₂に切断されているので、明らかにP₁₁よりは新しく、P₈・P₁₂よりは古い時期のものであることを示している。ピットの



第52図 第1号住居跡実測図

配列や大きさに規則性はないが、多くのピットが認められるので、これらは増築や建て替え等に伴ったものと思われ、本住居跡がかなりの期間使用されたものであることをうかがわせる。これらピットのうち、位置や形状・深さからみて、P1～P10が主柱穴と思われ、深さは40～66cmと深い。住居跡内の覆土は、色調から大きく2層に区分したが、土器片の編年の層準は示さず、各土層とも各時期の遺物が混在している。上層と壁際に褐色土、下層に暗褐色土が堆積しており、ローム粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含み、全体的にサラサラしていて締りがない。幅12cmぐらいのトレンチャー溝の攪乱が40cm間隔で東西に走っており、覆土から床面にまで至っている。

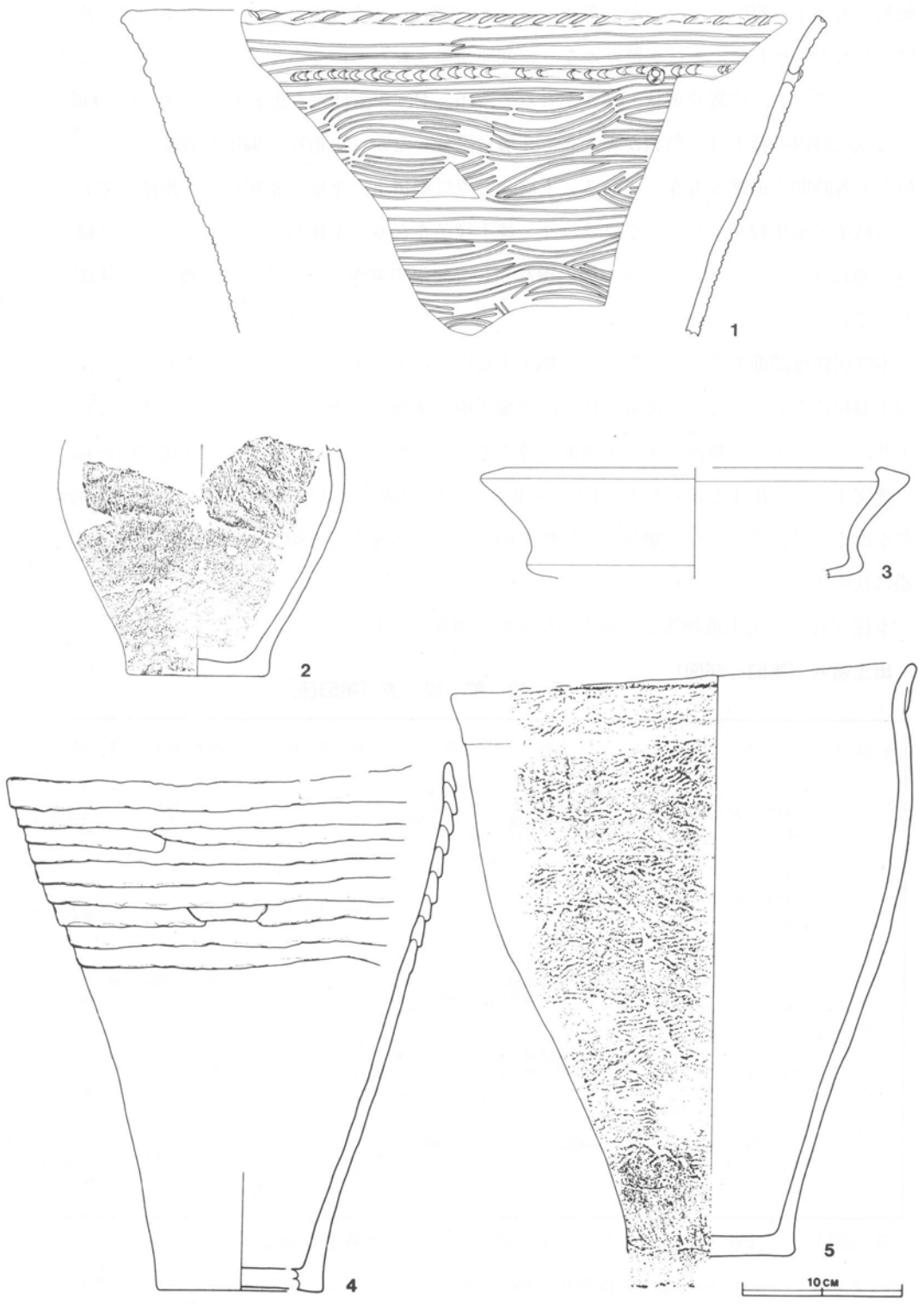
本住居跡確認面からはおびただしい縄文土器片の出土があった。これらの在り方から、これらの土器片のうち、かなりの部分が住居跡の覆土中や床面に包含されていたものと考えられる。つまり、トレンチャー攪乱によって表面に浮きあがったものであろう。また、住居跡内からも多量の縄文土器片の出土がみられた。F1上・南壁下・P1付近・ほぼ中央部の床面真上から深鉢形土器が出土している。これら確認面や住居跡内からの土器をみると縄文前期の浮島式や諸磯式の土器に比定される。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第53～56図) 出土遺物解説表 (第53図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-1	1	深鉢形土器 (縄文)	A (43.6) B 19.9	口唇部一キザミ。口一平行沈線文、その上に微隆帯をもうけ、更にその上に爪形文を施している。頸一平行沈線文、弧状文。孔1有す。	内面一ヘラミガキ	良好・砂粒・橙スコリア	口縁部30% 第53図-1
	2	深鉢形土器 (縄文)	B 14.0 C 8.8	胴上半一貝殻文。	内面一摩滅きみ	普通・砂粒・橙	底部50% 第53図-2
	3	鉢形土器 (縄文)	A (26.4) B 6.7	口一頸部から外反して立ちあがる。口唇部一器厚を増しフラット。頸一外に強く張り出し、稜をつくる。	内面一ナデ 外面一ヘラミガキ	普通・砂礫・灰褐スコリア	10% 第53図-3
	4	深鉢形土器 (縄文)	A 27.6 B 33.2 C (10.2)	口一頸一輪積痕を残し、その上に指頭痕。胴一無文。	内面一摩滅が激しい 外面一ヘラミガキ 胴下半部一ヘラミガキ	軟弱・砂粒・橙スコリア	80% 第53図-4
	5	深鉢形土器 (縄文)	A 28.8 B 37.2 C 10.4	口一輪積痕。口一胴・中一縄文を地文に、その上に「S」字状結節文。	内面一ヘラミガキ	普通・砂粒・橙スコリア	80% 第53図-5

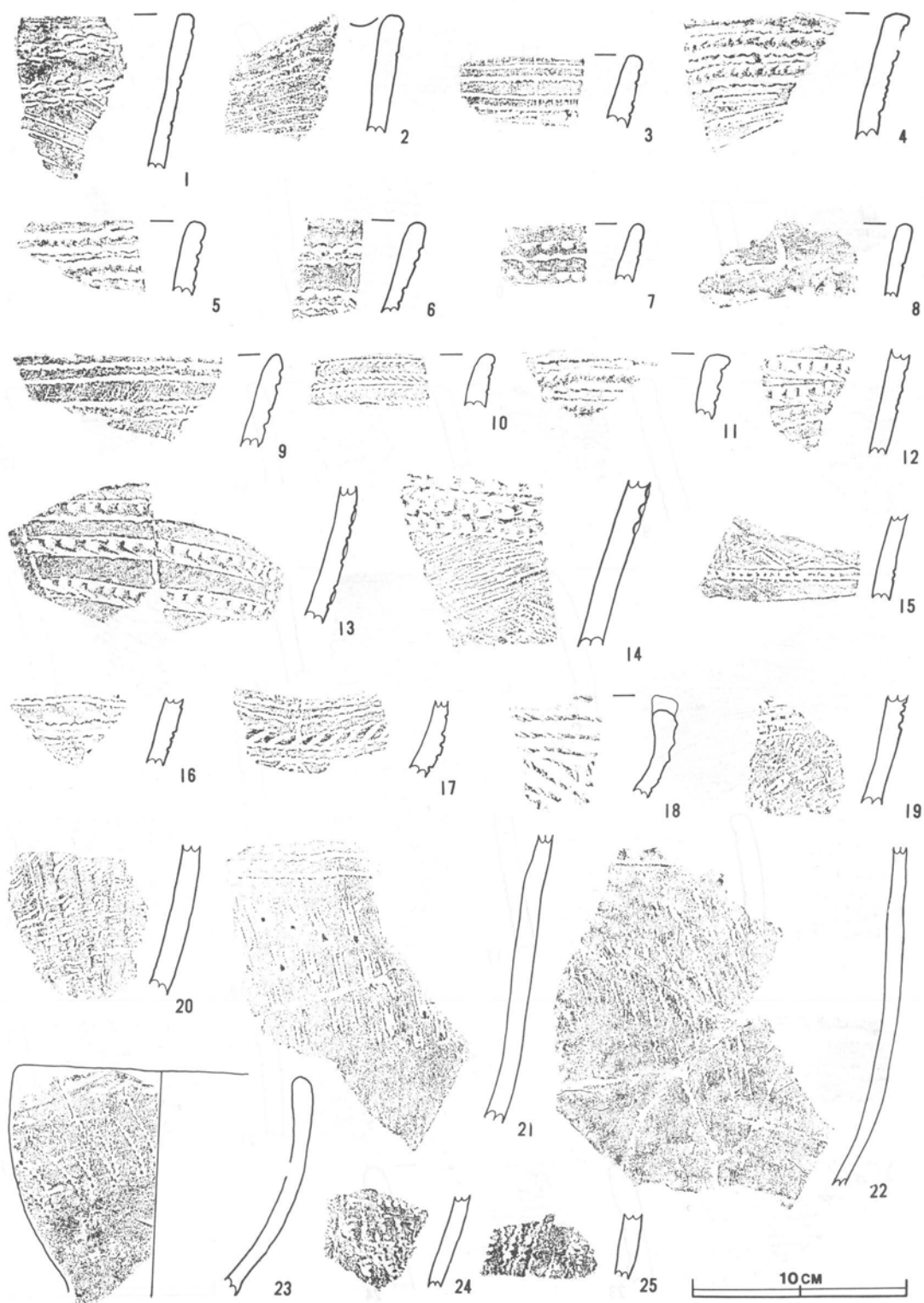
第54図1・2は胎土に繊維を含み、1は格子目文、2は縄文が施文されている。3～22は平行沈線文を横引き・斜行・弧状・鋸歯状に施文している。23・24と第55図1～9は変形爪形文、10～14は連続爪形文を施している。15は幅の狭い有節沈線文、16・17は変形爪形文を有し、18は浮線文の上にキザミ、19は変形爪形文、20・21はヘラ状具による刺突文を施している。22～25と第



第53图 第1号住居跡出土遺物実測図

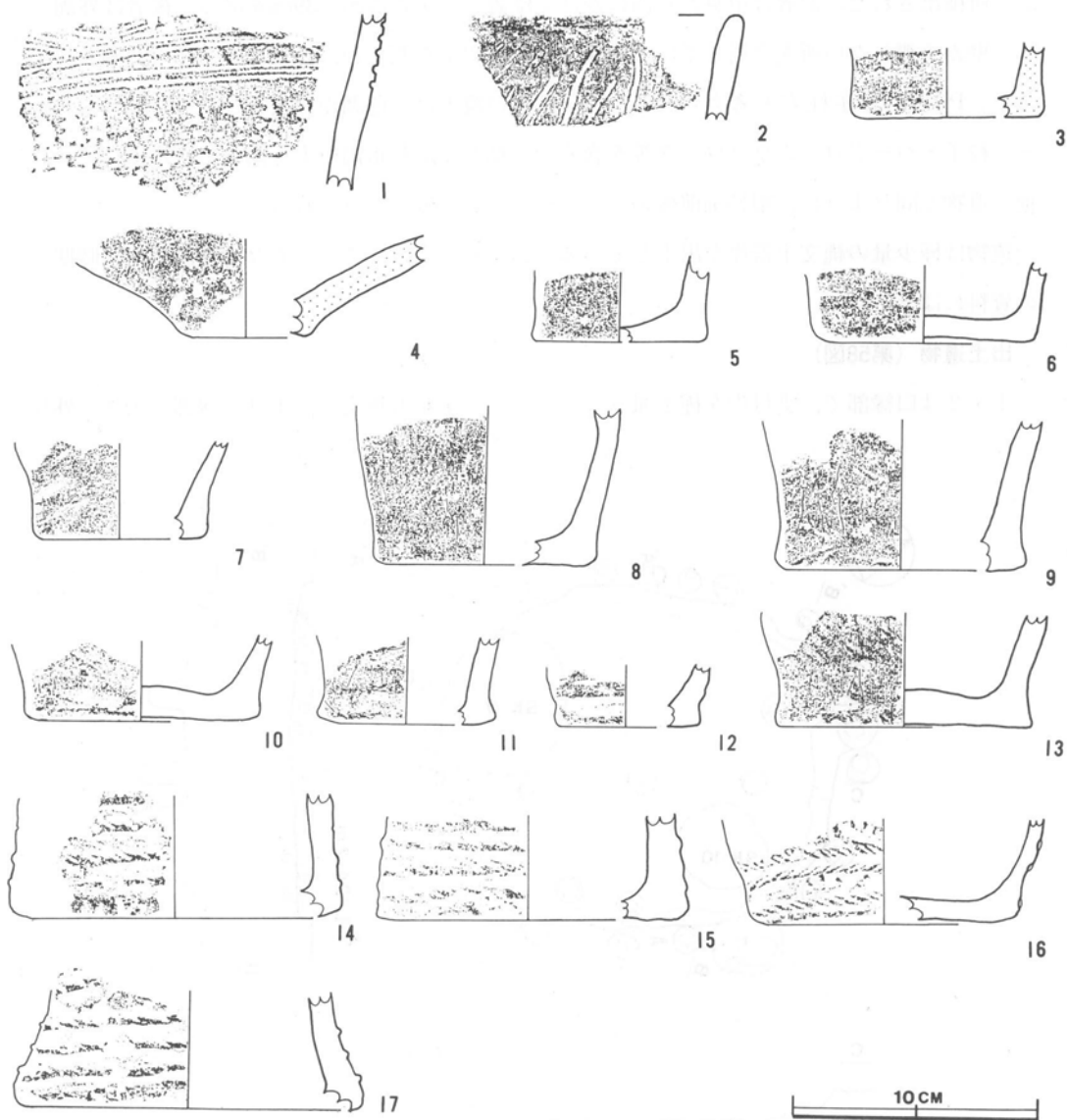


第54图 第1号住居跡出土土器拓影图



第55图 第1号住居跡出土土器拓影图

56図1は貝殻文を施文している。第56図2は太い撚糸文を施している。3～17は底部片、3・4は胎土に繊維を含み、14～17は胴下半部に浮線文を施し、ヘラ状具によるキザミと回転をその上に加えている。



第56図 第1号住居跡出土土器拓影図

第2号住居跡 (第57図)

本住居跡はA3b₁調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北東部に位置し、南東側が9号土壙、北西側が10号土壙と重複しており、北側に4号住居跡、南西側に2号土壙が隣接して存在する。

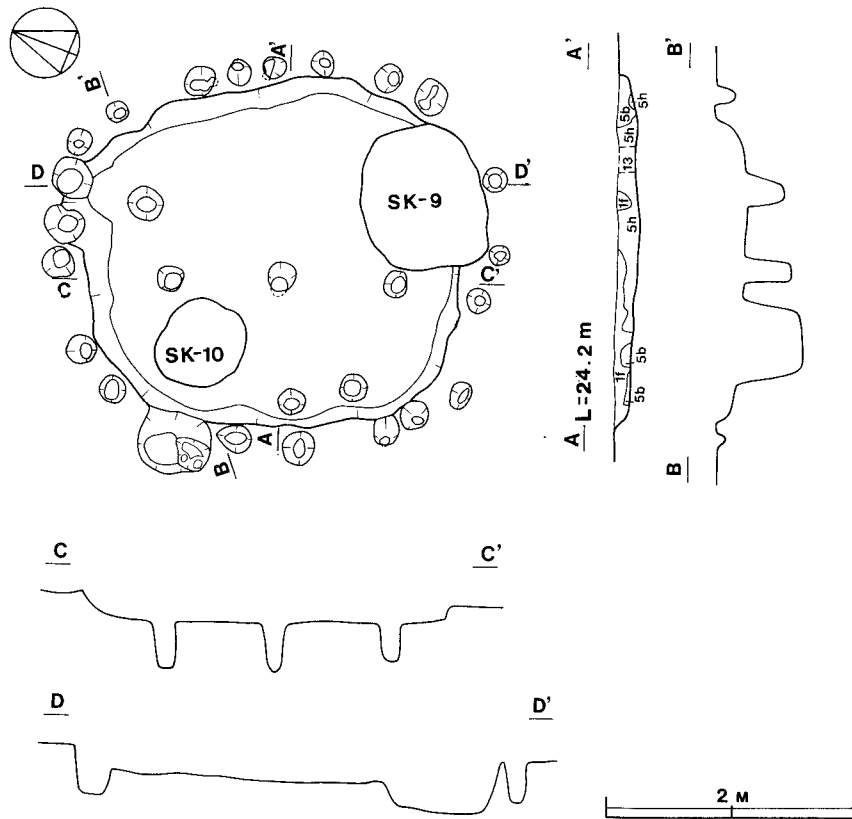
長径方向はN-30°-Wを指し、長径3m・短径2.65mの北側の一部がやや外にはり出した楕円

形状を呈している。壁高は北側が20cm弱、西側と南側が12cm前後、東側がやや高く25cmを測り、北壁はややゆるやかだが、その他は70°~80°の角度で外傾して立ちあがる。床面は東に向かってゆるやかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。炉は有さない。ピットは住居跡内に6か所、屋外に23か所検出された。前者は中央から西にかけて位置し、深さは20~39cmを測る。後者は外周に沿って壁から離れない所を全周している。深さは8~42cmを測るが、ほとんどが15~35cmと比較的浅い。P₁~P₉は支柱穴と考えられる。住居跡内の覆土は、色調から大きく2層に分けられ、ローム粒子・ハードローム小ブロック等を含みや粘性に富む暗褐色土と褐色土が堆積している。他の遺物と同じように、幅15cm前後のトレンチャー溝の攪乱がみられる。

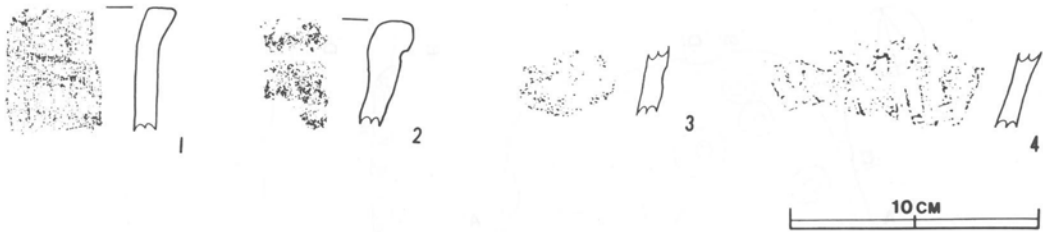
遺物は極少量の縄文土器片が出土している。いずれも小破片でしかも摩滅が激しく、時期決定の資料には乏しい。

出土遺物 (第58図)

1・2は口縁部で、雲母片を極少量含んでいる。いずれも無文で、1は口縁部が大きく外反し



第57図 第2号住居跡実測図



第58図 第2号住居跡出土土器拓影図

ており、2はヘラ状具を横引きしている。3も雲母片を極少量含み、同じ方向からヘラ状具による圧痕を残している。4は胴部であるが、摩滅していて不明瞭である。

第3号住居跡 (第59図)

本住居跡はA3a1調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北東端に位置し、東側が22号土壙と重複しており、西側に4号住居跡が隣接して存在する。

主軸方向はN-90°を指し、長軸2.9m・短軸2.7mの外周がやや蛇行している隅丸方形を呈している。壁高は北側が15cmとやや高く、他は10cm前後を測り、壁はなだらかに外傾して立ちあがっている。床面は小さな凹凸がみられ、中央部が5cmぐらい低くなっている。炉は有さない。ピットは中央と西側に8か所検出され、径26~37cm、深さ25~57cmを測る。掘り口は広く、先端部は急に細くなる。支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土が堆積しているが、人為的に埋め戻されているようだ。やはり、本住居跡も覆土中から床面に至るまでトレンチャー溝による攪乱をうけている。

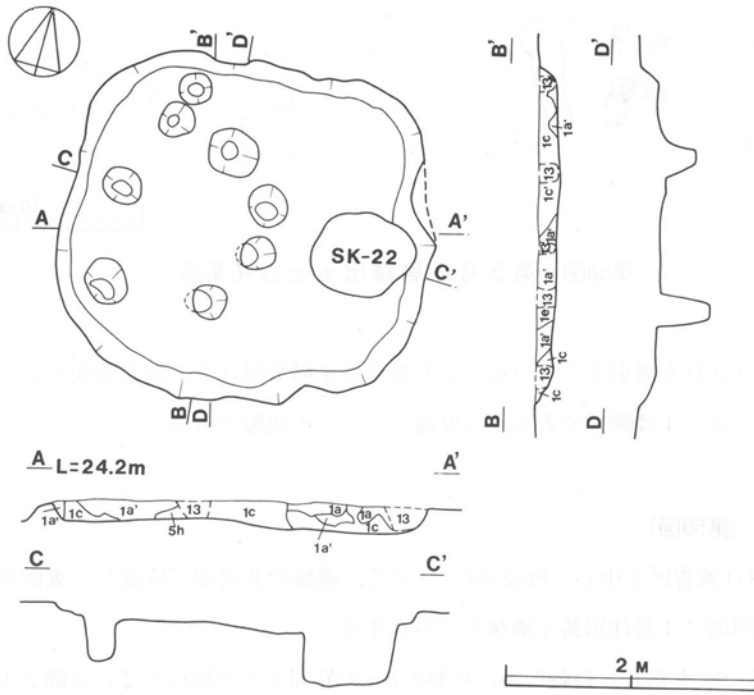
遺物は極少量の縄文土器片が床面上から出土している。時期決定の資料には乏しいが、縄文前期後半の住居跡と考えられる。

出土遺物 (第60図)

1は波状口縁を呈し、無文で突起部にキザミ目を施している。ヘラナデがみられる。2は三角形の微隆帯を貼付し、さらに有節沈線文が施文されている。3~5は沈線文系の土器で、4は頸部と胴部を区画するために、変形爪形文を施文している。地文に貝殻文を有する。5は胴部には貝殻文を施文している。6~9は胴部で、文様構成は貝殻文である。3~9は浮島式に比定される土器である。

第4号住居跡 (第61図)

本住居跡はA3a1調査区を中心に確認されたもので、16号土壙と重複しており、東側に3号住居跡、西側に17号土壙が隣接して存在する。



第59図 第3号住居跡実測図



第60図 第3号住居跡出土土器拓影図

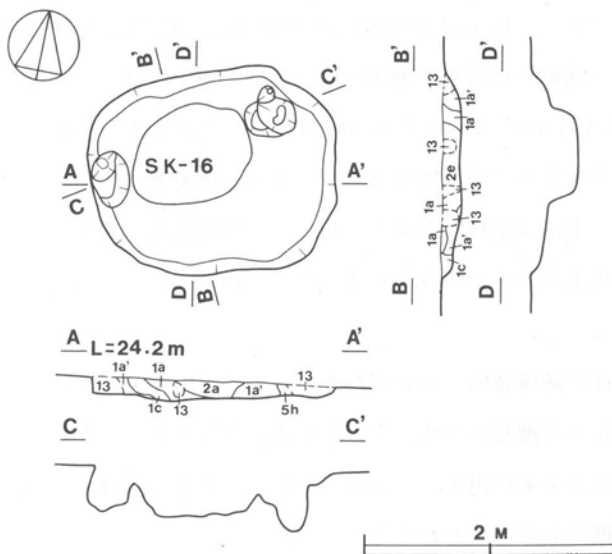
小竪穴状遺構とも考えられるが、長径1.9m・短径1.6mと規模の小さい楕円形を呈している。壁高は10～13cm程で、壁はなだらかに外傾して立ちあがっている。床面は皿状をなし、16号土層をはさむように北壁下に小ピットを有するが、どちらも木の根による攪乱ピットであろう。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土が堆積しているが、やはりトレンチャーによる攪乱をうけている。

遺物は16号土層の位置する上から縄文土器片が数点出土しているだけで、しかも覆土中からの

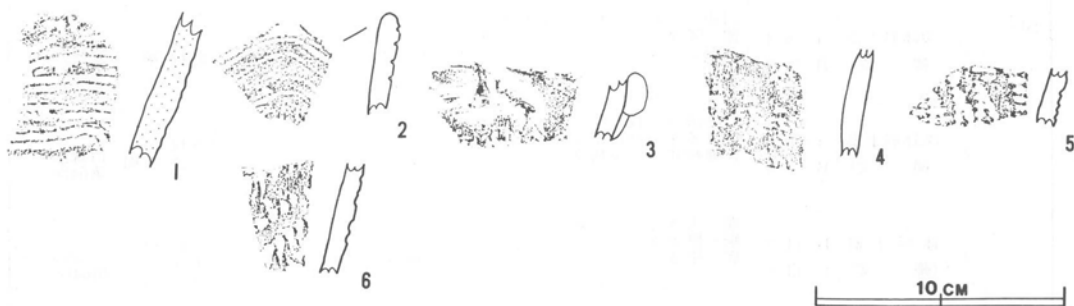
ものであり、本遺構の時期等は不明である。

出土遺物 (第62図)

1は多量の繊維を含み、付加条縄文が施文されている。2は波状口縁を呈し、幅の狭い連続爪形文を口縁に沿って施文している。3は微隆帯を貼付し、その上に指頭痕が認められる。4～6は胴部で、貝殻によるジグザグ波状文を有している。系式的には、1は黒浜式、2・3は諸磯式、4～6は浮島式に並行関係を有するものと考えられる。



第61図 第4号住居跡実測図



第62図 第4号住居跡出土土器拓影図

第5号住居跡 (第63図)

本住居跡はA3d₂調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北東端に位置し、南西コーナーが45号土壌と重複しており、西側1.6mのところには11・12号土壌が存在する。

主軸方向はN-28°-Wを指し、長・短軸約3.7mの南北対角線が長い菱形に似た隅丸形状を呈している。覆土中から床面に至るまで、ほぼ東西方向に幅20cm前後のトレンチャー溝による攪乱が50cm間隔にあり、壁・床面とも明瞭でない。特に南側コーナー付近は不明瞭である。残存壁高は10～13cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は小さな起伏が多く凸凹している。この住居跡は増築や建て替えが行われたようで、内側に床面が約10cm低い長・短軸2.5m程の隅丸形状の小さな遺構が確認されている。炉跡は中央より南西側に2か所検出さ

れ、便宜上、P₁₁に切断されている炉跡をF₁号、45号土壌のすぐ北側に位置する炉跡をF₂号と仮称しておく。F₁号は長径30cm・短径21cm、F₂号は長径35cm・短径28cmのいずれも床面を10cm前後掘り窪めた楕円形の地床炉で、多量の焼土ブロック・焼土粒子を含み炉床は硬く焼けている。F₁号は明らかにP₁₁より古い時期のものであることを示している。ピットも数多く検出されたが、配列や大きさに規則性はなく、いずれも増築等に伴って掘られたものであろう。大きさや深さからP₁～P₁₀は支柱穴と考えられよう。住居跡内の覆土は、ほとんどが褐色土の堆積で、中央部に暗褐色土がわずかにみられる。ローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を含み締りがある。

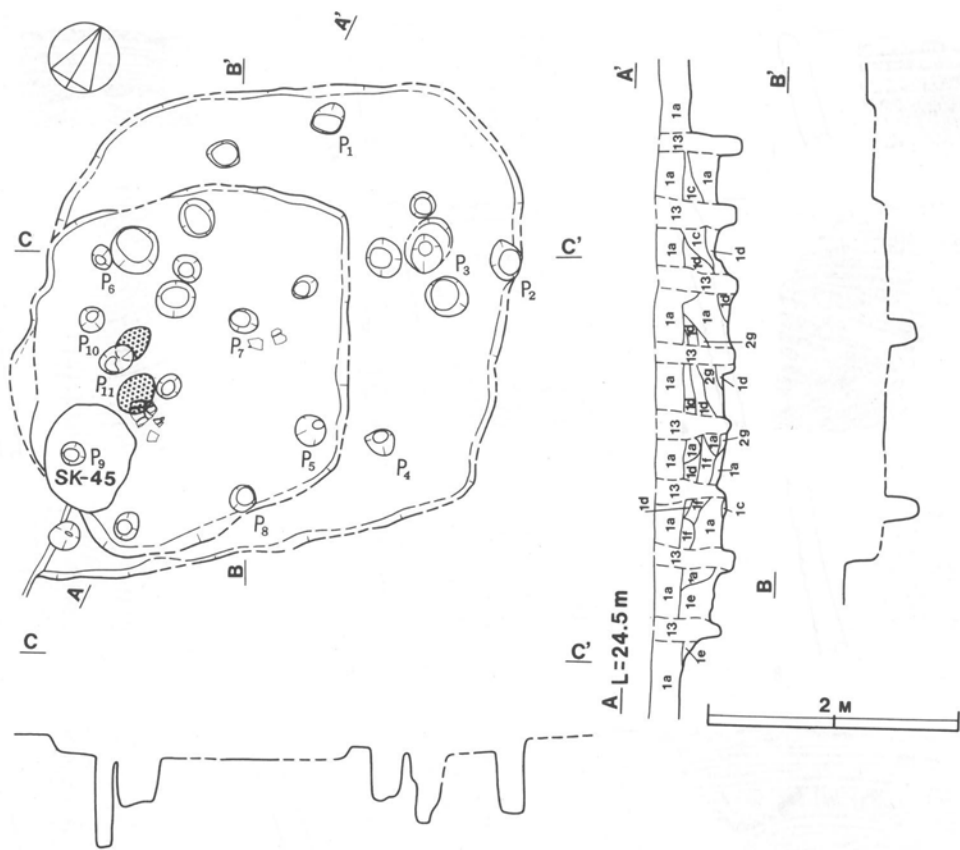
本住居跡確認面からおびたしい土器片の検出があった。やはり第1号住居跡と同様トレンチャーによる攪乱のため、土器片が表面に浮きあがったものであろう。覆土中や床面から前期縄文土器片が多量に出土している。それらの土器は諸磯式や浮島式に比定されるもので、本住居跡も同時期のものと思われる。

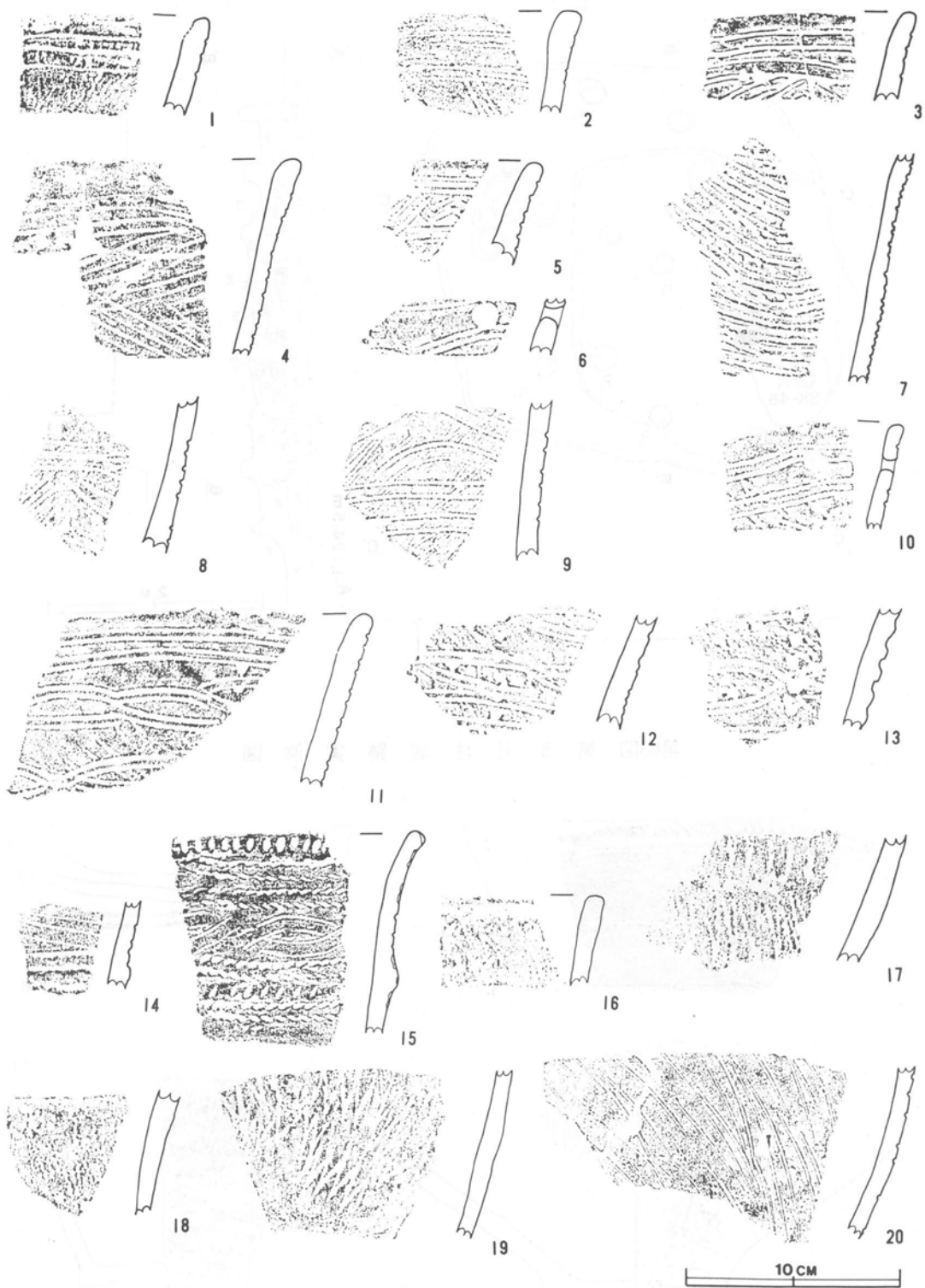
出土遺物 (第64～66図)

出土遺物解説表 (第64図)

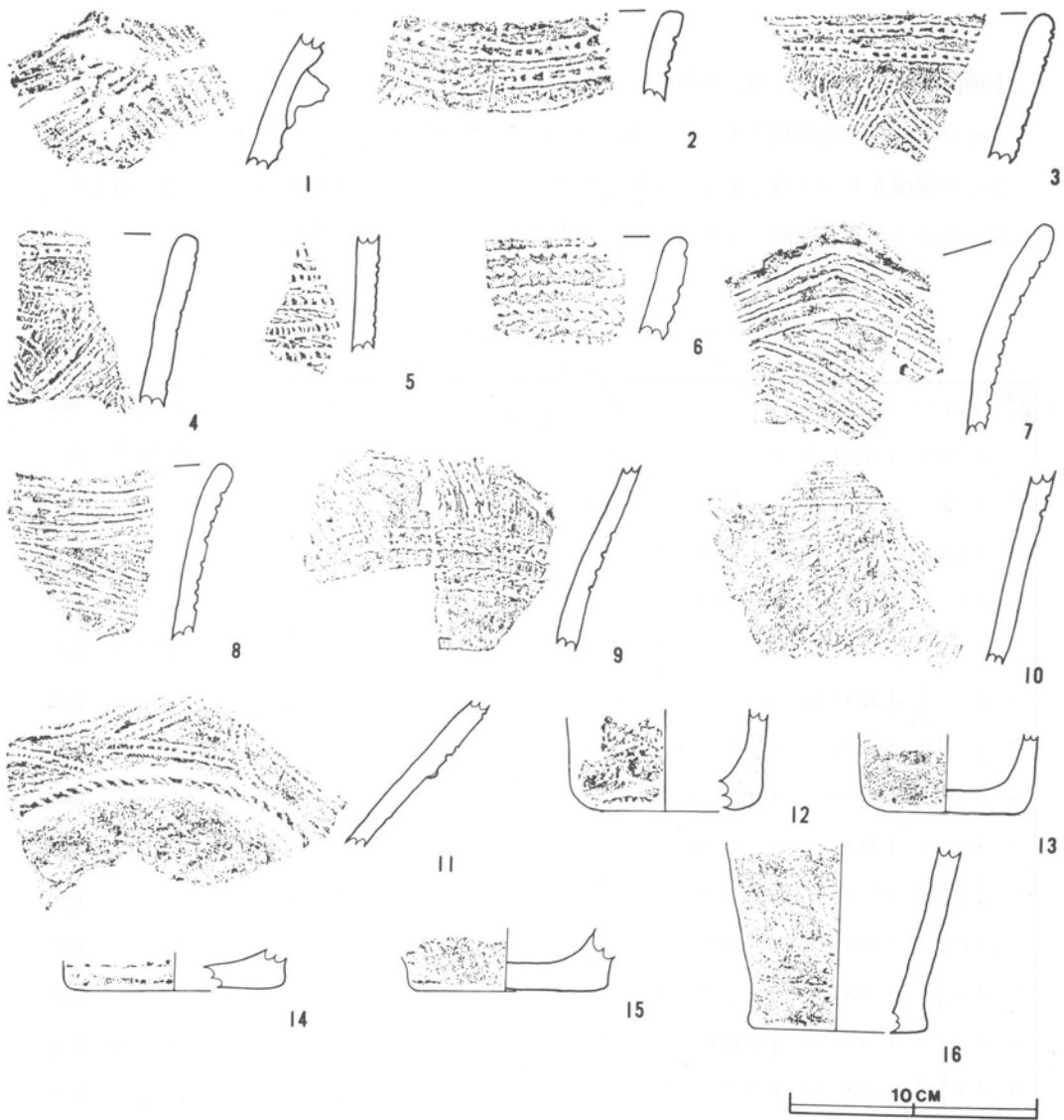
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-5	1	深鉢形土器 (縄文)	A (26.4) B 10.8	口辺一キザミ。!!-連続爪形文 頸一隆帯をつけ、その上下に連続 爪形文。	内面一ヘラナデ	普通・砂粒・褐	口縁部10% 第64図-1
	2	深鉢形土器 (縄文)	A (20.8) B 6.8	口一波状口縁を呈し、半截竹管具 による平行沈線文を施し、その上 に連続爪形文を施文。	内面一ナデ	普通・砂粒・にぶ スコイ褐 リア	口縁部30% 第64図-2
	3	鉢形土器 (縄文)	B 11.2 C 11.5	頸一大きく膨らみ刺突文。 胸一擦糸文。 底一平底。	内面一ナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア	35% 第64図-3
	4	深鉢形土器 (縄文)	B 14.2 C 10.6	胸上半一貝殻文。	内面一ナデ	良好・砂粒・橙 長石	底部90% 第64図-4

第65図1～13は平行沈線文を横引き・斜行・鋸歯状・弧状に施文している。6は穿孔。8～12は擦糸文、13は貝殻文をそれぞれ地文に有す。14は変形爪形文、15は連続爪形文を有している。16～19は貝殻文を施し、20は沈線文を多条に斜行させている。第66図1～11は諸磯式土器に比定される。1は突起部にキザミを施し、上から円形文を押捺している。2～4は有節沈線文を配し、5・6・9・10は連続爪形文、7・8は変形爪形文を有している。11は細隆起線文の上にキザミを施し、半截竹管具による沈線の三角形状文と弧状合子文を組合わせて文様を構成している。12～16は底部で、12は胎土に繊維を含んでいる。





第65图 第5号住居跡出土土器拓影图



第66图 第5号住居跡出土土器拓影图

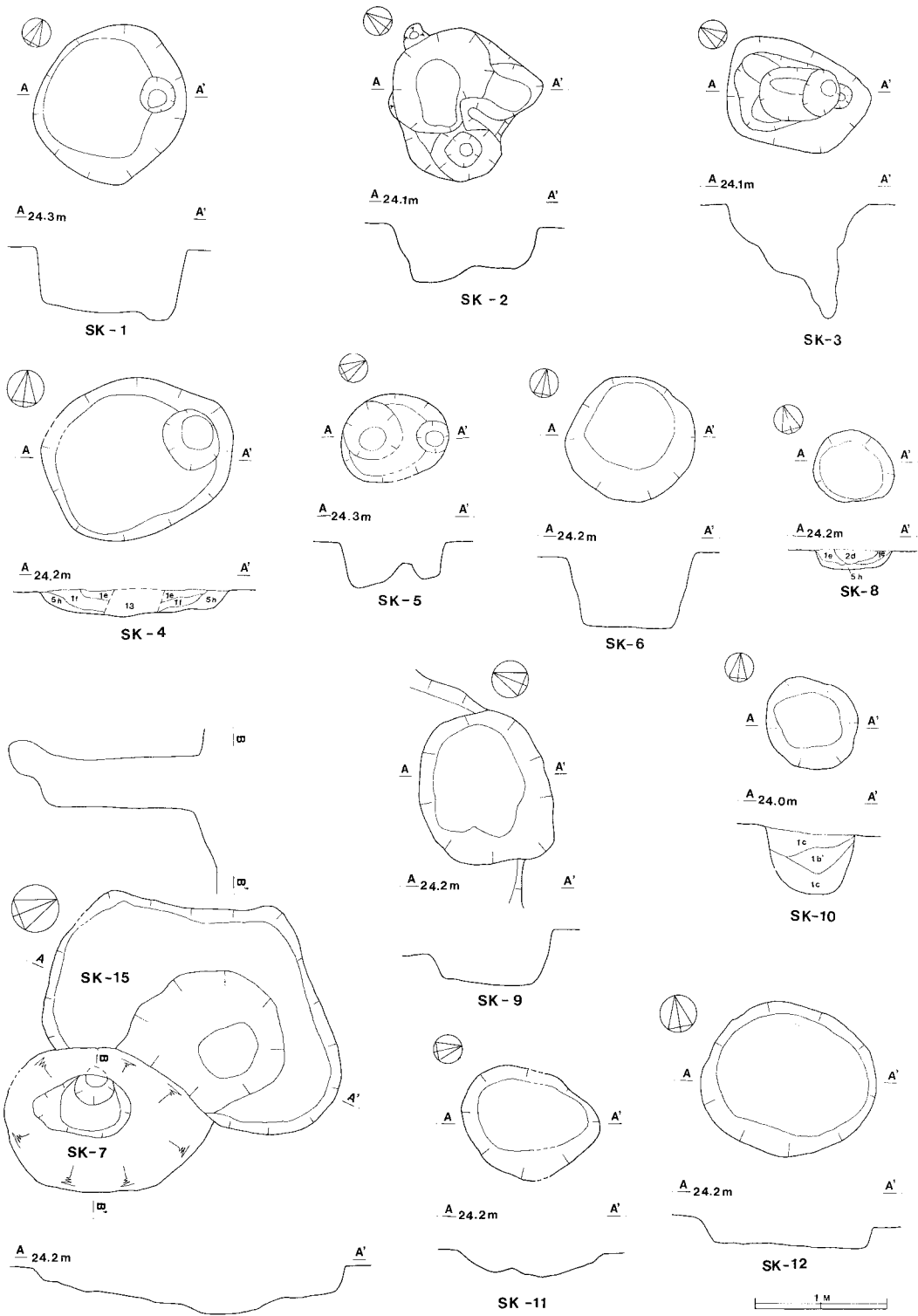
2 土壌

本遺跡で検出された土壌は46基で、遺跡の北東側と中央よりやや東側の位置に集中している。径1mに満たない小規模のものが15基、径2mを越す大規模のものが3基で、ほとんどが長径1～2mの規模をもつ土壌である。遺物の出土がみられたのは12土壌あったが、出土量も少なく小破片が多かった。時期的には縄文時代の前期から中期にかけての土器片である。

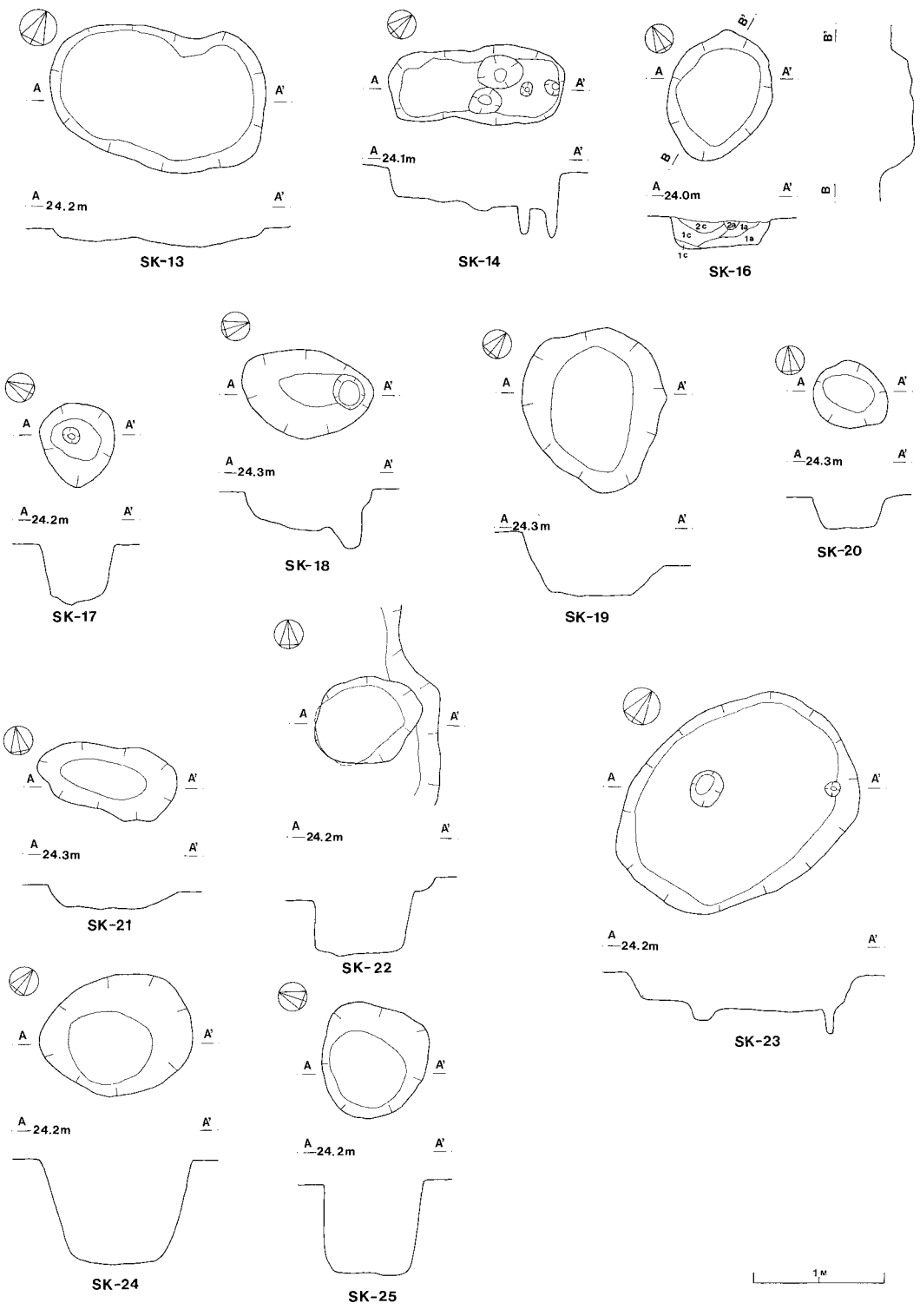
土壌一覧表

土壌番号	調査区	規模(m)	形状	長径方向	深さ(cm)	ピット数	底面	壁面	出土遺物(時期)	関連図版
1	A 2 b 9	1.20×1.10	円形	N-10°-E	49	1	水平 平坦	垂直	縄文土器片極少量 (黒浜, 浮島)	第67・71図
2	A 2 b 0	1.17×1.14	不定形	N-53°-E	41	1	起伏あり	ゆるやか		第67図
3	A 2 b 0	1.05×0.80	隅丸方形	N-11°-W	50	1	皿状	段状		第67図
4	A 2 f 6	1.45×1.20	不整楕円形	N-65°-E	22	1	水平 平坦	ゆるやか		第67図
5	A 2 e 7	0.80×0.65	楕円形	N-30°-E	23	2	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片極少量 (浮島, 阿玉台)	第67・71図
6	A 2 e 8	1.00×0.95	円形	N-72°-E	57	0	水平 平坦	ゆるやか		第67図
7	A 2 d 8	1.60×1.10	楕円形	N-23°-E	139	1	起伏あり	段状	縄文土器片多量 (阿玉台)	第67・71図
8	A 2 f 7	0.60×0.55	不整楕円形	N-56°-W	16	0	水平 平坦	ゆるやか		第67図
9	A 3 b 1	1.13×0.93	楕円形	N-58°-E	46	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片 (阿玉台)	第67図
10	A 2 b 0 A 3 b 1	0.75×0.70	円形	N-38°-W	68	0	水平 平坦	垂直		第67図
11	A 3 c 0	1.00×0.82	不整楕円形	N-42°-E	17	0	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片少量 (浮島)	第67・71図
12	A 3 d 1	1.33×1.17	円形	N-82°-W	18	0	水平 平坦	ゆるやか		第67図
13	A 2 e 0	1.55×1.05	不整楕円形	N-72°-E	14	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量	第68図
14	A 2 b 9 c 9	1.32×0.52	長楕円形	N-44°-E	27	4	起伏あり	垂直	縄文土器片 (阿玉台)	第68・71図
15	A 2 d 8 e 8	2.40×(1.50)	不整楕円形	N-42°-E	20	0	坂状 起伏あり	段状	縄文土器片少量 (浮島, 阿玉台)	第67・71図
16	A 3 a 1	1.00×0.77	楕円形	N-51°-E	20	0	水平 平坦	ゆるやか		第68図
17	A 2 a 0	0.63×0.52	円形	N-63°-E	43	1	皿状	垂直		第68図
18	A 2 b 9 c 9	1.00×0.67	楕円形	N-25°-E	32	1	皿状	ゆるやか	縄文土器片多量 (茅山, 浮島, 諸磯)	第68・72図
19	A 2 c 8	1.23×1.09	不整円形	N-47°-W	47	0	坂状	ゆるやか		第68図
20	A 2 a 9	0.60×0.51	円形	N-46°-W	33	0	水平 平坦	ゆるやか		第68図
21	A 2 a 9	1.07×0.47	楕円形	N-68°-W	26	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片多量 (黒浜, 浮島)	第68・72図
22	A 3 a 1 a 2	0.83×0.67	円形	N-67°-E	37	0	水平 平坦	垂直		第68図
23	A 2 i 6	1.88×1.47	不整楕円形	N-11°-E	28	2	水平 平坦	ゆるやか		第68図

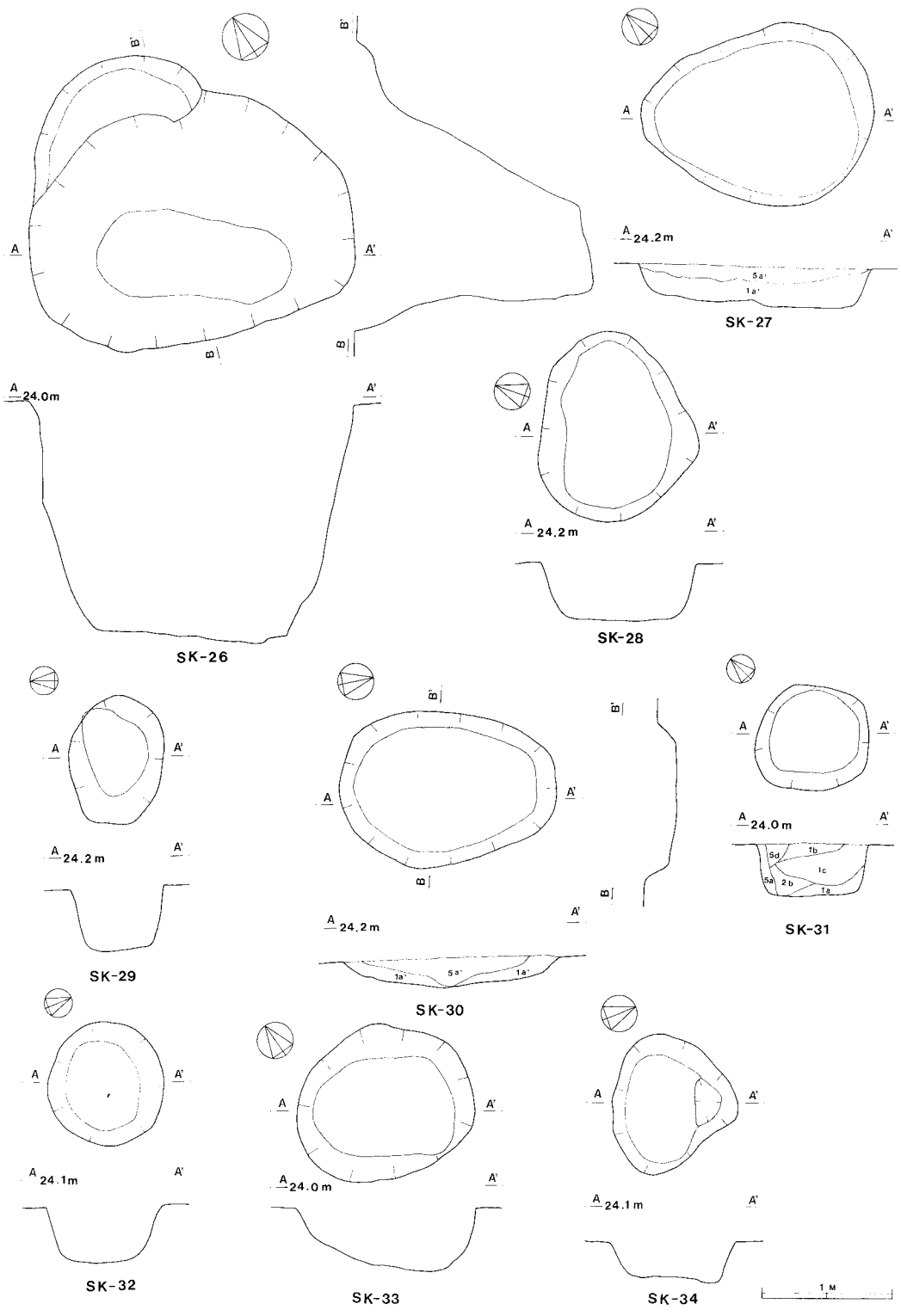
土壌 番号	調査区	規模(m)	形 状	長径方向	深さ (cm)	ピット 数	底 面	壁 面	出土遺物(時期)	関連図版
24	A 2 j 6	1.17×0.92	不整楕円形	N-43°-E	82	0	水平 平坦	ゆるやか		第68図
25	A 2 j 6	0.86×0.78	不整円形	N-90°	70	0	水平 平坦	垂 直		第68図
26	A 2 h i 7	2.49×1.90	不 定 形	N-63°-W	180	0	坂状 平坦	ゆるやか		第69図
27	A 2 j j 6	1.80×1.32	楕 円 形	N-42°-W	41	0	水平 平坦	ゆるやか		第69図
28	A 2 j B 2 a 6	1.46×1.08	楕 円 形	N-73°-W	53	0	水平 平坦	ゆるやか		第69図
29	B 2 a 6	0.99×0.73	楕 円 形	N-3°-E	53	0	水平 平坦	ゆるやか		第69図
30	B 2 a a 7	1.67×1.18	楕 円 形	N-80°-W	20	0	水平 平坦	ゆるやか		第69図
31	B 2 b 8	0.86×0.79	隅丸方形	N-44°-W	41	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片4点	第69図
32	B 2 c 5	0.95×0.90	円 形	N-90°	45	0	水平 平坦	ゆるやか		第69図
33	B 2 d 6	1.40×1.00	不整楕円形	N-61°-W	39	1	坂状 平坦	ゆるやか		第69図
34	B 2 d d 6	1.10×0.95	不 定 形	N-65°-W	29	0	水平 平坦	ゆるやか		第69図
35	B 2 d 6	1.32×1.05	楕 円 形	N-45°-W	25	1	水平 平坦	ゆるやか		第70図
36	B 2 d 7	0.80×0.73	円 形	N-90°	25	1	坂 状	ゆるやか		第70図
37	B 2 b b 7	1.00×0.78	楕 円 形	N-56°-W	34	0	坂 状	ゆるやか		第70図
38	A 1 i 9	2.20×1.80	不 定 形	N-43°-E	74	3	水平 平坦	段 状		第70図
39	B 2 a 8	0.78×0.66	不整円形	N-24°-W	35	0	坂 状	ゆるやか		第70図
40	B 2 a 9	0.81×0.80	円 形	N-0°	47	0	坂 状	ゆるやか		第70図
41	B 2 b 9	1.05×0.92	円 形	N-66°-E	40	0	水平 平坦	垂 直		第70図
42	B 2 a a 8	1.42×1.07	楕 円 形	N-86°-W	28	0	水平 平坦	ゆるやか		第70図
43	B 2 a a 8	1.25×1.11	円 形	N-5°-E	40	0	水平 平坦	ゆるやか		第70図
44	B 2 b 7	1.82×1.37	楕 円 形	N-27°-E	23	0	水平 平坦	ゆるやか		第70図
45	A 3 d d 2	0.82×0.68	不整円形	N-50°-W	39	1	皿状 起伏あり	ゆるやか	縄文土器片極少量 (浮島)	第70・72図
46	B 2 i 9	0.73×0.70	円 形	N-10°-E	25	0	水平 平坦	ゆるやか		第70図



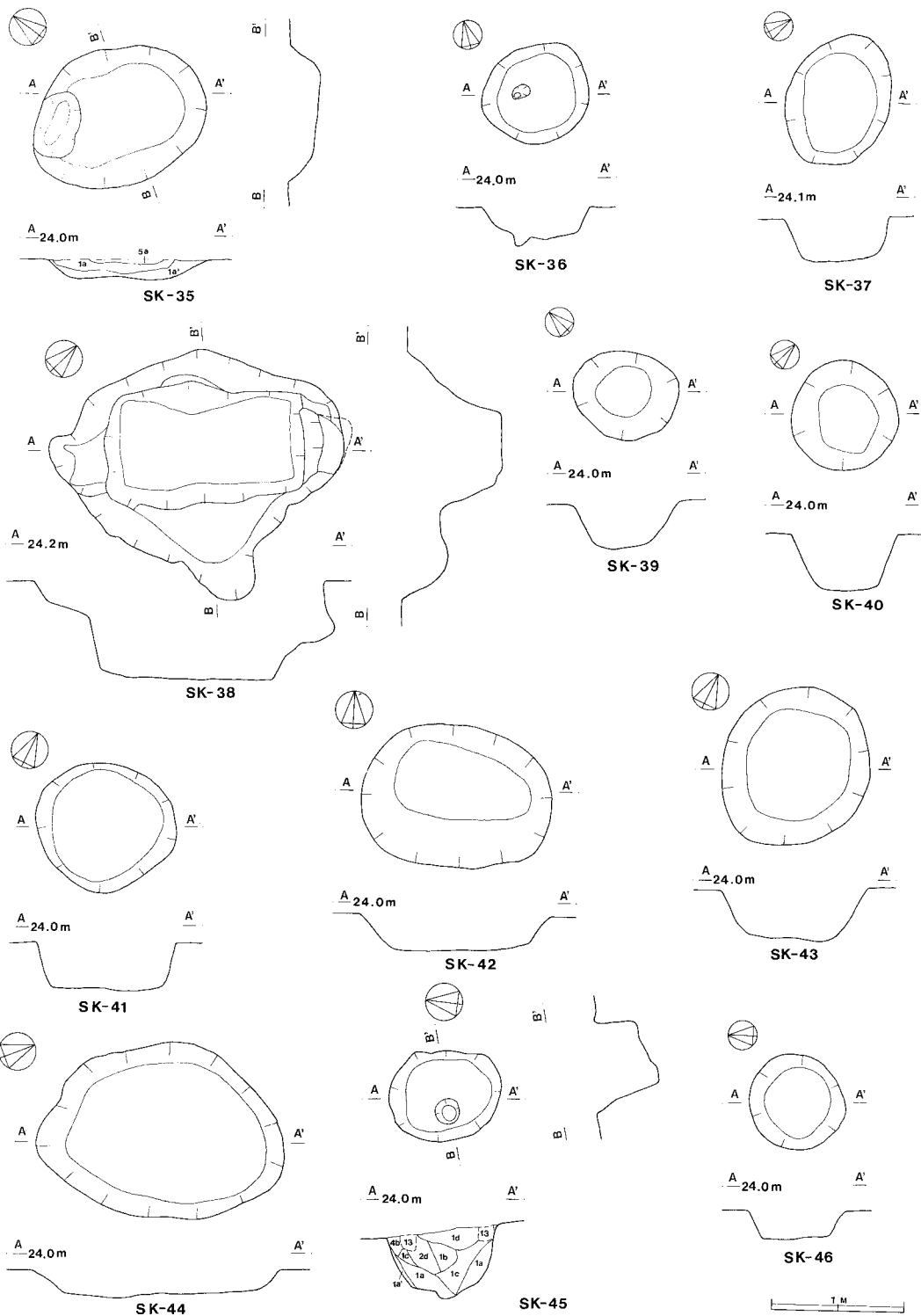
第67图 土壤实测图



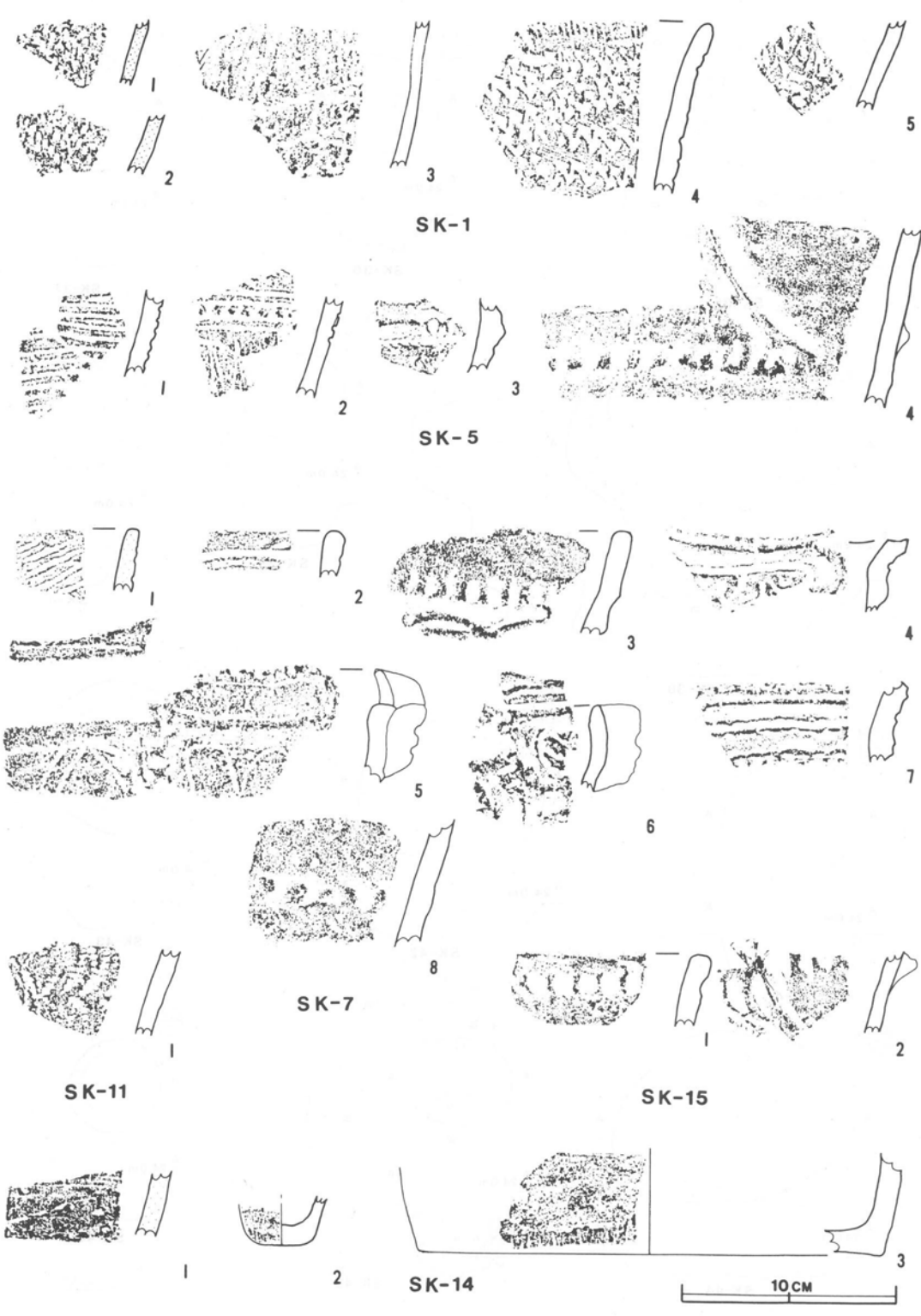
第68図 土 墳 実 測 図



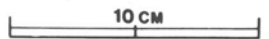
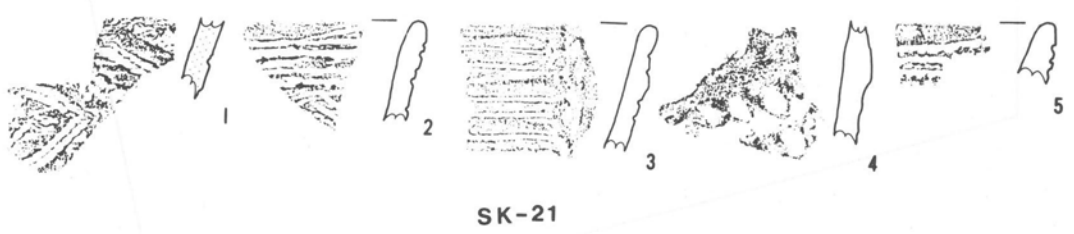
第69図 土 壙 実 測 図



第70图 土 壙 实 测 图

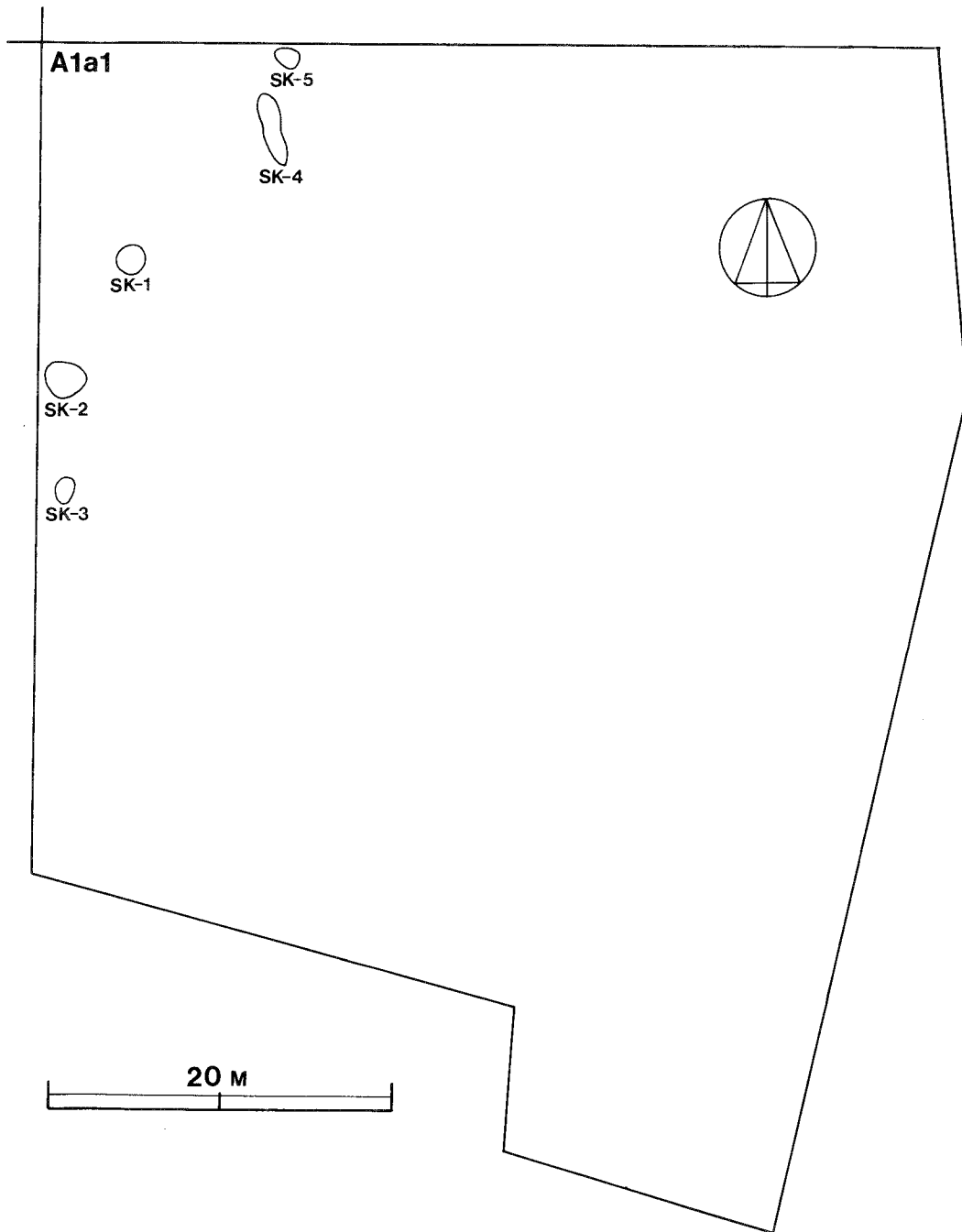


第71图 土壤出土土器拓影图



第72图 土壤出土土器拓影图

第5節 大谷津 C 遺跡



第73図 大谷津 C 遺跡遺構配置図

1 土壌

第1号土壌 (第74図)

本土壌はA1b1調査区に確認されたもので、遺跡北東部に位置している。平面形状は、直径85cm前後の円形を呈している。深さは最深部で50cmを測る。壁の遺存は良好で、西から北にかけてほぼ垂直に立ちあがり、東から南にかけてはややゆるやかに立ちあがっている。東壁の中位が小さな段状をなしている。底面はほぼ水平・平坦であり、ハードロームで硬い。覆土は、褐色土と壁際の一部に暗褐色土が堆積している。ローム粒子・炭化粒子・ローム小ブロックを含み、底面付近は縮りを帯びている。遺物は覆土中より縄文の繊維土器片（黒浜式）が出土しているが、微細なため資料とはならなかった。

第2号土壌 (第74図)

本土壌はA1e1調査区に確認されたもので、南側5mのところには3号土壌が存在する。長径方向はN-64°-Wを指し、長径120cm・短径100cmの楕円形を呈している。深さは中央最深部で24cmを測り、皿状に掘りこまれている。覆土は、明褐色土が堆積しているが、中央部が攪乱をうけている。遺物の出土は皆無である。

第3号土壌 (第74図)

本土壌はA1d1調査区に確認されたもので、遺跡の最西端に位置している。長径方向はN-15°-Eを指し、長径75cm・短径57cmの楕円形を呈している。深さは最深部で30cmを測る。壁はゆるやかに立ちあがっている。底面は複雑で2段掘りこみがみられ、中央部に最深部をもつ。覆土は、明褐色土がレンズ状に堆積しており、よく縮っている。遺物の出土は皆無である。

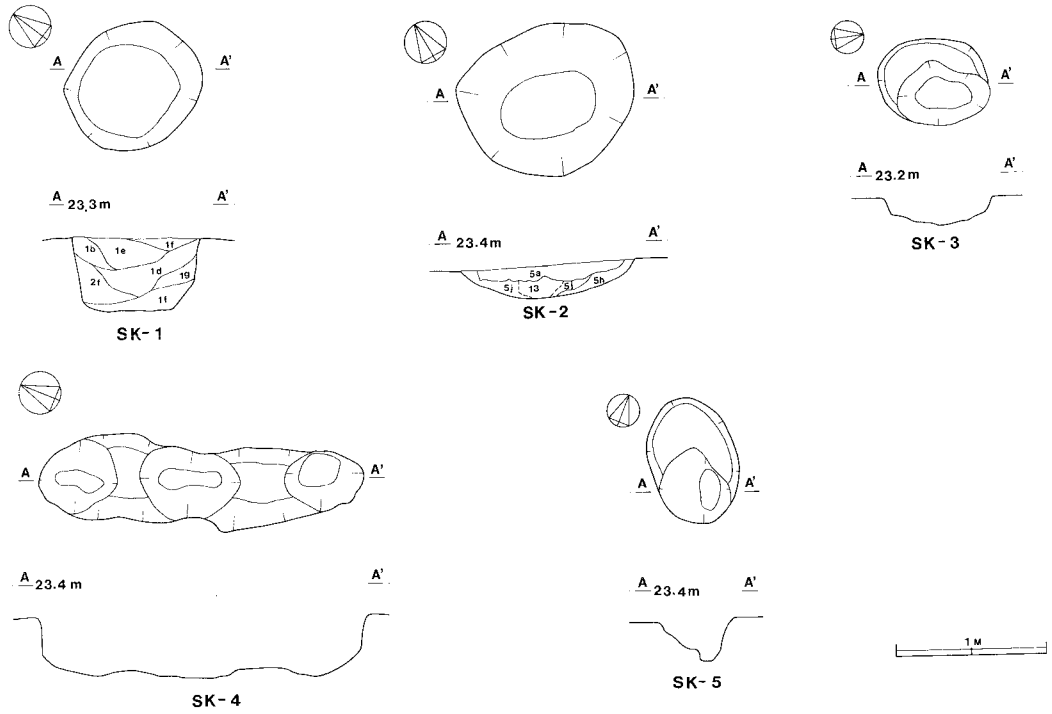
第4号土壌 (第74図)

本土壌はA1a2調査区に確認されたもので、北側3mのところには5号土壌が存在する。長径方向はN-21°-Wを指し、長径215cm・短径55cmの長楕円形を呈している。深さは中央最深部で40cmを測る。東壁はほぼ垂直に立ちあがるが、西壁はゆるやかに外反して立ちあがっている。底面は3つのゆるやかな小さい落ちこみがみられる。覆土は、褐色土・明褐色土が堆積しており、上層はサラサラしているが底面付近は粘性があり縮りを帯びている。遺物の出土は皆無である。

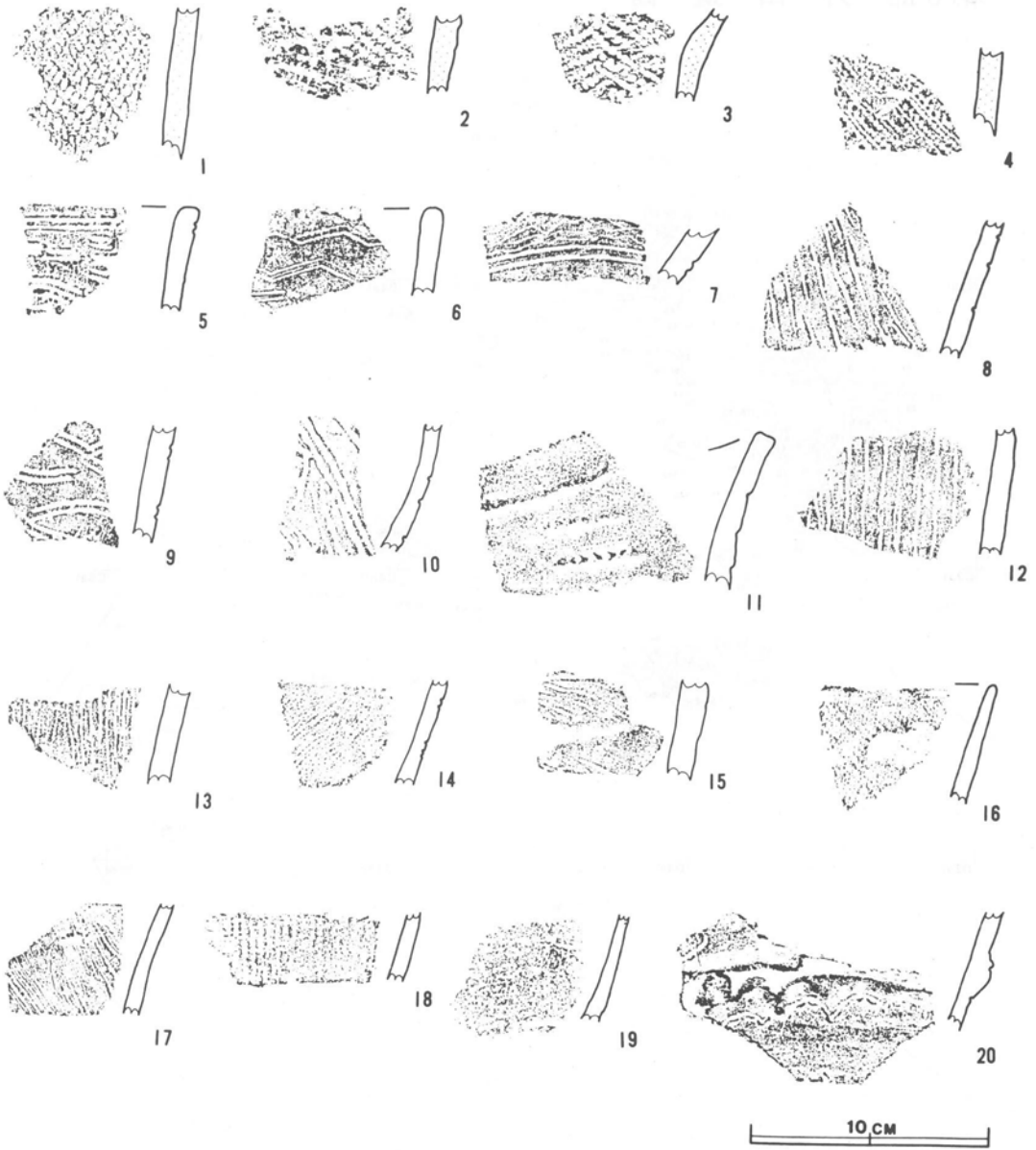
第5号土壌 (第74図)

本土壌はA1a2調査区に確認されたもので、遺跡最北西端に位置している。長径方向はN-33°-

Wを指し、長径85cm・短径58cmの楕円形を呈している。深さは最深部で28cmを測る。底面は2段掘りこみがみられ、底面の北側は平坦で、南側は皿状になっている。覆土は、縮りのある明褐色土が自然堆積している。遺物の出土は皆無である。

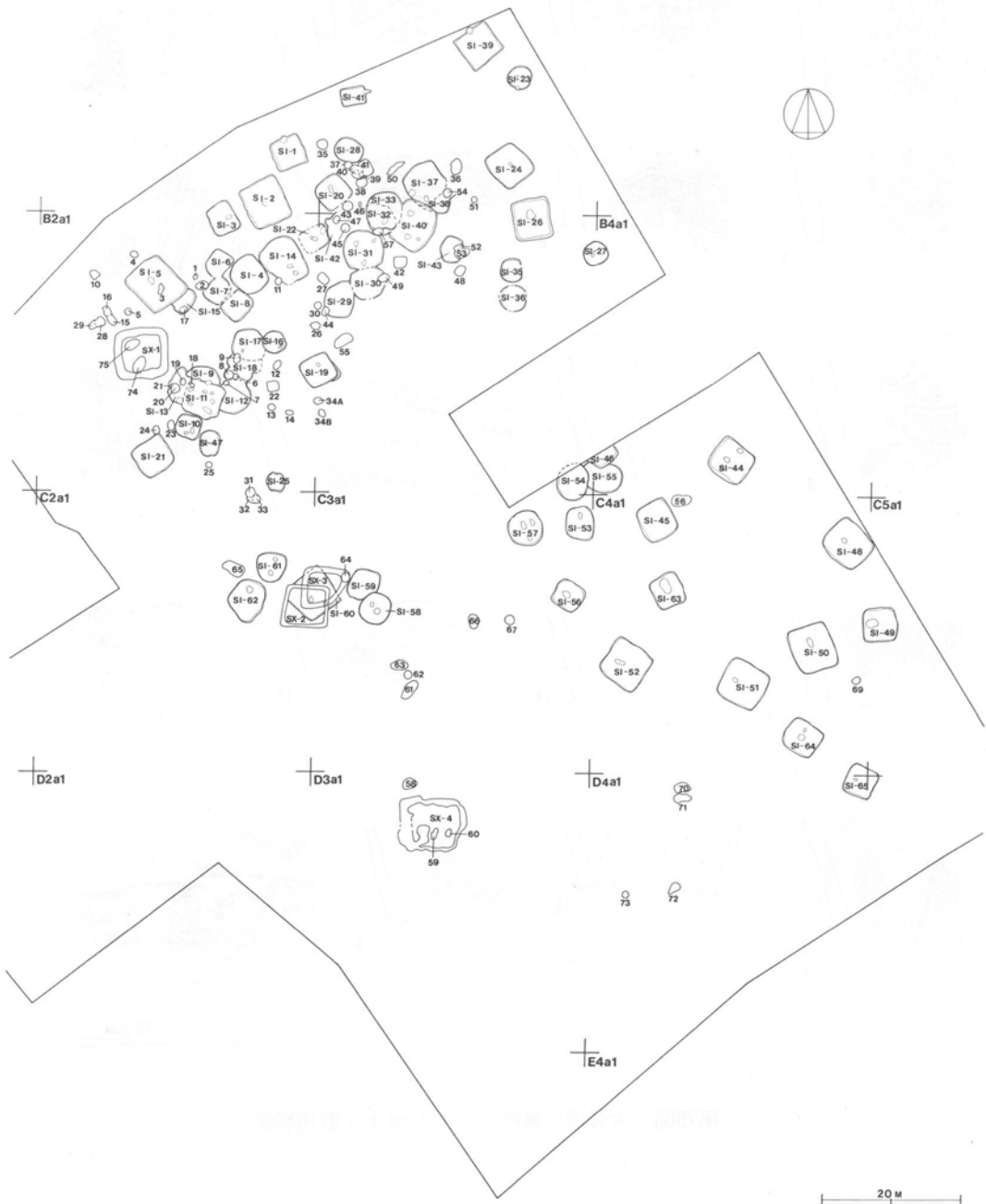


第74図 土 壙 実 測 図



第75図 大谷津C遺跡グリッド出土土器拓影図

第6節 外山遺跡



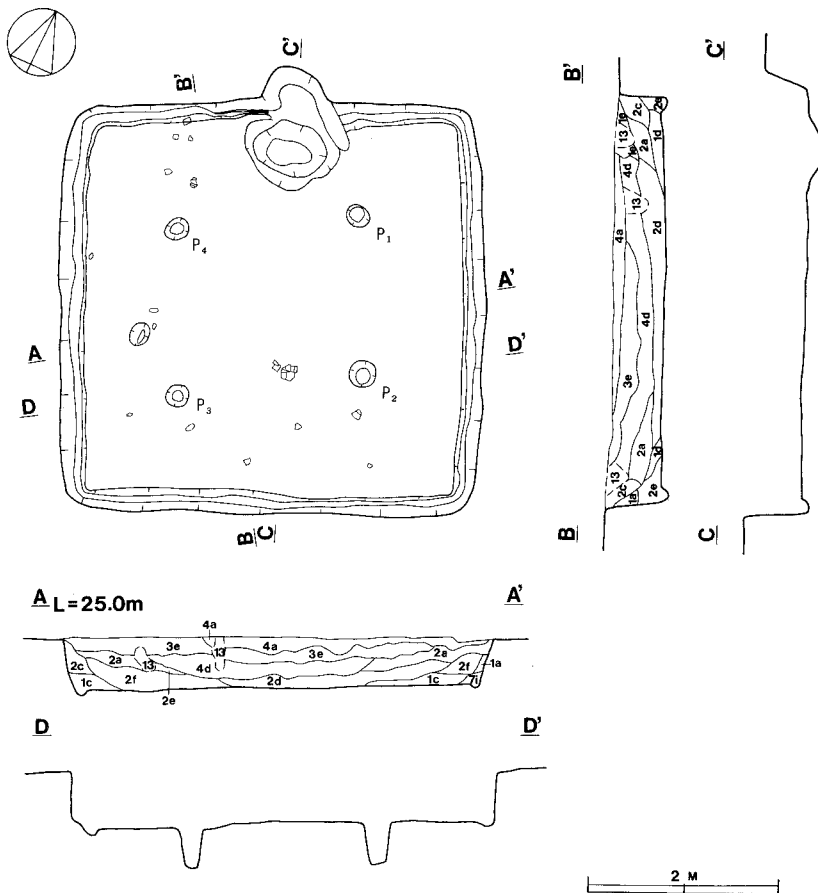
第76図 外山遺跡遺構配置図

1 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第77図)

本住居跡はA2h9調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北端に位置し、東側2mのところ
35号土塼、南西側1mのところ2号住居跡が存在する。

主軸方向はN - 22° - Wを指し、一辺を4.5m前後とする方形プランを呈している。壁高は65cm
を測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。ロームの掘りこみは45cm程である。西壁と南壁の一
部は攪乱をうけておりはっきりしない部分がある。床面はほぼ平坦で、中央部は硬く良好である
が他はやや軟弱である。幅15cm前後、深さ10cmの壁溝が全周している。カマドは北壁中央部に設



第77図 第1号住居跡実測図

けられており、規模は長径130cm・短径110cmを測り、北壁を70cm幅で30cm程掘りこんで煙道として
 いる。燃烧部は長径77cm・短径55cm、深さ15cmで楕円形状に掘り窪めている。袖部は東側にわ
 ずかに確認されたが砂質粘土で、カマドはやや南東向きに構築されている。ピットは5か所検出
 され、P1～P4が主柱穴と考えられる。住居跡内の覆土は、色調から大きく4層に分けられ、
 上層中央部に黒褐色土・極暗褐色土、上層壁際は褐色土、それ以外は暗褐色土が自然堆積して
 おり、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み比較的締りがある。床面上に焼
 土・炭化物・焼土粒子の散布がみられ、東壁下に炭化材・焼土が15cm程堆積していた。

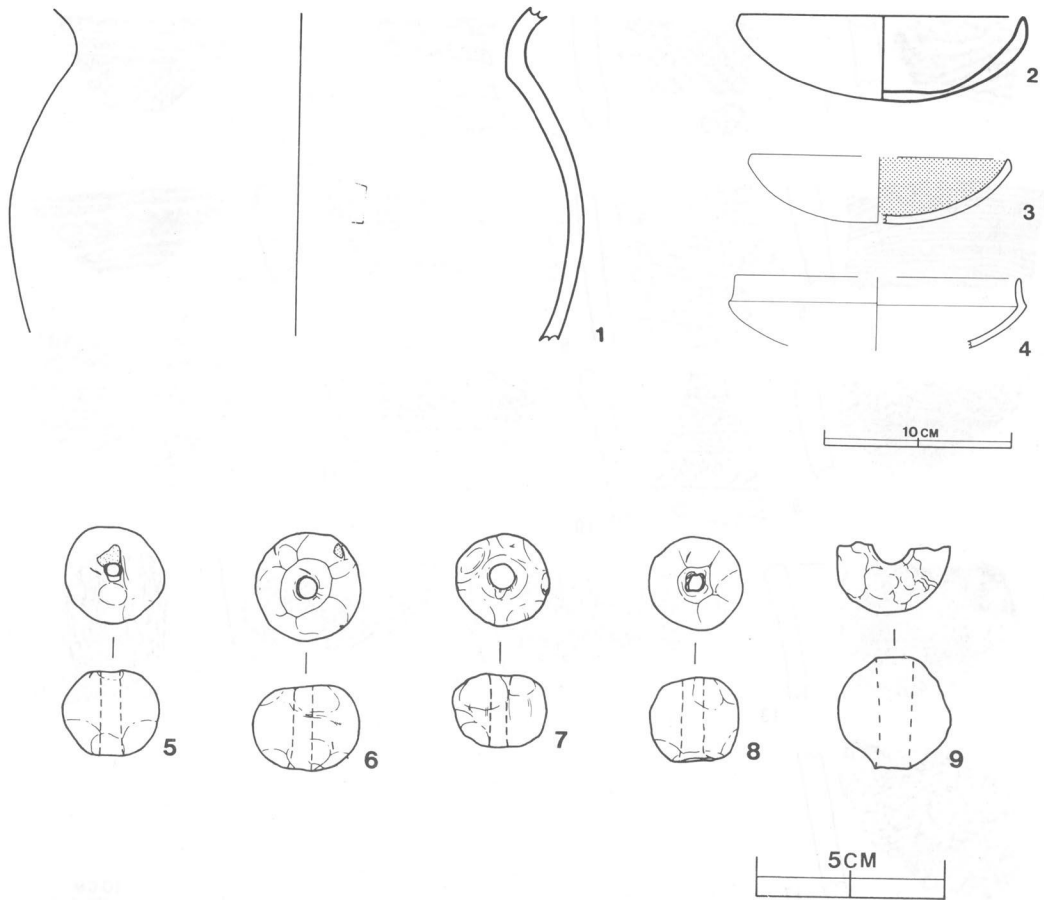
遺物は土師器を中心にして、縄文土器・弥生土器の土器片や石鏃等の石製品が住居跡内全体か
 ら出土している。ほぼ中央床面直上から甕形土器や土玉が、東コーナー付近からは床面に密着し
 た状態で坏が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第78・79図)

出土遺物解説表 (第78図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-1	1	甕形土器 (土師)	B 13.4	頸-口縁に向かって大きく外反。 胴-わずかな膨らみをもって底部 に至る。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ナデ	普通・砂礫・にぶ い褐	10% 第78図-1
	2	坏形土器 (土師)	A 15.3 B 4.6	体部-わずかに内彎ぎみに、外方 へ立ちあがっている。口-直立。 口唇部-薄くなっている。半球形 を呈している。	口-横ナデ 他-ヘラミガキ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ い褐 リア	50% 煤付 着 第78図-2
	3	坏形土器 (土師)	A (13.8) B 3.5	体部-やや深みのある弧状を呈す。 口-内彎する。	口-横ナデ 内面-ヘラミガキ	普通・砂粒・灰褐 スコ リア	15% 内 第78図-3
	4	坏形土器 (土師)	A (15.0) B 3.7	体部-極めて浅い。口-直立する。 口縁部と体部との境に稜をもつ。	口-横ナデ 内面-ナデ 外面-ヘラミガキ	良好・砂粒・にぶ い橙	15% 第78図-4
	5	土玉	2.3×2.6 14.5g			普通・砂粒・橙	100% 第78図-5
	6	土玉	2.3×2.8 19g			普通・砂粒・にぶ スコ い橙 リア	100% 第78図-6
	7	土玉	2.2×2.4 12.5g			普通・砂粒・にぶ スコ い橙 リア	100% 第78図-7
	8	土玉	1.9×2.4 11.5g			普通・砂粒・にぶ スコ い橙 リア	100% 第78図-8
	9	土玉	3.0×3.0 11.5g			普通・スコ・橙 リア	50% 第78図-9



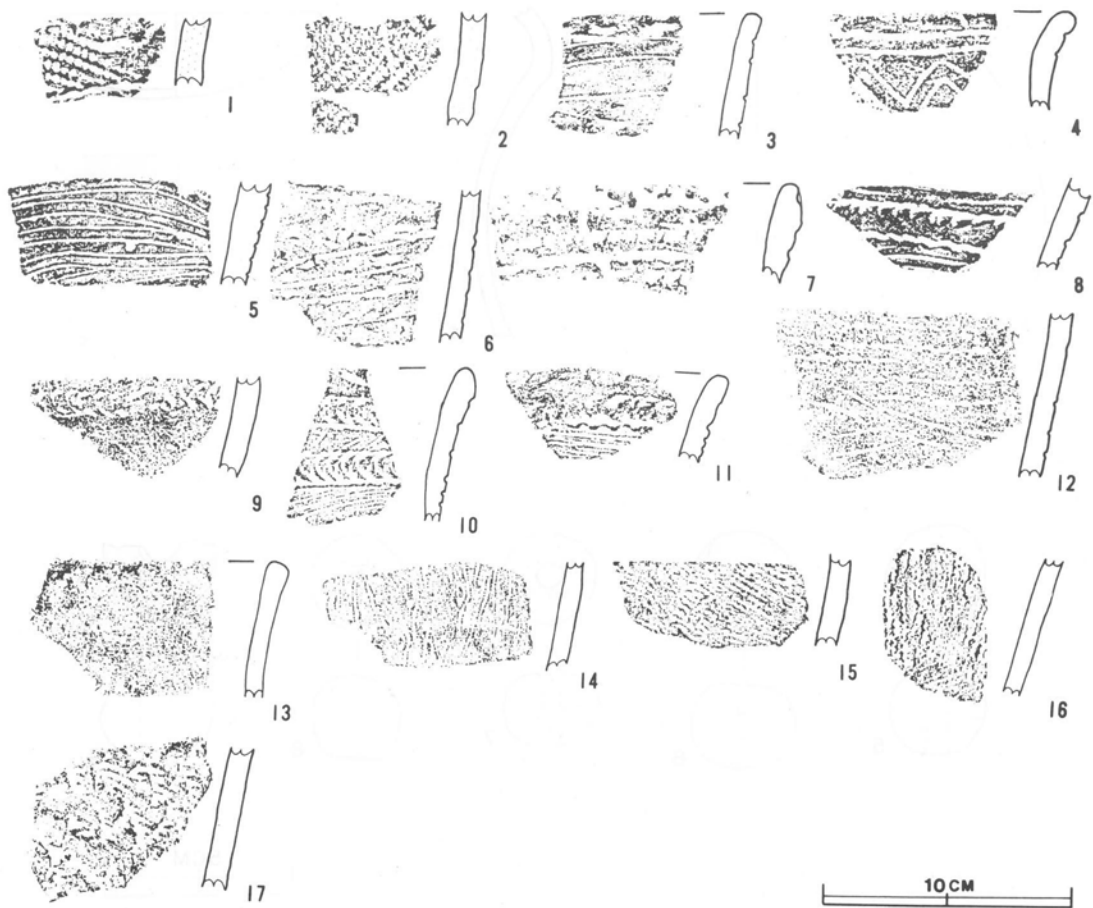
第78図 第1号住居跡出土遺物実測図

第79図は縄文土器片である。1・2は胎土に繊維を含み、縄文を施文している。3～5は平行沈線文を有し、6は変形爪形文、7～12は連続爪形文を施している。13は無文の口縁部、14・15は撚糸文、16・17は貝殻文を施文している。

第2号住居跡（第80図）

本住居跡はA2j₉調査区を中心に確認されたもので、北東側に1号住居跡、南側2mのところ、西側1.5mのところ、西側1.5mのところ、西側1.5mのところに3号住居跡が存在する。

主軸方向はN-30°-Wを指し、長軸6.45m・短軸5.8mの南北方向がやや長い隅丸方形を呈している。壁高は30～35cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。ロームの掘りこみは20cm程である。床面はほぼ平坦であり、ハードロームで硬く締まっているところもみられるが全体的にはやや軟弱である。炉跡はほぼ中央に検出され、床面を13cm程掘り窪めた地床炉で、長径95cm・短

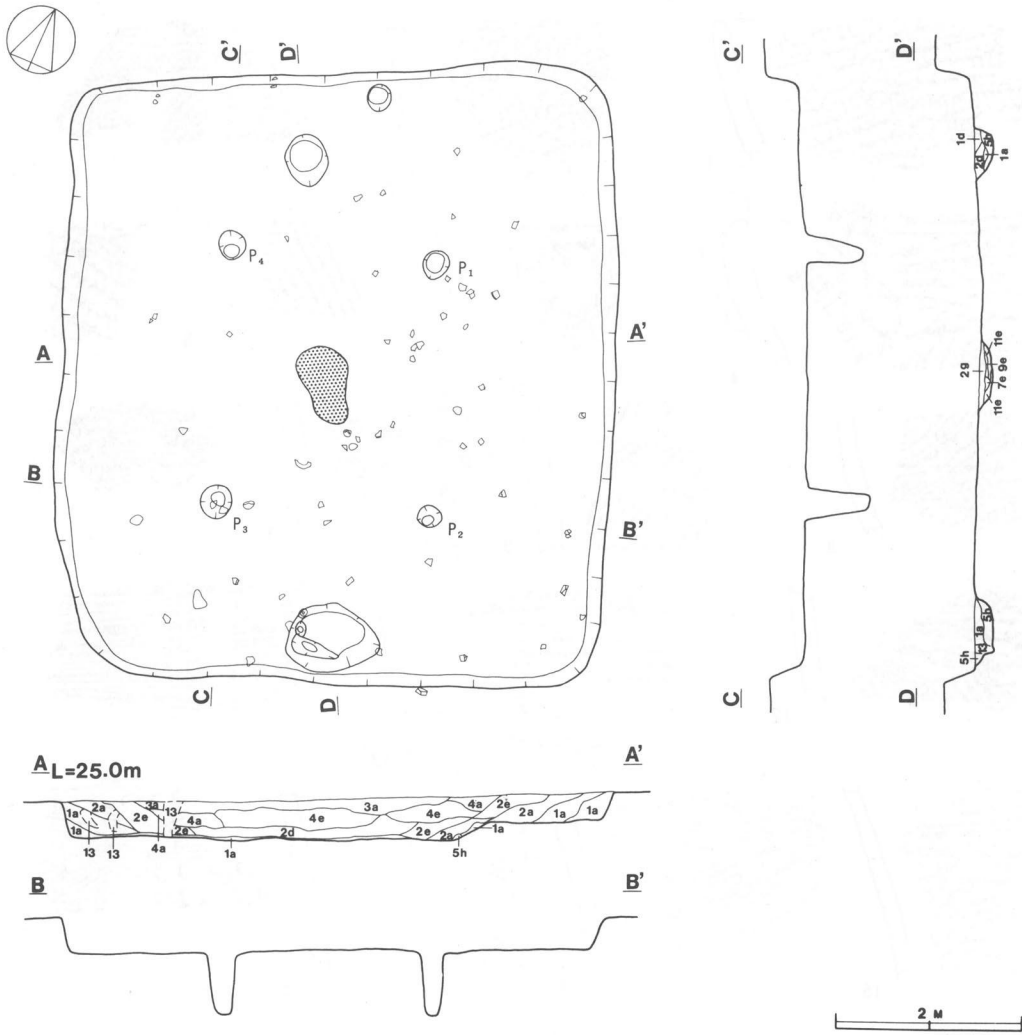


第79図 第1号住居跡出土土器拓影図

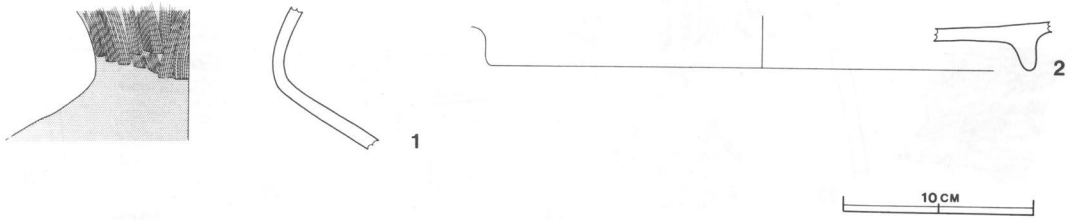
径50cmの楕円形で皿状を呈す。赤褐色土が堆積しており、炉床は硬く焼けている。ピットは7か所検出されたが、支柱穴はP₁～P₄と考えられる。深さは65～73cmで、内側に規則的に配列されている。南壁下ほぼ中央部に貯蔵穴が確認されている。西側に小ピットを2個有している。住居跡内覆土は、色調から大きく4層に分けられ、上層中央に極暗褐色土、下層中央は黒褐色土、底・壁付近は褐色土、それ以外は暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子と一部に少量の焼土粒子・炭化粒子を含み締りがある。

遺物は多量の縄文土器片に混在して、弥生土器・土師器の破片が出土している。中央よりやや南側の床面上より土師器の壺形土器が検出されている。本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

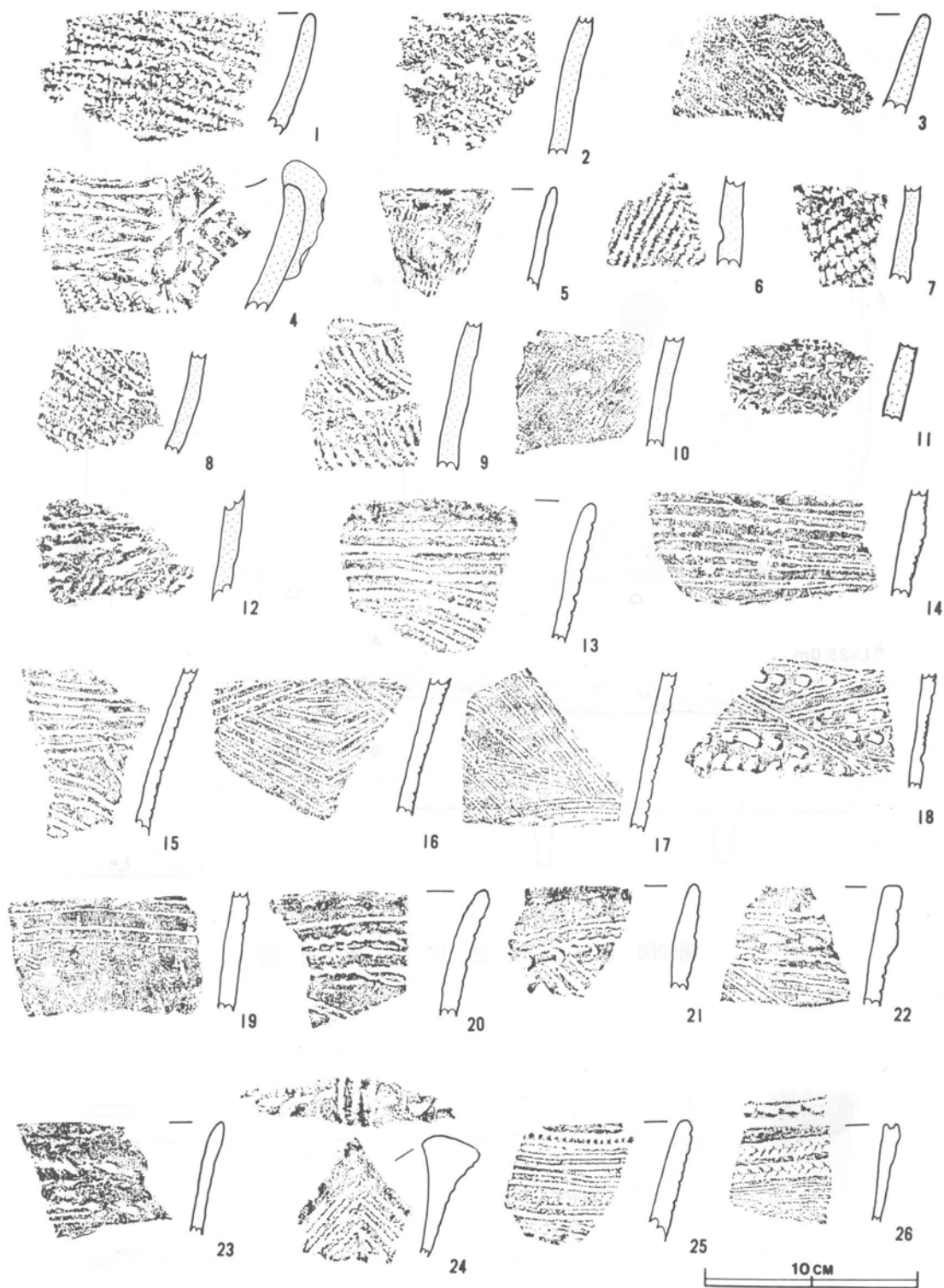
出土遺物 (第81～83図)



第80图 第2号住居跡实测图



第81图 第2号住居跡出土遺物实测图



第82图 第2号住居跡出土土器拓影图



第83図 第2号住居跡出土土器拓影図

出土遺物解説表(第81図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-2	1	壺形土器 (土師)	B 5.5	頸部から口縁部にかけて外反している。 胴大きく膨らむ。	口-内面-横ナデ 外面-横ナデ 刷け目調整 胴-内面 外面>ナデ	やや・砂粒・赤褐 軟弱 スコ リア	頸部15% 肩部に丹彩 第81図-1
	2	盤 (縄文)	B 2.5	底丸みをもつ。ほぼ直線的に伸びている。 台部丸みもち、中央が窪む。	内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂礫・橙	10% 第81図-2

第82図1~12は胎土に繊維を含み、地文に縄文を有している。13~20は平行沈線文、21~23は変形爪形文、24~26と第83図1~9は連続爪形文を施している。10は爪形文、11は無文、12は撚糸文、13は貝殻文を施している。14は土師器片で、刷け目痕が認められる。

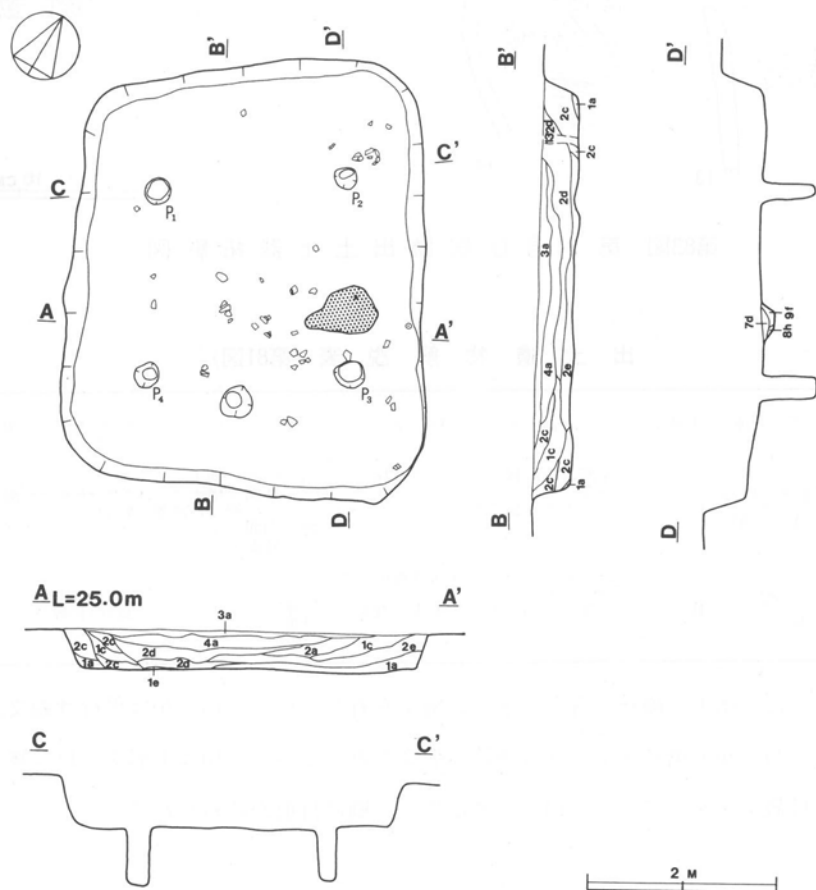
第3号住居跡(第84図)

本住居跡はB2a7調査区を中心に確認されたもので、東側に2号住居跡、南側2mのところ

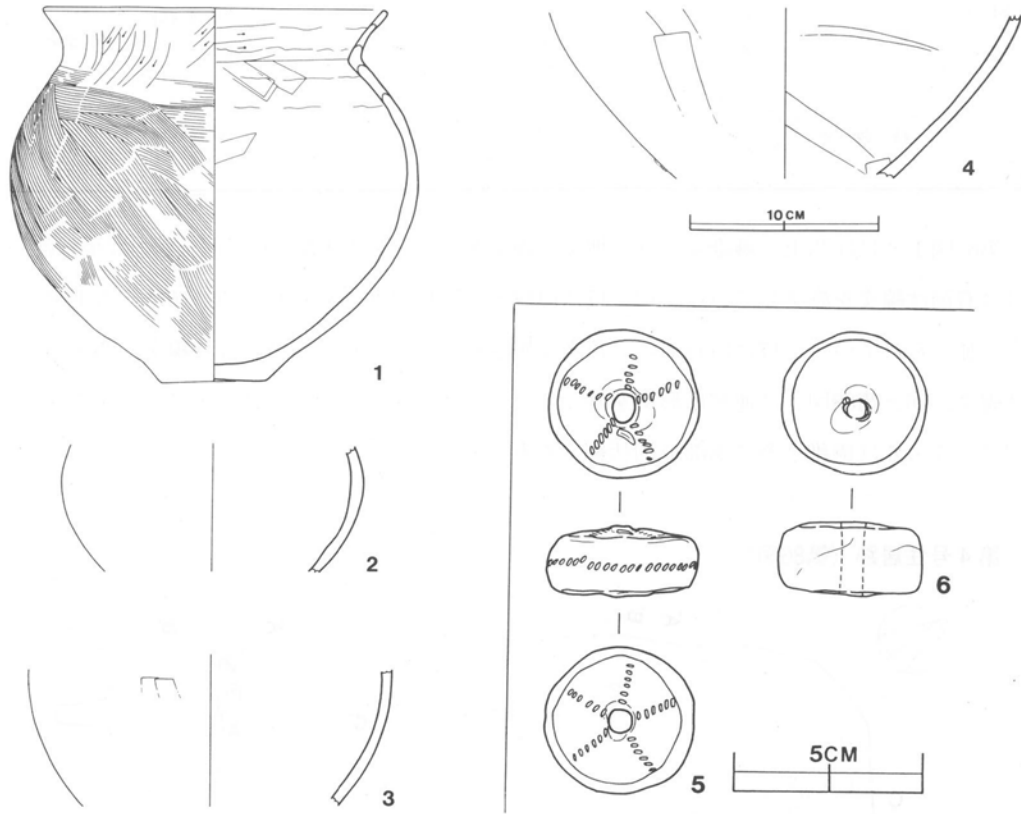
号住居跡が存在する。

主軸方向は $N - 32^{\circ} - W$ を指し、長軸4.5m・短軸3.75mの南北方向にやや長い隅丸方形を呈している。壁高は45~50cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は小さな起伏があり、南東コーナー壁下と東側壁下がやや高く炉跡の南側周辺が5cm前後低くなっており、全体的に軟弱である。炉跡は中央より東側に検出され、床面を13cm程掘り窪めた地床炉で、長径75cm・短径45cmの不定形を呈し、焼土粒子・炭化粒子を含み炉床は硬く焼けている。ピットは5か所検出され、 $P_1 \sim P_4$ は支柱穴と考えられ、ほぼ等間隔に位置している。直径は27~33cm、深さは50~60cmを測る。住居跡内の覆土は、2号住居跡と同じような堆積状況を示しており、全体的に締りがある。また床面付近に炭化材や焼土粒子等の混入が多くみられるので、火災家屋と思われる。

遺物は土師器片を中心として縄文土器片等が混在して、主に北側と炉の周辺から出土している。壺形土器が炉跡南側の覆土中から、紡錘車が北東壁下から、甕形土器が床面に密着した状態で北コーナー付近から検出されている。本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。



第84図 第3号住居跡実測図



第85図 第3号住居跡出土遺物実測図

出土遺物 (第85・87・88図)

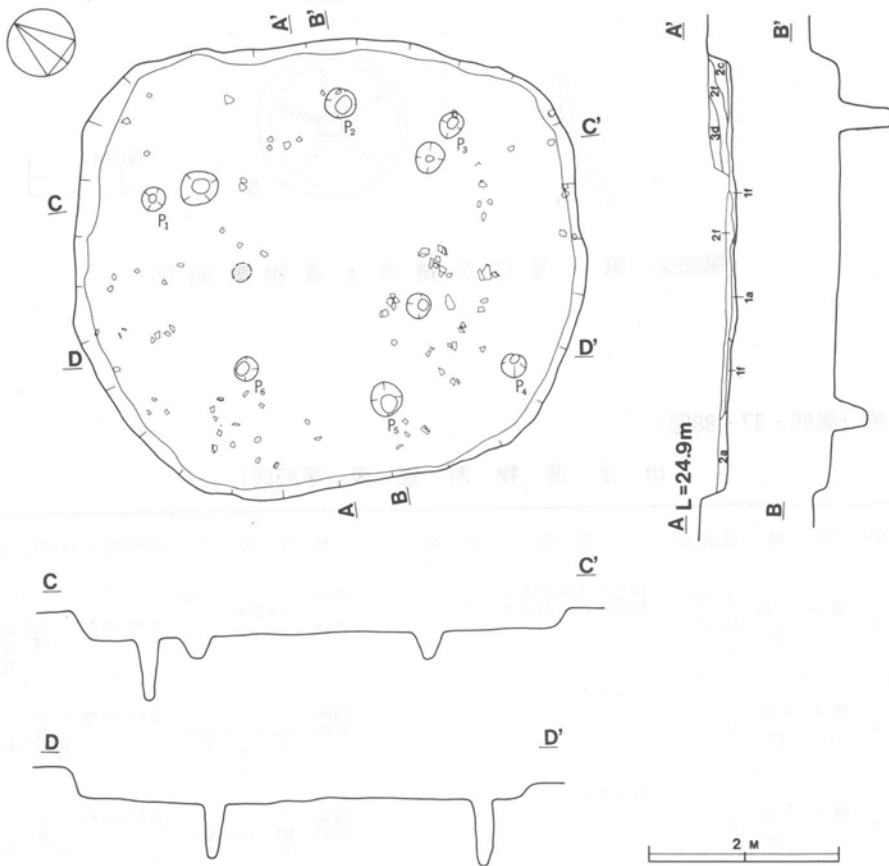
出土遺物解説表 (第85図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-3	1	甕形土器 (土師)	A 18.2 B 19.7 C 5.5	球形で平底である。 胴部中に最大径をもつ。	内面—ヘラナデ、刷 け目調整 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	100% 外面に煤付 着 第85図-1
	2	甕形土器 (土師)	B 6.7	丸みをもつ。	内面—ヘラナデ 外面—刷け目調整の あとヘラナデ	良好・砂礫・にぶ い黄 橙	10% 第85図-2
	3	甕形土器 (土師)	B 7.2	丸みをもつ。	内面—ナデ 外面—刷け目調整の あとヘラナデ	良好・砂粒・にぶ い黄 橙	10% 第85図-3
	4	甕形土器 (土師)	B 8.7	丸みをもつ。	内面>ヘラナデ 外面>	良好・石英・橙 スゴ リア	20% 第85図-4

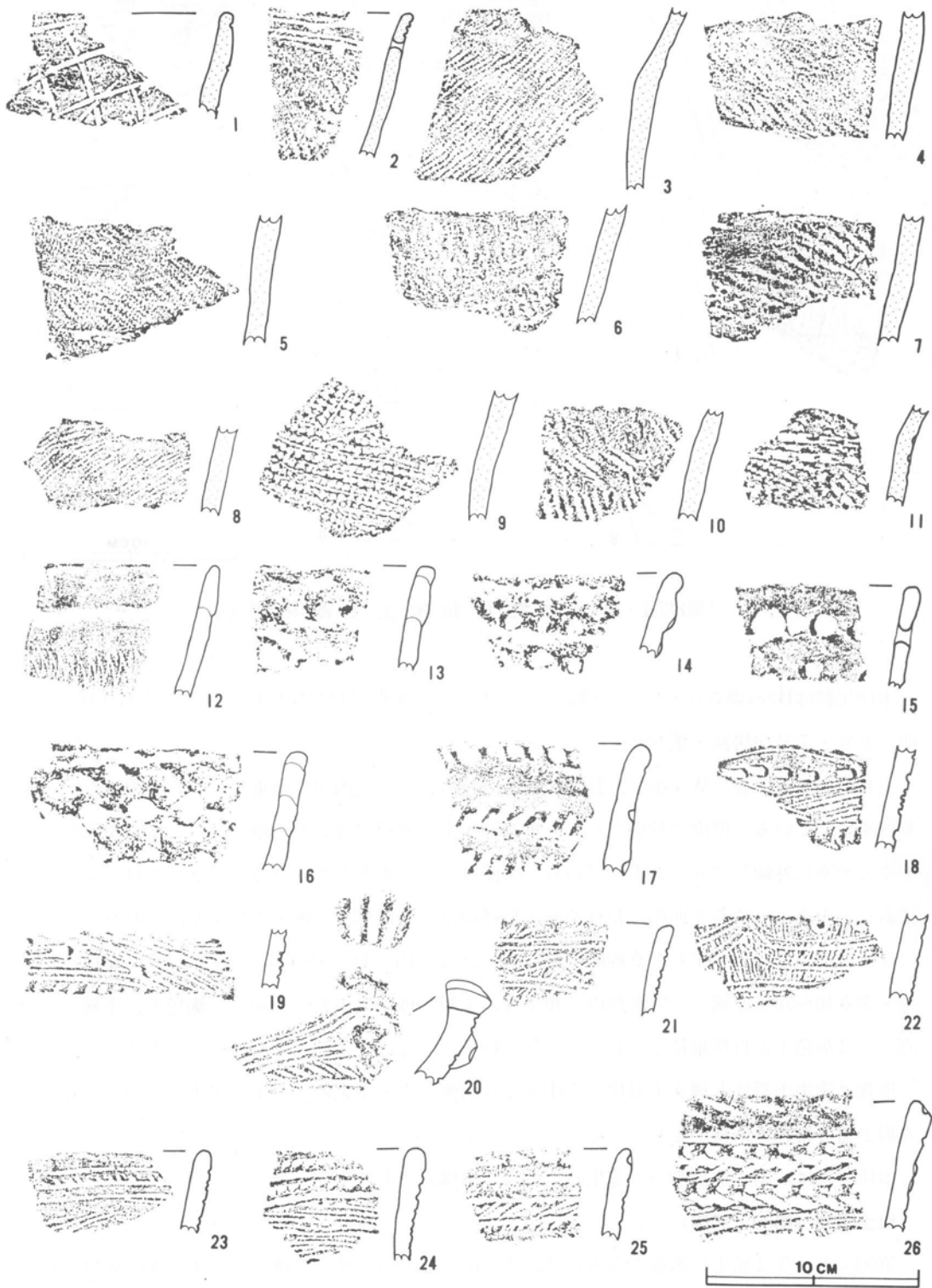
SI-3	5	紡錘車	1.8×4.0 32.0g			普通・砂粒・にぶ い黄 橙	100% 第85図-5
	6	紡錘車	1.9×3.8 32.5g			普通・砂粒・橙	100% 第85図-6

第87図1～11は胎土に繊維を含み、地文に縄文を有す。1は沈線の格子目文、2は平行沈線文、11は有節沈線文を施文している。12～17は口縁部で輪積痕が認められ、13～16はその下端に指頭痕が加えられている。17は口唇部に三角文が施されている。18～22は平行沈線文、23・24は有節沈線文、26と第88図1は連続爪形文を施している。2～4は貝殻文を施文している。5～10は底部で、5・6は繊維土器で胴部に羽状縄文を有している。

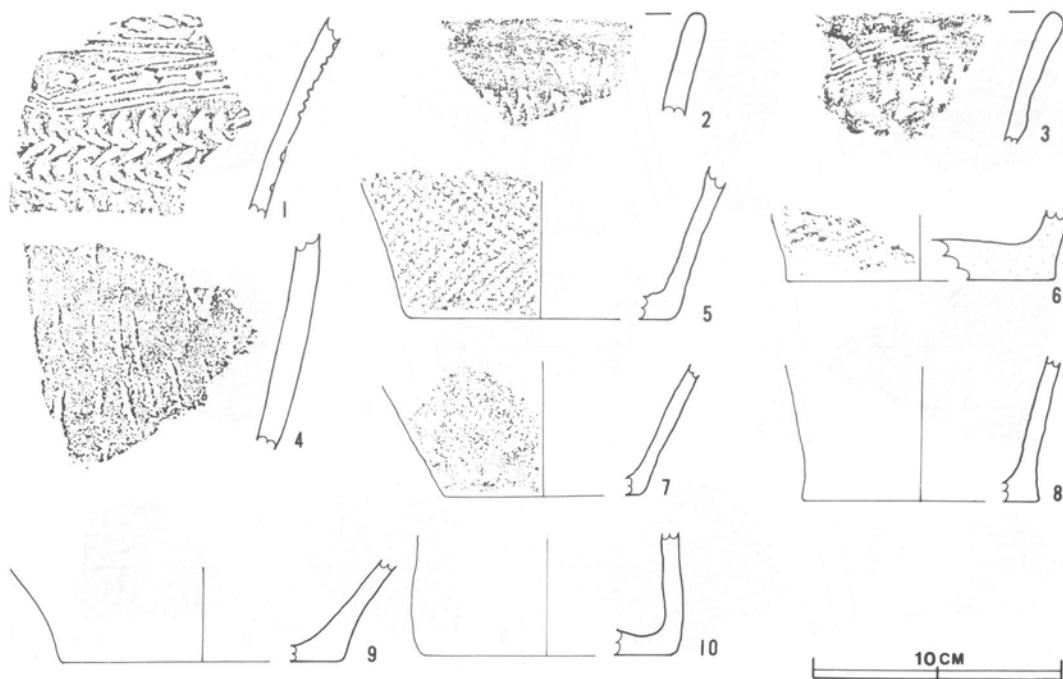
第4号住居跡 (第86図)



第86図 第4号住居跡実測図



第87图 第3号住居跡出土土器拓影图



第88図 第3号住居跡出土土器拓影図

本住居跡はB2cs調査区を中心に確認されたもので、東側が14号住居跡、南側が8号住居跡、西側が6号・7号住居跡と重複している。

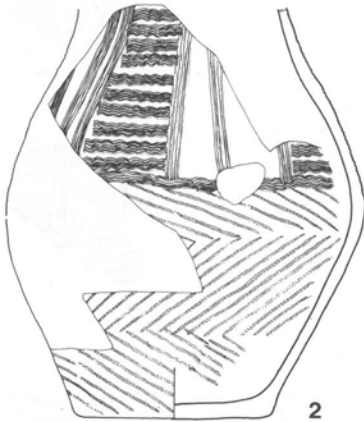
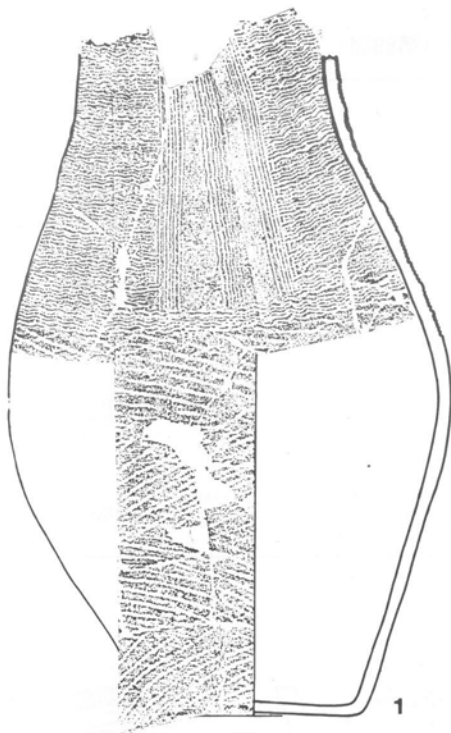
主軸方向はN-42°-Wを指し、長軸5.4m・短軸4.7mの北西辺と南東辺がやや曲線的な隅丸方形状を呈している。壁面は軟弱でしかも重複部が多く明瞭でないが、壁高は15~30cmを測り、ややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はほぼ平坦をなしているが、ソフトロームで軟弱である。中央よりやや北西側に長径23cm・短径18cmの楕円形状に焼土の散布がみられた。ピットは9か所検出され、いずれも直線的に掘られている。P1~P6は主柱穴と考えられ、直径25~32cm・深さ40~70cmを測る。住居跡内の覆土は、上層に極暗褐色土、中層に暗褐色土、下層の床面直上には褐色土が自然堆積しており、ローム粒子と一部に炭化粒子を含み締りがある。

遺物は弥生土器片と縄文土器片が、中央から西側と南・南東側から多く出土している。弥生の壺形土器と紡錘車が検出されている。

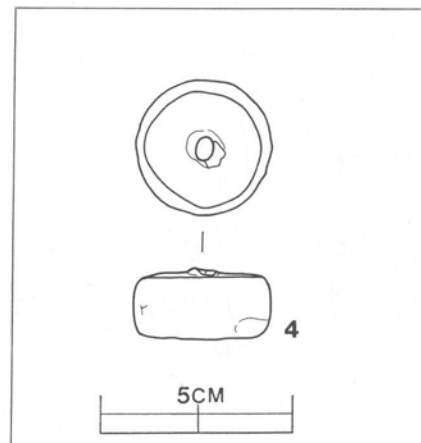
本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。

出土遺物 (第89・90図)

第90図1~3は胎土に繊維を含み、沈線文を配している。地文に縄文を有す。4~8は平行沈線文の土器で、6は地文に撚糸文、7・8は肋骨文を呈している。9と11は連続爪形文、10は有節沈線文を幾何学的に施文している。12は貝殻文、13は撚糸文を有す。14・15は底部である。



10 CM

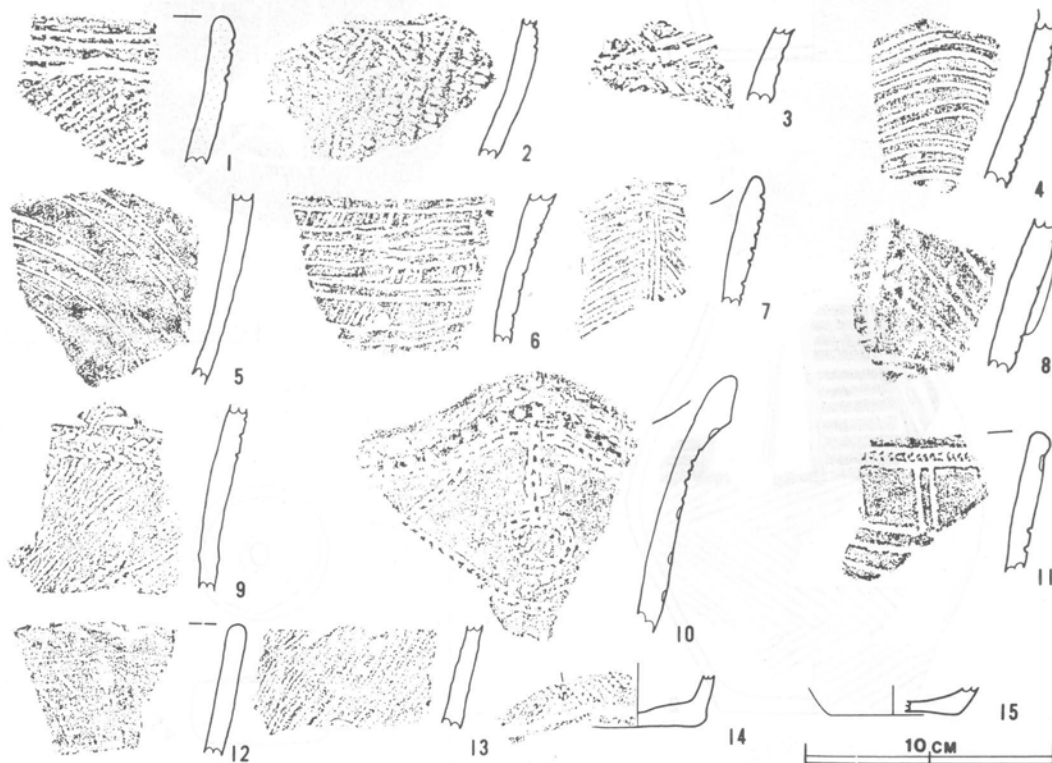


5 CM

第89図 第4号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表(第89図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-4	1 壺形土器 (弥生)	B 26.6 C 8.4	頸-櫛目による懸垂文を施し、4区割し、その間に櫛目による波状文。胴-羽状縄文。底-布目痕。	内面-ナデ	良好・砂礫・橙	60% 外面煤付着 第89図-1
	2 小形壺形土器 (弥生)	B 16.3 C 7.9	頸-3条の懸垂文で区割した間に櫛目の波状文。胴-羽状縄文。底-布目痕。	内面-ナデ	やや・砂礫・浅黄 軟弱 橙	20% 第89図-2
	3 深鉢形土器 (弥生)	B 16.3 C 13.2	胴-付加状縄文。 底-木葉痕。	内面-ナデ	普通・砂礫・橙	底部 80% 第89図-3
	4 紡錘車	27.5g				良好・砂粒・ぶ い黄 橙

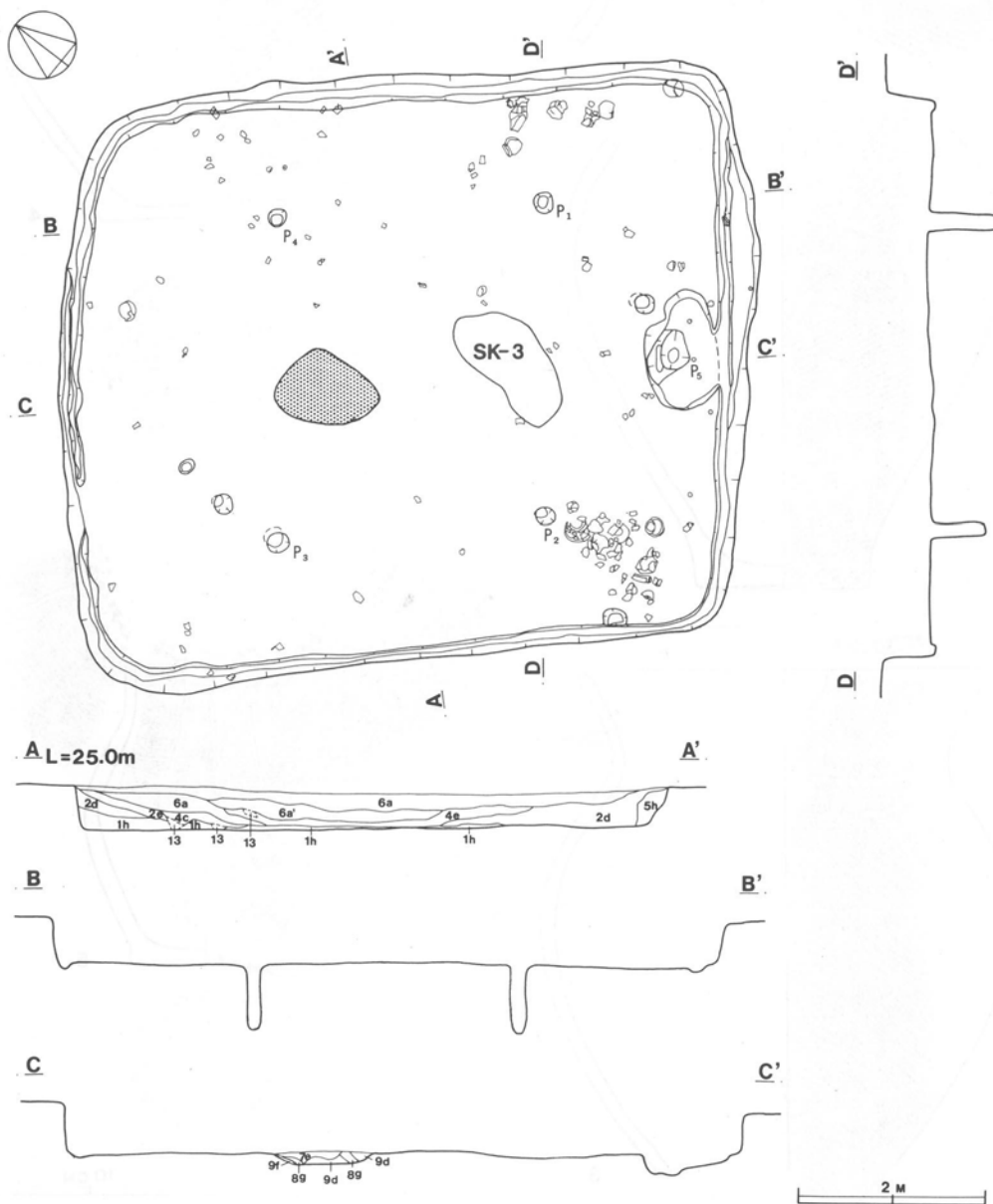


第90図 第4号住居跡出土土器拓影図

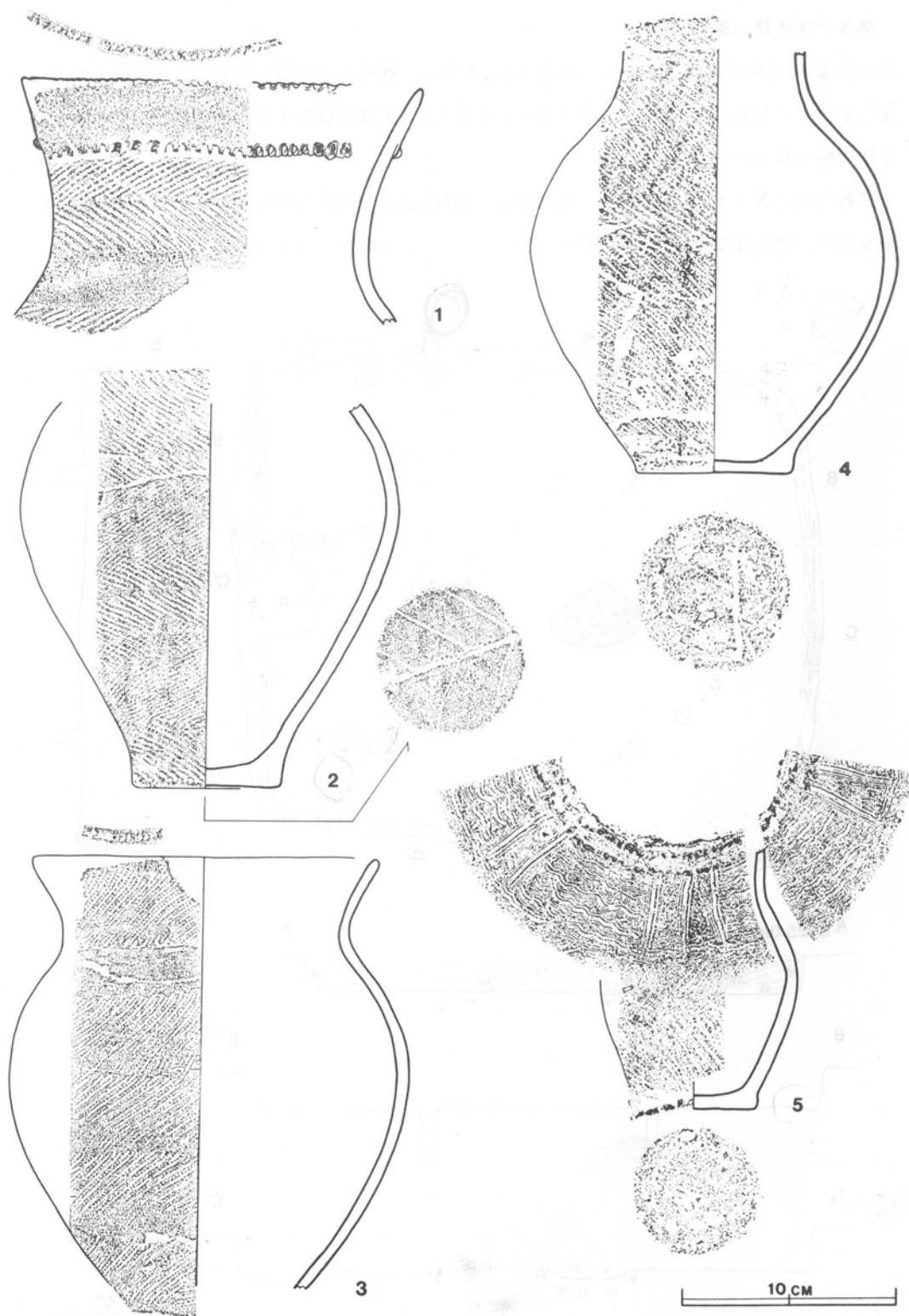
第5号住居跡, (第91図)

本住居跡はB2c5調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北西端に位置し、南東側が15号住居跡と重複しており、東側約1.3mのところには1号・2号土壌が存在する。重複遺構の新旧関係は、本住居跡が新しい。

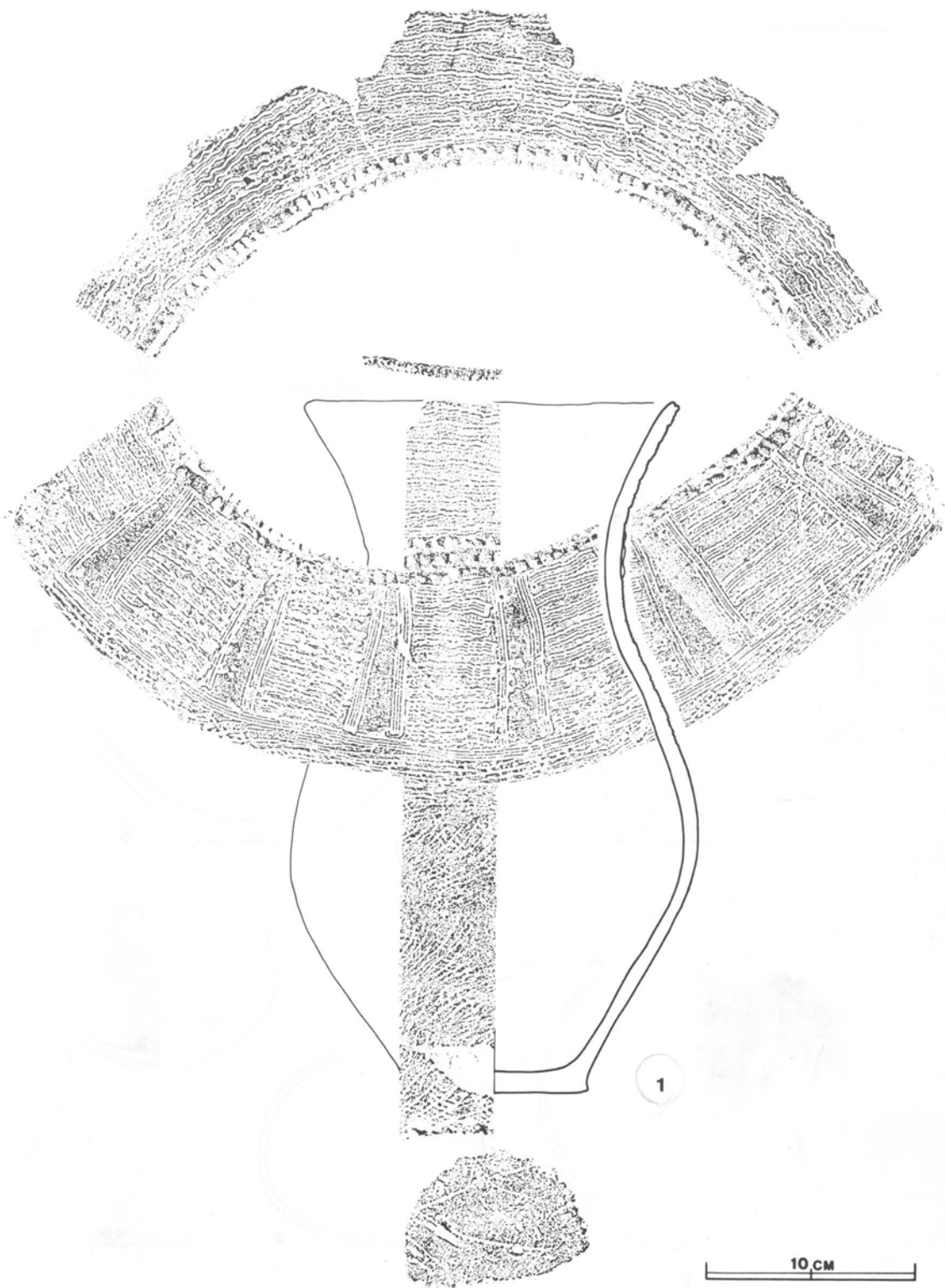
主軸方向はN - 42° - Wを指し、長軸7m・短軸6.1mの隅丸方形を呈している。壁高は40~60cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。ロームの掘りこみは30cm程である。幅10~15cm・



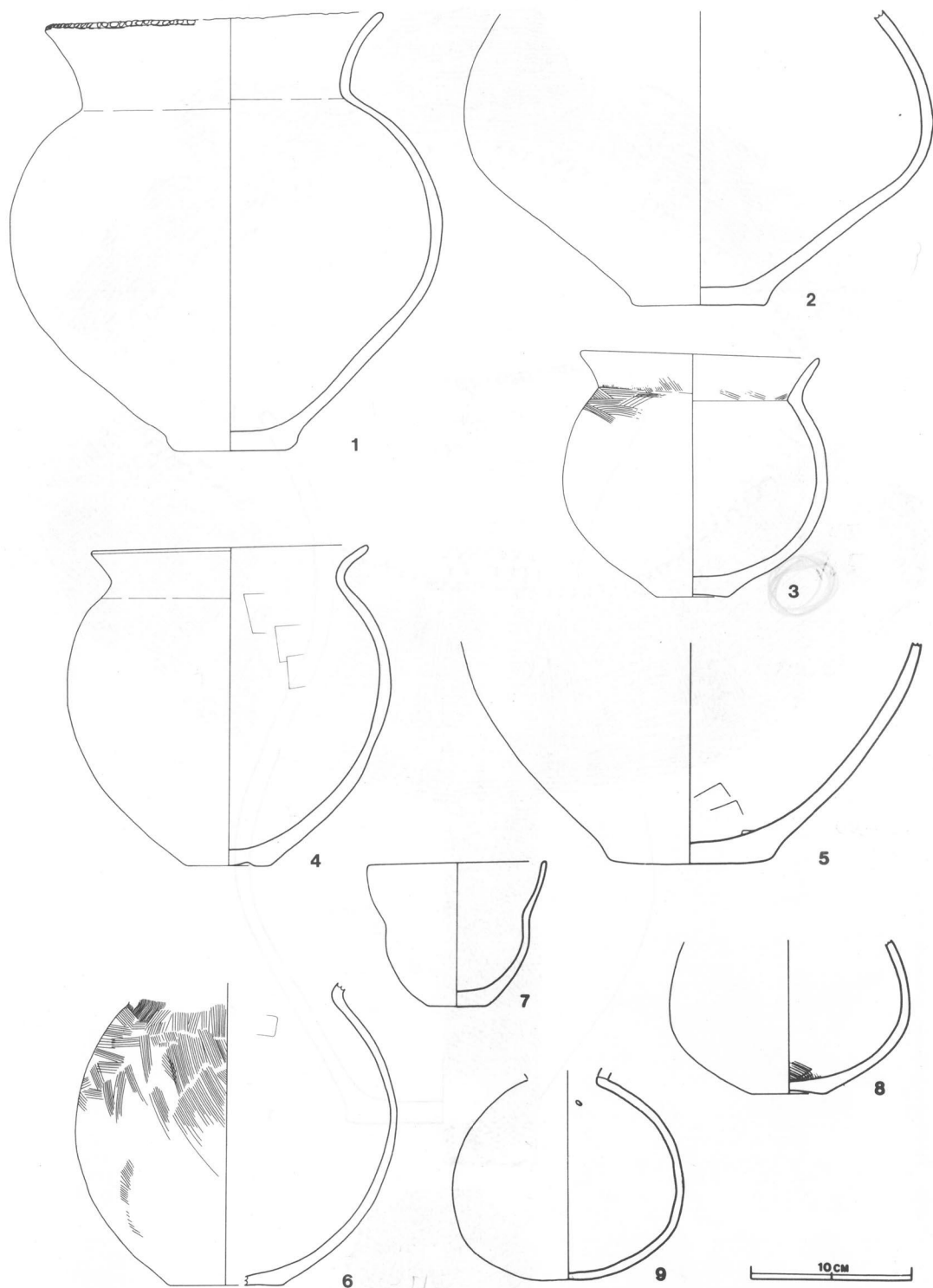
第91図 第5号住居跡実測図



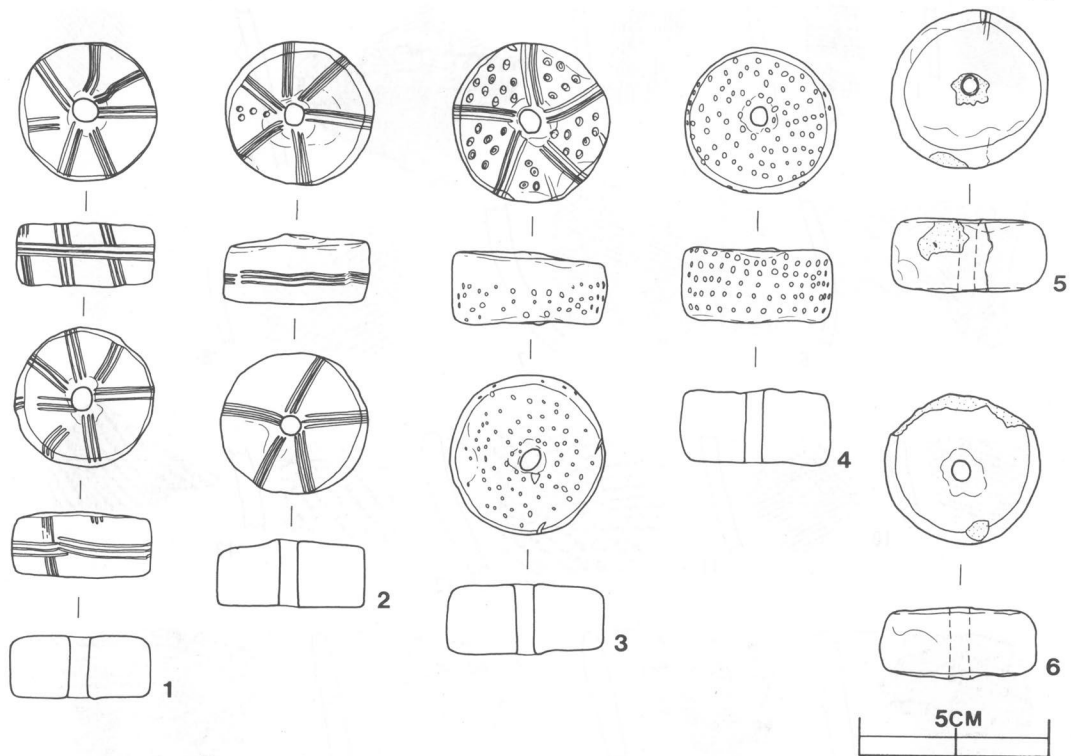
第92图 第5号住居跡出土遺物実測图



第93图 第5号住居跡出土遺物実測図



第94图 第5号住居跡出土遺物実測図



第95図 第5号住居跡出土遺物実測図

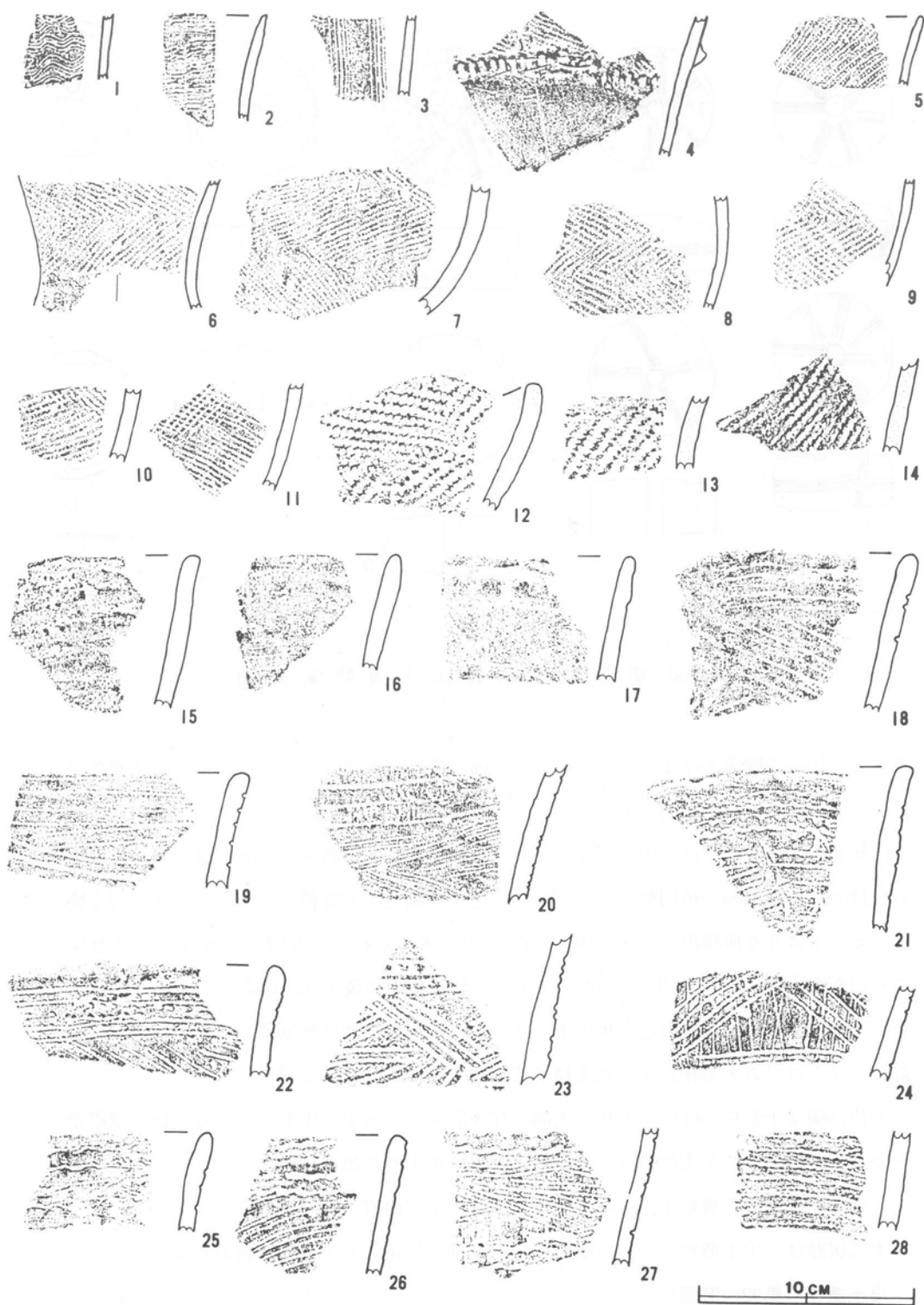
深さ5～10cmの壁溝がほぼ全周している。床面は中央部が踏み固められて良好な状態だが、壁際はソフトロームでやや軟弱である。各コーナー部が低くなっており、全体的に北側に向かってわずかに傾斜している。炉跡は中央よりやや北側に検出され、床面を約10cm程掘り窪めた地床炉で、長径110cm・短径75cmの楕円形を呈し、暗赤褐色土や褐色土が堆積している。炉床は硬く焼けている。ピットは9か所検出され、支柱穴はP1～P4と考えられる。規則的に配列されており、掘りこみ口が広がっている。Psは貯蔵穴である。住居跡内の覆土は、色調から大きく3層に分けられ、上層に黒色土、床面付近に褐色土、その他は暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子と一部にソフトローム・炭化粒子・焼土粒子等を含み全体的に締りは弱い。

遺物は縄文土器片・弥生土器片・土師器片が混在して多量に出土している。特に壁際からの出土が多く、その中でも南側のコーナー付近からは集中的な出土状態がみられる。弥生の壺形土器・小形壺、土師器の甕形土器・坏・埴がほぼ完形で床面直上から検出されている。

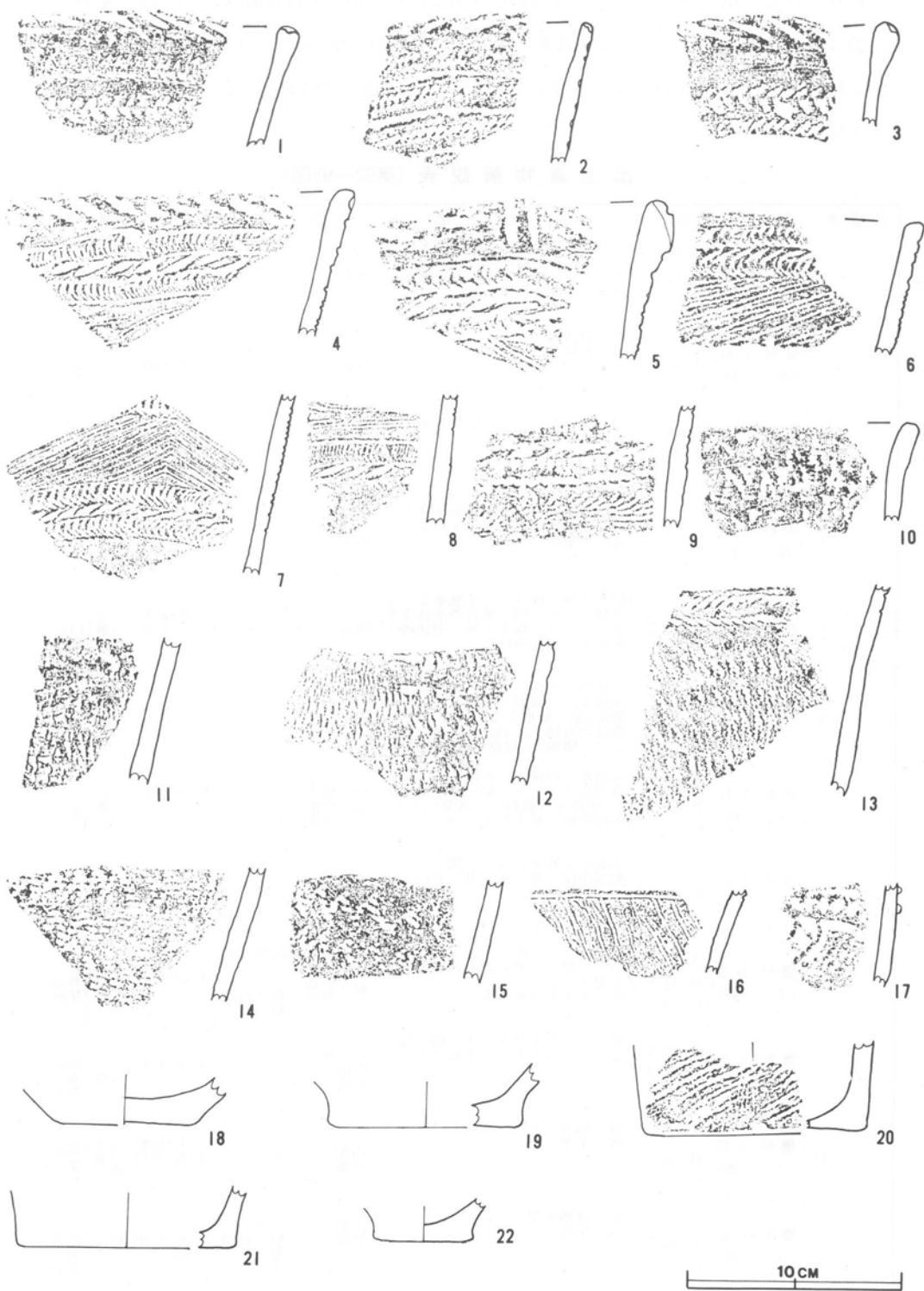
本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第92～97図)

第96図1～11は弥生土器片である。1・2は楕目による波状文、3は懸垂文を施し、4は頸部に小瘤を貼付している。5～11は縄文を有し羽状を呈している。12～14は胎土に繊維を含み、縄



第96图 第5号住居跡出土土器拓影图



第97图 第5号住居跡出土土器拓影图

文を有している。15・16は無文。17は輪積痕を有し、18・19は平行沈線文、20・21は変形爪形文、22・23は有節沈線文、25～28は変形爪形文を施している。第97図1～9は連続爪形文を配し、10～15は貝殻文、16は捺糸文、17は浮線文を有している。18～22は底部で、20は胴下半部に付加条縄文を呈している。

出土遺物解説表(第92～95図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-5	1 壺形土器 (弥生)	A 18.8 B 10.8	口一複合口縁を呈し、その下端にキザミ目と小瘤貼付。口唇部一キザミ。口一無文。頸一羽状縄文。胴部との境は無文。	内面一ナデ	良好・砂礫・明赤褐	口縁部90% 第92図一1
	2 壺形土器 (弥生)	B 18.0 C 6.9	胴一羽状縄文。 底一木葉痕。	内面一ナデ	普通・砂礫・赤	50% 第92図一2
	3 甕形土器 (弥生)	A (16.0) B 20.3	口唇部一キザミ。付加条縄文を施文。	内面一ナデ	良好・砂粒・にぶ い褐	80% 第92図一3
	4 壺形土器 (弥生)	B 19.9 C 7.3	器面全体に付加条縄文を施文している。頸部と胴部の境は無文。 底一木葉痕。	内面一ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 橙	70% 第92図一4
	5 小形 壺形土器 (弥生)	B 12.3 C 6.0	胴上半部一櫛目による懸垂文で3区割し、その間に櫛目の波状文を呈している。胴下半部一羽状縄文を施文。底一布目痕。	内面一ナデ	普通・砂粒・にぶ 砂礫 い黄 橙	85% 口縁部欠損 第92図一5
	6 壺形土器 (弥生)	A (16.9) B 33.0 C 8.5	口唇部一キザミ。口一櫛目による波状文、口縁部と頸部との境に微降帯。頸一懸垂文で6区割した間に櫛目の波状文。胴部との境に櫛目による横線文。胴縄文。底一木葉痕	内面一ヘラミガキ	普通・砂礫・にぶ い橙	75% 第93図一1
	7 壺形土器 (土師)	A 20.7 B 26.5 C 6.9	底部から口縁部にかけて外反し口唇部にスリット。胴一強く張り出し、中位から直線的に底部に至る。胴部中位に最大径をもつ。	口一横ナデ 内面一ナデ 胴一外面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ スコ い黄 リア 橙	75% 第94図一1
	8 壺形土器 (土師)	B 18.0 C 8.2	平底から外方に大きく開く。 胴部中位一強く張り出している。	内面一ナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・橙	60% 外面に煤付着 第94図一2
	9 甕形土器 (土師)	A 14.7 B 14.8 C 4.3	頸一「く」の字状。口一辺一外反している。胴一ややゆがみのある球状を呈す。 底一若干上げ底である。	口一刷け目調整のあとナデ 内面一ヘラナデ 胴一外面一刷け目調整	軟弱・砂粒・にぶ い褐	99% 外面摩滅 第94図一3
	10 甕形土器 (土師)	A 16.6 B 19.4 C 5.0	頸一「く」の字状を呈す。胴一扁平なふくらみをもって平底に至る。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	85% 外面に煤付着 第94図一4
	11 甕形土器 (土師)	B 13.9 C 10.2	胴一外方に大きく膨らむ。 底一平底。	内面一ナデ 外面一ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 雲母 い黄 橙	底部100% 第94図一5
	12 甕形土器 (土師)	B 18.2 C (7.0)	胴一球形を呈す。 底一平底。	内面一ヘラナデ 外面一上一刷け目調整 下一ナデ	やや・砂礫・橙 軟弱	75% 内面に煤付着 第94図一6
	13 埴形土器 (土師)	B 9.5 C 4.6	体部一扁平な球形を呈す。 底一やや窪む。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ、摩滅	普通・砂粒・浅黄 橙	25% 第94図一8

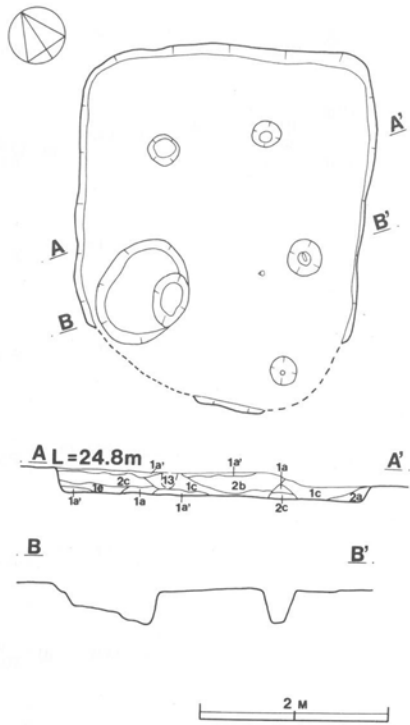
SI-5	14	埴形土器 (土師)	A 11.0 B 8.9 C 3.9	口一わずかに内彎。 体部一扁平な球形を呈す。 底一わずかに窪む。	内面一ナデ 外面一摩滅	軟弱・石英・にぶ い橙	70% 第94図-7	
	15	小形丸底 壺形土器 (土師)	B 12.4	体部一横に張る球状を呈している。	内面一ヘラナデ, 上 指おさえ, 摩 滅 外面一ヘラミガキ, ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	65% 内面に稜痕 第94図-9	
	16	紡錘車	3.65×3.7 29.5 g				普通・砂粒・橙	100% 第95図-1
	17	紡錘車	3.8×3.95 33.5 g				普通・砂粒・橙	100% 第95図-2
	18	紡錘車	4.2×4.1 42.5 g				普通・砂粒・橙	100% 第95図-3
	19	紡錘車	3.8×4.0 38.5 g				普通・砂粒・橙	100% 第95図-4
	20	紡錘車	4.2×4.2 40.5 g				普通・砂礫・灰褐	90% 第95図-5
	21	紡錘車	3.9×4.2 34.0 g				普通・砂礫・明赤 褐	80% 第95図-6

第6号住居跡（第98図）

本住居跡はB2b7調査区を中心に確認されたものである。北側コーナー・北東壁・東側コーナーが現存するのみであった。南側はグリッド発掘時の掘り下げにより破壊され、南東側が4号住居跡と重複しており、西側は攪乱によって明瞭でない。

残存部から推定すると、主軸方向はN-35°-Eを指し、長軸3.8m・短軸3.1mの隅丸長方形状を呈するものと思われる。残存壁は壁高20cm程で、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。ロームの掘りこみは10cmぐらいである。床面はほぼ平坦であるが、ソフトロームでやや軟弱。木の根による攪乱をうけている。ピットは6か所検出され、深さ30~43cmを測るが支柱穴は不明である。西側に土壌状の落ちこみがあり、長径115cm・短径95cm・深さ20cmの楕円形を呈し、南東側が約10cm低くなっている。性格は不明である。住居跡内覆土は、暗褐色土と褐色土が堆積しており、ローム粒子と一部にローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み締りがある。

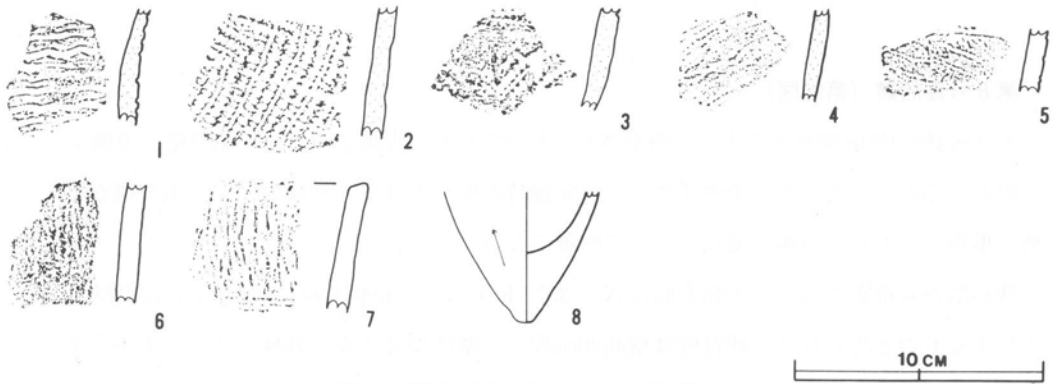
遺物は覆土中から極少量の縄文土器片が出土している。縄文前期の黒浜式と浮島式に比定される土器群である。



第98図 第6号住居跡実測図

出土遺物 (第99図)

1～4は胎土に繊維を含み、1は太めの沈線による波状文、2～4は縄文を呈している。5は捺糸文、6・7は貝殻文を施文している。8は尖底土器である。



第99図 第6号住居跡出土土器拓影図

第7号住居跡 (第100図)

本住居跡はB2c7調査区を中心に確認されたもので、北側が6号住居跡、西側が2号土城、南東側が8号住居跡と重複している。明確に住居跡のコーナー部がとらえられたのは、南西壁に付随する両コーナーだけである。

残存部から、主軸方向はN-38°-Eを指し、長軸3.6m・短軸3.2mの隅丸形状を呈するものと思われるが明瞭でない。床面はほぼ平坦であるがやや軟弱である。炉は有さない。ピットは16か所検出されたが、特に東側と南側に集中している。深さは20cm前後で比較的浅く、支柱穴は不

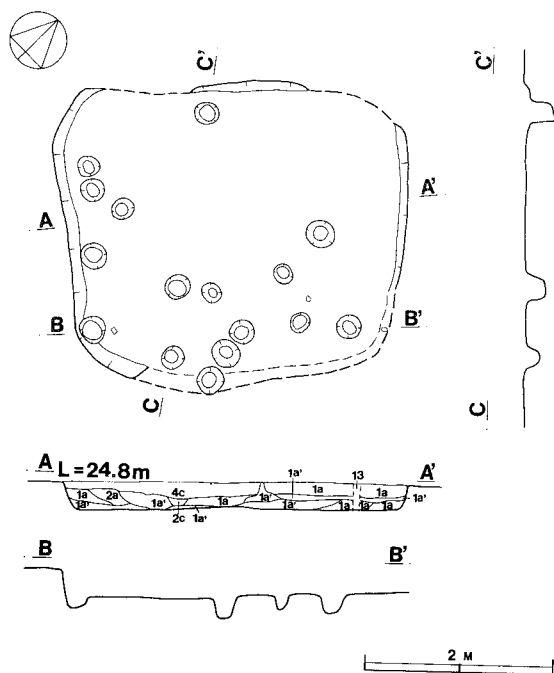
明である。住居跡内の覆土は、黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積しており、ローム粒子を含み締りがある。

遺物は少量の縄文土器片が覆土中から出土している。これら土器群は、縄文前期の黒浜式と浮島式に比定されるものである。床面あるいはそれに密着した状態での出土状況がみられないし、遺物の量も少ないので時期決定には問題があるが、本住居跡は縄文時代前期の遺構であろう。

出土遺物 (第101図)

1～6は胎土に繊維を含み、1～3は沈線文を施している。4～6は地文に縄文を有し、4は爪形文を配している。7・8は撚糸文、9は縄

文、10～14は平行沈線文、15は口唇部にキザミを施し、口縁部に沿って有節沈線文その上半截竹管による刺突文を加えている。16は変形爪形文を有す。



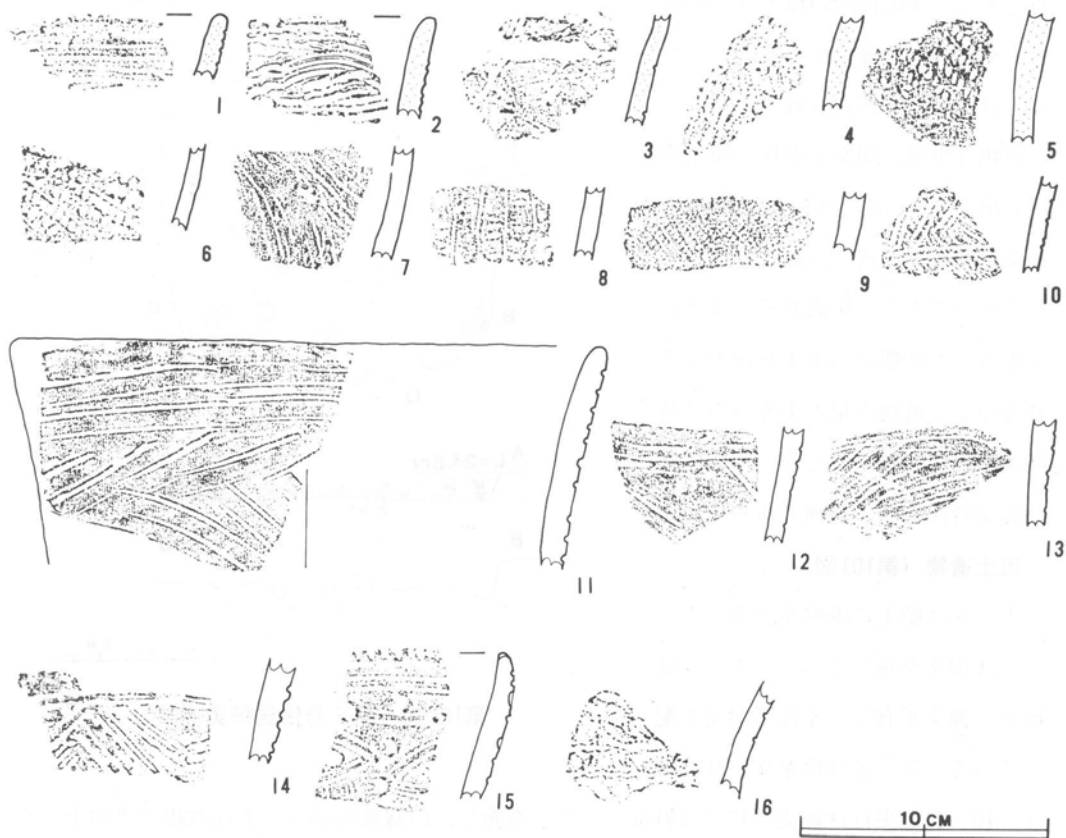
第100図 第7号住居跡実測図

第8号住居跡 (第102図)

本住居跡はB2ds調査区を中心に確認されたもので、北西側が7号住居跡、北東側が4号住居跡と重複している。

残存壁の状況から、主軸方向はN - 47° - Eを指し、長軸4m・短軸3.5mの隅丸形状を呈するものと推定される。残存壁高は10～30cmを測り、壁はなだらかに外傾して立ちあがっている。床面はソフトロームで軟弱であるが、ほぼ平坦をなしている。炉は有さない。ピットは14か所検出されたが、支柱穴は不明である。南側には主軸方向に沿って長径60cmぐらいの楕円形状のピットが並列しているが、性格は不明である。ピット内には暗褐色土・褐色土が堆積している。住居跡内の覆土は、暗褐色土・極暗褐色土・褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックを含み全体的に締りがある。

遺物は少量の縄文土器片が出土している。南側からの出土が多く、浮島期の深鉢形土器片が床面から検出されている。これら出土遺物等から、本住居跡は縄文時代前期に比定される遺構と思われる。



第101図 第7号住居跡出土土器拓影図

出土遺物 (第104図)

1～6は胎土に繊維を含み、1～4は広義の茅山式、5・6は地文に縄文をもつ黒浜式に比定される。7～9は変形爪形文、10～13は連続爪形文を有している。14は貝殻文、15は縄文、16～18は平行沈線文を施している。

第9号住居跡 (第109図)

本住居跡はB2f₆調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北西部に位置し、西側が13号住居跡、東側が12号住居跡、南側が11号住居跡と重複している。

重複関係が激しいために北側部しか残存していないが、現存形の状況から、長径方向はN-10°-Eを指し、長径5.7m・短径5.2mの楕円形状を呈するものと思われる。壁高は10cm程で、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はソフトロームでやや軟弱であるが、ほぼ平坦をなしている。炉跡が中央よりやや北東側に検出され、床面を12cm掘り窪めた地床炉で、多量の焼土を含み炉床は硬く焼けている。炉の南側は切断されているため形状や規模は不明である。ピ

ットは3か所検出され、深さ25cm前後を測る。いずれも支柱穴と考えられる。住居跡内の覆土は、褐色土と床面付近に明褐色土が自然堆積している。

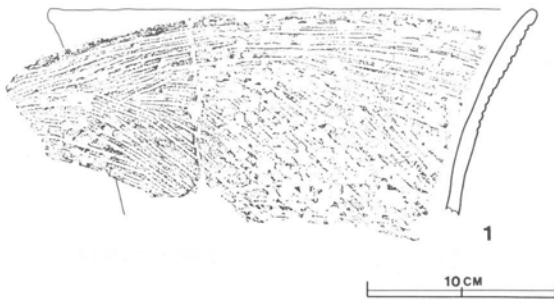
遺物は少量の縄文土器片がいずれも床面に密着した状態で出土している。また、炉跡上より深鉢形土器の口縁部が検出されている。これらの土器群は、ほとんど浮島式のものである。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の浮島期に比定される遺構と思われる。

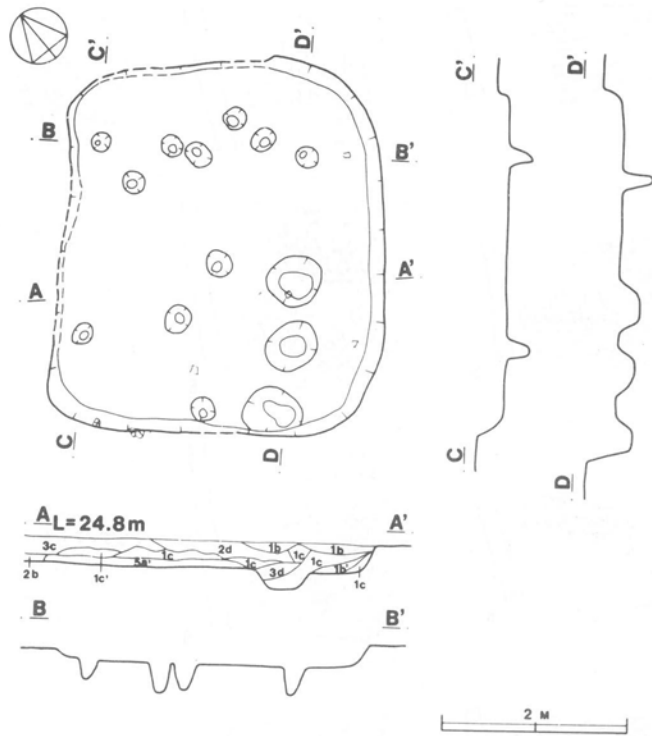
出土遺物 (第103・105・106図)

出土遺物解説表 (第103図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-9	1	深鉢形土器 (縄文)	A (26.0)	口-半截竹管具による平行沈線文。	内面-ヘラナデ 内・外面-摩滅ぎみ	やや・砂粒・橙 軟弱 スコア リア	口縁部37% 第103図-1

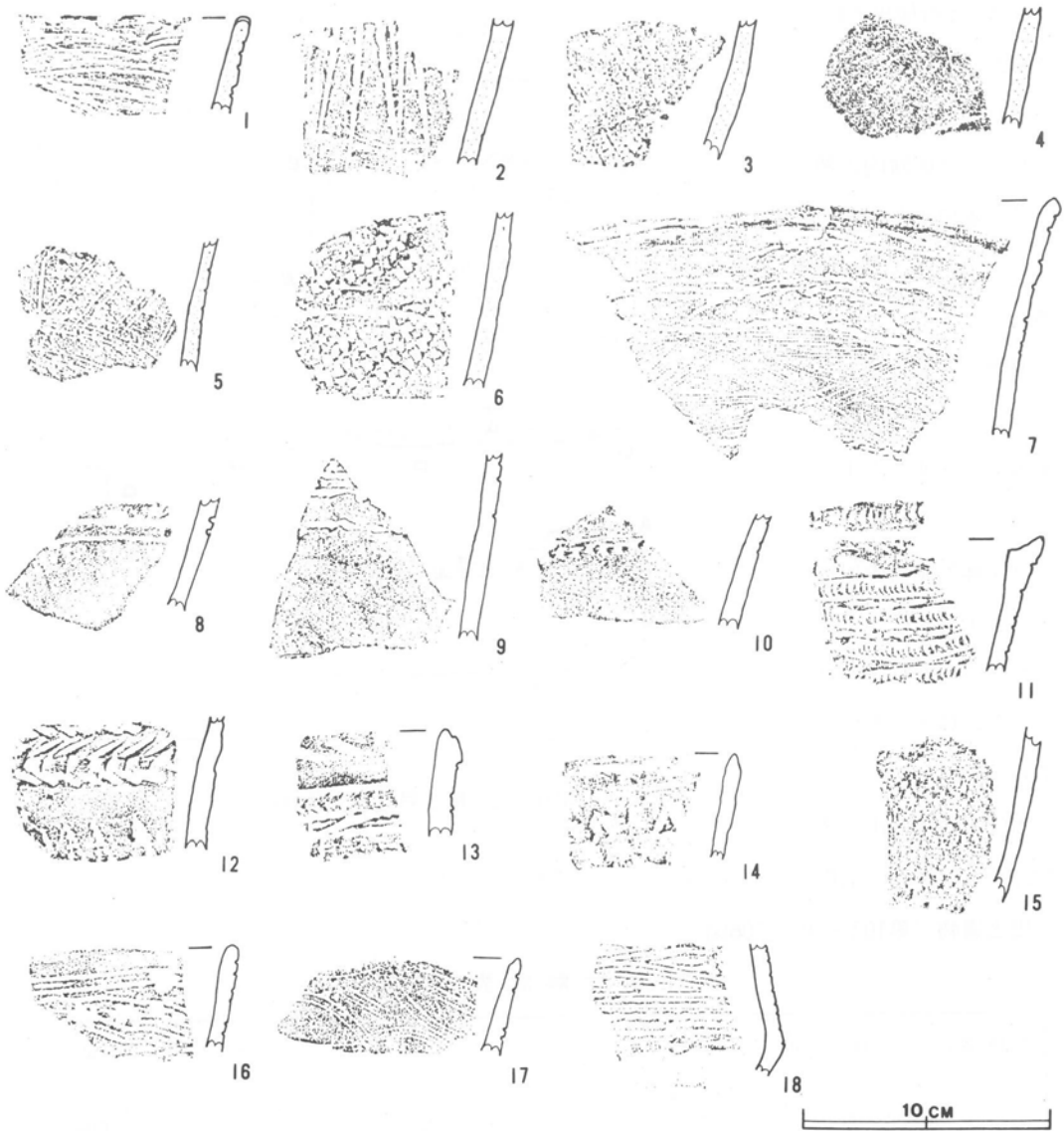


第103図 第9号住居跡出土遺物実測図



第102図 第8号住居跡実測図

第105図1・2は胎土に繊維を含んでいる。3・4は口縁部で無文，5～15は平行沈線文を有し，12は地文にまばらな捺糸文，13は輪積痕の上に三角文，14は半截竹管による刺突文，15は円形竹管文を押捺している。16～18は変形爪形文，19～21は連続爪形文を有している。22・23と第106

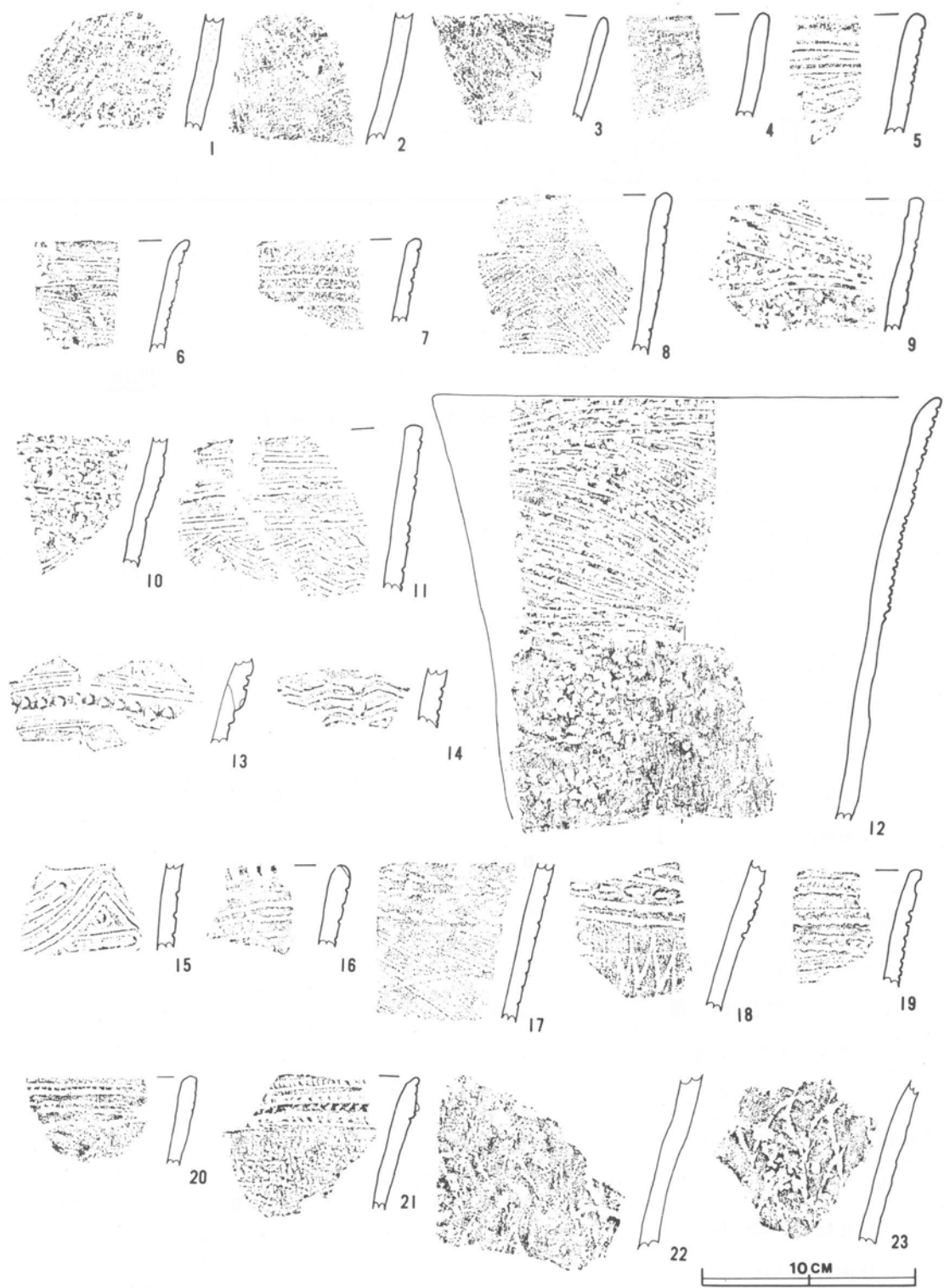


第104図 第8号住居跡出土土器拓影図

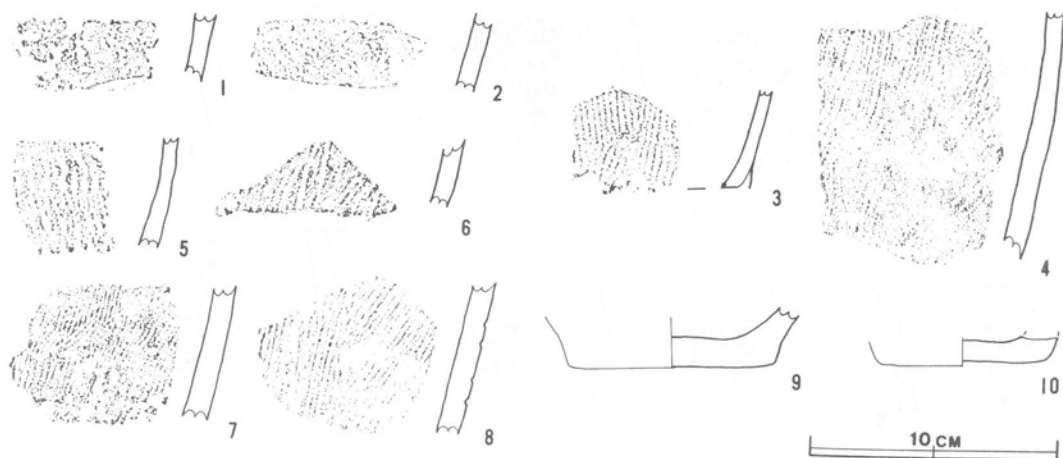
図1・2・5は貝殻文を施文している。第106図3は縄文，4・6～8は撚糸文を施文している。
9・10は底部である。

第10号住居跡（第107図）

本住居跡はB2h6調査区を中心に確認されたもので、北側は11号住居跡、南東側は47号住居跡に隣接し、西側は23号土壌と重複しており、西側の小谷津に向かって低くなる傾斜地に位置している。



第105图 第9号住居跡出土土器拓影图

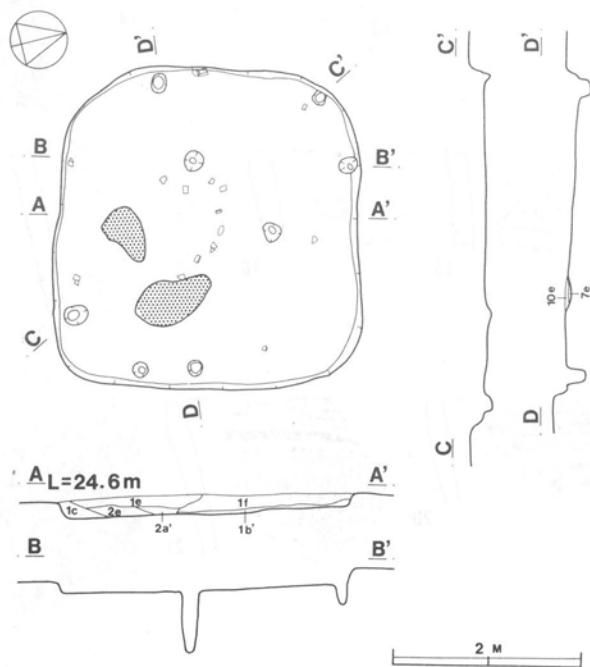


第106図 第9号住居跡出土土器拓影図

主軸方向はN-18°-Eを指し、長軸3.4m・短軸3.2mの隅丸方形を呈している。壁高は15cm前後を測り、壁は70~80°の角度で外傾して立ちあがっている。床質はソフトロームで軟弱である。床面は平坦だが南西コーナーに向かって低くなっている。炉跡は2か所検出され、便宜上、東壁寄りに位置する炉をF1号、南壁寄りに位置する炉をF2号と仮称しておく。F1号は長径85cm・短径45cmの楕円形、F2号は長径60cm・短径35cmのほぼ楕円形を呈し、いずれも床面を10cm程掘り窪めた地床炉で、多量の焼土を

含み炉床は硬く焼けている。ピットは壁際に6か所、内側に2か所検出されたが、いずれも比較的浅い。中央よりやや西側に位置するピットだけは深さ68cmと深い。支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、色調から大きく2層に分けられ、褐色土と暗褐色土が堆積している。ローム粒子と一部にハードローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を含み、床面付近は締りがある。

遺物は少量の縄文土器片が出土しているが、ほとんどが



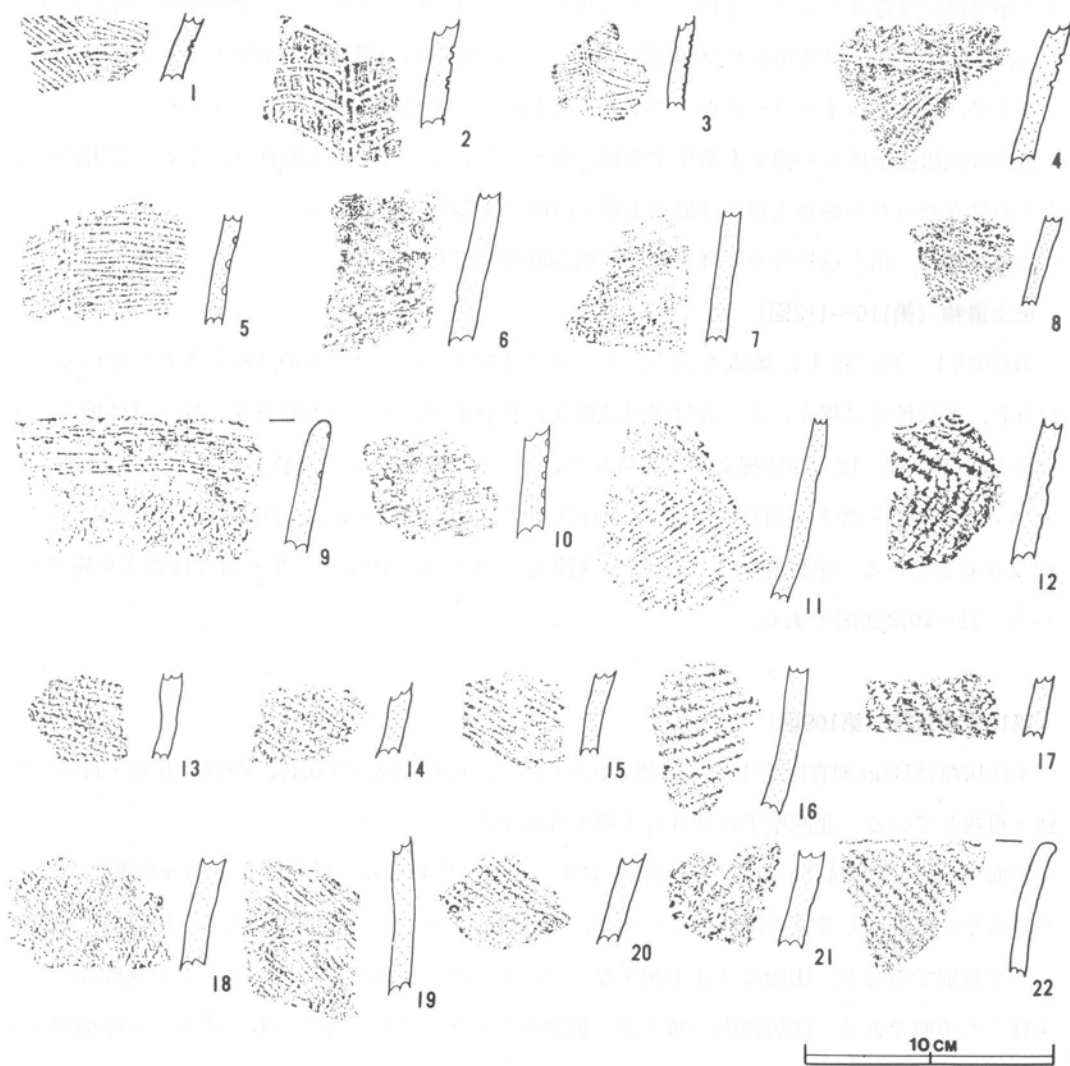
第107図 第10号住居跡実測図

中央からの出土である。これら土器群は繊維土器であり、床面に密着した状態で黒浜式の土器が検出されている。

本住居跡は、これら出土遺物等から縄文時代前期の黒浜期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第108図)

1～21は胎土に繊維を含み、1～5は沈線文を施し、2・5に円形竹管文を押捺している。6～8は繊維痕が認められ、9・10は有節沈線文を施している。11～21は縄文を施文しており、11・12は羽状縄文を呈している。22は口縁部で縄文が施文されている。



第108図 第10号住居跡出土土器拓影図

第11号住居跡（第109図）

本住居跡はB2g7調査区を中心に確認されたもので、北側が9号住居跡、東側が12号住居跡、西側が13号住居跡と重複しており、南側が10号住居跡と隣接している。

主軸方向はN - 70° - Wを指し、長軸5.8m・短軸5mの隅丸方形を呈するものと思われる。壁高は20～25cmを測り、壁は70～80°の角度で外傾して立ちあがっているが、西壁は不明である。床面は踏み固められており、ほぼ平坦をなしている。床面のレベルが9号住居跡より10～15cm、12号住居跡より10cm低い。炉跡は6か所検出され、いずれも床面を5～10cm程掘り窪めた地床炉で、焼土や焼土粒子を多量に含み炉床は硬く焼けている。ピットは30か所検出されたが規則性はなく、また中央部には存在しない。これらのおびただしいピット群と炉跡から、増築や建て替えが行なわれ、数次にわたって使用された住居跡であろう。住居跡内の覆土は、暗褐色土・褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み締りがある。

遺物は住居跡全体から縄文土器片が多量に出土している。これら土器群は、小破片で実測可能なものはなかったが繊維土器と浮島式土器・諸磯式土器に大別される。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物（第110～112図）

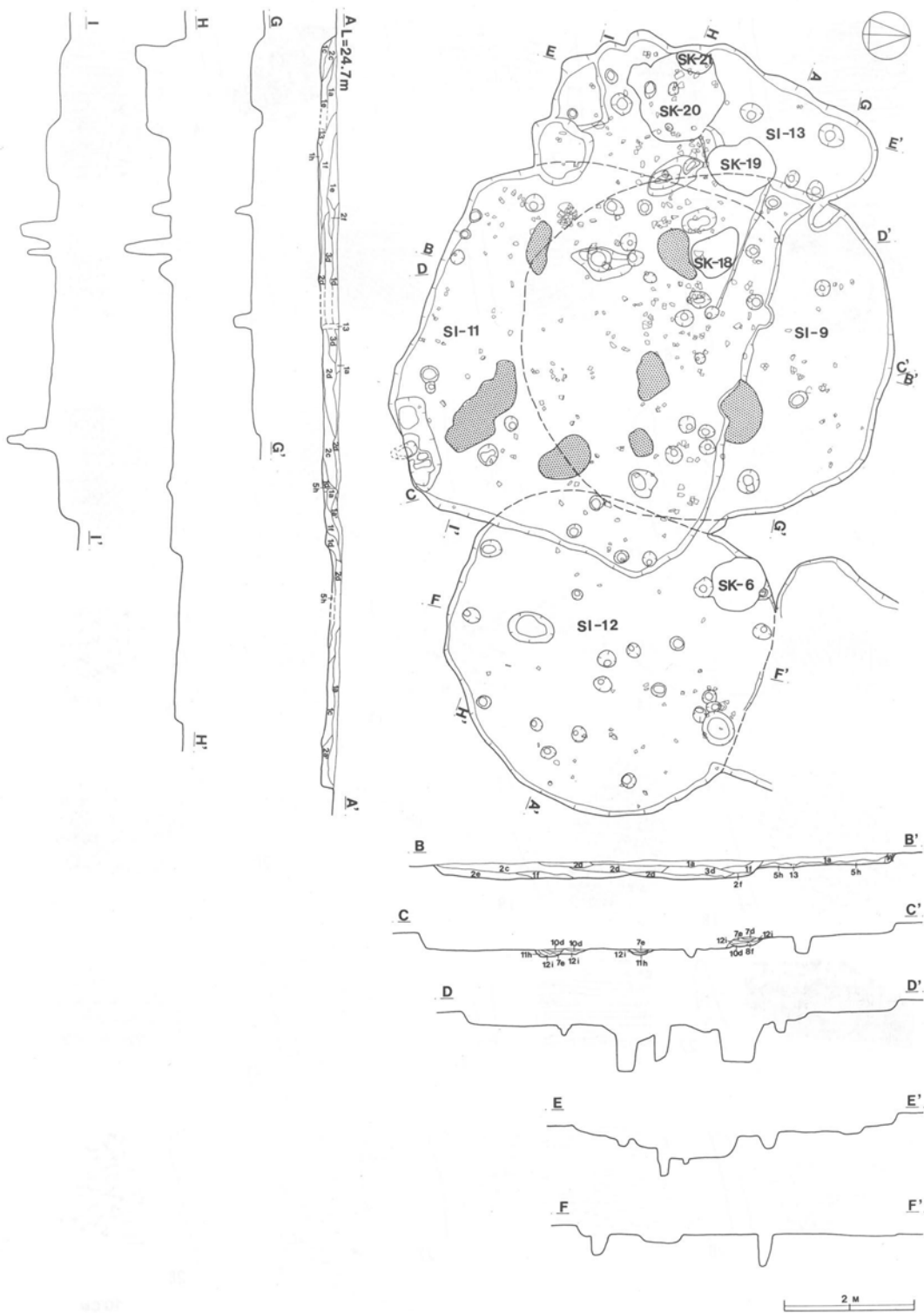
第110図1～19は胎土に繊維を含み、1～3は沈線文、5～11は有節沈線文を有している。2に有孔、3は地文に縄文、5～8は平行沈線文と組み合わせ、8に円形竹管文、10・11は地文に縄文を施している。12～19は縄文が施文されている。20～22は無文の粗製土器で、22には輪積痕が認められる。23～29と第111図1～14は平行沈線文を有し、15・16は変形爪形文、17～24は有節沈線文を有している。第112図1～3は浅い沈線文、4～8は撚糸文、9・10は貝殻文を施文している。11～19は底部である。

第12号住居跡（第109図）

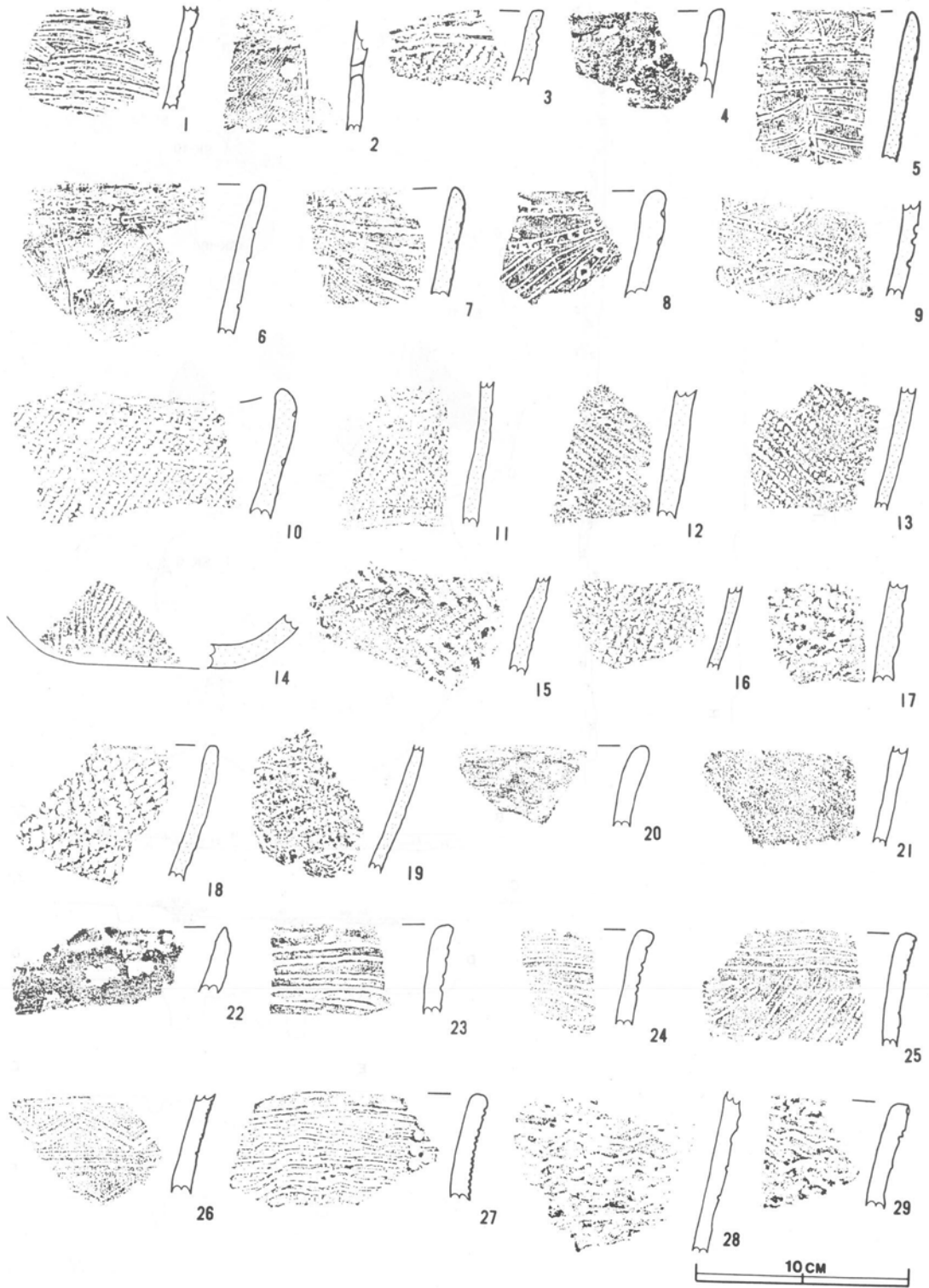
本住居跡はB2g8調査区を中心に確認されたもので、北側は18号住居跡、西側は9号・11号住居跡と重複している。北西壁下には6号土壌が存在する。

平面形状は、直径4.5m前後の円形状を呈するものと思われる。壁高は5～20cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっているが、壁面全般にわたって不明瞭である。床質はソフトロームで軟弱であるが、床面はほぼ平坦をなしている。ピットは21か所検出されたが規則性はなく、主柱穴も不明である。住居跡内の覆土は、色調から大きく3層に分けられ、褐色土・暗褐色土・明褐色土が自然堆積している。

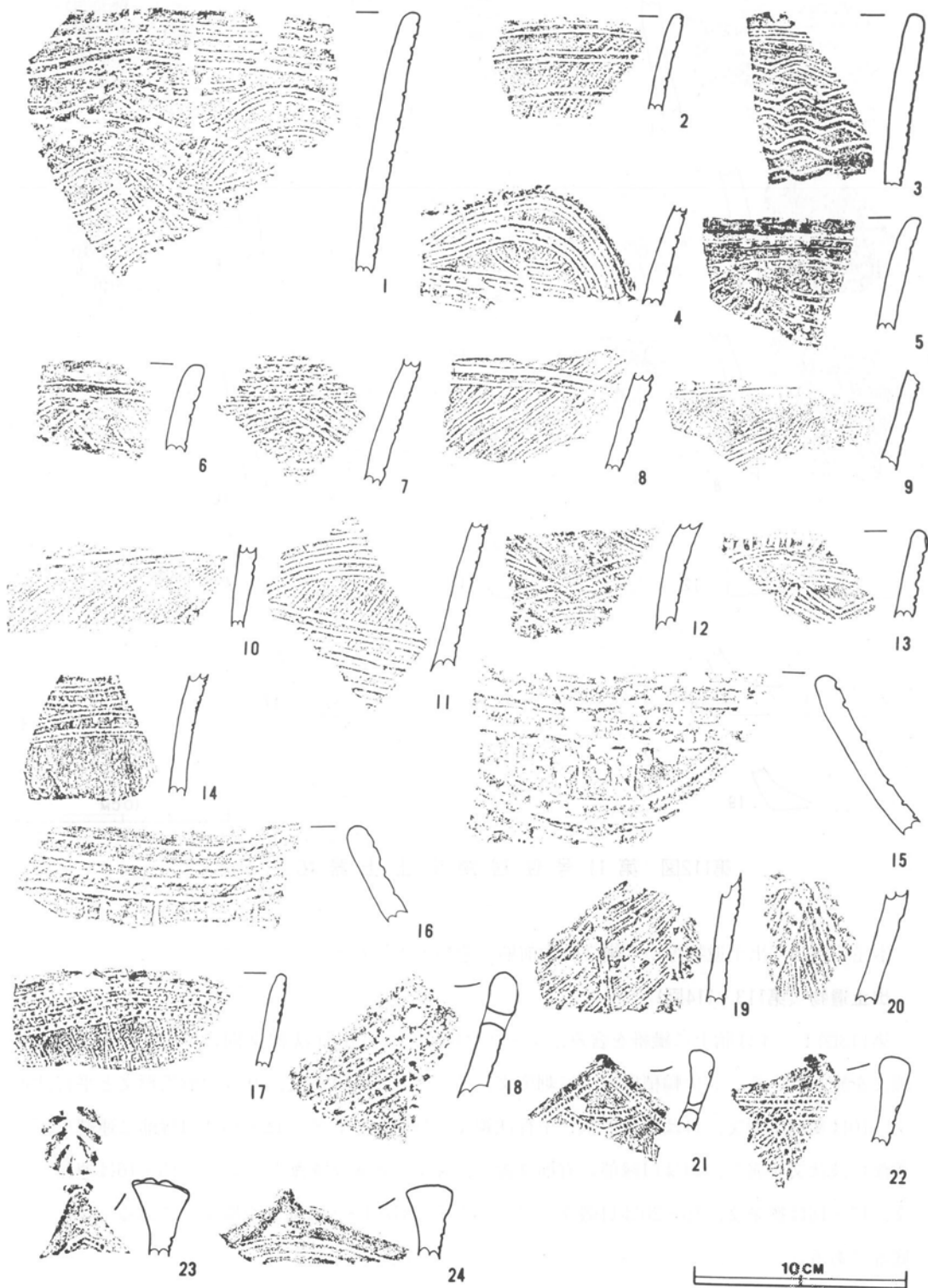
遺物は少量の縄文土器片が出土している。甕形土器の胴部が北東側床面から検出されている。これら土器群は、黒浜式・浮島式・諸磯式に比定される。



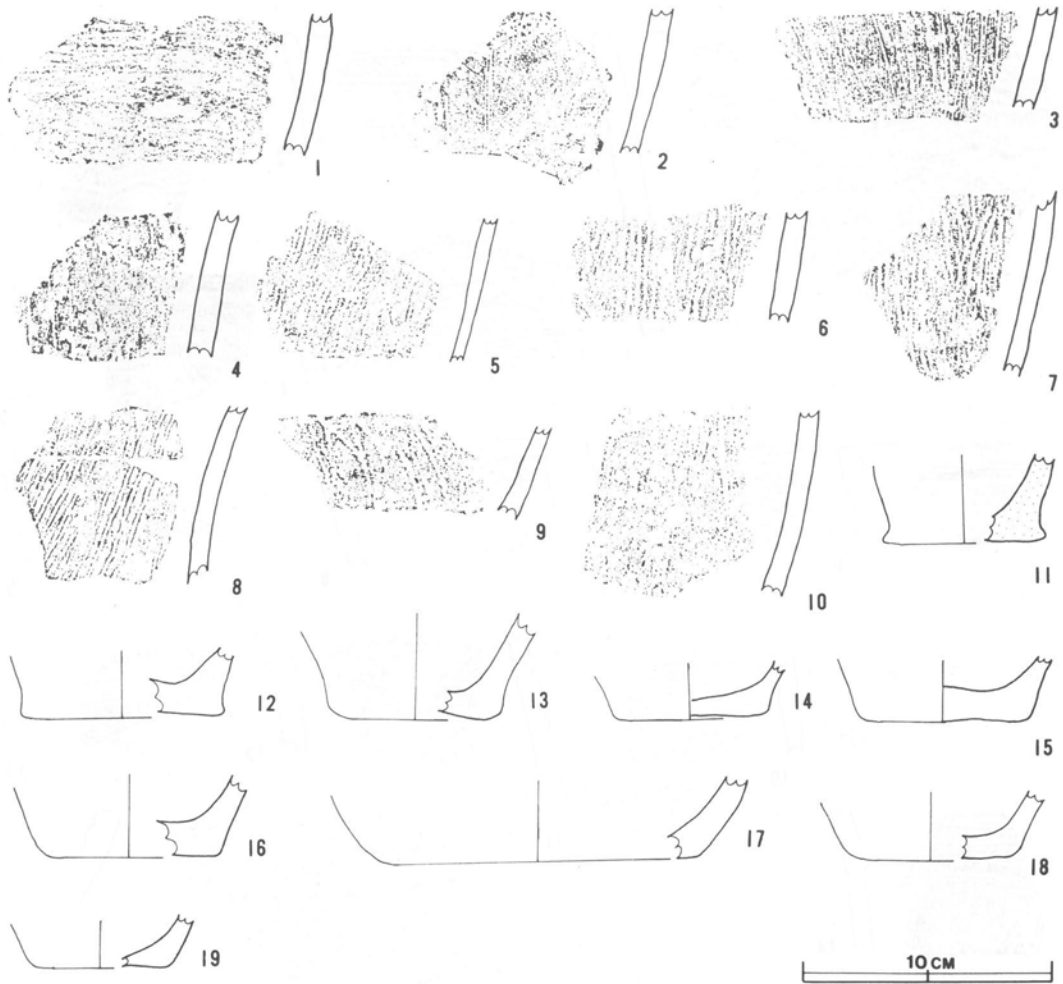
第109图 第9・11・12・13号住居跡実測図



第110图 第11号住居跡出土土器拓影图



第111图 第11号住居跡出土土器拓影图

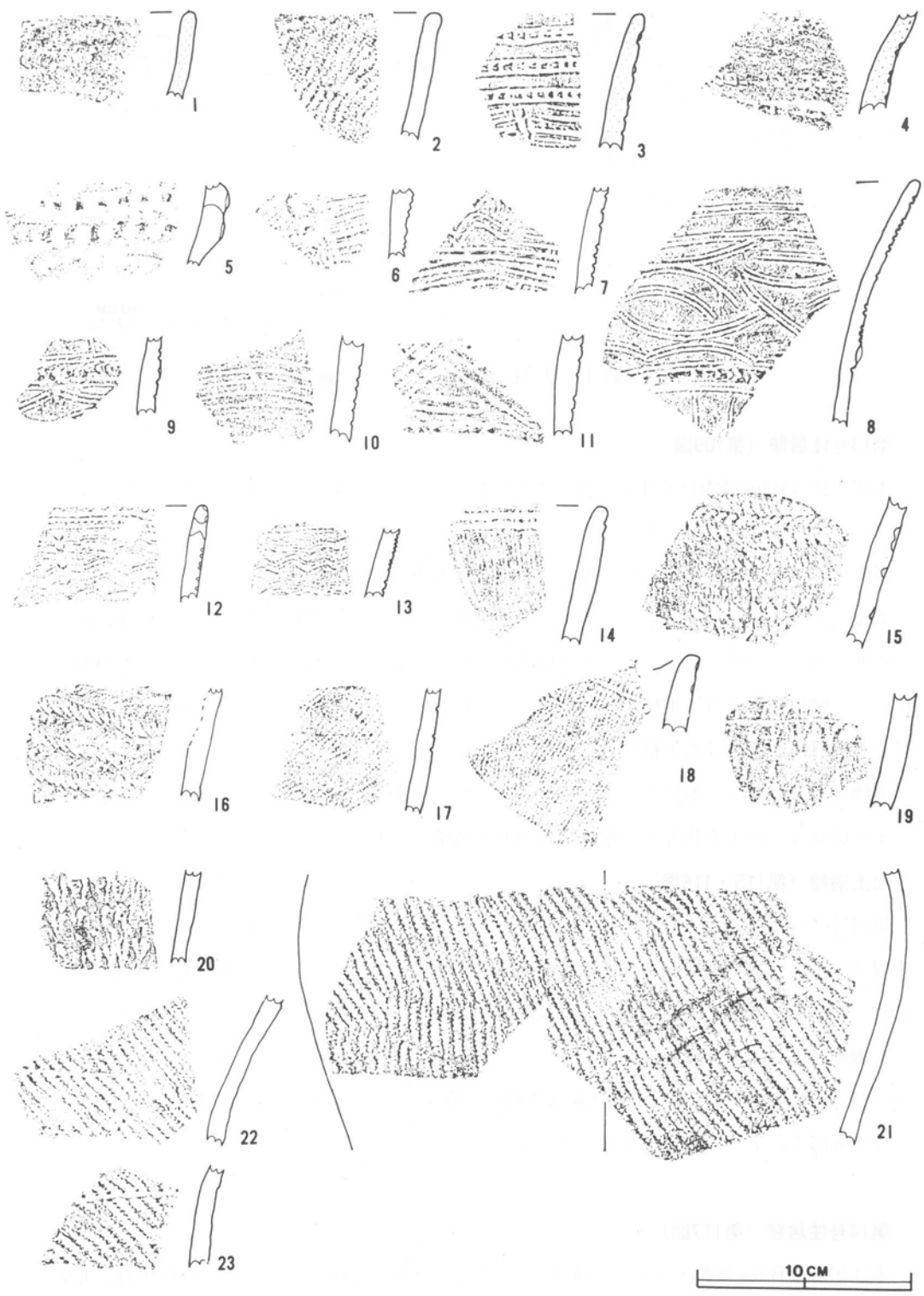


第112図 第11号住居跡出土土器拓影図

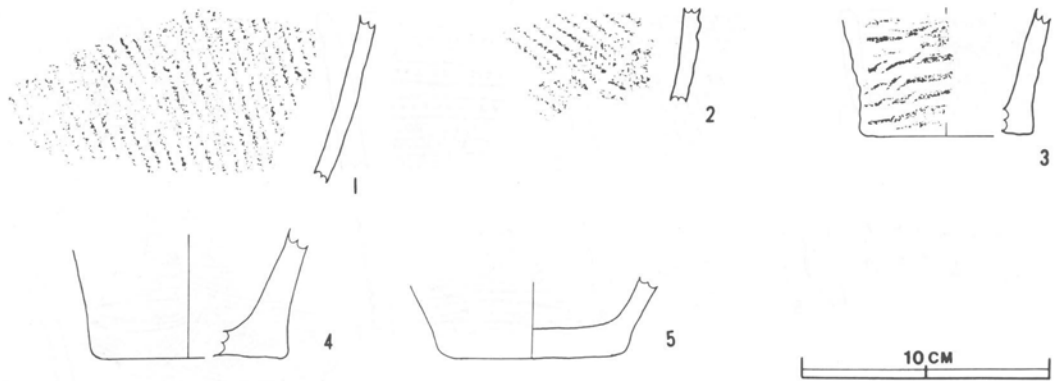
本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第113・114図)

第113図1～4は胎土に繊維を含み、1・2は縄文、3は平行沈線文間に爪形文、4は有節沈線文を施している。5は輪積痕の上に刺突文、6～8は平行沈線文、9は変形爪形文と平行沈線文、10は変形爪形文、11は三角形状に平行沈線文を施文している。12・13は口縁部に連続爪形文、頸部に波状文を施し、14は口縁部に有節沈線文、頸部に撚糸文を配している。15・16は連続爪形文、17・18は撚糸文、19・20は貝殻文、21～23と第114図1・2は縄文を施文している。3～5は底部である。



第113图 第12号住居跡出土土器拓影图



第114図 第12号住居跡出土土器拓影図

第13号住居跡 (第109図)

本住居跡はB2g6調査区を中心に確認されたものであるが、東側が9号・11号住居跡と重複しており、プランが明確とならなかったものである。

西側がわずかに残存するのみで規模・形状等不明瞭であるが、残存壁高は15～20cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はソフトロームで軟弱であり、中央部に向かってやや低くなっている。ピットは8か所検出されたが、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、褐色土と暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックと一部に極少量の炭化粒子を含み、床面付近は若干粘性を帯びている。

遺物は多量の縄文土器片が出土している。これらの土器群は、黒浜式・浮島式に比定される。本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

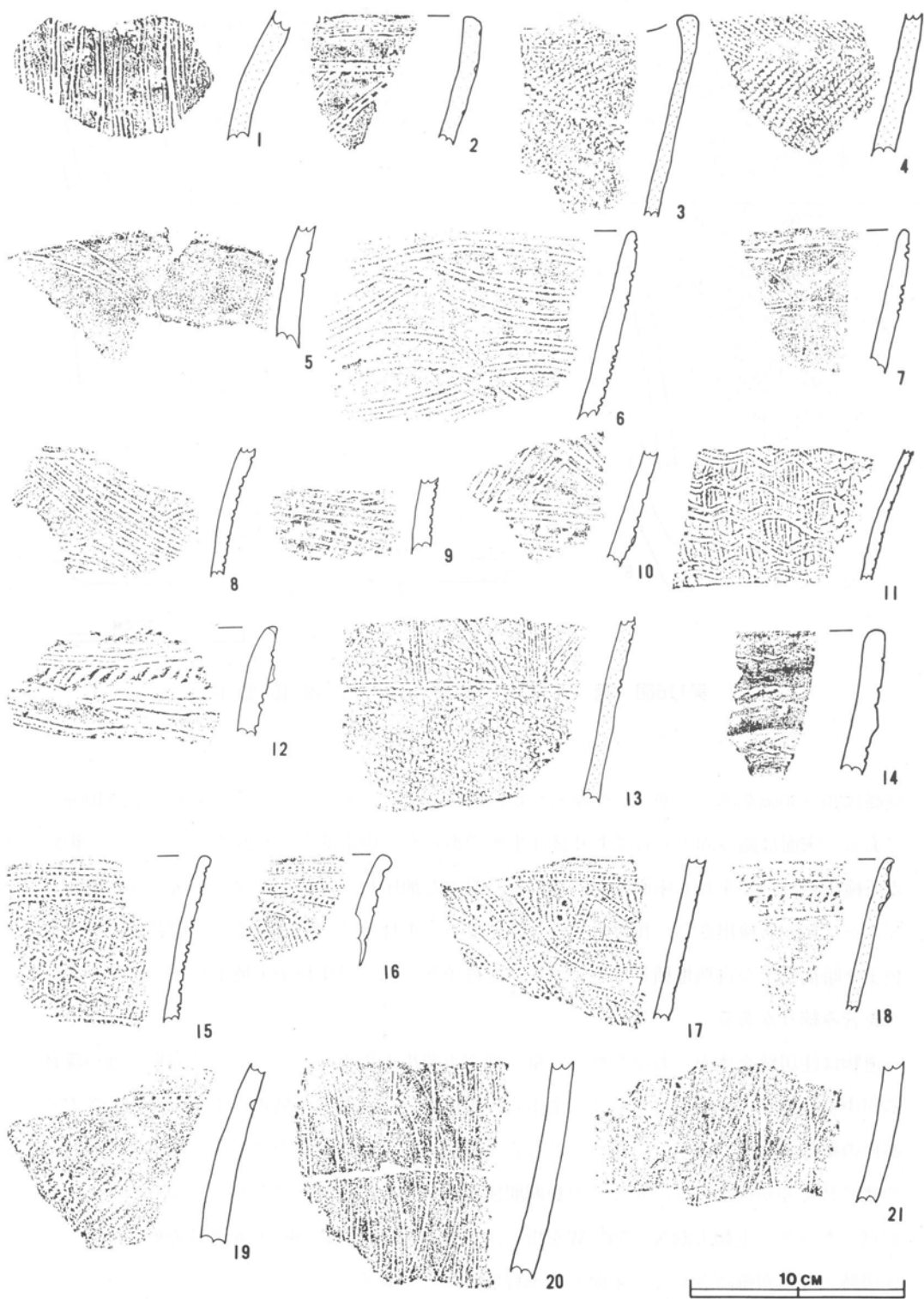
出土遺物 (第115・116図)

第115図1～4は胎土に繊維を含み、1は太い沈線文を施している広義の茅山式土器、2は有節沈線文、3は付加条縄文、4は羽状縄文を呈す黒浜式土器である。5は沈線文、6～13は半截竹管具による平行沈線文を配し、8～11は地文に撚糸文、12は隆帯を設けその上にキザミ、13は胎土に繊維を含み、地文に縄文を有している。14は変形爪形文、15～19は有節沈線文を有している。20・21と第116図1は胴部で平行沈線文を縦位に施文している。2～5は貝殻文を施している。6～8は底部で、7・8は繊維を含んでいる。

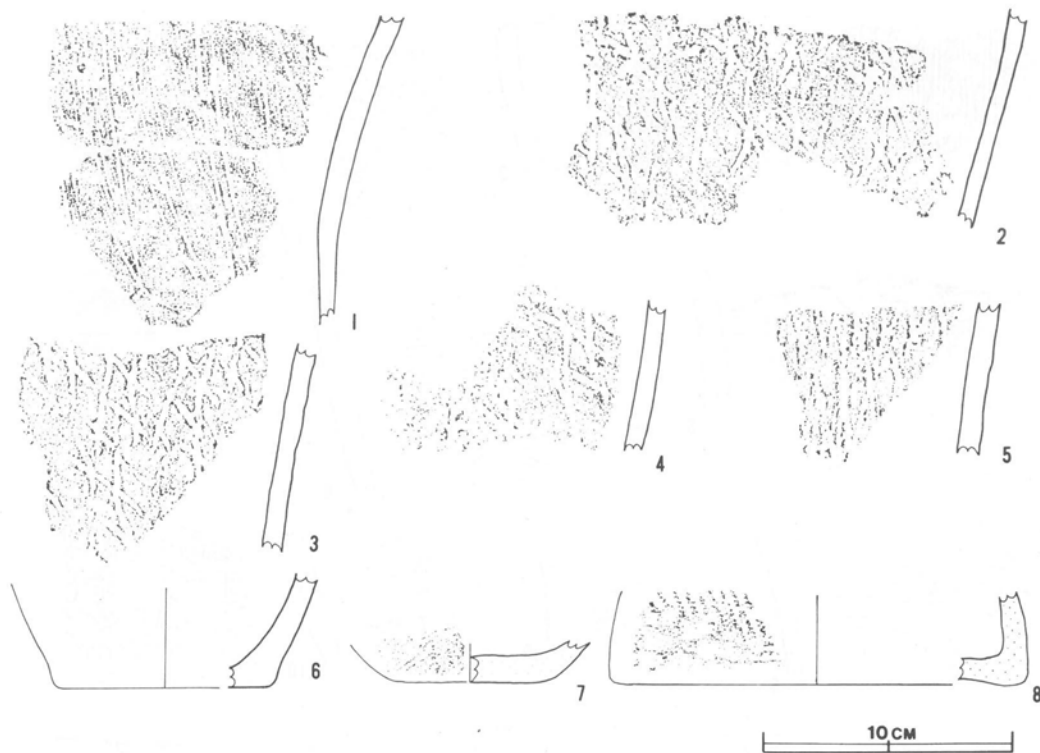
第14号住居跡 (第117図)

本住居跡はB2b9調査区を中心に確認されたもので、北側2mのところには2号住居跡、北東側1mのところには22号住居跡、西側には隣接して4号住居跡が存在する。

主軸方向はN-41°-Wを指し、長軸7m・短軸5.5mの南東辺が短い隅丸台形状を呈している。



第115图 第13号住居跡出土土器拓影图



第116図 第13号住居跡出土土器拓影図

壁高は20～30cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。東側は壁高10cmぐらいである。床面は踏み固められておりほぼ平坦であるが、中央部がやや低くなっている。炉跡は2か所検出され、いずれも床面を約10cm程掘り窪めた地床炉で、焼土を含み炉床は硬く焼けている。ピットは30か所検出され、比較的深いものが多い。支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、褐色土と暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子と一部に炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロックを含み締りがある。

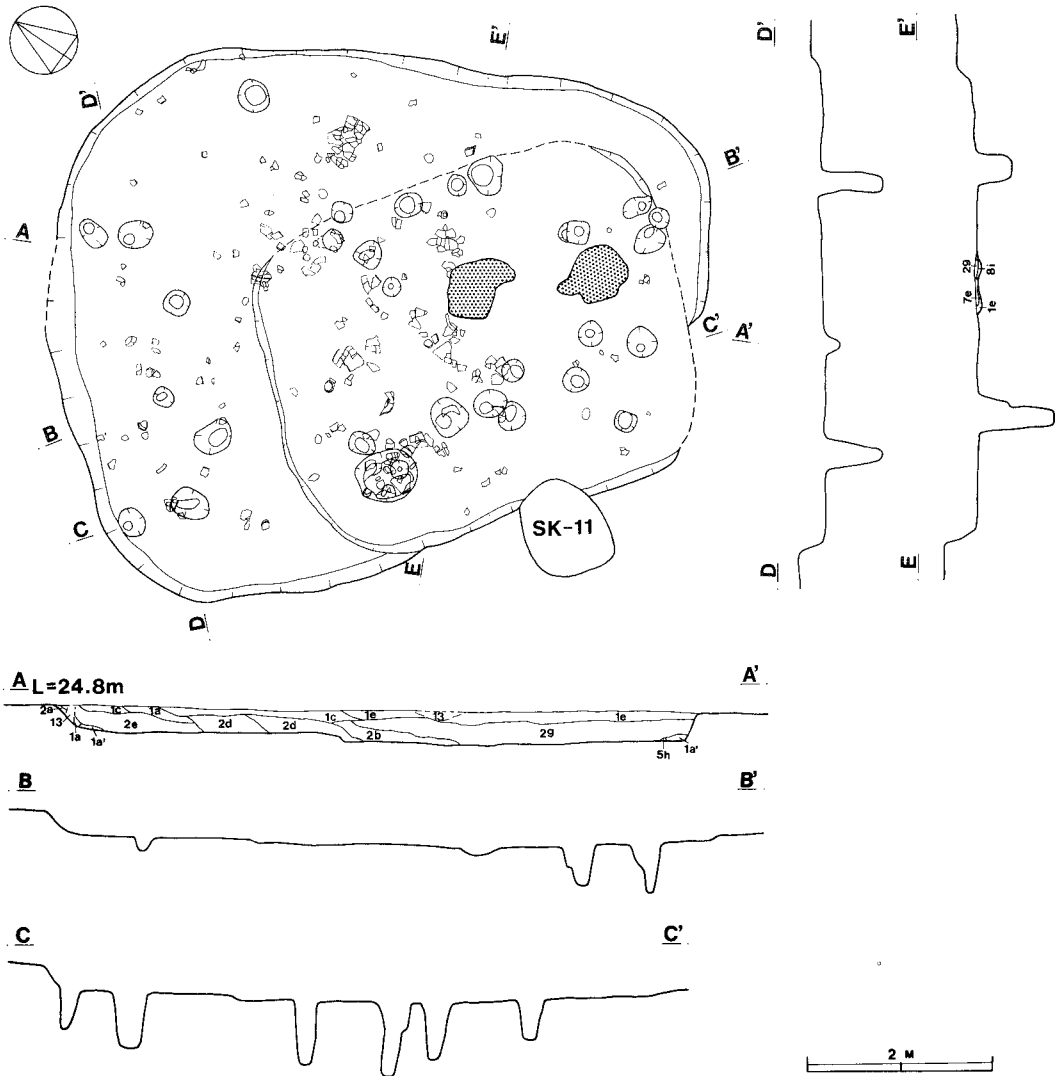
遺物は住居跡全体からおびただしい量の縄文土器片が出土している。ほぼ完形に近い深鉢形土器が中央付近から検出されている。茅山式・黒浜式・諸磯式・浮島式の土器が混在しており、土器片の編年的層準は示していない。これらの遺物の在り方や多くのピットから、本住居跡は増築や建て替え等が行なわれ、かなりの長期間使用されたものであることをうかがわせる。そういう観点にたつと、主軸方向N-53°-Wを指し、長軸4.4m・短軸3.6mの隅丸長方形形状を呈している住居跡の存在が確認される。床面も5cm程低くなっている。

出土遺物 (第118～123図)

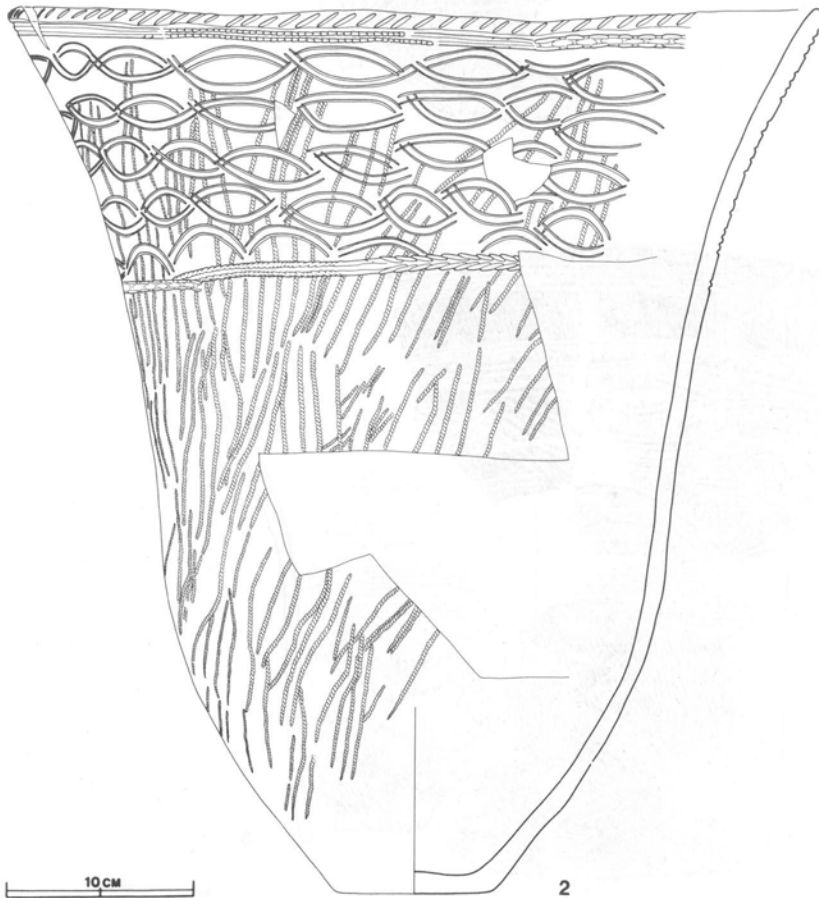
出土遺物解説表 (第118~120図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考	
SI-14	1	深鉢形土器 (縄文)	A (36.8) B 23.5	口一平行沈線文。 頸一半截竹管具による波状文。 地文に擦糸文を有す。	内面一ナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	口縁部20% 第118図-1
	2	深鉢形土器 (縄文)	A 43.1 B 46.8 C 8.2	頸一半截竹管具による柳葉状文。 胴部との境に有節沈線文。 地文にまばらな擦糸文を有す。	内面一ヘラナデ	やや・砂礫・にぶ 軟弱 い橙	70% 第118図-2
	3	深鉢形土器 (縄文)	A (43.0) B 9.7	口一平行沈線文と半截竹管具による 柳葉状文を施し、その上に半截 竹管文。 地文に擦糸文を有す。	内面一ヘラミガキ	良好・砂粒・明赤 褐	口縁部15% 第119図-1
	4	深鉢形土器 (縄文)	A (37.2) B 16.6	平行沈線文間に連続爪形文。	内面一ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ リア	口縁部20% 第119図-2
	5	深鉢形土器 (縄文)	A (41.3) B 32.2	口一有節沈線文。 頸一平行沈線による弧状文。 胴部との境に有節沈線文。 地文に擦糸文を有す。	内面一ナデ	普通・スコ・橙 リア 砂粒	口縁部35% 第119図-3
	6	深鉢形土器 (縄文)	A 21.6 B 13.7	口一平行沈線文。 頸一平行沈線文の上に爪形文。 地文に擦糸文を有す。	内面一ていねいなナ デ	普通・砂粒・明赤 褐	30% 第120図-1
	7	深鉢形土器 (縄文)	B 12.9	頸一平行沈線による鋸歯状文。 胴部との境に有節沈線文。 地文に擦糸文を有す。	内面一ナデ	普通・砂粒・明赤 褐	口縁部15% 第120図-2
	8	鉢形土器 (縄文)	A 18.1 B 16.4	胴部から口縁部に至るまでまばら な擦糸文を有す。	内面一ナデ	普通・砂粒・橙 砂礫	70% 第120図-3
	9	深鉢形土器 (縄文)	A (21.0) B 12.2	口一複合口縁で無文。 頸一繊維痕による沈線文を縦位に 施文。	内面一ナデ 外面一ヘラケズリ	普通・砂粒・灰褐 スコ リア	15% 第120図-4
	10	深鉢形土器 (縄文)	B 16.2 C 10.0	胴一擦糸文。	内面 底 >ヘラナデ	良好・砂粒・橙	底部 100% 第120図-5
	11	深鉢形土器 (縄文)	A 11.7 B 6.0	胴一擦糸文を施文。	内面一ていねいなヘ ラナデ 底一ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 い褐	底部 100% 第120図-6
	12	深鉢形土器 (縄文)	B 10.5 C 7.6	胴下半部一縄文を施文。 底一無文で平底。	内面一ナデ	軟弱・砂粒・にぶ い橙	底部 100% 第120図-7
	13	鉢形土器 (縄文)	A (23.6) B 8.3	口一頸一弧状文と半截竹管文を施 文、いずれも区画するために有節 沈線文。 地文に擦糸文を有す。	内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	頸部 20% 第120図-8
	14	鉢形土器 (縄文)	A 27.6 B 8.9	頸一やや外傾して立ちあがる。 口一90°近く内側に屈曲する。 口唇部一丸みをおびる。 胴一縄文。	内面 外面 >ヘラナデ	普通・砂礫・赤褐 雲母	口縁部25% 第120図-9
	15	鉢形土器 (縄文)	B 14.8	口一半截竹管具による平行沈線文。 胴一貝殻文。	内面一ナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア	口縁部15% 第120図-10

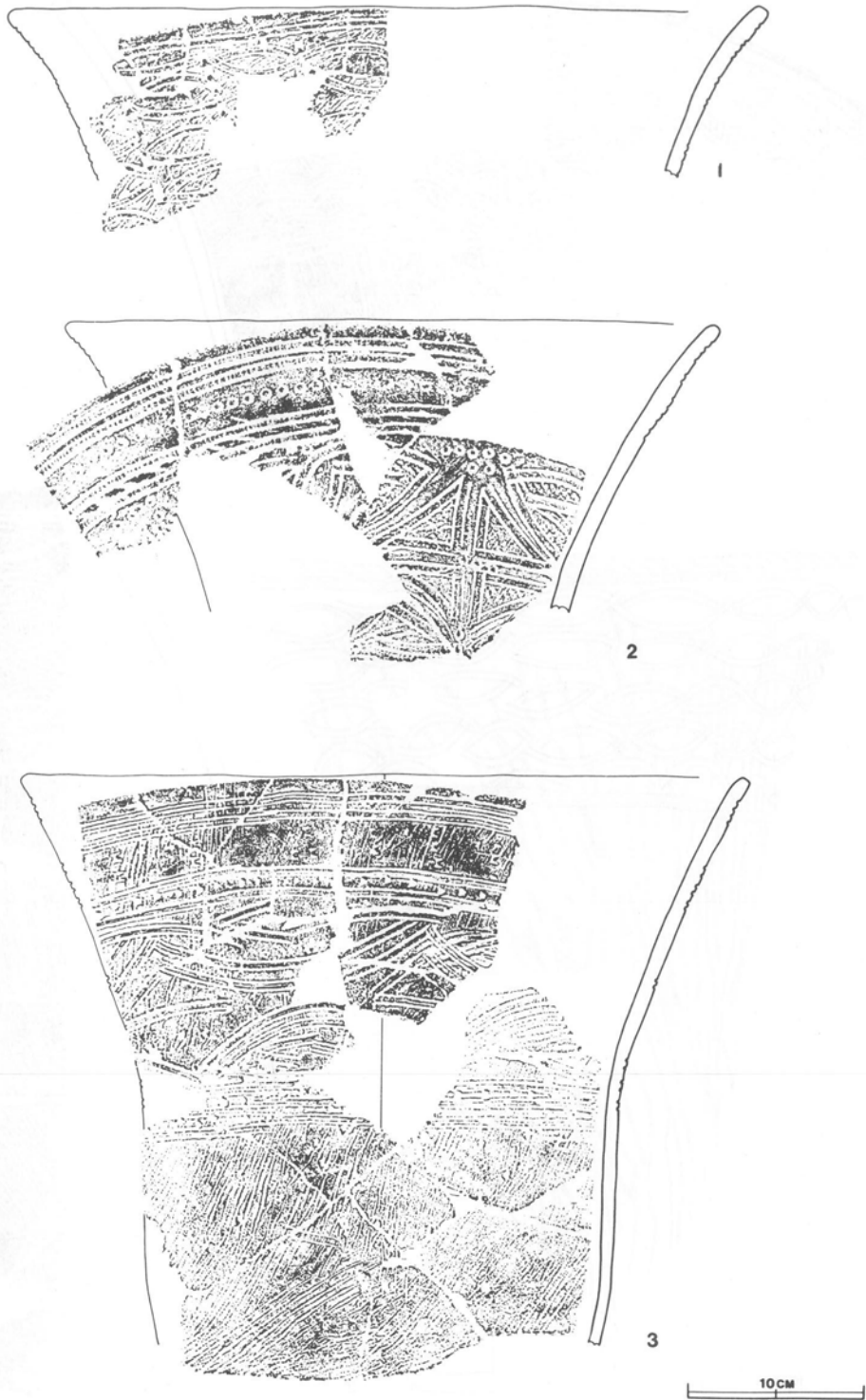
第121図1～11は胎土に繊維を含み、1～5は沈線文、6～11は縄文を施文している。12は輪積痕、13は斜行沈線文、14～20と第122図1～4は平行沈線文を有している。15・16は隆帯の上に刺突文、17と19は円形竹管文を押捺している。第122図2は瘤貼付、4は半截竹管具による刺突文を施している。5は波状口縁で櫛目による渦巻文を呈している。6は連続爪形文、7～17は有節沈線文を有し、9・10・12は地文に捺糸文、15～17は突起部にキザミ目を施している。18は貝殻文を施文している。第123図1・2は平行沈線文、3は刺突文、4は変形爪形文、5は円形竹管文を押捺している。2・3に補修孔をもつ。6～13は捺糸文を有し、10には有節沈線文が施されている。14～20は底部で、18には木葉痕が認められる。



第117図 第14号住居跡実測図



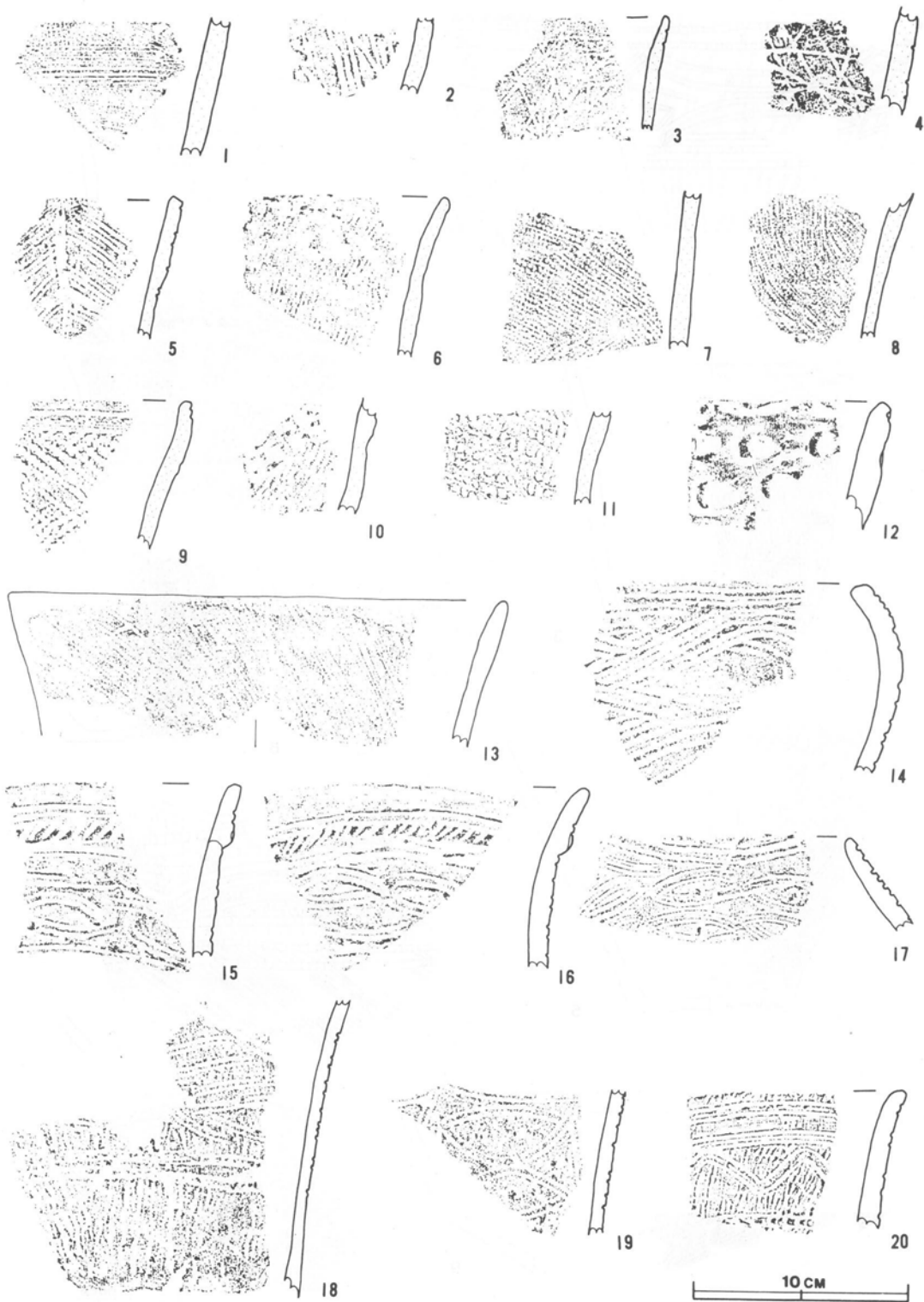
第118図 第14号住居跡出土遺物実測図



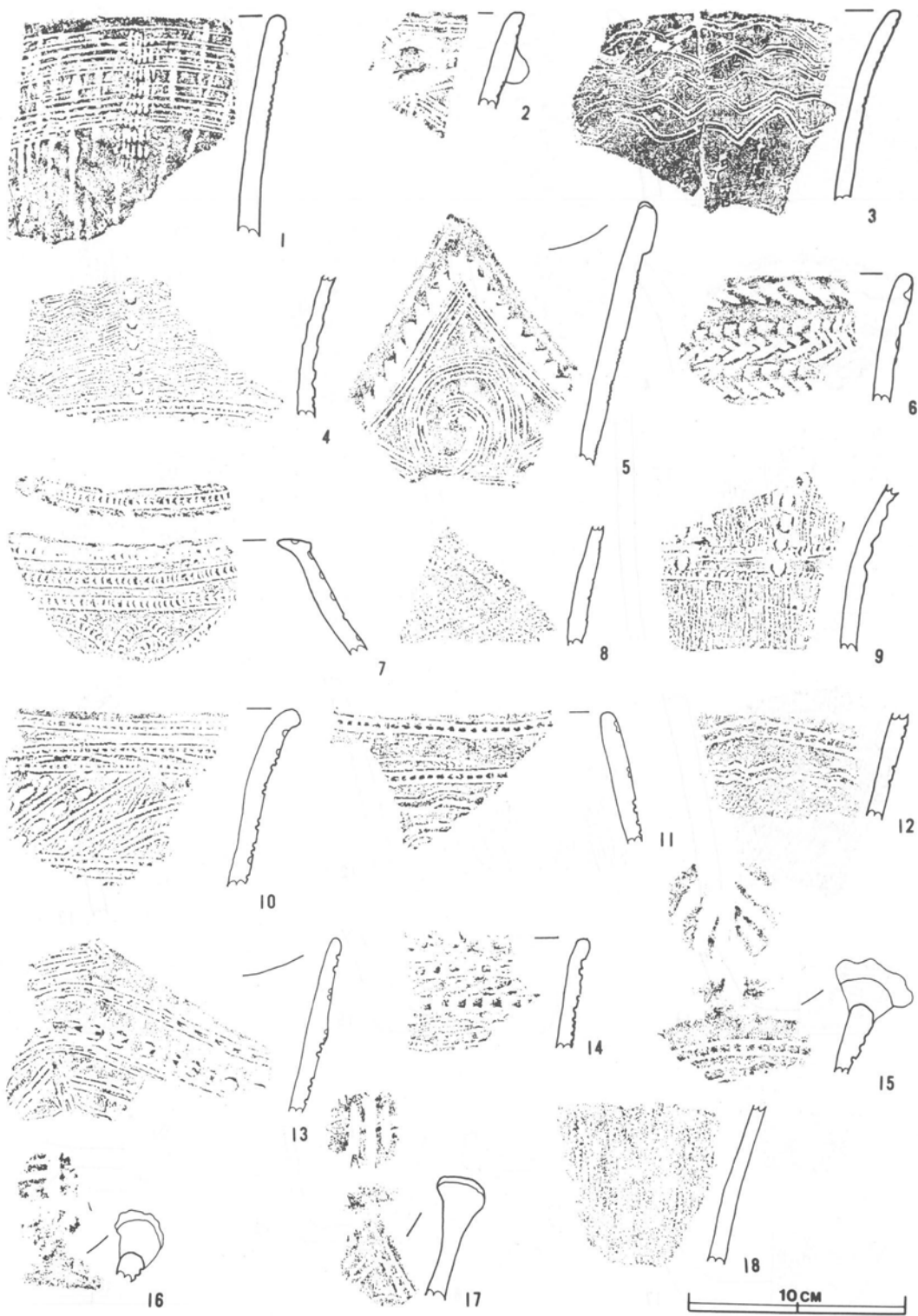
第119图 第14号住居跡出土遺物実測図



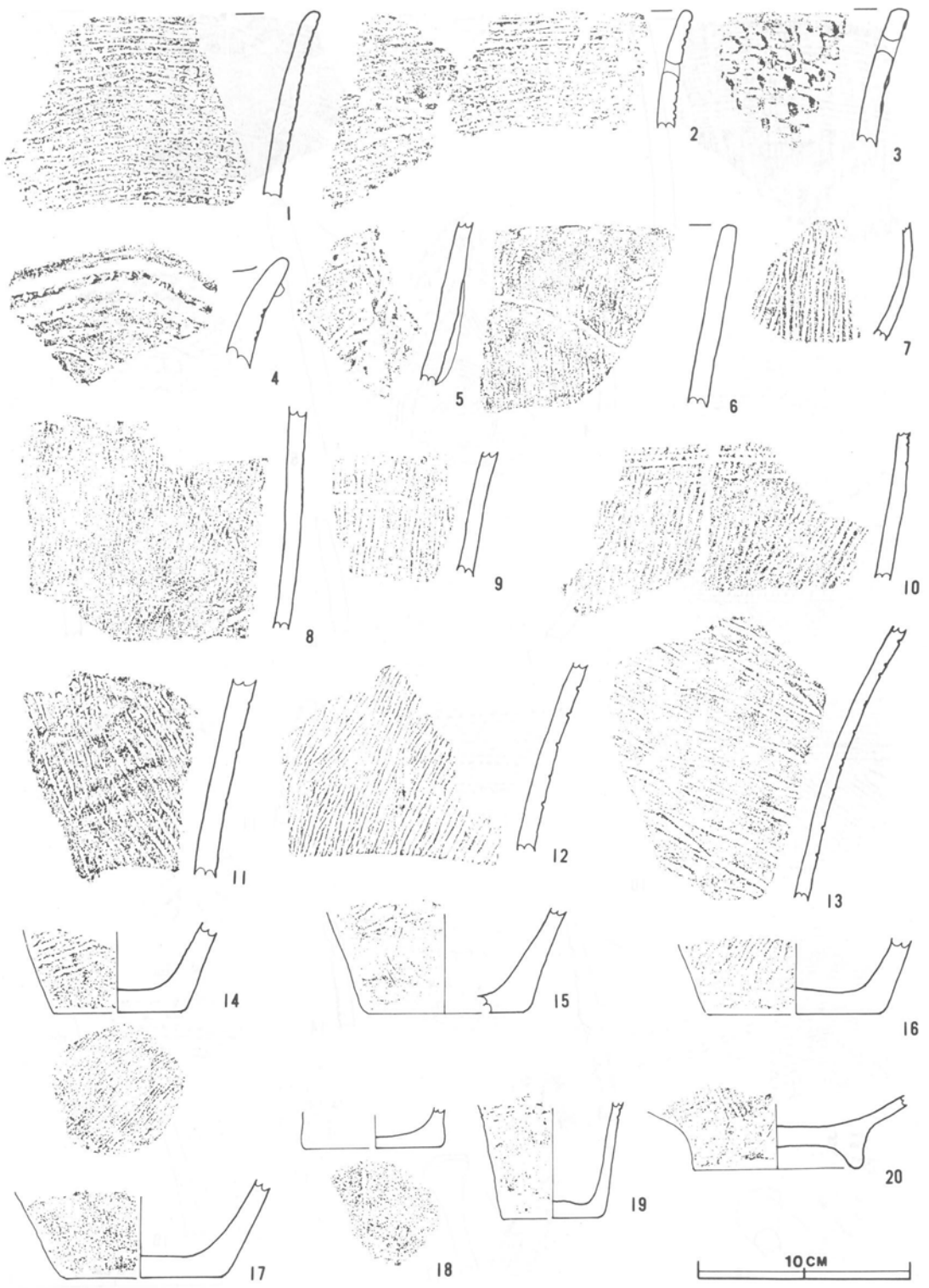
第120图 第14号住居跡出土遺物実測図



第121图 第14号住居跡出土土器拓影图



第122图 第14号住居跡出土土器拓影图

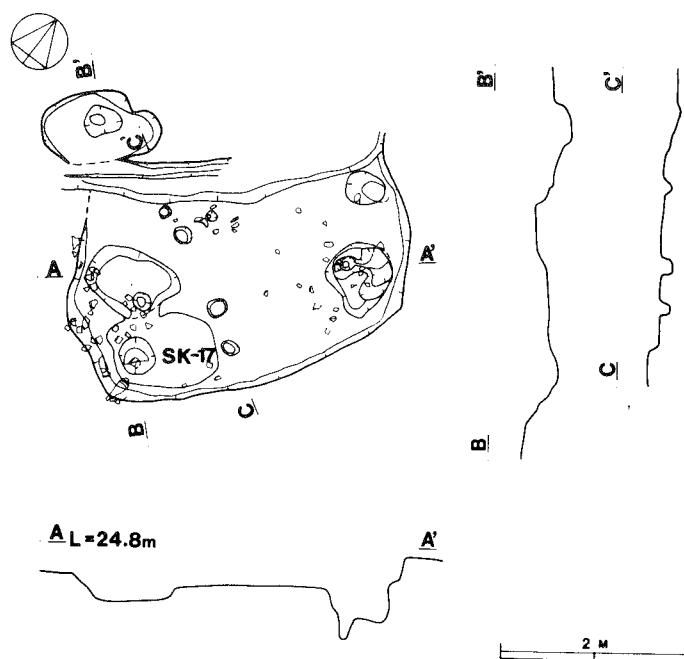


第123图 第14号住居跡出土土器拓影图

第15号住居跡（第124図）

本住居跡はB2d6調査区を中心に確認されたもので、北西側が5号住居跡に切斷されている。また、攪乱をうけており規模や形状は不明である。

残存壁高は5～30cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は軟弱であるがほぼ平坦をなしている。ピットは8か所検出されたが浅く、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、ローム粒子を含む褐色土・暗褐色土が堆積している。



第124図 第15号住居跡実測図

遺物は多量の縄文土器片が、主に中央部・北東コーナー・南コーナーの3地点から出土している。中央部床面から深鉢形土器が検出されている。これら土器群は、わずかな繊維土器を除いてほとんど浮島式に比定される。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の浮島期の遺構と思われる。

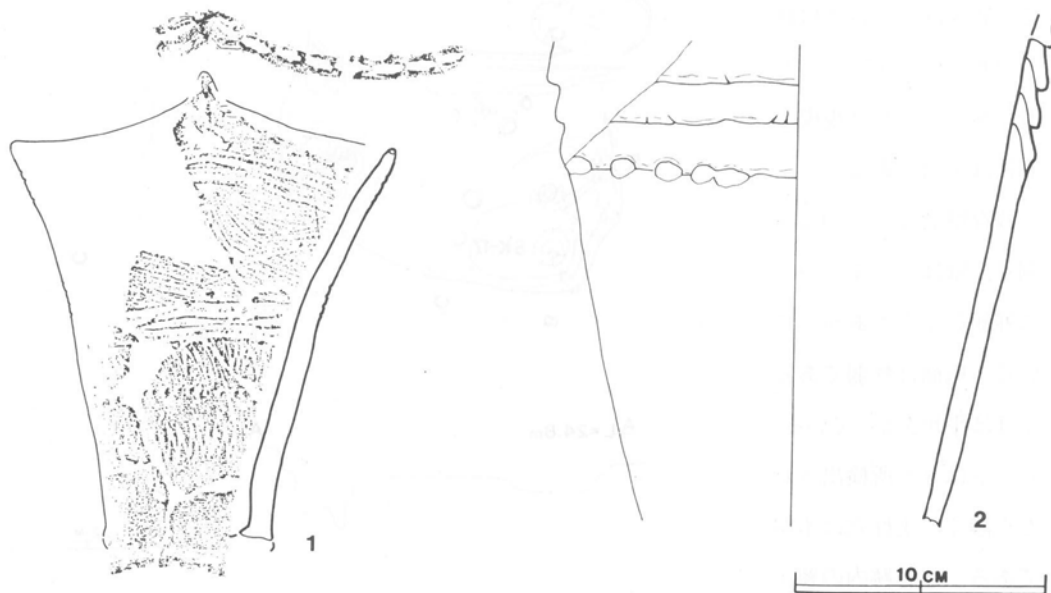
出土遺物（第125～127図）

出土遺物解説表（第125図）

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-15	1 小形深鉢形土器（縄文）	A 15.4 B 18.9 C 6.6	波状口縁で口唇部に刺突文。口一連続爪形文。頸一細い半截竹管具による平行沈線文。胴部との境に連続爪形文。胴上部は貝殻文によるジグザグ波状文、その上に変形爪形文。	内面一ヘラナデ	普通・砂粒にぶスコい橙リア	70% 第125図-1
	2 深鉢形土器（縄文）	B 14.2	輪積痕を残す無文の粗製土器。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ	やや・砂粒にぶスコい褐色リア	15% 第125図-2

第126図1・2は胎土に繊維を含み、地文に縄文を有している。3は輪積痕が認められ、4～14は平行沈線文を有し、5は口辺部に「ハ」字状のキザミ、7は地文に燃糸文、8は微隆帯を設けている。15～23は変形爪形文を有し、平行沈線文と組合せている。24と第127図1～6は連続爪形

文を有し、24と第127図6にはループ文、第127図1～5には平行沈線文が組合わせられている。
7・8は撚糸文を施文。9～16は底部である。



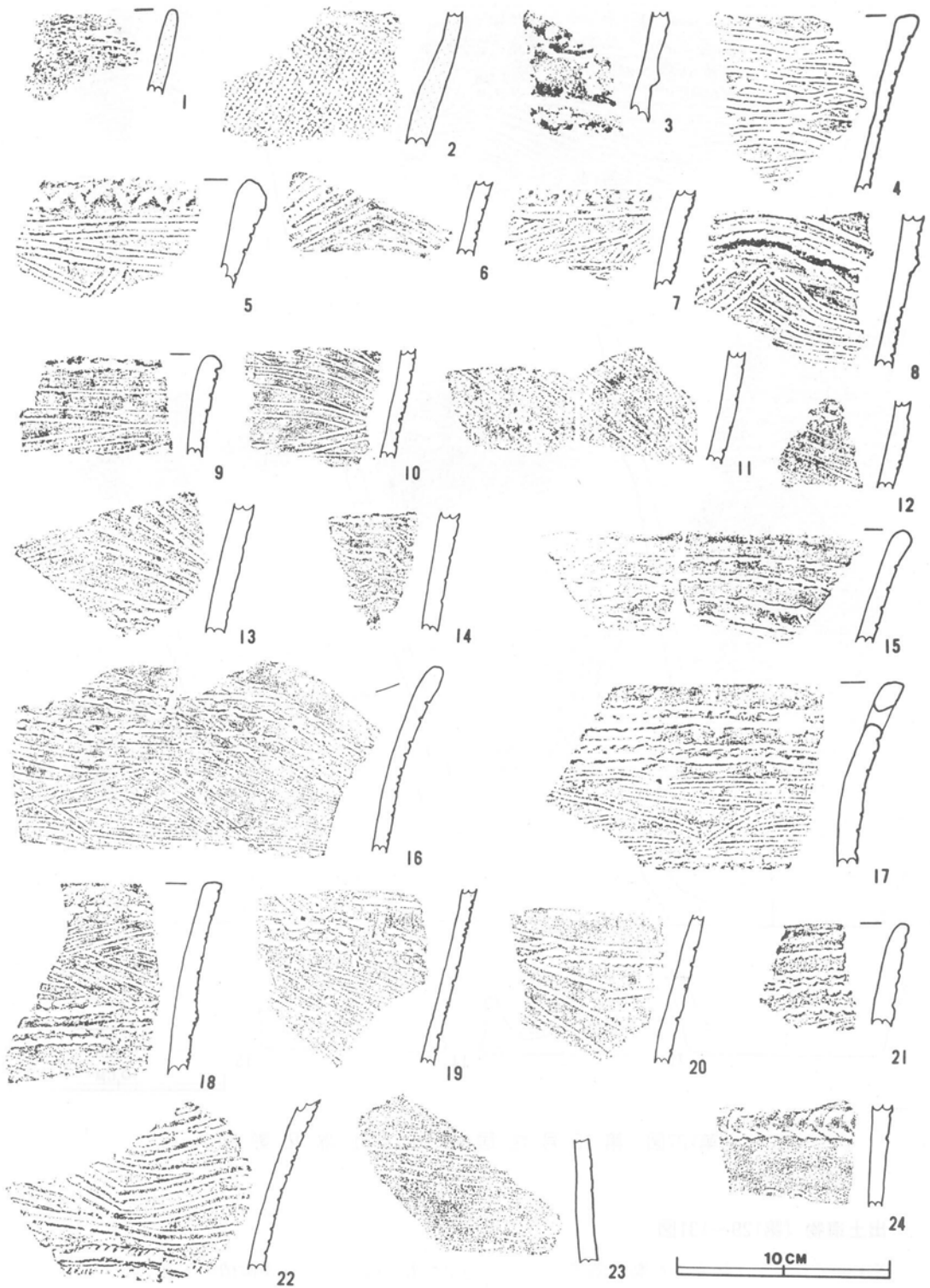
第125図 第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡（第128図）

本住居跡はB2e9調査区に確認されたもので、遺跡北西側の遺構群のほぼ中央に位置し、西側が17号住居跡と重複している。

平面形状は、直径3.3m前後の円形を呈している。壁高は20～30cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は硬く締っており、ほぼ平坦である。焼土が広い範囲にわたって散乱している。炉跡は東側に位置し、床面を11cm程掘り窪めた地床炉で、長径60cm・短径37cmの楕円形を呈し、焼土を含み炉床は硬く焼けている。ピットは9か所検出されたが全体的に浅く、主柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、褐色土と一部に暗褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックと一部に炭化粒子・焼土粒子を含み締りがある。

遺物は縄文土器片が中央付近と南東部から多く出土している。床面付近から深鉢形土器・鉢形土器が検出されている。これら土器群は、縄文前期の浮島式に比定される。



第126图 第15号住居跡出土土器拓影图

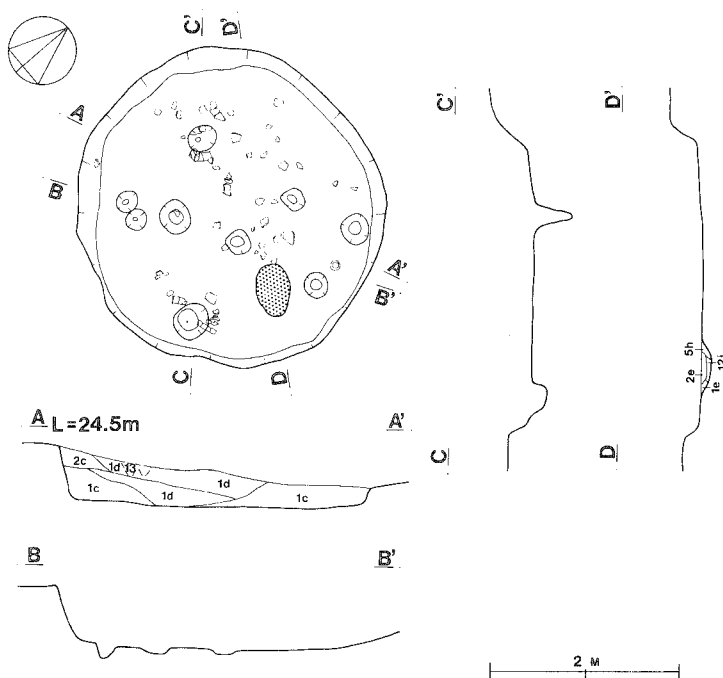


第127図 第15号住居跡出土土器拓影図

出土遺物 (第129~131図)

第130図1~4は無文の粗製土器で、1は口辺部に指頭痕、3・4は輪積痕が認められる。5~9は沈線文を有し、6は口唇部にキザミ、8は半截竹管文を施している。10~14は口縁部に沿って有節沈線文、その下に連続爪形文を施している。15~19は連続爪形文、20・21と第131図1は変

形爪形文を施している。第131図2～13は貝殻文を有し、2～4は口辺部にキザミ目を施している。14・15は底部である。



第128図 第16号住居跡実測図

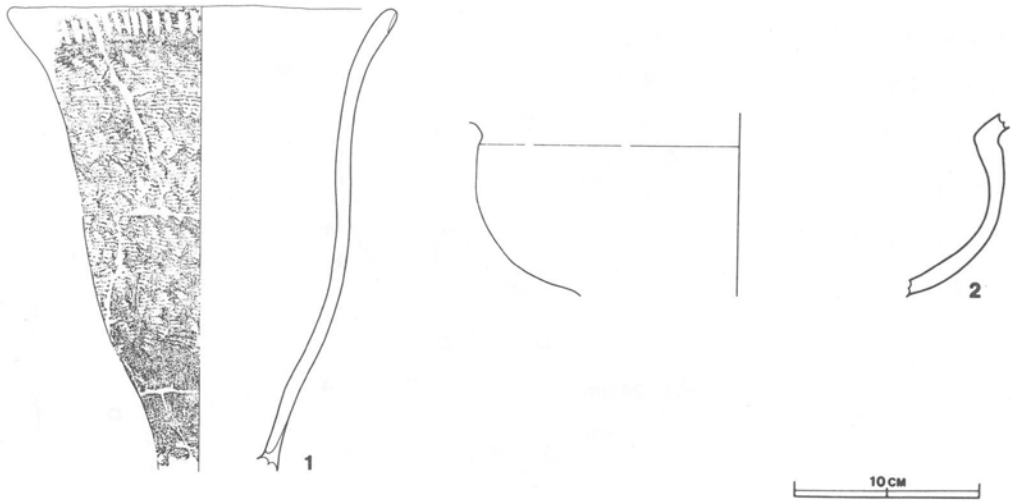
出土遺物解説表 (第129図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-16	1	深鉢形土器 (縄文)	A (20.6) B 24.6	貝殻文。	内面—ナデ 外面—胴下—ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶい橙	60% 第129図-1
	2	鉢形土器 (縄文)	B 9.8	頸部から口縁部にかけて大きく、くびれている。 胴—まろやかな弧状を呈す。 無文。	外面—ヘラミガキ	普通・砂粒・明赤 スゴリア	20% 第129図-2

第17号住居跡 (第132図)

本住居跡はB2es調査区を中心に確認されたもので、東側は16号住居跡、南側は18号住居跡、南コーナーが9号土壙と重複しており、北側1.2mのところには8号住居跡が存在する。

北壁・西壁の残存状況から、主軸方向はN-8°-Eを指し、長軸4.6m・短軸4.4mの隅丸方形状を呈するものと推察される。残存壁高は20cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はソフトロームで軟弱であり、東側に向かってやや低く傾斜をなしている。炉跡は中央よりやや南西側に検出され、長径45cm・短径30cmの楕円形を呈し、床面を6cm掘り窪めた地床炉で、褐色土・にぶい赤褐色土が堆積している。ピットは12か所検出され、深さ11～45cm程で浅いピットが多く、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、褐色土と東側の一部に暗褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックと極少量の焼土粒子・炭化粒子を含み全体的に締



第129図 第16号住居跡出土遺物実測図

りは弱い。

遺物は縄文土器片で、主として住居跡内東側からの出土が多く、いずれも床面より浮いた状態で出土している。

出土遺物 (第133・134図)

第133図1～3は胎土に繊維を含み、縄文を施文している。4～9は平行沈線文を有し、4・5・7は地文に撚糸文、9は肋骨文の上に半截竹管具による刺突文を施している。10～19は連続爪形文、20・21は変形爪形文を有している。第134図1は撚糸文、2は貝殻文を施文している。3～6は底部である。

第18号住居跡 (第132図)

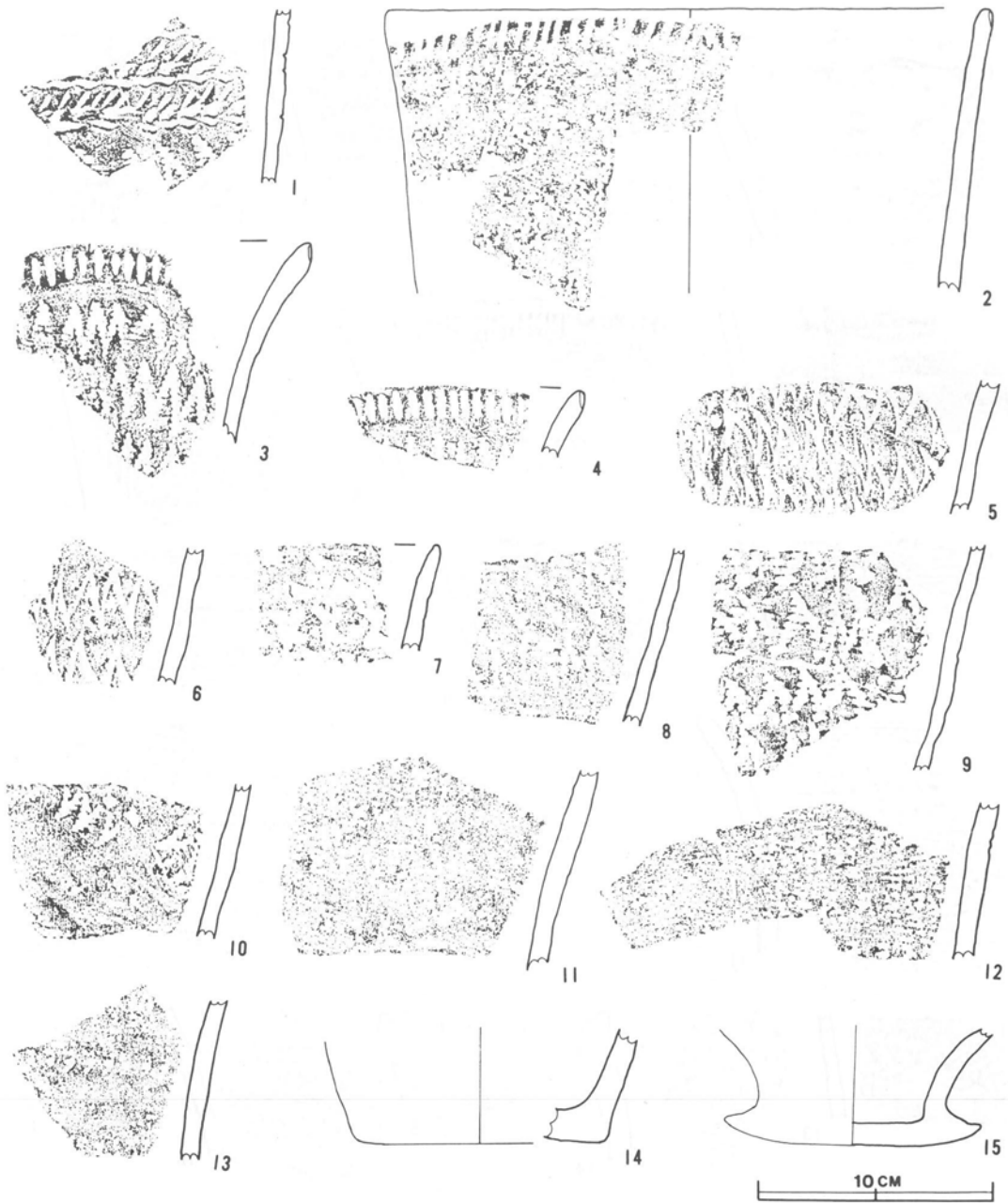
本住居跡はB2f₈調査区を中心に確認されたもので、北側は17号住居跡、南側は12号住居跡、南西側は7号・8号土壌と重複しており、遺構プランが不明である。

西壁が現存するのみであるが、壁高10cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがり、中央部付近が蛇行している。床面はほぼ平坦で、中央部から西側にかけてハードロームで硬く締まっている。炉は有さない。ピットが5か所検出されたが、支柱穴とは考えられない。住居跡内の覆土は、褐色土が自然堆積しており、ローム粒子と少量の焼土粒子・炭化粒子を含み全体的に締りは弱い。

遺物は住居跡全体から縄文土器片が出土しているが、量的には少ない。これら土器群は、縄文前期の黒浜式や浮島式に比定される。



第130图 第16号住居跡出土土器拓影图



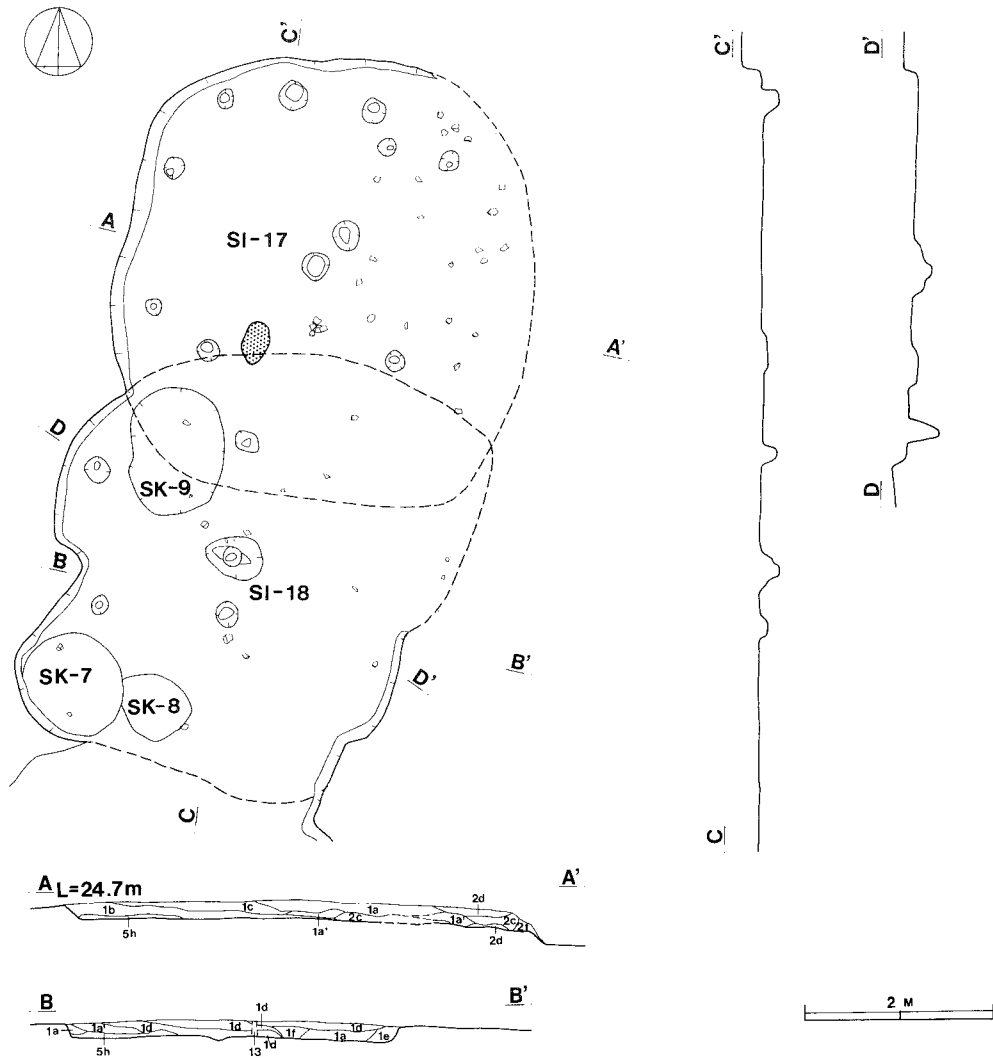
第131図 第16号住居跡出土土器拓影図

本住居跡は、縄文時代前期の遺構と思われる。

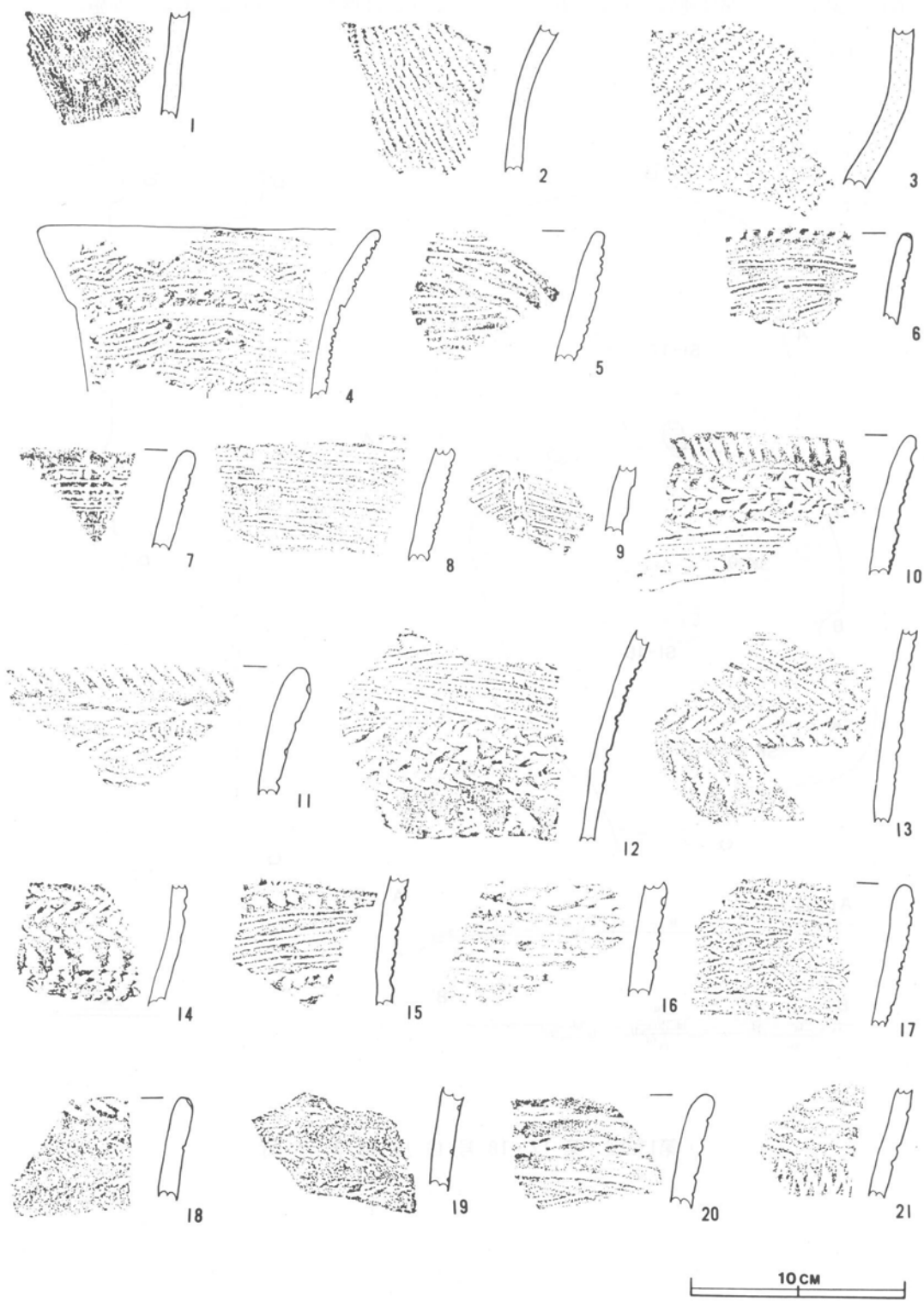
出土遺物 (第135図)

1～8は胎土に繊維を含み、1・2は沈線文、4は変形爪形文を有し、3～8は縄文を施文している。9・10は輪積痕を残し、その上に指頭痕を加えている。11～19は平行沈線文を有する土器群で、11・16～18は地文に燃糸文、19は地文に貝殻文を有している。20・21は変形爪形文、22

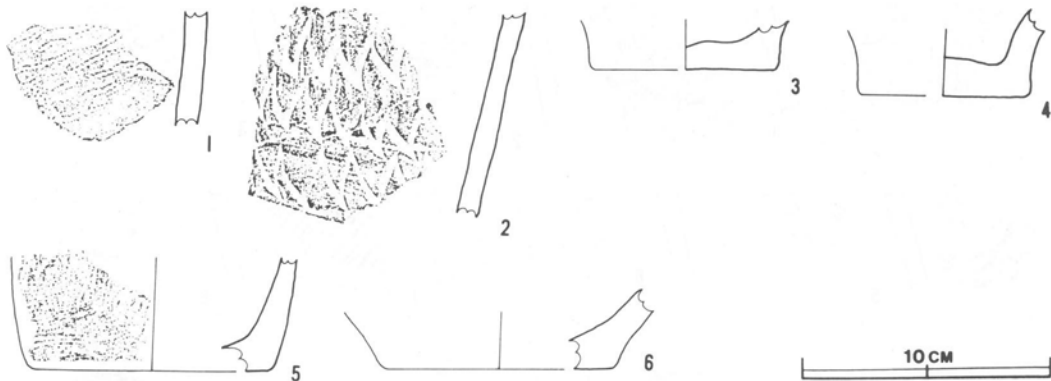
は有節沈線文，23～26は連続爪形文を有している。27・28は撚糸文，29・30は貝殻文が施されている。31は底部である。



第132図 第17・18号住居跡実測図



第133图 第17号住居跡出土土器拓影图



第134図 第17号住居跡出土土器拓影図

第19号住居跡 (第136図)

本住居跡はB3f1調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央よりやや北部に位置し、北西側1.5 mのところには15号住居跡、北東側2 mのところには55号土壇、南側1 mのところには34A号土壇が存在する。

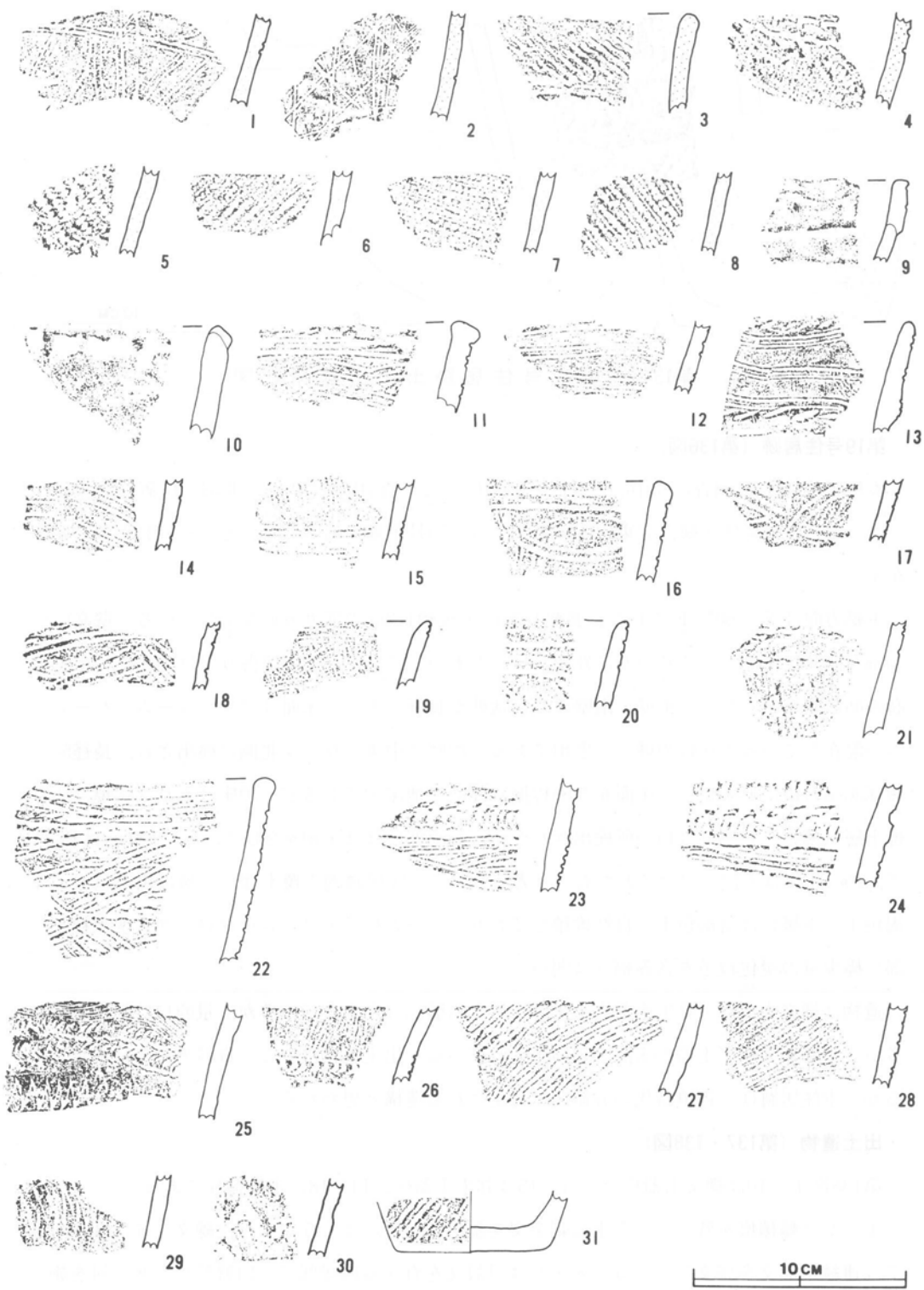
主軸方向はN - 60° - Eを指し、長軸4.35m・短軸4.2mの隅丸方形を呈している。壁高は15～50cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。調査区掘り下げの差異によって壁高の高低差が生じたが、東壁・南壁は残存状態が良好である。床面はソフトロームとハードロームが混在しているが比較的硬く、平坦である。炉跡は中央よりやや北側に検出され、長径50cm・短径30cmの楕円形を呈し、床面を5 cm程掘り窪めた地床炉であるが、炉床はそれほど焼けてなく焼土層も薄い。ピットは14か所検出されたが、最深部はほぼ平坦をなしている。支柱穴はP1～P8で、P9～P10は入口に設けられたものと考えられる。住居跡内の覆土は、上層に黒褐色土・極暗褐色土、下層には暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子と一部に極少量の炭化粒子を含み締りは弱い。

遺物は縄文土器片・弥生土器片・土師器片と石製品が出土しているが、量的には縄文土器片が多い。土師器の壺形土器が床面から検出されている。出土遺物は少なく資料としては不足しているが、本住居跡は、古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

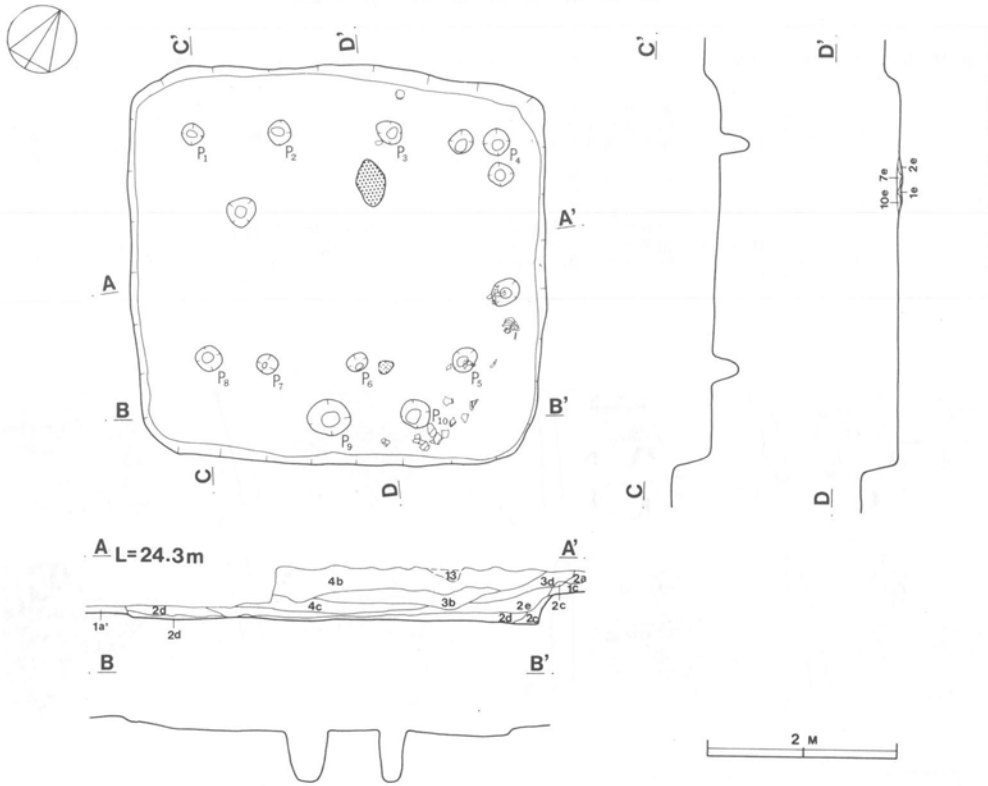
出土遺物 (第137・138図)

第138図1～10は縄文土器片で、11～13は弥生土器片、14～18は土師器片である。

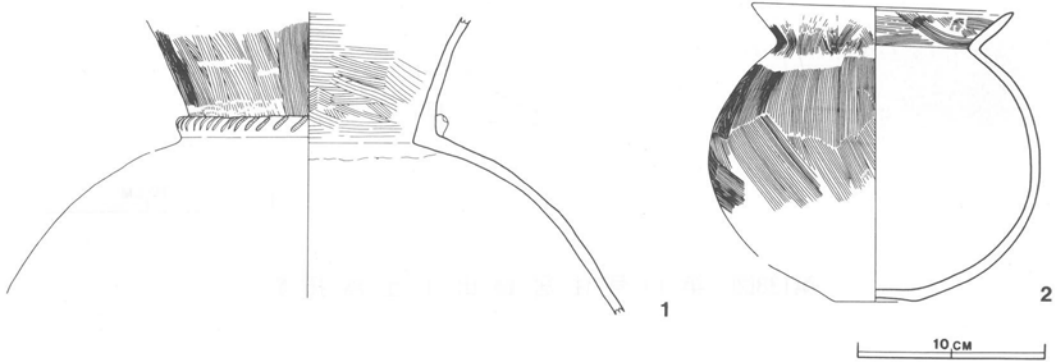
1・2は輪積痕を残し、その上に刺突文を配している。3～5は平行沈線文、6は変形爪形文、7は連続爪形文を施文している。8・9は貝殻文を有する口縁部で、口唇部にキザミ目を施している。10は撚糸文を施文。11～13は櫛目による横線文と波状文。14～17は刷け目痕が認められる。18は底部である。



第135图 第18号住居跡出土土器拓影图



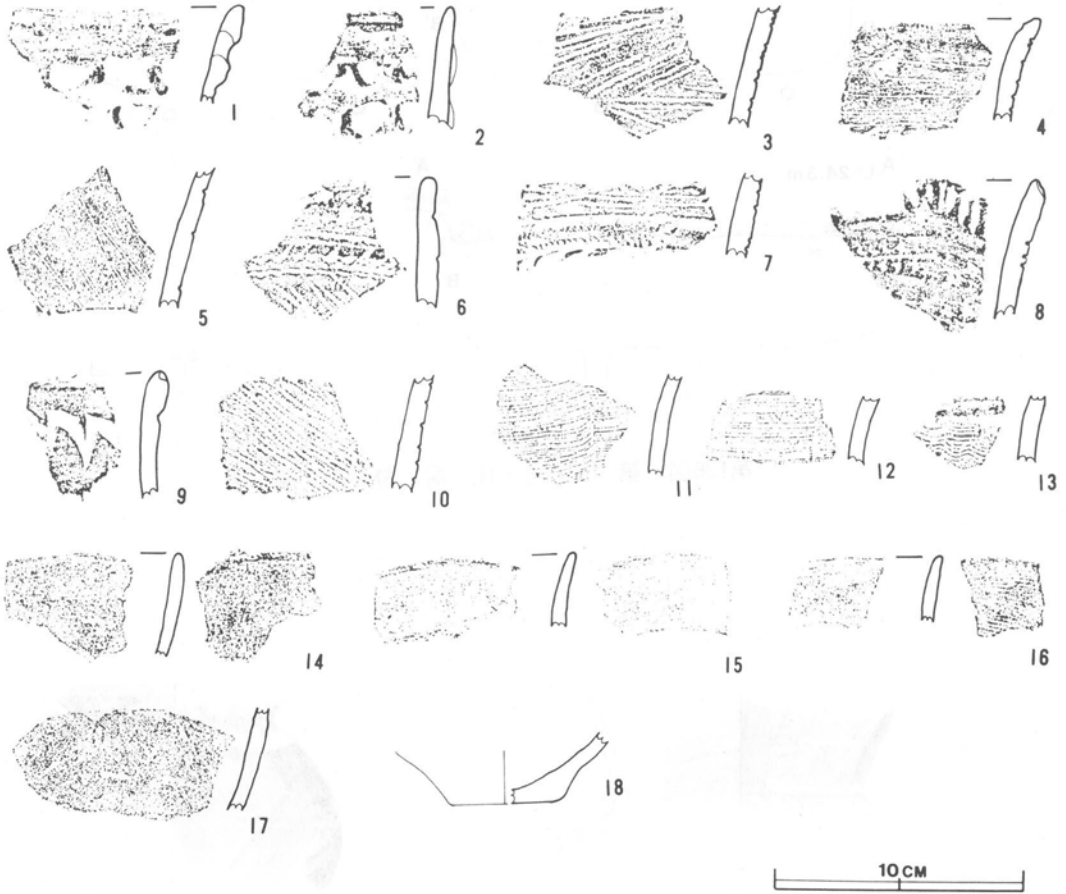
第136图 第19号住居迹实测图



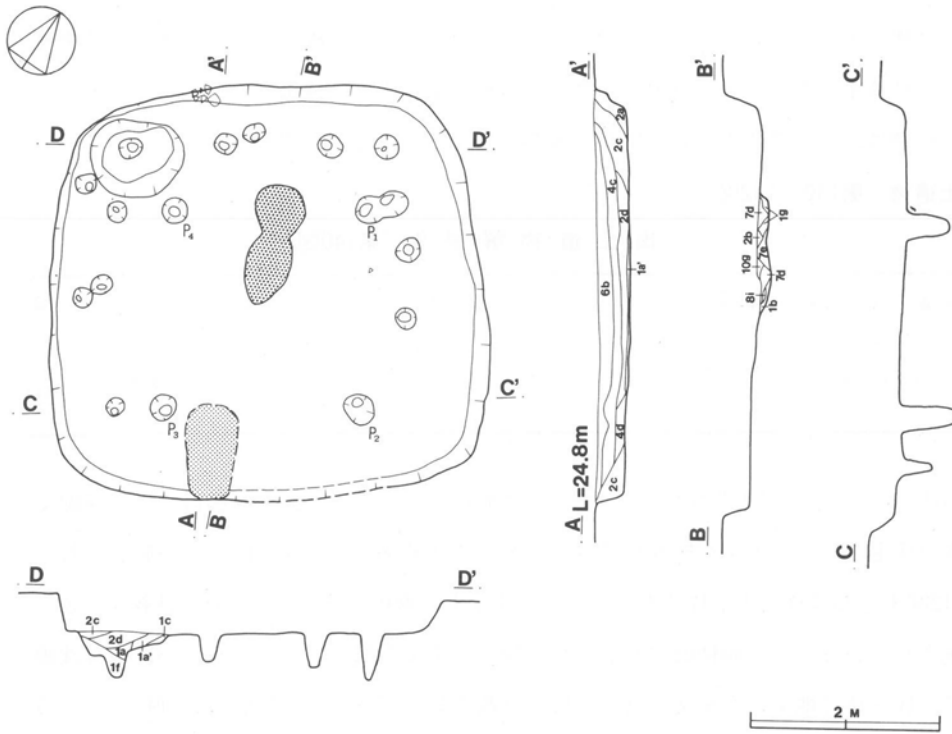
第137图 第19号住居迹出土遗物实测图

出土遺物解説表 (第137図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-19	1	壺形土器 (土師)	B 17.3	頸—ゆるやかに外傾。 口—外反する。 頸部に隆帯を貼付し、その上にキザミ。 胴—大きく膨らむ。	口—刷け目調整 胴—ヘラナデ	普通・砂礫・赤	頸部 100% 第137図-1
	2	壺形土器 (土師)	A 13.9 B 15.9 C 4.2	口—外傾。 口唇部—器厚を減ずる。 頸部は「く」の字状。 胴—大きく膨らみ底部に至る。	外面—刷け目調整 口—横ナデ 胴下半—ナデ	普通・砂粒・灰褐	80% 第137図-2



第138図 第19号住居跡出土土器拓影図

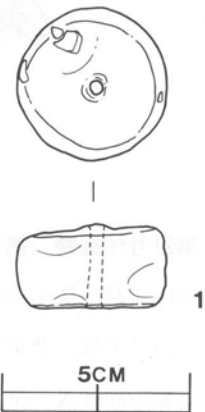


第139図 第20号住居跡実測図

第20号住居跡 (第139図)

本住居跡はA3j1調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北部に位置し、北側2mのところ
に28号住居跡、東側1mのところ
に38号土壌、南側に隣接して43号土壌が存在する。

主軸方向はN-36°-Wを指し、長軸4.6m・短軸4.4mの隅丸方形を呈している。南壁中央部は
トレンチ試掘により消滅しているが、壁高は10~40cmを測り、壁は70~
80°の角度で外傾して立ちあがっている。ロームの掘りこみは5cmぐらい
である。床面は南西部がやや低くなっているがほぼ平坦をなし、硬く良
好な状態である。炉跡は中央部よりやや北側に位置し、床面を10cm程掘
り窪めた地床炉で、炉床は硬く焼けている。掘り方は皿状を呈している。
柱穴は16か所検出されたが、支柱穴はP1~P4と考えられる。直径27~33
cm・深さ50~62cmを測る。貯蔵穴は北西コーナー部に位置し、長径100cm
・短径80cmの楕円形を呈し、深さ18cm程ですり鉢状をなし中央にピット
を1か所有す。住居跡内の覆土は、上層には厚さ10~15cmぐらいの黒色
土、中・下層には黒褐色土・暗褐色土・褐色土が自然堆積しており、ロ
ーム粒子・ローム小ブロックと一部に極少量の炭化粒子・焼土粒子を含



第140図 第20号住居跡
出土遺物実測図

んでいる。南側床面上に焼土・炭化粒子・炭化材が多く散布しており、火災家屋と思われる。

遺物は縄文土器片と弥生土器片が出土しているが、量的には縄文土器片が多い。北東壁寄りの床面から紡錘車、西コーナー付近から弥生の壺形土器の破片が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期に比定される遺構と思われる。

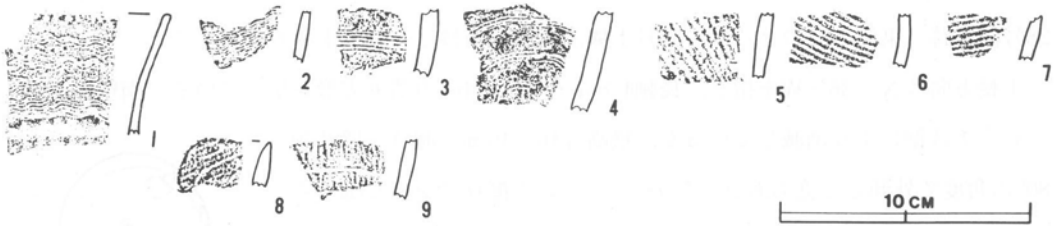
出土遺物（第140～142図）

出土遺物解説表（第140図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-20	1	紡錘車	4.0×3.9 41g		ナデ	普通・砂粒・橙	100% 第140図-1

第141図1～9は弥生土器片である。1・2は櫛目による波状文，3は櫛目による横線文，4は足洗式に比定される渦巻文が施されている。5～7は縄文，8・9は撚糸文が施文されている。

第142図1～33は縄文土器片である。1～5は胎土に繊維を含み，2は有節沈線文，3～5は縄文が施されている。6は輪積痕を残し，最下端に三角文を配している。7～18は平行沈線文の土器群で，16～18は地文に撚糸文を有し，17に半截竹管文，18に円形竹管文を押捺している。19は変形爪形文，20・21は有節沈線文，22～24は連続爪形文を有し，19・24に刺突文，20に半截竹管文，22に円形竹管文の押捺がみられる。25は縦位の沈線文，26～28は撚糸文，29～33は貝殻文が施文されている。

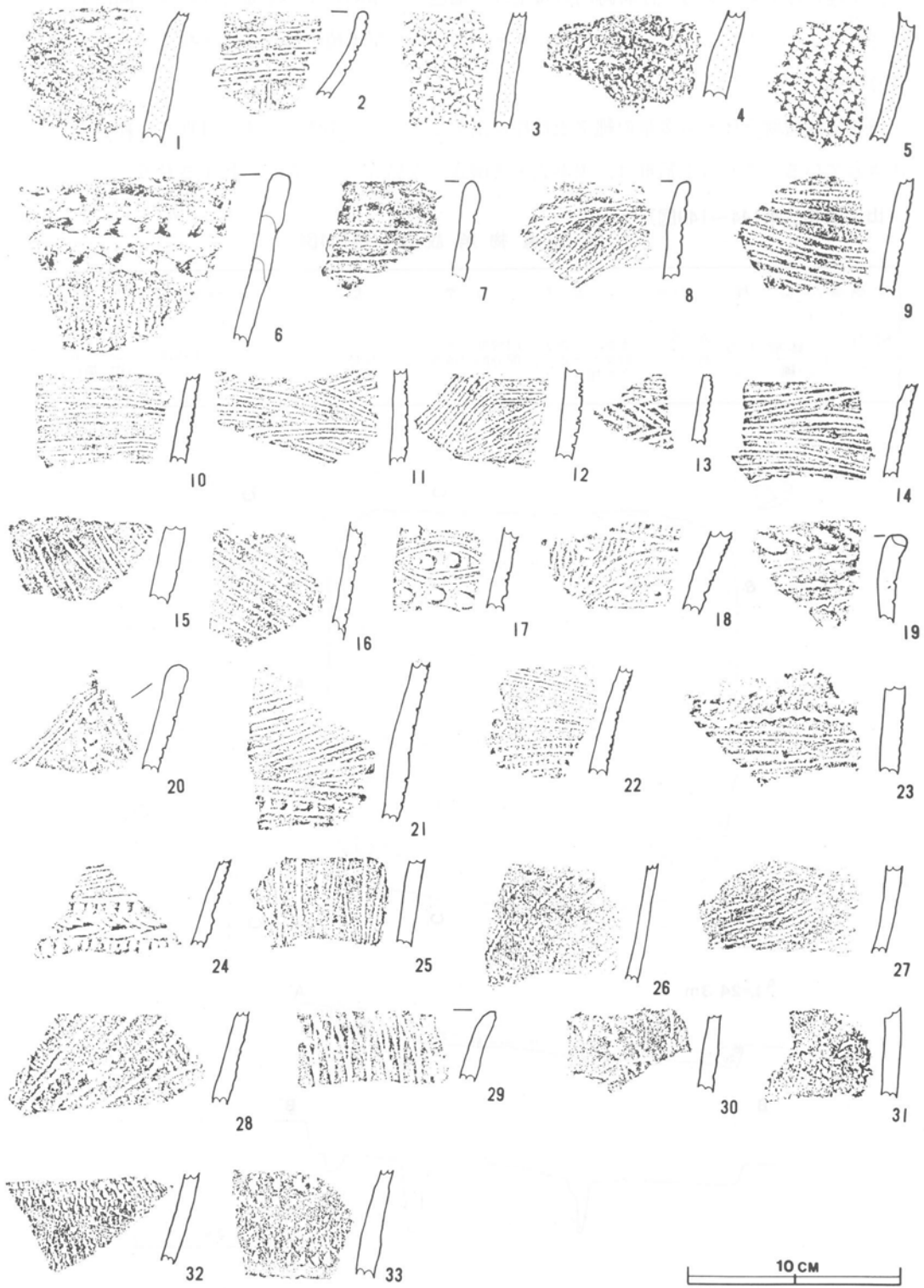


第141図 第20号住居跡出土土器拓影図

第21号住居跡（第143図）

本住居跡はB2is調査区を中心に確認されたもので、遺跡の西端部傾斜地に位置し、北側に隣接して24号土壇，北東側2mのところには10号住居跡が存在する。

主軸方向はN-55°-Eを指し，長軸5.1m・短軸4.9mの隅丸方形を呈している。壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっているが，北壁・西壁は攪乱をうけている。残存壁高は20～40cmを測り，床面は西側に傾斜しておりやや軟弱である。炉跡は確認されず，ピットは7か所検出された



第142图 第20号住居跡出土土器拓影图

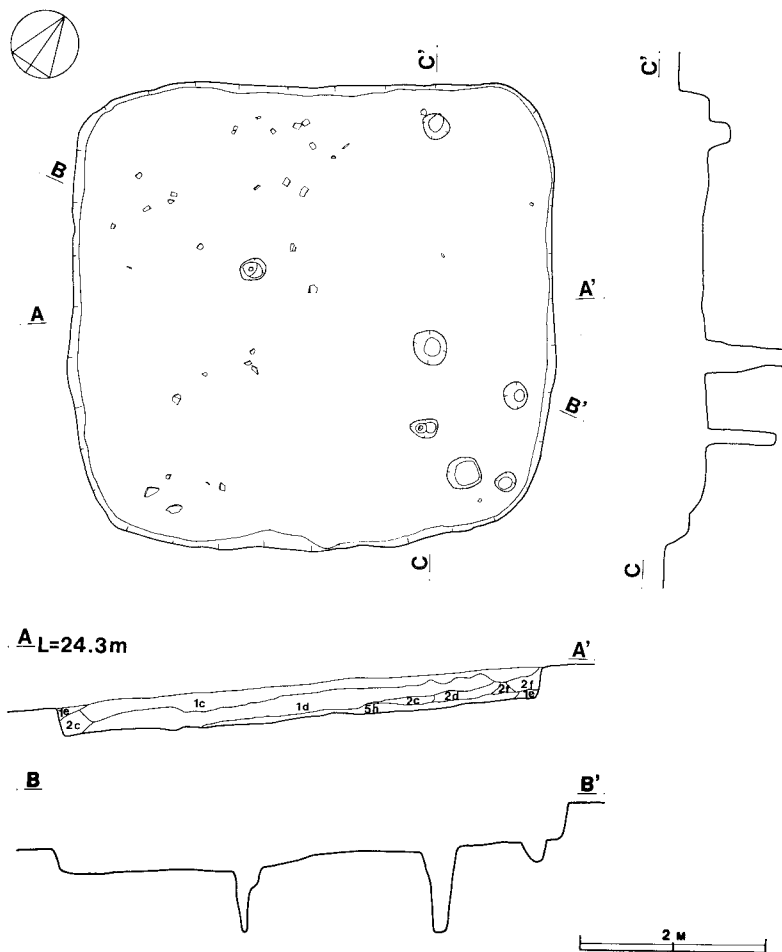
が、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、褐色土・暗褐色土、床面付近には明褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックと一部に極少量の焼土粒子・炭化粒子を含み上部部は締りが弱い。

遺物は住居跡全体から多量の縄文土器片が出土している。南側コーナー付近から鉢形土器が検出されている。これら土器群は、黒浜式・諸磯式・浮島式・下小野式に比定される。

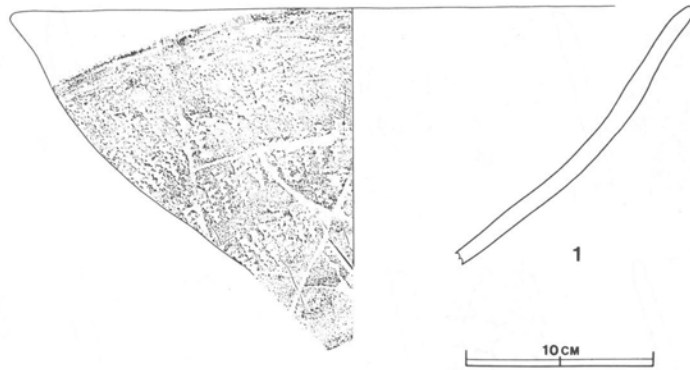
出土遺物 (第144～149図)

出土遺物解説表 (第144図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-21 1	鉢形土器 (縄文)	A (36.2) B 13.7	体部上半部から口縁部にかけて貝殻文、その上に部分的に変形爪形文を施文。	内面ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい褐色	30% 第144図-1



第143図 第21号住居跡実測図



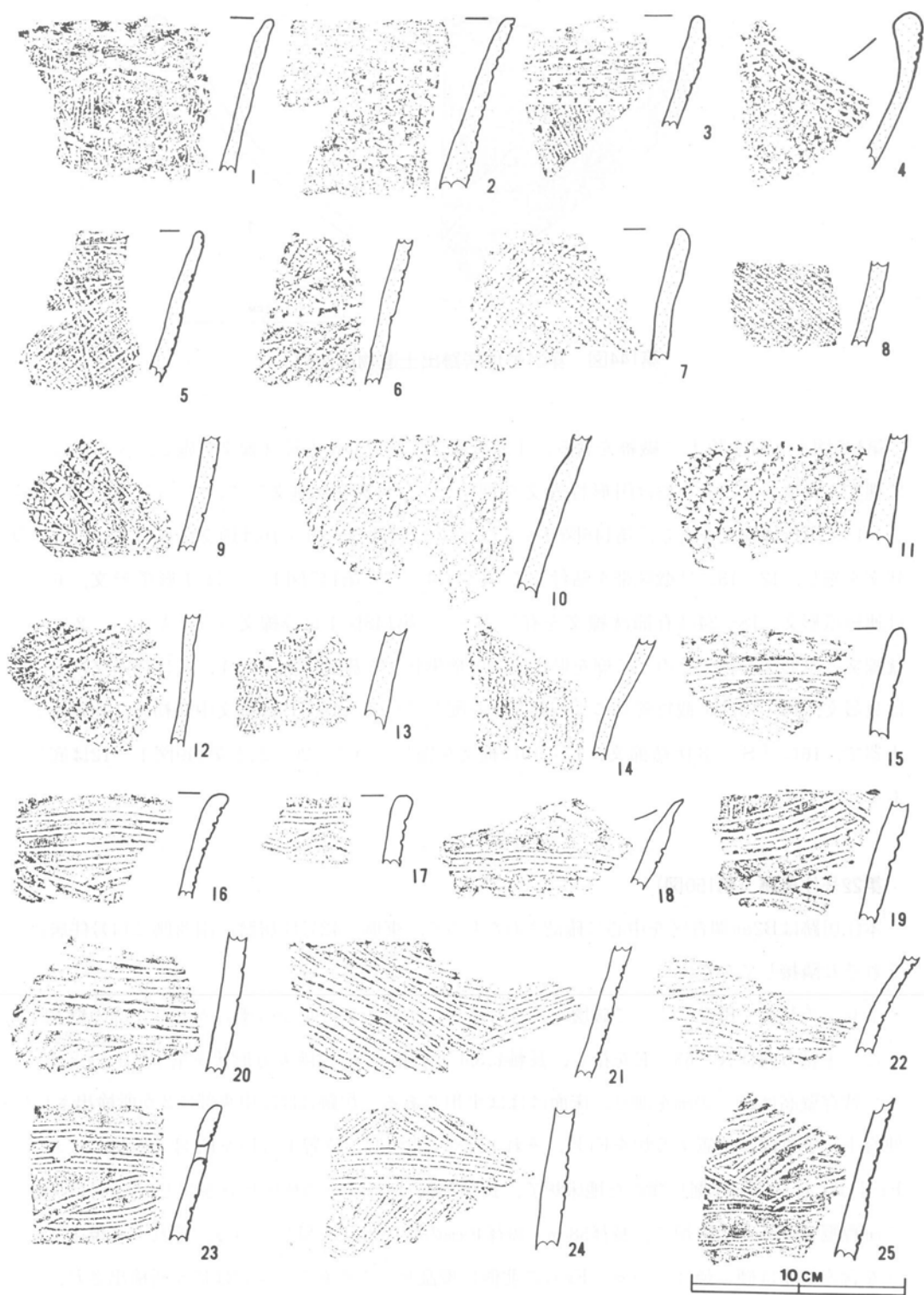
第144図 第21号住居跡出土遺物実測図

第145図1～14は胎土に繊維を含み，1は沈線文，2～6は有節沈線文を施し，3～13は地文に縄文を充填している。13は円形竹管文を押捺，14は貝殻文を施文している。15～25と第146図1～13は平行沈線文を有し，第146図5～8は地文に撚糸文，9・10は地文に貝殻文，11は柳葉状文を施し，12・13には微隆帯を貼付している。14～17と第147図1～5は変形爪形文，6～17は連続爪形文，18～24は有節沈線文を有している。第148図1は浮線文の上にキザミ，2は平行沈線文と爪形文を施しその上に瘤を貼付，3は櫛歯状文を施している。4～7は撚糸文，8～13は貝殻文，14・15は半截竹管具による刺突文を配している。16～19は縄文中期初頭に比定される土器で，16に「S」字状結節文，17～19は縄文を施している。20～22と第149図1～12は底部である。

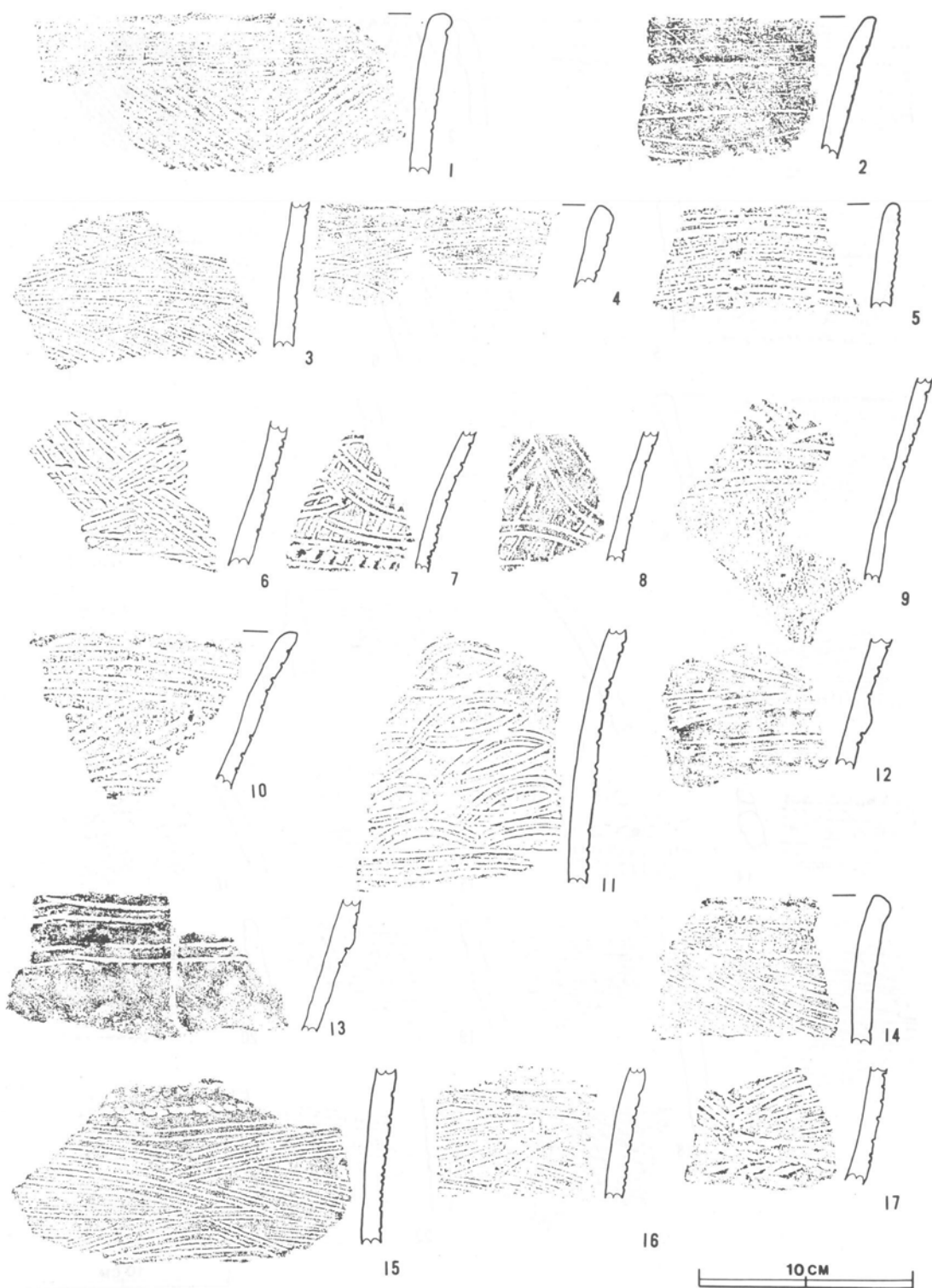
第22号住居跡 (第150図)

本住居跡はB2a調査区を中心に確認されたもので，東側に42号住居跡，南西側に14号住居跡がそれぞれ隣接して存在する。

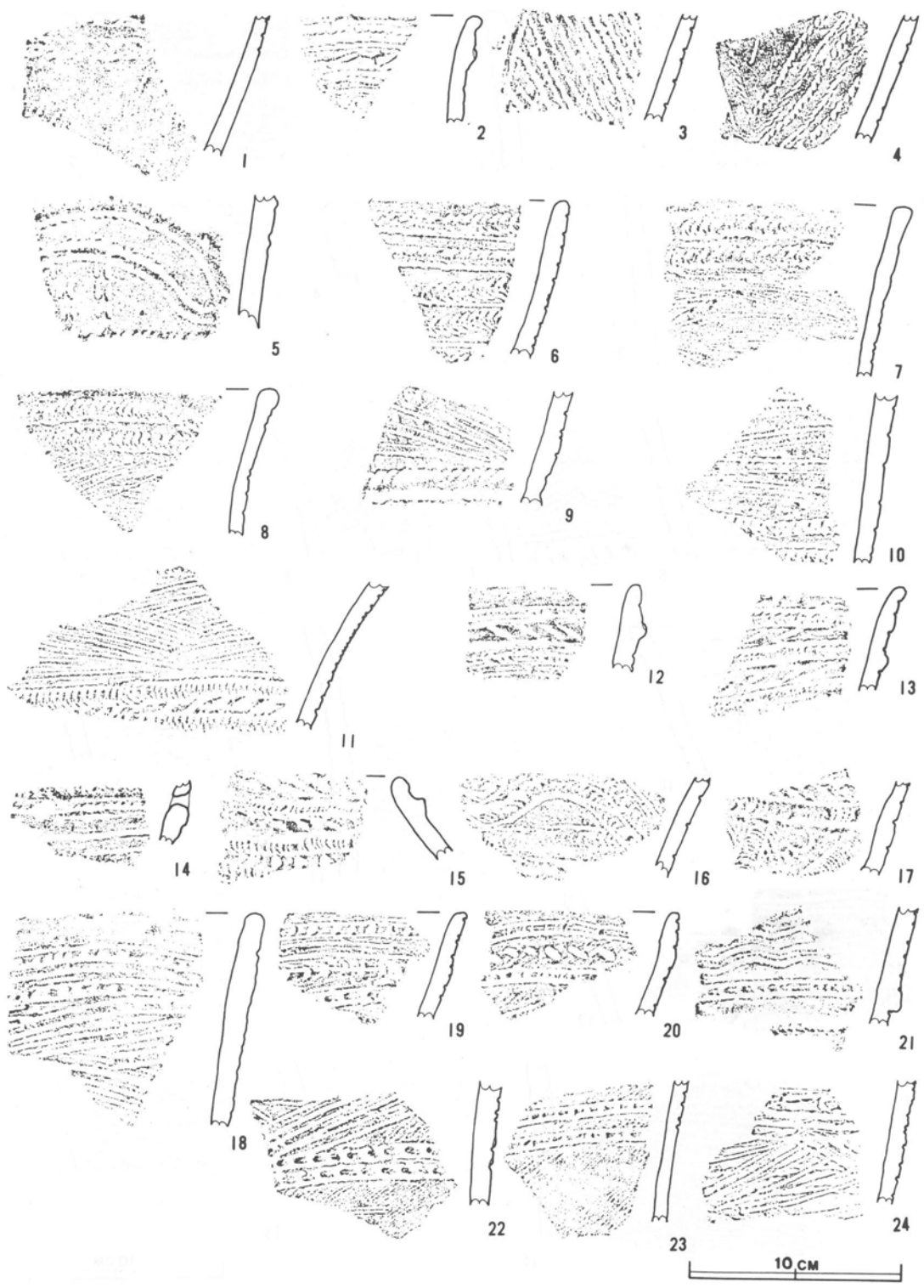
トレンチ試掘や攪乱によって破壊がみられるが，炉跡および東から南にかけて一部の壁を検出した。主軸方向はN - 63° - Eを指し，長軸4.3m・短軸3.3mの隅丸形状を呈するものと思われる。残存壁高は20～30cmを測り，床面はほぼ平坦である。炉跡はほぼ中央部に2か所検出された。便宜上，中央部に位置する炉をF₁号，それよりやや北西側に位置する炉をF₂号と仮称しておく。F₁号は床面を12cm程掘り窪めた地床炉で，長径70cm・短径60cmの楕円形状を呈し，F₂号は床面を5cm程掘り窪めた地床炉で，長径58cm・短径40cmの楕円形状を呈している。それぞれ焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。F₂号の北側に攪乱ピットがある。柱穴は15か所検出され，比較的浅いものが多い中でP₁とP₂は深い。しかし支柱穴については明確でない。東壁下に長径100cm・短径80cm・深さ30cm程の楕円形状の貯蔵穴が確認されている。住居跡内の覆土は，極暗褐色土・



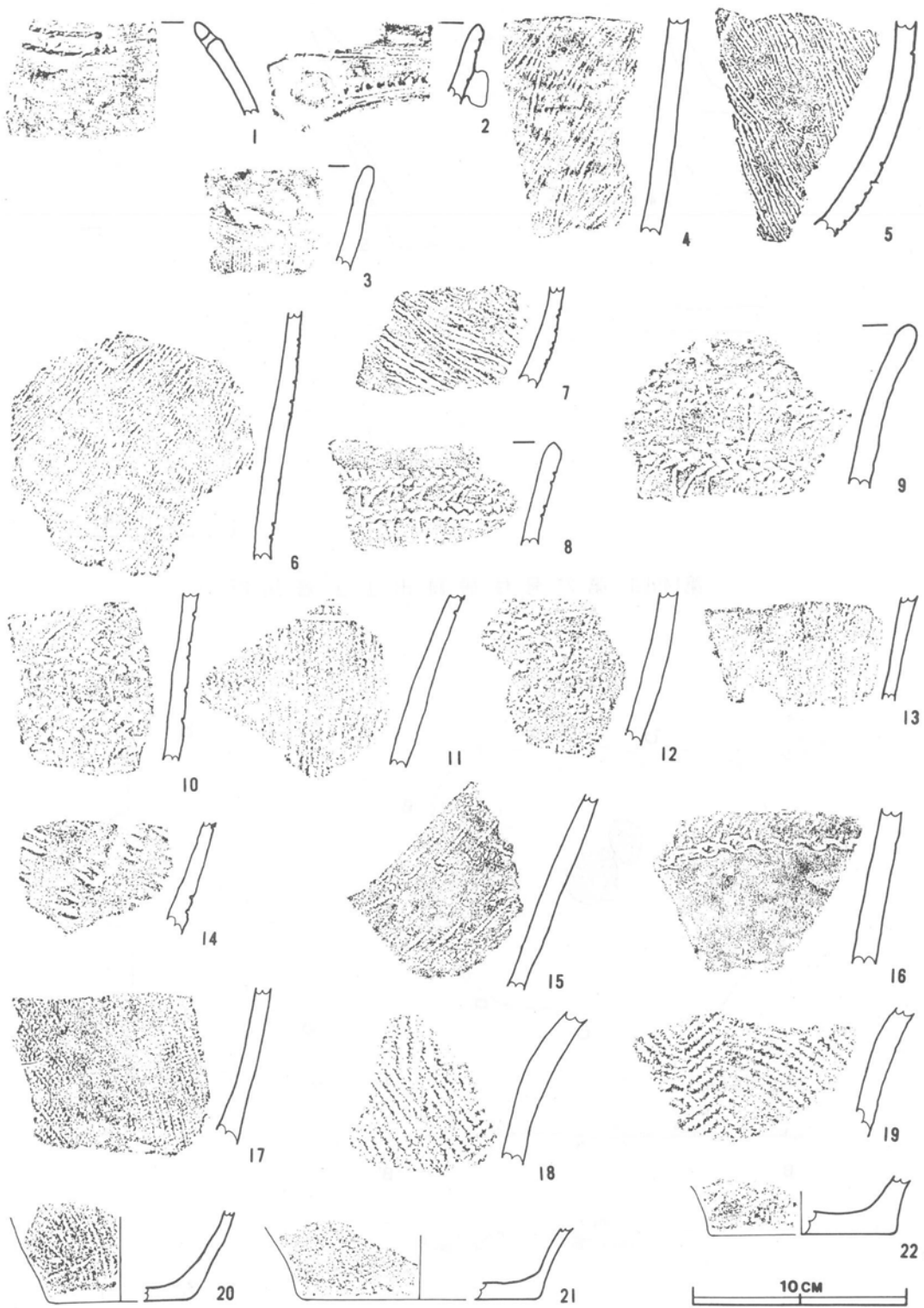
第145图 第21号住居跡出土土器拓影图



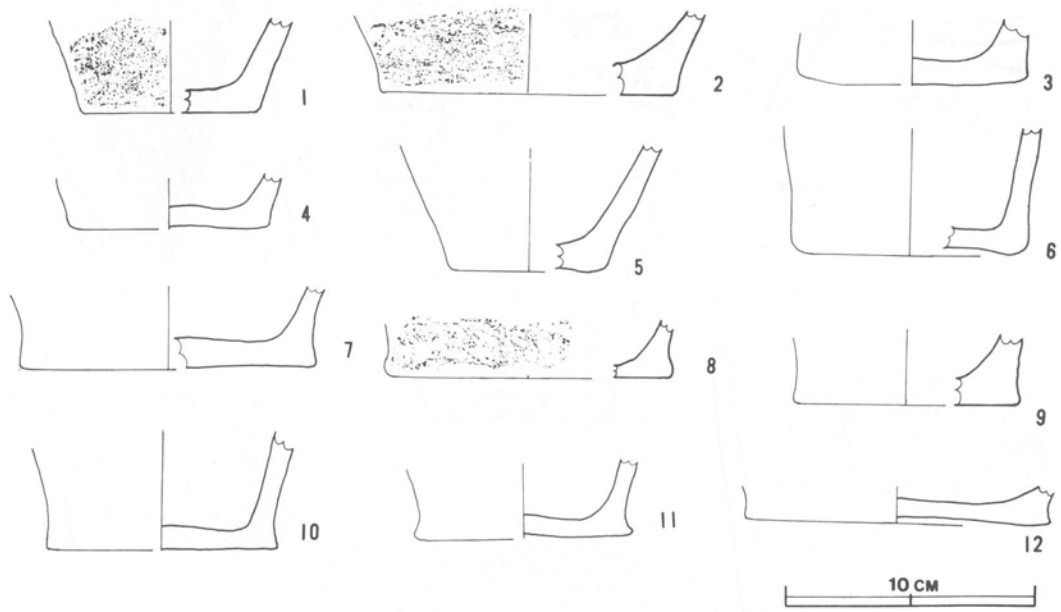
第146图 第21号住居跡出土土器拓影图



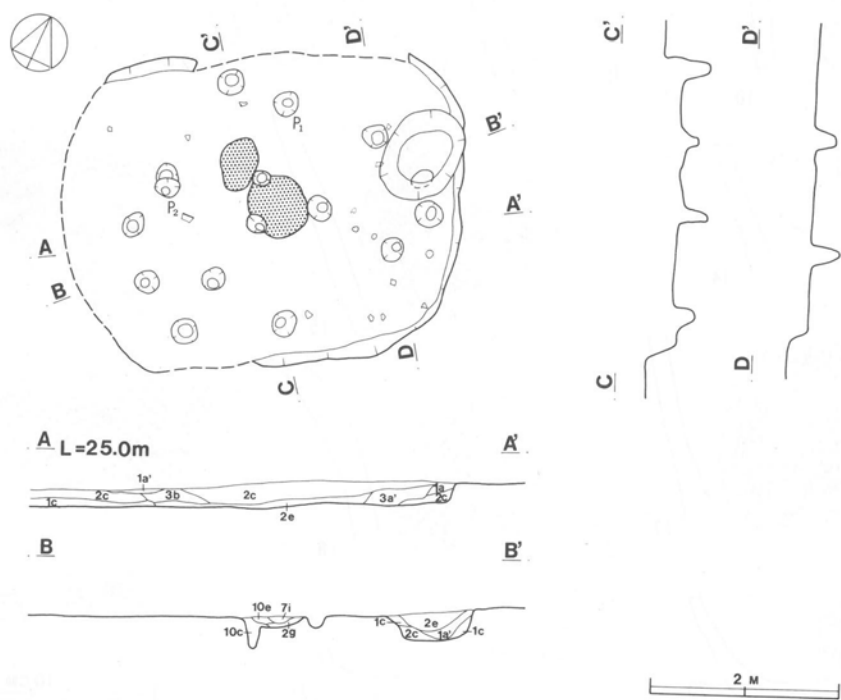
第147图 第21号住居跡出土土器拓影图



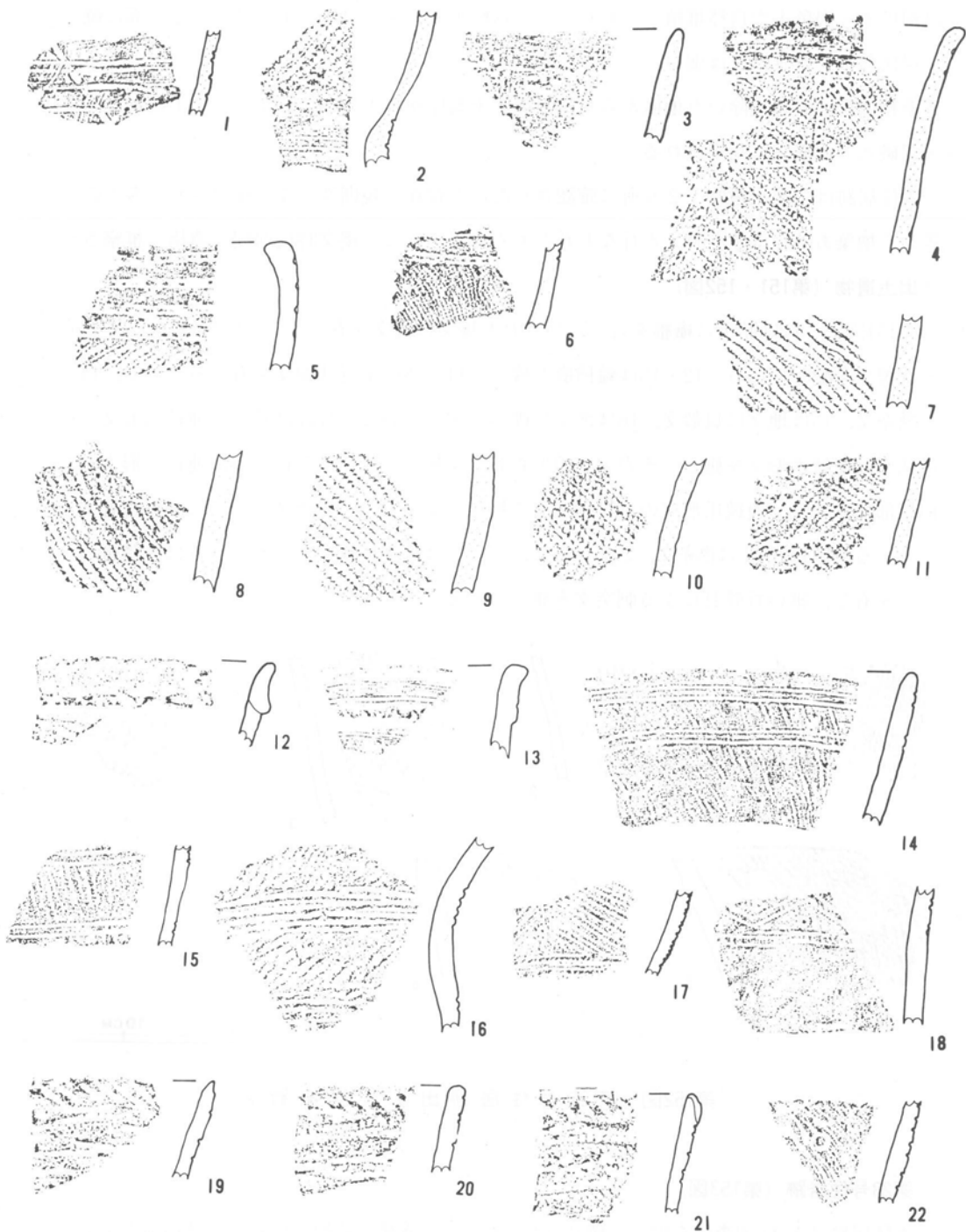
第148图 第21号住居跡出土土器拓影图



第149图 第21号住居跡出土土器拓影图



第150图 第22号住居跡实测图



第151图 第22号住居跡出土土器拓影图

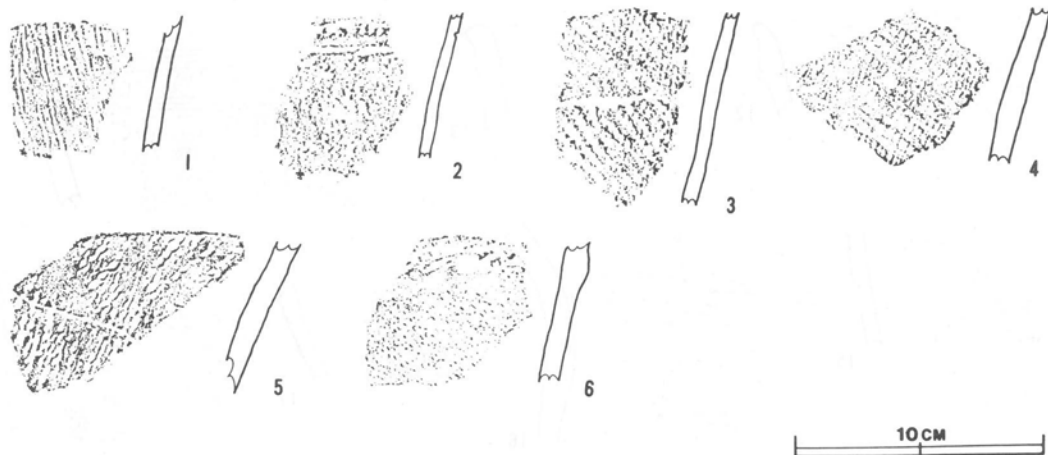
暗褐色土・褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ソフトローム小ブロックと一部に焼土粒子・炭化粒子を含み締りは弱い。

遺物は炉跡周辺を除いた地域から多量の縄文土器片が出土している。これら土器群は、黒浜式・諸磯式・浮島式に比定される。

本住居跡は、出土遺物や2か所に確認された炉の存在、規則性がなく検出された多くのピット等から増築あるいは建て替えが行なわれたものと思われる。縄文時代前期の遺構と推察される。

出土遺物（第151・152図）

第151図1～11は胎土に繊維を含み、いずれも地文に縄文を有し、1・2は沈線文、4～6は有節沈線文を配している。12・13は輪積痕を残し、14～18は平行沈線文を有する土器で、14は地文に燃糸文、15は地文に貝殻文、16は地文に縄文を施している。17は肋骨文と連続爪形文、18は鋸歯状文と連続爪形文を施し、その上に円形竹管文を押捺している。19～21は連続爪形文を有し、口唇部にキザミ、連続爪形文の上に刺突文を押捺している。22は燃糸文の上に円形竹管文を押捺している。第152図1は燃糸文、2は貝殻文、3～5は縄文を施文している。6は微隆帯の上にキザミを有し、細い竹管具による刺突文を施している。



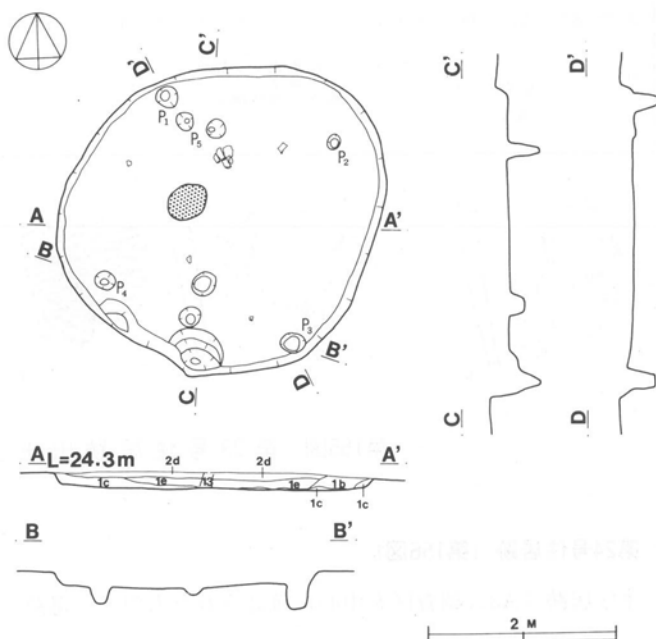
第152図 第22号住居跡出土土器拓影図

第23号住居跡（第153図）

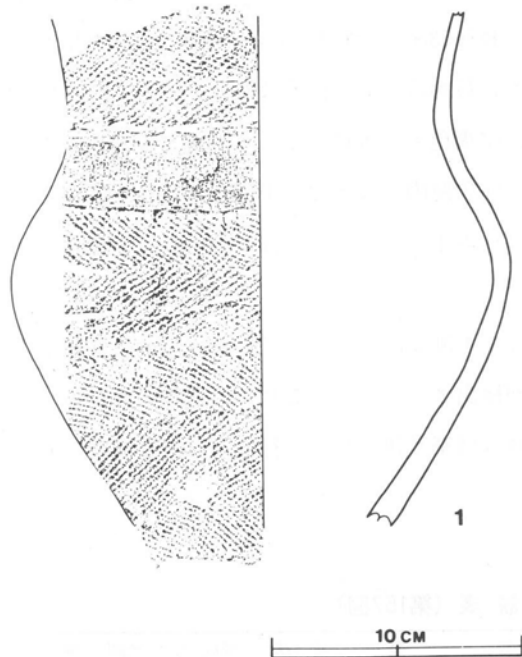
本住居跡はA3f8調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北端に位置し、北西側3mのところ
に39号住居跡が存在する。

平面形状は、長径3.5m・短径3.2mの北東部がやや張り出している不整形を呈している。壁
高は10～15cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はほぼ平坦をなしている。
壁・床ともソフトロームで軟弱である。炉跡は中央部よりやや西側に検出され、床面を8cm程掘

り窪めた地床炉で、長径45cm・短径35cmの楕円形状を呈し、焼土ブロックは少ない。ピットは8か所検出され、比較的浅いものが多い中でP5は深さ54cmと深い。P1～P4は直径18～25cm・深さ12～25cmを測り、主柱穴と考えられる。南壁下に長径60cm・短径40cm・深さ34cmを測る楕円形状の貯蔵穴が確認されている。住居跡内の覆土は、褐色土と上層中央部に暗褐色土が自然堆積しており、ロー



第153図 第23号住居跡実測図



第154図 第23号住居跡出土遺物実測図

ム粒子・ハードローム小ブロックと一部に焼土粒子等を含み締りがある。

遺物は縄文土器片と弥生土器片が混在して出土しているが、量的には少ない。中央部よりやや北側の床面から弥生の壺形土器が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。

出土遺物 (第154・155図)

第155図1は弥生土器片で、撚糸文を施文している。2は縄文土器片で、胎土に繊維を含む条痕文系の土器である。

出土遺物解説表 (第154図)

遺物	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-23	1	壺形土器 (弥生)	B 21.5	付加糸縄文を施文。 頸—無文。 施文—羽状縄文。	内面—ナデ	普通・砂礫・橙	20% 第154図-1



第155図 第23号住居跡出土土器拓影図

第24号住居跡 (第156図)

本住居跡はA3i7調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北部に位置し、北側に23号住居跡、南側約2.5mのところ、西側に26号住居跡、西側2mのところ、36号土壌が存在する。

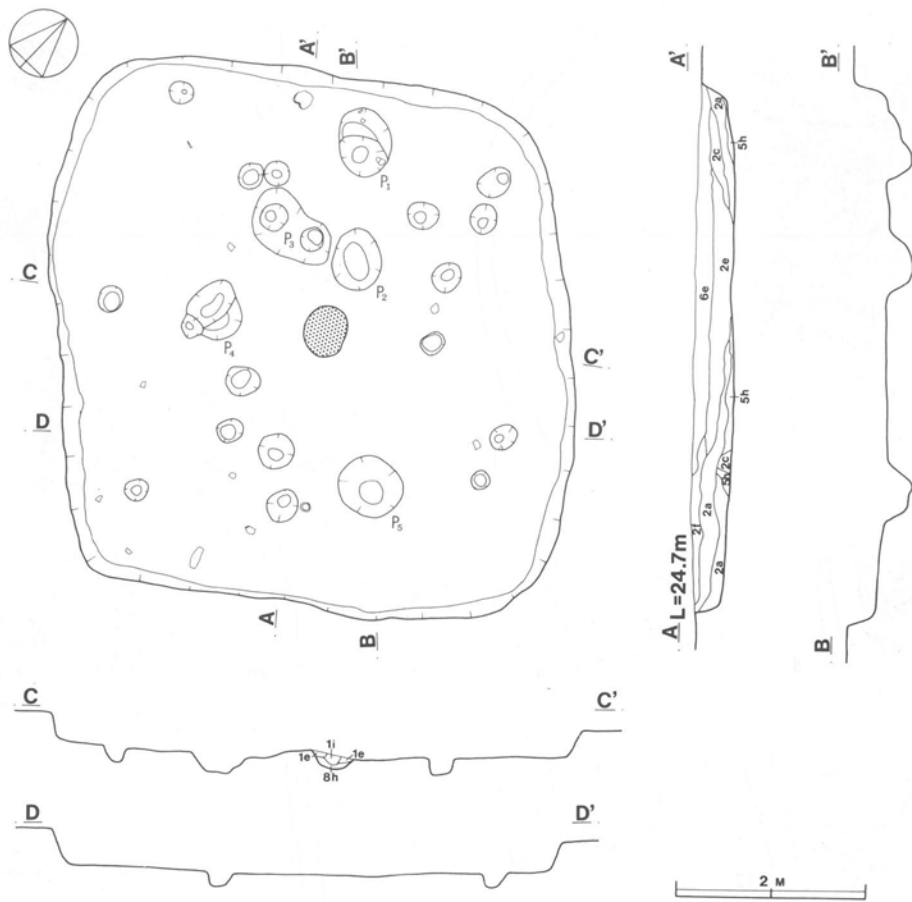
主軸方向はN - 47° - Wを指し、長軸5.6m・短軸5.4mの南北対角線がやや短い隅丸方形を呈している。壁高は30~40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっているがソフトロームで柔らかい。床面はやや南西部が低くなっており、小さな起伏もみられ全体的に軟弱である。炉跡はほぼ中央に検出され、床面を11cm程掘り窪めた地床炉で、長径53cm・短径45cmの楕円形で皿状を呈し、炉床は硬く焼けている。柱穴は17か所検出されたが比較的浅く、支柱穴は不明である。またP1~P5は直径60~95cm・深さ15~30cmぐらいの規模で、暗褐色土が堆積している。縄文土器片の出土が数点みられるので縄文時代の土壌かと思われる。住居跡内の覆土は、上層に黒褐色土、中・下層に暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックと一部に焼土粒子・炭化粒子を含み締りはなく柔らかい。

遺物は住居跡全体から縄文土器片・弥生土器片・土師器片が出土している。量的には縄文土器片が多い。南側コーナー付近の床面から紡錘車が検出されている。これらの遺物の在り方や規則性のないおびただしいピットの数から、本住居跡は増築や建て替えが行なわれ、長期間にわたって使用されたものであることもうかがわせる。

出土遺物 (第157・158図)

出土遺物解説表 (第157図)

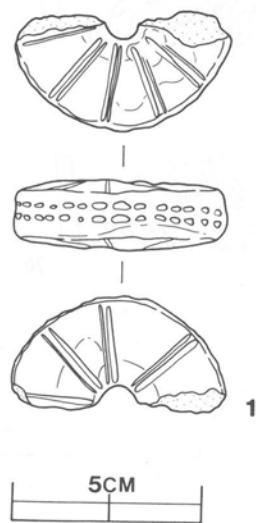
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-24	1	紡錘車	(5.8) 30.5g			普通・砂粒・ふい い褐色	45% 第157図-1



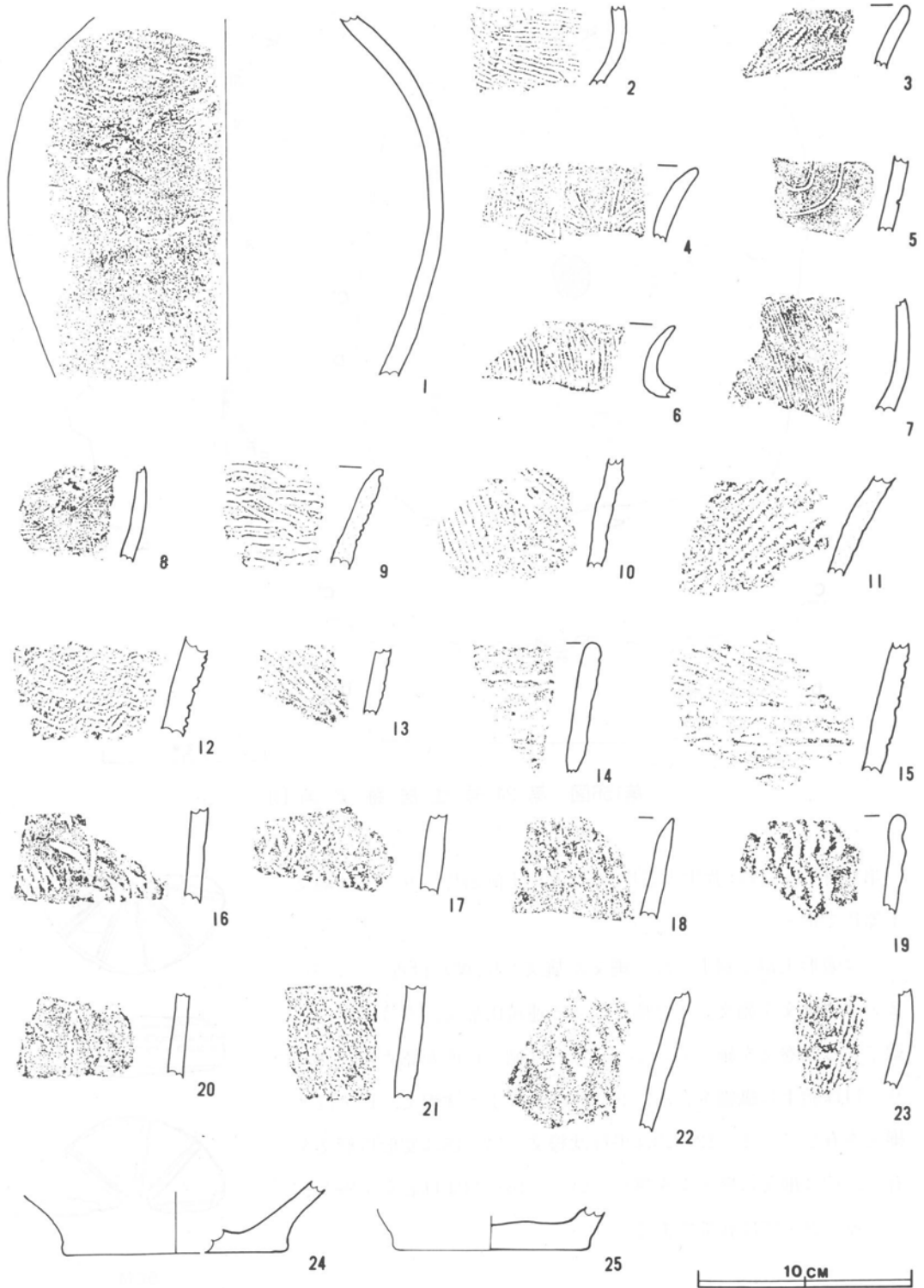
第156図 第24号住居跡実測図

第158図1～5は弥生土器片、6～8は土師器片、9～25は縄文土器片である。

1は壺形土器で胴上半部に縄文が施文され、煤が付着している。
 2・3は縄文を施文、4は櫛目による連続山形文、5は2本の沈線による渦巻文を施している。6～8は刷け目痕が認められる。
 9～11は胎土に繊維を含み、9は棒状具による沈線文、10・11は縄文を有している。12・13は平行沈線文、14・15は変形爪形文を有し、12は地文に撚糸文を施している。16～23は貝殻文を施文している。24・25は底部である。



第157図 第24号住居跡出土遺物実測図



第158图 第24号住居跡出土土器拓影图

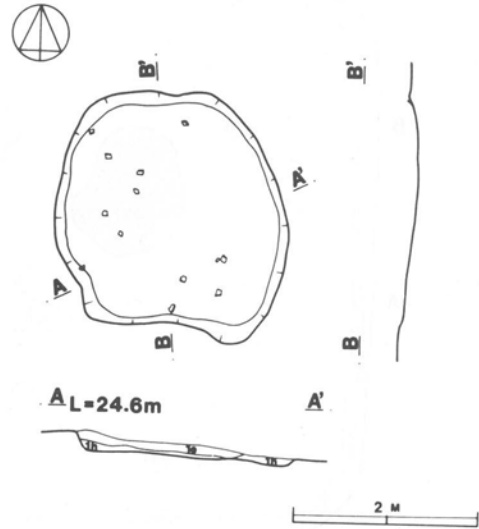
第25号住居跡 (第159図)

本住居跡はB2j9調査区に確認されたもので、遺跡中央よりやや北西部に位置し、南西側約2mのところには31号・32号土壌が存在する。

平面形状は、長軸3m・短軸2.5mの不定形を呈し、壁高5~10cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は東側と北側に向かって低く傾斜をなしている。

遺物は縄文土器片が浮いた状態で出土しているが、本遺構と関係するかは不明である。

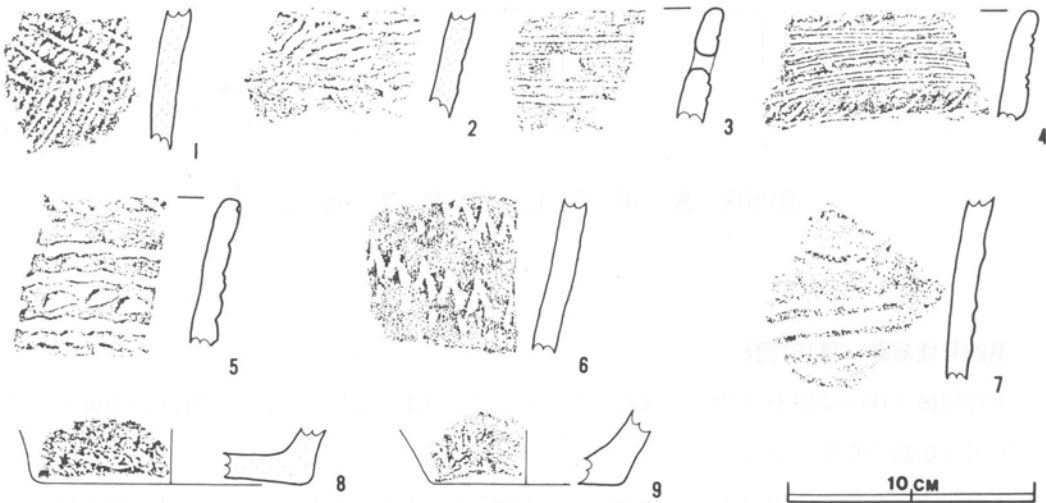
精査の結果、炉跡・柱穴・壁溝は検出されなかったし、壁・床面の状態も明確でなく、住居跡としての判断資料は乏しい。



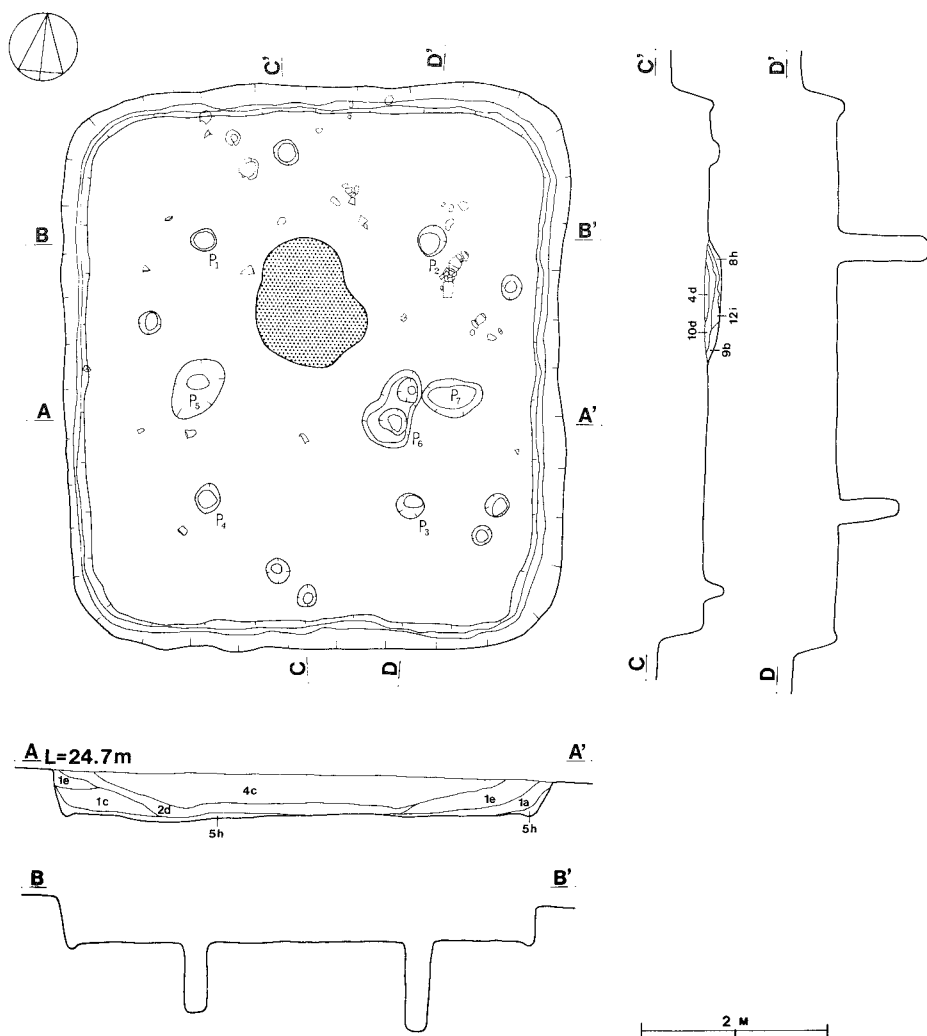
第159図 第25号住居跡実測図

出土遺物 (第160図)

1・2は胎土に繊維を含み、縄文を施文している。3・4は平行沈線文を有し、3は補修孔、4は地文に撚糸文を配している。5は変形爪形文、6は貝殻文、7は浮線文を施している。8・9は底部で、8は胎土に繊維を含み、胴部に縄文、9は胴部に「ハ」字状の刺突文が施されている。



第160図 第25号住居跡出土土器拓影図



第161図 第26号住居跡実測図

第26号住居跡（第161図）

本住居跡はB3as調査区を中心に確認されたもので、北側に24号住居跡、南側約2.5mのところ
に35号住居跡が存在する。

主軸方向はN - 10° - Wを指し、長軸6m・短軸5.3mの隅丸方形を呈している。壁高は50～60
cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は南西部がやや低くなっているが、ほぼ平坦
をなしている。壁・床面ともにハードロームで硬く締っており、良好な状態で確認された。炉跡
は中央部よりやや北側に検出され、床面を14cm程掘り窪めた地床炉で、長径140cm・短径100cmの

楕円形で皿状を呈し、焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。幅10~15cm・深さ5cm前後の壁溝が全周している。ピットは16か所検出され、主柱穴と考えられるP1~P4は規則的に配列されている。いずれも直径30cm前後・深さ63~95cmを測り深い。直線的に掘りこまれており、最深部は平坦を呈す。P5~P7は長径30~50cmの楕円形を呈し、暗褐色土と褐色土が堆積している。しかし性格は不明である。住居跡内の覆土は、上層には黒褐色土が30cm前後の厚さで堆積しており、壁際は褐色土、床面付近は暗褐色土が堆積している。

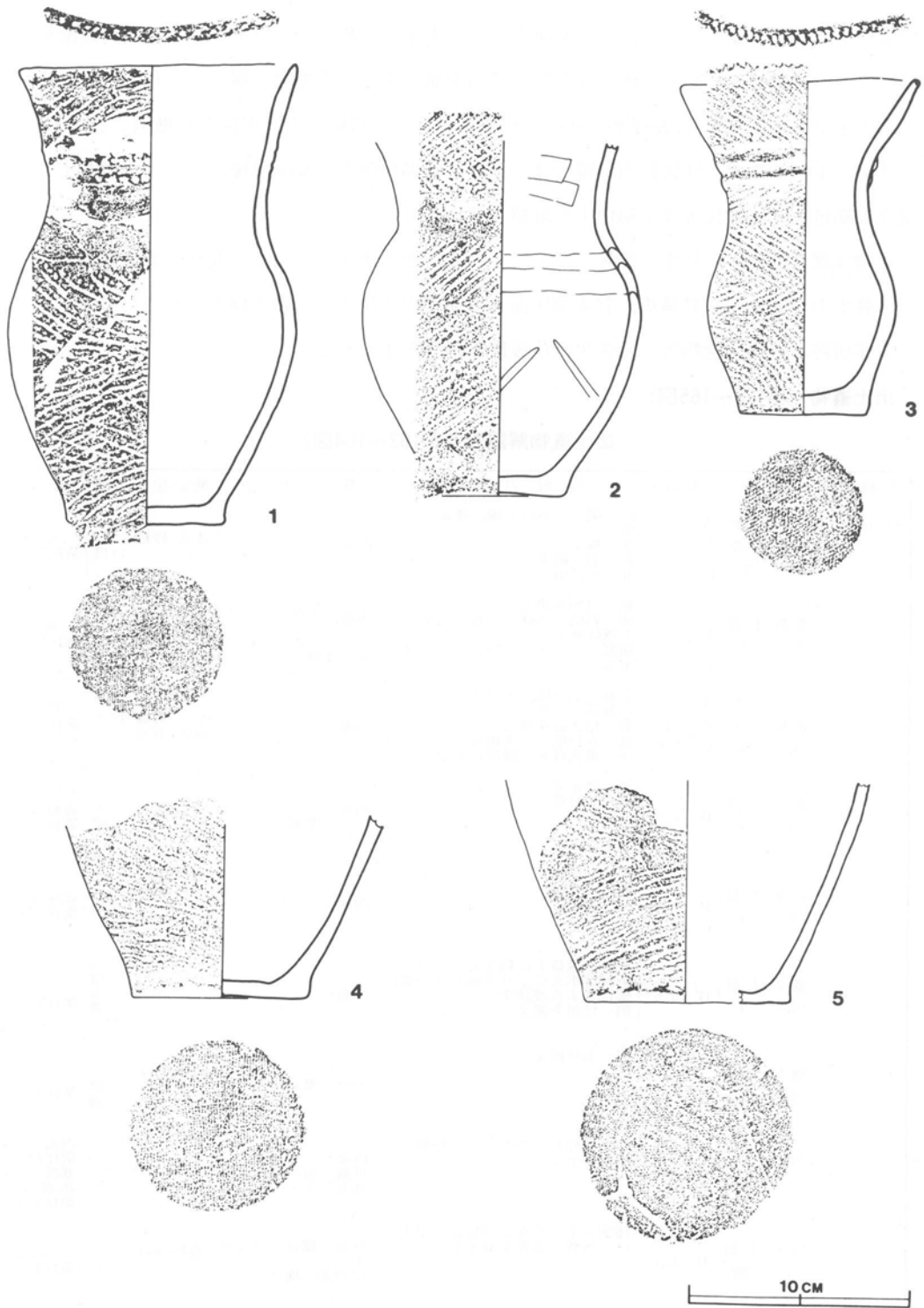
遺物は縄文土器片と弥生土器片が、主として北側から出土している。北壁下の床面からほぼ完形の弥生の壺形土器や紡錘車、北東側床面から完形の弥生の小形壺が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。

出土遺物 (第162~165図)

出土遺物解説表 (第162~164図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考	
SI-26	1	小形壺形土器(弥生)	A 12.5 B 21.0 C 7.1	口-縄文, その下端に連続して圧痕。 頸-無文。 胴-羽状縄文。 底-布目痕。	内面-ナデ	普通・砂粒・にぶい橙	90% 第162図-1
	2	壺形土器(弥生)	B 16.0 C 6.2	胴-付加条縄文。 頸-斜格子状縄文。頸部と胴部との境は無文。 頸部-ゆるやかに外反し、口縁に至る。	内面-上部-ヘラナデ 下部-ナデ 底-摩滅	普通・砂礫・橙雲母	80% 第162図-2
	3	小形壺形土器(弥生)	A 10.2 B 15.1 C 5.6	全面に羽状縄文を呈す。 口唇部-キザミ。 頸-粘土紐を貼付。 底-布目痕。二次焼成をうけている。最大径を口縁部にもつ。	内面-ナデ	やや・砂礫・橙 軟弱 石英	100% 第162図-3
	4	壺形土器(弥生)	B 7.8 C 8.0	胴-撫糸文。 底-布目痕。	内面-ナデ 摩滅	やや・砂粒・にぶい橙 軟弱	底面 100% 第162図-4
	5	壺形土器(弥生)	B 9.8 C 9.4	胴-羽状縄文。 底-布目痕。	内面-ナデ	普通・砂礫・にぶい橙 スゴリア	底部 100% 第162図-5
	6	壺形土器(弥生)	B 19.6	頸-微隆帯上に刺突文。その下を楕目懸垂文により区画しその間に楕目による波状文。 胴-付加条縄文。	内面-ナデ	やや・砂粒・にぶい橙 スゴリアにぶい黄橙	20% 第163図-1
	7	壺形土器(弥生)	B 27.2	胴-羽状縄文。	内面-摩滅	軟弱・砂粒・にぶい橙 (多) 灰褐	30% 第163図-2
	8	高坏形土器(土師)	A 22.5 B 8.2	口-外傾し、なだらかに外傾して底部に至る。	内面-ヘラミガキ 外面-縦ヘラミガキ 基部-ナデ	普通・砂粒・橙	内面-丹彩炭化物付着 基部-欠損 坏部 80% 第164図-1
	9	塊形土器(土師)	A (16.0) B 6.7	体部-まろやかな半球状を呈す。 口-内彎し器厚を減ずる。	外面-横位ヘラミガキ 口唇部-横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙	30% 第164図-2
	10	紡錘車	4.4×2.9 49.5g			普通・砂礫・にぶい黄橙	97% 第164図-3



第162図 第26号住居跡出土遺物実測図

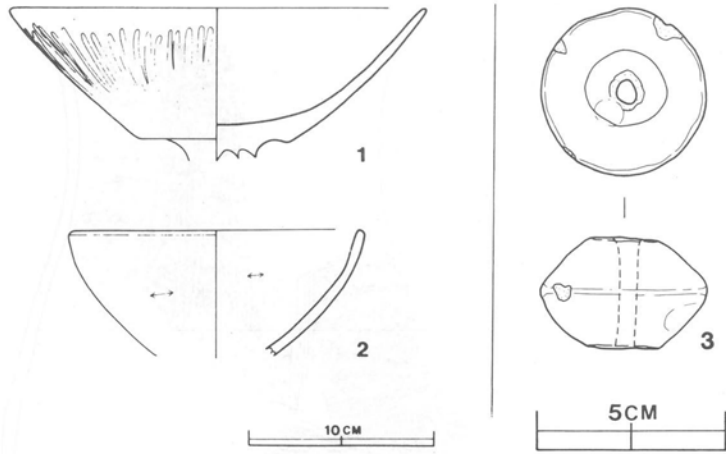


10 CM

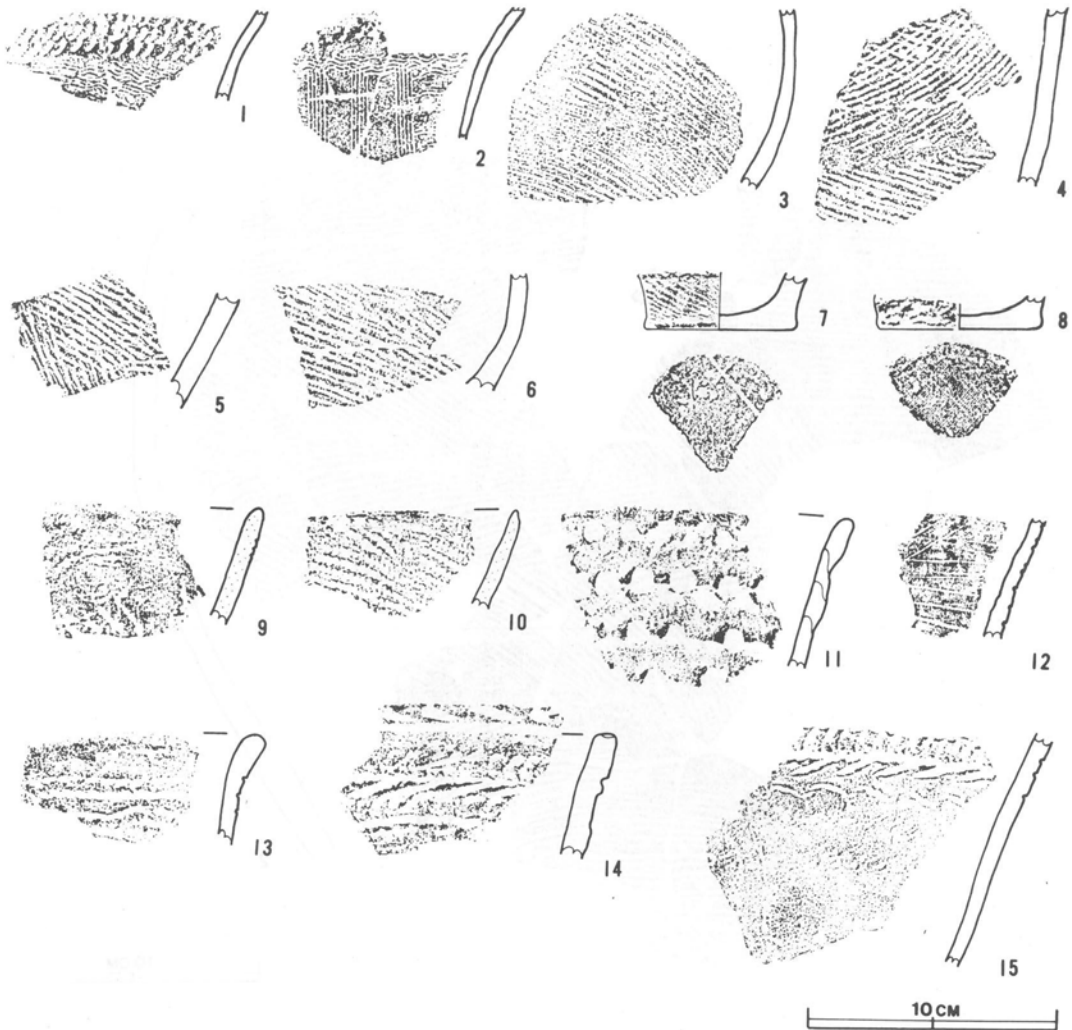
第163図 第26号住居跡出土遺物実測図

第165図1～8は弥生土器片，9～15は縄文土器片である。

1・2は口縁部にキザミを有し，頸部は楕目による波状文と懸垂文を施している。3～6は縄文を施文しており，4は羽状縄文を呈している。7・8は底部で，7に木葉



第164図 第26号住居跡出土遺物実測図



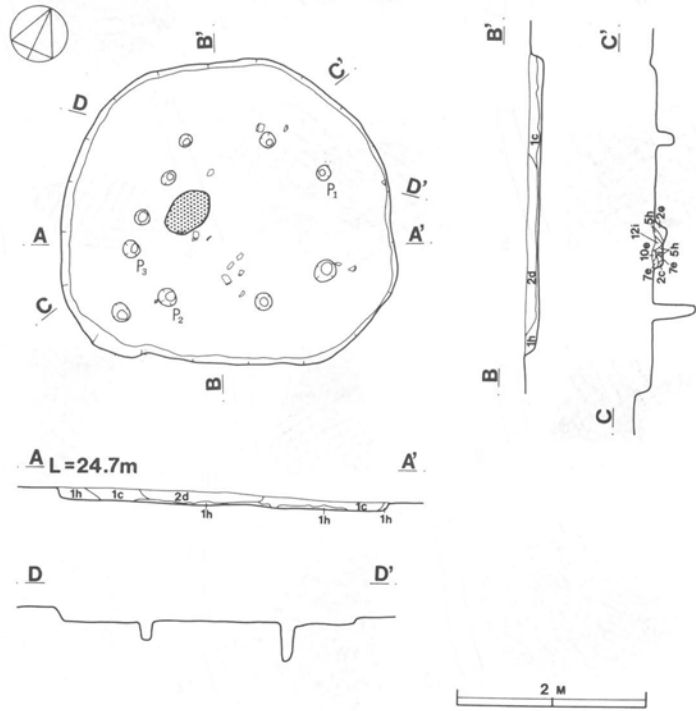
第165図 第26号住居跡出土土器拓影図

痕, 8に布目痕が認められる。9・10は胎土に繊維を含み, 縄文を施文している。11は輪積痕を残し, その下端に凹凸文を施している。12は平行沈線文, 13は変形爪形文, 14・15は連続爪形文を有している。15には「S」字状結節文が認められる。

第27号住居跡 (第166図)

本住居跡はB3b調査区を中心に確認されたもので, 遺跡の北東端に位置し, 北西側に26号住居跡が存在する。

長径方向はN-28°-Eを指し, 長径3.6m・短径3.2mの楕円形を呈している。壁高は10cm前後を測り, 壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっているが軟弱である。床面はほぼ平坦で, 硬く締まっている。炉跡は中央部よりやや西側に検出され, 床面を12cm程掘り窪めた地床炉で, 長径55cm・短径35cmの楕円形を呈し, 焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。ピットは10か所検出され, P₁~P₃は深い。支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は, 暗褐色土と褐色土が堆積している。



第166図 第27号住居跡実測図

遺物は少量の縄文土器片が出土している。主として中央から南側にかけての出土が多い。ほぼ中央部から, 床面に密着した状態で深鉢形土器が検出されている。これらの土器群は, ほとんどが繊維を含み地文に縄文を有している。

本住居跡は, 出土遺物等から縄文時



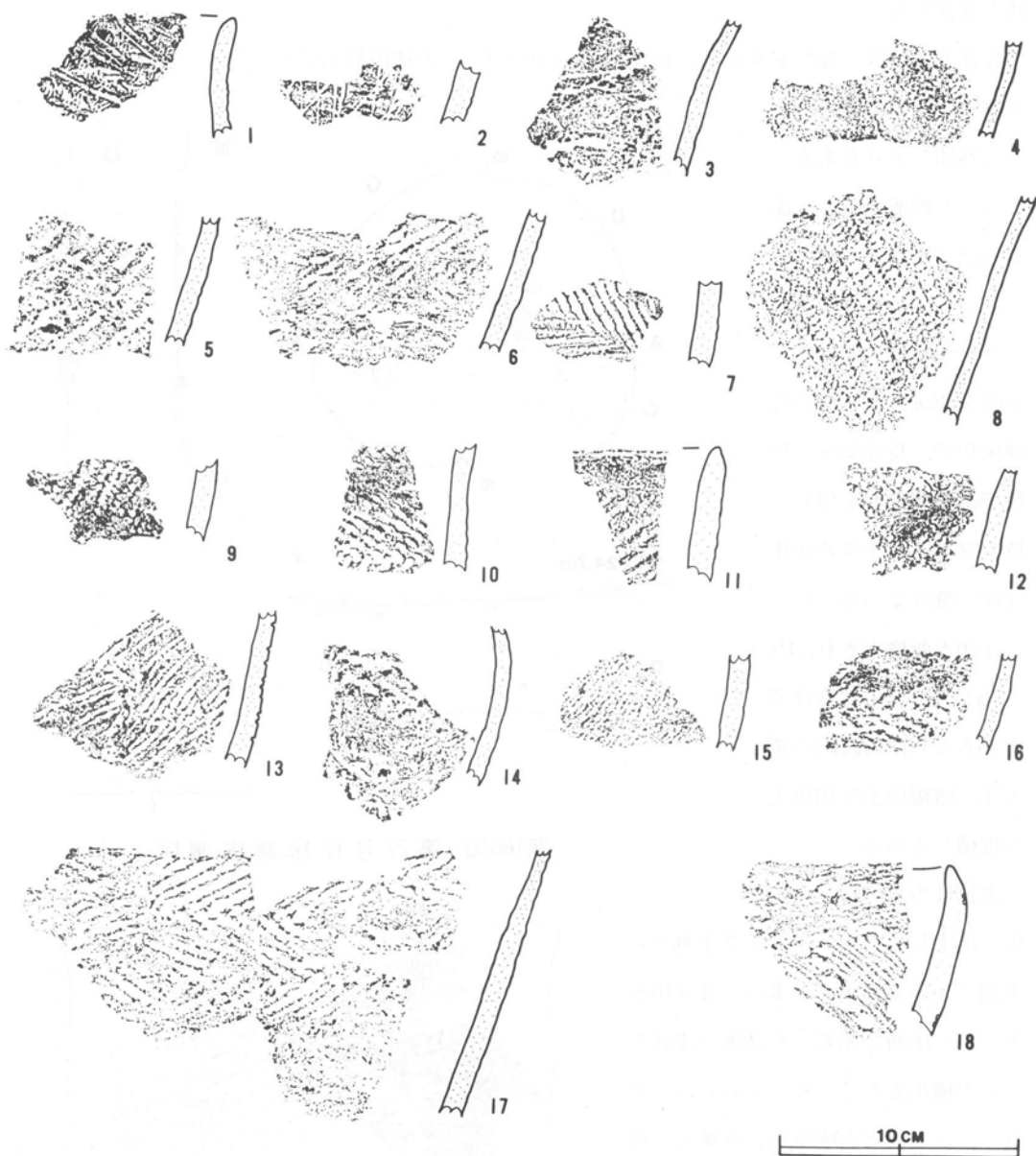
第167図 第27号住居跡出土遺物実測図

代前期の黒浜期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第167・168図)

出土遺物解説表 (第167図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-27 1	深鉢形土器 (縄文)	A (29.6) B 12.5	胎土に繊維を含み、付加条縄文を施文している。	内面ナデ	普通・砂粒・橙	口縁部15% 第167図-1



第168図 第27号住居跡出土土器拓影図

第168図1～18は胎土に繊維を含み、地文に縄文を有する。1・2には沈線文を施し、18には円形竹管文を押捺している。

第28号住居跡 (第169図)

本住居跡はA3h2調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北部に位置し、北側約4.5mのところと41号住居跡、西側1mのところと35号土壇、南側に隣接して37号土壇が存在する。

長径方向はN - 65° - Wを指し、長径4.2m・短径3.3mの楕円形状を呈している。壁高は15cm前後を測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は北東に向かってやや低く傾斜をなしているが、ほぼ平坦で硬い。炉は有さない。ピットは

10か所検出されたが比較的浅いものが多く、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、暗褐色土・褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ソフトローム小ブロックを含み締りは弱い。

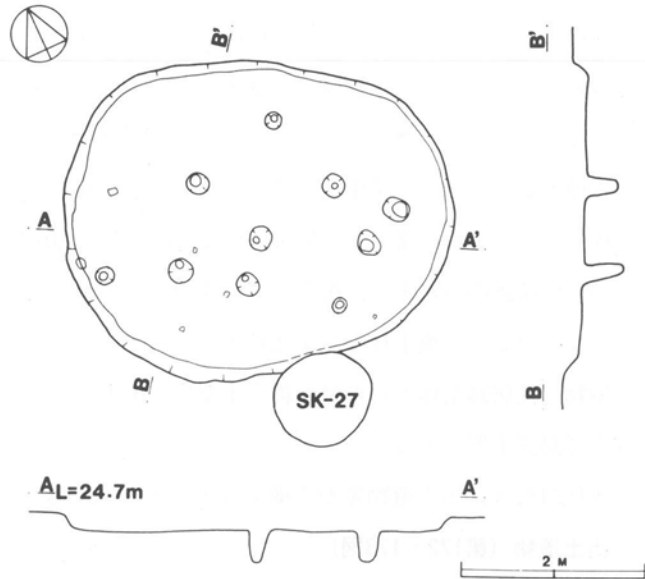
遺物は極少量の縄文土器片が、主として西側から出土している。小破片が多く、しかも覆土中からの出土であり、本住居跡の時期決定には問題がある。

出土遺物 (第170図)

1～3は胎土に繊維を含み、1・2は縄文、3は細い沈線文を施している。



第170図 第28号住居跡出土土器拓影図



第169図 第28号住居跡実測図

第29号住居跡（第171図）

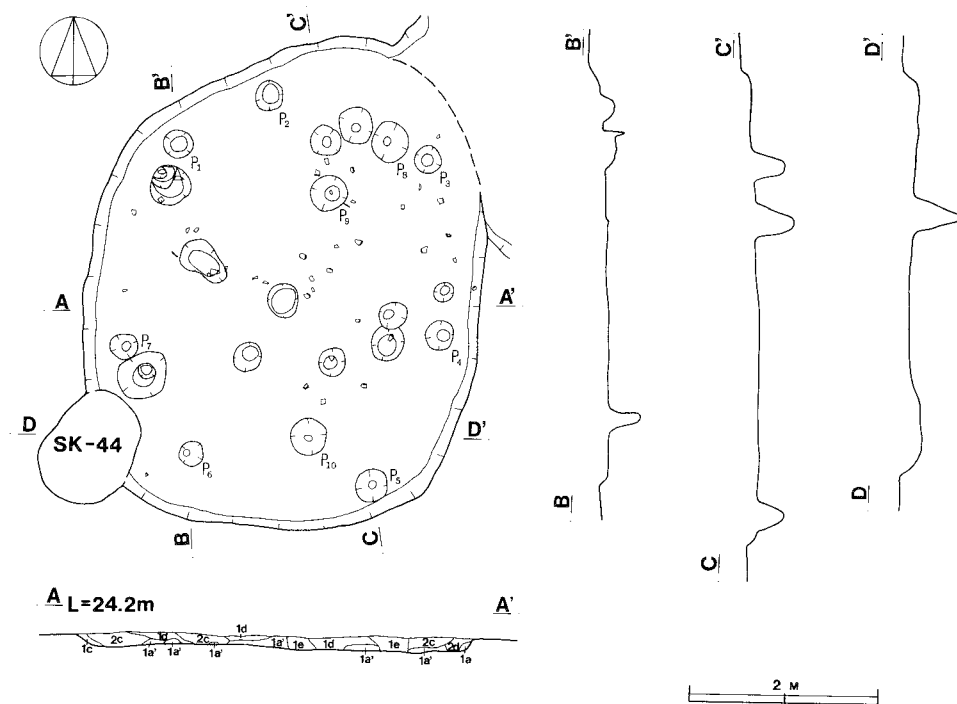
本住居跡はB3d1調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央より北部に位置し、北東側は30号住居跡、南西側は44号土壌と重複している。重複遺構の新旧関係は、30号住居跡が廃絶されてから本住居跡が営まれ、その後に44号土壌が掘りこまれている。

長径方向はN-5°-Eを指し、長径5.1m・短径4.2mの北東部がはり出した不整楕円形を呈している。壁高は10~15cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はほぼ平坦をなしているが、西側はローム質土、東側は焼土・炭化粒子が混入している極暗褐色土がそれぞれ硬く締っており、貼床とも考えられる。炉は有さない。ピットは21か所検出され、P1~P7は主柱穴と考えられ、深さ20~33cmを測る。P8~P10は直径40cm前後・深さは45~60cmと大きくて深い。住居跡内の覆土は、褐色土と壁際付近の上層に暗褐色土の堆積がみられ、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含み締っている。

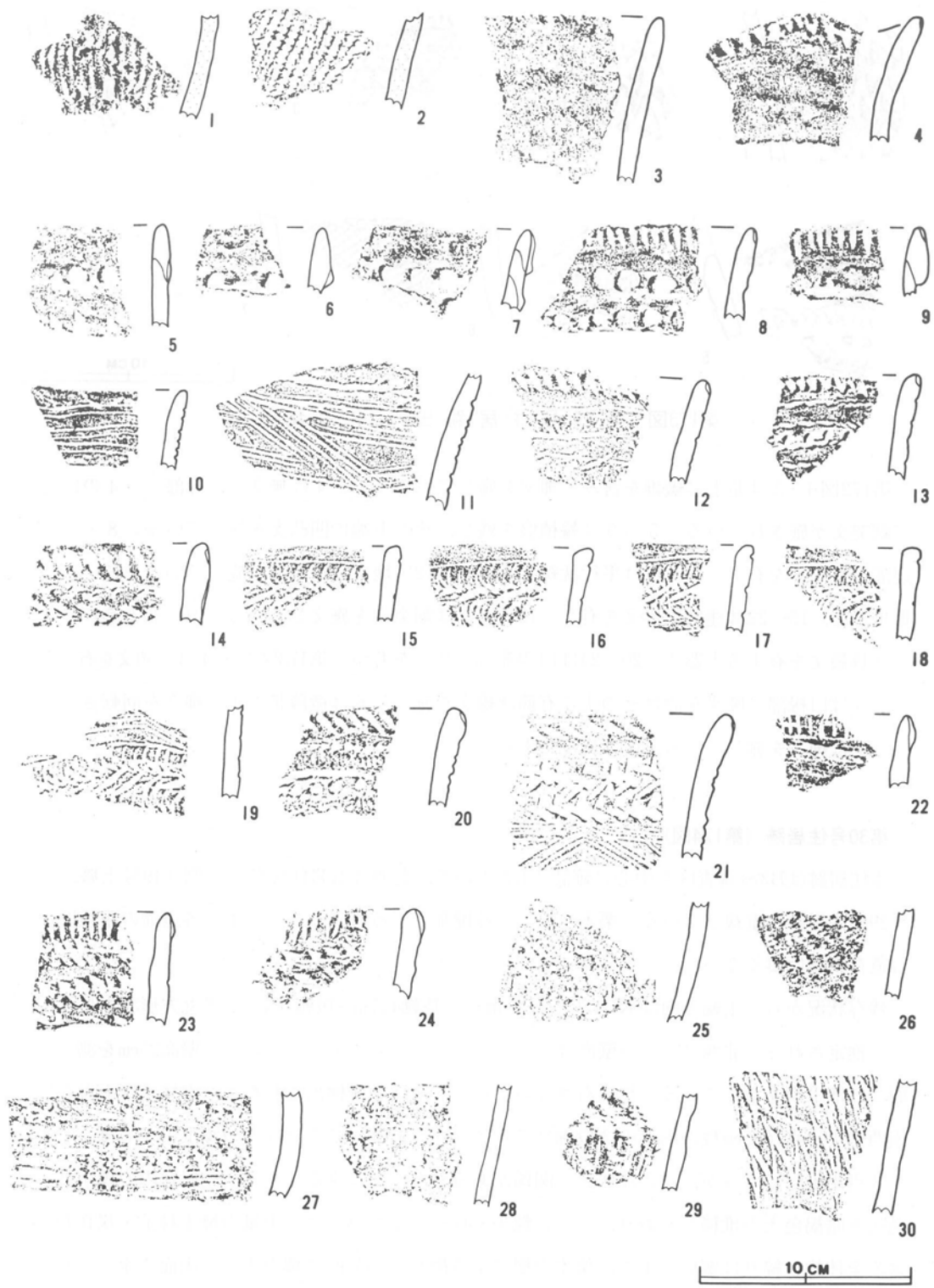
遺物は住居跡全体から多量の縄文土器片が出土している。これら土器群は、ほとんどが縄文前期の浮島式土器である。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の浮島期に比定される遺構と思われる。

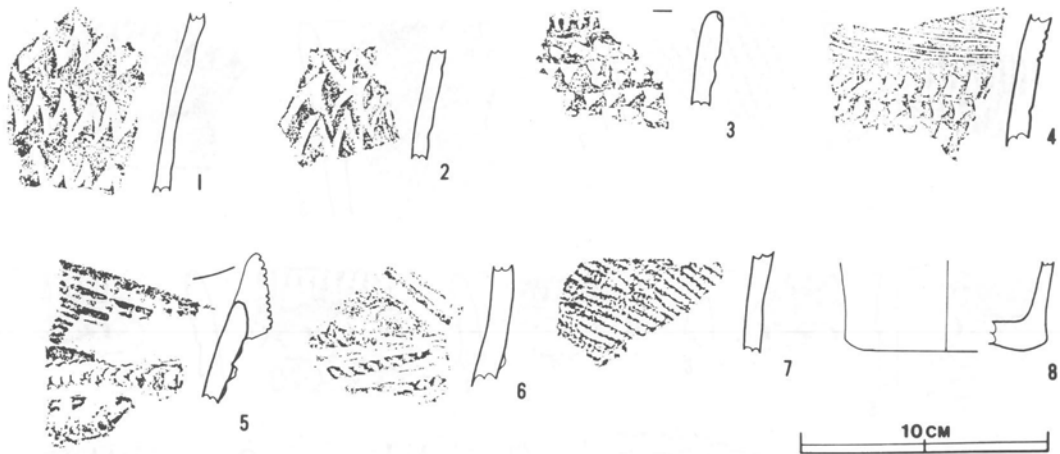
出土遺物（第172・173図）



第171図 第29号住居跡実測図



第172图 第29号住居跡出土土器拓影图



第173図 第29号住居跡出土土器拓影図

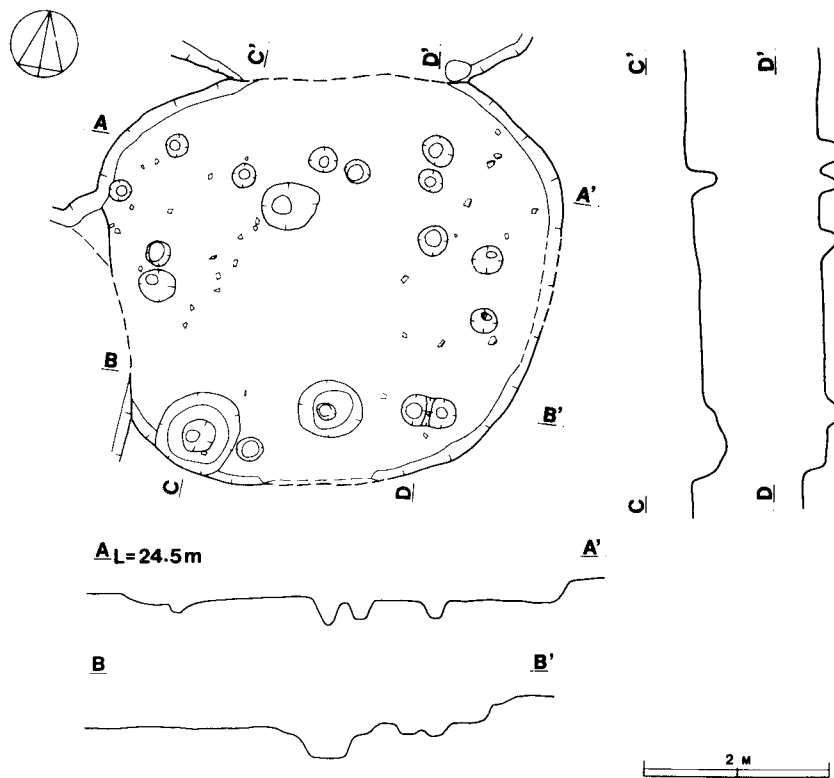
第172図1・2は胎土に繊維を含み、縄文を施している。3・4は無文の口縁部で、4の口辺部に刺突文が施されている。5～9は輪積痕を残し、その下端に凹凸文を施している。8・9の口辺部にキザミを有す。10～12は平行沈線文を有し、12は地文に貝殻文を旋している。13・14は変形爪形文、15～22は連続爪形文を有し、13～21には刺突文を施文している。23～30と第173図1・2は貝殻文を有する土器で、20～24は口辺部にキザミをもつ。第173図3・4は三角文を有している。5は口縁部に隆帯を設けその上に節沈線文を施し、6は微隆帯の上に縄文を回転させている。7は縄文を施している。8は底部である。

第30号住居跡 (第174図)

本住居跡はB3c2調査区を中心に確認されたもので、北側は31号住居跡、東側は49号土壌、西側は29号住居跡と重複している。栗木の根による攪乱が至る所にみられ、また各遺構の重複関係から遺存状態は良くない。

残存状況から、主軸方向はN - 80° - Eを指し、長軸4.7m・短軸4.4mの隅丸方形状を呈するものと推定される。北西コーナー壁面はロームでしっかり立ちあがっており、壁高25cmを測る。床面はほぼ平坦をなしている。炉は有さない。ピットは18か所検出されたが、支柱穴は不明である。南西壁下に直径85cm程の円形の2段掘りこみピットがあり、このピットの覆土中から縄文土器片が3点出土しているが、この住居跡と関係があるかどうかは定かでない。住居跡内の覆土は、褐色土と暗褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックと少量の焼土粒子・炭化粒子を含み全体的に締りは弱い。また、栗木の根による攪乱が部分的に覆土中から床面に至っている。

遺物は住居跡全体から縄文土器片と弥生土器片が出土している。量的には縄文土器片が圧倒的に多いが、そのほとんどは覆土中からの出土である。

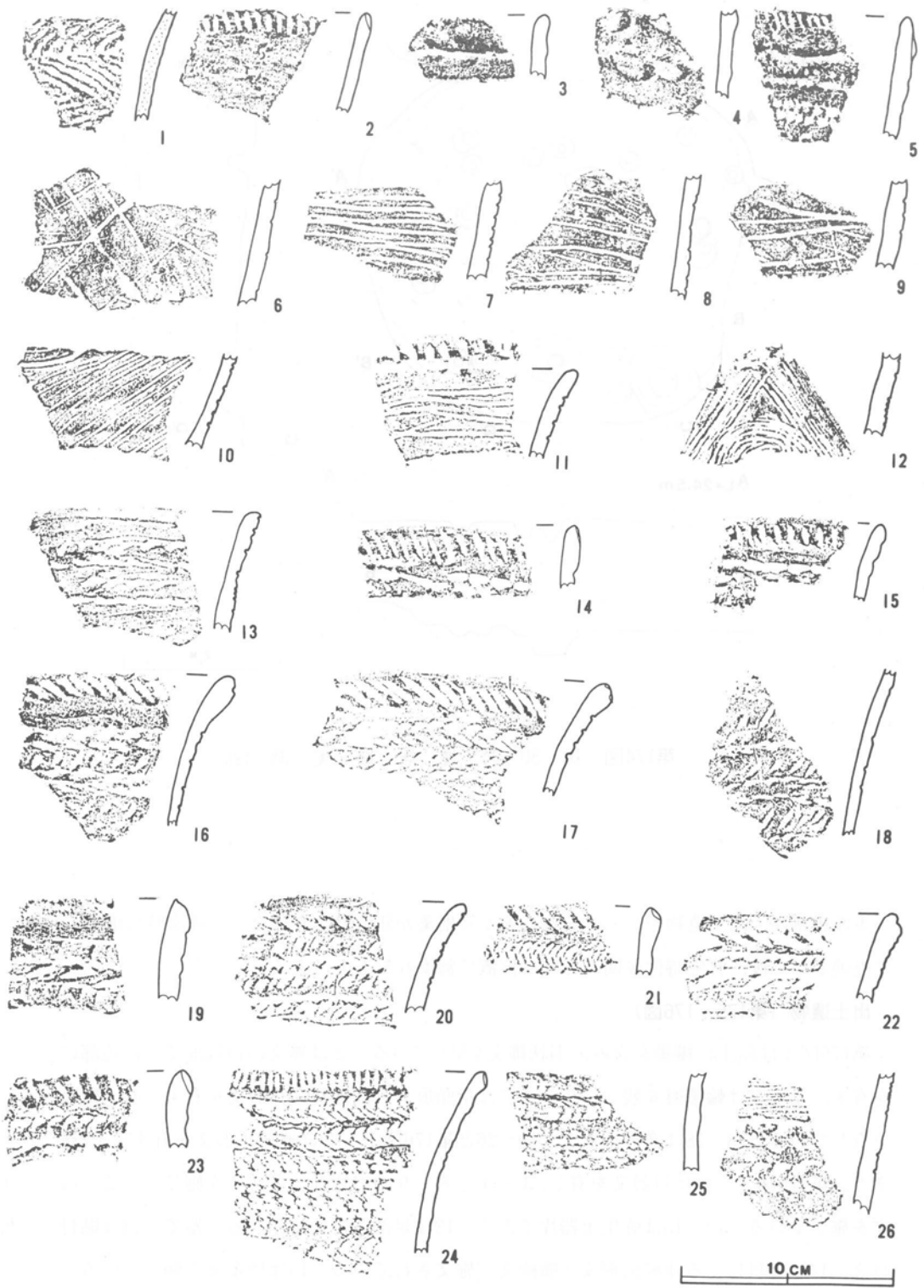


第174図 第30号住居跡実測図

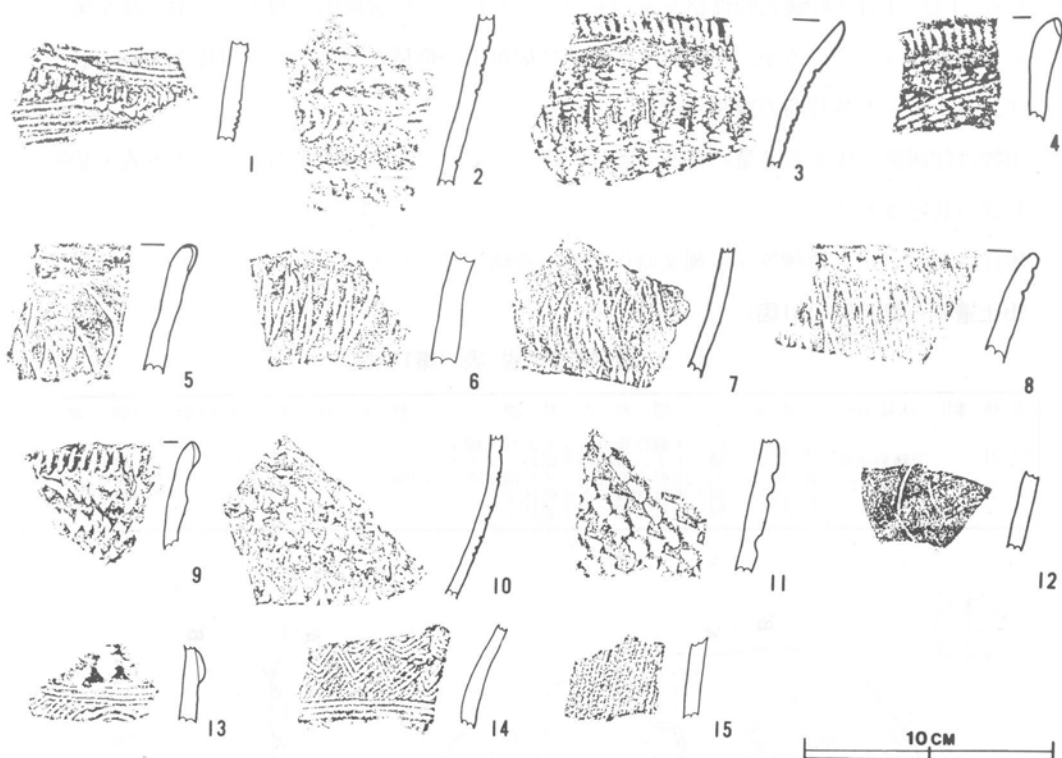
本住居跡は、出土遺物やピットの在り方から増築か建て替えを行ない、縄文時代前期に営まれて廃絶された後、弥生時代後期にも同じ位置に営まれたものであろう。

出土遺物 (第175・176図)

第175図1は胎土に繊維を含み、羽状縄文を呈している。2は無文の口縁部で、口辺部にキザミを有す。3～5は輪積痕を残し、3・4には指頭痕、5は地文に貝殻文を有す。6～12は沈線文を有している。13～18は変形爪形文、19～26と第176図1・2は連続爪形文を有する土器群である。また、第176図3～10は貝殻文を有し、3・4と8・9の口辺部にキザミを施している。11は三角文を施している。12～15は弥生土器片である。12は足洗式に比定される土器で、13は貼付文と櫛目文、14は櫛目による連続山形文と横線文が施文されている。15は捺糸文を施している。



第175图 第30号住居跡出土土器拓影图



第176図 第30号住居跡出土土器拓影図

第31号住居跡 (第177図)

本住居跡はB3b2調査区を中心に確認されたもので、北側が42号住居跡、南側が30号住居跡と重複している。重複遺構の新旧関係は、本住居跡が42号住居跡より新しく、30号住居跡より古い。

主軸方向はN-86°-Eを指し、長軸5.7m・短軸5.5mの外周が曲線的な隅丸方形状を呈している。壁高は10~25cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はハードロームで硬く締っており、南側に向かってやや低く傾斜をなしている。床面のレベルは42号住居跡の床面より7cm低い。炉跡は3か所検出され、いずれも床面を6~10cm掘り窪めた地床炉である。便宜上、東側に位置する炉をF1号、北西側に位置する炉をF2号、南側に位置する炉をF3号と仮称しておく。F1号は長径65cm・短径50cmの楕円形を呈し、長径方向は北東を指している。焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。F2号は長径60cm・短径35cmの不整楕円形を呈し、長径方向は北西を指している。しかし焼土も堆積しておらず、ほとんど使用されていない。F3号は長径70cm・短径40cmの楕円形を呈し、長軸方向は北東を指している。焼土ブロックを多く含み炉床は硬く焼けている。ピットは配列や大きさに規則性はないが、多くのピットが認められるので、これらは建て替えや増築等に伴ったものと思われる。本住居跡がかなりの長期間使用されたものであることをうかがわせる。これらピットのうち、位置や形状・深さからみてP1~P12は支柱穴と考え

られる。P13とP14は貯蔵穴的性格をもつものと思われる。住居跡内の覆土は、中央部が栗木の根による攪乱をうけているが、暗褐色土と壁際に褐色土が堆積している。土器片の編年的層準は示さず、各土層とも各時期の遺物が混在している。

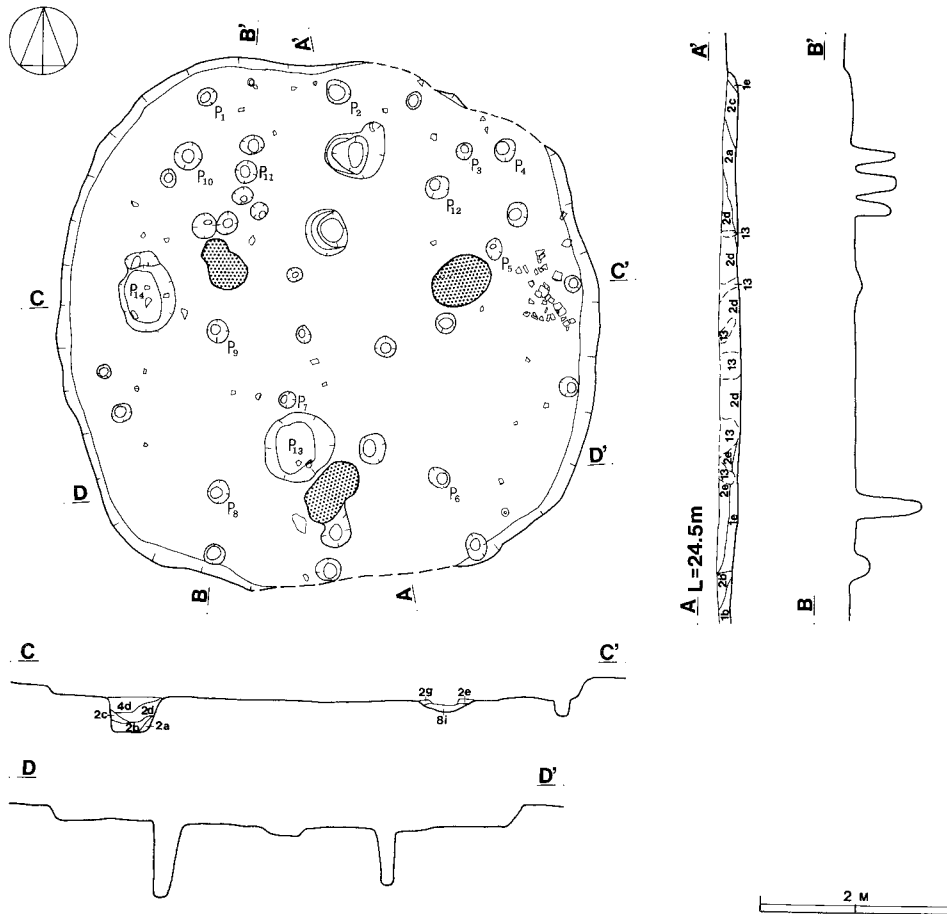
遺物は住居跡全体から多量の縄文土器片が出土している。これら土器群は、黒浜式・諸磯式・浮島式に比定される。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

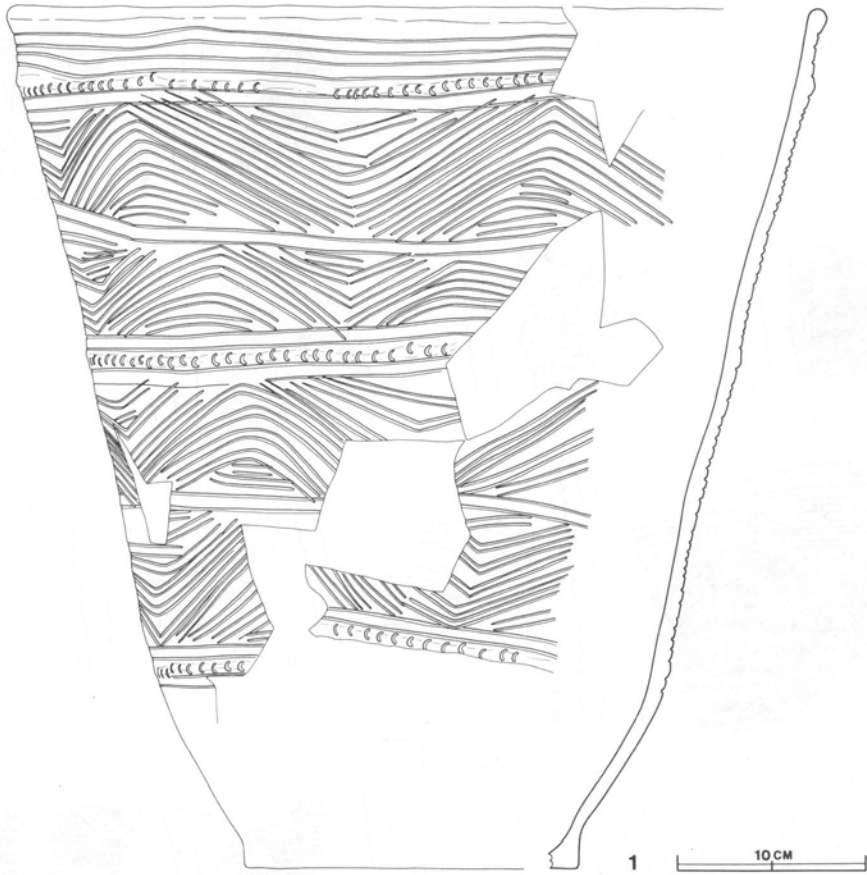
出土遺物 (第178~181図)

出土遺物解説表 (策178図)

遺構	番号	法量 (cm)	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-31	1	深鉢形土器 (縄文)	A (42.5) B 45.5 C (17.7)	口一半截竹管具による平行沈線文。 頸一上下に微隆帯を貼付し、その上に爪形文を押し、その微隆帯の間を平行沈線による弧状文。 胴一平行沈線による弧状文。	内面一ヘラミガキ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 い橙 にぶ い褐 橙	40% 第178図-1

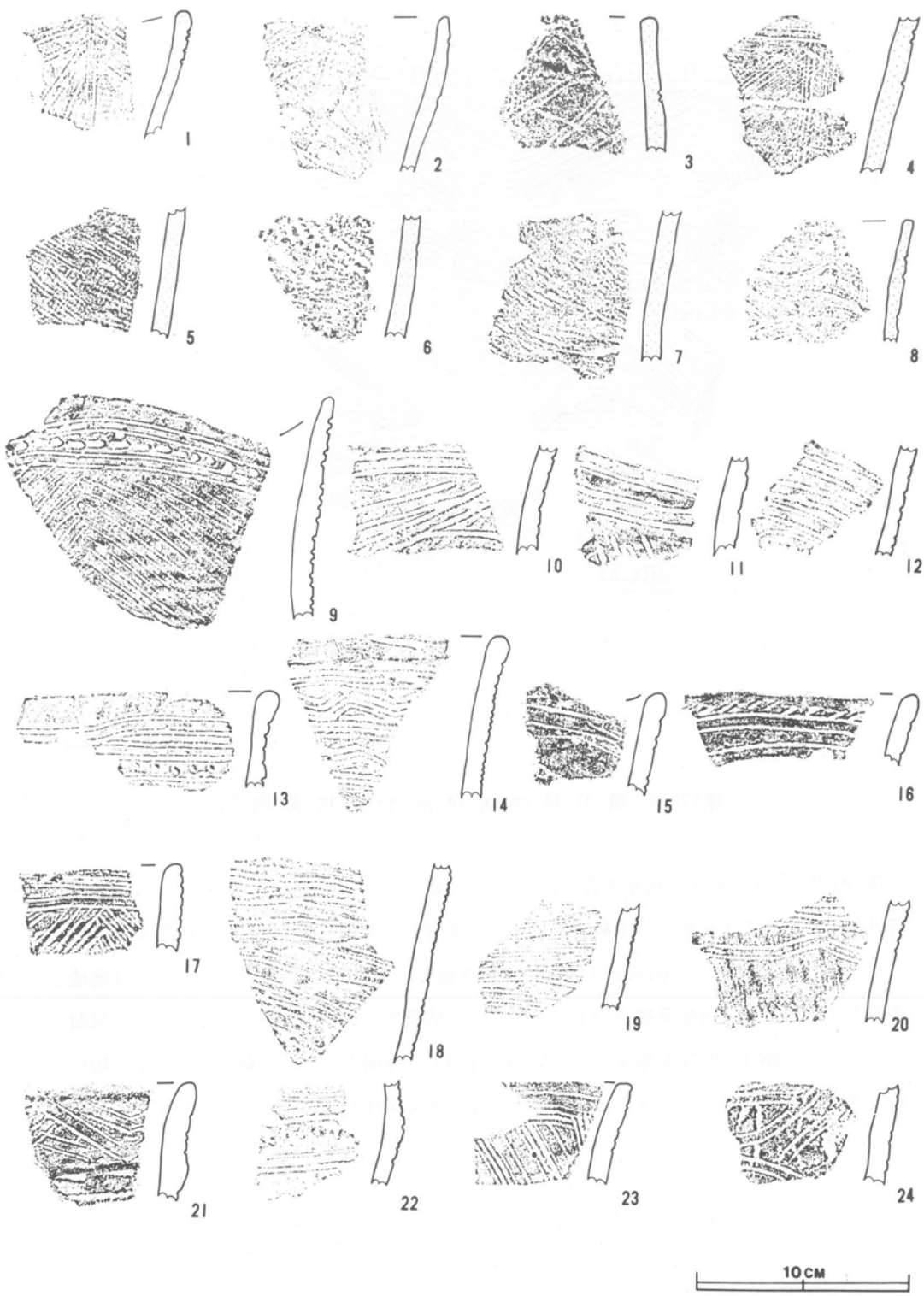


第177図 第31号住居跡実測図

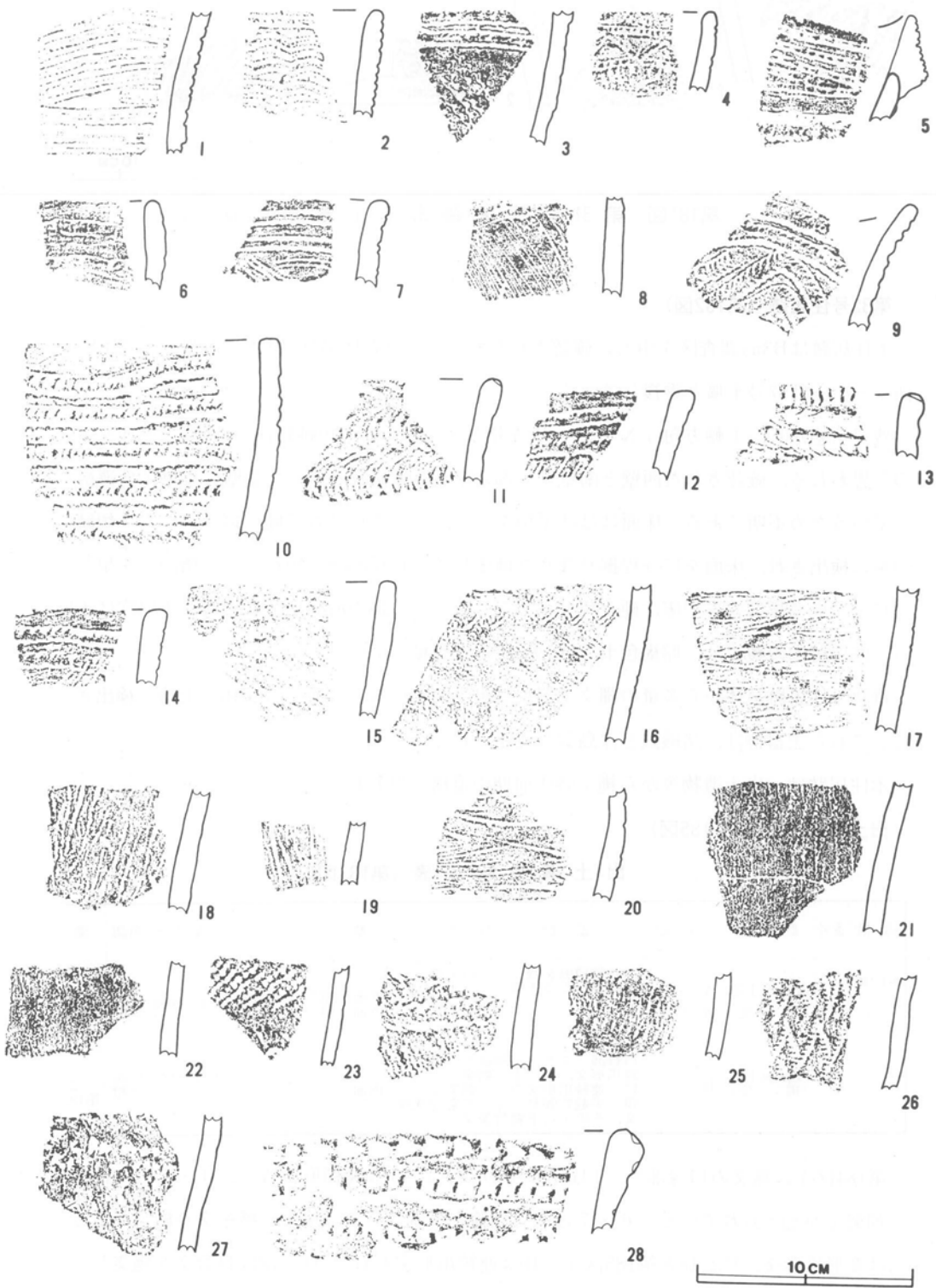


第178図 第31号住居跡出土遺物実測図

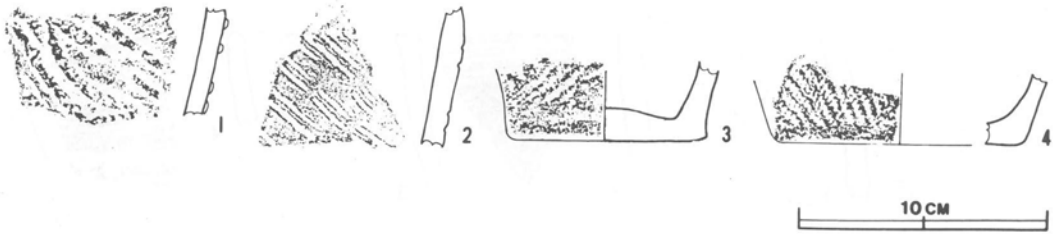
第179図1～8は胎土に繊維を含み、1～4は沈線文、5～8は縄文を施している。9～24は平行沈線文を有する土器群で、半截竹管具による横引き・波状・鋸歯状・弧状に施文している。24は地文に貝殻文を有し、第180図1～6は有節沈線文、7・8は変形爪形文、9～15は連続爪形文を有している。16は付加条縄文の上に「S」字状結節文、17～20は燃糸文、21～27は貝殻文を施文している。28は三角文を施文している。第181図1は浮線文、2は半截竹管具による短い平行沈線文を斜行させている。3・4は底部で、胴部に縄文を施している。



第179图 第31号住居跡出土土器拓影图



第180图 第31号住居跡出土土器拓影图



第181図 第31号住居跡出土土器拓影図

第32号住居跡 (第182図)

本住居跡はB3a3調査区を中心に確認されたもので、北側は33号住居跡、東側は40号住居跡、南西コーナーは57号土壌と重複している。

残存状態から、主軸方向はN - 9° - Wを指し、長軸5m・短軸4.7mの隅丸方形状を呈するものと思われる。確認された西壁と南壁の一部は壁高30~40cmを測り、北壁・東壁は他遺構と重複しているため不明である。床面はほぼ平坦をなし、ハードロームで硬く締っている。炉跡はほぼ中央に検出され、床面を15cm程掘り窪めた地床炉で、長径90cm・短径50cmの楕円形を呈し、焼土ブロックを多量に含み炉床は硬く焼けている。ピットは18か所検出されたが、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。

遺物は住居跡全体から多量の縄文土器片が出土している。北側から深鉢形土器が検出されている。これら土器群は、諸磯式と浮島式に比定される。

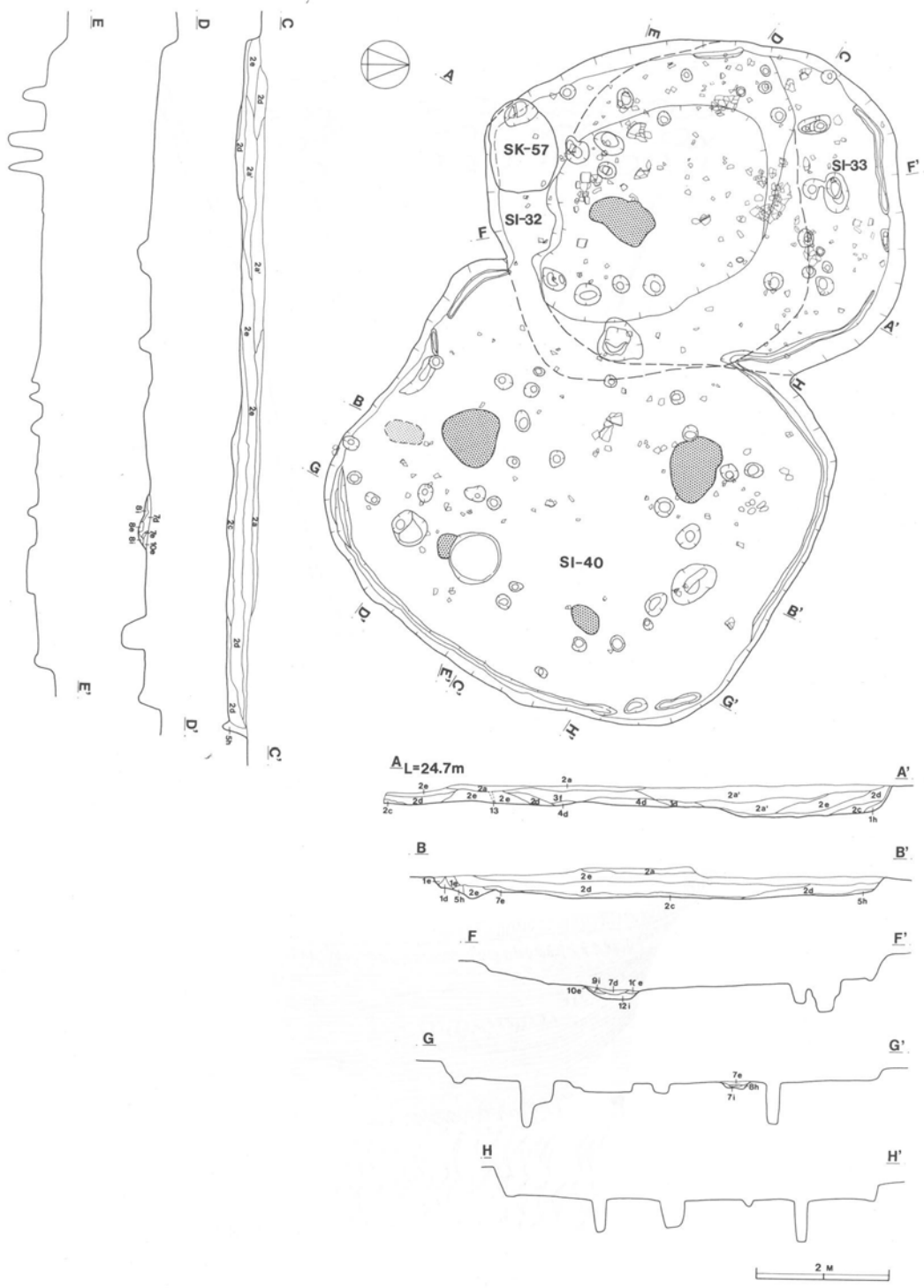
本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第183~185図)

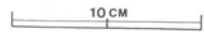
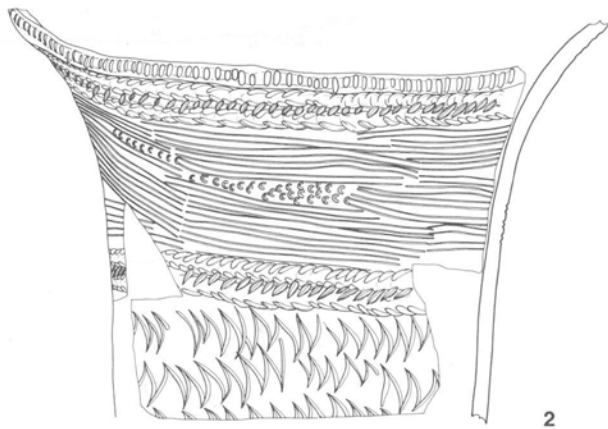
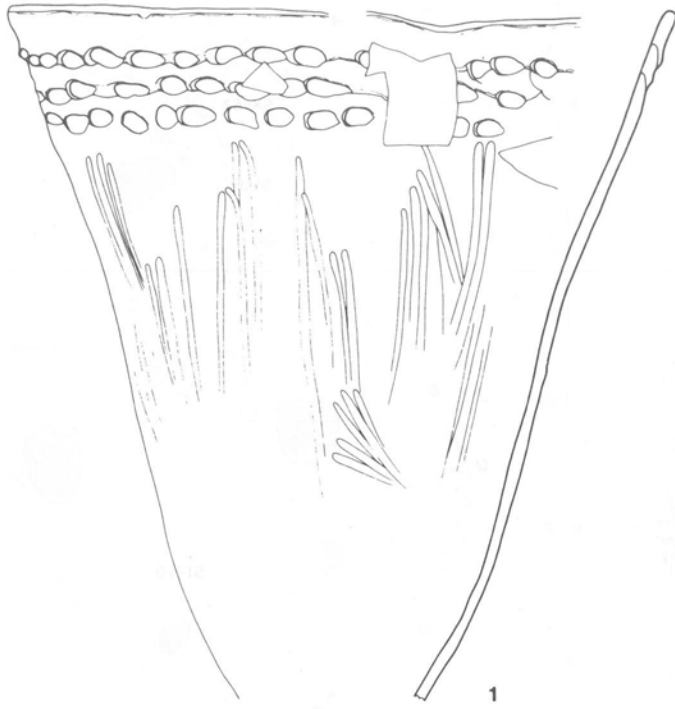
出土遺物解説表 (第183図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-32	1	深鉢形土器 (縄文)	A (36) B 37.3	口輪積痕を残し、その下端に、棒状具による圧痕。	外面—縦ヘラミガキ 内面—横ヘラミガキ	良好・砂粒・赤褐	40% 第183図-1
	2	深鉢形土器 (縄文)	B 21.5	口唇部—キザミ。胴部との境に連続爪形文、その上に刺突文。口—連続爪形文の上に刺突文。頸—半截竹管具による多条の沈線文、その上に半截竹管文。	内面—ヘラミガキ	良好・砂粒・ぶスコい橙 リア	25% 第183図-2

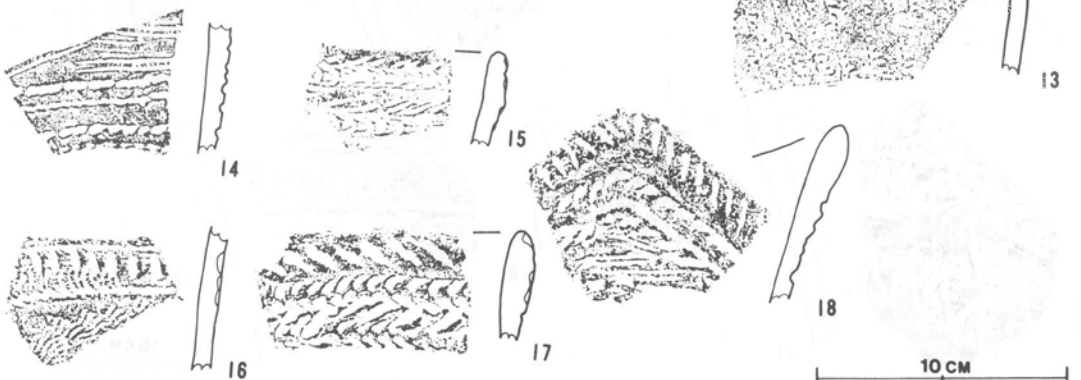
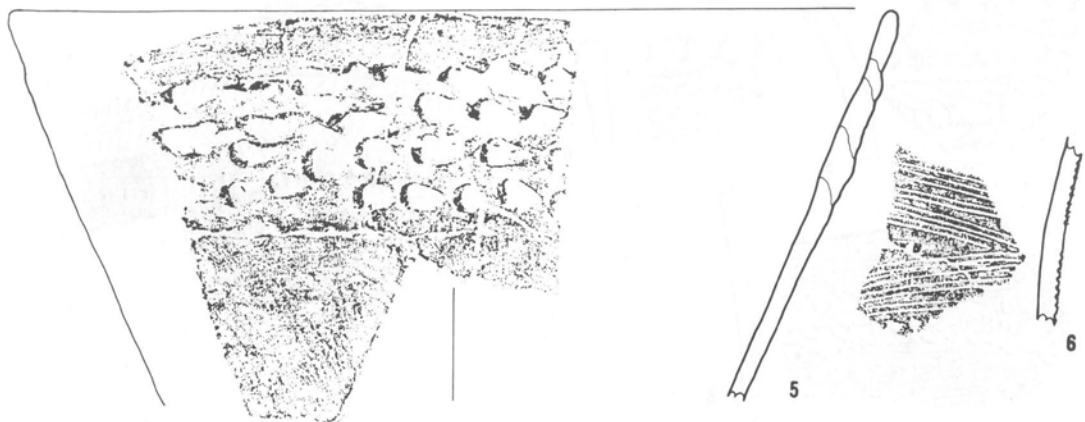
第184図1は無文の口縁部で、口辺部に刺突文、2~5は輪積痕を残し、4・5には棒状具による刺突文が加えられている。6・7は平行沈線文を有し、7は地文に撚糸文を施している。8~14は変形爪形文、15~18と第185図1~10は連続爪形文を有し、11~18は貝殻文を施文している。19は浮線文を有し、地文に縄文を施している。



第182図 第 32・33・40 号住居跡実測図

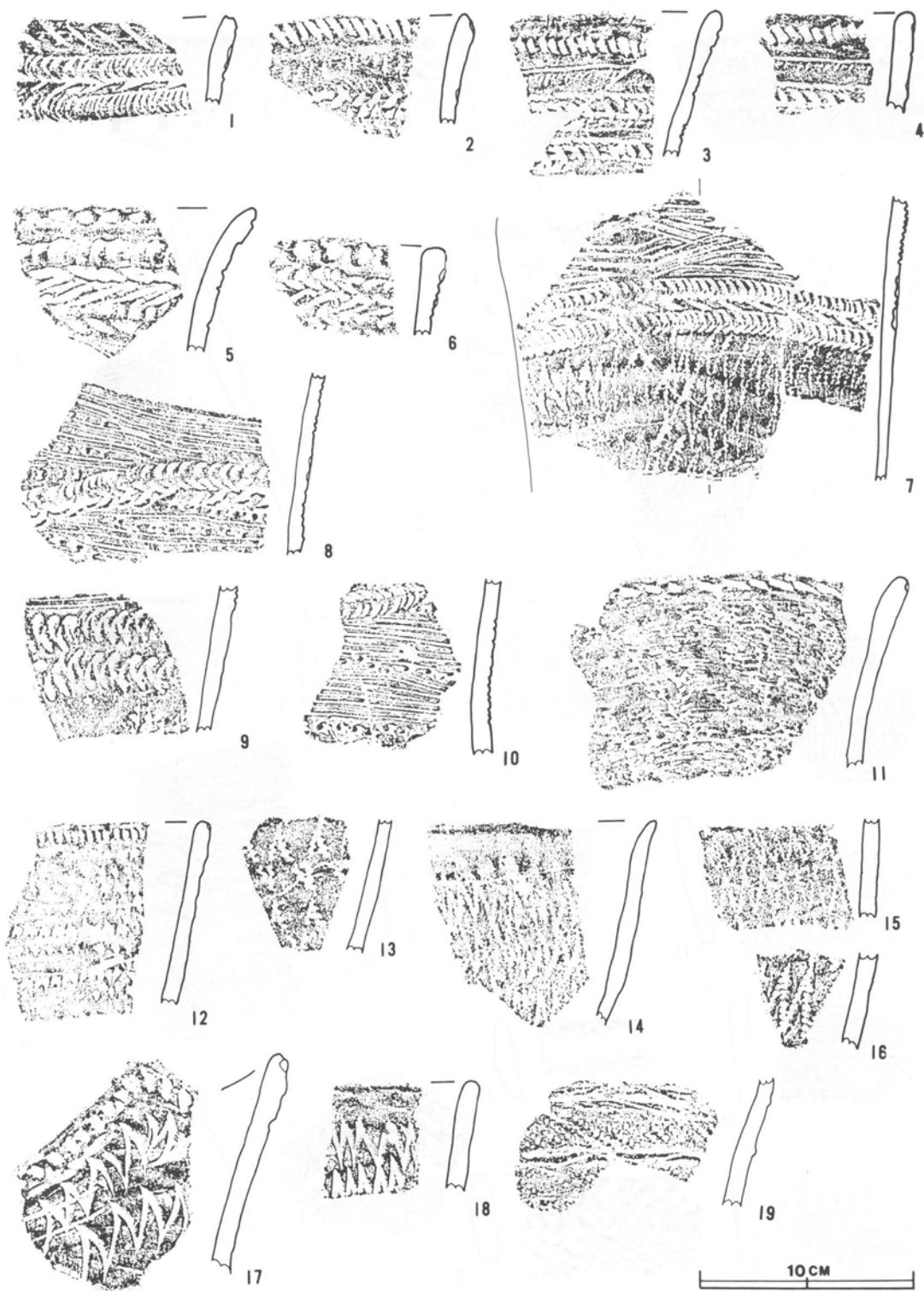


第183图 第32号住居跡出土遺物実測図



10 CM

第184图 第32号住居跡出土土器拓影图



第185图 第32号住居跡出土土器拓影图

第33号住居跡（第182図）

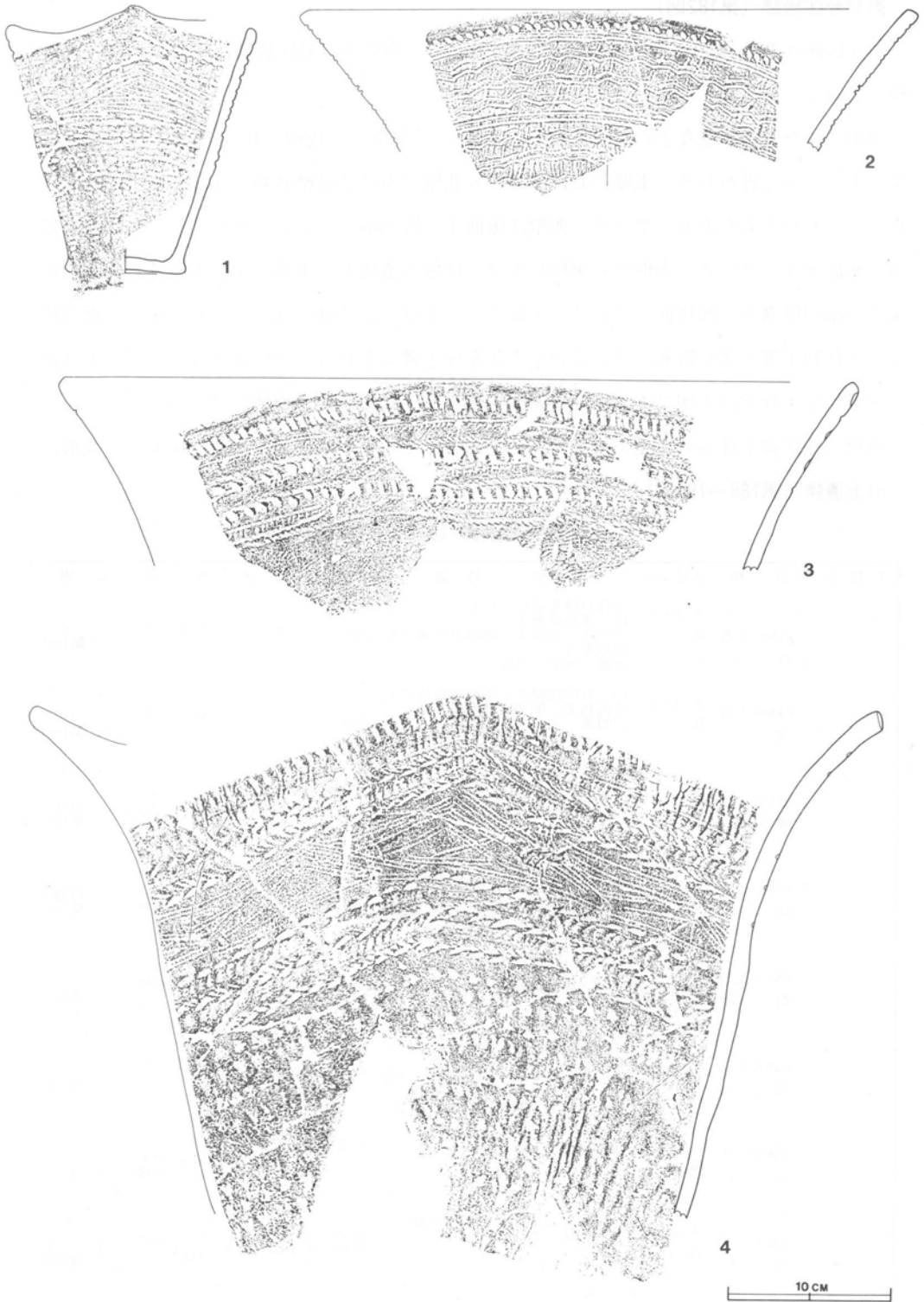
本住居跡はA3j3調査区を中心に確認されたもので、南側は32号住居跡、東側は40号住居跡と重複している。

検出された壁溝・壁などから、主軸方向はN-0°を指し、長軸5.4m・短軸5mの隅丸方形状を呈するものと思われる。東壁の北側部分から北壁にかけては壁高40～50cmを測り、壁はほぼ垂直にしっかりと立ちあがっている。西壁は床面より約30cmぐらい立ちあがり、その面が42号住居跡の床面となっている。南側から東側にかけては他の遺構との重複により不明である。幅10cm・深さ5cmの壁溝が一部周回している。床面はハードロームで硬く締っている。床面付近に焼土粒子・炭化粒子等が多く散布しているので火災家屋と考えられる。炉は有さない。ピットは深いものが多いが支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、暗褐色土が堆積している。

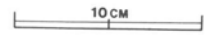
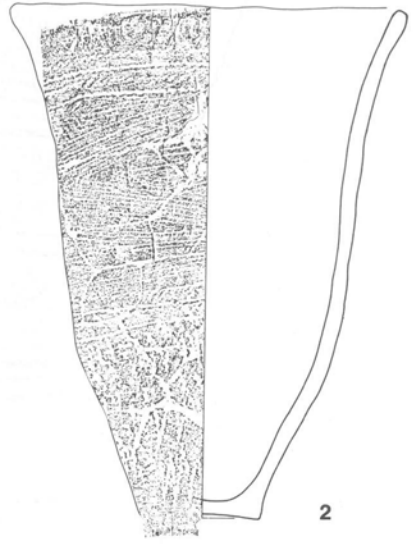
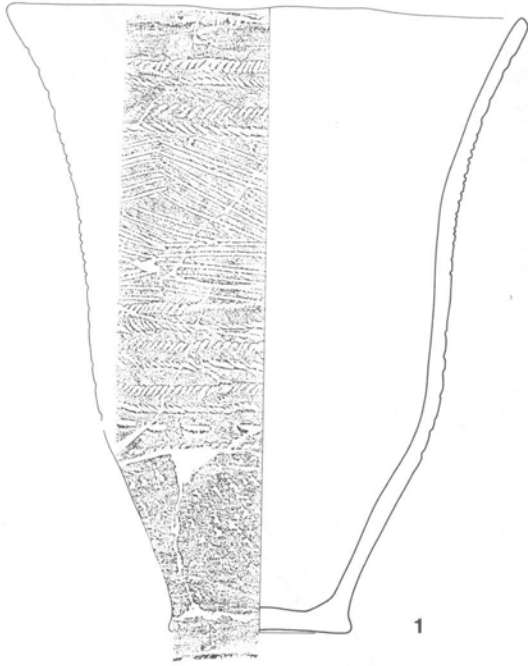
遺物は住居跡全体から多量の縄文土器片が出土している。北西側や南側の床面から完形に近い出土遺物（第186～192図）

出土遺物解説表（第186～188図）

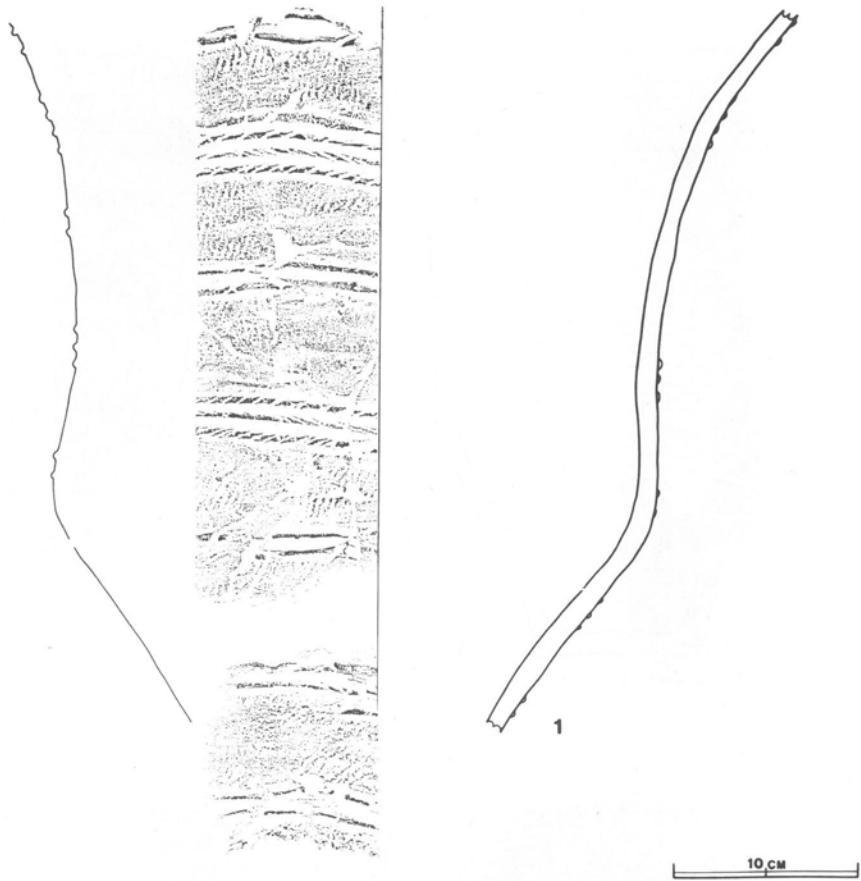
遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考					
SI-33	小形深鉢形土器 (縄文)	A 15.2	波状口縁を呈している。 口一変形爪形文。 下半部一貝殻文。胴部の区画に変形爪形文。 底部一無文、平底。	内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい橙	50% 第186図-1					
		B 16.3									
		C 7.2									
	深鉢形土器 (縄文)	A (41.2)	口一右節沈線文と半截竹管具による波状文。地文に燃糸文。 口唇部一キザミ。	内面一ヘラミガキ	良好・砂粒・にぶい褐	口縁部15% 第186図-2					
		B 10.3									
	深鉢形土器 (縄文)	A (47.0)	口一変形爪形の間に刺突文。 口唇部一刺突文。	内面一ヘラナデ	普通・砂礫・橙	口縁部20% 第186図-3					
		B 13.0									
	深鉢形土器 (縄文)	B 33.0	口一連続爪形文の上に刺突文。 胴一貝殻文。波状口縁を呈す。 口唇部一キザミ。頸一平行沈線による鋸歯状文。胴部との境に連続爪形文、その上に刺突文。	内面一ヘラミガキ	普通・砂粒・にぶい橙 石英	口縁部40% 第186図-4					
							A 29.0				
深鉢形土器 (縄文)	A 29.0 B 32.8 C 10.0	口一「ハ」の字状連続爪形文。 頸一平行沈線文。胴上半部「ハ」の字状、連続爪形文、その上に刺突文。 下半部一貝殻文。	内面一ヘラナデ	普通・砂礫・にぶい橙	75% 第187図-1						
						深鉢形土器 (縄文)	A 21.7 B 27.1 C (6.0)	口一変形爪形文。胴一上半部に半截竹管具による平行沈線文。 底一無文、平底。胴下半部一貝殻文。胴上半部と下半部を区画するために変形爪形文。	内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい橙 スコリア	85% 第187図-2
深鉢形土器 (縄文)	A (20.9) B 30.4 C (7.0)	口縁部から胴上半部まで貝殻文。 胴部が膨らむ。	内面一ヘラナデ 外面一下半部ヘラナデ	やや・砂粒・にぶい赤褐 軟弱	30% 第187図-4						
						深鉢形土器 (縄文)	B 37.5	浮線文をめぐらしその上にキザミ目。 地文に縄文。	内面一ナデ	やや・砂粒・にぶい赤褐 軟弱 石英 にぶい黄橙	60% 第188図-1



第186图 第33号住居跡出土遺物実測図



第187图 第33号住居跡出土遺物実測図

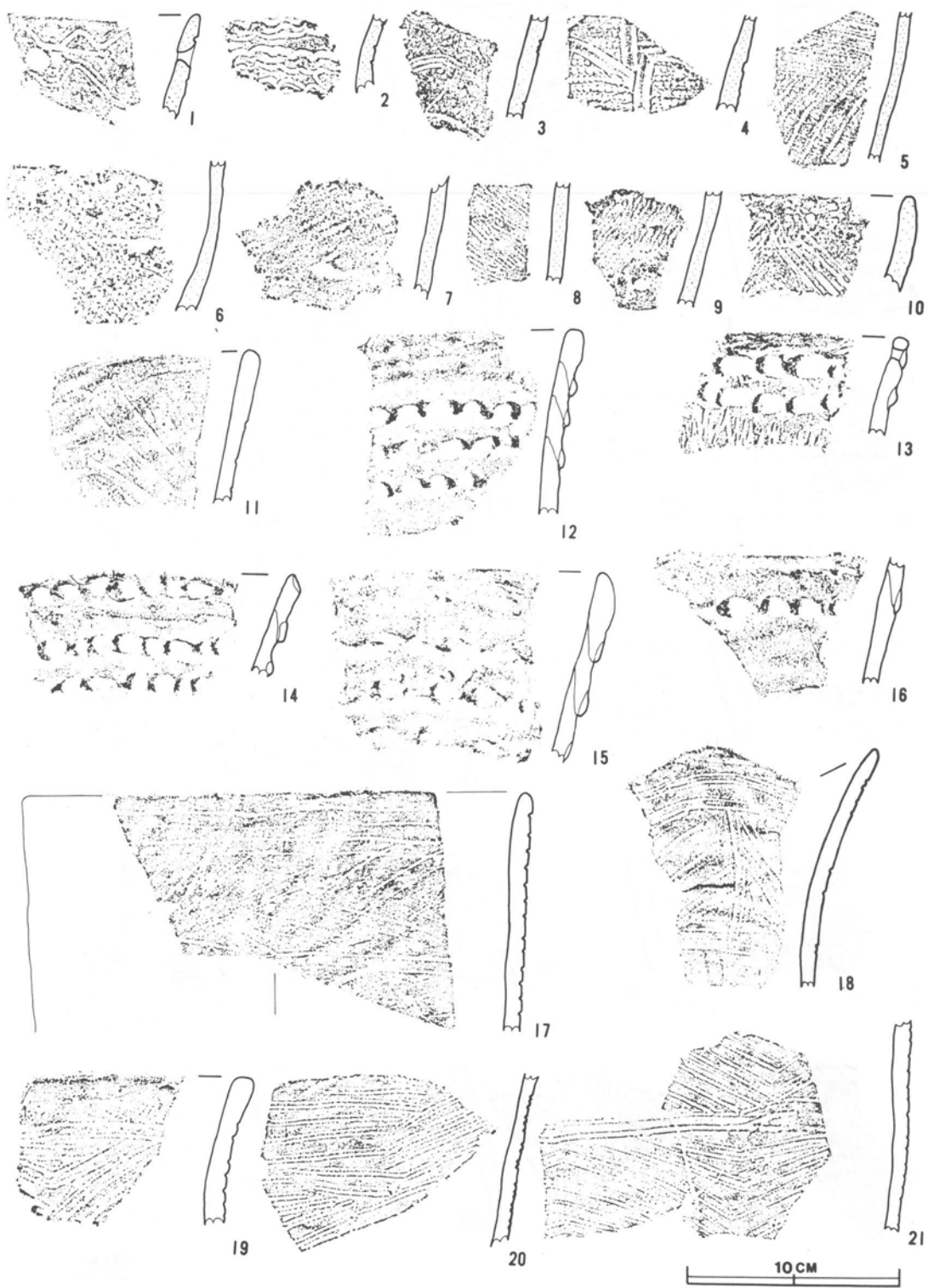


第188図 第33号住居跡出土遺物実測図

深鉢形土器が検出されている。これら土器群は、黒浜式・諸磯式・浮島式に比定される。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

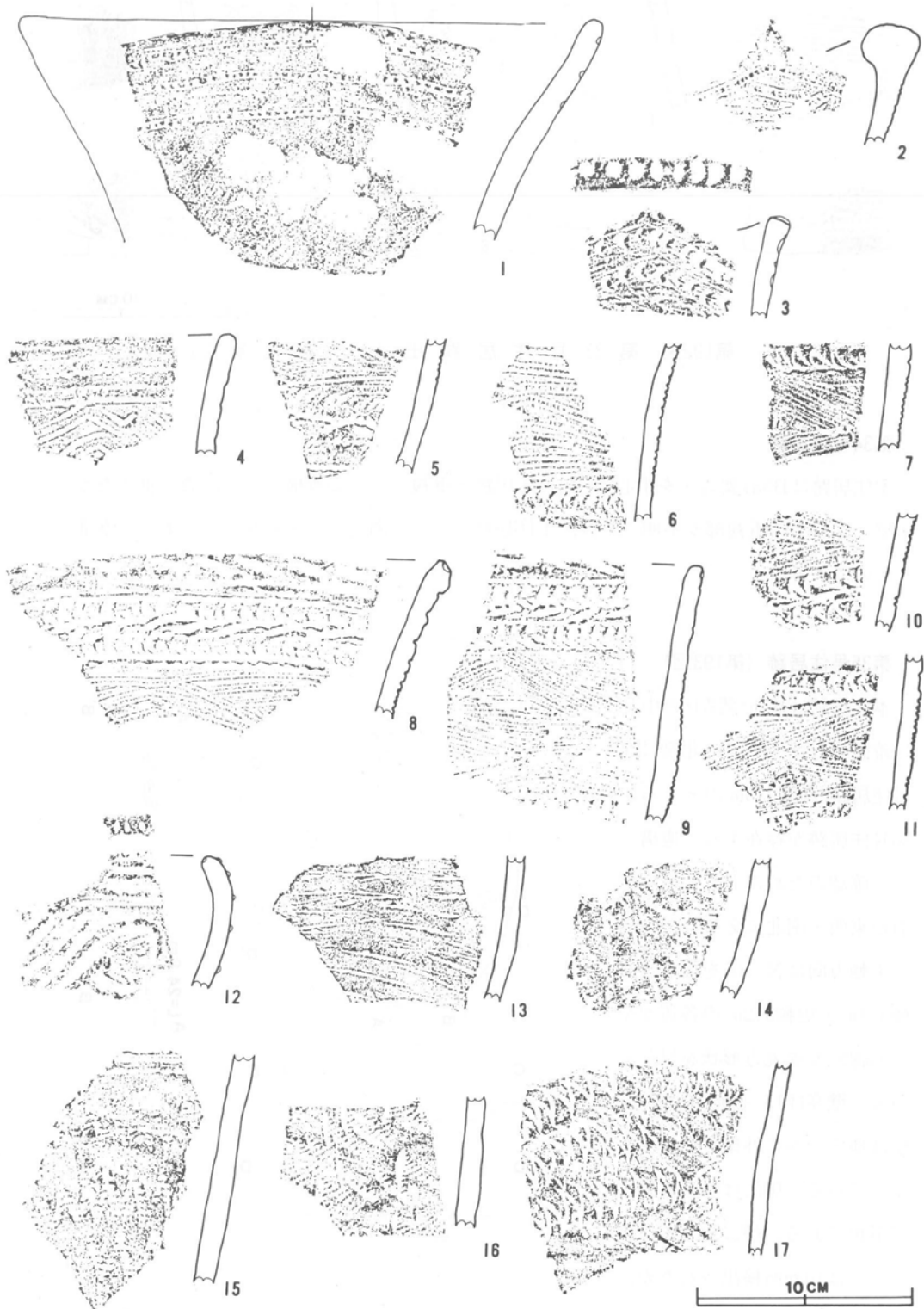
第189図1～10は胎土に繊維を含み、1～3は沈線文、4～10は縄文を施文している。11は無文の口縁部。12～16は輪積痕を残し、棒状具による凹凸文が施されている。17～21と第190図1～12は平行沈線文を有する土器群で、半截竹管具による横引き・斜行・弧状・鋸歯状文を施している。第190図8～12は地文に燃糸文を有す。13～20は変形爪形文を有している。21・22と第191図1・2は有節沈線文を有し、21・22には円形竹管文の押捺がみられる。第191図3は爪形文、4～11は連続爪形文、12は浮線文、13は燃糸文、14～17と第192図1は貝殻文、2・3は縄文を施文している。4～8は底部である。



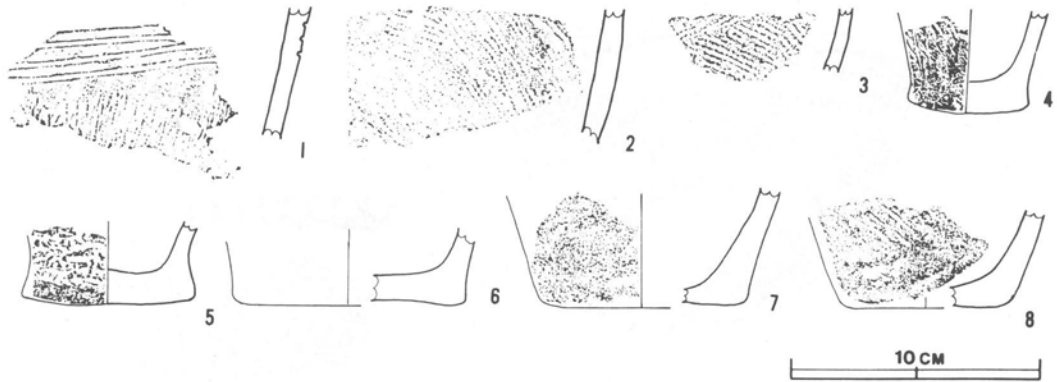
第189图 第33号住居跡出土土器拓影图



第190图 第33号住居跡出土土器拓影图



第191图 第33号住居跡出土土器拓影图



第192図 第33号住居跡出土土器拓影図

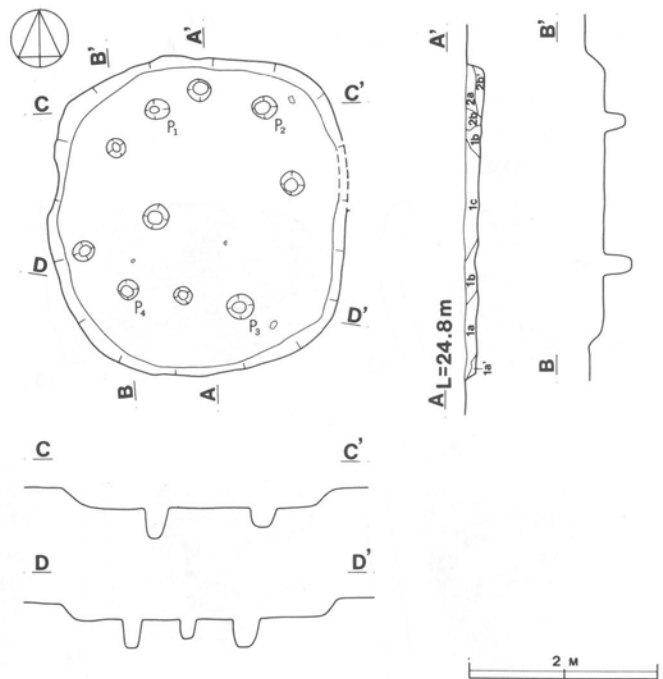
第34号住居跡

本住居跡はB3a4調査区を中心に、40号住居跡と重複している遺構として調査を進めたが、柱穴・壁・床などの重複部が不明であり、1住居跡としての断定しうる結果が得られず、欠番となったものである。

第35号住居跡 (第193図)

本住居跡はB3b7調査区を中心に確認されたもので、北側に26号住居跡、南側0.5mのところには36号住居跡が存在する。遺構プラン確認のためのトレンチ試掘溝が東西・南北に交差している。

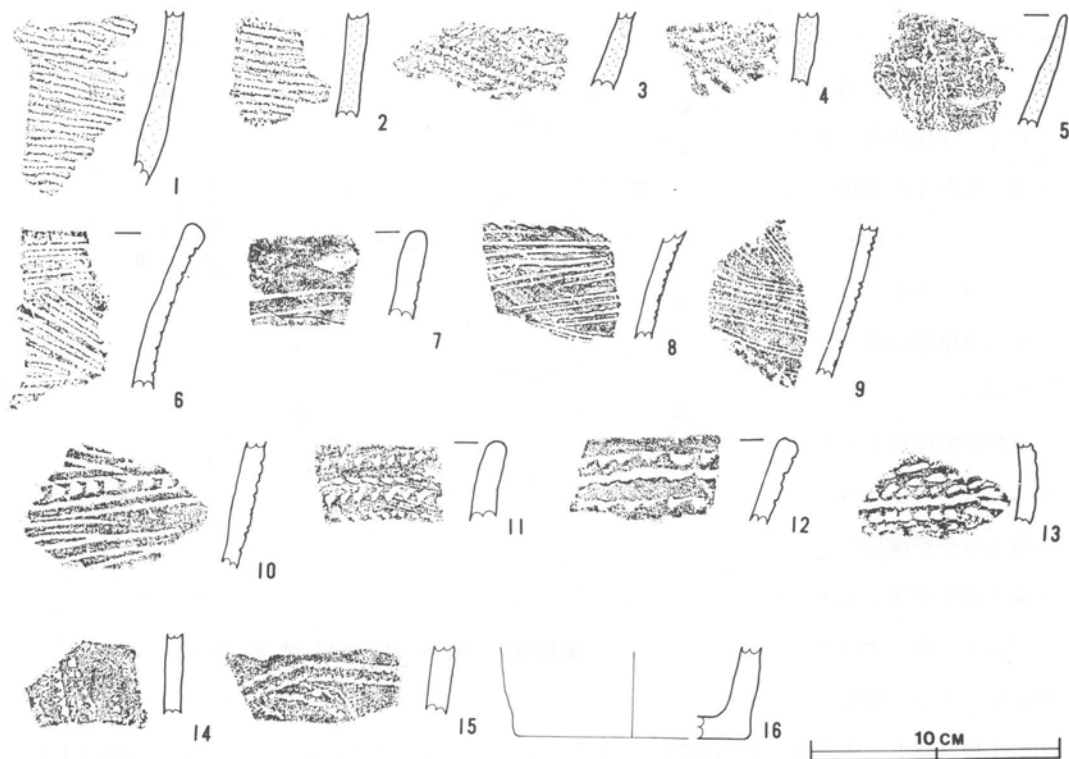
主軸方向はN-0°を指し、長軸3.4m・短軸3.2mの各辺がやや曲線的な隅丸形状を呈している。壁高は15~20cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はローム質土で平坦である。炉は有さない。ピットは10か所検出されたが、深さは16~32cmと全体的に浅い。その中でP1~P4は主柱穴と考え



第193図 第35号住居跡実測図

られる。住居跡内の覆土は、褐色土と北側に暗褐色土が堆積しており、ローム粒子・ソフトローム小ブロックを含んでいる。

遺物は中央部と北側部から縄文土器片が少量出土している。ほとんどが覆土中からの出土である。これら土器群は、黒浜式と浮島式に比定される。



第194図 第35号住居跡出土土器拓影図

出土遺物 (第194図)

1～5は胎土に繊維を含み、1～4は縄文、5は貝殻文を施文している。6～10は平行沈線文を有し、10は平行沈線文間に爪形文を施している。11は連続爪形文、12・13・15は変形爪形文、14は貝殻文を有している。16は底部である。

第36号住居跡 (第195図)

本住居跡はB3d7調査区を中心に確認されたもので、北側に35号住居跡が存在する。遺構プラン確認のためのトレンチ試掘溝が南北・東西方向に交差している。

平面形状は、直径3.8m前後のほぼ円形状を呈している。壁高は10～20cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっており、床面もほぼ平坦である。しかし、壁面・床面ともに明確ではないが、柱穴

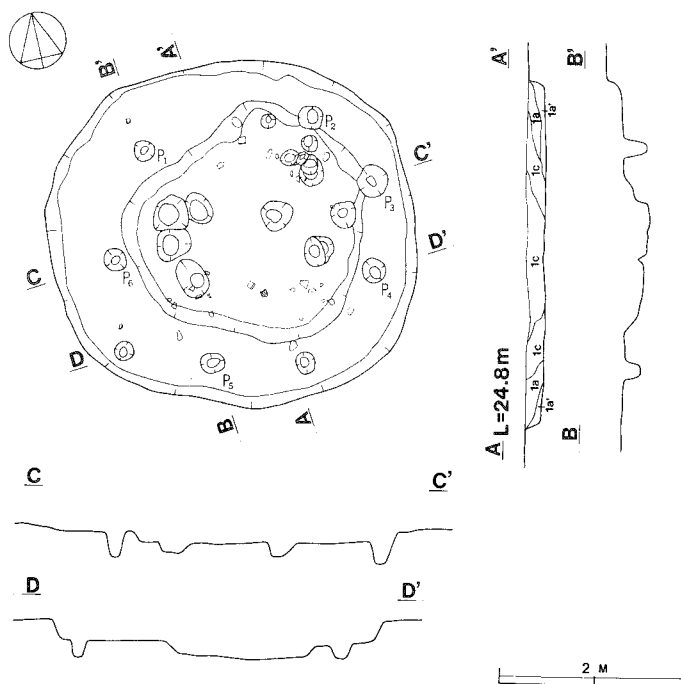
と思われるものが数か所確認された面をもって床面とみなした。ピットは8か所検出され、いずれも直径20~25cm、深さ15~28cm程である。P₁~P₆が主柱穴と考えられる。住居跡内の覆土は、褐色土が堆積しており、ローム粒子やソフトローム小ブロックを含み壁際は締りがやや弱い。

遺物は北西側からの出土はほとんどなく、中央よりやや南側から縄文土器片が多く出土している。尚、本住居跡床面において暗褐色

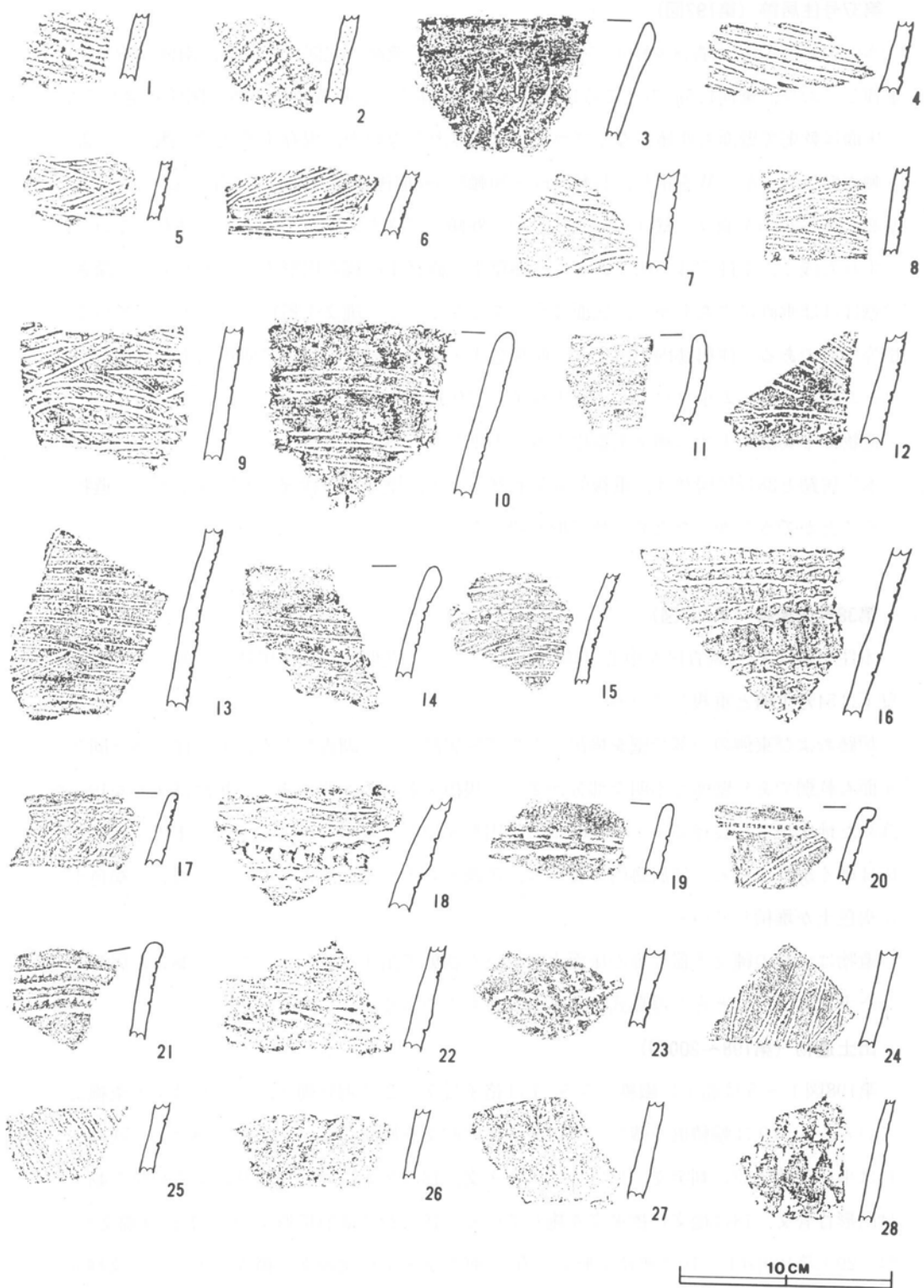
土の土壌状落ちこみがみられ、遺物を包含しているので掘りこみを実施した結果、長軸（東西）2.2m・短軸2m、36号住居跡の床面からの深さが13~17cmの不定形な落ちこみを確認した。壁・床ともに明確に検出されたが床面は平坦ではなく、西側から南側にかけてゆるやかに落ちこんでいる。ピットは14か所所有している。遺物は縄文土器片が出土している。この落ちこみを住居跡とするかは、規模や形状、床面の状態からしても疑問を残すし、本住居跡と関連があるかどうか判然としないので特に遺構として取り上げなかった。

出土遺物（第196図）

1・2は胎土に繊維を含み、縄文を施文している。3は貝殻文、4~13は平行沈線文を有し、9は地文に撚糸文、12は爪形文を施している。14~18は変形爪形文、19は有節沈線文、20~23は連続爪形文を有している。24・25は撚糸文、26~28は貝殻文を施文している。



第195図 第36号住居跡実測図



第196图 第36号住居跡出土土器拓影图

第37号住居跡（第197図）

本住居跡はA3i4調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北部に位置し、南側は38号住居跡と重複しており、東側1.5mのところには36号土壌が存在する。重複遺構の新旧関係は定かでない。

床面は軟弱で壁面も明確でなくプランははっきりしないが、現存する北壁と西壁の一部から、主軸方向はN-43°-Wを指し、長軸6m・短軸5.5m前後の隅丸形状を呈するものと思われる。壁高は10~20cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。炉は有さない。柱穴はいずれも浅く、主柱穴は不明である。南西壁下に直径1m程の円形のピットがあり、深さは26cmで壁はほぼ垂直に立ちあがり、底面は平坦をなしている。縄文土器片が4点出土しているが、性格等不明である。住居跡内の覆土は、暗褐色土・褐色土、床面付近に明褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。

遺物は中央部を中心に縄文土器片が多く出土している。

本住居跡と38号住居跡は、重複部分も判然とせず、壁や床の状況も不明確であり、遺物を区分することができなかつたため一括で取り扱った。

第38号住居跡（第197図）

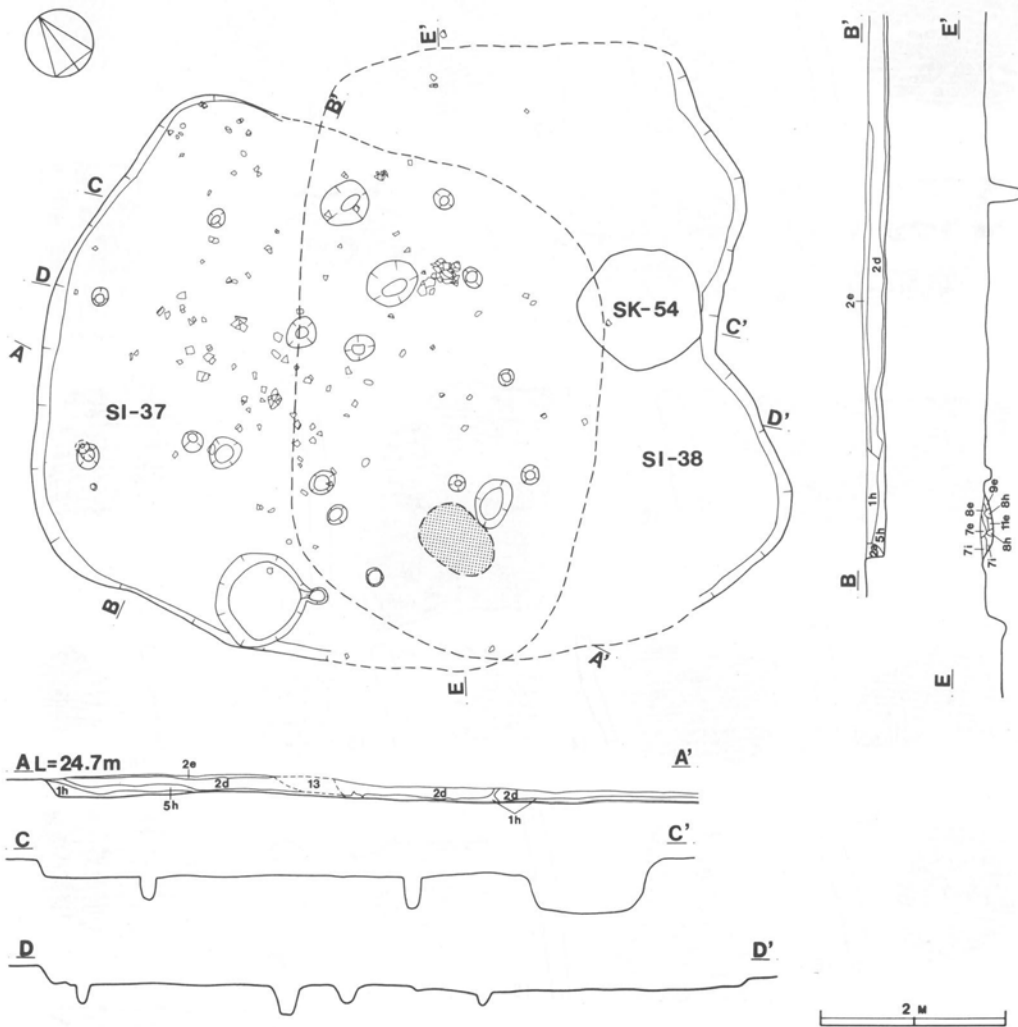
本住居跡はA3j5調査区を中心に確認されたもので、北側は37号住居跡、西側は40号住居跡、東壁下は54号土壌と重複している。

炉跡および東側の一部で壁を検出したので住居跡として調査したが、37号住居跡と同じように床面も軟弱であり壁面も不明な部分が多く、規模・形状等不明である。炉跡は床面を10cm程掘り窪めた地床炉で、長径85cm・短径60cmの楕円形を呈し、多量の焼土粒子・焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。住居跡内の覆土は、色調から大きく2層に分かれ、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積している。

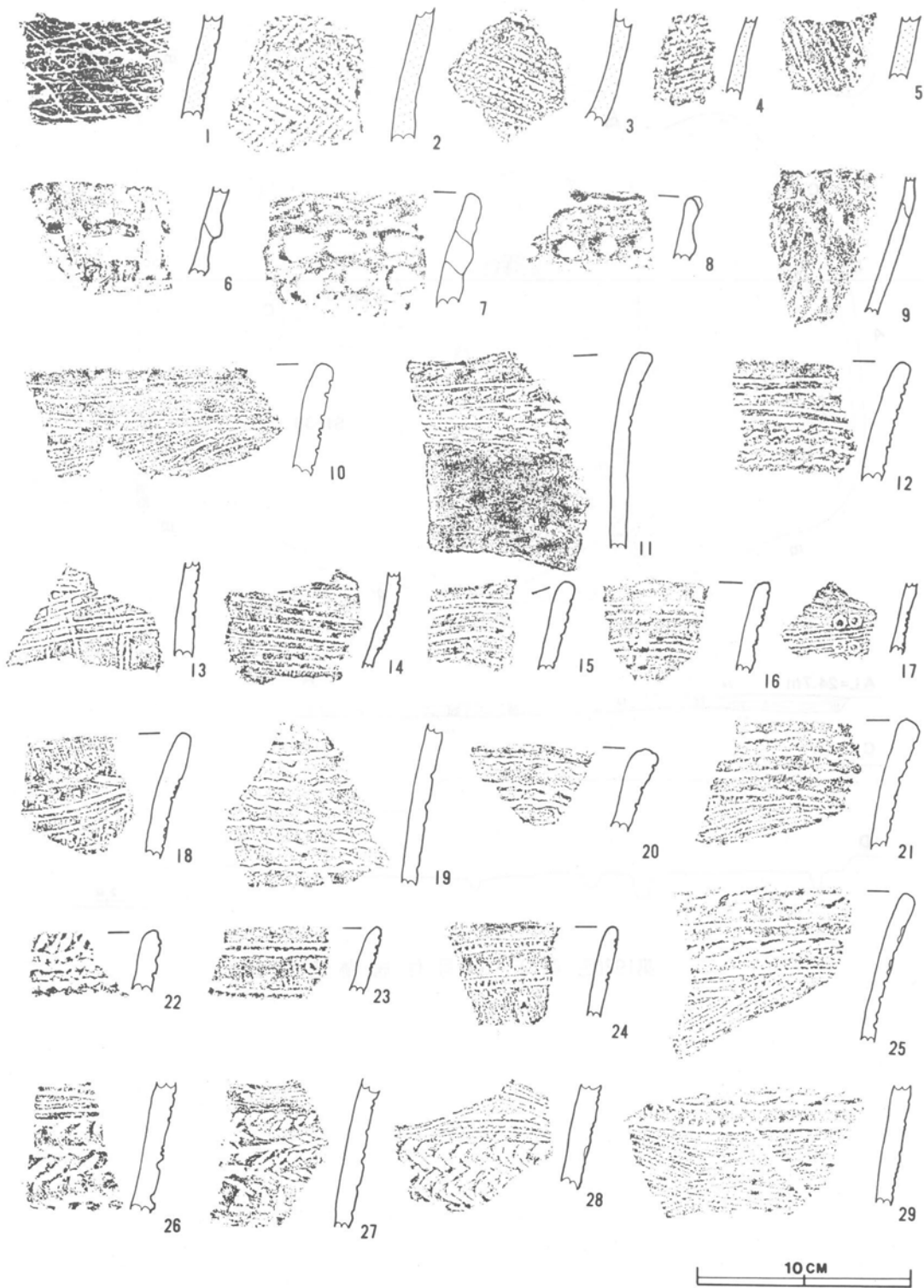
遺物は少量の縄文土器片等が床面より浮いた状態で出土している。37号・38号住居跡から出土した土器片は、ほとんど浮島式に比定されるものである。

出土遺物（第198~200図）

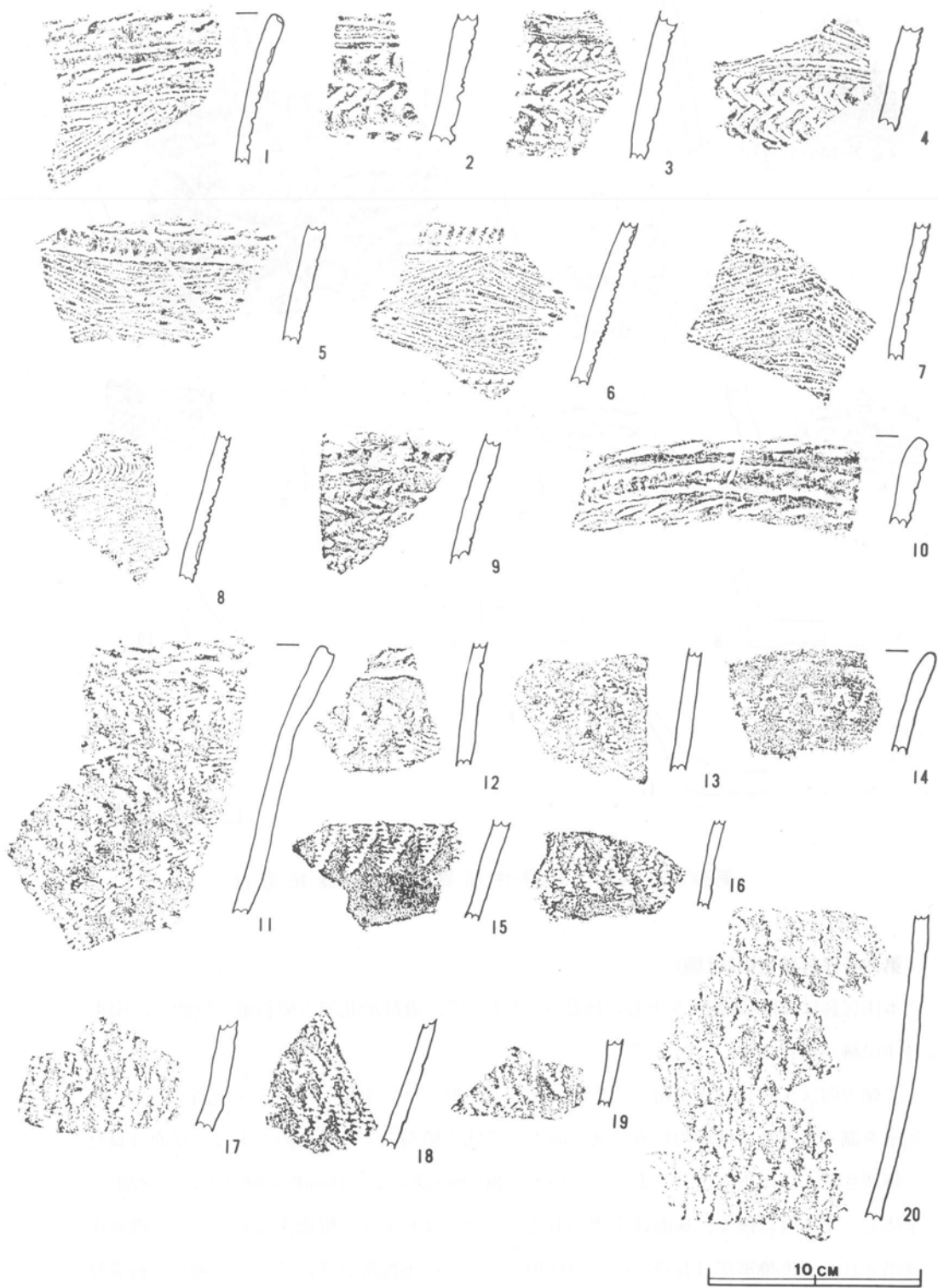
第198図1~5は胎土に繊維を含み、1は格子目文、2は羽状縄文、3~5は付加条縄文を施している。6~9は輪積痕を残し、その下端に凹凸文を施文している。10~18は平行沈線文を有し、11は平行沈線文間に刺突文、13は地文に撚糸文、16は3本の同一施文具による縦位の刺突文、17は円形竹管文、18は地文に撚糸文を施している。19~22は変形爪形文、23は有節沈線文を有する。24~29と第199図1~10は連続爪形文を有し、刺突文・平行沈線文と組み合わせさせて文様を構成している。11~20と第200図1~3は貝殻文を施文している。4~6は浮線文の上にキサミを有し、5・6は地文に縄文を施している。7は口縁部まで縄文を施文している。8~11は底部である。



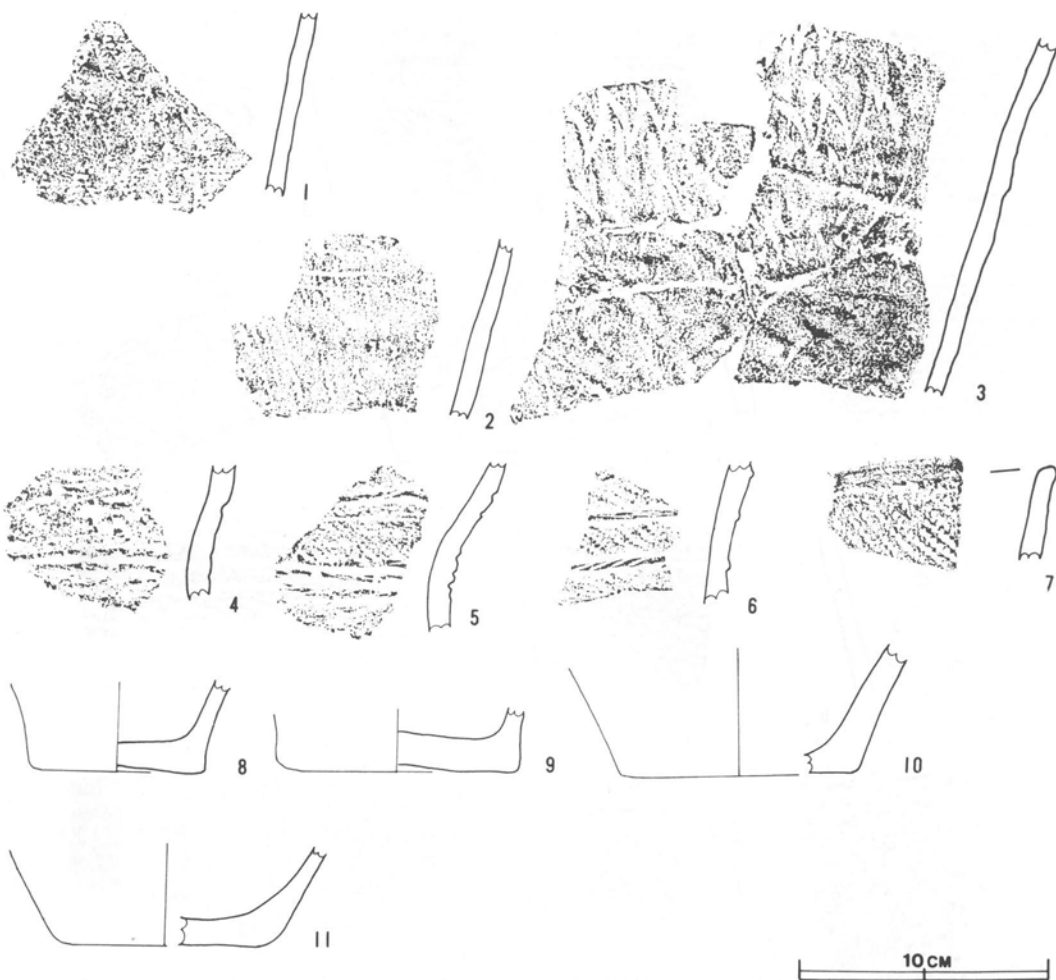
第197图 第37・38号住居跡実測図



第198图 第37·38号住居跡出土土器拓影图



第199图 第37·38号住居跡出土土器拓影图



第200図 第37・38号住居跡出土土器拓影図

第39号住居跡 (第201図)

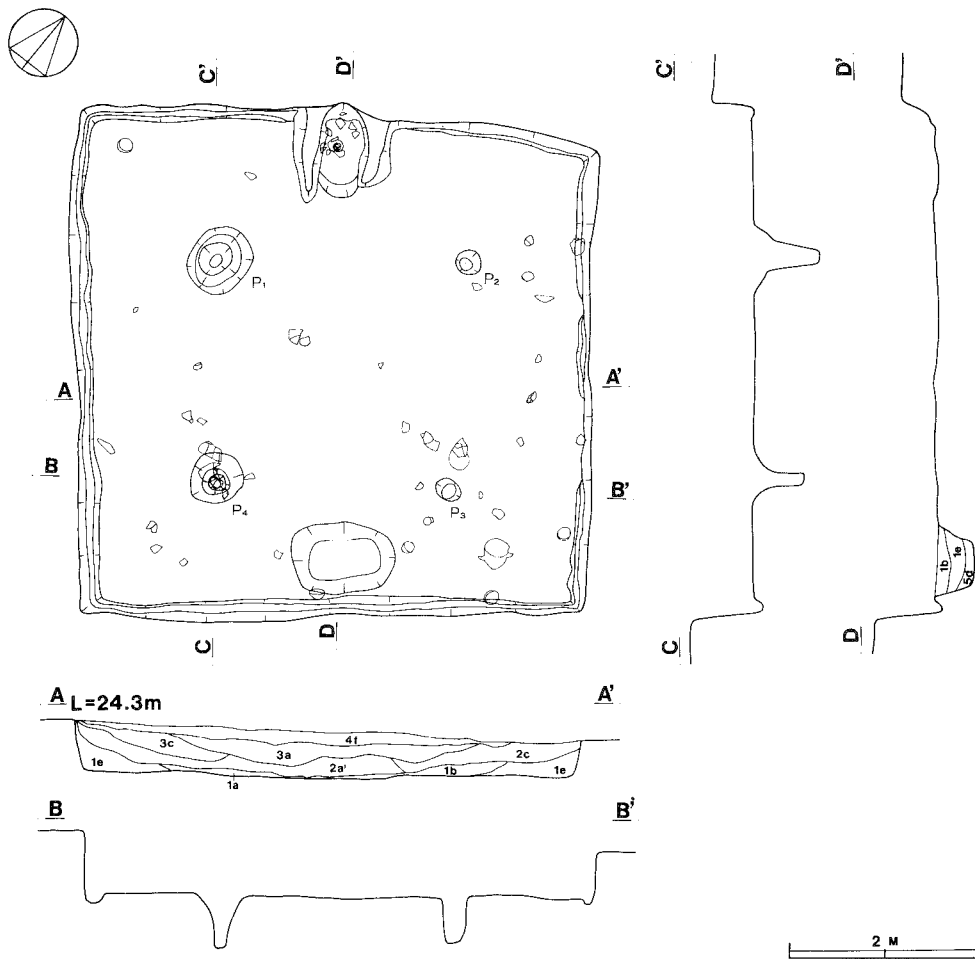
本住居跡はA3d6調査区を中心に確認されたもので、遺跡最北端の傾斜地に位置し、南東側に23号住居跡が存在する。

主軸方向はN-40°-Wを指し、一辺5.4m程の方形プランを呈している。壁高は北で30cm、南で70cmを測る。これは地形的にみて北に向かって低く傾斜しているためである。壁面は良好な状態で確認され、ほぼ垂直に立ちあがっている。幅10cm・深さ7~10cm程の壁溝がほぼ全周している。全体として床質は硬く、床面は平坦である。カマドはわずかに壁面を切りこんだ北西壁中央部に検出された。燃烧室部は長径70cm・短径40cm・深さ5cm程掘り窪めている。袖部は砂質粘土で構築されており、西側がやや長い。ほぼ中央に支脚に使用したとみられる高坏が逆立の状態出土している。柱穴は4か所検出され、P₁~P₄は支柱穴と考えられ、深さは50~65cmを測る。P₁と

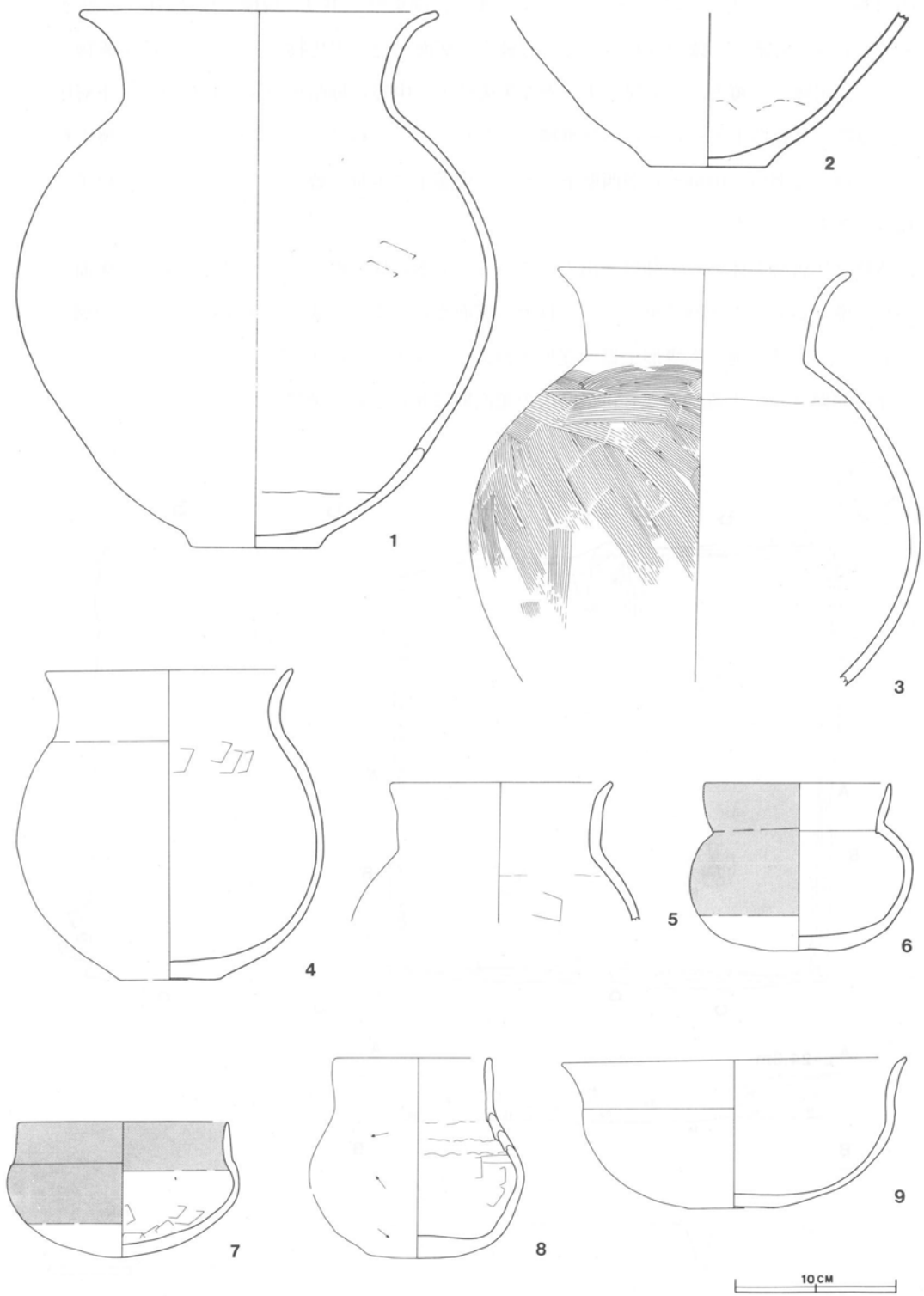
P4は掘りこみ口が大きく段状をなしている。また、南東壁下中央に規模が長径110cm・短径75cm・深さ40cmの貯蔵穴が確認されている。貯蔵穴の底面付近に炭化物がみられたが出土遺物はなかった。住居跡内の覆土は、上層に柔らかな黒褐色土、中層に極暗褐色土・暗褐色土、下層床面付近と壁際には褐色土がそれぞれ自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子等を含み絡りは弱い。中央から南西壁下にかけて床面上に多量の焼土小ブロック・焼土粒子・炭化材等が散布していた。

遺物は住居跡全体から土師器が出土している。完形の坏が西コーナー付近と東側の床面から、完形の甑が斜立した状態で東コーナー付近の床面から、また南東壁下床面からは完形の壺が検出されている。その他にも甕形土器や壺形土器あるいは土玉等の出土がみられる。

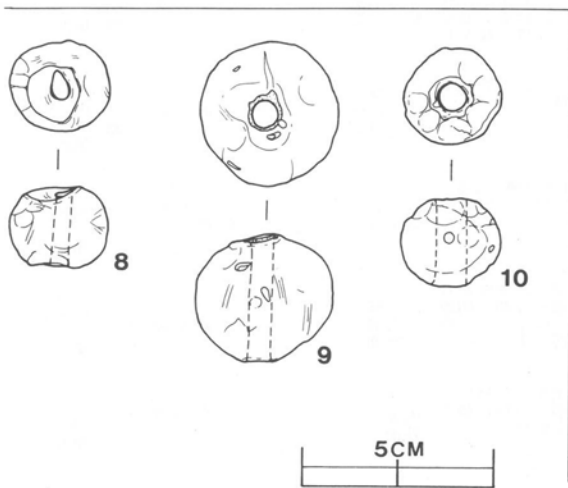
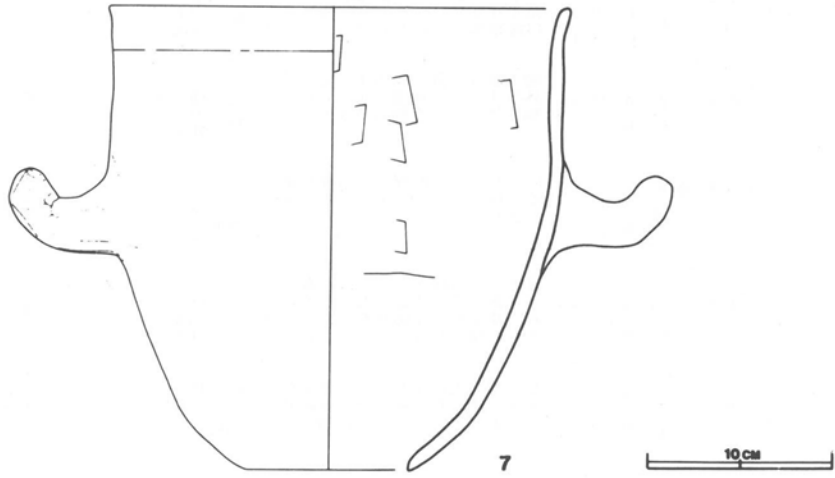
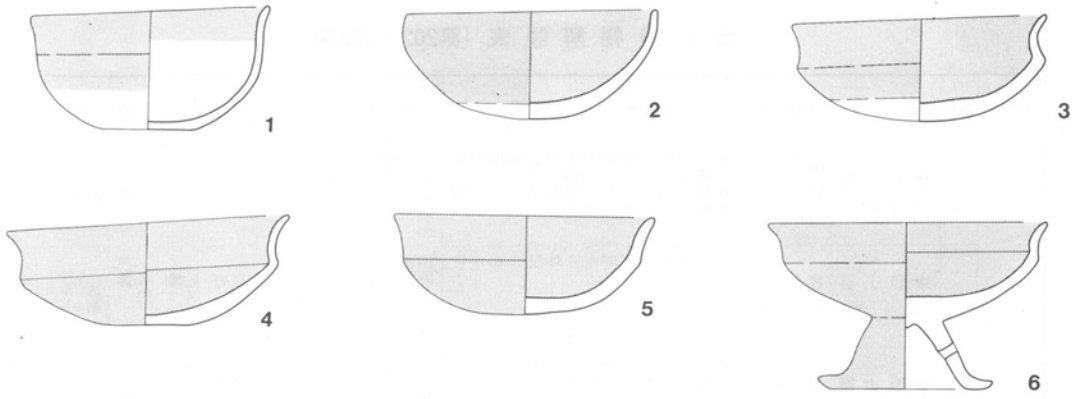
本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。



第201図 第39号住居跡実測図



第202図 第39号住居跡出土遺物実測図



第203図 第39号住居跡出土遺物実測図

出土遺物 (第202・203図)

出土遺物解説表 (第202・203図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-39	1	甕形土器 (土師)	A 22.4 B 33.6 C 8.0	底一平底。球胴形を呈す胸部中位に最大径をもつ。頸一ゆるやかな外傾。口一大きく外反する。口縁端部一丸みをおびる。	口一横ナデ 胴一内・外面一ヘラナデ 底一ヘラケズリ	良好・砂粒・にぶい橙	50% 第202図-1
	2	甕形土器 (土師)	B 9.3 C 7.4	底一平底。底部から外反しながら立ちあがる。	内面一ヘラミガキ 外面一ヘラミガキヘラナデ	良好・砂礫・灰黄スコリア	底部50% 第202図-2
	3	甕形土器 (土師)	A 18.2 B 25.5	頸一ゆるく外傾。口一大きく外反する。胴一半球形を呈している。	口一横ナデ 内面一ナデ 胴<外面一刷け目調整	普通・砂粒・にぶい橙スコリア	60% 第202図-3
	4	壺形土器 (土師)	A (15.0) B 19.0 C 6.4	底一若干上げ底となる。胴一球形を呈し、最大径は胸部中位にある。頸一外反しつつ外上方へ伸びる。口縁端部一丸みをおびる。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 胴<外面ナデ	普通・砂粒・にぶい橙スコリア	60% 第202図-4
	5	壺形土器 (土師)	A 13.8 B 8.6	頸一ほぼ垂直に立ちあがる。口一外反する。口唇部一尖っている。胴一ゆるやかな膨らみをもつ。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 胴<外面一ナデ	普通・砂礫・明赤スコリア	口縁部60% 第202図-5
	6	小形壺形土器 (土師)	A 11.6 B 10.0	口一わずかに内彎して器厚を減ずる。胴一やや強く張り出し、丸底に至る。	口一横ナデ 外面一ヘラミガキ	普通・石英・にぶい橙	90% 外面一丹彩 煤一付着 第202図-6
	7	卍形土器 (土師)	A (12.8) B 8.4	底部から口縁部にかけて直線的に立ちあがる。体部上部一やや膨らみ、ゆるやかな弧状を呈する。体部との境に稜をもつ。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 胴<外面一ナデ	普通・砂粒・にぶい黄橙	70% 丹彩 第202図-7
	8	卍形土器 (土師)	A 9.8 B 12.4 C 6.5	底一やや丸みをもち、胸部中位が大きく膨らむ。頸一ほぼ直線的に立ちあがる。口一若干内彎さむ。	口一横ナデ 内面一ヘラケズリ 胴<外面一ヘラナデ指ナデ	普通・砂礫・にぶい黄橙スコリア	70% 第202図-8
	9	鉢形土器 (土師)	A 21.4 B 9.2 C 5.1	若干の上げ底から内彎して立ちあがる。胴一内彎から、わずかに外反して口縁となる。口唇部一器厚が薄くなる。胴部との境に稜をもつ。	口一横ナデ 内面一ナデ 胴<外面一ヘラケズリ	普通・砂礫・にぶい黄橙スコリア	50% 第202図-9
	10	塊形土器 (土師)	A 12.4 B 6.25 C 4.7	体部一半球形を呈す。口一外傾する。体部との境に稜をもつ。	口一横ナデ 内面一ヘラミガキ 胴<外面>	普通・砂粒・にぶい橙	99% 内・外面一丹彩 第203図-1
	11	坏形土器 (土師)	A 13.1 B 5.7	口一内彎して立ちあがり薄くなる。体部一扁平な弧状を呈す。口縁端部一やや尖る。	口一横ナデ その他一ヘラミガミ	やや・砂粒・赤軟弱スコリア	98% 内・外面一丹彩 第203図-2
	12	坏形土器 (土師)	A 13.4 B 5.35	口一「く」の字状を呈し、中位から外反している。体部との間に明瞭な稜をもつ。体部一ゆるやかに内彎して、丸底の底部に至る。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ヘラケズリ	普通・砂礫・赤	95% 内・外面一丹彩 第203図-3
	13	坏形土器 (土師)	A 14.9 B 5.4	口一「く」の字状を呈す。口唇部一強く外反する。体部との境に稜をもつ。体部一扁平な弧状。	内面一ヘラミガキ 外面一ナデ	普通・砂礫・橙スコリア	90% 丹彩 第203図-4
	14	坏形土器 (土師)	A 13.5 B 5.15	口一外反。口唇部一外傾する。体部との境に稜をもつ。体部一弧状を呈する。	口一横ナデ その他一ナデ	良好・砂粒・にぶい赤褐	99% 丹彩 第203図-5

SI-39	15	高环形土器 (土 師)	A 14.8 B 8.8 C 9.2	II-「く」の字状を呈し、体部との境に稜をもつ。体部一浅い弧状をもって底部に至る。脚部一頸部から直線的に外方へ開く。裾部一平扱で大きく広がる。	坏部一ヘラミガキケ 脚部一内面一ヘスリミ 外面一ヘラミガキ	普通・砂礫・赤	90% 彩 丹第203図-6
	16	甌形土器 (土 師)	A 24.8 B 25 C 8.7	II-外方に若干屈折する。胴一膨らみが少なく、中位から底部へ内傾する。把手2個有する。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ II縁一横ナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア	100% 第203図-7
	17	土 玉	11.5 g			良好・砂粒・橙	100% 第203図-8
	18	土 玉	42 g			普通・砂粒・褐灰	100% 第203図-9
	19	土 玉	12 g			普通・砂粒・にぶ い橙	100% 第203図-10

第40号住居跡 (第182図)

本住居跡はB3a4調査区を中心に確認されたもので、北側は38号住居跡、西側は32号・33号住居跡と重複しており、南側約1.2mのところ約42号土壌が存在する。当遺構は規模からみても大きいので最初は2つの住居跡が重複しているものと調査を進めたが、壁や壁溝あるいは床面からの重複状況が確認できないので、1つの住居跡として判断して調査に当たった。

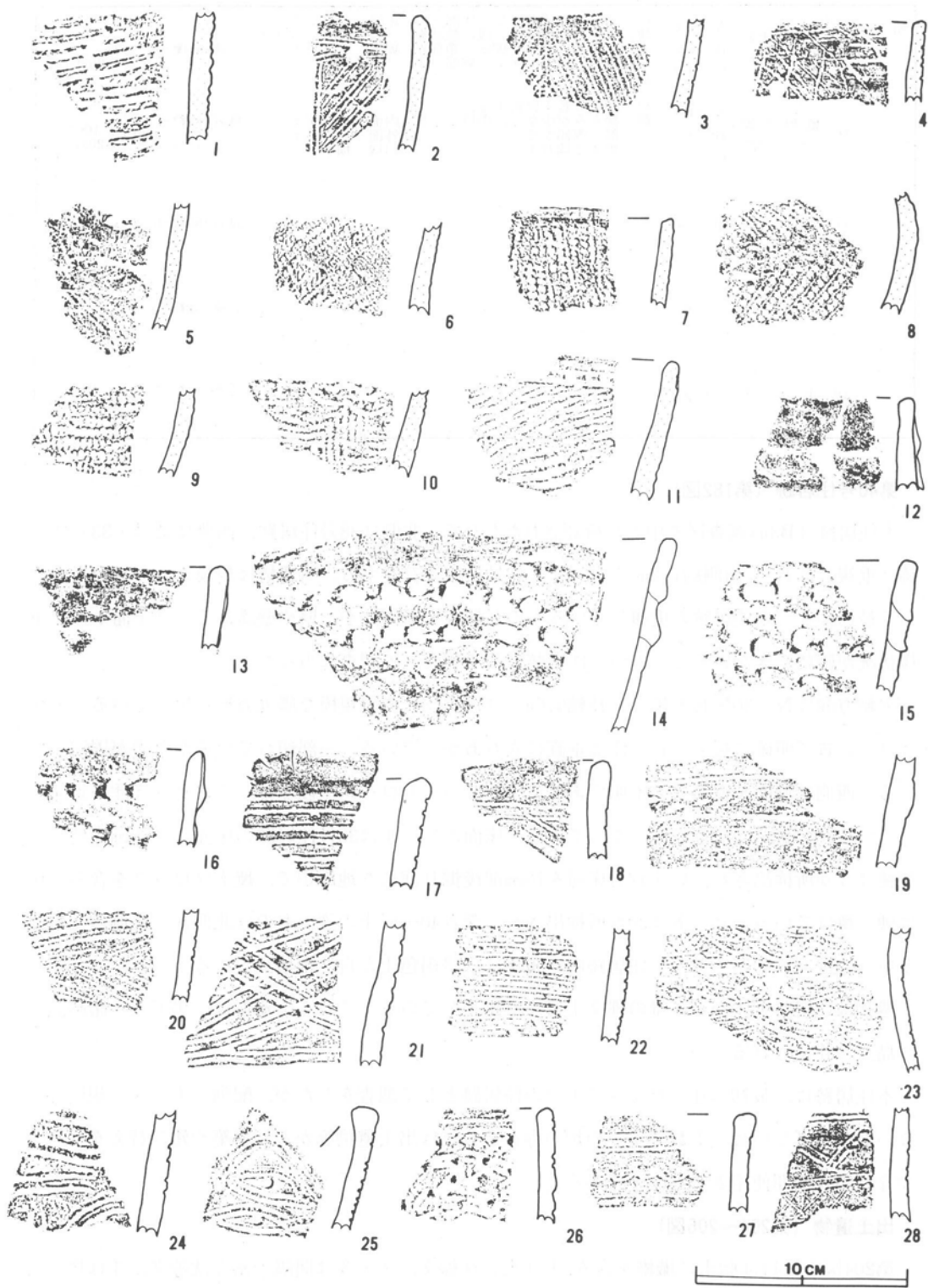
主軸方向はN-30°-Eを指し、長軸6.6m・短軸6.3mの大規模な隅丸方形を呈している。壁面はローム質で明確に捉えられ、ほぼ垂直に立ちあがっている。一部切れているが壁溝が周回している。西側は壁面・壁溝とも不明である。床面はハードロームで硬く締っており、ほぼ平坦をなしているが、東側の一部が高くなっている。床面のレベルは38号住居跡の床面より20cm程低い。炉跡は5か所検出され、いずれも床面を10cm前後掘り窪めた地床炉で、焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。ピットは30か所検出され、深さ40cm以上の深いものは北側から東側にかけて多い。主柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、暗褐色土が自然堆積している。

遺物は住居跡全体から多量の縄文土器片が出土している。これら土器群は、黒浜式・諸磯式・浮島式に比定される。

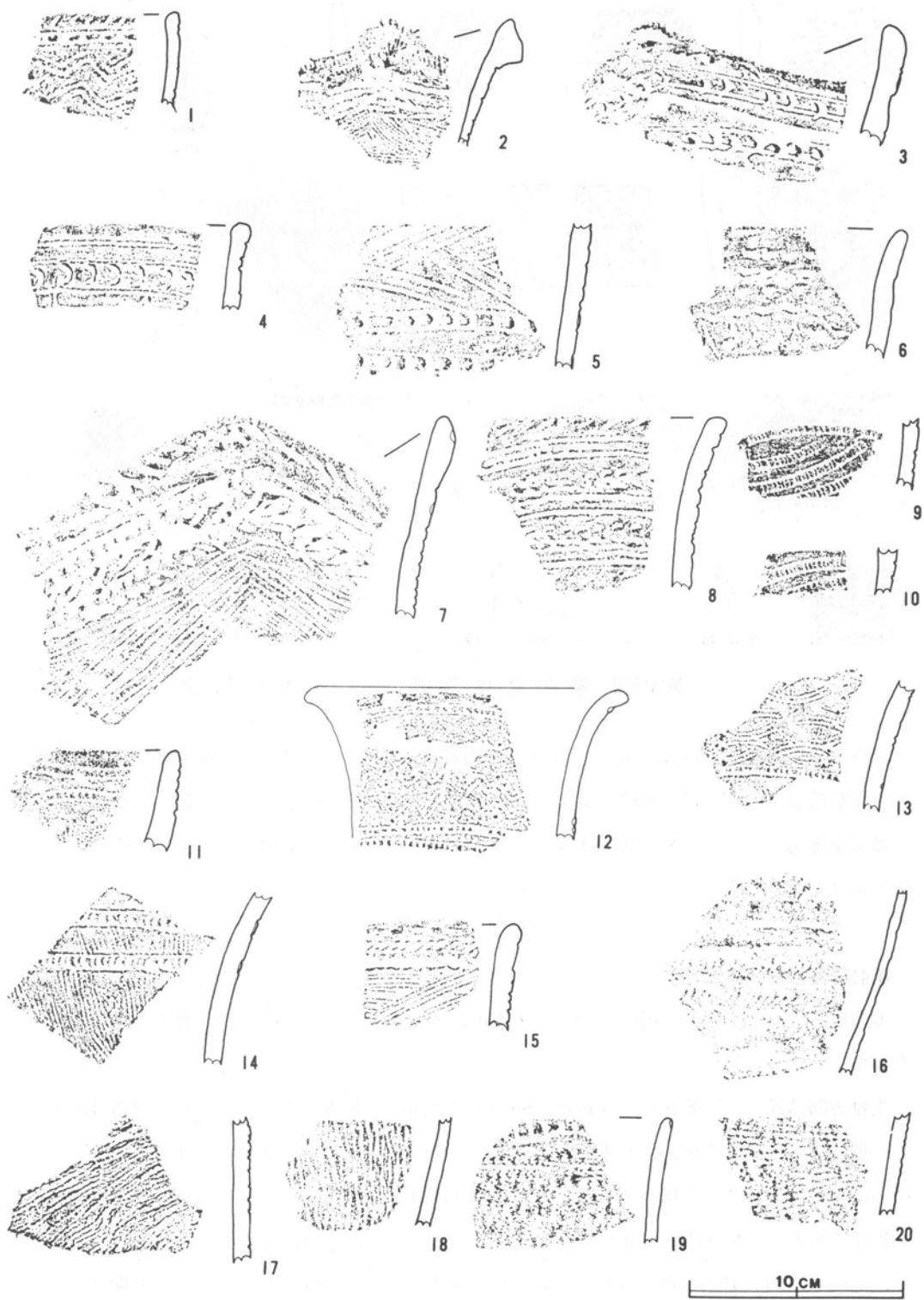
本住居跡は、最初に述べたように1つの住居跡として調査をしたが、配列や大きさに規則性がないおびただしいピット数や多くの炉の存在あるいは出土遺物等から、増築や建て替えを行い、かなりの長期間使用されたものであろう。

出土遺物 (第204~206図)

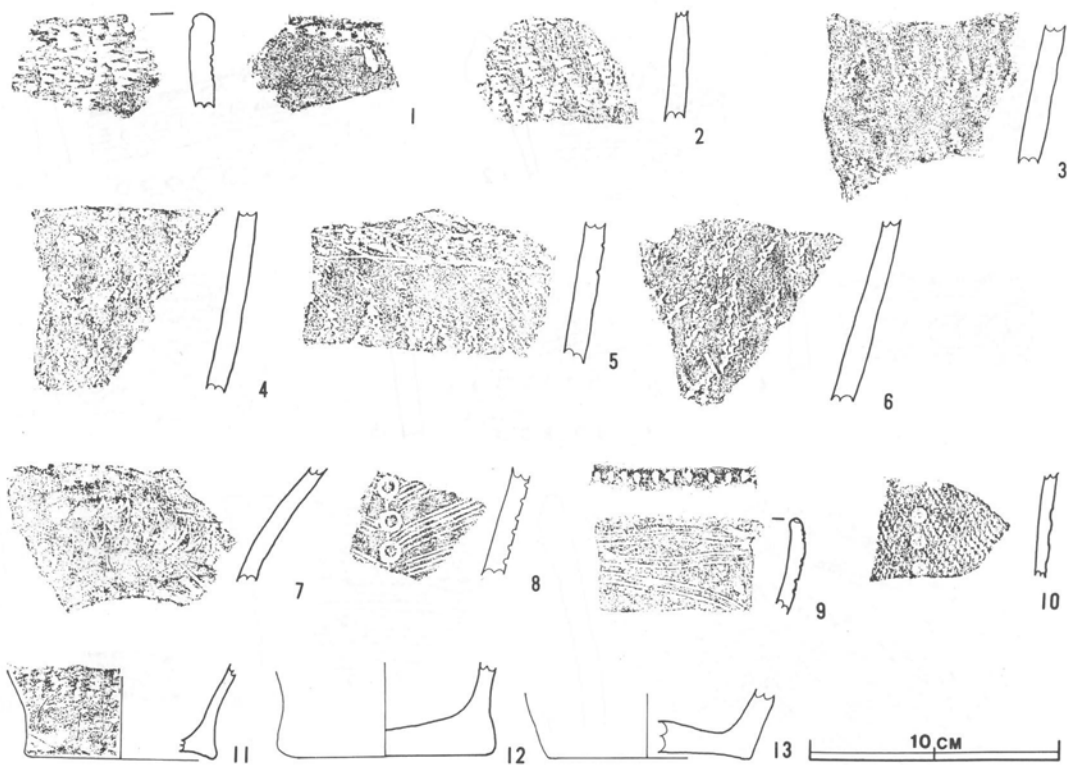
第204図1~11は胎土に繊維を含み、1は太い沈線文、2・3は間隔の密な沈線文、4は撚糸文を交差させている。5~11は縄文を施文している。12~16は輪積痕を残し、12・13は粗製土器で、14~16は凹凸文を施している。17~28は平行沈線文を有し、半截竹管具による横引き・斜行・弧



第204图 第40号住居跡出土土器拓影图



第205图 第40号住居迹出土土器拓影图



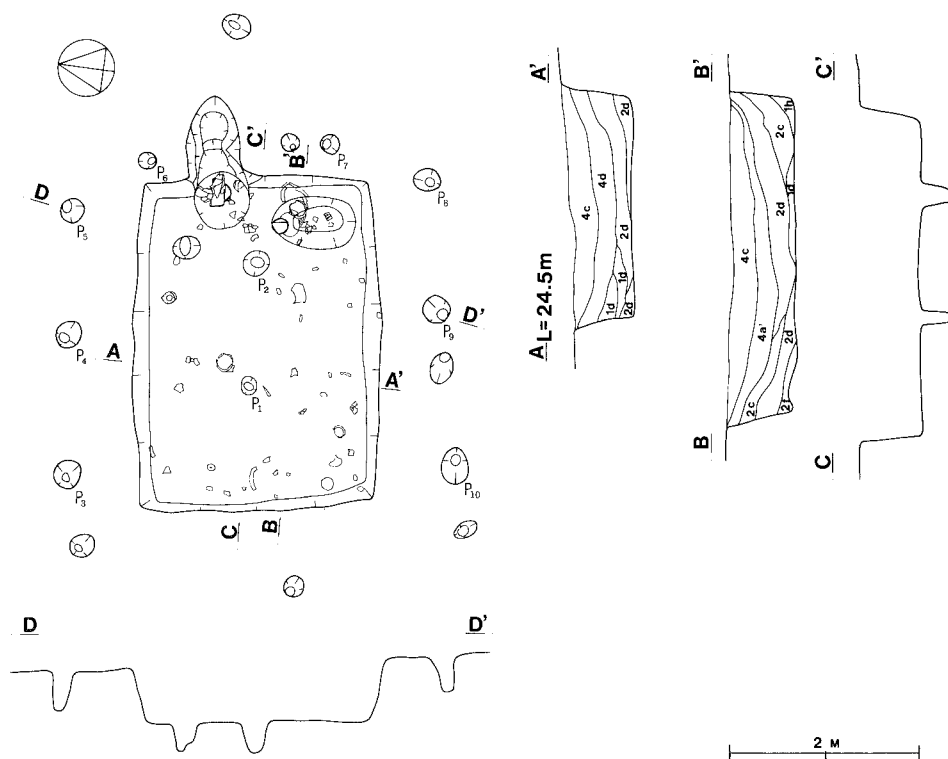
第206図 第40号住居跡出土土器拓影図

状・格子状文を施している。第205図1・2は有節沈線文, 3～5は平行沈線文間に爪形文, 6～8は変形爪形文, 9～16は連続爪形文を有している。17・18は撚糸文, 19・20と第206図1～7は貝殻文を施文している。8・9は沈線文, 10は縄文の上にそれぞれ円形竹管文を押捺している。11～13は底部である。

第41号住居跡 (第207図)

本住居跡はA3f₂調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北端に位置し、南側に28号住居跡が存在する。

主軸方向はN-83°-Eを指し、長軸3.5m・短軸2.6mの長方形を呈している。壁高は70cmを測り、壁は良好な状態で確認され垂直に立ちあがっている。床面はほぼ平坦で硬く締まっている。カマドは東壁を切りこんで構築されているが残存状況はよくなく、わずかに掘りこみ面を確認できた程度である。カマド内から坏や甑が出土している。柱穴は屋内に3か所、屋外に14か所検出され、主柱穴はP1～P10と考えられる。いずれも深さは25～45cm程である。また、南東コーナーに長径90cm・短径55cm・深さ18cmを測る楕円形状のピットが確認されたが貯蔵穴と思われる。住居跡内の覆土は、上・中層は黒褐色土が厚く、下層は暗褐色土と壁際に褐色土が堆積しており、ロ



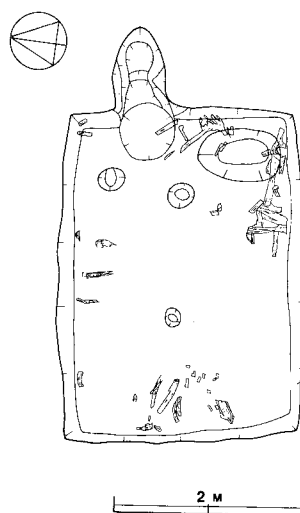
第207図 第41号住居跡実測図

ーム粒子・炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロックを多く含み、床面や壁面付近は締っている。床・壁面には「くぬぎ」と思われる炭化材が柱状になって出土しているところから、火災家屋と思われる。

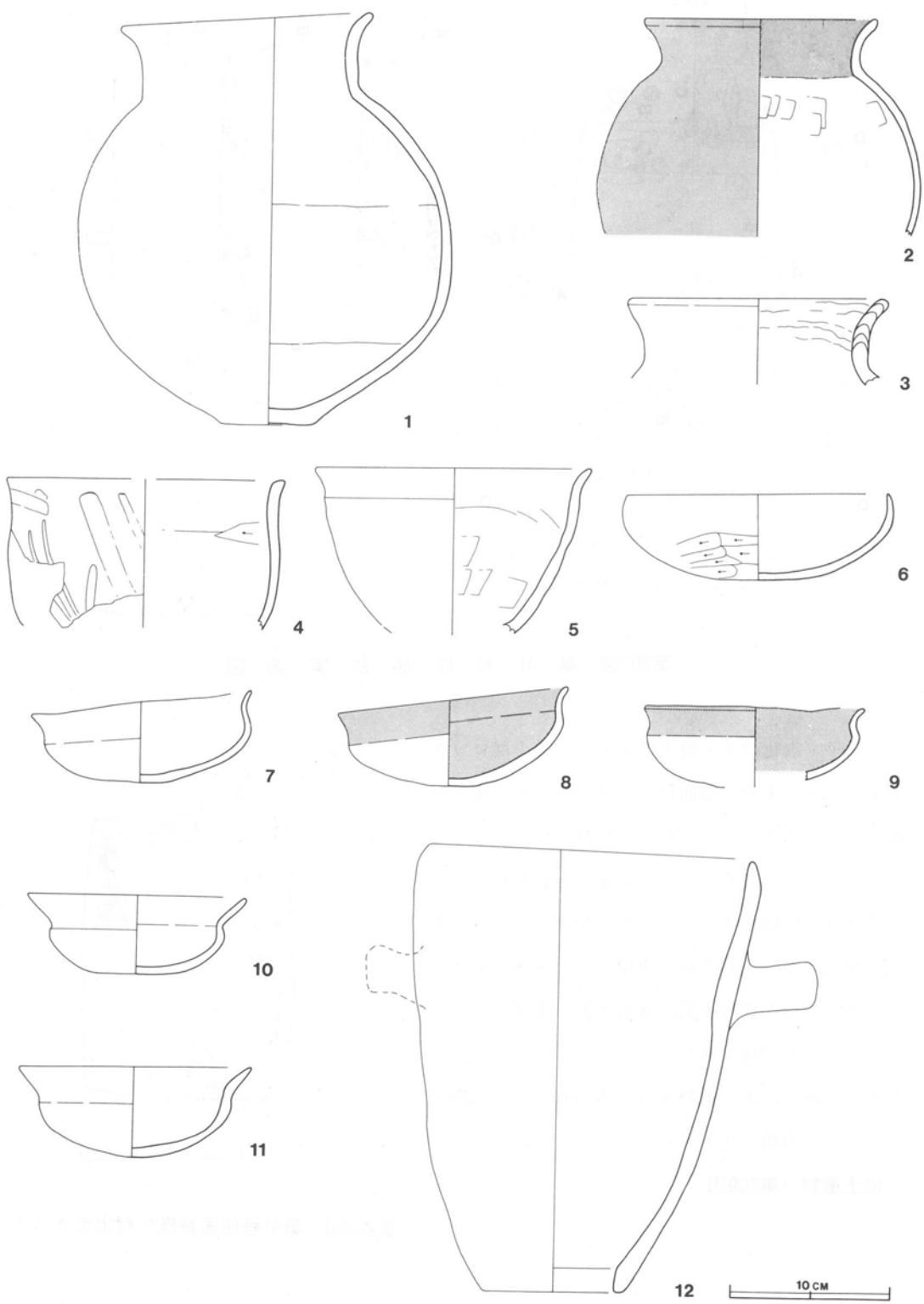
遺物は住居跡全体から土師器が出土しており、北壁下覆土中から完形の坏，東壁下から床面に密着した状態で完形の壺形土器や鉢形土器，南西コーナー付近から完形の坏が検出されている。

本住居跡は，出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

出土遺物（第209図）



第208図 第41号住居跡炭化材出土状況図



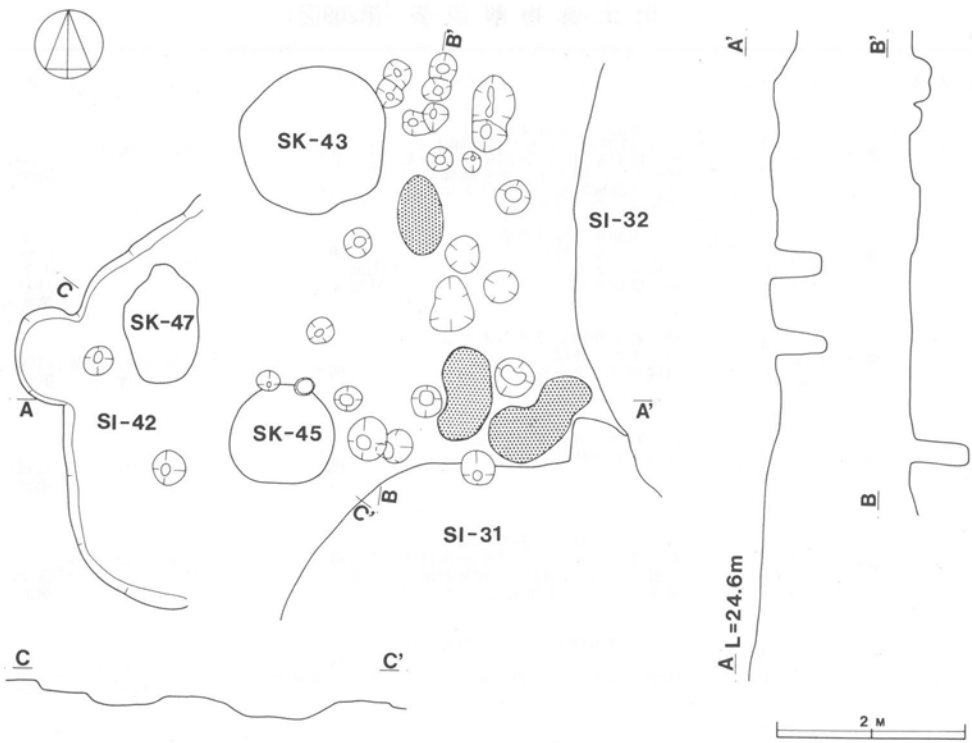
第209図 第41号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第209図)

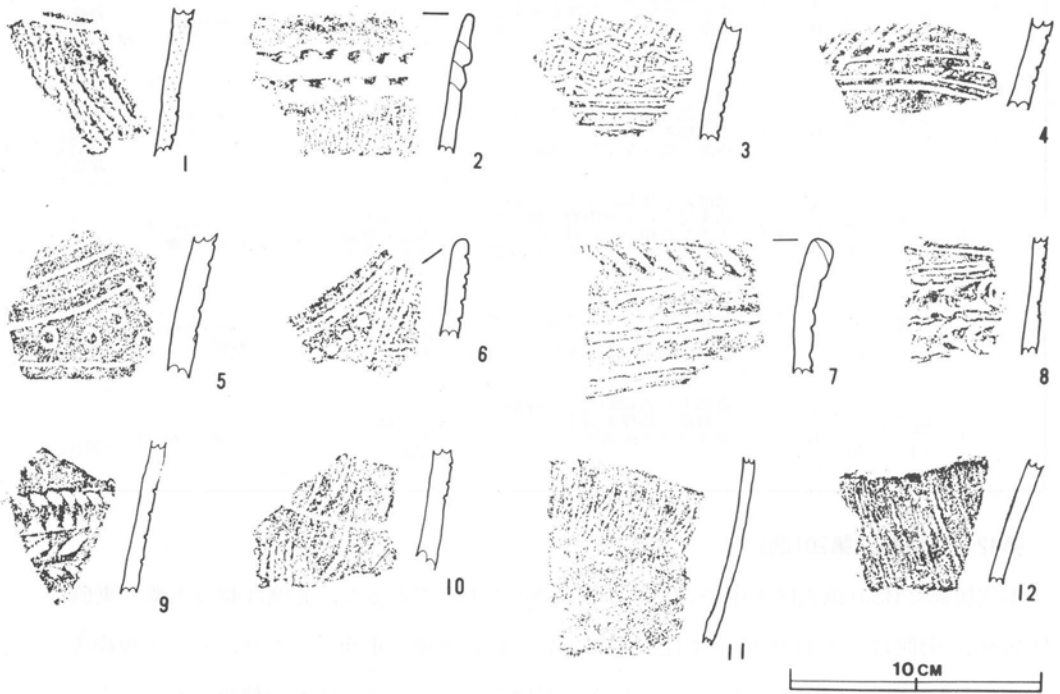
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-41	1	甕形土器 (土師)	A 15.75 B 25.4 C 6.0	口-頸部からほぼ垂直に立ちあがり、口唇部近くで大きく外傾する。胴-球形を呈し、胴部中位に最大径をもつ。胴下-半部から底部にかけては直線的なつばまりを示す。底部はやや上げ底。	口-横ナデ 胴-ナデ 底-ヘラケズリ	良好・砂粒・橙 スコ リア	100% 第209図-1
	2	甕形土器 (土師)	A (14.6) B 13.4	口-頸部からほぼ垂直ぎみに立ちあがってから外反。 口唇部-尖る。 胴-球形を呈している。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ナデ	良好・砂粒・橙 スコ リア	60% 口縁部と胴 上半外面に 丹彩 第209図-2
	3	甕形土器 (土師)	A 16.4 B 6.1	頸-若干外傾して立ちあがる。 口-大きく外反。 口縁端部-丸みをおびている。	口-横ナデ	良好・砂粒・灰黄 砂礫 褐	口縁部90% 第209図-3
	4	鉢形土器 (土師)	A (17.2) B 9.3	口-外反し丸みをおびる。 体部-若干膨らむ。	口-横ナデ 胴-ヘラナデ	良好・砂粒・赤 石英	口縁部20% 第209図-4
	5	鉢形土器 (土師)	A 17.2 B 10.2	口-大きく外反し器厚を減ずる。 胴-ゆるやかに大きく弧状を描き 底部に至る。口縁部と胴部の境に 稜をもつ。二次焼成をうけている。 器。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ヘラケズリ	普通・砂礫・にぶ スコ い橙 リア	99% 底部欠損 第209図-5
	6	坏形土器 (土師)	A 16.4 B 5.2	口-やや内彎きみで、口唇部は尖る。 体部-ゆるやかな弧状を呈して丸 底に至る。	口-横ナデ 内面-摩滅ぎみ 外面-ヘラケズリ	普通・砂粒・橙 石英	40% 第209図-6
	7	坏形土器 (土師)	A 14.4 B 5.3	口-「く」の字状を呈す。 口縁端部-大きく外反する。体部 との境に稜を有す。 体部-扁平な弧状を呈す。	口-横ナデ 内面-ナデ 外面-指ナデ	普通・石英・にぶ 雲母 い橙	100% 第209図-7
	8	坏形土器 (土師)	A 14.4 B 5.3	口-ほぼ直線的に立ちあがり、中 位から外反し、器厚を減ずる。 体部-浅い弧状を呈し、丸底に至 る。	口-横ナデ 内面-摩滅している 外面-指ナデ	普通・砂礫・にぶ 雲母 い橙	100% 外面口縁か ら内面全体 に丹彩 第209図-8
	9	坏形土器 (土師)	A 13.9 B 5.1	口-「く」の字状を呈す。 口唇部-丸みをおびる。体部との 境に稜をもつ。 体部-弧状を呈して丸底に至る。	口-横ナデ 外面-ヘラケズリ	普通・砂礫・にぶ スコ い橙 リア	80% 外面口縁か ら内面全体 に丹彩 第209図-9
	10	坏形土器 (土師)	A 13.6 B 4.9	底部から体部にかけて、扁平な弧 状を呈し、やや内彎を描いたのち 大きく外傾して口唇部に至る。 口唇部-尖っている。口縁部と体 部の境に稜をもつ。	口-横ナデ 内面-摩滅 外面-指ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱 砂礫	70% 第209図-10
	11	坏形土器 (土師)	A 14.5 B 5.6	口-大きく外傾。 口縁端部-尖る。体部との境に稜 をもつ。 体部-扁平な弧状を呈して、丸底 に至る。	口-横ナデ 内面-ナデ 外面-ヘラケズリ	やや・砂粒・橙 軟弱	95% 第209図-11
	12	甗形土器 (土師)	A 20.2 B 27.5 C 8.6	底部から直線的に、口縁部に至る。 口唇部-器厚を減ずる。 把手は2カ所有する。	口-横ナデ 内面-ヘラケズリ 外面-ヘラナデ	普通・砂粒・橙	90% 第209図-12

第42号住居跡 (第201図)

本住居跡はB3a1調査区を中心にかけて確認されたものであるが、北側は43号土壌、東側は32号住居跡、南側は31号住居跡、本住居跡内で45・47号土壌と重複しており、形状・規模等不明である。ハードロームで硬く締っている床面と西壁の一部、炉跡、柱穴が検出されたことによって住居跡として取り扱い調査したものである。西壁中央部が外側にはり出している。炉跡は3か所



第210图 第42号住居跡実測図



第211图 第42号住居跡出土土器拓影图

確認され、床面には多数のピットがみられる。これら炉やピットの在り方から、本住居跡は増築や建て替えが行われ、かなりの長期間使用されたものであろう。

遺物は縄文土器片が出土している。

出土遺物 (第211図)

1は胎土に繊維を含み、貝殻文を施文している。2は輪積痕を残し、その下端に棒状具による刺突文を加えている。3～6は平行沈線文を有し、3は地文に縄文、5・6は円形竹管文を押捺している。7は変形爪形文、8・9は連続爪形文を有し、7は口唇部にキザミ、9は刺突文を施している。10はまばらな捺糸文、11は貝殻文、12は付加条縄文を施文している。

第43号住居跡 (第212図)

本住居跡はB3b5調査区を中心に確認されたもので、東側は52・53号土壇と重複しており、南側0.5mのところには48号土壇、北西側に40号住居跡が存在する。

長径方向はN-6°-Eを指し、長径3.7m・短径3.2mの北壁と南壁がやや直線的な不整楕円形を呈している。壁高は5～7cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はソフトロームでやや軟弱であるが、ほぼ平坦をなしている。東側は壁・床面とも土壇との重複関係から不明確である。炉は有さない。ピットが6か所検出されたが、深さは10～36cmと比較的浅く、支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、東側から南側にかけては暗褐色土、西側から北側にかけては褐色土が堆積しており、

ローム粒子・ソフトローム小ブロック等を含み締りは弱い。

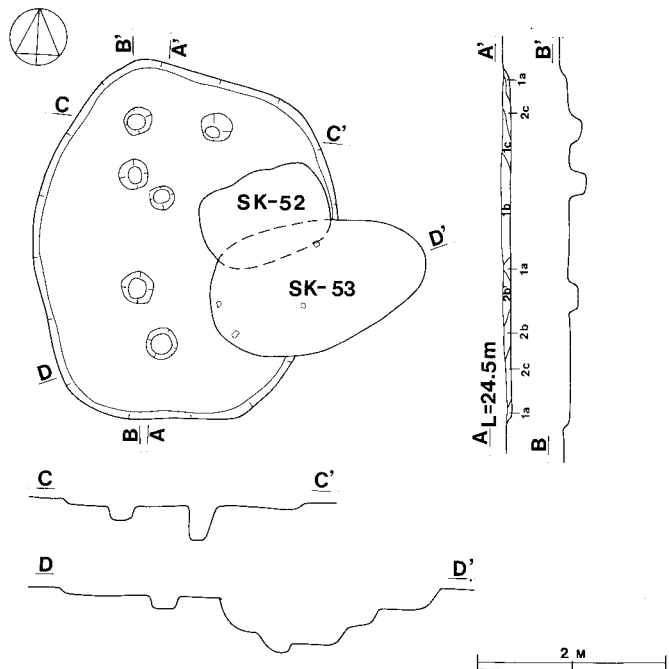
遺物は少量の縄文土器片が東側を中心に出土しているが、ほとんどが覆土中からのものである。

本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第213図)

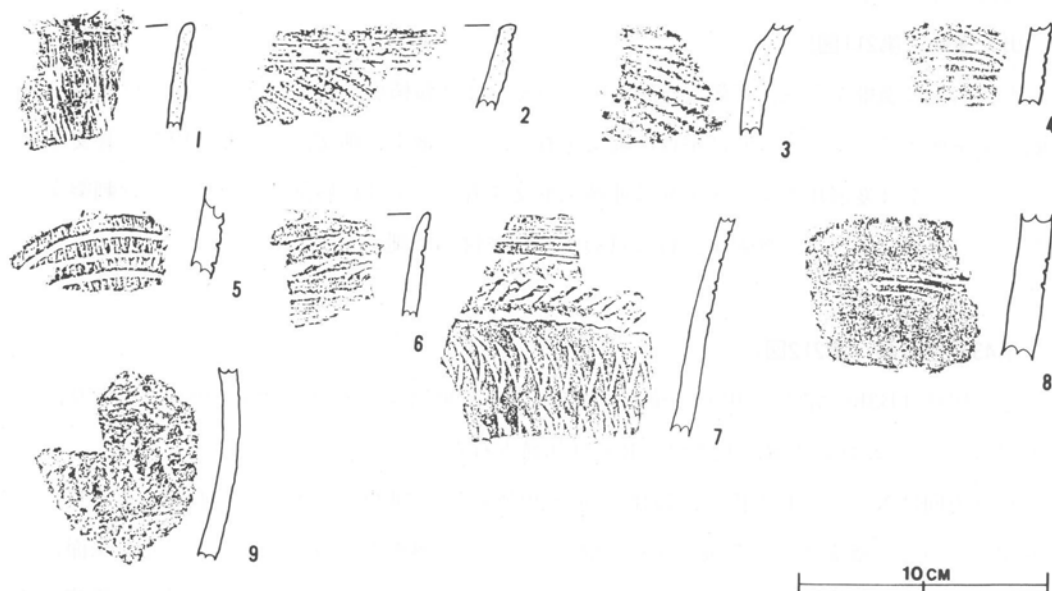
1～3は胎土に繊維を含み、

1は縦位に沈線文、2は有節沈線文を施している。2・3は縄文を施文している。4・5は平行沈線文を有し、5は地文に捺



第212図 第43号住居跡実測図

糸文を施している。6は変形爪形文、7は連続爪形文、8はまばらな捺糸文、9は貝殻文を施文している。



第213図 第43号住居跡出土土器拓影図

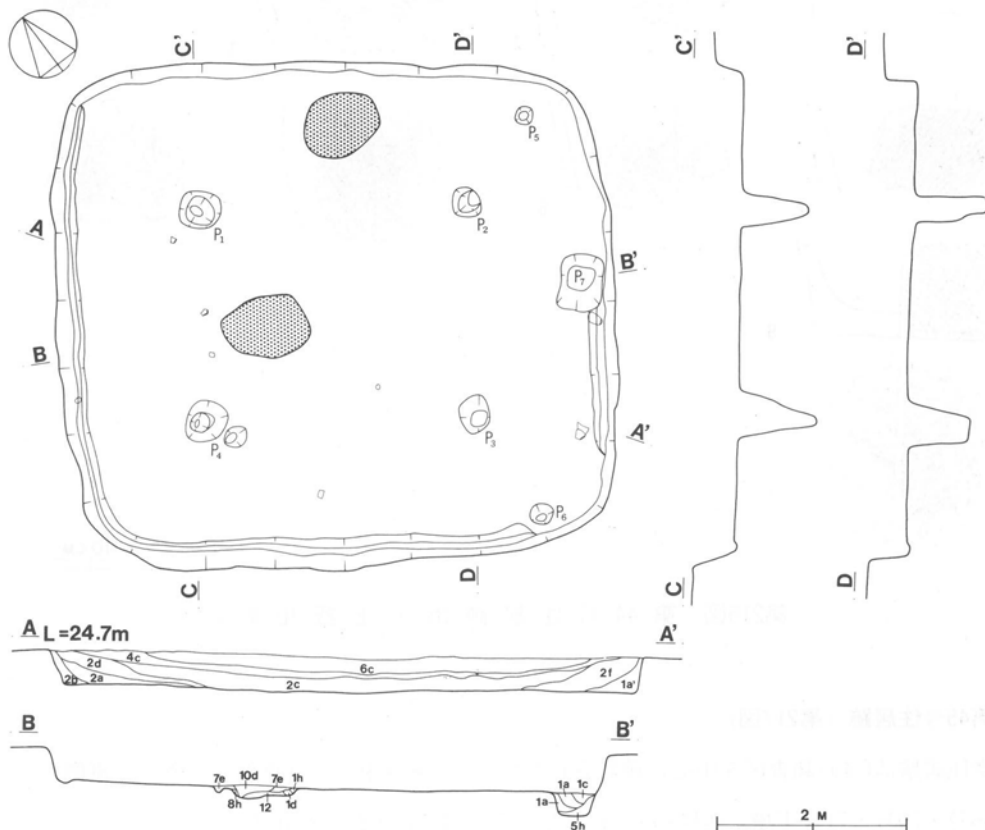
第44号住居跡 (第214図)

本住居跡はB4is調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東部に位置し、南西側に56号土城や45号住居跡が存在する。

主軸方向はN-55°-Wを指し、長軸5.9m・短軸5.4mの隅丸方形を呈している。壁高は30~40cmを測り、壁は70~80°の角度で外傾して立ちあがっている。幅10cm・深さ5cm程の壁溝が半周している。床面は平坦で、炉跡周辺は特に硬く締っている。炉跡は2か所検出された。便宜上、中央より北西側に位置する炉をF1号、北東壁寄りに位置する炉をF2号と仮称しておく。F1号は床面を10cm程掘り窪めた地床炉で、長径94cm・短径60cmの楕円形を呈し、焼土ブロックを多量に含み炉床は硬く焼けている。また、F2号は床面を4cm程掘り窪めた地床炉であるが、焼土もなくほとんど使用されなかったようである。ピットは7か所検出され、P1~P4が支柱穴で、深さは70~84cmを測る。P5・P6は補柱穴と考えられる。P7は長軸62cm・短軸40cm・深さ25cmの隅丸長方形を呈する貯蔵穴と思われる。住居跡内の覆土は、色調から大きく3層に分けられ、上層に黒色土、中層に黒褐色土、下層と壁際に暗褐色土が自然堆積しており、全体的に締りはない。

遺物は弥生土器片を中心に縄文土器片も混入して出土しているが、いずれも量的には少ない。南側コーナー付近から紡錘車が検出されている。

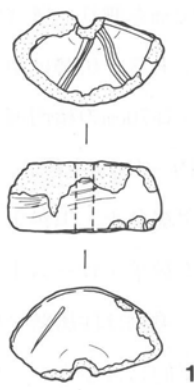
本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の十王台期に比定される遺構と思われる。



第214図 第44号住居跡実測図

出土遺物 (第215・216図)

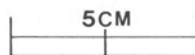
第216図は弥生土器片である。1は口縁部で複合口縁を呈し、頸部に縄文を施している。2は羽状縄文、3は付加条縄文、4・5は燃糸文を施文している。6は櫛目による懸垂文で区割した間に櫛目の波状文を施している。7・8は無文で、煤が付着している。9は底部で木葉痕が認められ、胴部には付加条縄文が施文されている。



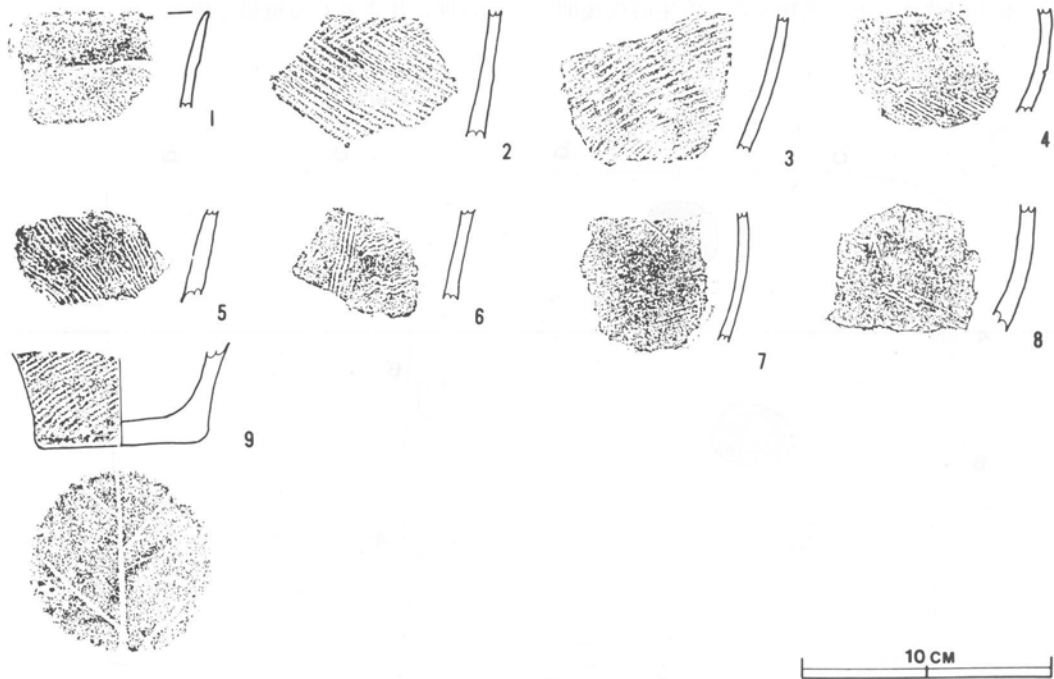
1

出土遺物解説表 (第215図)

遺構	番号	器種	重量(g)	焼成・胎土・色調	備考
SI-44	1	紡錘車	19.0	普通・砂礫・にぶい黄橙	45% 第215図-1



第215図 第44号住居跡出土遺物実測図



第216図 第44号住居跡出土土器拓影図

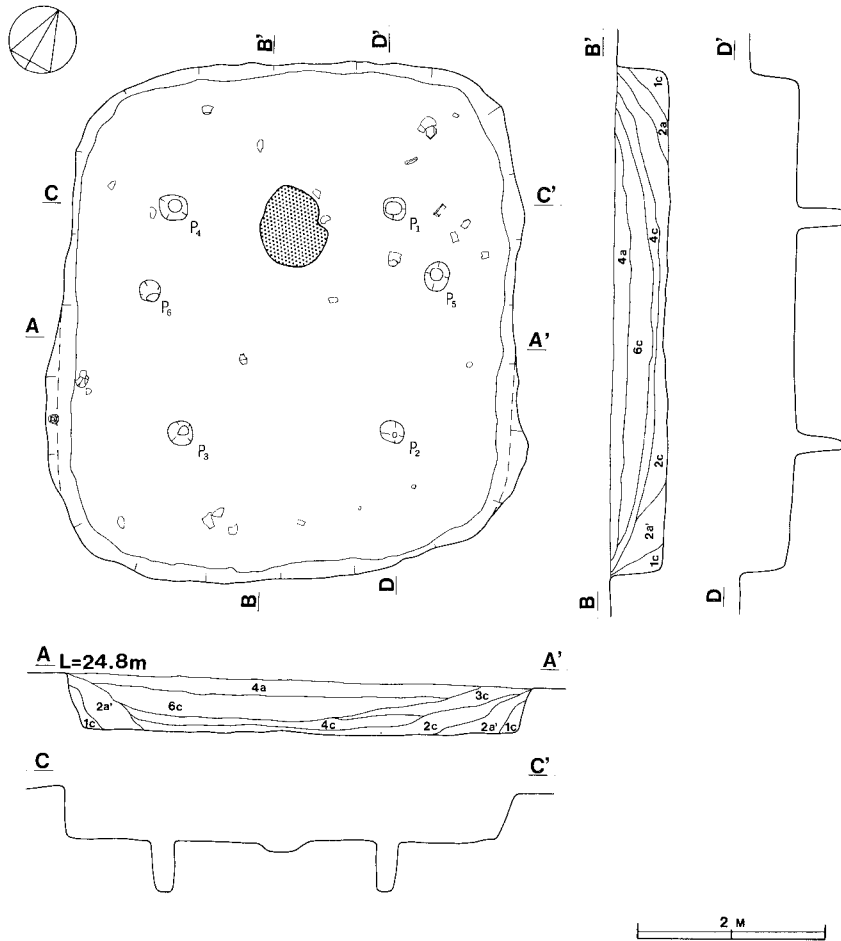
第45号住居跡 (第217図)

本住居跡はC4a3調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央より東部に位置し、東側に隣接して56号・70号・71号土壌，西側約6.5mのところ53号住居跡が存在する。

主軸方向はN-30°-Wを指し、長軸5.45m・短軸4.85mの隅丸方形を呈している。壁高は50～60cmを測り、壁は明確でほぼ垂直に立ちあがっている。床質はハードロームで硬く、床面は平坦である。炉跡は中央よりやや北側に検出され、床面を13cm前後掘り窪めた地床跡で、長径90cm・短径70cmの楕円形を呈し、焼土は多くないが炉床は硬く焼けている。ピットは6か所検出され、P1～P4が支柱穴でP5・P6は補柱穴と考えられる。深さは30～55cmを測る。住居跡内の覆土は、黒褐色土・黒色土・極暗褐色土と床面付近に暗褐色土、壁際に褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック等を含み、黒褐色土と黒色土は締りがなくサラサラしている。

遺物は住居跡全体から弥生土器片を中心に縄文土器片・土師器片も混入して出土しているが、量的には少ない。偏った出土状況がみられ、中央と各壁際からの出土がほとんどである。東側コーナー付近の床面直上から紡錘車が2点、北西壁下の床面から弥生の壺形土器の底部、ほぼ中央部からは床面に密着した状態で口縁部を欠損した弥生の小形壺が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の十王台期に比定される遺構と思われる。

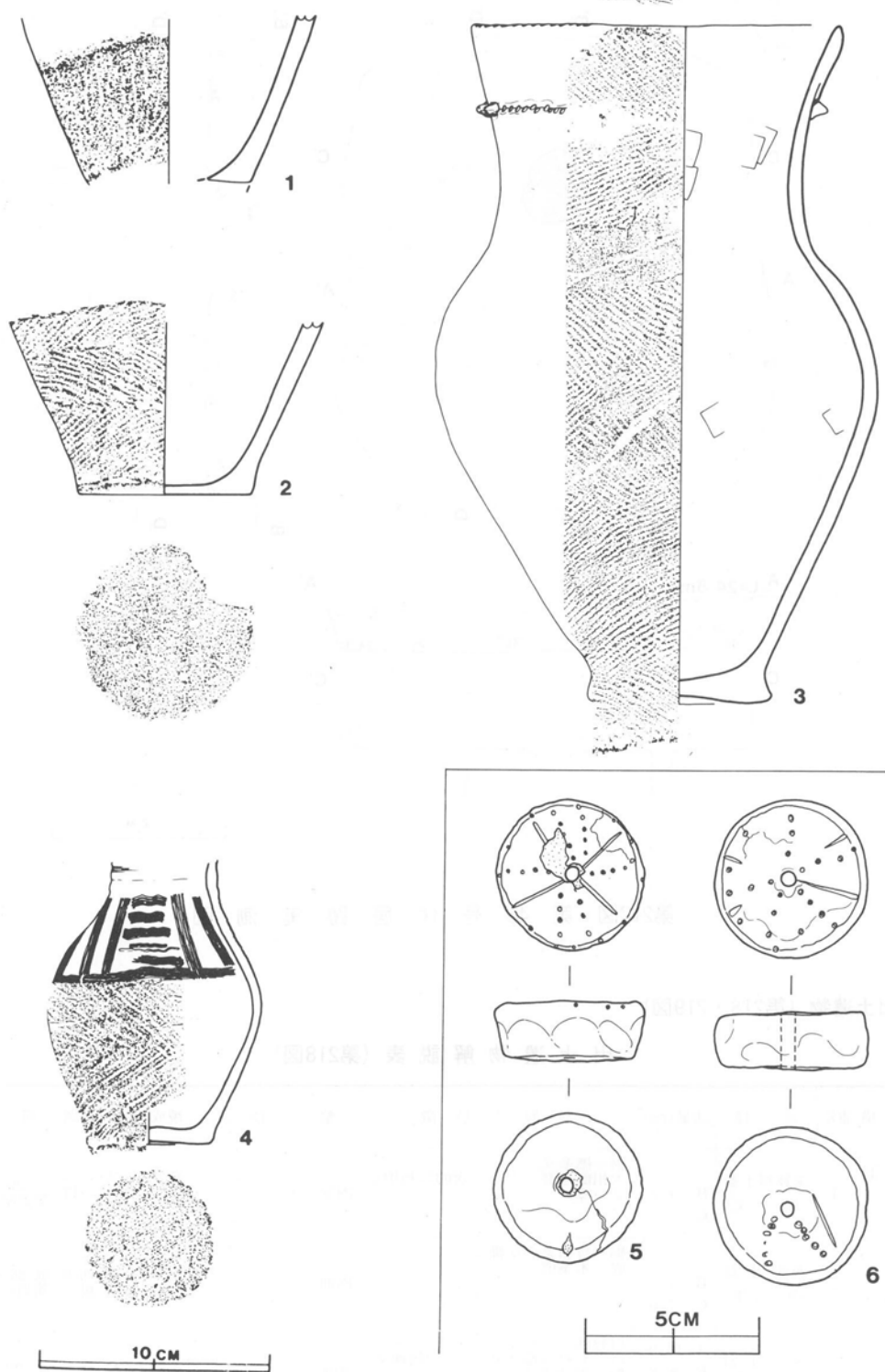


第217図 第45号住居跡実測図

出土遺物 (第218・219図)

出土遺物解説表 (第218図)

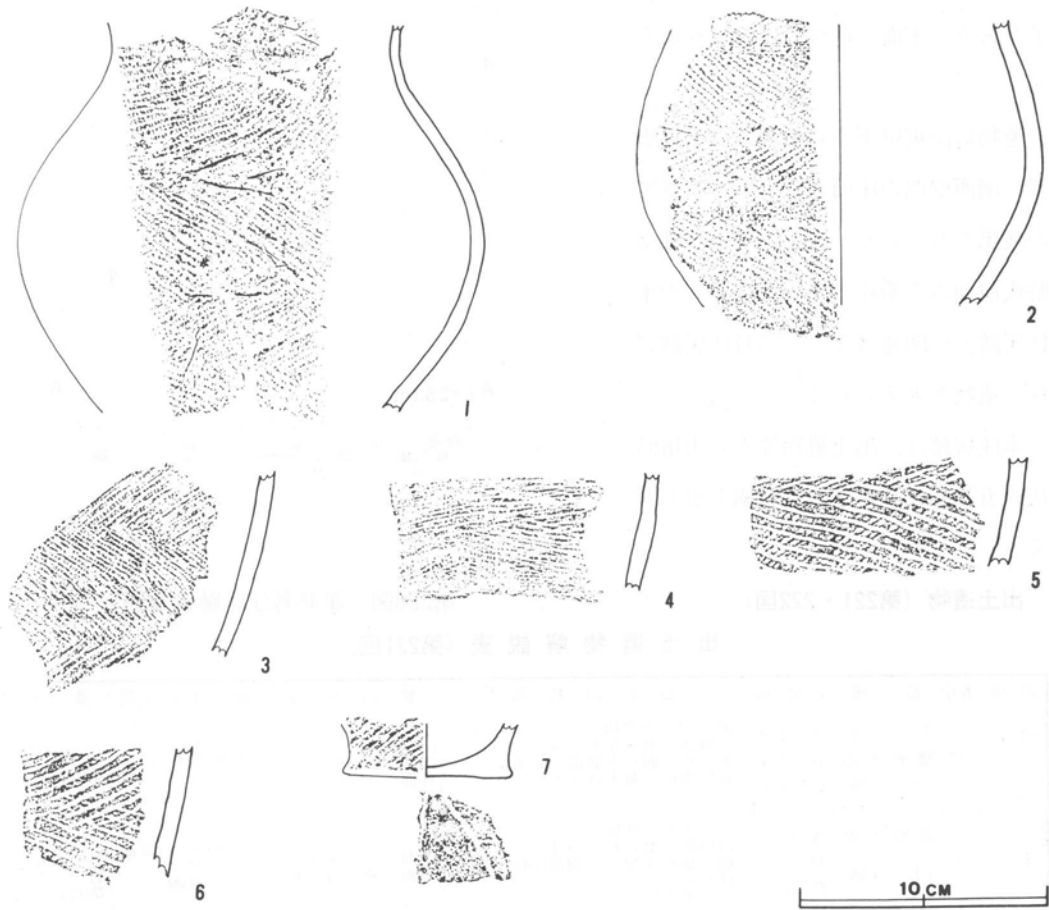
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-45	1	深鉢形土器 (縄文)	B 7.1 C 7.0	胴一撚糸文。 欠損部を磨って、二次的に利用している。	内面一ナデ	良好・スコ・にぶ リアい橙 砂粒	20% 第218図-1
	2	壺形土器 (弥生)	B 7.5 C 7.6	胴一付加条羽状縄文。 底一木葉痕。	内面一ヘラナデ	普通・砂礫・明赤 長石 褐	底部 80% 第218図-2
	3	壺形土器 (弥生)	A 16.0 B 29.8 C 8.0	口唇部一キザミ。 口一6対の瘤状貼付文。羽状縄文。 胴一羽状縄文。 くびれ部一無文。	内面一ヘラナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 い黄 橙	60% 第218図-3



第218图 第45号住居跡出土遺物実測図

SI-45	4	小形土器 (弥生)	B 12.4 C 5.7	胴上半部—懸垂文で3区割し、その間に櫛目による波状文。 胴下半部—羽状縄文。 底—布目痕。	内面—ナテ 摩滅が激しい	普通・砂礫・浅黄 石英 橙	85% 口縁部欠損 第218図-4
	5	紡錘車	36.5 g			普通・砂礫・明褐 石英 灰	100% 第218図-5
	6	紡錘車	42 g			普通・砂礫・にぶ い黄 橙	100% 第218図-6

第219図は弥生土器片である。1・2は壺形土器で、胴部に羽状縄文を施文している。3は羽状縄文，4は付加条縄文，5は縄文の上に沈線文，6は羽状に撚糸文をそれぞれ施文している。7は底部で、木葉痕が認められる。



第219図 第45号住居跡出土土器拓影図

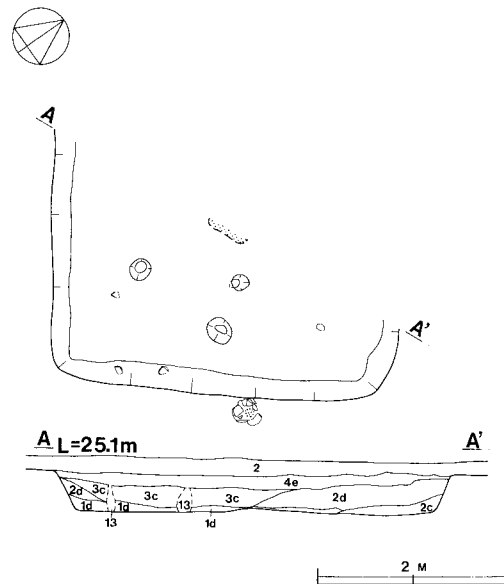
第46号住居跡 (第220図)

本住居跡はB4i調査区を中心に確認されたもので、遺跡の中央よりやや東部に位置し、南側は55号住居跡を切りこんで構築されている。本住居跡の北西側は民地のため調査ができなかったが、南東壁と南西壁の一部及びソフトロームの床面が確認されたので住居跡と判断して南側の部分だけ調査を進めた。

主軸方向はN-60°-Wを指し、軸長4m前後の隅丸方形を呈するものと推定される。残存壁高は40cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。ロームの掘り込みは10cm前後である。床面は中央付近が硬いが全体的に軟弱である。中央よりやや西側寄りに焼土や炭化物の散布がみられるので、その近くに炉跡が位置するものと想定される。ピットは3か所検出された。住居跡内の覆土は、黒褐色土・極暗褐色土が厚く堆積し、床面付近には褐色土、壁際には暗褐色土の堆積もみられる。ローム粒子・ソフトローム小ブロックと極少量の焼土粒子・炭化粒子を含み、床面に近づくほど締りがある。

遺物は南東壁下から土師器の壺形土器、南西壁側の床面から土玉や石鏃等が検出されている。尚、上層から縄文時代前期の土器片が出土しているが本住居跡との関連はなく、55号住居跡に伴う遺物と考えられる。

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。



出土遺物 (第221・222図)

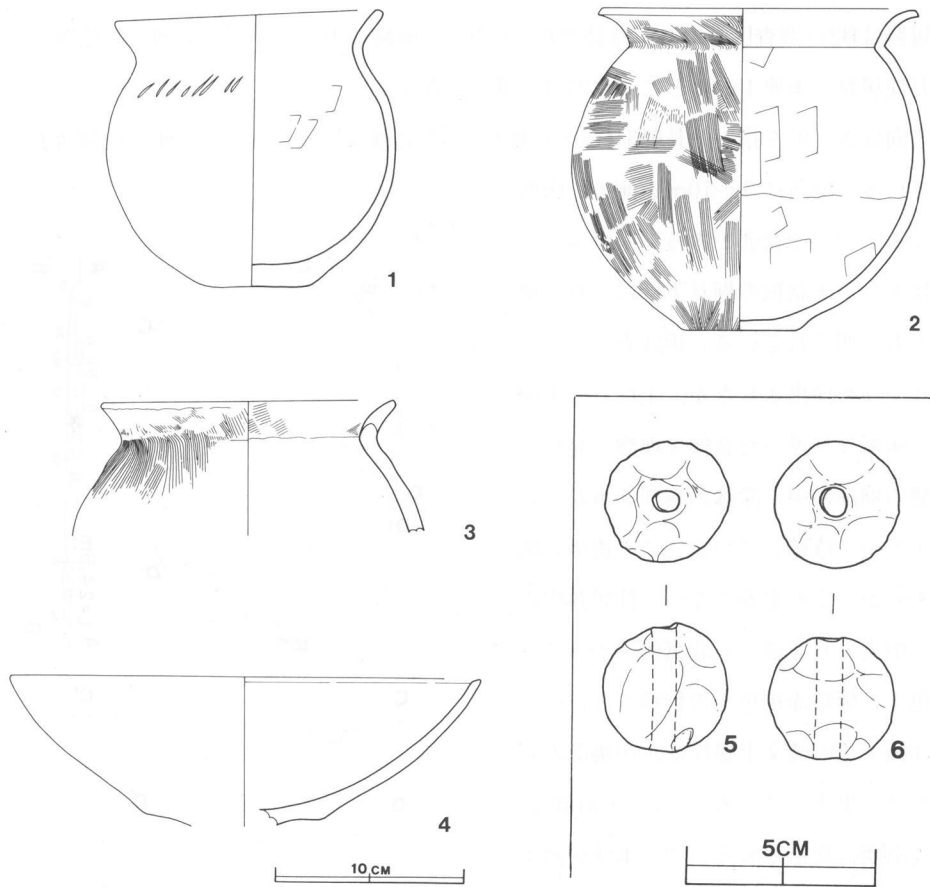
第220図 第46号住居跡実測図

出土遺物解説表 (第221図)

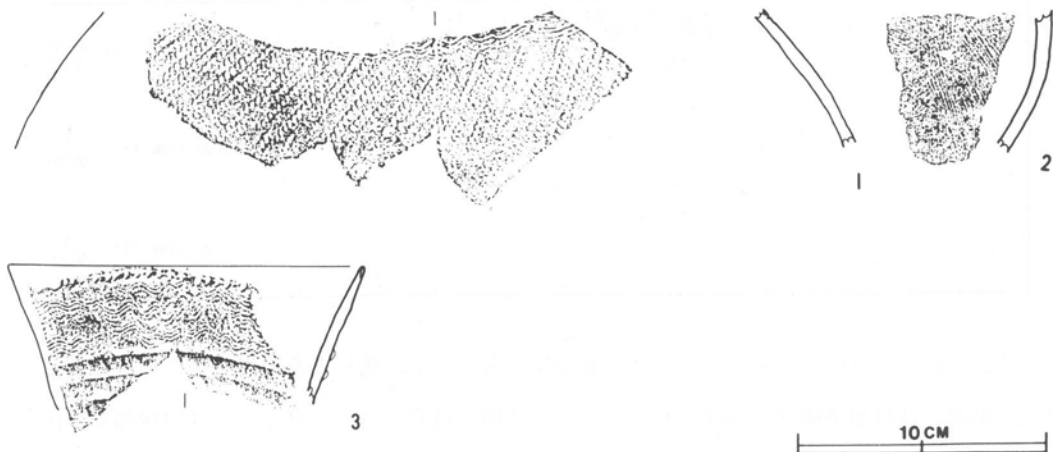
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-46	1	小形壺形土器 (土師)	A 14.2 B 14.4 C 6.0	頸-「く」の字状。 口唇部-丸みを帯びる。 胴-やや膨らみ底部に至る。 胴部中位に最大径をもつ。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	80% 第221図-1
	2	壺形土器 (土師)	A (16.9) B 17.0 C 6.0	口-大きく外反。 口唇部-磨られている。 胴-球形を呈し、胴部中位に最大 径をもつ。 底-平底。	内面-ヘラナデ 外面-刷け目調整	普通・スコ・灰褐 リア 砂礫	60% 外面に煤付 着 第221図-2
	3	甕形土器 (土師)	A (16.7)	口-外反。 頸-「く」の字状を呈し、やや膨ら みをもって胴部に至る。	口-刷け目調整 後、横ナデ	普通・砂礫・にぶ い橙	口縁部20% 第221図-3

SI-46	4	高坏形土器 (土 師)	A 24.9 B 7.9	底部と体部の間に稜をもち、ほぼ直線的に外傾して立ちあがる。口—弧状を呈している。口唇部—磨っている。	内面—ヘラミガキ 外面—ヘラナデ	良好・スコ・いぶ リア・橙 雲母	坏部 70 % 第221図- 4
	5	土 玉	31 g			普通・砂礫・橙	100% 第221図- 5
	6	土 玉	30.5 g			普通・砂礫・橙	100% 第221図- 6

第222図1・3は弥生土器片で、2は土師器片である。1は甕形土器で、肩部に櫛目による波状文、胴部には付加条縄文が施文されている。2は刷け目痕が認められる。3は口縁部で、口唇部に密なキザミ、口縁部に櫛目による波状文、頸部に隆帯を設けている。



第221 図 第 46 号 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図



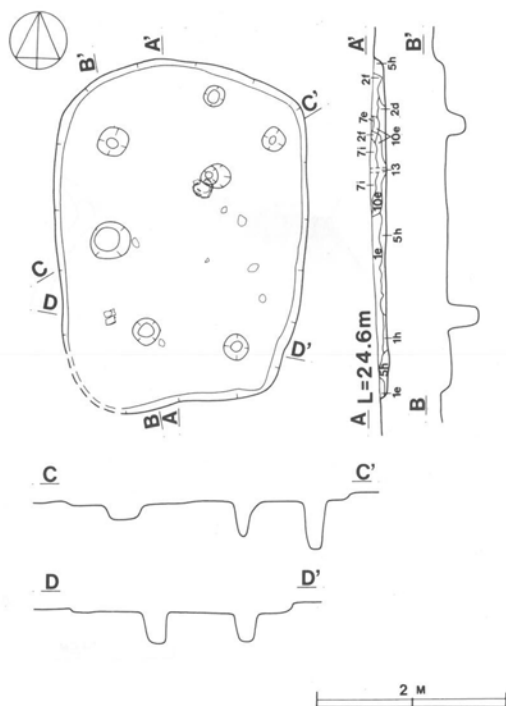
第222図 第46号住居跡出土土器拓影図

第47号住居跡 (第223図)

本住居跡はB2i7調査区を中心に確認されたもので、遺跡の中央よりやや北西部に位置し、北西側に10号住居跡、南側1mのところには25号土壌が存在する。

主軸方向はN-0°を指し、長軸3.6m・短軸2.7mの北壁が外側に若干はり出した隅丸長方形状を呈している。壁高は5~10cmを測る。床面は平坦であるがやや軟弱である。南西コーナー付近はトレンチ試掘の掘り下げにより、壁・床面ともに切られている。炉は有さない。ピットは7か所検出されたが、支柱穴は不明である。床面より浮いた状態で埋甕が発見された。甕の胴部の中に深鉢の胴部を重ねており、焼土が中に堆積している。この遺構に関連するものかどうか定かでない。住居跡内の覆土は、中央より北側から北東側にかけては暗赤褐色土と極暗赤褐色土の堆積がみられる。

遺物は極少量の縄文土器片が、中央部から南側にかけて出土している。これら土器群は、縄文時代前期に比定されるので、本住居跡も同時期に営まれたものと思われる。



第223図 第47号住居跡実測図

出土遺物 (第224・225図)

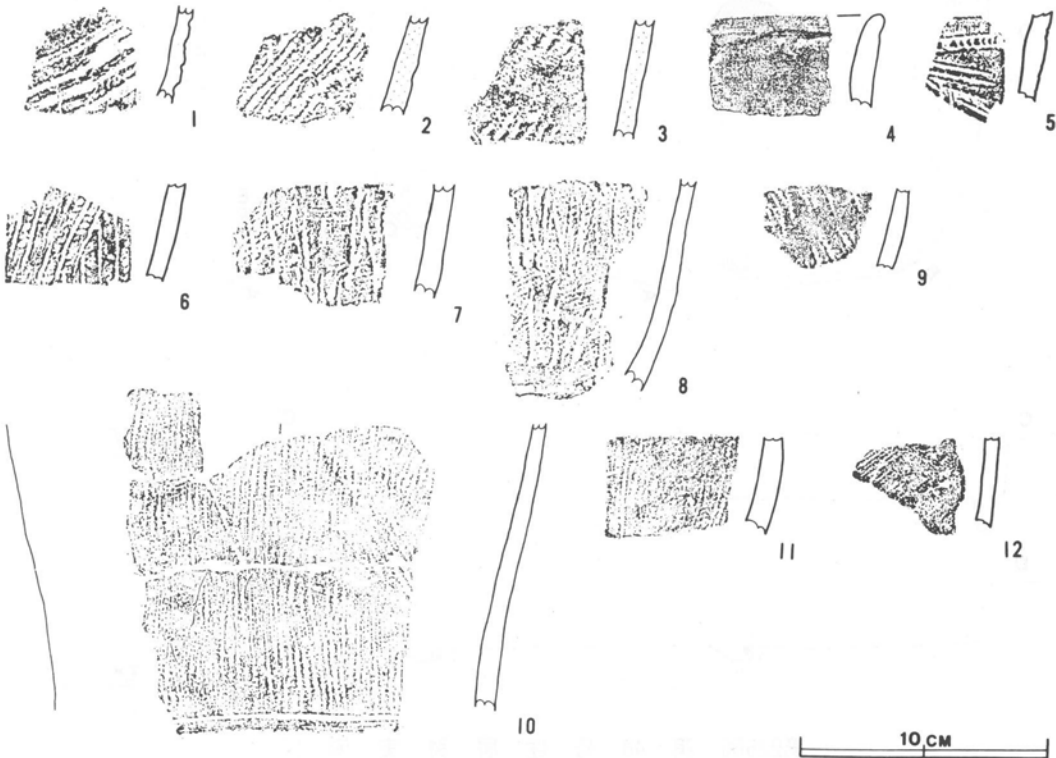
出土遺物解説表(第224図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-47	1	深鉢形土器 (縄文)	B 7.5 C 7.1	胴-まばらな捺糸文を施す。 底-若干, 上げ底きみである。	内面-ナデ 外面・底-ヘラミガキ	普通・砂粒・橙スコリア	底部 100% 第224図-1
	2	深鉢形土器 (縄文)	B 7.0	付加条縄文を施文。	内面-ヘラナデ	普通・長石・にぶい橙スコリア	胴部 10% 第224図-2

第225図1～3は胎土に繊維を含み, 1はヘラ状具による沈線文, 2・3は縄文を施している。4は無文, 5は連続爪形文, 6は縄文, 7～9は貝殻文, 10～12は縄文を施文している。



第224図 第47号住居跡出土遺物実測図

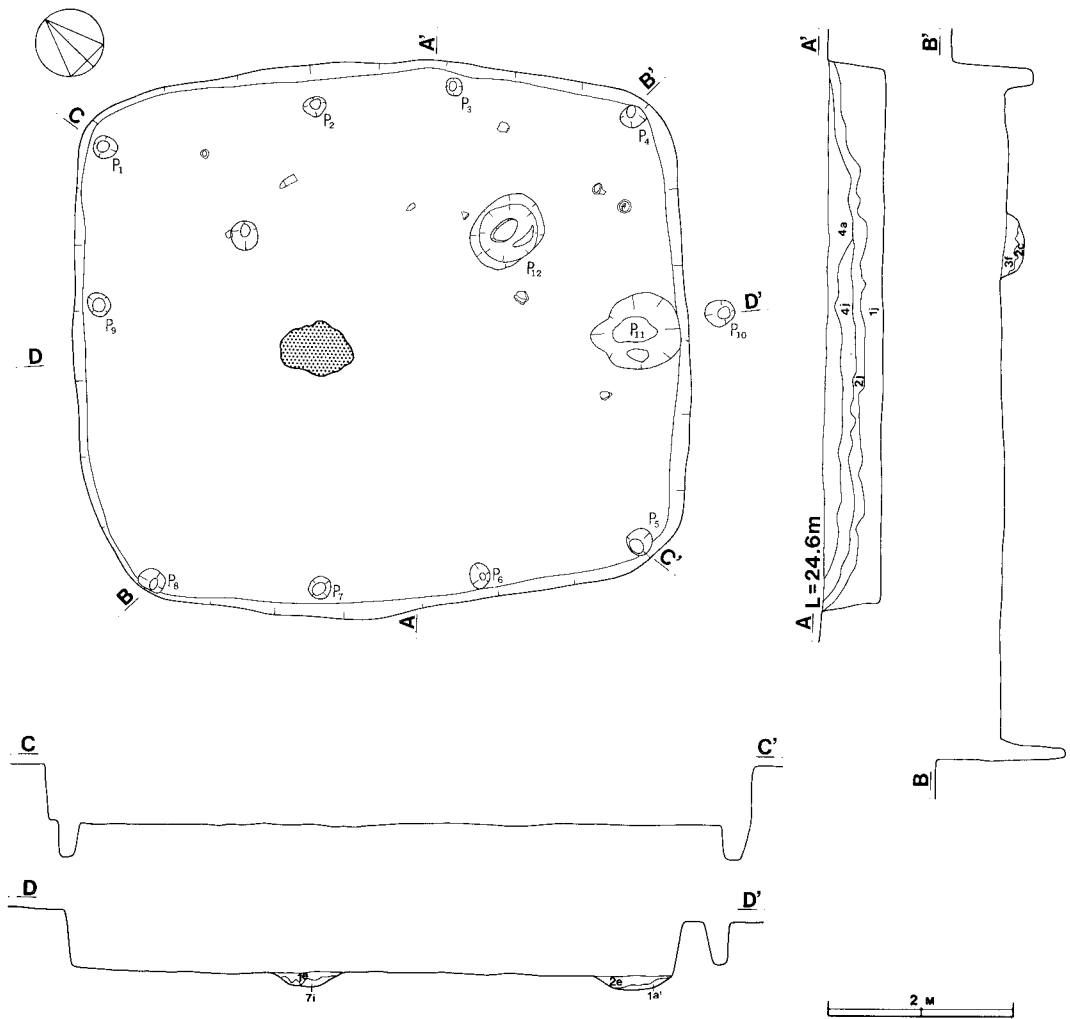


第225図 第47号住居跡出土土器拓影图

第48号住居跡 (第226図)

本住居跡はC4b0調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東端に位置し、南側約8mのところに49号住居跡が存在する。

主軸方向はN - 45° - Wを指し、長軸6.5m・短軸5.8mの隅丸方形を呈している。壁高は55~65cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。ロームの掘りこみは30cm程である。床面は平坦で、良く踏み固められている。炉跡は中央よりやや北西側の位置に検出された。床面を約12cm掘り窪めた地床炉で、長径75cm・短径55cmの楕円形を呈し、焼土ブロックを多く含み炉床は硬く焼けている。ピットは屋内に12か所、屋外に1か所検出された。壁下のP1~P9、屋外のP10が支柱穴と考えられ、深さはほとんど40cm前後を測るがP8は74cmと深い。P11は貯蔵穴と思われ、床面を13



第226図 第48号住居跡実測図

cm掘りこんだ直径80cmの円形状を呈し、暗褐色土と褐色土が堆積している。P12は芋穴の攪乱ピットである。住居跡内の覆土は、上層に黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・パミス等を含み締っている。

遺物は住居跡全体から少量の縄文土器片・弥生土器片・土師器片が混在して出土している。東コーナー付近の床面上から弥生の壺形土器や小形壺、土師器の器台が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代前期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第227図)

出土遺物解説表 (第227図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-48	1	壺形土器 (弥生)	A 18.8 B 34.0 C 7.9	複合口縁で、その下端に小瘤貼付。頸部と胴部の境は無文。器面全体に付加条羽状縄文を施文している。底に木葉痕。	内面一ナデ	普通・砂礫にぶい橙	50% 第227図-1
	2	小形壺形土器 (弥生)	B 11.0 C 5.8	胴肩部一無文。胴一付加条縄文。	内面一刷け目調整	良好・石英にぶい橙	80% 東コーナー付近の床面から出土 第227図-2
	3	器台形土器 (土師)	B 5.3 C 12.2	脚部一わずかな柱状部から外反して伸び、裾部の端部は薄く尖る。孔一3個を有する。	内面一ヘラナデのあとナデ 外面一ヘラミガキのあとヘラナデ 裾部一横ナデ	良好・砂粒にぶい橙	90% 脚部東コーナー床面より5cm浮いて出土 第227図-3

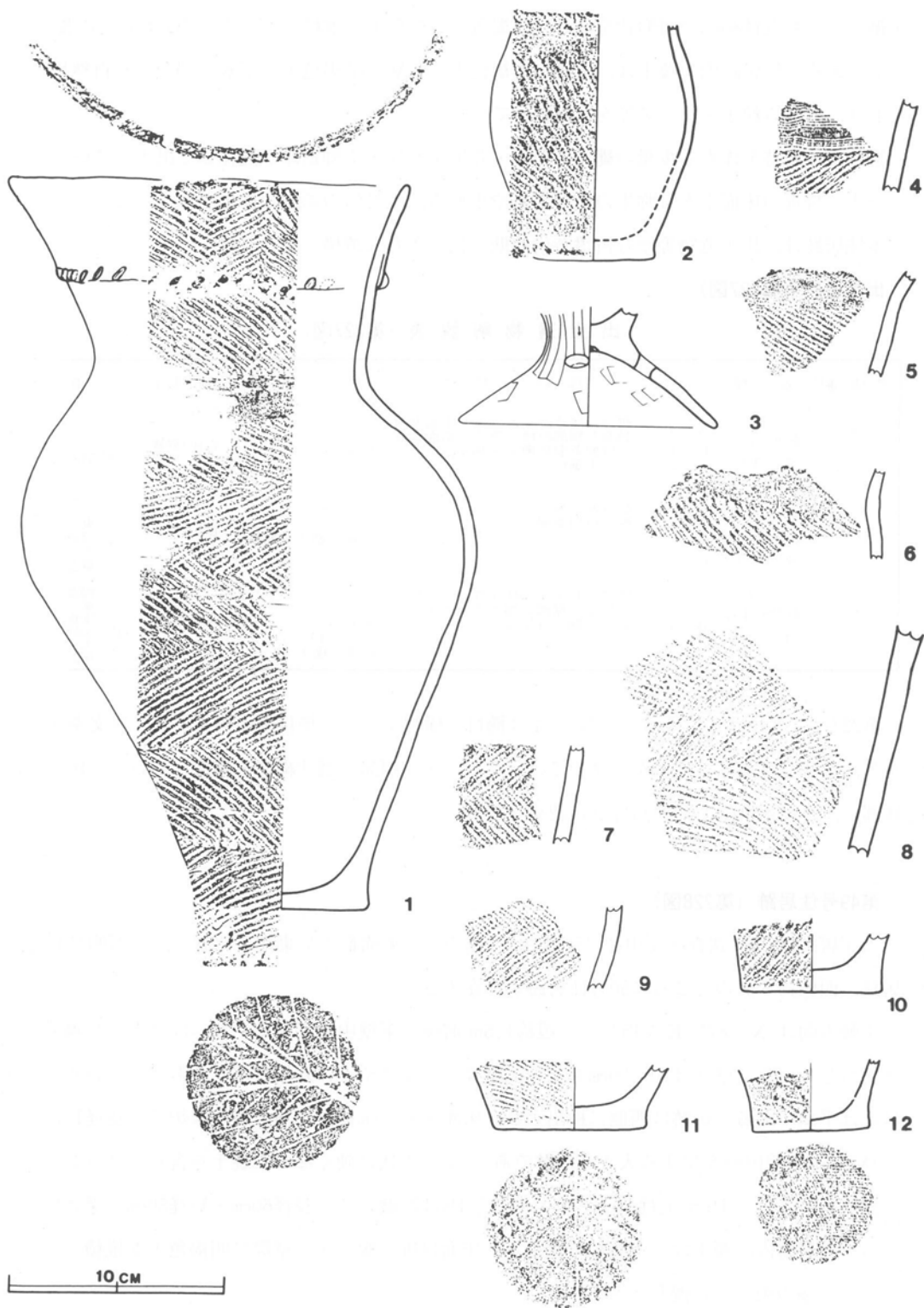
第227図4～12は弥生土器片である。4は櫛目の横線文、5は櫛目の山形文、6は無文を頸部に施し、それぞれ胴部に縄文を施文している。7～9は胴部に羽状縄文を施文している。10～12は底部で、11に木葉痕、12に布目痕が認められる。

第49号住居跡 (第228図)

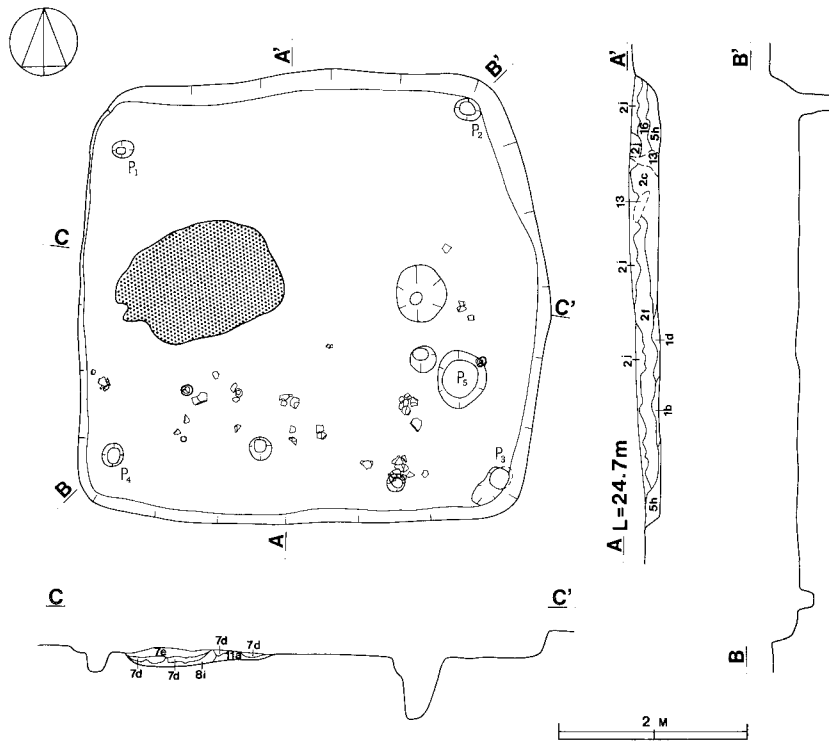
本住居跡はC5e1調査区を中心に確認されたもので、遺構群の最東端に位置し、北西側に48号住居跡、西側約5mのところ50号住居跡が存在する。

主軸方向はN-87°-Eを指し、一辺約4.5m前後の東壁中央部がやや外へはり出した隅丸方形状を呈している。壁高は10～30cmを測り、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はほぼ平坦である。炉跡は西側に検出され、床面を約15cm程掘り窪めた地床炉で、長径1.75m・短径1.2mの楕円形を呈する大きな炉跡である。レンガ状に硬くなった焼土を含む。ピットは9か所検出され、P1～P4が支柱穴と考えられる。Psは貯蔵穴で、長径60cm・短径50cm・深さ15cmを測る。住居跡内の覆土は、上層に暗褐色土、床面付近に褐色土、壁際に明褐色土が堆積しているが一部に藤の根による攪乱がみられる。

遺物は縄文土器片・弥生土器片・土師器片が、量的には少ないがほとんど南側の覆土中から出土している。東壁寄りの床面直上から、土師器の甕形土器や器台の脚部が検出されている。



第227图 第48号住居跡出土遺物実測・拓影図



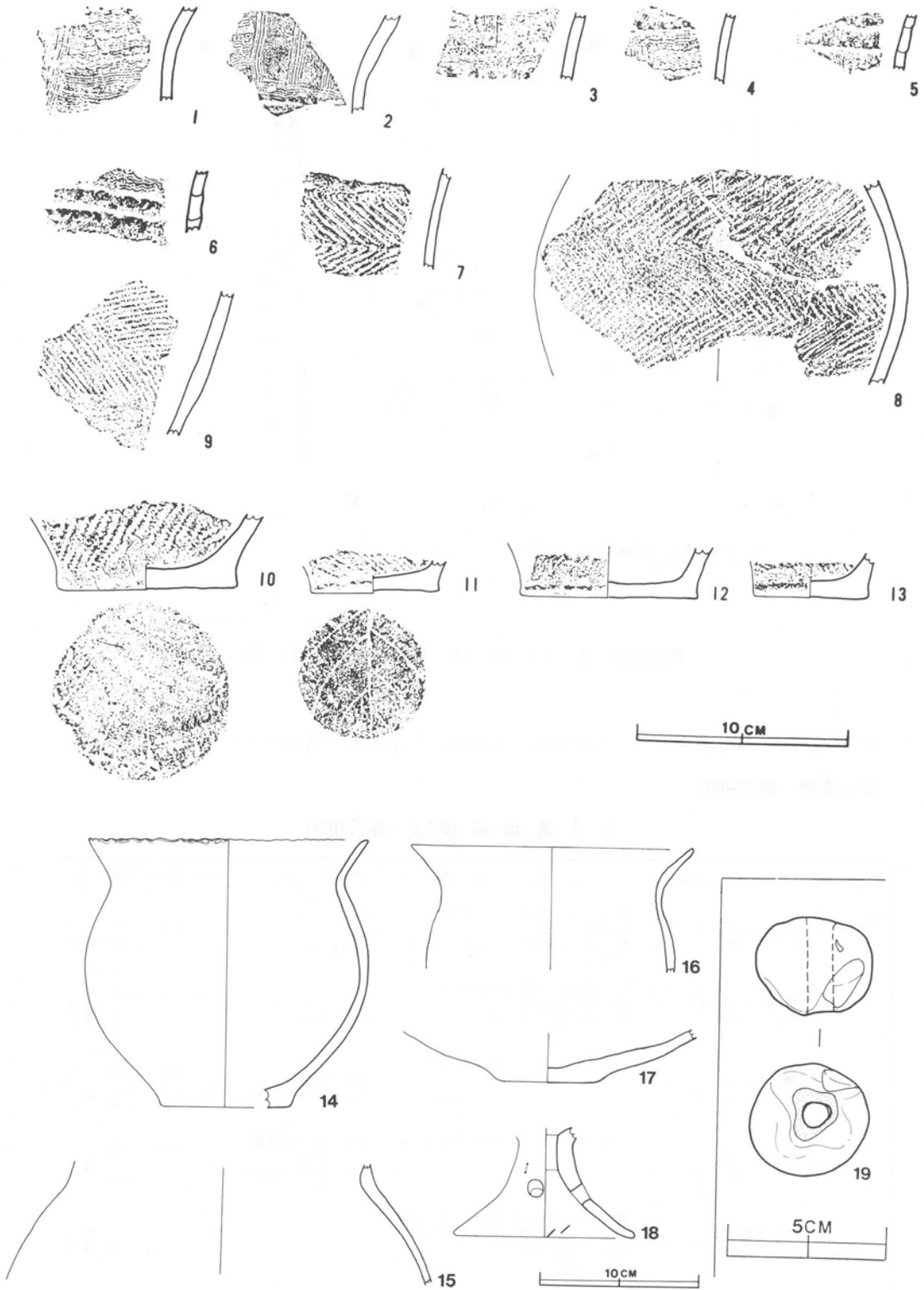
第228図 第49号住居跡実測図

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第229図)

出土遺物解説表 (第229図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-49	1	甕形土器 (土師)	B 17.5	頸-「く」の字状。II-外傾。 I-頸部-キザミ。 胴-膨らみをもち、中位に最大径をもつ。	内面>ヘラミガキ I-横ナデ	良好・砂粒・にぶ い橙	40% 第229図-14
	2	甕形土器 (土師)	A (17.6) B 7.6	II-外傾して器厚を減ずる。 頸-「く」の字状。 胴-弱い膨らみをもつ。	内面-ナデ 外面-摩滅	普通・砂粒・褐灰 にぶ い橙	口縁部25% 第229図-15
	3	甕形土器 (土師)	B 6.6	胴部中位に向って膨らみをもつ。	内面-摩滅 外面-刷け目調整	やや・砂粒・明黄 軟弱 褐 灰黄	10% 第229図-16
	4	甕形土器 (土師)	B 3.0 C 6.4	平底から大きく外傾して胴部に至る。	内面-刷け目調整- 摩滅 外面-刷け目調整の あとナデ	やや・砂粒・灰黄 軟弱 スコ リア 黄橙	底部 100% 第229図-17
	5	器台形土器 (土師)	B 6.7	脚部-ややゆるやかに外下方へ開く。 裾部-大きく横に開く。裾部の先端は、丸みをおびている。 孔-3個有する。	ヘラナデ	良好・石英・にぶ 砂粒 橙	脚部 60% 第229図-18
	6	土 玉	3.1×3.7 35g			普通・砂粒・明赤 (多) 褐 赤灰	100% 第229図-19



第229图 第49号住居跡出土遺物実測・拓影图

第229図1～13は弥生土器片である。1～6は楯目による懸垂文・波状文が施されており、5・6には隆帯が貼付されている。7～9は羽状縄文を施文している。10～13は底部で、10・11には木葉痕が認められる。

第50号住居跡（第230図）

本住居跡はC4f8調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東部に位置し、東側に49号住居跡、南側約6.5mのところ64号住居跡、南西側約4.5mのところ51号住居跡が存在する。

主軸方向はN-20°-Wを指し、長軸6.55m・短軸6mの南辺がやや短い隅丸形状を呈している。壁高は30～60cmを測り、壁は全体的にほぼ垂直に立ちあがっている。床面は平坦で硬い。芋穴の攪乱が東壁下・炉跡・炉跡西側の3か所にみられた。炉跡は中央よりやや北側に検出され、床面を20cm程掘り窪めた地床炉である。東側半分は芋穴による攪乱がみられるが、長径140cm・短径65cmの長楕円形を呈していると思われる。焼土を含み炉床は硬く焼けている。ピットは11か所検出されたが比較的浅いピットが多く、20cm以上の深さをもつピットはP1～P3だけである。主柱穴は不明である。P4は貯蔵穴と考えられる。住居跡内の覆土は、黒褐色土の間に黒色土、床面付近に褐色土が自然堆積している。また西壁下中央部付近と南西コーナー付近の床面上に焼土の散布がみられ、10～15cm程堆積していた。

遺物は縄文土器片・弥生土器片・土師器片が混在して極少量出土しているが、細片が多い。北西側壁下の床面から弥生の壺形土器の底部と土師器のほぼ完形の埴が検出されている。

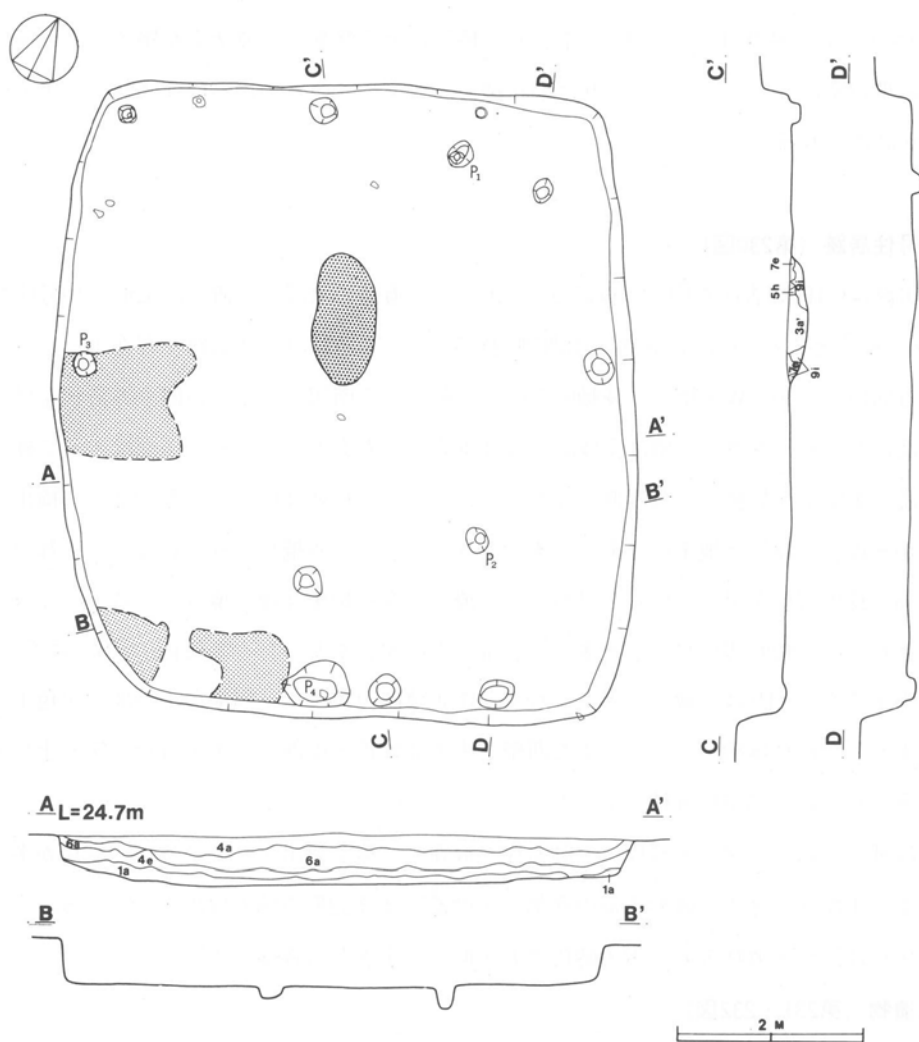
本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

出土遺物（第231・232図）

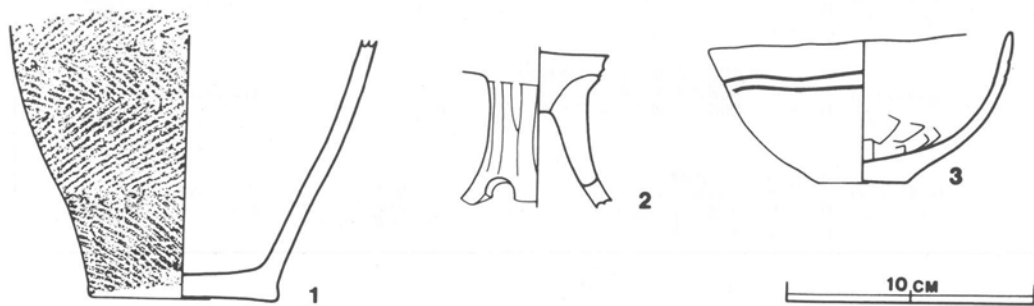
出土遺物解説表（第231図）

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-50	1	壺形土器 (弥生)	B 10.5 C 7.4	胴—羽状縄文。 底—無文。	内面—ナデ	普通・石英・橙	底部 100% 第231図-1
	2	器台形土器 (土師)	B 6.2	脚部—台部からほぼ直線的に伸び、 裾部は大きく膨らむ。 脚部—3個の孔を有する。	脚部—ヘラケズリ	良好・砂礫・にぶ スコ リア	30% 第231図-2
	3	埴形土器 (土師)	A 12.2 B 5.6 C 3.8	口—内彎。 口縁部—尖っている。 体部—深い弧状を呈している。 底—平底。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ 胴<外面—指ナデ	やや・砂礫・にぶ 軟弱 い橙	90% 第231図-3

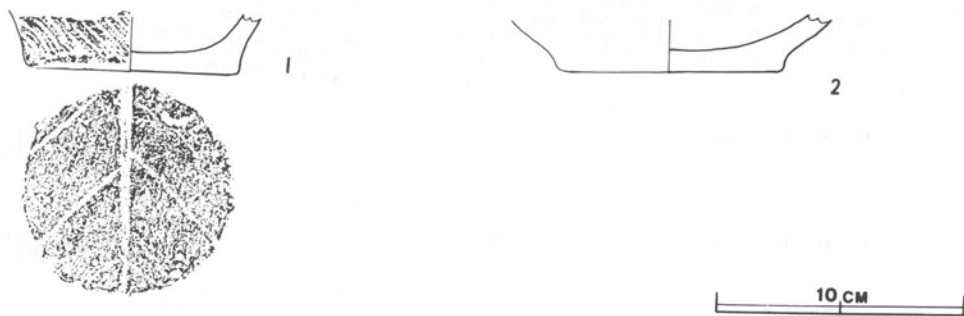
第232図1・2とも弥生土器の底部で、1には木葉痕が認められる。



第230图 第50号住居跡実測図



第231图 第50号住居跡出土遺物実測図



第232図 第50号住居跡出土土器拓影図

第51号住居跡 (第233図)

本住居跡はC4g6調査区を中心に確認されたもので、遺跡の南東部に位置し、北側に50号住居跡、南東側5.5mのところには64号住居跡が存在する。

主軸方向はN - 62° - Wを指し、長軸6.45m・短軸6mの南西辺がやや外傾にはり出した隅丸方形形状を呈している。壁高は75cmを測り、壁は良好な状態で垂直に立ちあがっている。床質はロームで、床面は踏み固められており平坦である。炉跡は中央よりやや北西側に検出され、床面を約13cm程掘り窪めた地床炉で、長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し、焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。ピットは8か所検出され、P1~P6が支柱穴で、P7は貯蔵穴と考えられる。P7は南東壁下中央に位置し、直径55cm・深さ18cm程の円形状を呈している。住居跡内の覆土は、上層に50~60cmの厚さで黒色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土・暗褐色土が自然堆積している。

遺物は縄文土器片・弥生土器片・土師器片が混在して出土しているが、量的には少ない。中央部からの出土はみられない。東側の床面から完形に近い土師器の壺、北側コーナー付近の床面からはほぼ完形の土師器の壺形土器が検出されている。

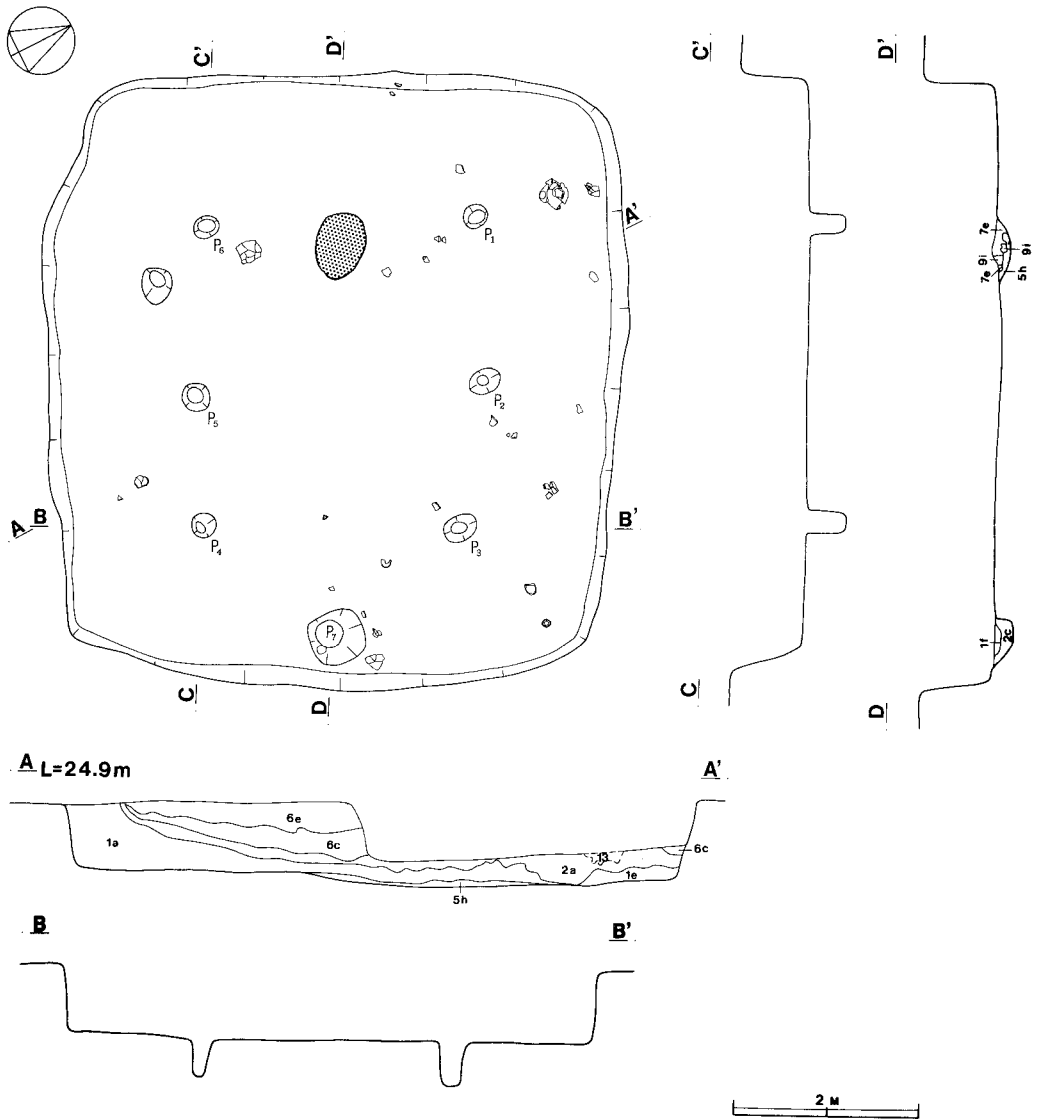
本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第234~236図)

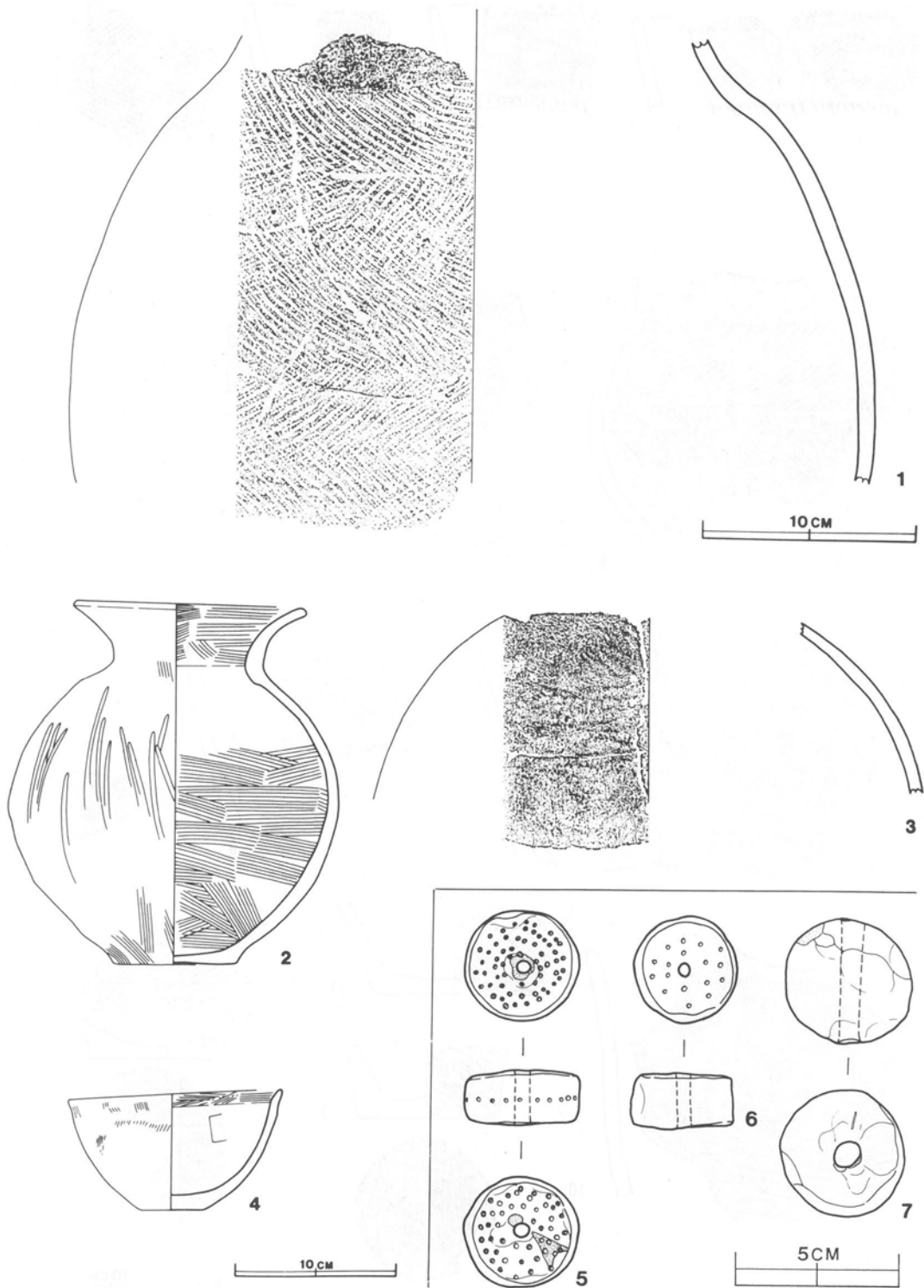
出土遺物解説表 (第234図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-51	1	甕形土器 (弥生)	B 21.8	頸-無文。 胴-格子目文。	内面-ナデ	普通・砂礫・ふ 石英 い褐	胴部 20% 第234図-1
	2	壺形土器 (土師)	A 14.3 B 22.3 C 7.5	口-外反。 口唇部-丸みをわびている。 胴-球状を呈し平底に至る。 胴部中位に最大径をもつ。	口-刷け目調整のあと横 ナデ 外面-刷け目調整 のあと横ナデ、ヘラナデ 胴< 内面-刷け目調整 のあとヘラミガキ	普通・砂粒・橙	90% 第234図-2
	3	甕形土器 (土師)	B 11.3	胴-半球形。 肩-網状文。	外面-ヘラミガキ	やや・砂粒・赤 軟弱 スコ リア	15% 内面-摩滅 第234図-3

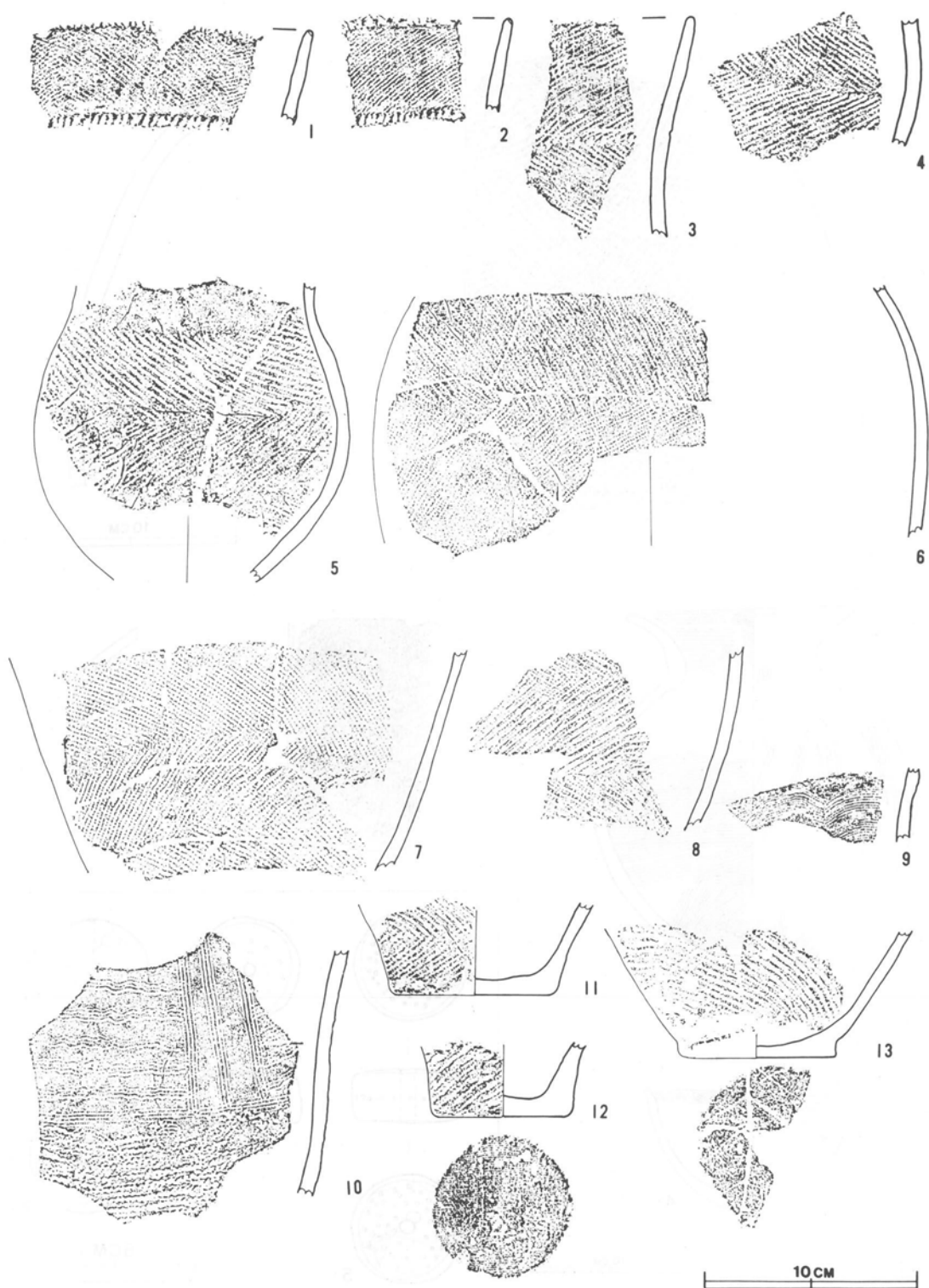
SI-51	4	埴形土器 (土師)	A 13.0 B 7.1 C 4.0	口—外傾し、器厚を減ずる。 体部との境に稜をもつ。 体部—ゆるやかな弧状を描いて平 底に至る。	内面 — 口 — 横ナデのあ あと刷け目調整 その他—ヘラ子 外面 — 口 — 刷け目調整 整のあと横ナデ その他—刷け目調整 整のあとヘラミガキ	普通・砂粒・にぶ 砂礫い橙	90% 第234図- 4
	5	紡錘車	20 g			良好・砂礫・にぶ い橙	100% 第234図- 5
	6	紡錘車	20 g			良好・砂粒・にぶ い橙	100% 第234図- 6
	7	土玉	3.8×3.9 50 g			良好・砂粒・灰黄 褐	100% 第234図- 7



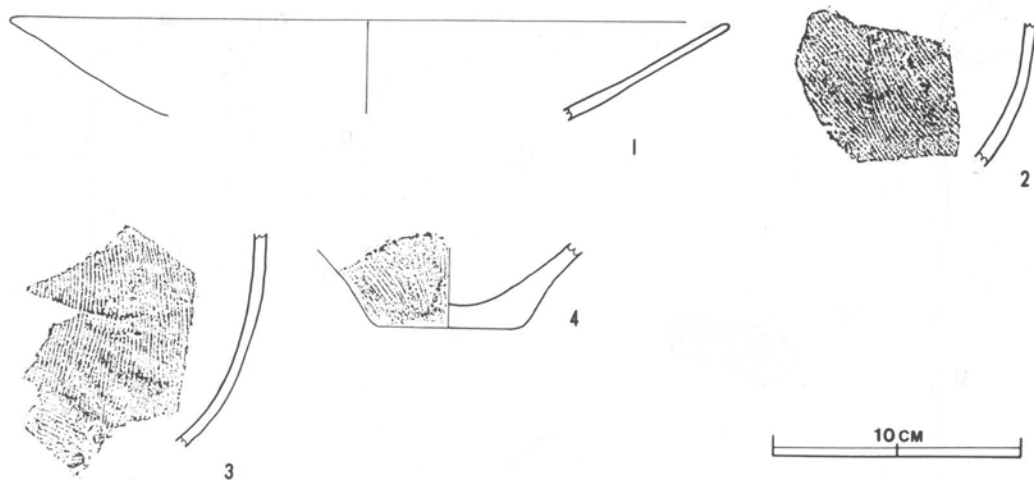
第233図 第51号住居跡実測図



第234图 第51号住居跡出土遺物実測図



第235图 第51号住居跡出土土器拓影图



第236図 第51号住居跡出土土器拓影図

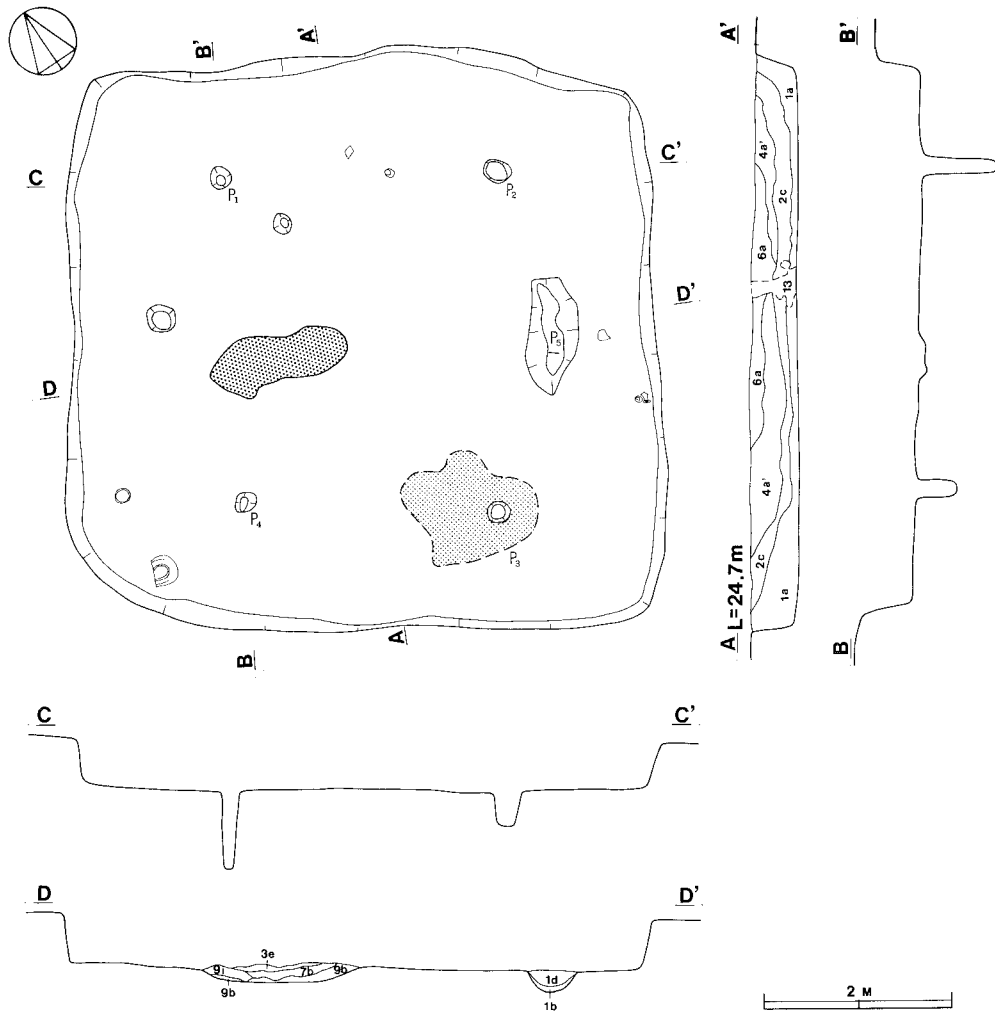
第235図1～13は弥生土器片で、縄文を施文している。1～3は口縁部で、口唇部にキザミを有し、頸部に微隆帯を設け、その上にキザミを施している。5の頸部は無文である。1と3～8は羽状縄文を呈している。9・10は頸部で、9は櫛目の波状文、10は櫛目による3条の懸垂文で区割された間に櫛目の波状文が施文されている。11～13は底部で、11は無文、12は布目痕、13は木葉痕が認められる。

第236図1～4は土師器片である。1は高坏の坏部である。2・3は胴部、4は底部でいずれも刷け目痕がみられる。

第52号住居跡 (第237図)

本住居跡はC4g2調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東部に位置し、北東側6.5mのところに63号住居跡が存在する。

主軸方向はN-62°-Wを指し、長軸6.2m・短軸6.1mの方形を呈しているが、西コーナーが弧状をなしている。壁高は45～50cmを測り、壁は良好な状態ではほぼ垂直に立ちあがっている。床面はやや軟弱であるが平坦をなしている。炉跡は中央よりやや北西側に検出され、床面を約15cm掘り窪めた地床炉で、長径150cm・短径50cm程の長楕円形を呈している。多量の焼土粒子と焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。ピットは7か所検出され、P1～P4は支柱穴でP1とP3は深い。南東壁に位置するP5は貯蔵穴と考えられ、長径120cm・短径50cmの長楕円形を呈し、深さは24cmを測る。褐色土が堆積しており、覆土中から土師器片が数点出土している。住居跡内の覆土は、上層に黒色土・黒褐色土、中層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積しており、ローム粒子



第237図 第52号住居跡実測図

・スコリア・ローム小ブロック等を含み全体的に締りがある。南コーナー付近の床面上に焼土ブロック・焼土粒子・炭化材が1mの範囲内に10cm程堆積していた。

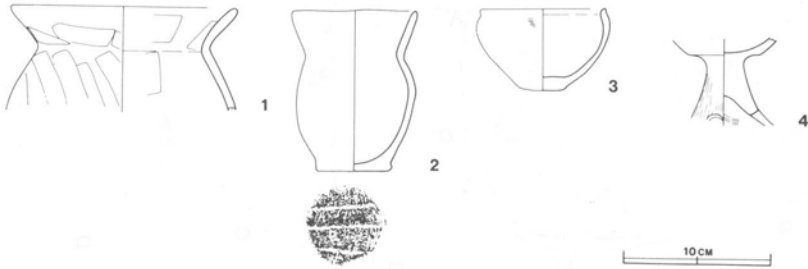
遺物は土師器片を主体にして縄文土器片・弥生土器片が混在して出土しているが、量的には極少量である。出土状況は中央部から南側にかけての出土が多く、しかもほとんどが覆土中からである。南東壁下の床面直上から土師器の高坏，西コーナー付近から土師器の甕形土器の口縁部と半割の塊が検出されている。

本住居跡は，出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

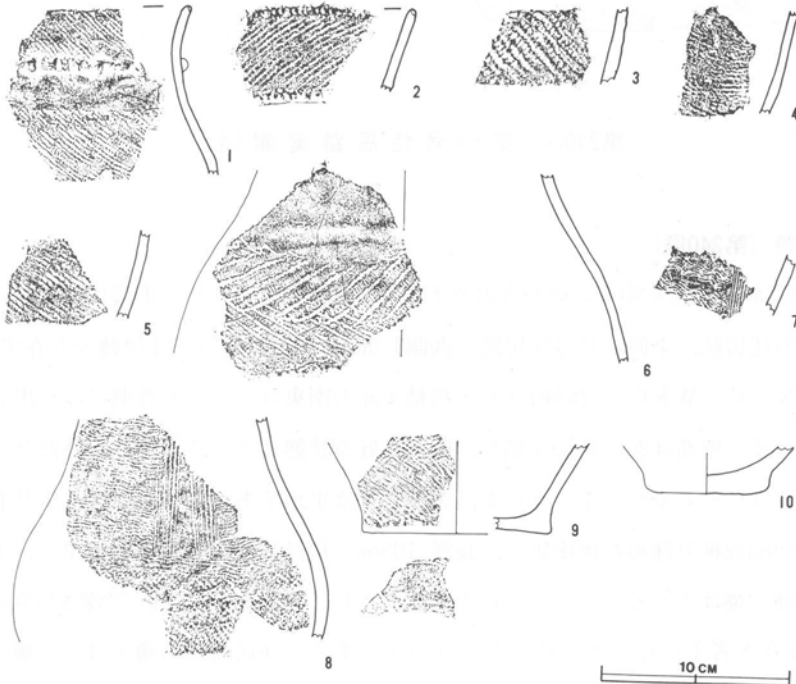
出土遺物（第238・239図）

出土遺物解説表 (第238図)

遺構	番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-52	1	甕形土器 (土師)	A 15.2 B 6.9	頸-「く」の字状。 口唇部-器厚を減ずる。 胴-ゆるやかな膨らみをもつ。	口-内面-横ナデ、 刷け目整形のあと、 ヘラナデ 内面-ヘラナデ 胴<外面-ヘラケズ リ、刷け目調整	普通・砂粒・明赤 スコー リア	口縁部95% 第238図-1
	2	小形 壺形土器 (土師)	A 8.3 B 10.7 C 5.1	頸-外反して立ちあがる。 口-若干内彎する。 胴-ゆるやかな弧状を呈している。 底-木葉痕。	内面-ナデ 外面-ナデ	普通・長石・橙 砂粒	85% 第238図-2
	3	壺形土器 (土師)	A 8.4 B 5.4	口-若干内彎し、口唇部が極くわず か外傾している。 体部-ゆるやかな弧状を呈してい る。 底-やや丸みをおびている。	口-横ナデ 外面-ナデ	やや・砂礫・にぶ 軟弱 石英・橙	85% 内面-摩滅 が厳しい 第238図-3
	4	器台形土器 (土師)	B 5.7	主柱-外傾。 裾部-大きく開く。 孔-3個を有する。	脚部-刷け目調整	やや・砂粒・橙 軟弱	30% 第238図-4

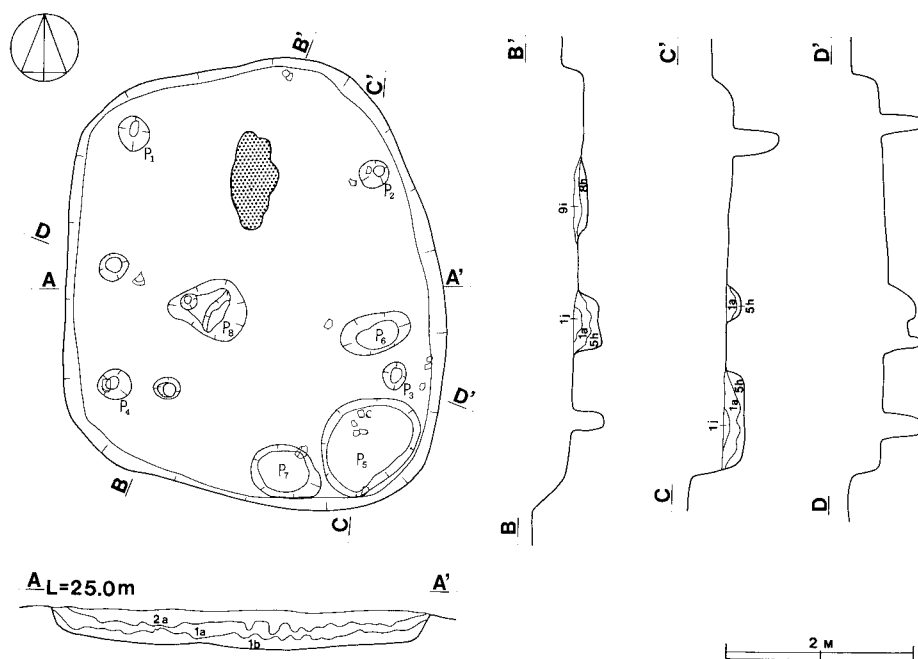


第238図 第52号住居跡出土遺物実測図



第239図 第52号住居跡出土土器拓影図

第239図は弥生土器片である。1～5は縄文が施文されている。1・2は口唇部にキザミ，頸部に粘土紐を貼付し，その上にキザミを施している。1は瘤状文を貼付し，頸部は無文帯を呈している。6は頸部は無文帯，胴部に羽状縄文を施文している。7・8は頸部で櫛目による懸垂文を施し，区割された間に櫛目の波状文を配している。9・10は底部で，9には木葉痕が認められる。



第240図 第53号住居跡実測図

第53号住居跡（第240図）

本住居跡はC3a0調査区を中心に確認されたもので，遺跡中央よりやや東部に位置し，北側1mのところには54号住居跡，東側に45号住居跡，西側3.5mのところには57号住居跡が存在する。

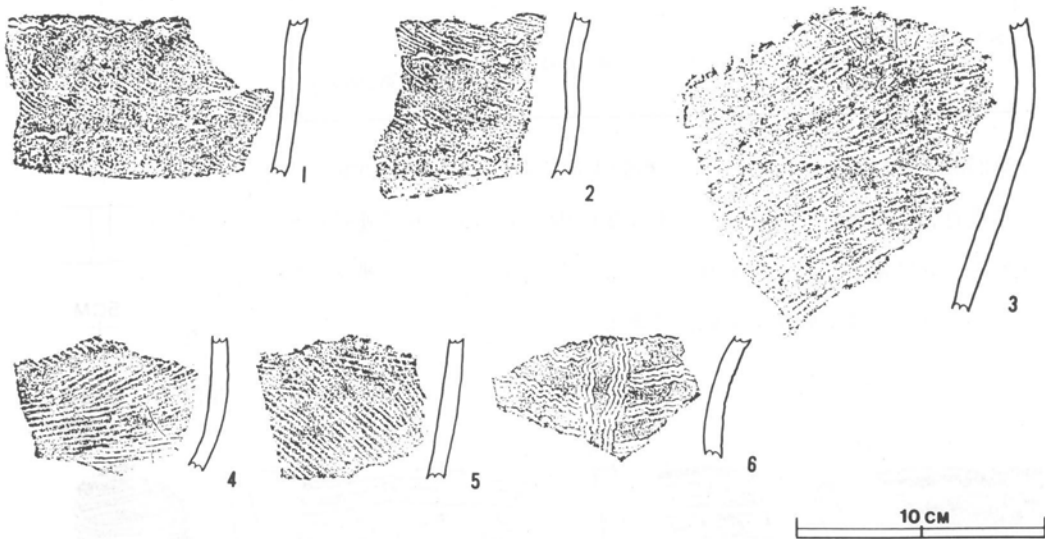
主軸方向はN - 3° - Wを指し，長軸4.6m・短軸4mの南東コーナーが外側にはり出した隅丸形状を呈している。壁高は20～40cmを測り，壁は良好な状態でややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床質はロームでやや柔らかいが，床面はほぼ平坦である。炉跡は中央より北側に検出され，床面を12cm程掘り窪めた地床炉で，長径105cm・短径45cmの長楕円形を呈し，多量の焼土を含み炉床は硬く焼けている。ピットは11か所検出され，P₁～P₄が主柱穴で深さは50cm前後を測る。P₅は貯蔵穴と考えられ，P₆～P₈は攪乱ピットである。住居跡内の覆土は，上層に暗褐色土，中・下層に褐色土が自然堆積しており，ローム粒子とローム小ブロックを含み締りは強く，下層

は粘性を帯びている。

遺物の出土は非常に少なく、弥生土器片等が15点出土しただけである。しかもほとんど覆土中からのもので、床面からの出土はわずかに弥生土器の胴部片1点のみである。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。

出土遺物 (第241図)



第241図 第53号住居跡出土土器拓影図

1・2は「S」字状結節文が施されており、1～5には縄文が施文されている。6は3本の平行沈線で、波状文と懸垂文を施文している。6は東中根式に比定される。

第54号住居跡 (第244図)

本住居跡はB3j₀調査区を中心に確認されたもので、東側が55号住居跡と重複しており、南側に53号住居跡が存在する。重複遺構の新旧関係は、本住居跡が55号住居跡より新しい。尚、北西側は民地のため調査を実施できなかった。

長径方向はN - 2° - Eを指し、長径5.4m・短径4.4mの南北方向が長い楕円形状を呈しているものと思われる。残存状況から壁高は5～30cmを測り、南壁はグリッド掘り下げによって全体的に低い。壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床質はロームで、床面はほぼ平坦であるが、中央から北側にかけて約10cm程低くなっている。炉は有さない。ピットは12か所検出され、深さは25～100cmを測る。支柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、上・中層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックを含み若干粘性を帯び、縮りがある。

遺物は縄文土器片10点が北側と西側の覆土中から出土しているだけである。

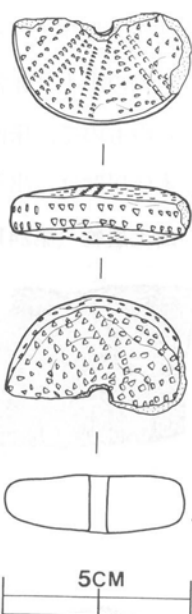
本住居跡の時期決定には出土遺物も少なく問題はあるが、縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第242・243図)

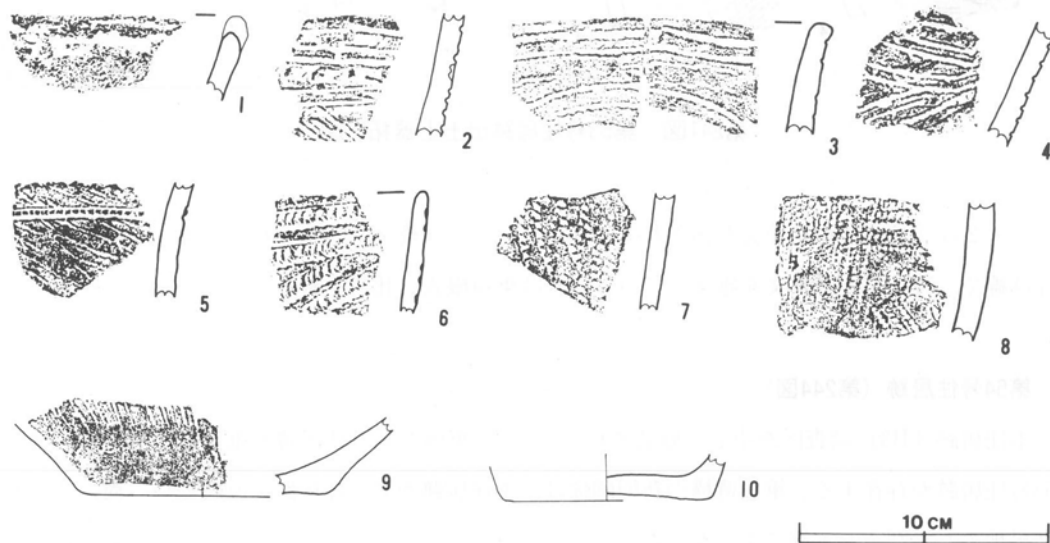
出土遺物解説表 (第242図)

遺構	番号	器種	重量(g)	焼成・胎土・色調	備考
S I -54	1	紡錘車	20	普通・砂粒・にぶい黄褐	50% 第242図-1

第243図1は輪積痕が認められる粗製土器である。2は平行沈線文の上に半截竹管文を施している。3・4は変形爪形文、5・6は連続爪形文を配し、5は地文に燃糸文を有している。7は貝殻文、8は縄文を施している。9・10は平底を呈す底部である。



第242図 第54号住居跡
出土遺物実測図

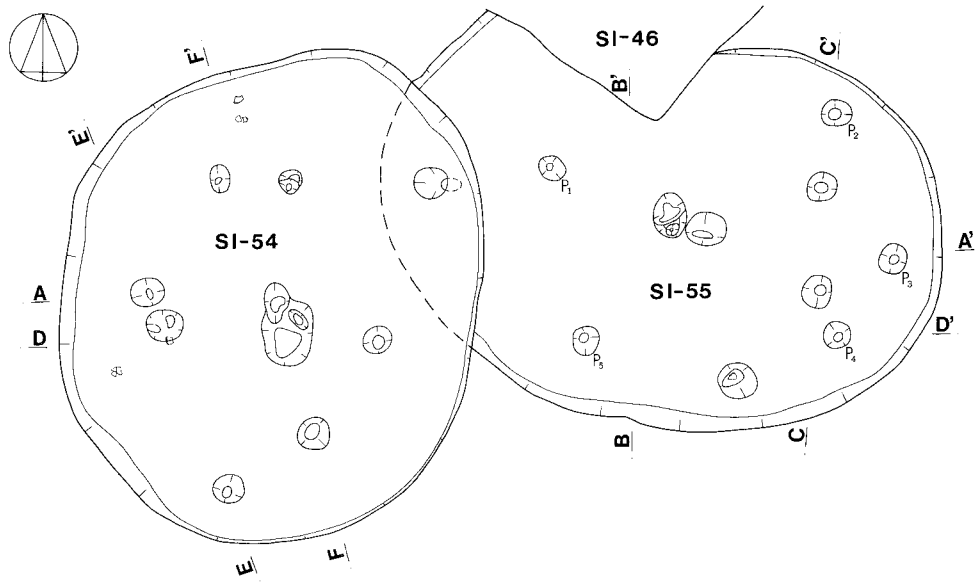


第243図 第54号住居跡出土土器拓影図

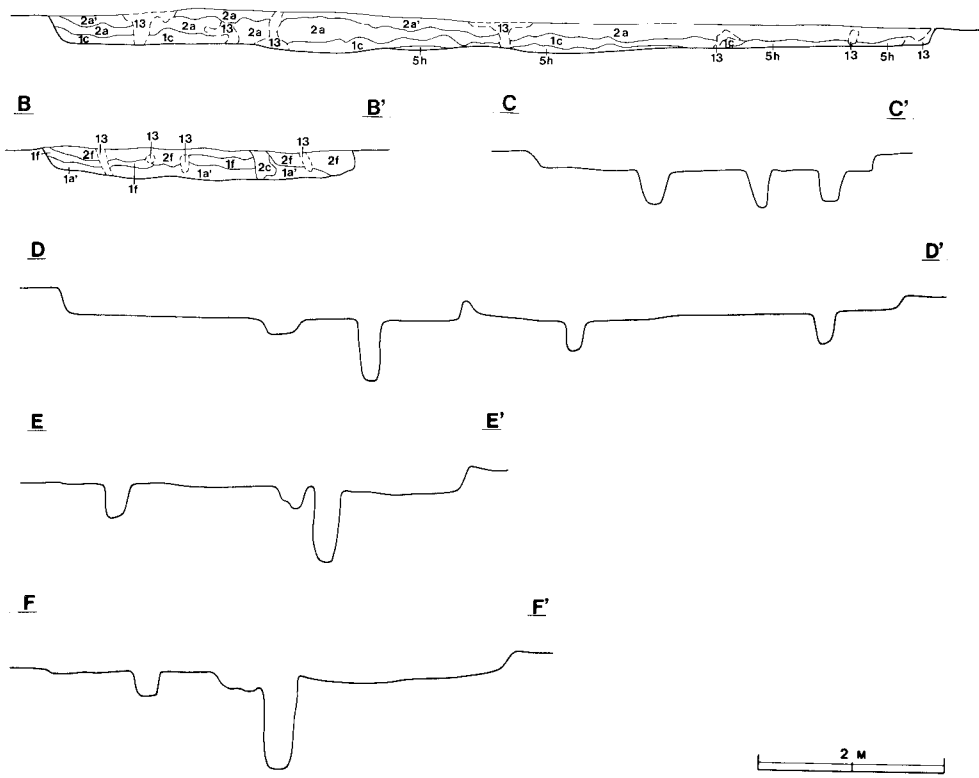
第55号住居跡 (第244図)

本住居跡はB4j1調査区を中心に確認されたもので、北側が64号住居跡、西側が54号住居跡と重複しており、南東側約5mのところには45号住居跡が存在する。重複遺構の新旧関係は、本住居跡が最も古く、46号住居跡が最も新しい。

長径方向はN - 85° - Wを指し、長径約6m・短径約4mの東西方向が長い楕円形を呈している。



$A_L = 25.2m$

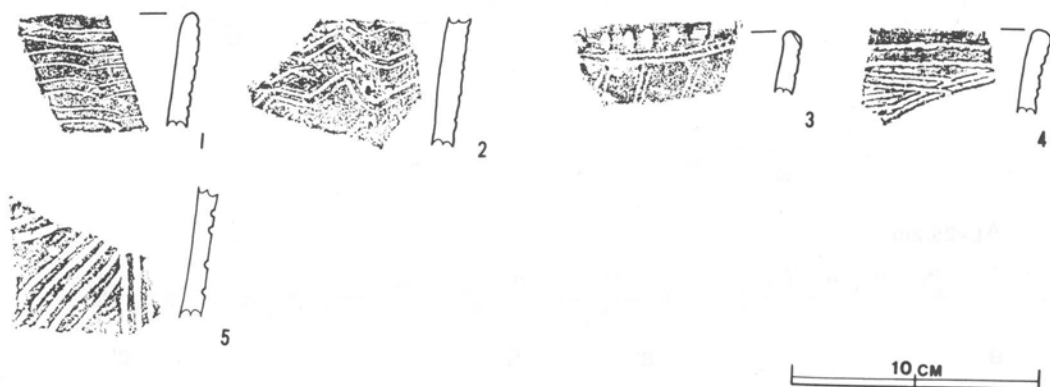


第244图 第54・55号住居跡実測図

壁高は10~20cmを測り、壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床質はロームで、床面は北西部がやや低くなっているが硬い。炉は有さない。ピットが10か所検出され、いずれも直径30~40cm・深さは27~40cm程で比較的浅い。P1~P5は支柱穴と考えられる。住居跡内の覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土と明褐色土が自然堆積しており、多量のローム粒子を含み締りがある。遺物は縄文土器片が数点壁際から出土しているだけである。

本住居跡の時期を決定するには出土遺物も少なく問題はあるが、重複遺構との新旧関係やごくわずかな出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第245図)



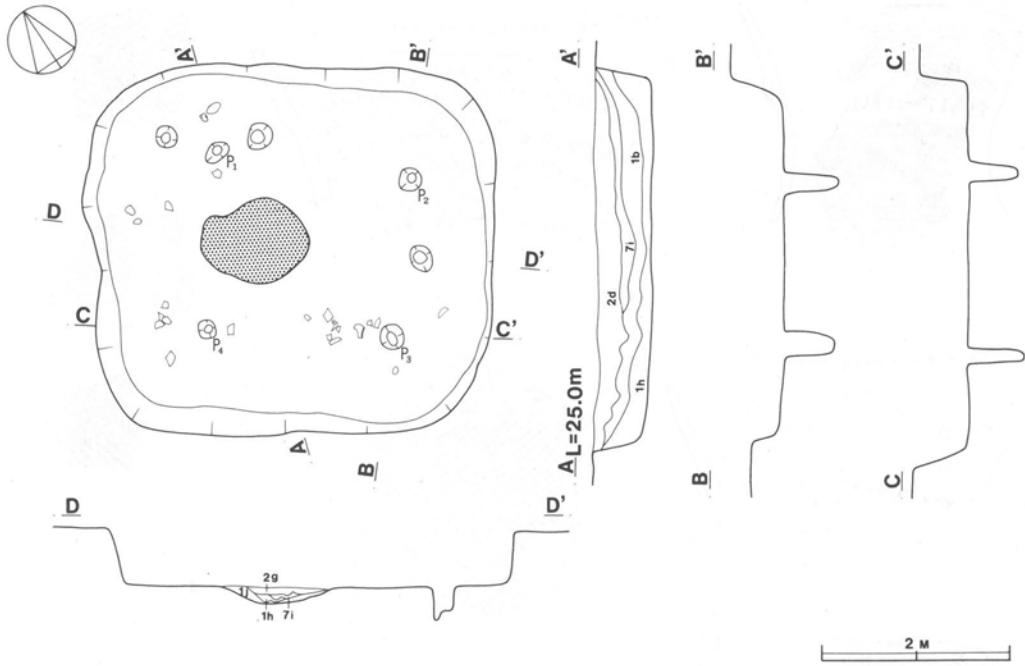
第245図 第55号住居跡出土土器拓影図

1~3は半截竹管具による平行沈線文を有している。2は波状文の上に半截竹管文、3は口唇部にキザミを施している。4は口縁部で、変形爪形文を有し、頸部に平行沈線文を配している。5は地文に縄文を有し、その上に太目の沈線文を施している。

第56号住居跡 (第246図)

本住居跡はC3d₀調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央よりやや東部に位置し、東側10mのところには63号住居跡、南西側6mのところには67号土壇が存在する。

主軸方向はN-55°-Wを指し、長軸4.2m・短軸3.9mの北西辺がやや外側にはり出した隅丸形状を呈している。壁高は25~55cmを測り、壁は70~80°の角度で外傾して立ちあがっている。床質はロームで、床面は踏み固められており硬く平坦である。炉跡は中央よりやや北西側に検出され、床面を15cm程掘り窪めた地床炉で、長径115cm・短径90cmの楕円形を呈し、暗赤褐色の焼土を含み炉床は礁く焼けている。ピットは7か所検出され、直径20~25cm・深さ20~60cmを測り、P1~P4は支柱穴と考えられる。住居跡内の覆土は、上層にローム粒子と多量の焼土粒子を含む暗褐色土、中層にレンガ状に焼けた焼土ブロックを含む暗褐色土、下層にローム・粘土を含む褐色



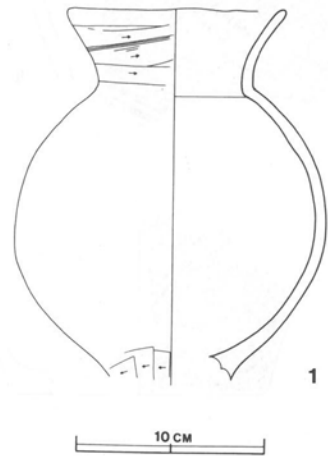
第246図 第56号住居跡実測図

土が堆積しており、いずれの層も締りがある。

遺物は縄文土器片・弥生土器片・土師器片等が混在して出土しているが、量的には少ない。出土状況は中央から西側と南側にかけての出土が多く、特に西側からは床面に密着した状態で土師器の壺形土器が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

出土遺物 (第247・248図)

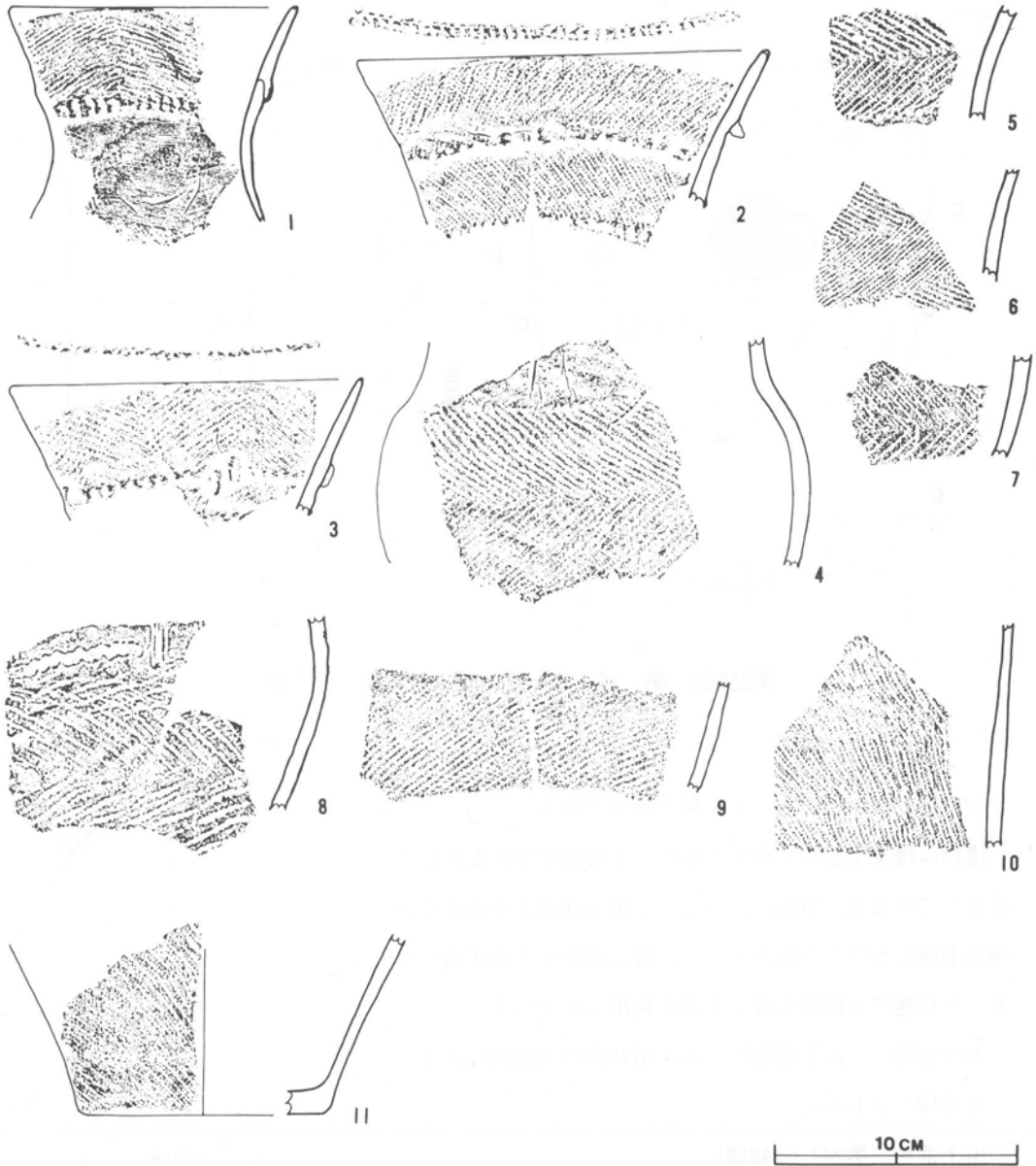


第247図 第56号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第247図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-56 1	壺形土器 (土師)	A 11.6 B 19.4	口-頸部から外傾して立ちあがり口辺部がやや内彎ぎみ。最大径は胴部中位にもつ。胴-扁平な球形を呈し底部に至る。底-「く」の字状。	口<内面-横ナデ 外面-ヘラナデ	やや・砂礫・にぶ 軟弱 雲母 い橙	50% 第247図-1

第248図は弥生土器片であり、いずれも縄文を施文している。1~3は複合口縁を呈し、その下端にキザミを施し、2・3には瘤状貼付文を配している。1の頸部には櫛目による横線文が施されている。4~8は羽状縄文を呈している。11は無文の底部である。



第248図 第56号住居跡出土土器拓影図

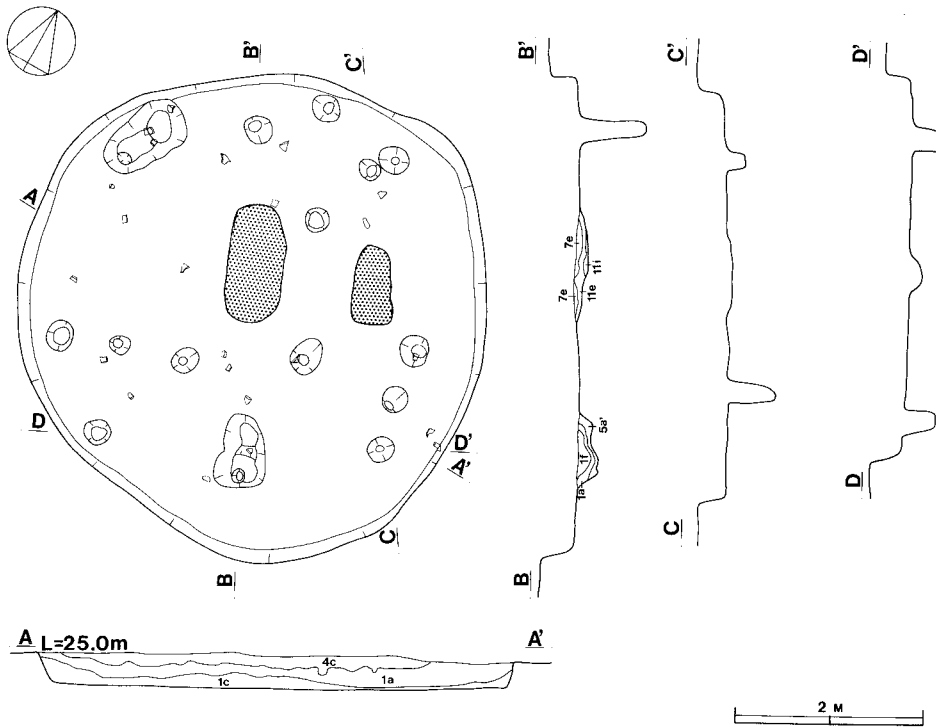
第57号住居跡 (第249図)

本住居跡はC3b3調査区を中心に確認されたもので、遺跡のほぼ中央部に位置し、北東側に54号住居跡、東側に53号住居跡が存在する。

平面形状は、直径5 m前後の北東側がやや直線的な円形状を呈している。壁高は25~35cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は平坦である。炉跡は2か所検出され、便宜上、中央よりやや北西側に位置する炉をF1号、中央より北東側に位置する炉をF2号と仮称しておく。F1

号は長径 123cm・短径60cmの長楕円形を呈し、床面を約10cm掘り窪めた地床炉で、炉床は硬く焼けている。F2号は長径85cm・短径40cmの長楕円形を呈し、床面を約5cm掘り窪めた地床炉で焼土を含んでいる。柱穴は15か所検出され、深さは21～68cmを測る。これらの炉の在り方や、配列・大きさに規則性のない多くのピットの在り方などから、本住居跡は建て替えか増築が行われたものと思われる。住居跡内の覆土は、土層に黒褐色土、下層に褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロックを含み締りはなくサラサラしている。

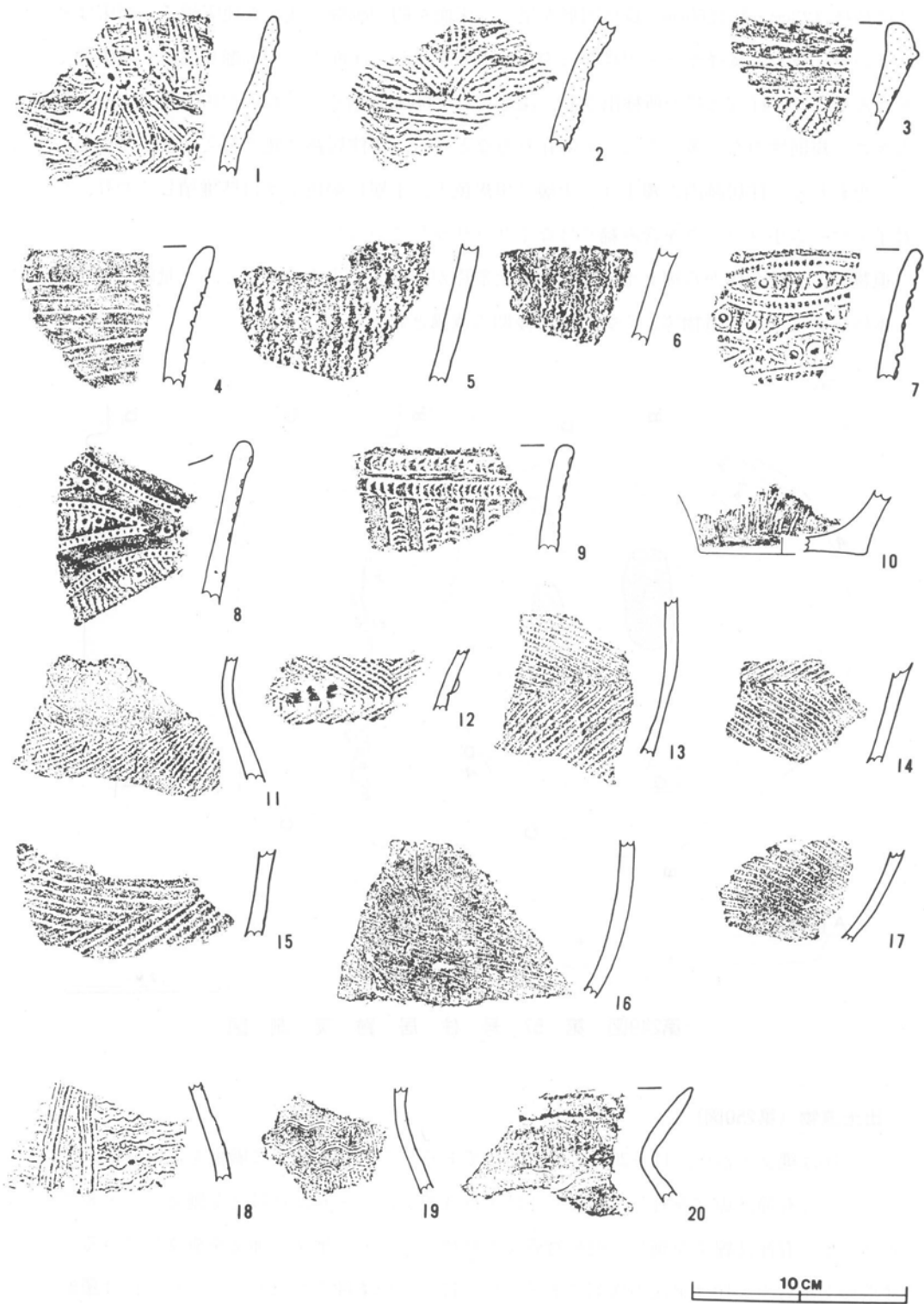
遺物は住居跡全体から縄文土器片・弥生土器片が混在して出土しているが、量的には少ない。本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。



第249図 第 57 号 住 居 跡 実 測 図

出土遺物 (第250図)

1～10は縄文土器片、11～20は弥生土器片である。1～3は胎土に繊維を含み、1・2に沈線文、3には有節沈線文を有している。4は平行沈線文、5・6は貝殻文を施文。7・8は半截竹管具による有節沈線文を施し、円形竹管文を押捺している。地文に縄文を施文している。9は連続爪形文を有す。10は平底の底部である。11～17は付加条縄文を施文しており、12は頸部に小瘤を貼付している。18・19は楯目による懸垂文を施し、区割された間に楯目の波状文を配している。20は無文の口縁文である。



第250图 第57号住居跡出土土器拓影图

第58号住居跡（第251図）

本住居跡はC3e3調査区を中心に確認されたもので、遺跡の中央部に位置し、北西側が59号住居跡と重複しており、西側に2号方形周溝状遺構と60号住居跡が存在する。

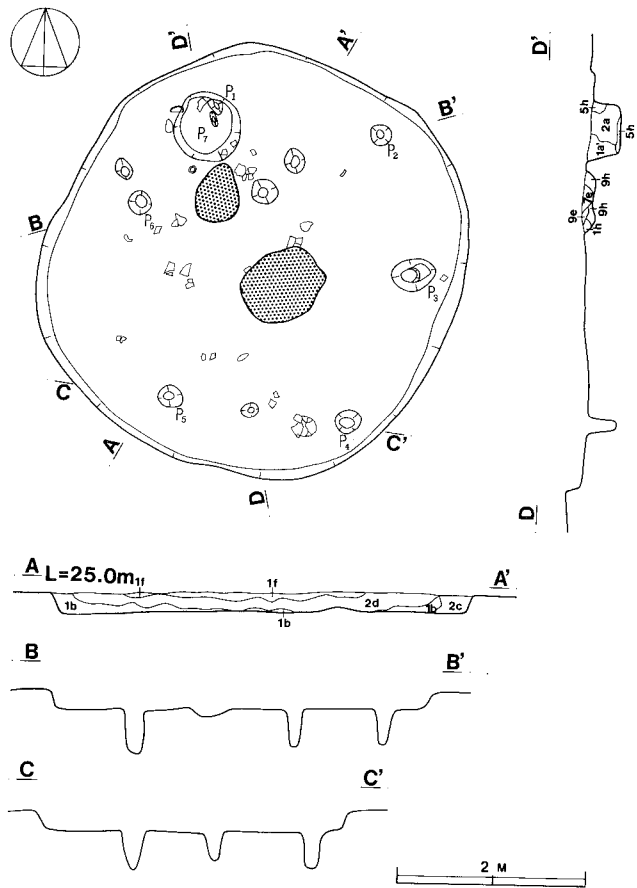
平面形状は、直径4.5m前後の北東側がやや直線的な円形状を呈している。壁高は5～20cmを測り、壁は北西壁が低いが全体的にややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は南側に向かって傾斜しているがほぼ平坦である。炉跡は2か所検出され、便宜上、中央に位置する炉をF1号、中央よりやや北側に位置する炉をF2号と仮称しておく。F1号は長径85cm・短径70cmの楕円形、F2号は長径62cm・短径45cmの卵形を呈し、いずれも床面を約10cm掘り窪めた地床炉で、多量の焼土粒子と焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。ピットは11か所検出され、深さは28～60cmを測る。P1～P6が主柱穴と考えられる。P7は攪乱ピットである。住居跡内の覆土は、褐色土と暗褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含と極少量の炭化粒子み各層とも柔らかい。また、中央よりやや北側の位置に40cm範囲で貝の散布がみられた。床面より14cm程浮いた状態で、厚さ6cmぐらい堆積しており、貝は「ヤマトシジミ」である。

遺物は縄文土器片が、ほとんど中央部から北側にかけて出土している。北側と中央部床面から縄文の深鉢形土器が検出されている。

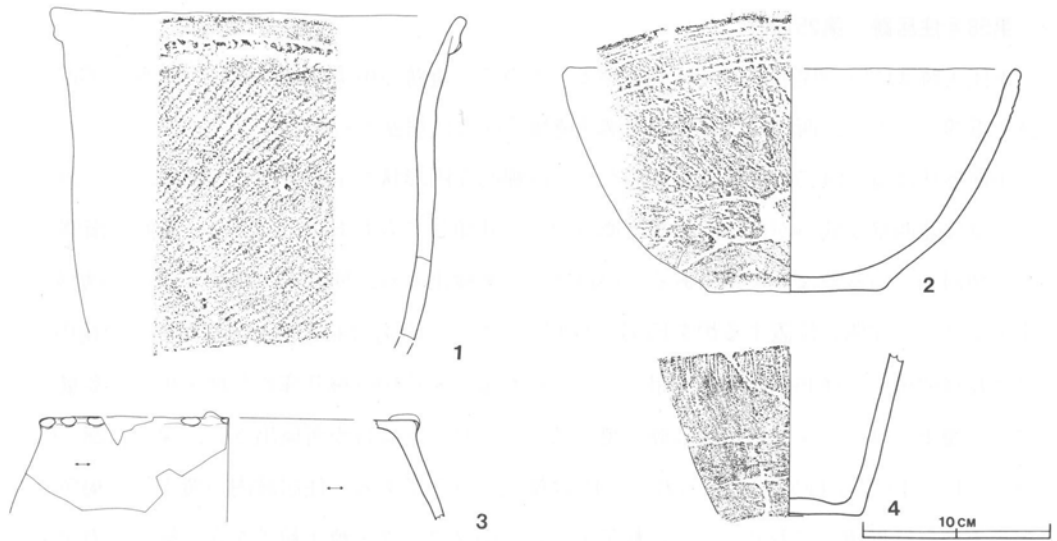
本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物（第252・253図）

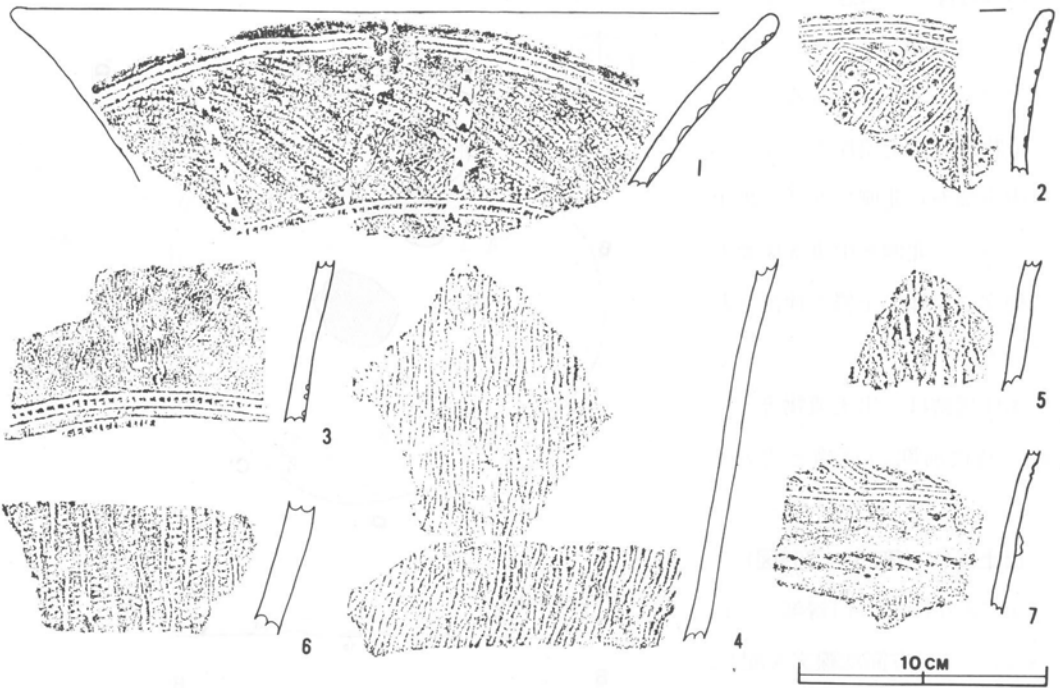
第253図1・2は口縁部で、口縁部に沿って有節沈線文を配し、1は半截竹管具による刺突文を縦位に施している。地文に縄文を有す。2は頸部に平行沈線文を施し、その上に円形竹管文を押捺している。地文に撚糸文を有す。3は有節沈線文を配し、



第251図 第58号住居跡実測図



第252図 第58号住居跡出土遺物実測図



第253図 第58号住居跡出土土器拓影図

地文に撚糸文を有す。4は撚糸文、5は貝殻文、6は縄文、7は平行沈線文を施している。

出土遺物解説表(第252図)

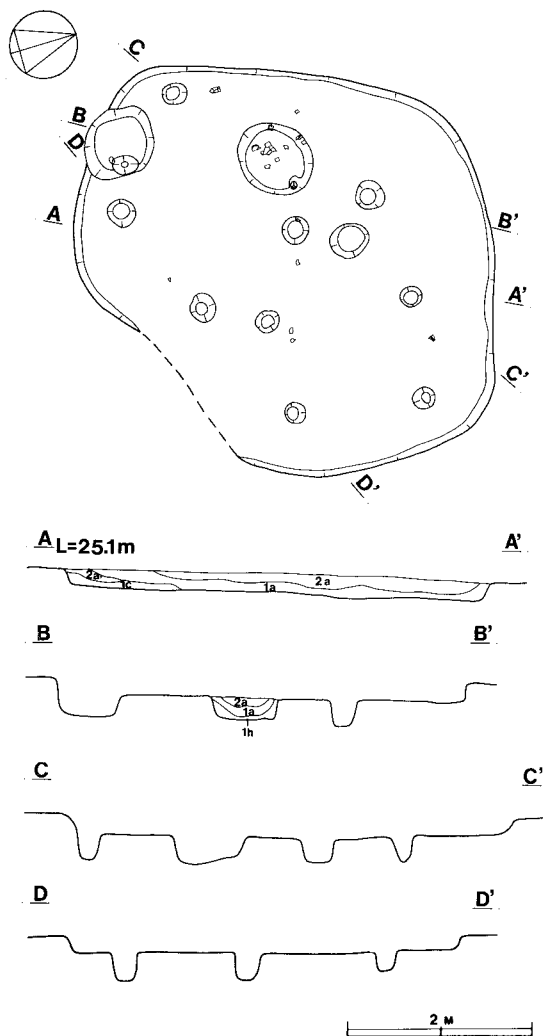
遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-58	1	深鉢形土器 (縄文)	A 22.1 B 17.2	複合口縁の下端部にキザミ目を有す。	内面-ナデ	普通・砂礫・褐灰 砂粒	60% 第252図-1
	2	鉢形土器 (縄文)	A 23.8 B 11.8 C 9.1	細い貝殻文を地文に口縁部に連続 爪形文。底-無文。平底。	内面-ナデ	普通・砂粒・灰褐	50% 第252図-2
	3	特殊器形 (縄文)	A 20.0 B 5.1		内面 外面 >ヘラミガキ	良好・砂礫・赤褐	第252図-3
	4	深鉢形土器 (縄文)	B 8.2 C 7.5	細い沈線を施す。	内面-ナデ 外面(底部)-ヘラミ ガキ	やや・砂粒・橙 軟弱 砂礫	底部 80% 第252図-4

第59号住居跡(第254図)

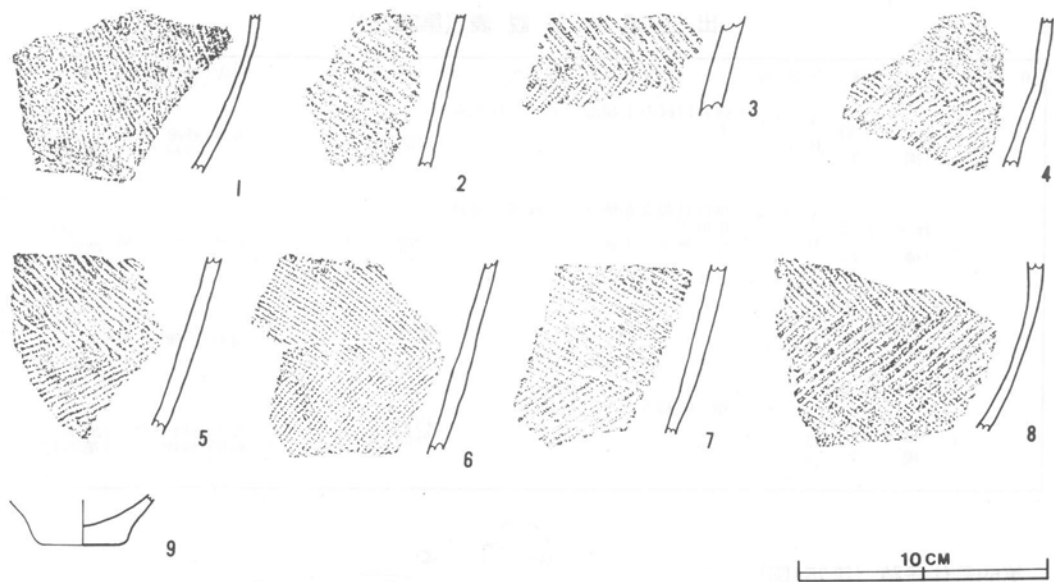
本住居跡はC3d2調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央部に位置し、南東側が58号住居跡と重複しており、西側に3号方形周溝状遺構と64号土壌が隣接して存在する。重複遺構の新旧関係は、本住居跡が新しい。

主軸方向はN-15°-Eを指し、長軸4.4m・短軸4.2mの東側が曲線的な不整隅丸方形を呈している。壁高は15~20cmを測り、壁は70~80°の角度で外傾して立ちあがっている。床面は硬く、平坦である。炉は有さない。ピットは13か所検出され、深さ20~55cmを測る。住居跡内の覆土は、上層にローム粒子を含む暗褐色土、下層に少量のローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土が自然堆積している。

遺物は弥生土器片が極少量出土している。覆土中からは縄文土器片の出土が数点みられる。



第254図 第59号住居跡実測図



第255図 第59号住居跡出土土器拓影図

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。

出土遺物 (第255図)

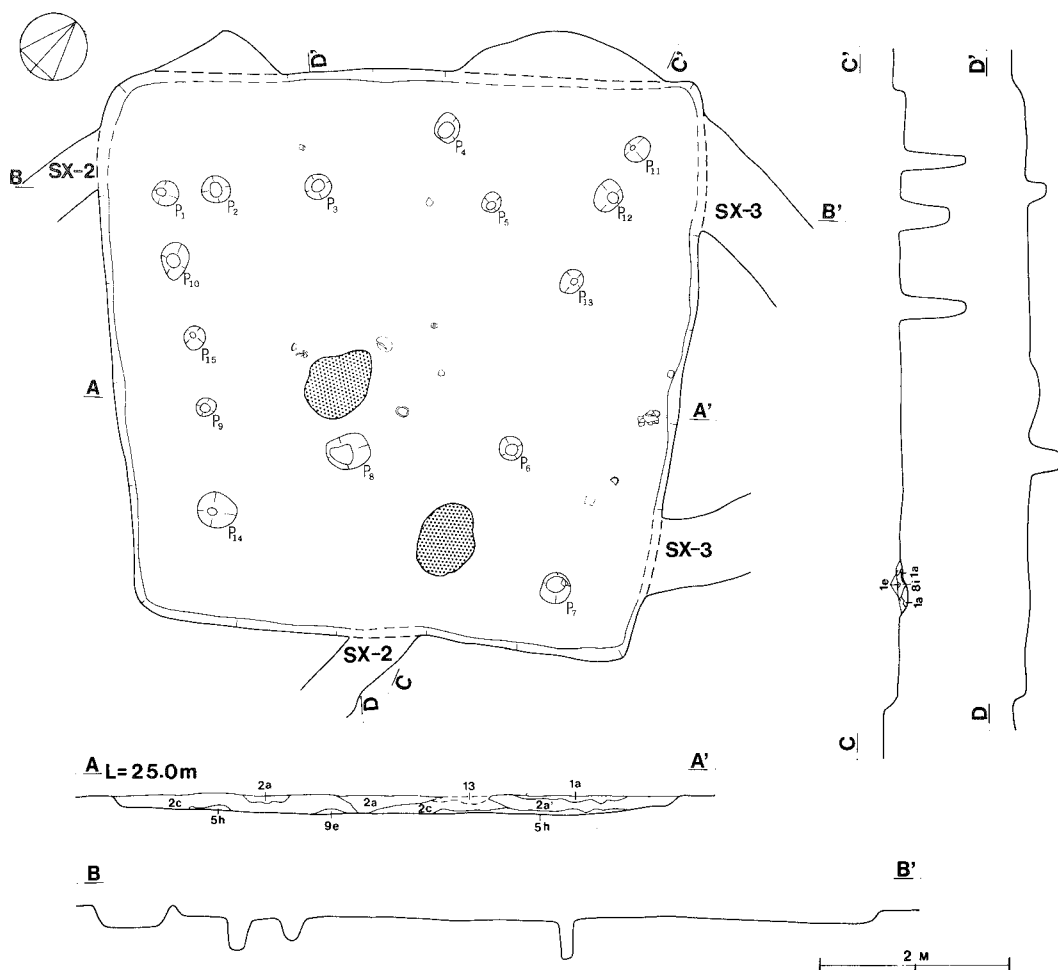
1・2は斜縄文、3～8は羽状縄文を施文している。9は無文の底部である。これら土器群は、十王台式土器に比定される。

第60号住居跡 (第256図)

本住居跡はC2d₀調査区を中心に確認されたもので、2号・3号方形周溝状遺構と重複しており、東側に58・59号住居跡が存在する。重複遺構の新旧関係は、本住居跡が最も古い。

主軸方向はN-37°-Wを指し、軸長6mの北西辺が南東辺より約1m長い不整形を呈している。壁高は15cm前後で、壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は平坦であるが柔らかい。炉跡は南側に2か所検出され、便宜上、中央よりごくわずかに南西側に位置する炉をF₁号、中央よりやや南東側に位置する炉をF₂号と仮称しておく。F₁号は長径85cm・短径60cmの楕円形、F₂号は長径80cm・短径55cmの楕円形を呈し、いずれも床面を約10cm掘り窪めた地床炉で、F₁号はローム粒子・焼土粒子を含み、F₂号はローム粒子・焼土ブロックを含んでいる。柱穴は15か所検出され、P₁～P₁₀は深さ20～40cmと比較的浅く、P₁₁～P₁₅は深さ55～88cmと深い。主柱穴は不明である。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土と床面付近に明褐色土が堆積している。

遺物は中央部から東側にかけて、縄文土器片が極少量出土している。床面からの出土はほとんど



第256図 第60号住居跡実測図

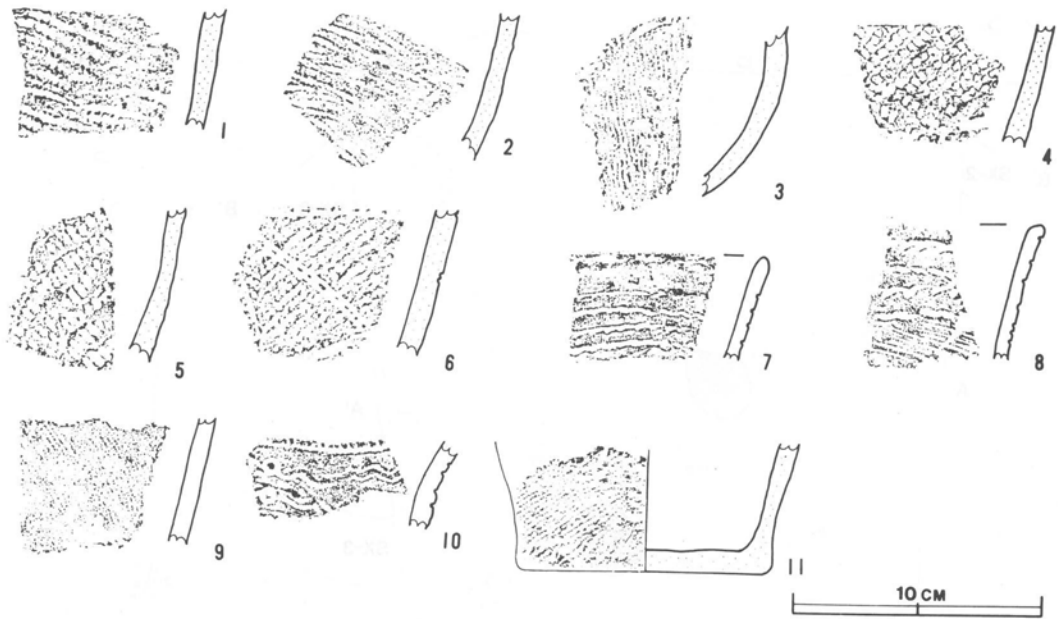
どなく覆土中からの出土である。しかしこれらの土器群は、黒浜式や浮島式に比定されるので、本住居跡は縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第257図)

1～6は胎土に繊維を含み、縄文を有している。6はその上に有節沈線文を配す。7・8は変形爪形文、9は縄文を施している。10は連続爪形文を有し、その下に半截竹管具による波状文を施し、円形竹管文を押捺している。11は平底を呈す底部で胎土に繊維を含み、胴下半部に縄文を施している。

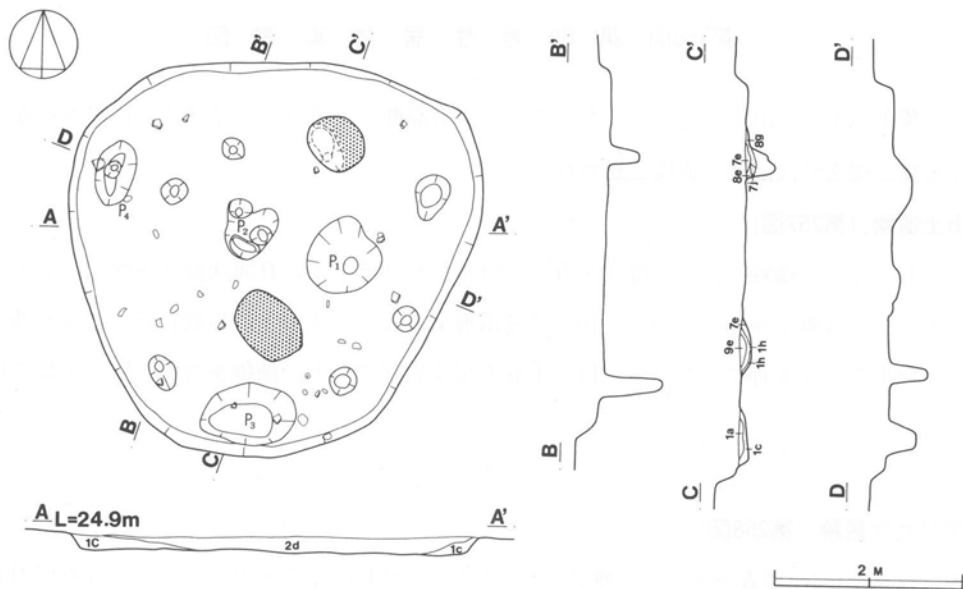
第61号住居跡 (第258図)

本住居跡はC2c9調査区を中心に確認されたもので、東側約2.5mのところ3号方形周溝状遺構、南西側に62号住居跡、西側に65号土壌が存在する。



第257図 第60号住居跡出土土器拓影図

平面形状は、直径4.3m前後の不整形円形を呈している。壁高は10~20cmを測り、北壁が低い。壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面はほぼ平坦であるが、北側に向かってわずかに傾斜している。炉跡は2か所検出され、便宜上、中央よりやや南側に位置する炉をF1号、北東側に位置する炉をF2号と仮称しておく。F1号は長径80cm・短径55cmの楕円形、F2号は長径60cm

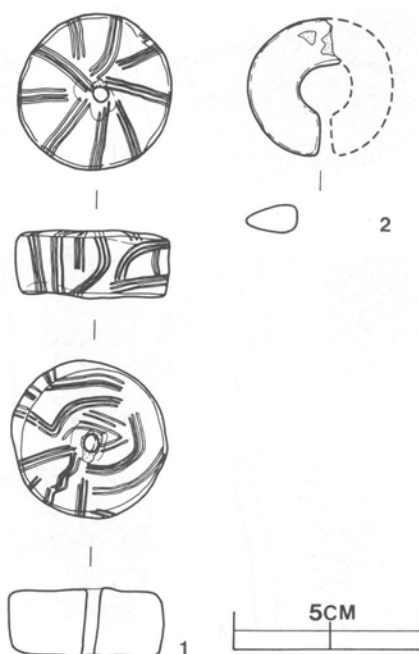


第258図 第61号住居跡実測図

・短径55cmのほぼ円形を呈し、いずれも床面を13cm程掘り窪めた地床炉で、焼土粒子を多量に含み炉床は硬く焼けている。床面に柱穴が6か所検出され、深さは25~64cmを測り、いずれも支柱穴と考えられる。またP1・P2は木の根による攪乱をうけており、P3・P4は貯蔵穴と思われる。住居跡内の覆土は、色調から大きく2層に分かれ、中央に暗褐色土、壁際に褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・ローム小ブロック等を含み締りがある。

遺物は縄文土器片と弥生土器片が混在して出土しており、特に南側からの出土が多い。南側の覆土中から紡錘車、南壁下から玦状耳飾りが検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。



第259図 第61号住居跡出土遺物実測図

出土遺物 (第259・260図)

出土遺物解説表 (第259図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-61	1	紡錘車	4.1×1.7 40g			普通・砂粒・橙	100% 第259図-1
	2	玦状耳飾り (石製品)	3.6×1.4 7.5g				45% 第259図-2

第260図は縄文土器片である。1~6は胎土に繊維を含み、縄文を施文している。6はその上に平行沈線文を施している。7~9は平行沈線文を配しており、9は地文に撚糸文を有す。10は有節沈線文、11・12は連続爪形文、13は撚糸文を施文している。

第62号住居跡 (第261図)

本住居跡はC8ds調査区を中心に確認されたもので、北側1mのところと65号土城、北東1mのところと61号住居跡、東側約3mのところと2号方形周溝状遺構が存在する。

主軸方向はN-40°-Eを指し、長軸5.4m・短軸5.1mの各辺ともやや丸みを帯びた不整隅丸方形を呈している。壁高は40~50cmを測り、壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は硬く、ほぼ



第260図 第61号住居跡出土土器拓影図

平坦である。炉跡は北側に検出され、床面を約20cm掘り窪めた地床炉で、長径 100cm・短径80cmの楕円形状を呈し、赤褐色の焼土ブロックを含み炉床は硬く焼けている。ピットは16か所検出され、P₁～P₆が支柱穴で、P₇は貯蔵穴と考えられる。P₈とP₉は現代に掘られたものである。住居跡内の覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土と褐色土が堆積している。

遺物は中央部を中心にして多量の縄文土器片が出土している。しかし、床面からの出土は少なく、ほとんどが覆土中からの出土である。これらは住居跡が廃絶してから投棄されたものであろう。

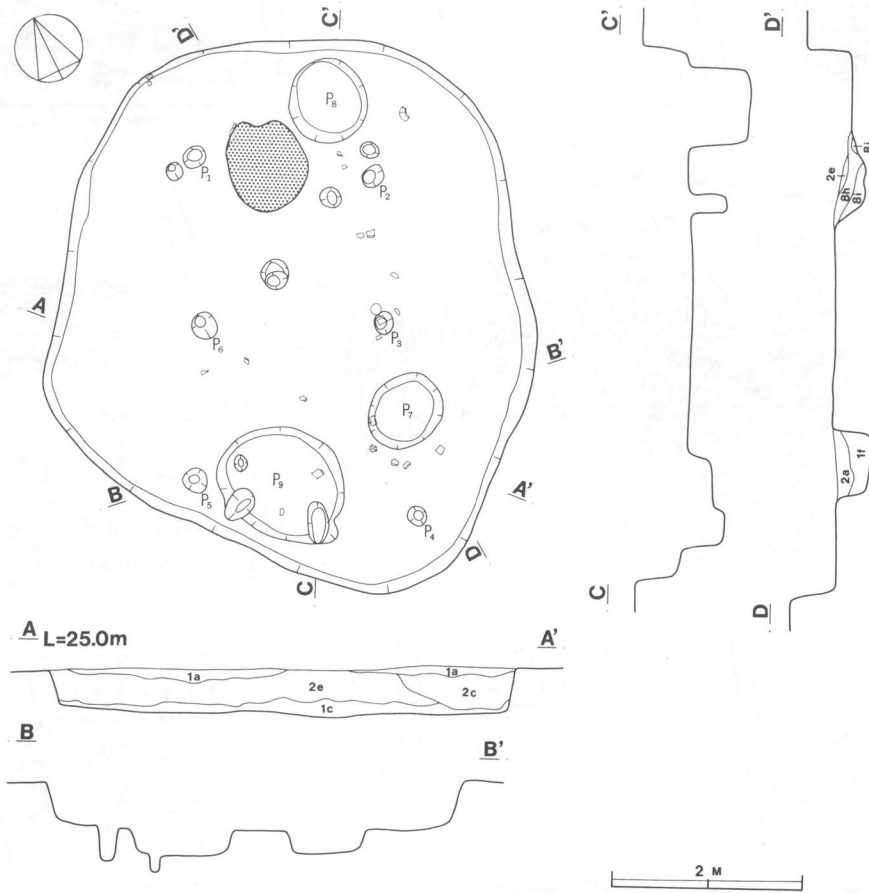
本住居跡は、出土遺物等から縄文時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第262～265図)

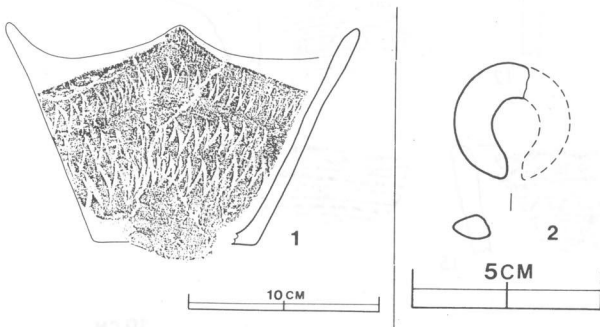
出土遺物解説表 (第262図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-62	1	壺形土器 (縄文)	A (28.0) B 28.5 C (16.5)	波状口縁を呈し、貝殻によるジグザク波状文を呈している。	内面ヘラナデ	普通・砂礫・明赤褐	50% 第262図-1

SI-62	2	块状耳飾	(2.0) × 3.0 2.5 g		普通・砂粒・明黄 褐	50% 第262図-2
-------	---	------	-------------------------	--	---------------	----------------

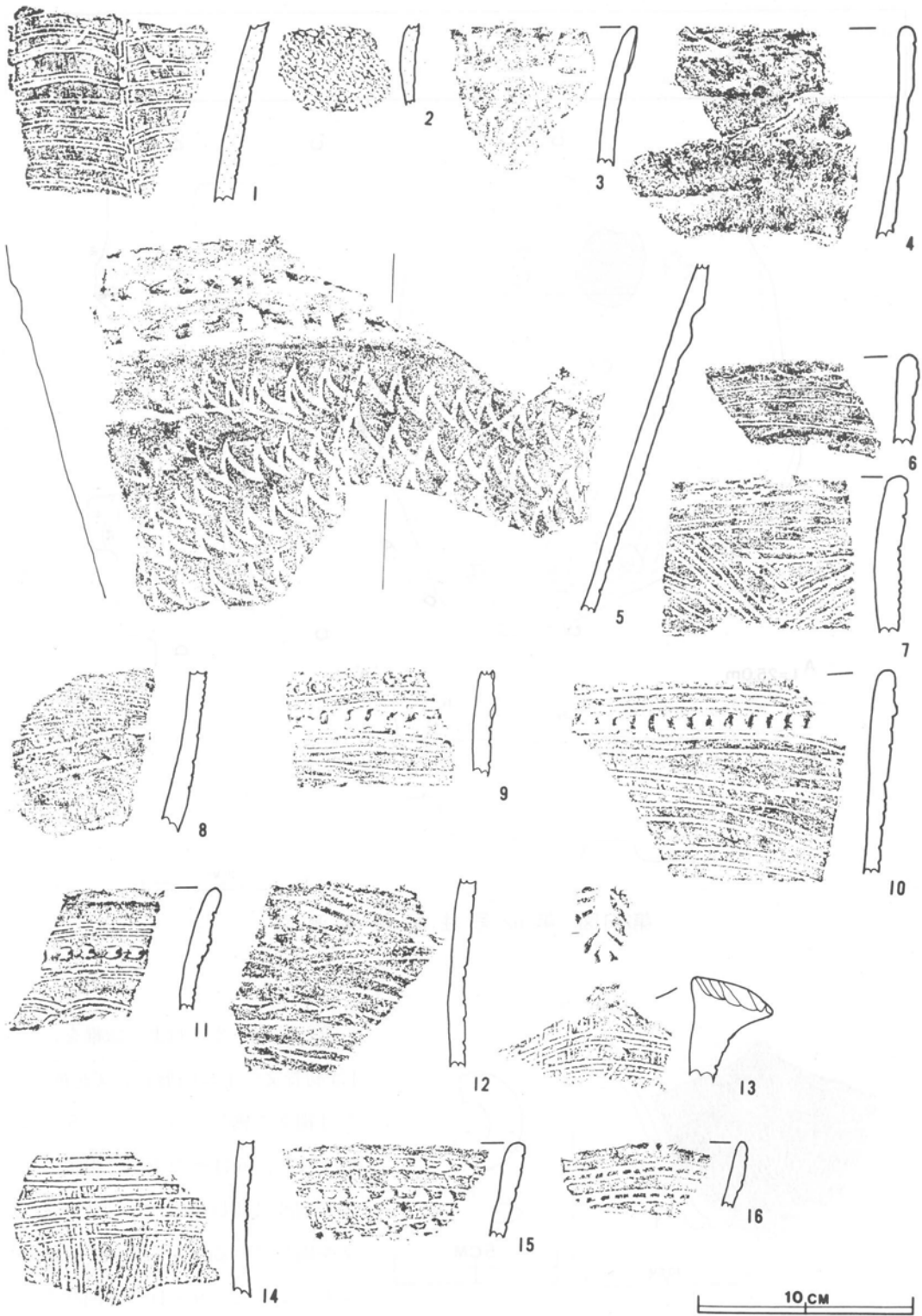


第261図 第62号住居跡実測図

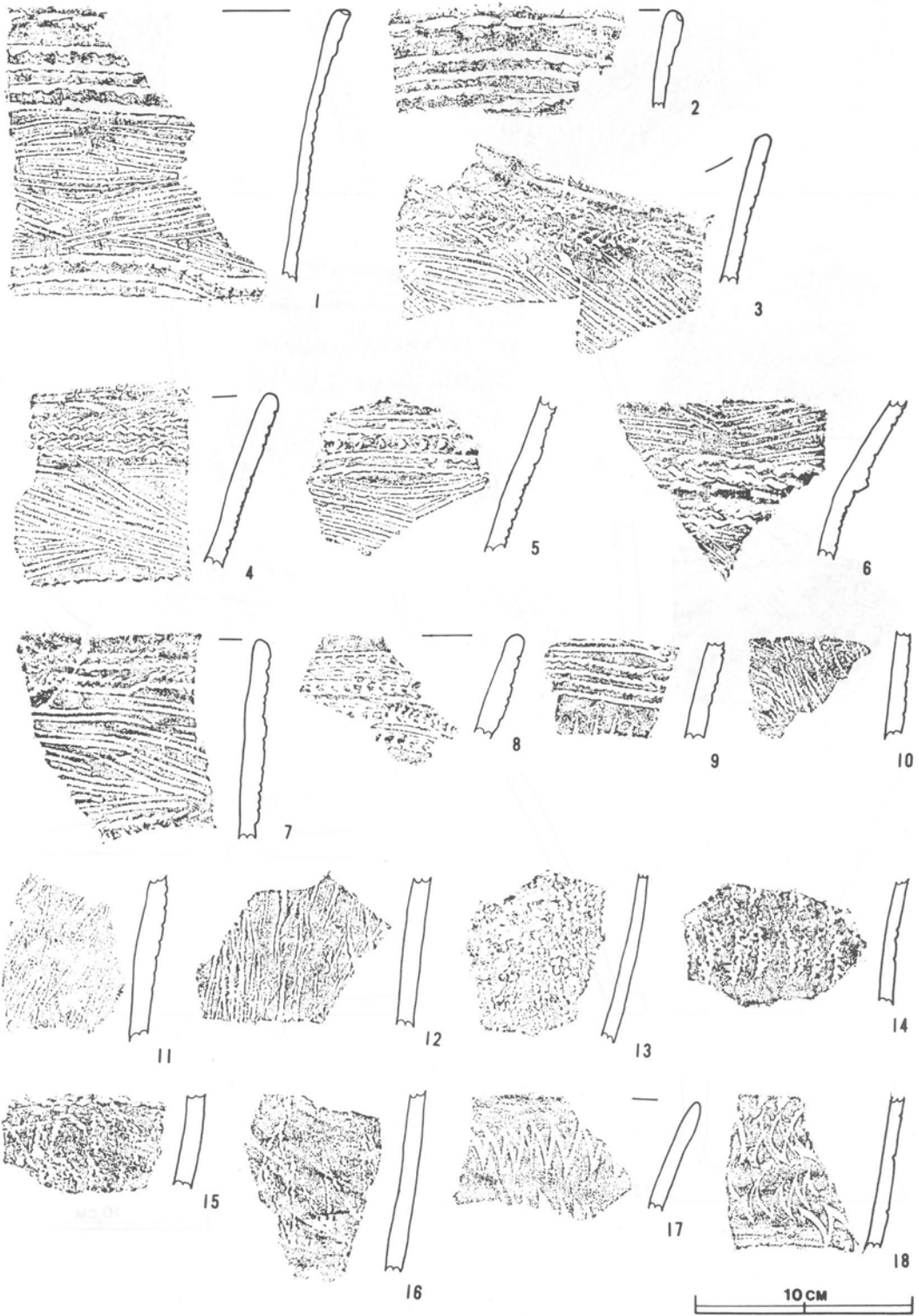


第262図 第62号住居跡出土遺物実測図

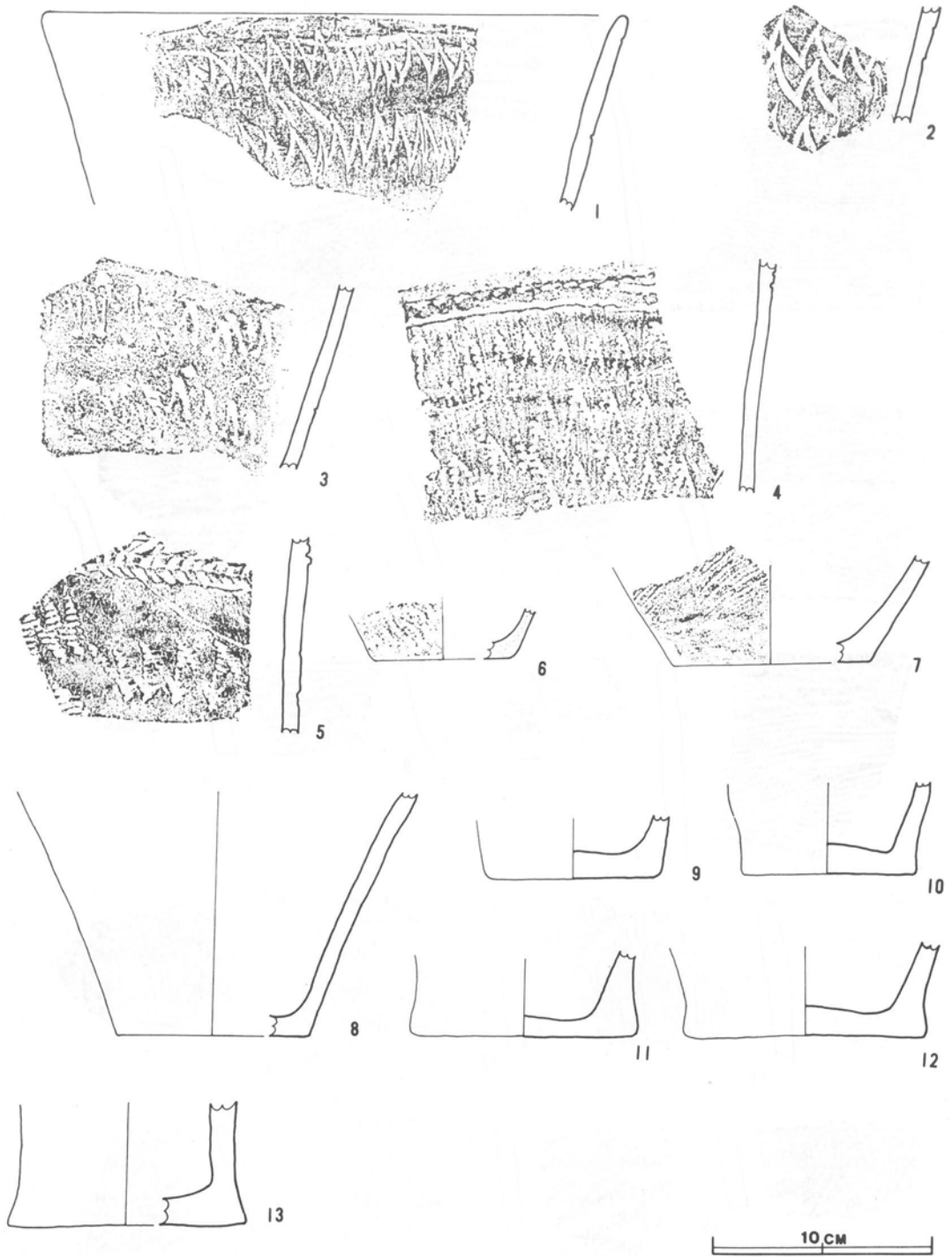
第263図1・2は胎土に繊維を含み、1は肋骨文の上に円形竹管文を押捺し、2は縄文を施している。3～5は輪積痕を残し、5はその下端に指頭痕を加え、胴部には貝殻によるジグザグ波状文を施している。6～14は平行沈線文を有している。9・10には凹凸文、11・12には半截竹管文を施し、13・14は地文に捺糸文を配している。15・16は



第263图 第62号住居跡出土土器拓影图



第264图 第62号住居跡出土土器拓影图



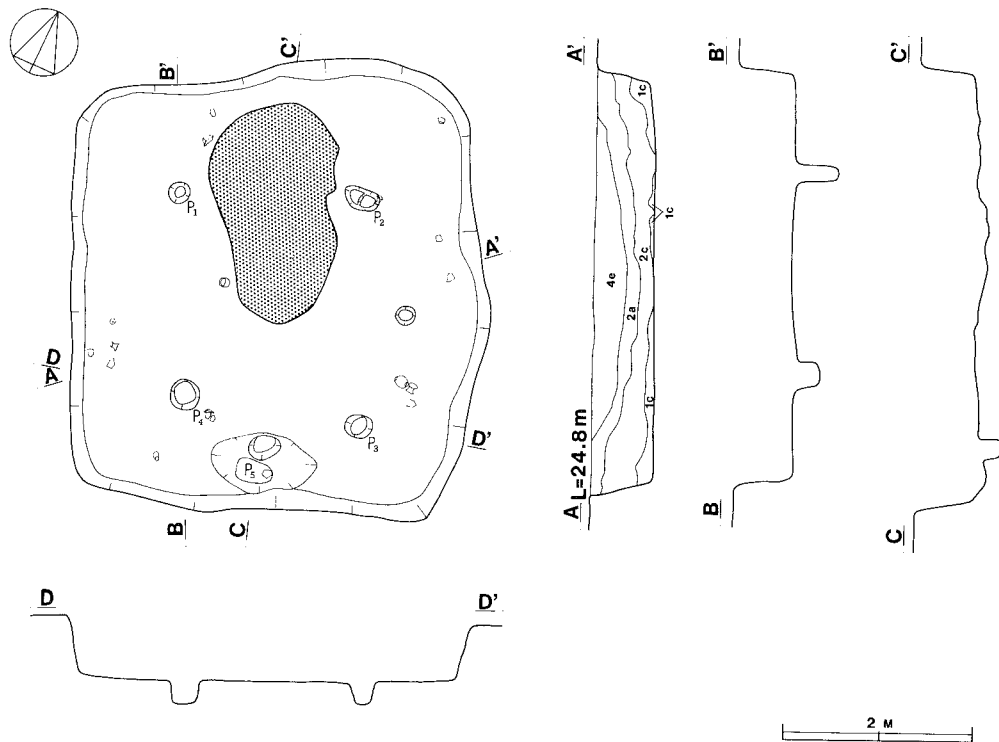
第265图 第62号住居跡出土土器拓影图

有節沈線文, 第264図1～6は変形爪形文, 7～9は連続爪形文を有している。10～12は撚糸文, 13～18と第265図1～5は貝殻文を施文している。6～13は底部で, 6は胎土に繊維を含み, 胴部に縄文を施している。

第63号住居跡 (第266図)

本住居跡はC4d3調査区を中心に確認されたもので, 遺跡中央よりやや東部に位置し, 南西側6.5mに52号住居跡が存在する。

主軸方向はN - 25° - Eを指し, 長軸4.6m・短軸4.4mの東辺中央部が外側にやや張り出した隅丸形状を呈している。東辺が西辺より約50cm長い。壁高は55～60cmを測り, 壁は良好な状態でほぼ垂直に立ちあがっている。床質はロームで, 床面は硬く平坦である。炉跡は中央より北側に検出され, 床面を約15cm掘り窪めた地床炉で, 長径2.25m・短径1.2mの不整楕円形を呈し, 焼土粒子を含み炉床は凹凸している。柱穴は6か所検出され, 直径20～30cm・深さ20～45cmを測る。P₁～P₄が主柱穴と考えられ, P₂の西側壁は2段に掘りこまれている。南壁下中央に位置するP₅は貯蔵穴と考えられ, 規模は長径110cm・短径60cm・深さ10cm程である。住居跡内の覆土は, 上層にローム粒子・焼土粒子を含む締りのある黒褐色土, 中・下層にローム粒子を含む暗褐色土,



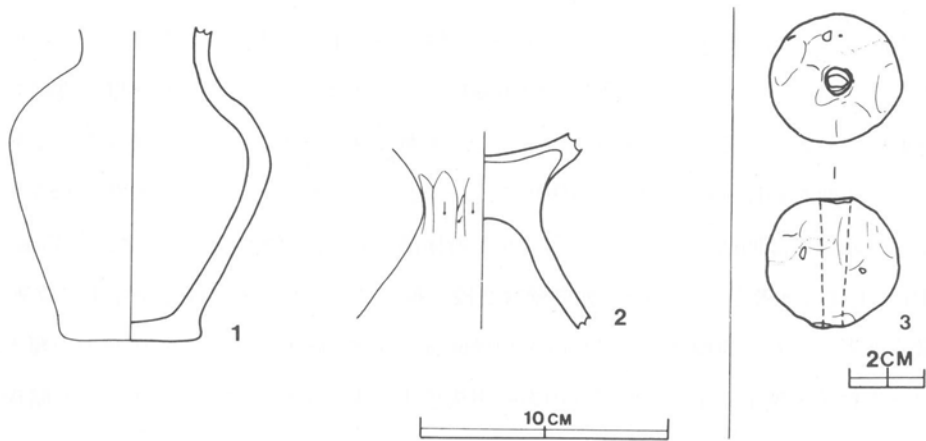
第266図 第63号住居跡実測図

床面上には褐色土が自然堆積している。

遺物は弥生土器片と土師器片が少量出土している。東側のコーナー付近床面からほぼ完形の弥生の小形壺と土師器の台付甕が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代前期の遺構と思われる。

出土遺物 (第267・268図)

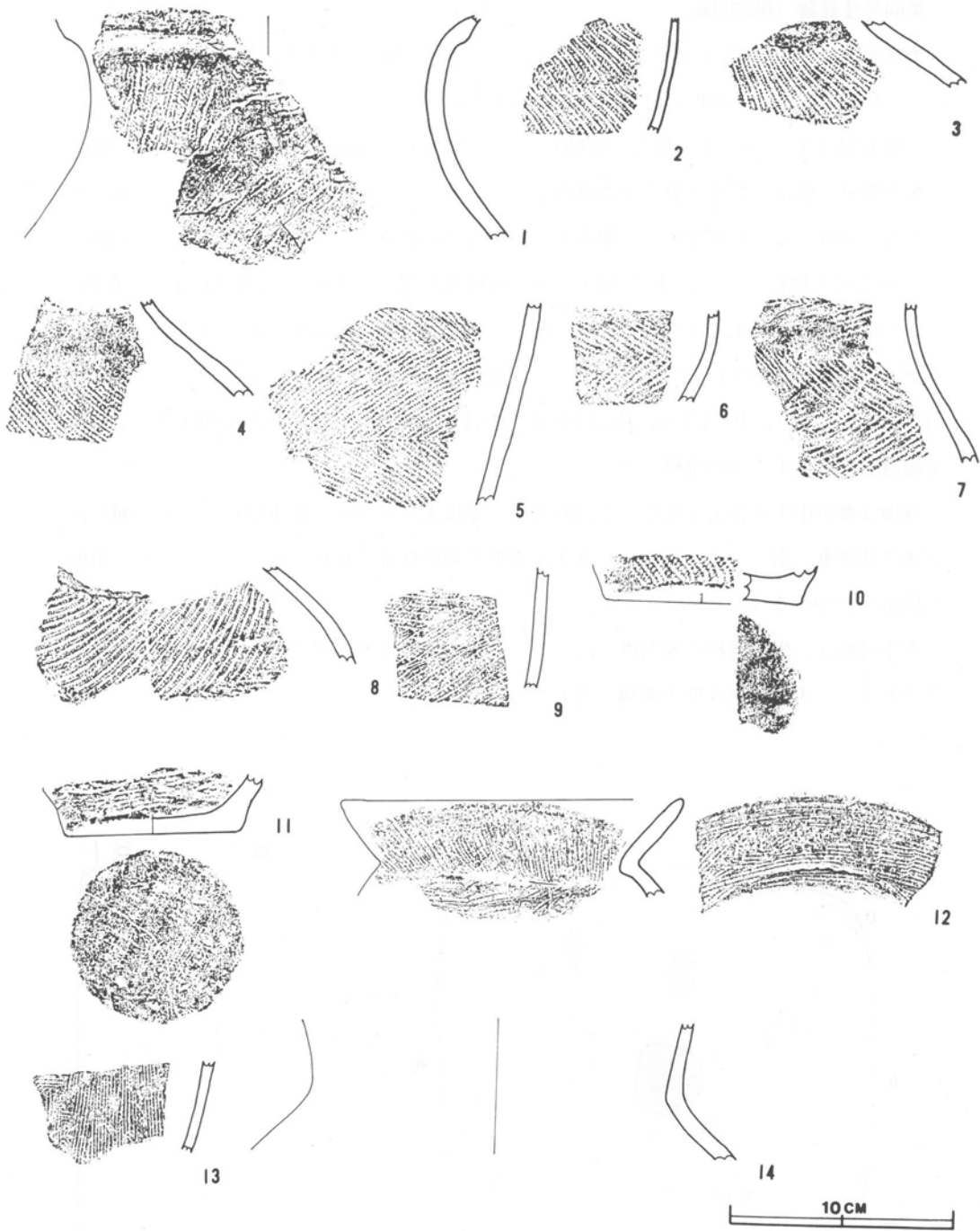


第267図 第63号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表 (第267図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-63	1	小形壺形土器 (弥生)	B 12.3 C 5.6	無文。	内面—ナデ 外面<上—ナデ 下—ヘラケズリ	普通・砂粒・黒褐	85% 第267図-1
	2	台付甕形土器 (弥生)	B 7.4	脚部—ゆるやかに広がる。 支柱部—大きく外反して底部に至る。	内面—ナデ 外面—ヘラナデ	やや・砂礫・にぶ 軟弱 雲母 い橙	台部 70% 第267図-2
	3	土玉	3.4×3.5 35g			良好・砂粒・にぶ い赤 褐 灰褐	100% 第267図-3

第268図 1～11は弥生土器片で、12～14は土師器片である。1～4は付加条縄文、5～9は羽状縄文を施文している。10・11は底部で、10に木葉痕、11に布目痕が認められる。12は内・外面に刷け目痕を残し、13にも刷け目痕が認められる。



第268图 第63号住居跡出土土器拓影图

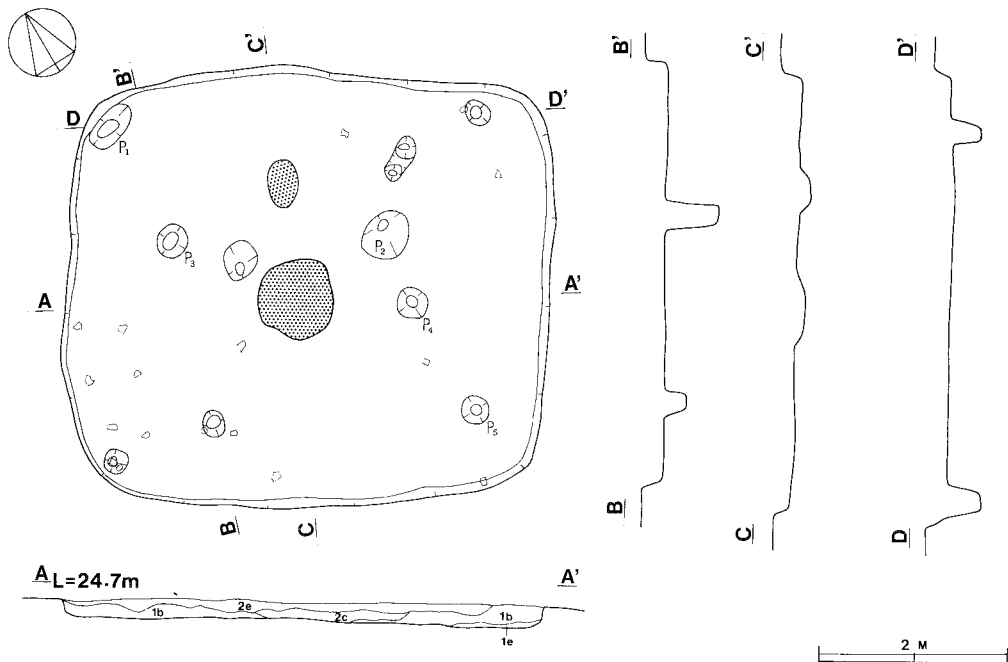
第64号住居跡（第269図）

本住居跡はC4i8 調査区を中心に確認されたもので、遺跡の南東部に位置し、南東側5.5mのところには65号住居跡、北西側に51号住居跡が存在する。

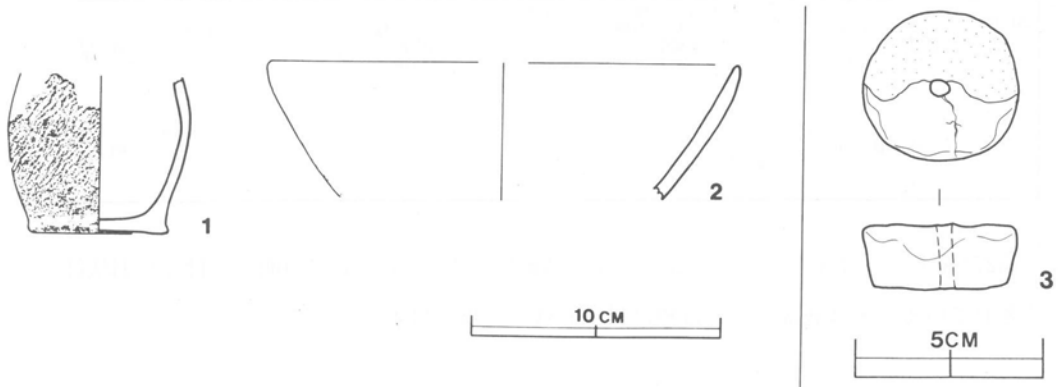
主軸方向はN - 59° - Wを指し、長軸5.1m・短軸4.65mの隅丸方形を呈している。壁高は20cm前後を測り、壁は良好な状態ではほぼ垂直に立ちあがっている。床質はロームで、床面は硬く平坦である。炉跡は2か所検出され、便宜上、中央部に位置する炉をF1号、中央部より北側に位置する炉をF2号と仮称しておく。F1号は床面を10cm程掘り窪めた地床炉で、直径85cmの円形状を呈し、レンガ状に焼けた焼土を含み炉床は硬く焼けている。F2号は床面を12cm程掘り窪めた地床炉であるが、ほとんど使用されていない。ピットは12か所検出され、支柱穴は不明である。P1・P2は楕円形状をしており、P3は57cm、P4は106cm、P5は68cmと深い。住居跡内の覆土は、やや柔らかい暗褐色土と褐色土が自然堆積している。

遺物は覆土中より弥生土器片・土師器片が少量出土している。北東壁近くから床面に密着した状態で紡錘車、南コーナー付近から弥生の壺形土器の底部が検出されている。また、土師器の埴も検出されている。

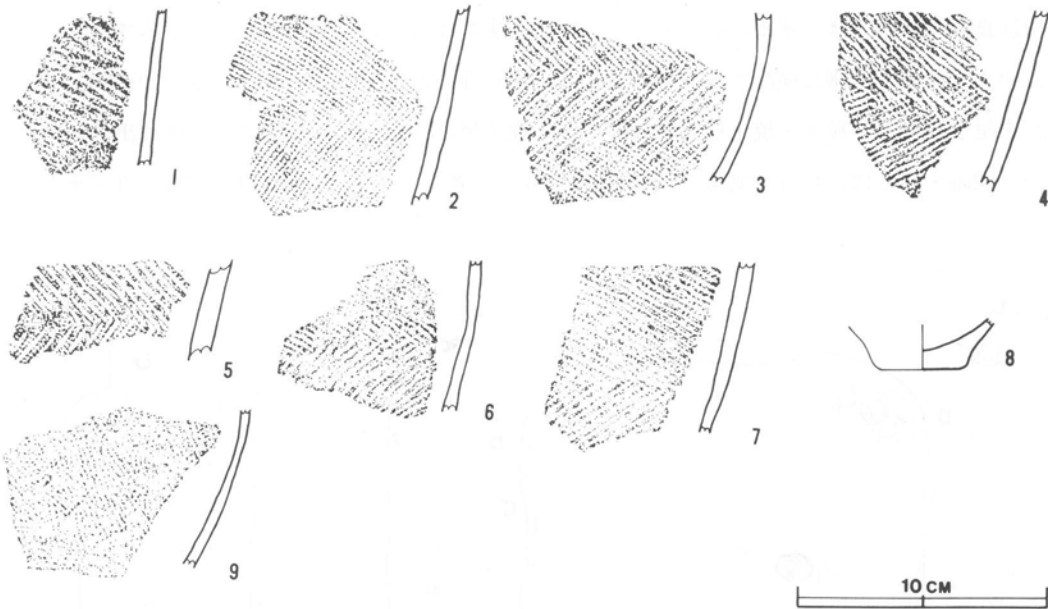
本住居跡は、出土遺物や規則性のないピットの配列等から、建て替えあるいは増築が行われたのであろう。古墳時代前期の遺構と思われる。



第269図 第64号住居跡実測図



第270図 第64号住居跡出土遺物実測図



第271図 第64号住居跡出土土器拓影図

出土遺物 (第270・271図)

出土遺物解説表 (第270図)

遺構番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-64 1	小形 壺形土器 (弥生)	B 5.9 C 5.5	胴一縄文。	内面 底 >ヘラミガキ	普通・砂礫・にぶ 雲母 い橙	底部 100% 第270図-1

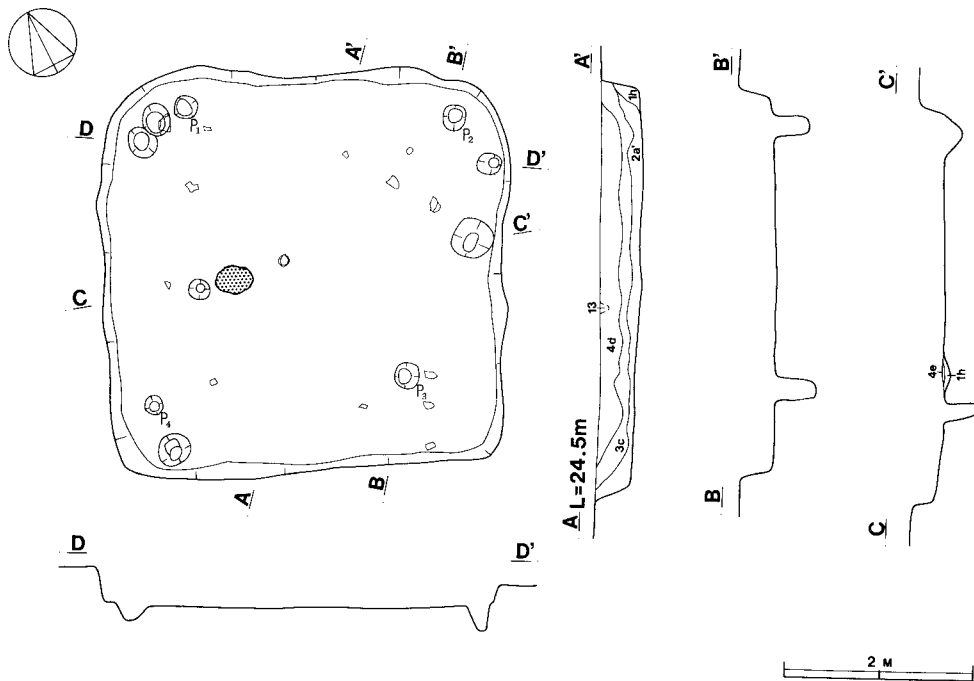
SI-64	2	埴形土器 (土師)	A (21.2) B 4.6	体部一外傾して立ちあがる。 口一若干内彎する。 口縁端部一尖る。	口一横ナデ 内面 外面 >ヘラミガキ	良好・砂粒・にぶ スコ リア 橙	口縁部90% 第270図-2
	3	紡錘車	3.9×4.1 33.5g			良好・砂礫・にぶ スコ リア 橙	90% 第270図-3

第271図1～7は弥生土器片，8・9は土師器片である。1～7の器面には付加条羽状縄文が施文されている。8は底部で，9は刷け目痕を残し，煤が付着している。

第65号住居跡 (第272図)

本住居跡はD4a0調査区を中心に確認されたもので，遺跡の南東端に位置し，北西側に64号住居跡が存在する。

主軸方向はN - 65° - Wを指し，一辺4.2mの隅丸方形を呈している。壁高は20～35cmを測り，壁は良好な状態ではほぼ垂直に立ちあがっている。床質はロームで，床面は硬く平坦である。炉跡は中央よりやや西側に検出され，床面を約8cm掘り窪めた地床炉で，長径40cm・短径30cmの楕円形を呈し，ローム粒子・焼土粒子を含み炉床は硬く焼けている。ピットは10か所検出され，直径22～32cm・深さ12～45cmを測る。P1～P4は主柱穴と考えられるが，P1・P2・P4はコーナー部に

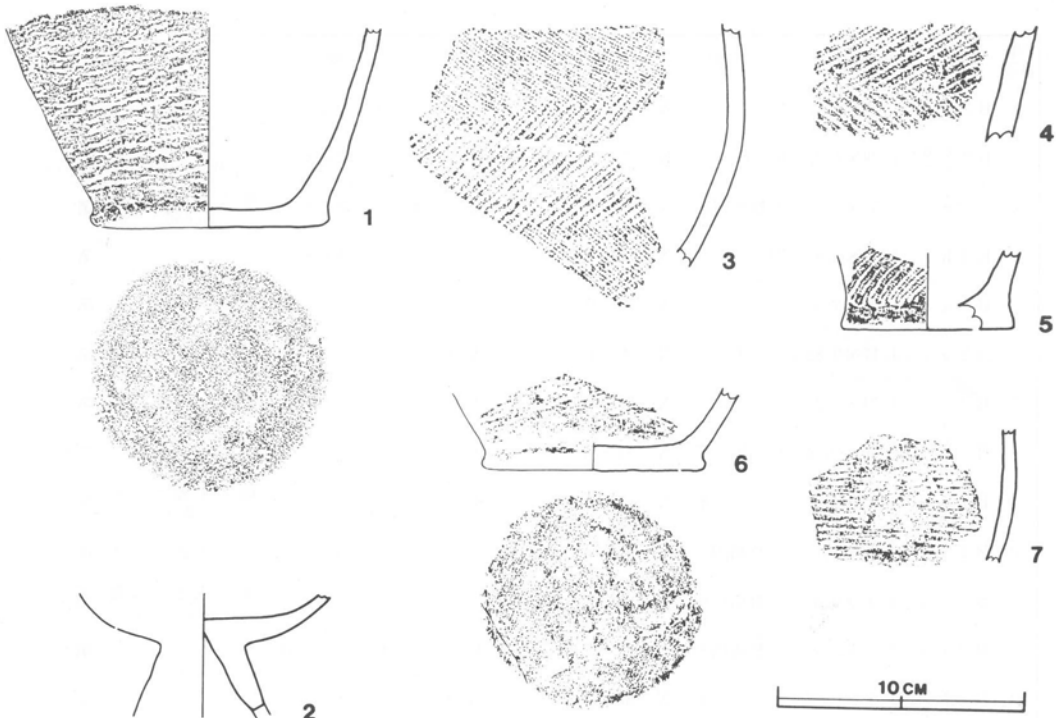


第272図 第65号住居跡実測図

位置するがP₃はやや内側に位置している。中央部に、直径40cm・深さ15cmの円形状の貯蔵穴を有している。住居跡内の覆土は、締りのない黒褐色土・極暗褐色土、床面付近にはローム粒子を多量に含む暗褐色土、北側の壁付近には粘性をもつ褐色土が自然堆積している。

遺物は床面からの出土はなく、覆土中から縄文土器片・弥生土器片・土師器片が混在して出土しているが、量的には少ない。北側コーナー付近から土師器の高坏と弥生の壺形土器の底部が検出されている。

本住居跡は、出土遺物等から古墳時代前期の遺構と思われる。



第273図 第65号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土遺物 (第273図)

出土遺物解説表 (第273図)

遺構	番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
SI-65	1	壺形土器 (弥生)	B 8.2 C 9.2	胴下半部一燃糸文。 底一布目痕。	内面一摩滅	普通・石英・にぶ 砂粒 濃い褐色	底部 100% 煤付着 第273図-1
	2	高坏形土器 (土師)	B 5.0	主柱一やや外方へ開いている。 孔一4個を有する。	坏部<内面一ナデ 外面一ナデ 脚部<内面一ナデ 外面一ヘラミ ガキ	やや・砂礫・明黄 軟弱 橙	30% 第273図-2

3～6は弥生土器片、7は土師器片である。

2 土 壤

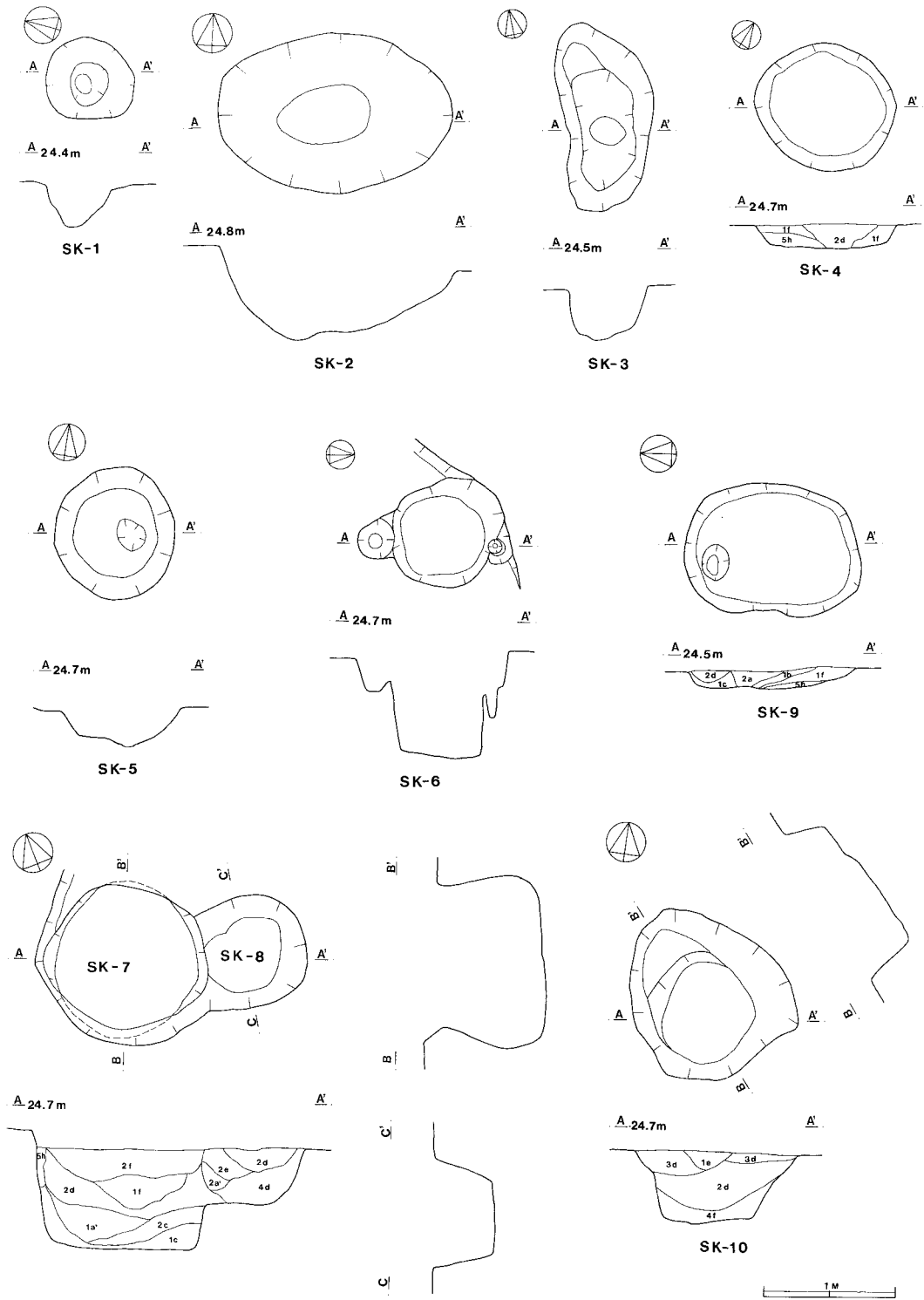
本遺跡で検出された土壌は76基である。土壌番号は75番までであるが、34号土壌は調査を進めた結果、2つの土壌に分離され、それぞれ34A号土壌・34B号土壌とした。特に遺跡中央から北側にかけて多く検出され、形状は楕円形、規模は長径1.2~1.5mを呈する土壌が多い。出土遺物は縄文土器片である。しかし、量的には少なく小破片が多い。時期的には縄文前期に比定される。

土 壌 一 覧 表

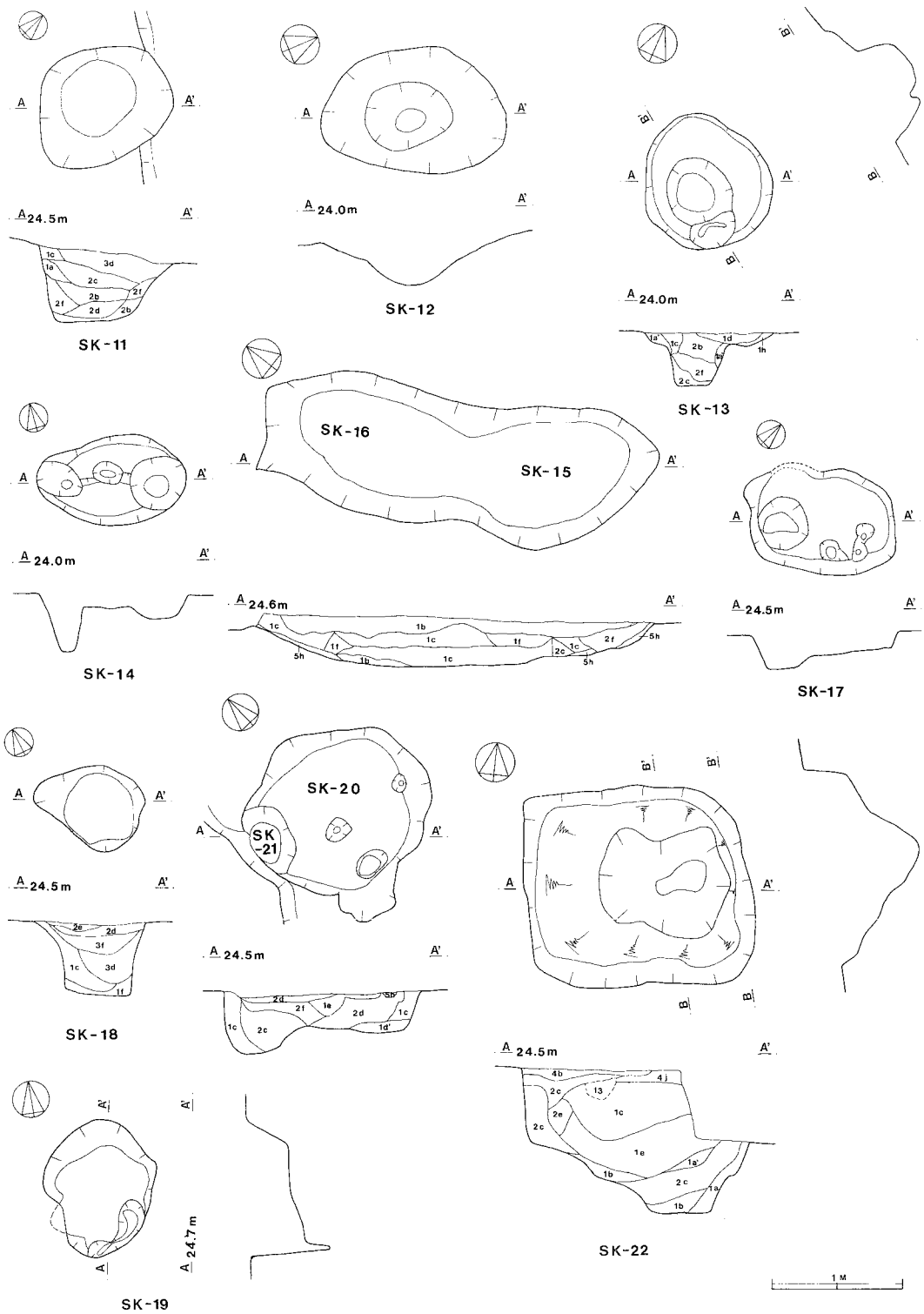
土壌番号	調査区	規模(m)	形 状	長径方向	深さ (cm)	ピット 数	底 面	壁 面	出土遺物(時期)	関連図版
1	B 2 c 6	0.67×0.61	円 形	N-90°	82	0	皿 状	ゆるやか	縄文土器片 (浮島)	第274・284図
2	B 2 c 6 c 7	1.78×1.21	楕 円 形	N-5°-W	41	0	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片少量 (黒浜, 浮島)	第274・284 ・285図
3	B 2 c 5	1.35×0.64	不整楕円形	N-6°-E	40	0	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片少量 (浮島)	第274・285図
4	B 2 b 4	1.07×0.95	円 形	N-78°-E	20	0	水平 平坦	ゆるやか		第274図
5	B 2 d 4	1.00×0.90	円 形	N-5°-W	28	0	起伏あり	ゆるやか		第274図
6	B 2 g 7	1.17×0.83	不 定 形	N-4°-E	72	2	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (諸磯)	第274・285図
7	B 2 f 7	1.24×1.20	円 形	N-67°-W	75	0	水平 平坦	袋 状	縄文土器片少量 (黒浜, 浮島)	第274・286図
8	B 2 f 7 f 8	(1.04)×0.83	楕 円 形	N-83°-W	46	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片5点 (黒浜)	第274・286図
9	B 2 f 8	1.34×0.97	楕 円 形	N-1°-E	16	1	平 坦	ゆるやか	縄文土器片6点 (黒浜)	第274・286図
10	B 2 c 2 c 3	1.29×1.15	不整楕円形	N-49°-W	42	0	起伏あり	段 状	縄文土器片1点	第274図
11	B 2 c 9	1.00×0.86	不整楕円形	N-31°-E	57	0	皿 状	ゆるやか	縄文土器片多量 (黒浜, 浮島)	第275・286 ・287図
12	B 2 f 9	1.41×0.95	不整楕円形	N-29°-E	37	0	皿 状	段 状		第275図
13	B 2 g 9 h 9	1.03×0.96	円 形	N-38°-W	13	2	坂状 平坦	ゆるやか		第275図
14	B 2 h 9 h 0	1.14×0.68	楕 円 形	N-74°-W	15	3	水平 平坦	ゆるやか		第275図
15	B 2 d 3	1.64×1.06	不整楕円形	N-46°-W	30	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片1点 (浮島)	第275・287図
16	B 2 d 3	2.01×1.02	楕 円 形	N-23°-W	38	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片1点 (浮島)	第275・287図
17	B 2 d 6	1.03×0.77	楕 円 形	N-45°-E	17	3	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片7点 (浮島)	第275図
18	B 2 g 6	0.82×0.58	不整楕円形	N-52°-W	59	0	水平 平坦	垂 直		第275図
19	B 2 f 6	1.02×0.83	不整楕円形	N-11°-E	32	1	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片7点 (黒浜, 浮島)	第275図
20	B 2 g 5 g 6	1.48×1.30	円 形	N-57°-W	32	3	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量	第275・288図
21	B 2 g 5	0.55×(0.36)	楕 円 形	N-20°-E	50	0	水平 平坦	袋 状	縄文土器片3点 (黒浜)	第275・288図
22	B 2 g 9	1.74×1.53	隅丸方形	N-83°-E	80	0	起伏あり	段 状	縄文土器片少量 (浮島)	第275・288図
23	B 2 h 5	1.37×0.98	楕 円 形	N-9°-W	54	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片多量 (浮島)	第276・288図

土壌番号	調査区	規模(m)	形状	長径方向	深さ(cm)	ピット数	底面	壁面	出土遺物(時期)	関連図版
24	B 2 h 5	1.19×0.92	楕円形	N-2°-E	30	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (黒浜)	第276-288図
25	B 2 i 7	0.80×0.79	円形	N-90°	79	0	水平 平坦	垂直	縄文土器片多量 (黒浜)	第276-288 ・289図
26	B 2 d 0	1.30×1.02	楕円形	N-89°-E	98	0	水平 平坦	垂直	縄文土器片少量 (浮島)	第276-289図
27	B 3 c 1	1.71×1.30	不整楕円形	N-44°-W	85	0	水平 平坦	段状	縄文土器片少量 (黒浜, 諸磯, 浮島)	第276-290図
28	B 2 d 3	1.40×1.24	不整形	N-60°-E	19	0	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片3点 (黒浜)	第276-290図
29	B 2 d 2, d 3	1.45×1.03	不整楕円形	N-63°-E	17	1	水平 平坦	垂直	縄文土器片1点 (浮島)	第276-290図
30	B 2 c 0, d 0	0.97×0.97	円形	N-88°-W	84	0	水平 平坦	段状	縄文土器片少量 (黒浜, 浮島)	第276-290図
31	B 2 j 8	1.49×1.11	楕円形	N-6°-E	49	0	水平 平坦	垂直	縄文土器片少量 (黒浜, 浮島)	第277-291図
32	C 2 a 8	1.44×1.40	円形	N-37°-E	51	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片 (浮島)	第277-291図
33	C 2 a 8	1.23×1.01	楕円形	N-68°-W	75	0	水平 平坦	段状	縄文土器片少量 (黒浜, 浮島)	第277-292図
34A	B 2 g 0	1.25×0.91	不整楕円形	N-2°-E	60	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片極少量	第276-292図
34B	B 3 h 1	1.15×0.82	不整楕円形	N-60°-E	68	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片極少量	第276-292図
35	A 2 h 0	1.45×1.40	円形	N-89°-E	31	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片4点 (黒浜)	第277-293図
36	A 3 i 5	1.28×1.42	楕円形	N-3°-E	129	0	水平 平坦	段状	縄文土器片6点 (黒浜)	第277-293図
37	A 3 i 1	1.06×0.98	円形	N-80°-E	24	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片3点	第277図
38	A 3 j 2	1.54×1.28	楕円形	N-69°-E	18	0	水平 平坦	ゆるやか		第277図
39	A 3 i 2	1.66×(1.22)	楕円形	N-79°-W	28	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (浮島)	第278-293図
40	A 3 i 2	1.92×1.14	不整楕円形	N-80°-W	31	2	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (黒浜, 下小野)	第278-293図
41	A 3 i 2	2.39×(1.83)	隅丸方形	N-26°-W	14	4	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (浮島)	第278-293図
42	B 3 b 3	1.78×1.66	不整隅丸方形	N-89°-E	20	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片3点 (諸磯)	第277-293図
43	A 3 j 1	1.50×1.40	不整円形	N-29°-E	27	0	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片多量 (黒浜, 浮島)	第278-293図
44	B 3 d 1	1.15×0.98	楕円形	N-40°-E	14	1	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片5点 (浮島)	第278-294図
45	B 3 a 1	1.25×1.23	円形	N-12°-W	26	2	皿状	ゆるやか	縄文土器片多量 (諸磯)	第278-294図
46	A 3 j 2	0.78×0.40	不定形	N-2°-E	52	1	水平 平坦	垂直		第278図
47	B 3 a 1	1.17×0.88	不整楕円形	N-14°-E	11	4	坂状 起伏あり	ゆるやか	縄文土器片2点	第278-294図
48	B 3 b 5, b 6	1.56×1.21	隅丸方形	N-29°-E	17	1	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片4点 (中期)	第278-294図
49	B 3 c 3	1.61×1.08	楕円形	N-69°-E	91	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片多量 (浮島)	第279-294図
50	A 3 i 3	3.02×0.74	長楕円形	N-52°-E	29	0	水平 平坦	段状	縄文土器片多量 (浮島)	第279-295図
51	A 3 i 6	0.93×0.80	楕円形	N-4°-W	15	1	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片少量 (黒浜, 浮島)	第279-295図
52	B 3 b 6	1.37×(0.90)	隅丸長方形	N-67°-E	20	0	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片1点 (浮島)	第279-295図

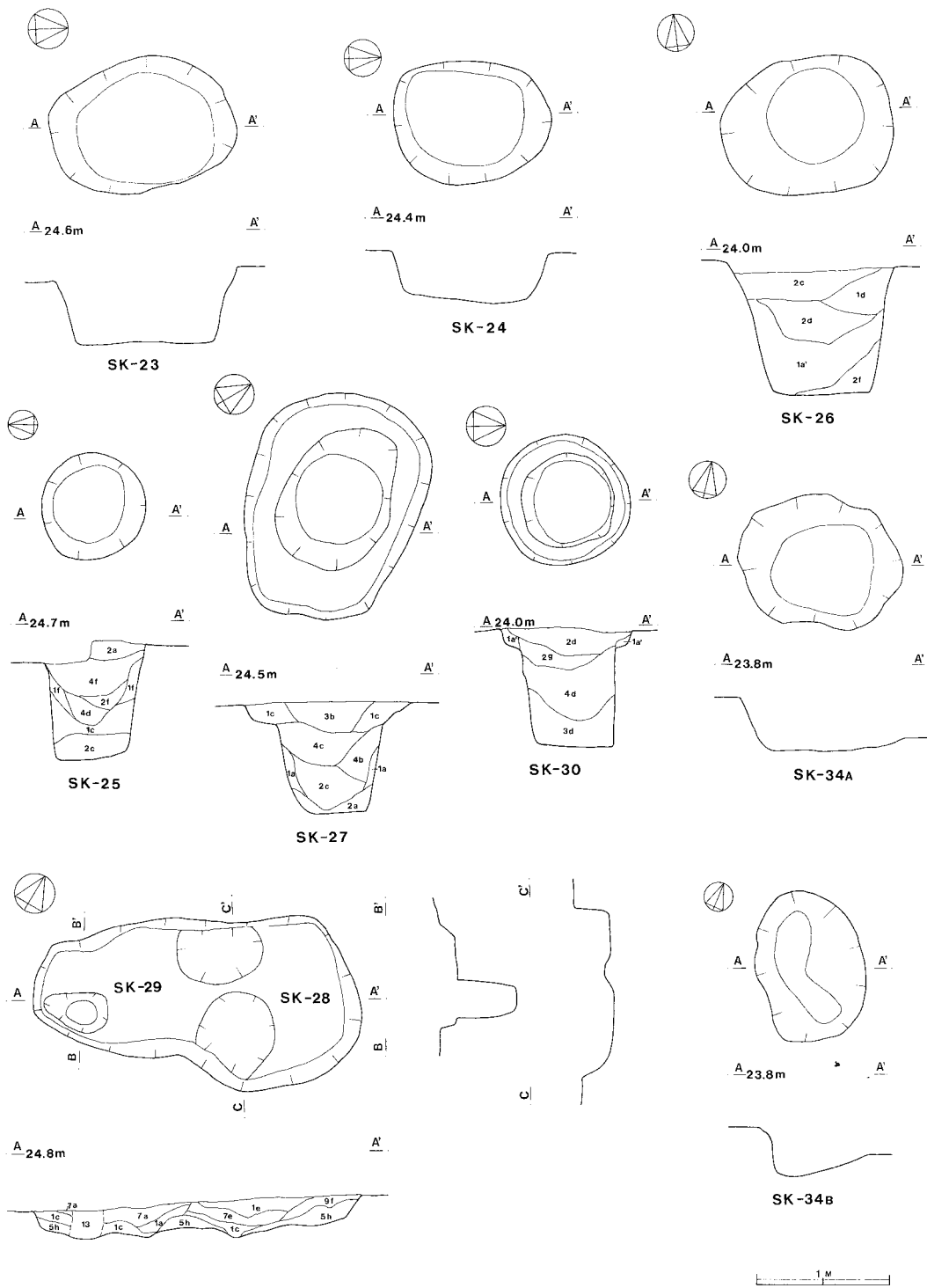
土城番号	調査区	規模(m)	形状	長径方向	深さ(cm)	ピット数	底面	壁面	出土遺物(時期)	関連図版
54	A 3 j 5	1.25×1.21	円形	N-59°-W	38	0	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片 1点 (黒浜)	第279・295図
55	B 3 e 1 e 2	2.73×1.36	楕円形	N-58°-E	78	0	坂状 平坦	段状	縄文土器片 少量 (浮島)	第279・296図
56	B4 ¹⁴ _{a3} .c4 a4	2.88×1.46	楕円形	N-79°-E	101	1	水平 平坦	段状		第280図
57	B 3 a 2 a 3	1.39×0.99	楕円形	N-87°-E	24	1	水平 平坦	ゆるやか	縄文土器片 7点 (浮島)	第279・296図
58	D 3 a 4	1.03×0.81	楕円形	N-82°-E	40	0	坂状 起伏あり	ゆるやか		第280図
59	D 3 c 5	1.70×0.56	楕円形	N-22°-E	15	1	水平 平坦	袋状		第280図
60	D 3 c 5 c 6	1.12×0.78	楕円形	N-29°-E	9	0	坂状 平坦	ゆるやか		第280図
61	C 3 g 4 h 4	1.59×0.78	楕円形	N-40°-E	48	1	水平 平坦	垂直		第280図
62	C 3 g 4	0.62×0.52	円形	N-84°-W	83	0	坂状(左下り) 起伏あり	垂直		第280図
63	C 3 g 3 g 4	1.22×0.70	楕円形	N-88°-W	90	1	坂状(左下り) 平坦	垂直		第280図
64	C 3 c 2 d 2	0.70×0.66	円形	N-4°-E	38	1	坂状 平坦	ゆるやか	縄文土器片 6点	第280・296図
65	C 2 c 7 c 8	1.62×0.85	不整楕円形	N-63°-E	22	0	起伏あり	垂直	縄文土器片 5点 (黒浜, 浮島)	第281・296図
66	C 3 e 7	1.00×0.74	不整楕円形	N-5°-W	15	1	水平 平坦	ゆるやか		第281図
67	C 3 e 7 e 8	0.67×0.62	円形	N-37°-E	16	0	水平 平坦	ゆるやか		第281図
69	C 4 f 0	0.58×0.43	楕円形	N-61°-E	32	0	水平 平坦	段状		第281図
70	D 4 a 3 b 3	1.10×0.64	不整楕円形	N-71°-E	35	1	起伏あり	ゆるやか		第281図
71	D 4 a 4	1.23×0.57	不定形	N-89°-W	56	0	水平 平坦	段状		第281図
72	D4 ^{d3} _{e3} .d4 e4	1.03×0.65	不定形	N-46°-E	57	2	皿状	ゆるやか		第281図
73	D 4 e 2	0.49×0.49	円形	N-0°	24	1	水平 平坦	ゆるやか		第281図
74	B 2 f 4	2.58×1.50	楕円形	N-30°-E	3	0	水平 平坦	ゆるやか		第282図
75	B 2 e 4	2.20×1.40	楕円形	N-63°-E	20	1	起伏あり	ゆるやか	縄文土器片極少量	第282図



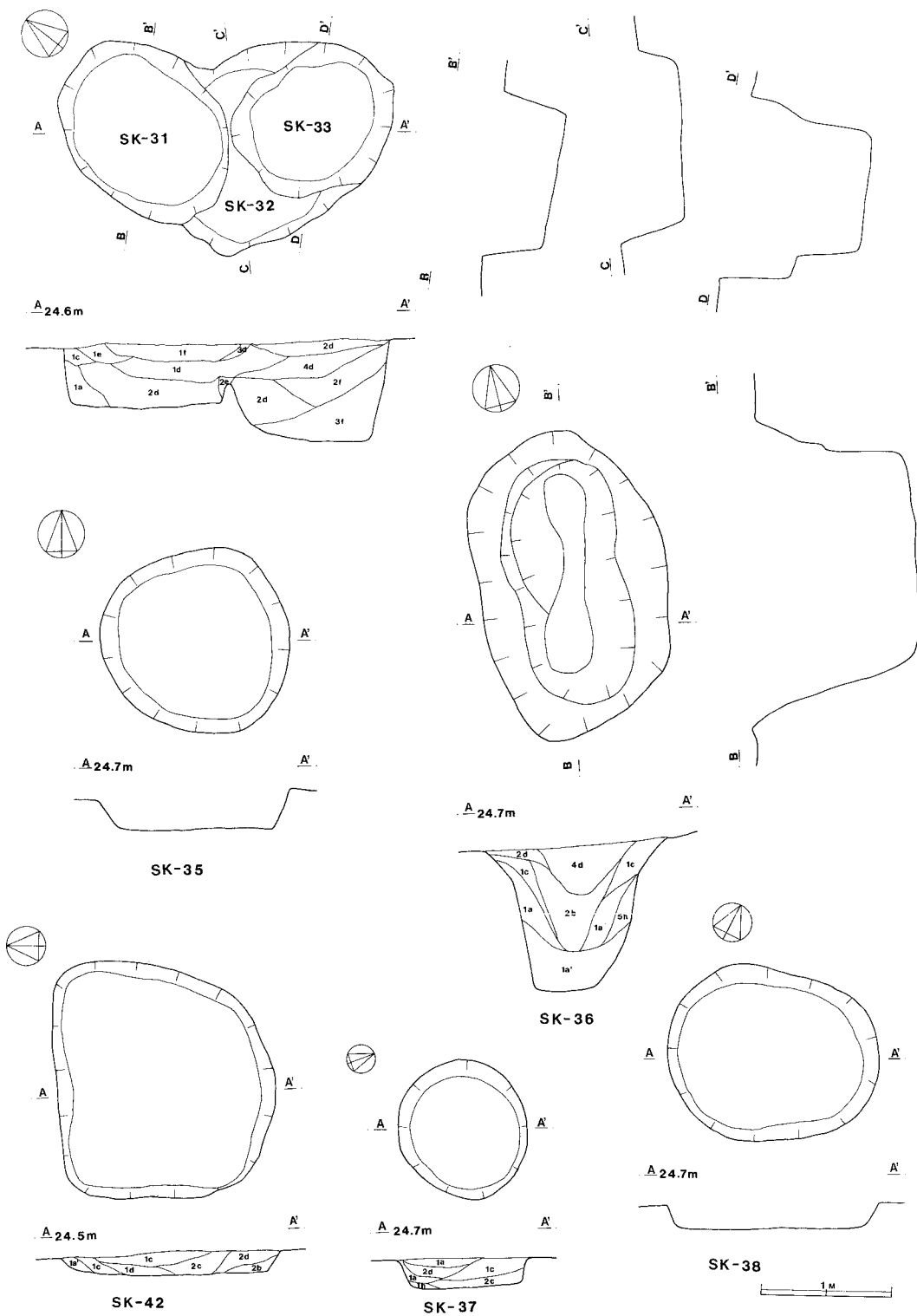
第274图 第 1 ~ 10 号土壤实测图



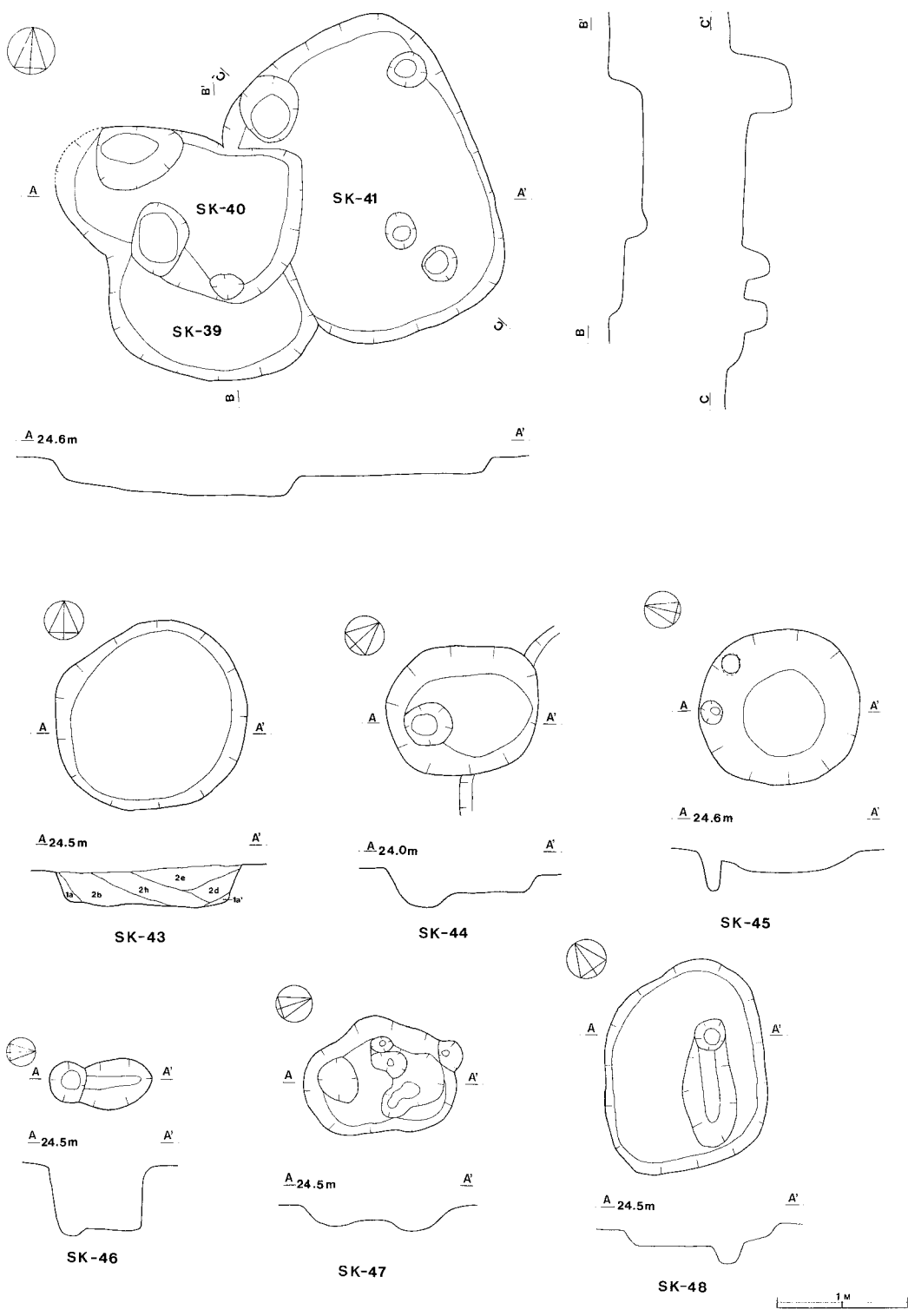
第275図 第11～22号土壌実測図



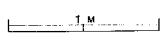
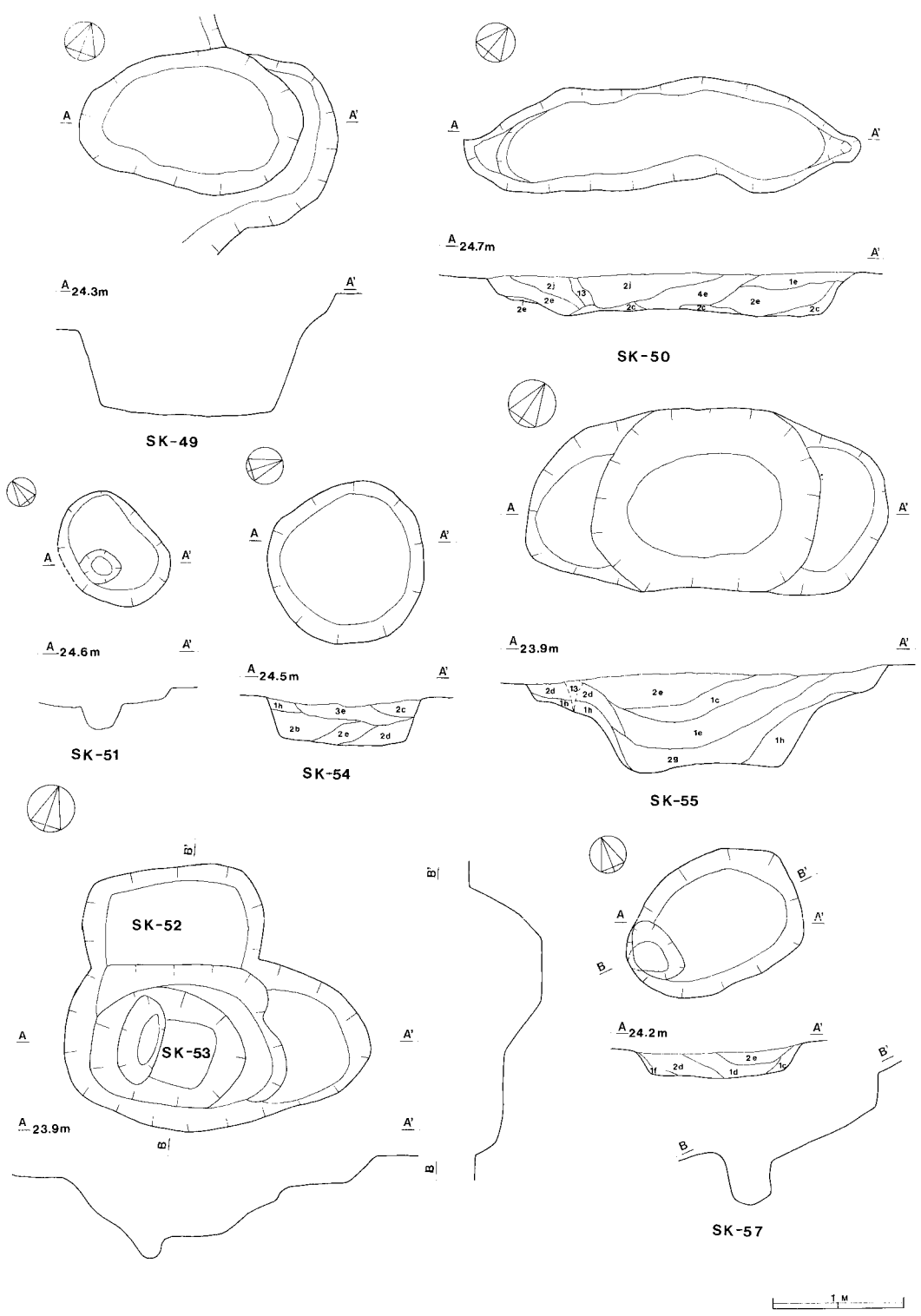
第276図 第23~30・34A・34B号土坑実測図



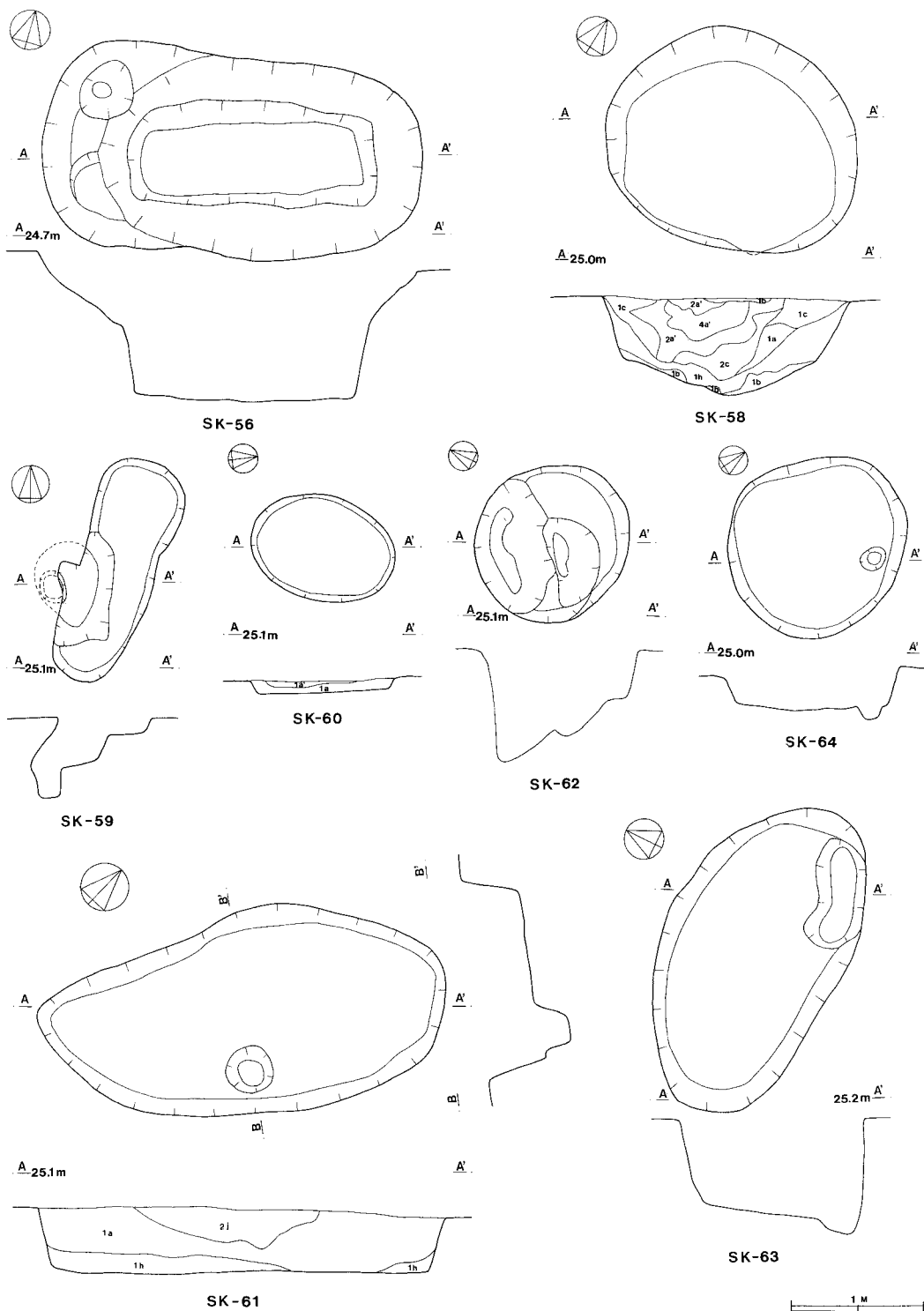
第277图 第31~33·35~38·42号土壤实测图



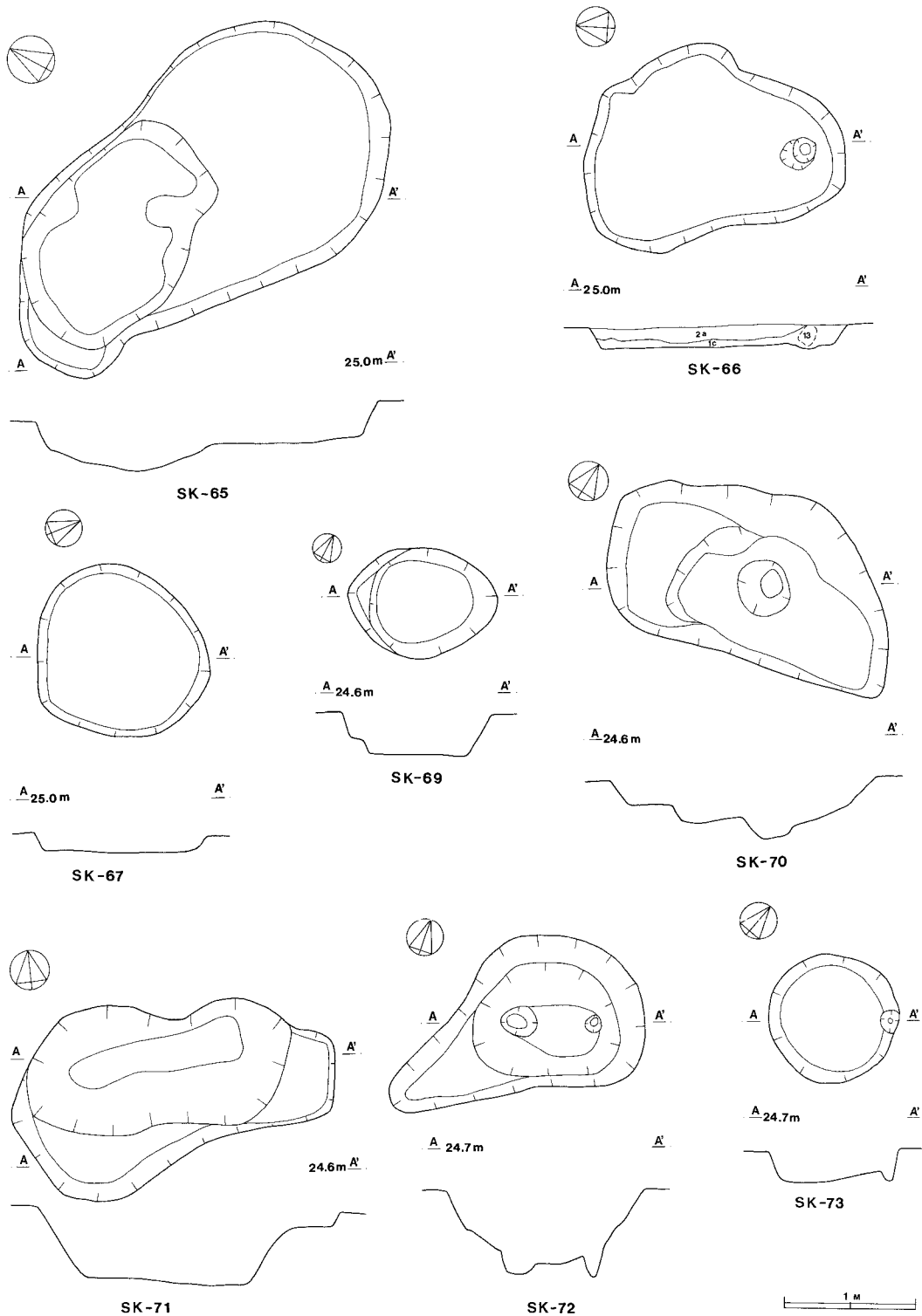
第278图 第39~41・43~48号土壤实测图



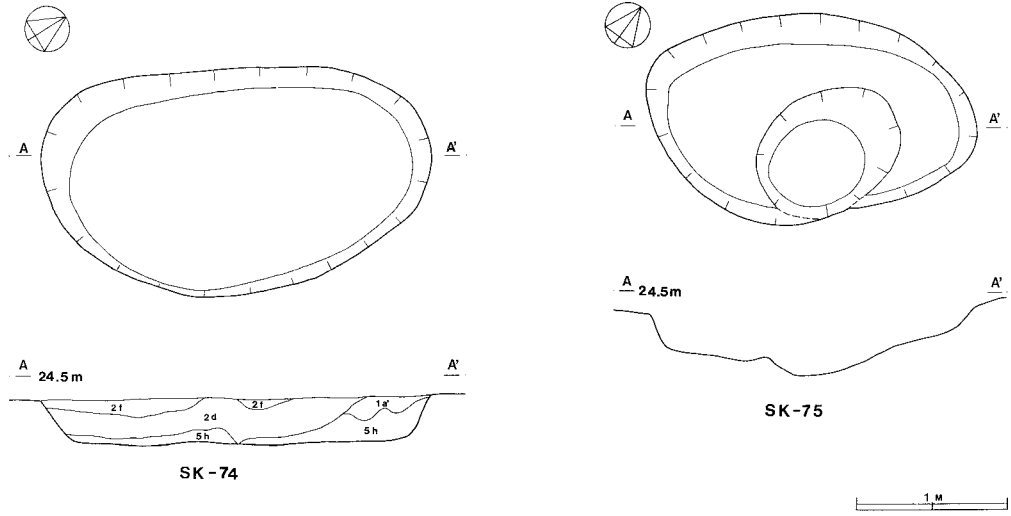
第279図 第49~55・57号土壌実測図



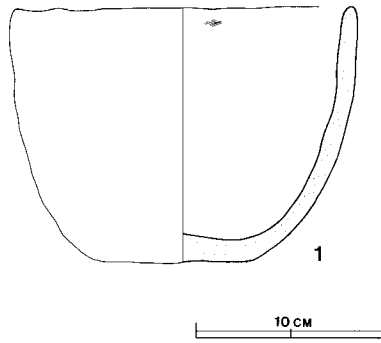
第280図 第56・58～64号土坑実測図



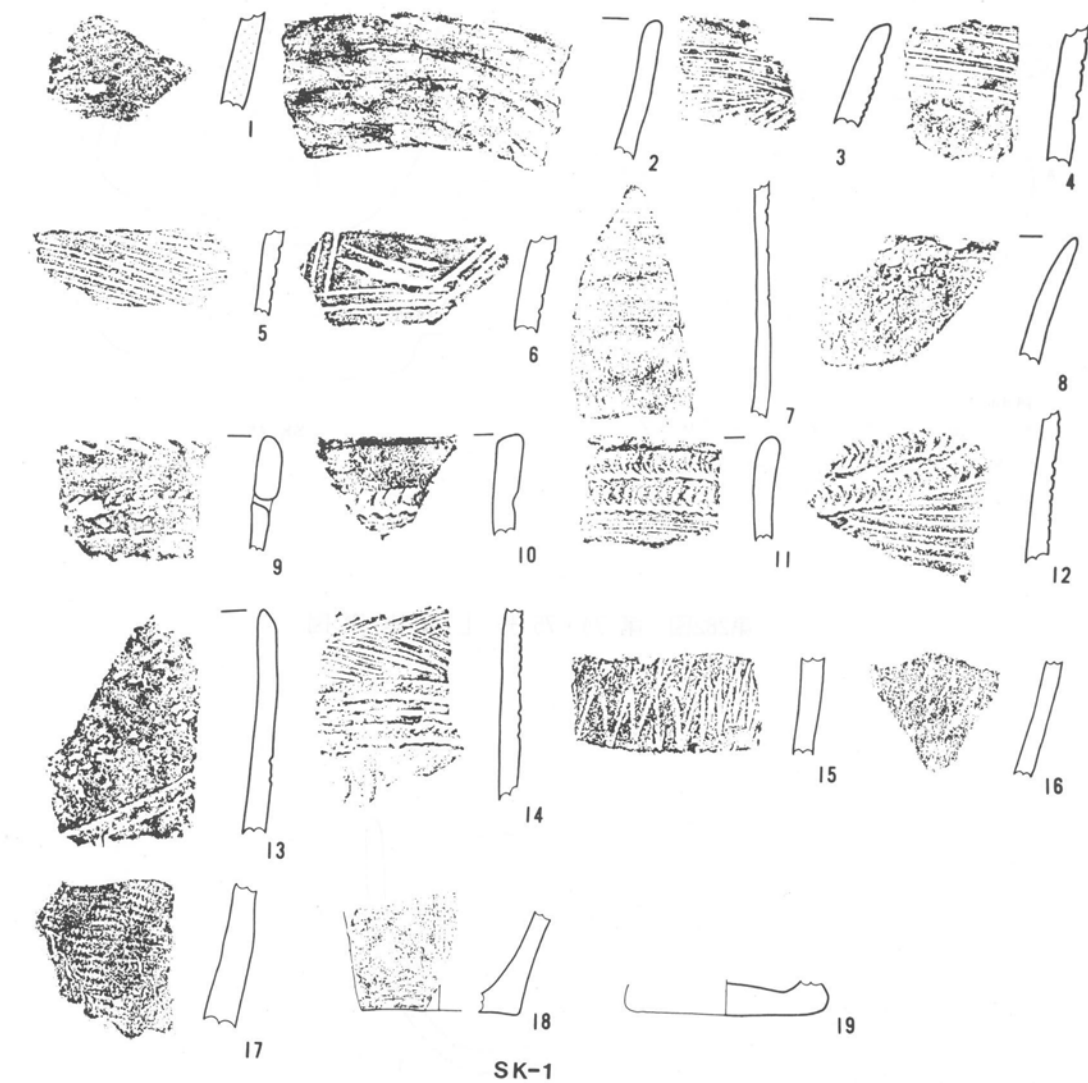
第281図 第65~67・69~73号土坑実測図



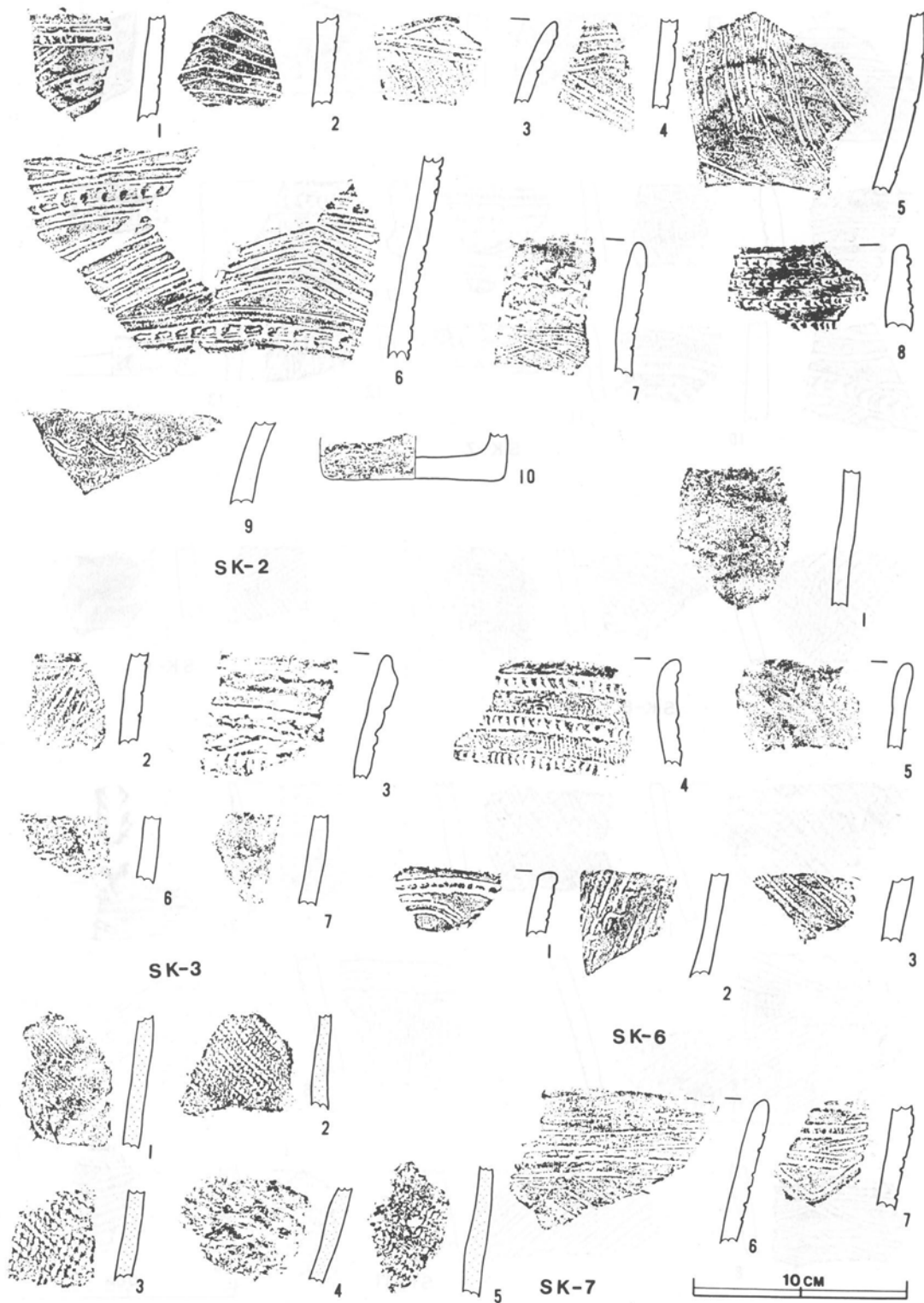
第282図 第74・75号土坑実測図



第283図 第24号土坑出土遺物実測図



第284图 第1·2号土壤出土土器拓影图



第285图 第2·3·6·7号土壤出土土器拓影图

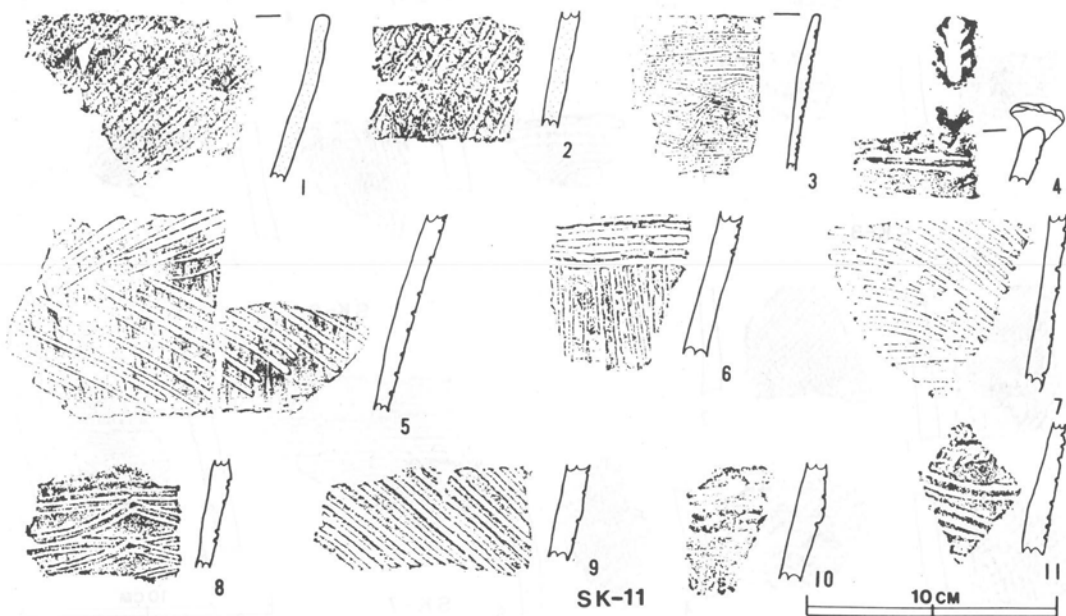


SK-7



SK-8

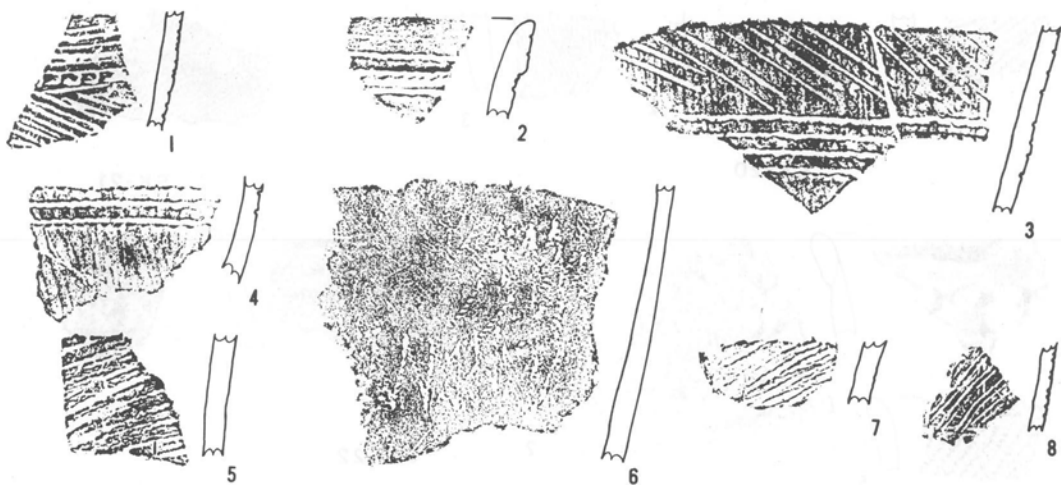
SK-9



SK-11

10CM

第286图 第7·8·9·11号土壤出土土器拓影图



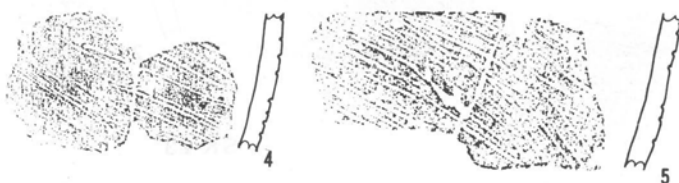
SK-11



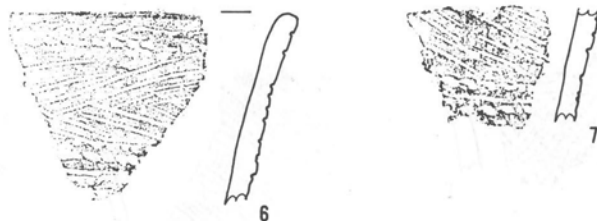
SK-15



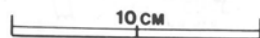
SK-16



SK-17



SK-19



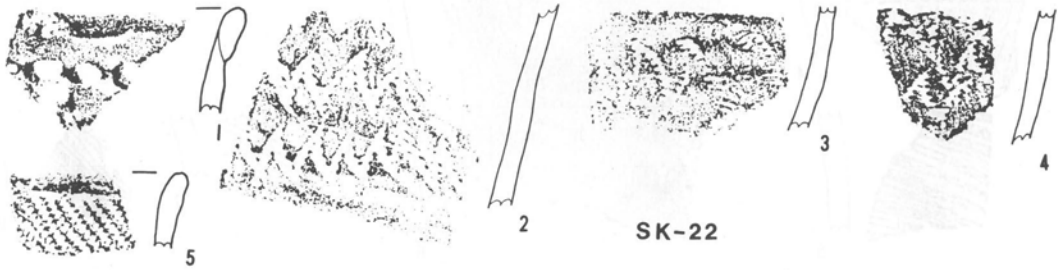
第287图 第11·15·16·17·19号土壤出土土器拓影图



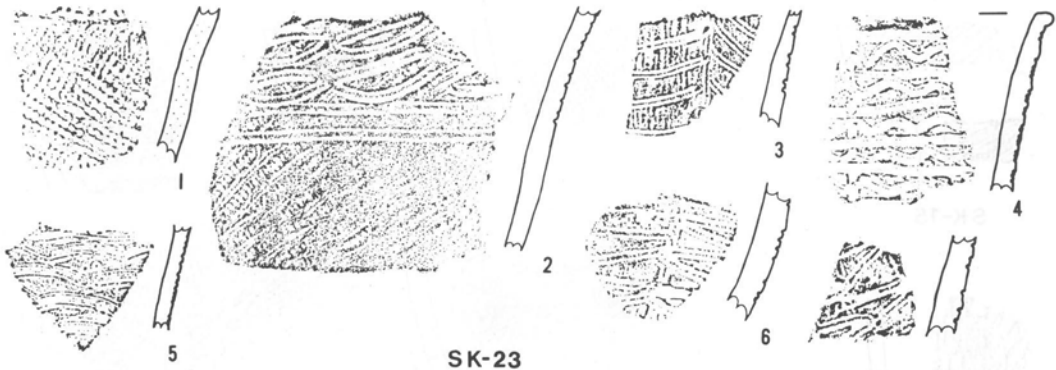
SK-20



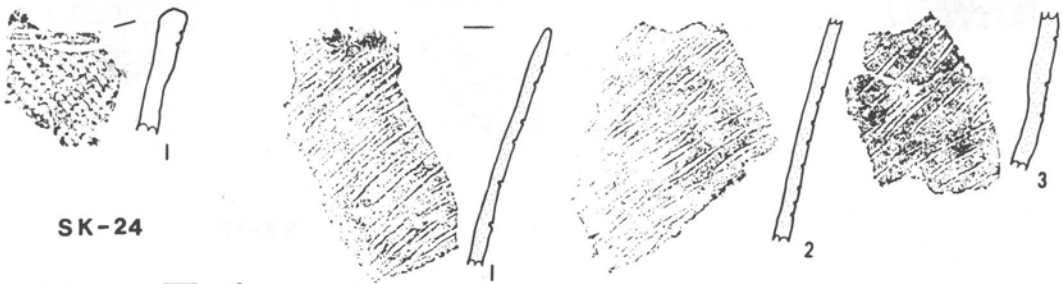
SK-21



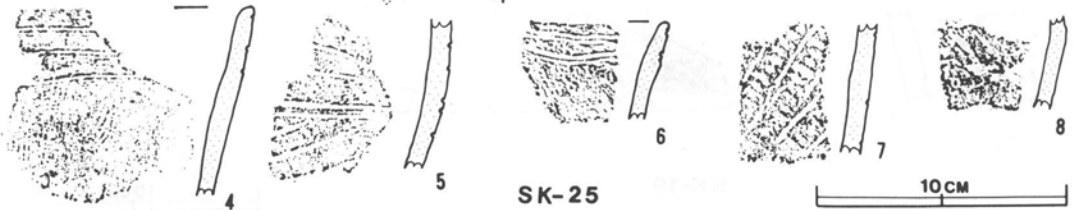
SK-22



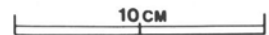
SK-23



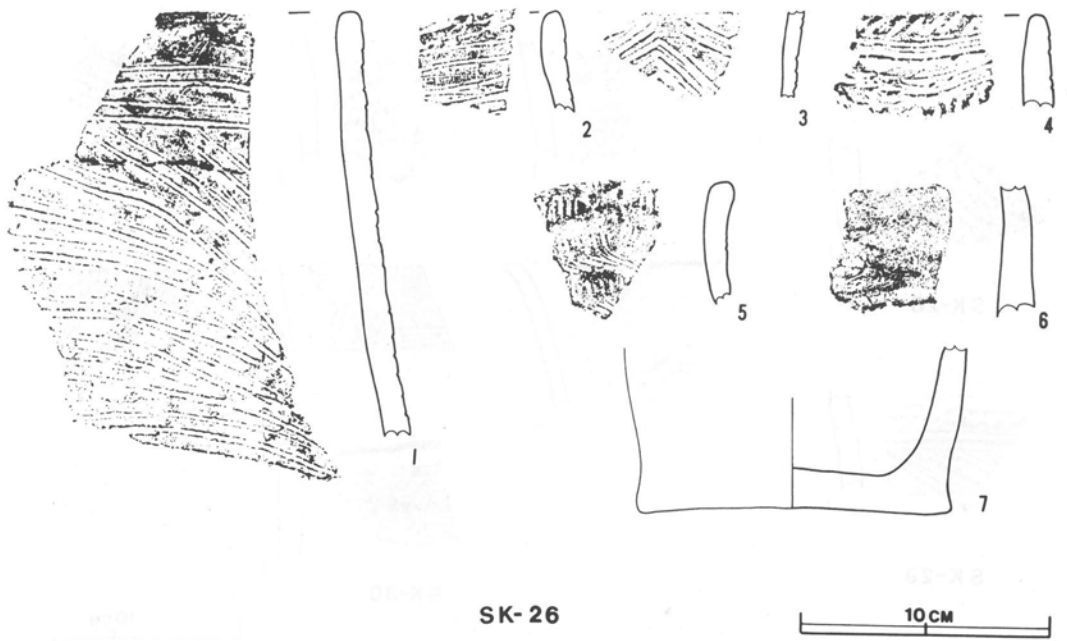
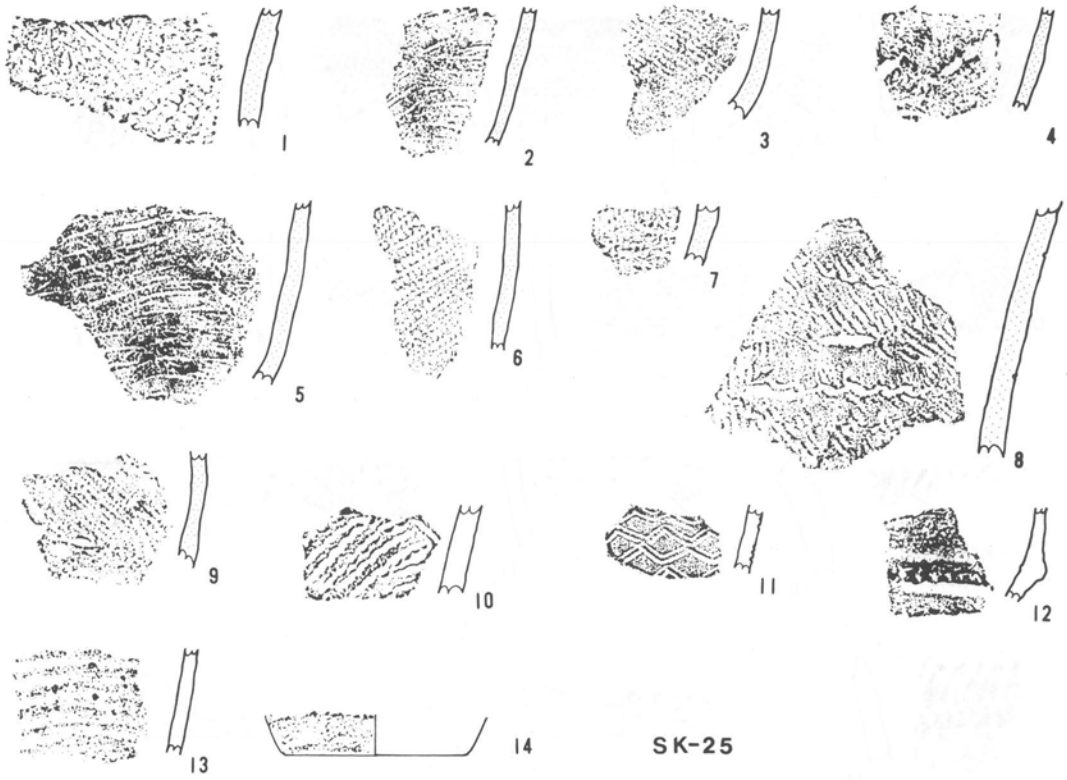
SK-24



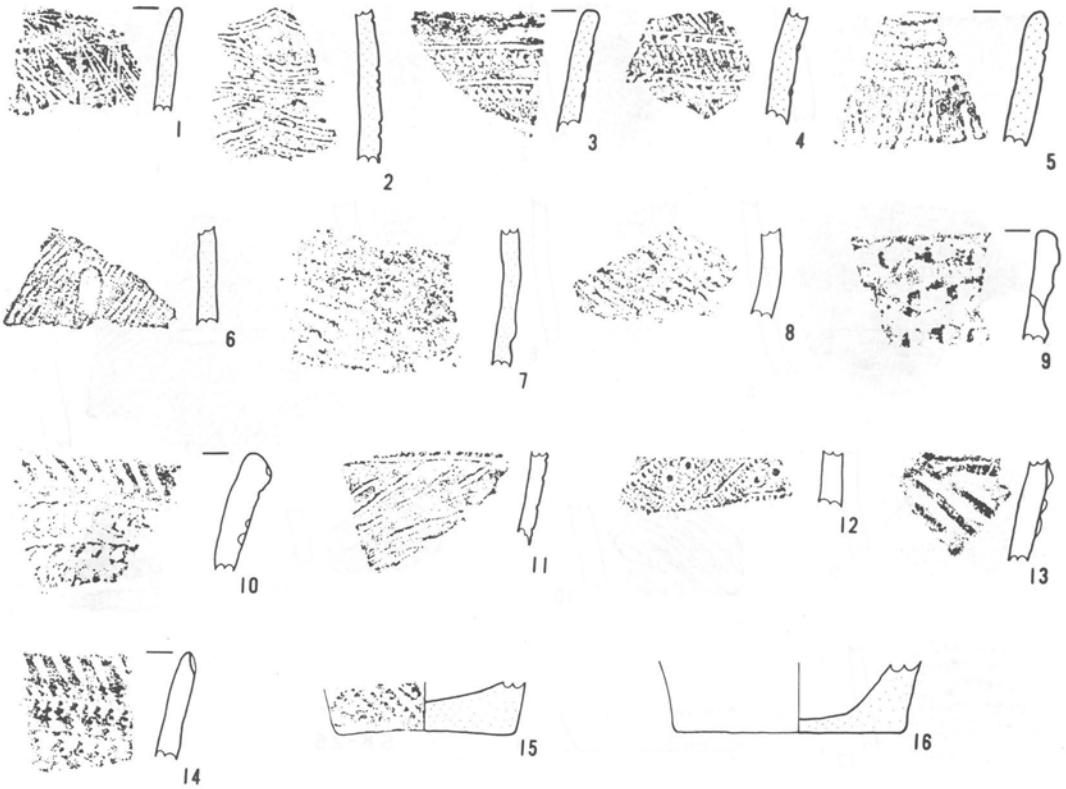
SK-25



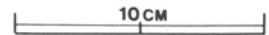
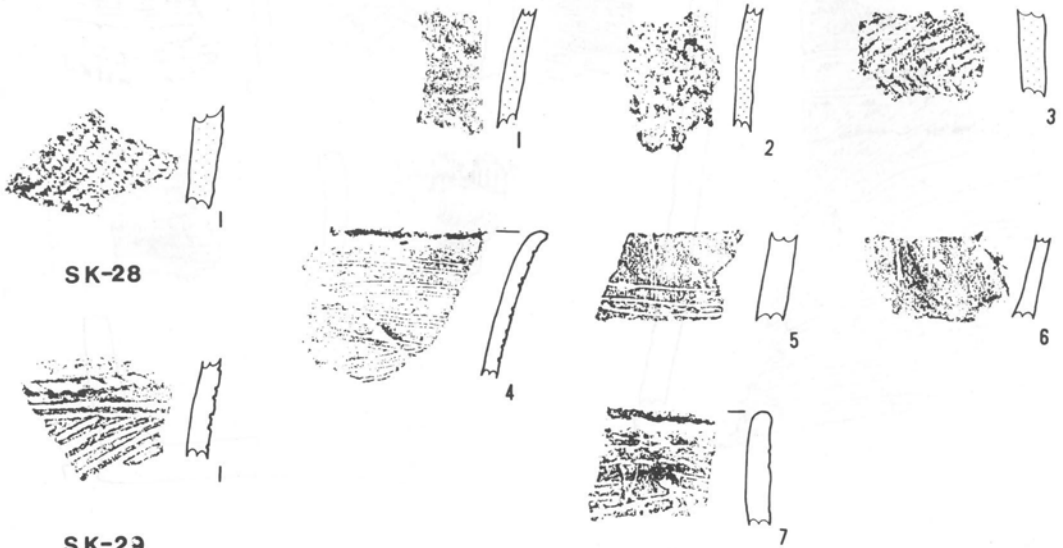
第288图 第20~25号土壤出土土器拓影图



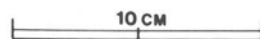
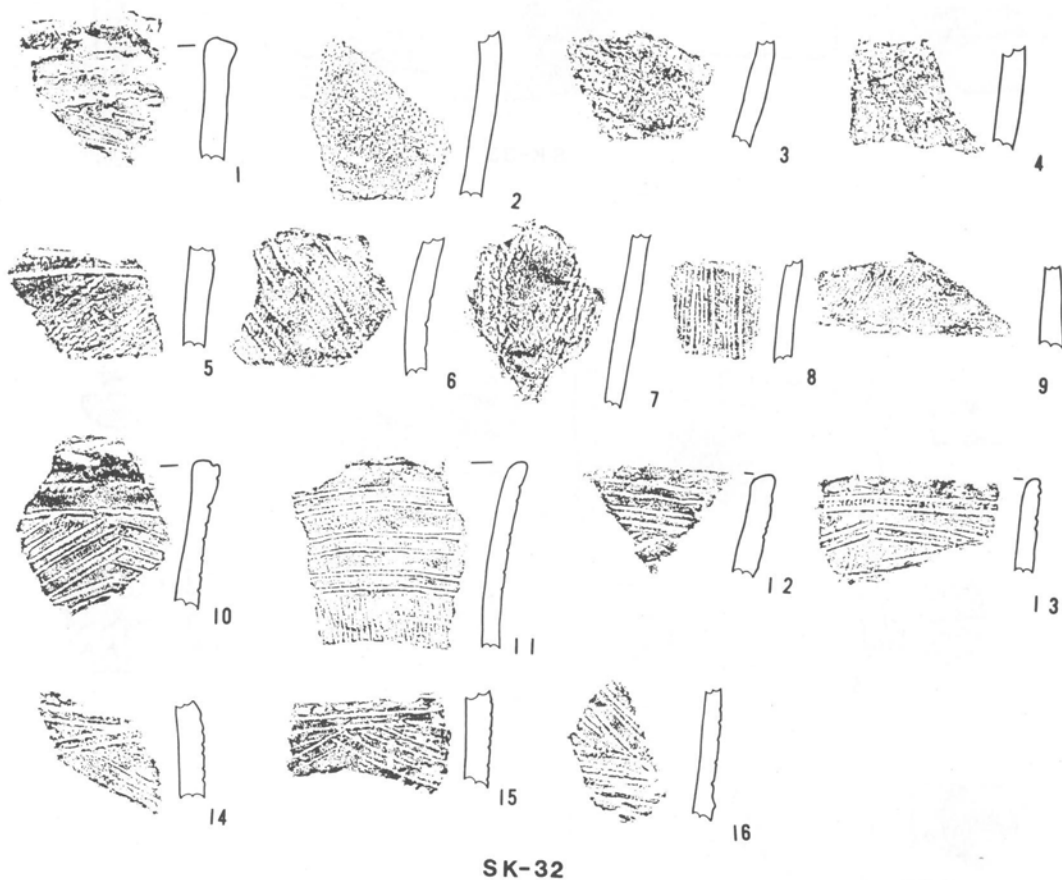
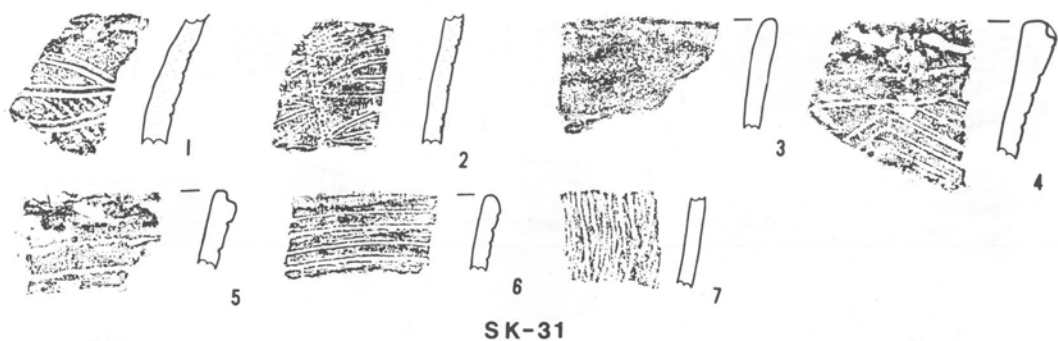
第289图 第25·26号土壤出土土器拓影图



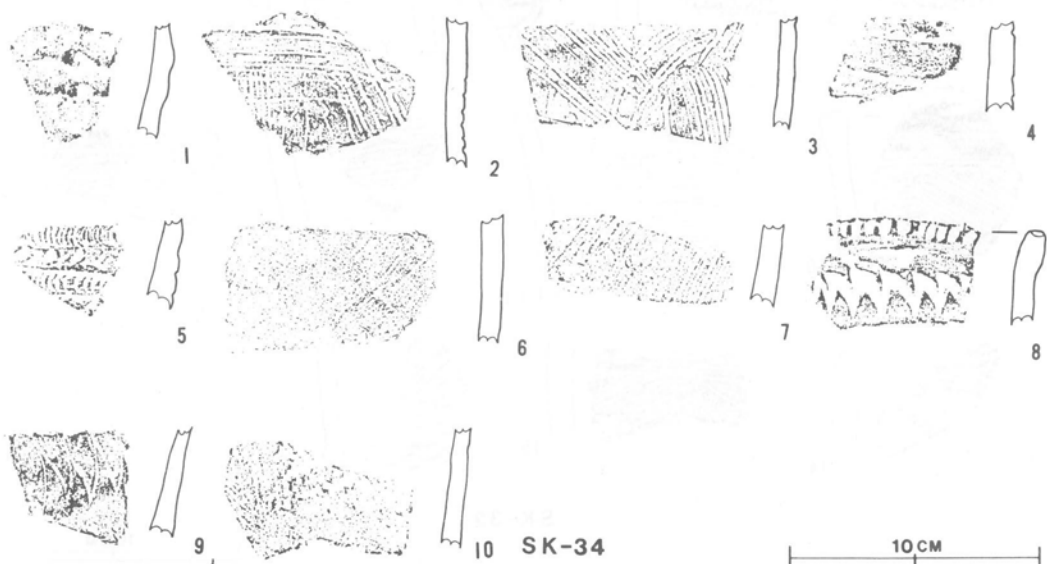
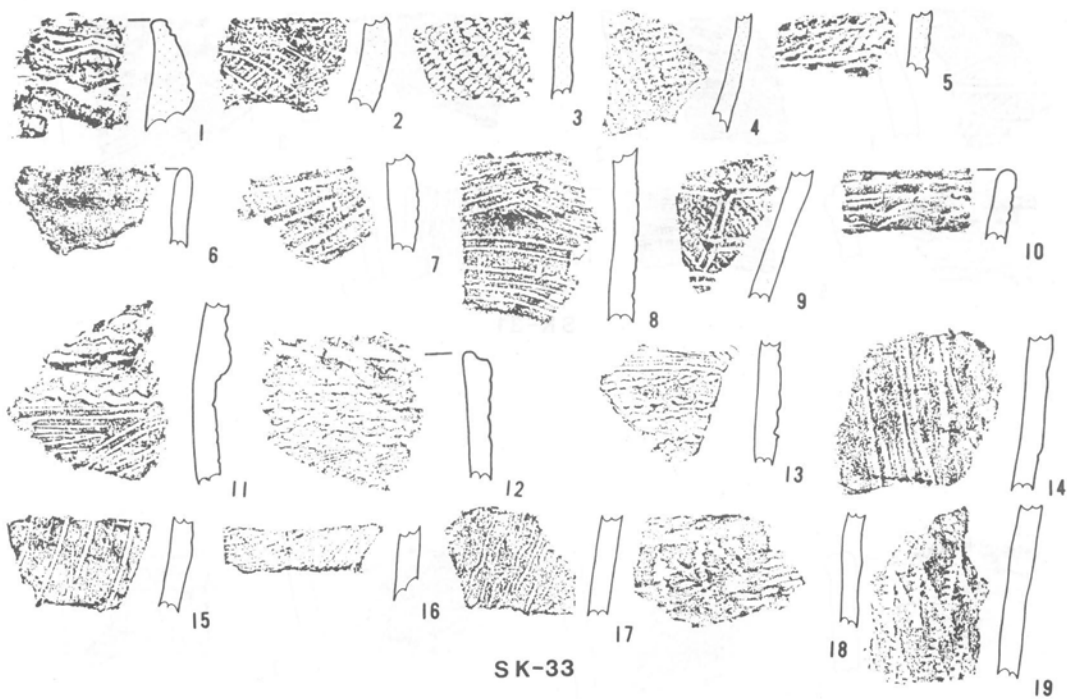
SK-27



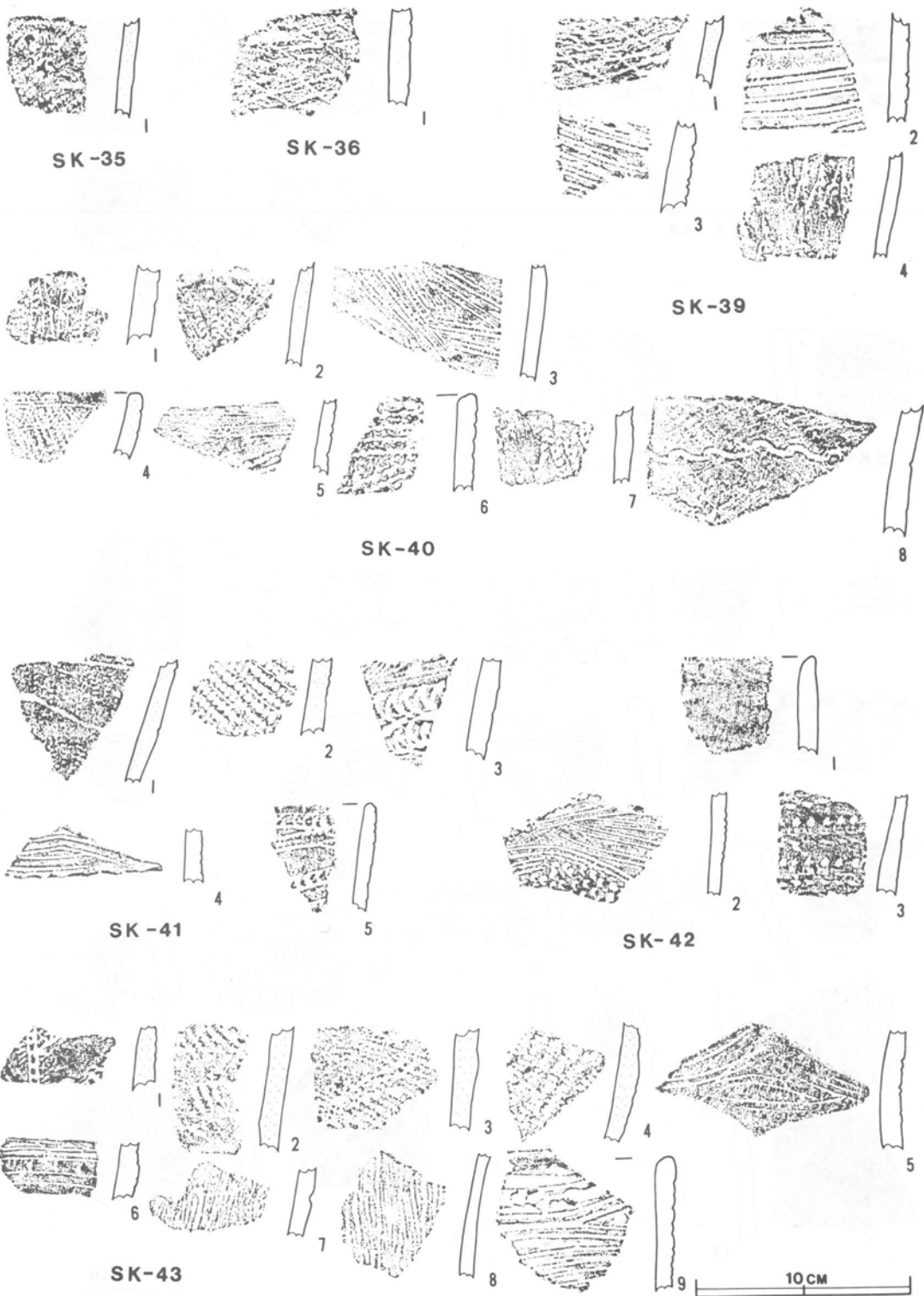
第290图 第27~30号土壤出土土器拓影图



第291图 第31·32号土壤出土土器拓影图



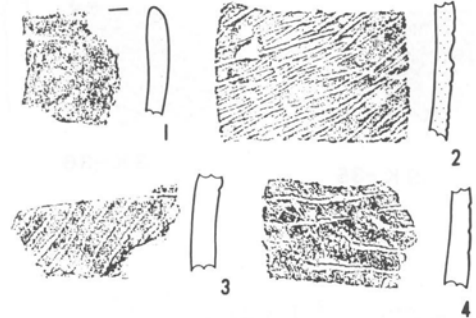
第292图 第33·34号土壙出土土器拓影图



第293图 第35·36·39~43号土壤出土土器拓影图



SK-44



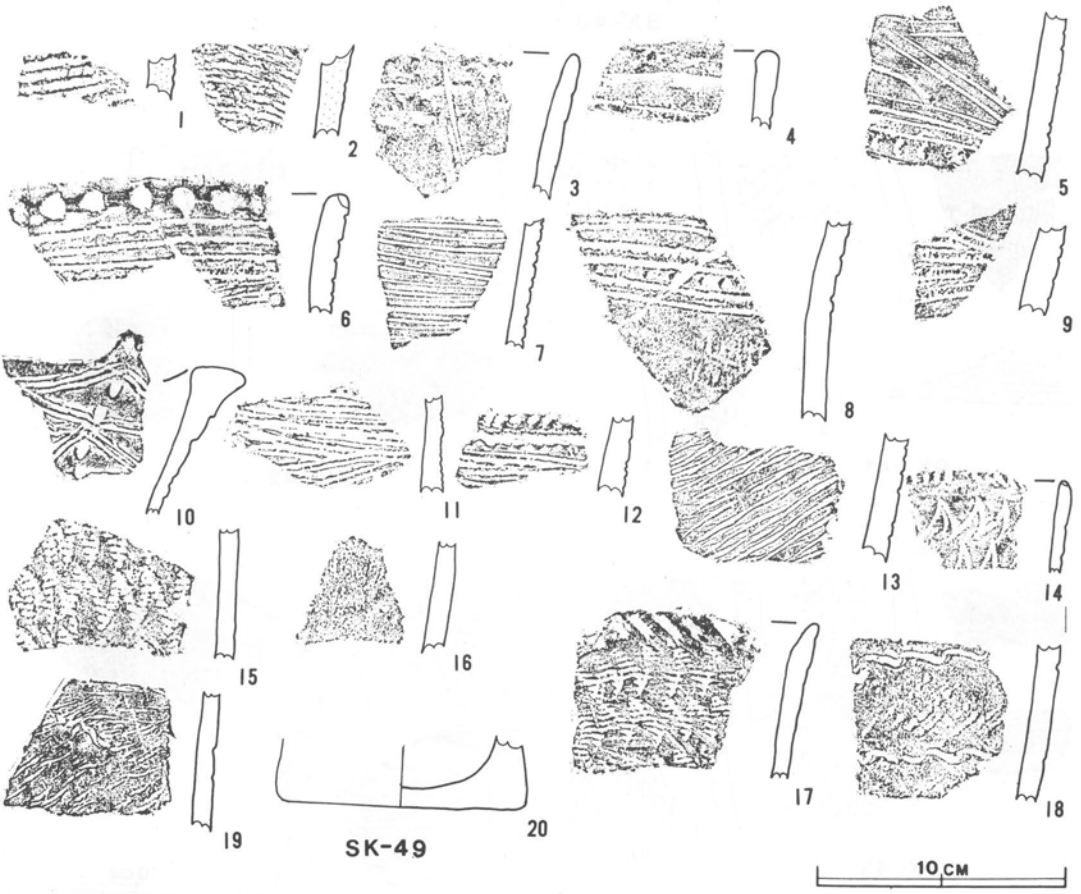
SK-45



SK-47



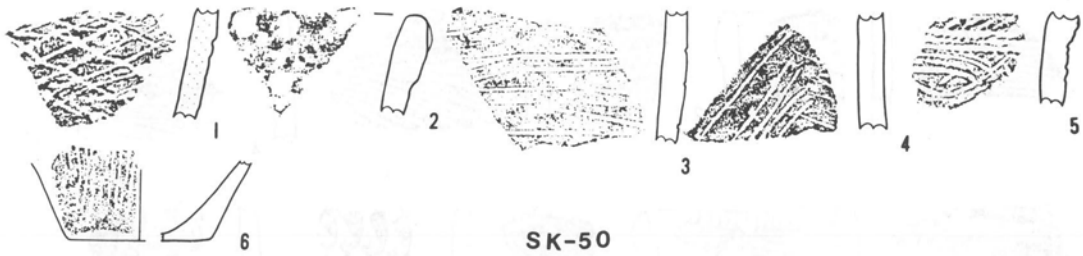
SK-48



SK-49

10 CM

第294图 第44・45・47~49号土壤出土土器拓影图

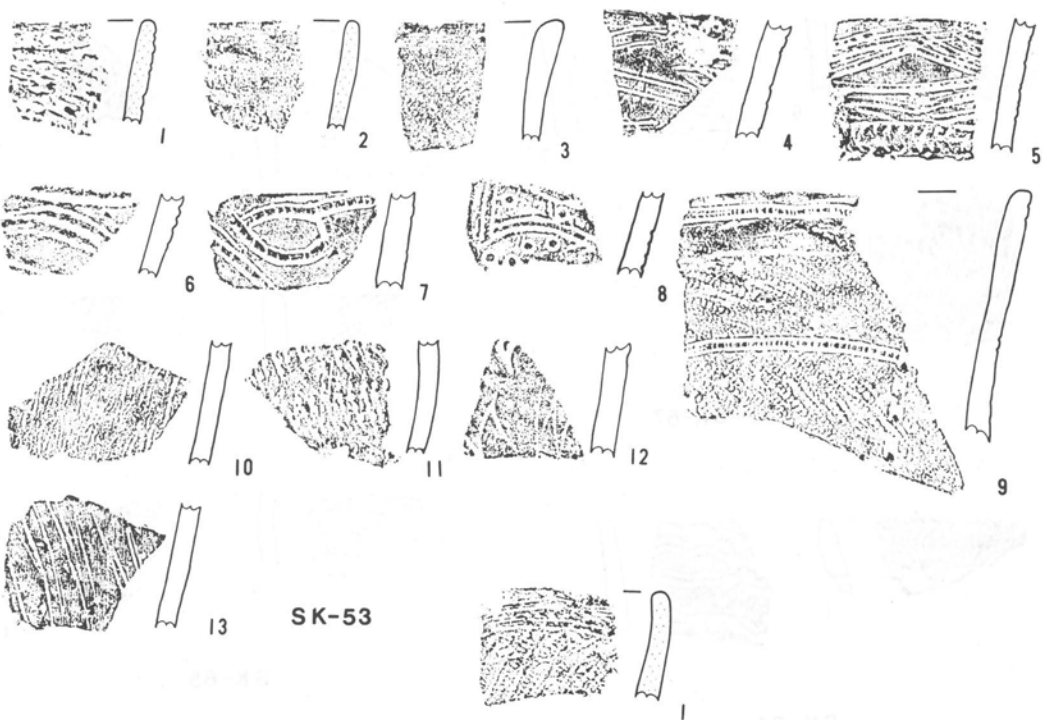


SK-50



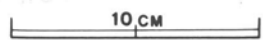
SK-51

SK-52

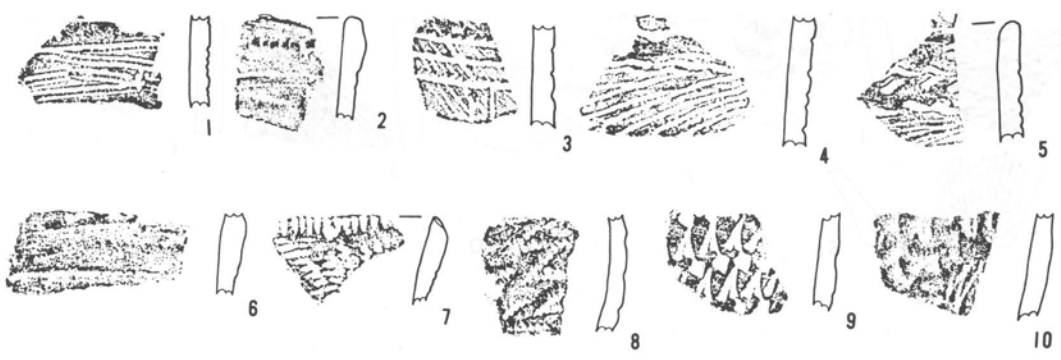


SK-53

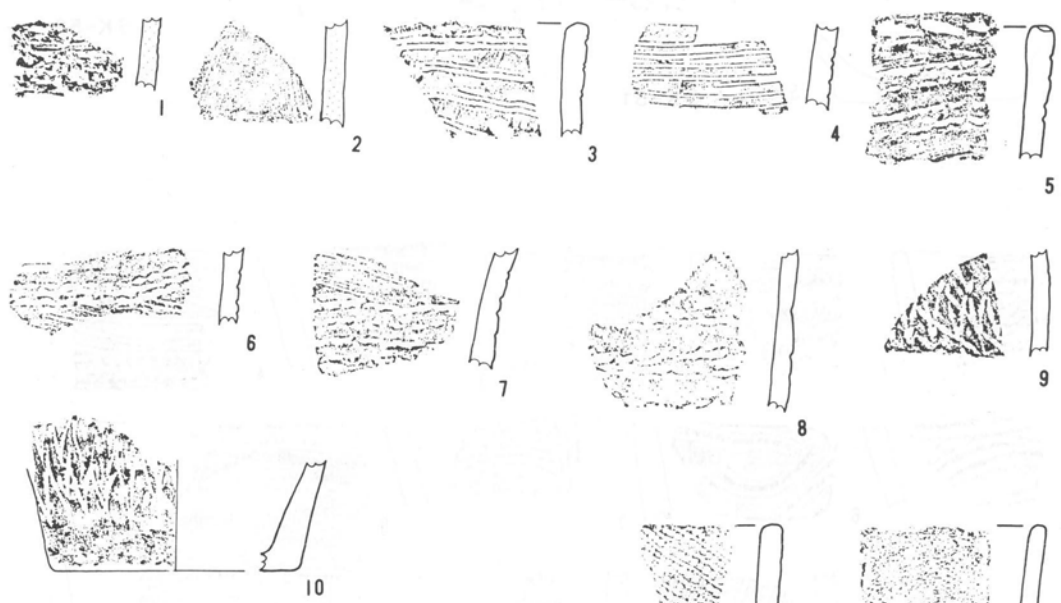
SK-54



第295图 第50~54号土壤出土土器拓影图



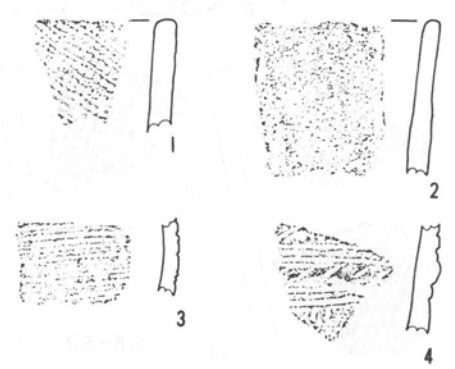
SK-55



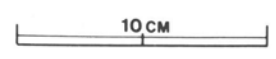
SK-57



SK-64



SK-65



第296图 第55·57·64·65号土壤出土土器拓影图

3 方形周溝状遺構

第1号方形周溝状遺構（第297図）

本遺構は大調査区B2区に確認されたもので、南西に向かって低く傾斜している遺跡の西端に位置し、北側に5号住居跡、南東側に13号住居跡が存在する。

南北方位はN-5°-Wでごくわずかに西に傾く。平面形状は、長軸7.8m・短軸7.2mと東西方向が南北方向より若干長いがほぼ正方形を呈している。外辺・内辺ともに概して直線をなしているが、南側の一部にふくらみがみられる。各コーナーは隅丸形を呈し、南東コーナーは特に丸みを帯びている。掘りこみ方は「 \sqcup 」形で、溝は完全に一周する。周溝の上幅は100~110cm・底面の幅は50~100cm・深さは40~54cmを測る。北東コーナー付近の底面は幅が狭く、南側のふくらみ部が最も深くなっているが底面はほぼ平坦で、方体部側の立ちあがり外周部側より急である。溝内の覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土・黒褐色土・褐色土が自然堆積しており、いずれもよく締っている。

方体部に2基の土壘（74・75号）が存在するが、いずれも出土遺物は縄文土器片で積極的に主体部として認定できない。

本遺構に関する遺物の出土はなかったが、溝内と方体部から多量の縄文前期の土器片が出土している。

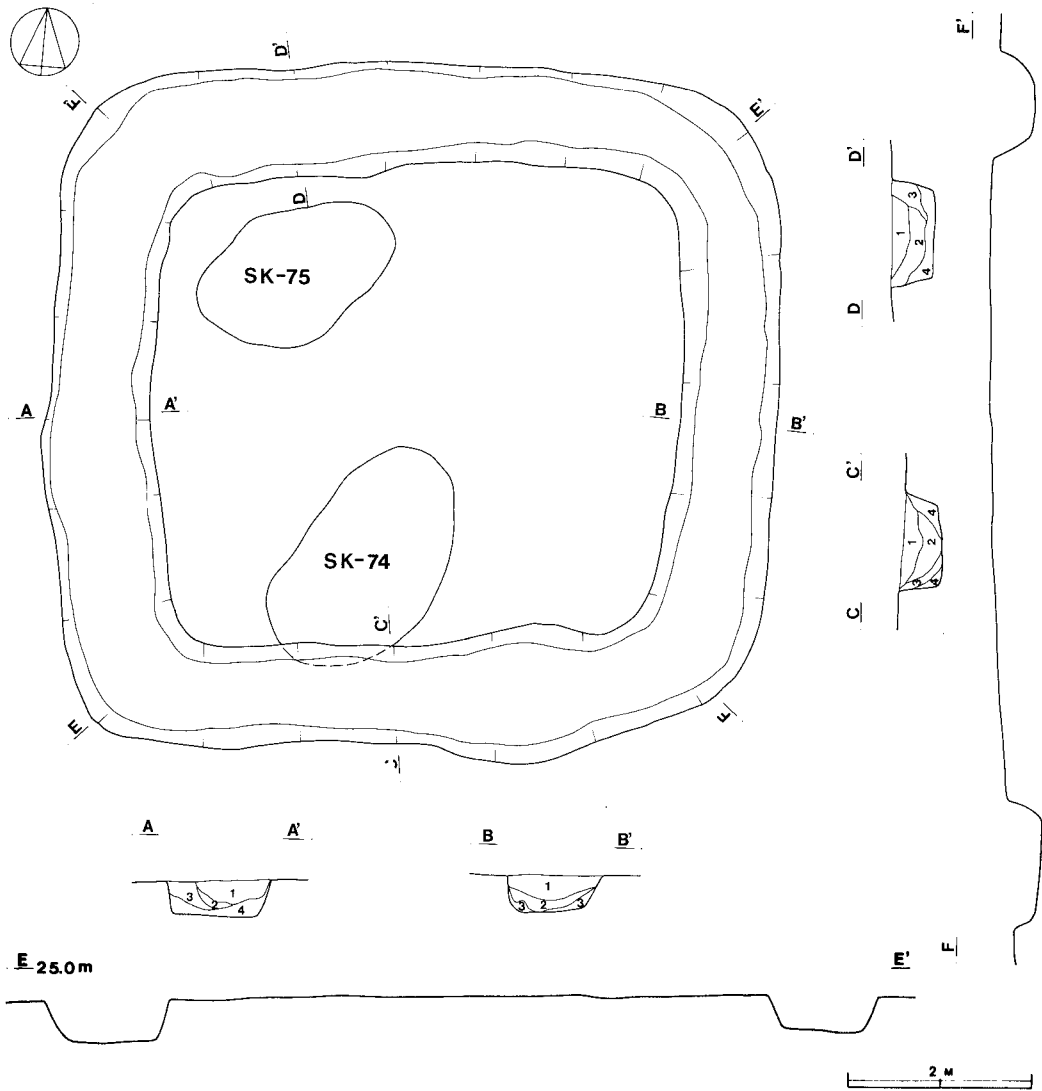
第2号方形周溝状遺構（第298図）

本遺構は大調査区C2・C3区にかけて確認されたもので、遺跡のほぼ中央に位置し、3号方形周溝状遺構・60号住居跡と重複しており、東側に58号住居跡、西側に62号住居跡が存在する。重複遺構の新旧関係は、60号住居跡が最も古く、本遺構が最も新しい。

南北方位はN-4°-Eでごくわずかに東側に傾く。平面形状は、南北6m・東西6.4mの東辺が南辺より1m程短い不整隅丸方形を呈している。各辺とも直線的で、コーナーは隅丸形を呈し、南西コーナーが外にはり出している。溝は完全に一周し、周溝の上幅は45~60cm・底面の幅は35~45cm・深さは15~25cmを測る。北東コーナー付近が最も底面の幅が広い。底面はほぼ平坦で、方体部側の立ちあがり外周部側より急でほぼ垂直に立ちあがっている。溝内の覆土は、上層に暗褐色土、中・下層に褐色土が自然堆積しており、北溝の一部に黒褐色土・極暗褐色土の堆積もみられる。全体的に締りのある土層である。

方体部や溝内に土壘もなく、主体部は検出されなかった。

本遺構に関する遺物の出土はなかったが、縄文土器の小破片が少量出土している。



第1号方形周溝状遺構土層解説

A-A'

1. 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・黒褐色土粒子・黒褐色土ブロックを含む。
2. 褐色 ローム粒子・黒色土ブロックを含む。
3. ♪ ローム粒子を含む。
4. ♪ ローム粒子を多量に含む。

B-B'

1. 暗褐色 ローム粒子・黒褐色土粒子・黒褐色土ブロックを含む。
2. 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック・暗褐色土ブロックを含む。
3. ♪ ローム粒子を含む。

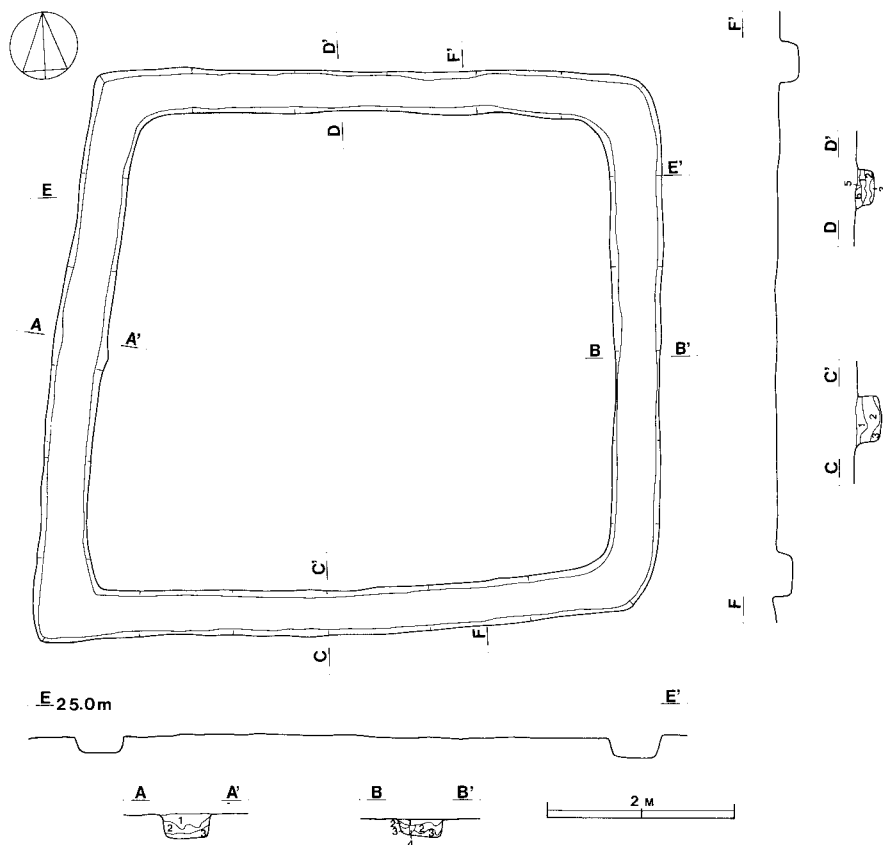
C-C'

1. 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
2. 褐色 ローム小ブロックを含む。
3. ♪ ローム粒子(多量)・ローム小ブロックを含む。
4. ♪ ローム粒子を多量に含む。

D-D'

1. 暗褐色 ローム粒子・黒褐色土粒子を含む。
2. 黒褐色 ローム粒子を含む。
3. 褐色 ローム粒子・暗褐色土粒子を含む。
4. ♪ ローム粒子を多量に含む。

第297図 第1号方形周溝状遺構実測図



第2号方形周溝状遺構土層解説

A-A', B-B', C-C', D-D'

- | | | | |
|--------|--------------|---------|--------------|
| 1. 暗褐色 | ローム粒子を含む。 | 4. 〃 | ローム、攪乱されている。 |
| 2. 褐色 | 焼土粒子・炭化物を含む。 | 5. 極暗褐色 | ローム、砂を含む。 |
| 3. 〃 | ローム | 6. 黒褐色 | 黒色土ブロックを含む。 |

第298図 第2号方形周溝状遺構実測図

第3号方形周溝状遺構（第299図）

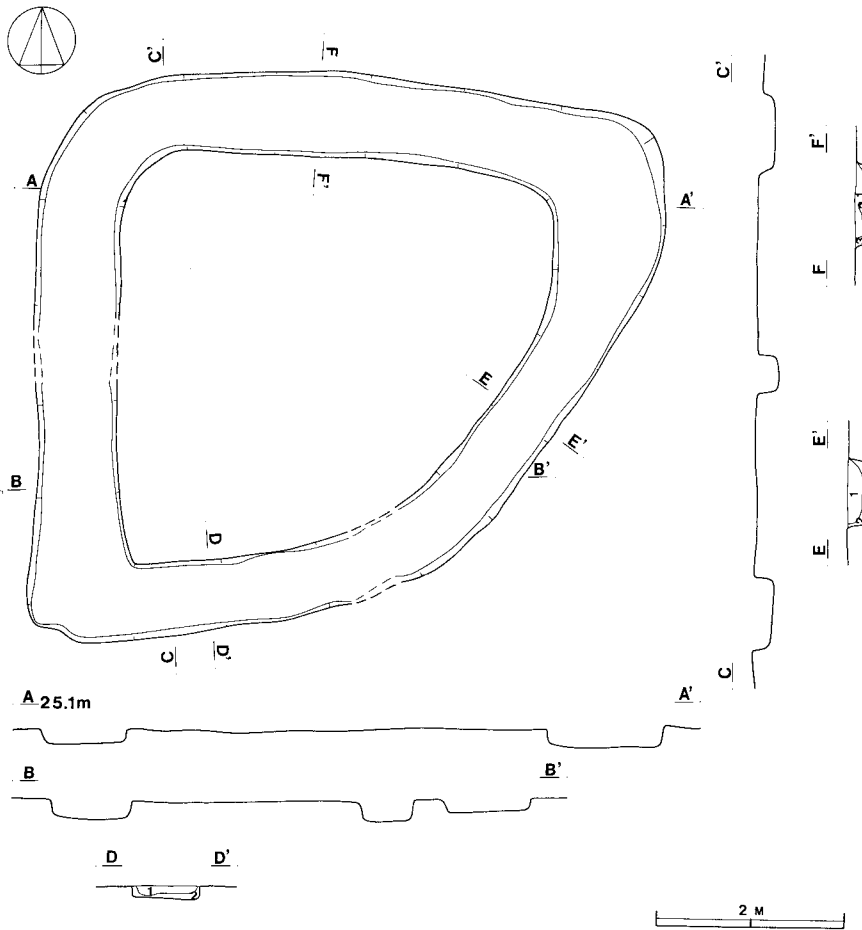
本遺構は大調査区C2・C3区にかけて確認されたもので、遺跡のほぼ中央に位置し、2号方形周溝状遺構・60号住居跡と重複しており、東側に59号住居跡、西側に61号住居跡が存在する。

平面形状は、北辺が6.4m・西辺が5.9mと長く、東辺・南辺が極端に短い不整逆台形を呈している。北辺・西辺は直線的だが、それ以外は弧状を描き、コーナーは隅丸形を呈す。溝は完全に一周し、周溝の上幅は70~120cm・底面の幅は60~110cm・深さは15~20cmを測る。北東コーナーのところが最も広い。掘りこみ方は「U」形で、底面はほぼ平坦であり、方体部側の立ちあがり外周部側よりも急でほぼ垂直に立ちあがっている。溝内の覆土は、ローム粒子を含む褐色土・暗褐色土が自然堆積しており、ごく一部に黒褐色土の堆積もみられる。全体的に締りのある土

層である。

周溝の北東コーナーに土壌（64号）が存在するが、遺物の出土もなく主体部として認定できない。

本遺構に関する遺物の出土はなかったが、北東コーナー構内の覆土中から集中的に縄文土器の小破片が出土している。



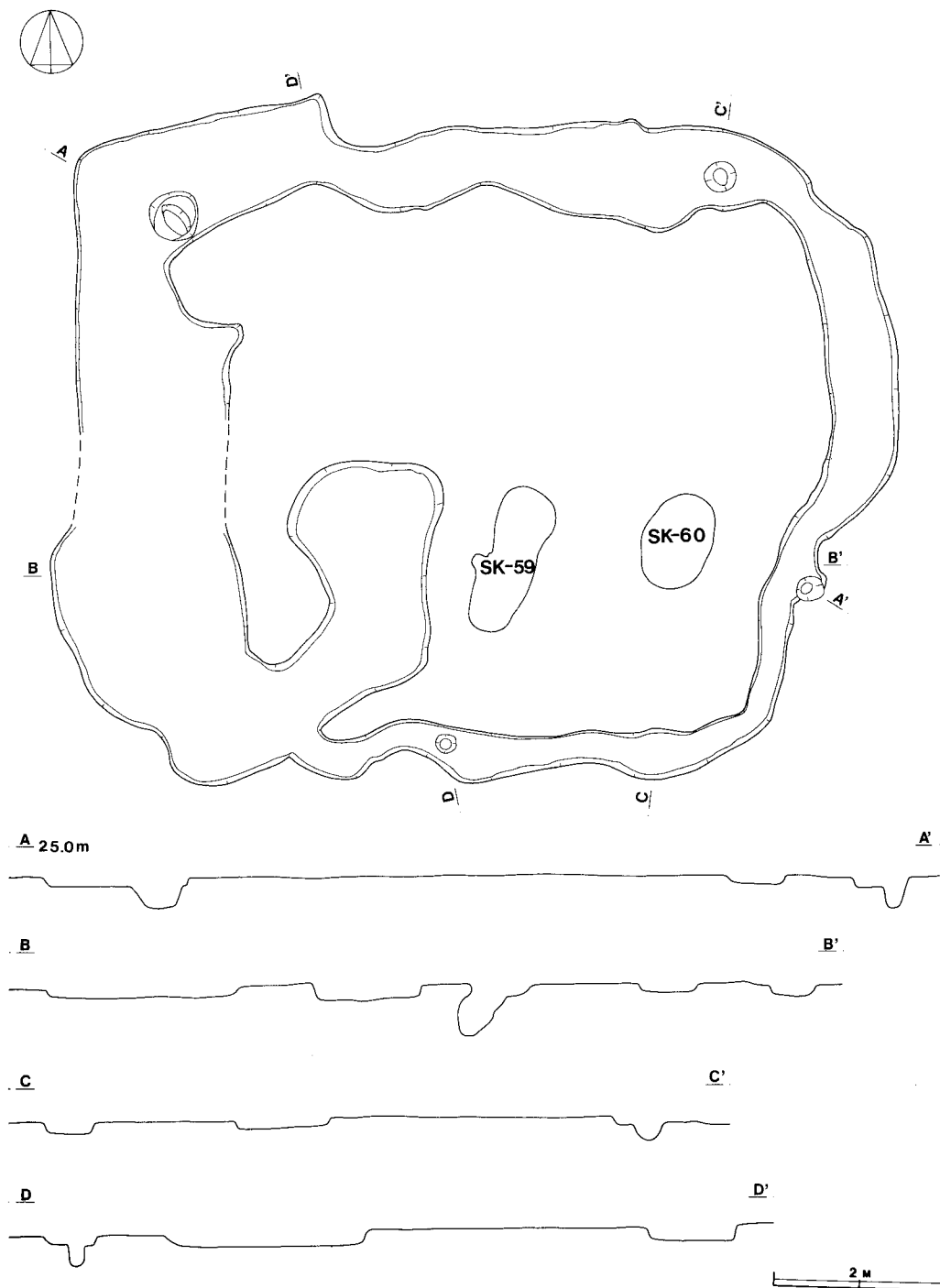
第3号方形周溝状遺構土層解説

- | | |
|---|---|
| <p>D-D', F-F'</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色 ローム粒子を含む。 2. 〃 ローム粒子・ローム小ブロックを含む。 3. 〃 ローム粒子・暗褐色土ブロックを含む。 | <p>E-E'</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む。 2. 褐色 ローム小ブロック・暗褐色土ブロックを含む。 |
|---|---|

第299図 第3号方形周溝状遺構実測図

第4号方形周溝状遺構（第300図）

本遺構は大調査区D3区に確認されたもので、遺跡の南部に位置し、北側に58号土壌が存在する。
本遺構内南西部に日本住宅公団の三角点がある。



第300図 第4号方形周溝状遺構実測図

各辺とも蛇行し溝の幅も一定していないが、長方形状を呈している。南北方位はN-2°-Wを指し、長軸約9.5m・短軸約7.5mと東西方向が南北方向より2m程長い。溝自体蛇行しているが一周しており、南西コーナー付近は方体部側に大きく入りこんでいる。周溝の上幅は西溝が最も広く2.2m、南溝から東溝の南側部分が最も狭く35cmを呈す。深さは10~20cm程で、底面はほぼ平坦であり、方体部側の立ちあがり外周部側より急でほぼ垂直に立ちあがっている。溝内の覆土は1層だけで褐色土が堆積している。

方体部に2基の土壇(59・60号)が存在するが遺物の出土はなく、主体部とは認定できない。本遺構からの遺物の出土は皆無であった。

第4章 ま と め

今回発掘調査を実施した「兵崎遺跡」・「大谷津A遺跡」・「対馬塚遺跡」・「大谷津B遺跡」・「大谷津C遺跡」・「外山遺跡」は石岡市の南東部に位置し、恋瀬川と園部川に挟まれた石岡台地を二分する山王川を望む標高24m前後のほぼ平坦な台地縁辺部に立地している。沖積低地との比高差は6～15mを測り、現況はほとんど畑地として利用されていた。

調査の結果、遺構は縄文時代前期・中期、弥生時代後期、古墳時代前期・後期の住居跡や土壙とその他に方形周溝状遺構等が検出された。遺物は縄文時代早期・前期・中期、弥生時代、古墳時代前期・後期、歴史時代の土器群や石器類の出土がみられた。かなりの長期間にわたって生活が営まれていたことをうかがわせる。特に「外山遺跡」は複合遺跡で、縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物が数多く検出されている。

ここでは各遺跡を一括して、遺構と遺物に分けてまとめてみたい。

遺構について

石岡南台地区の各遺跡から検出された遺構は、下記のとおりである。

遺構 \ 遺跡	兵 崎 遺 跡	大谷津A遺跡	対馬塚遺跡	大谷津B遺跡	大谷津C遺跡	外 山 遺 跡	計
住 居 跡	1	1	4	5	0	64	75
土 壙	16	28	71	46	5	75	241
方形周溝状遺構	2	3	0	0	0	4	9
溝	1	0	0	0	0	0	1

1 竪穴住居跡

発掘調査を実施した75軒の住居跡は、すべてが同一時期に構築し使用されたものではなく、出土遺物等からみて次の6つの時期に大別できる。その内訳は次のようである。

- 縄文時代前期前半（関山・黒浜期）……4軒
- 縄文時代前期後半（諸磯・浮島期）……37軒
- 縄文時代中期前半（下小野・阿玉台期）……4軒
- 弥生時代後期（長岡・十王台期）……12軒
- 古墳時代前期（五領期）……15軒
- 古墳時代後期（鬼高期）……3軒

住居跡一覽表

遺跡名	住居跡番 号	調 査 区	規 模(m) 長軸×短軸	形 状	主軸方向	壁高 (cm)	P数 (柱穴)	炉 カマド	貯蔵穴	壁 溝	出土遺物	時 期	関 連 図 版
兵 崎	1	B1区i8・j8・i9・j9	3.95×3.45	隅 丸 方 形	N-51°W	13~ 27	27	地床炉	○			弥生後代 期	第8・9図
大谷津A	1	C1区f0・g0 C2区f1・g1	4.7×3.7	不 整 四 边 形	N-53°W	30~ 40	24	地床炉			深鉢	縄文時代 前 (浮島)	第18~ 24図
対馬塚	1	A2区j5 B2区a5	3.2×2.3	不 整 橢 円 形	N-2°W	15~ 20	2	地床炉				縄文時代 前 (関山)	第36・ 37図
	2	B2区h5・i5・i6	3.2	不 整 隅 丸 方 形	N-10°W	10~ 15	25					縄文時代 中 期	第38・ 39図
	3	B3区i2・j2	3.6×3.3	隅 丸 台 形	N-75°W	10~ 17	18		○			縄文時代 中 期	第40図
	4	B2区d0・e0	3.5×3.2	隅 丸 台 形	N-56°W	20~ 30	22					縄文時代 中 期 (阿玉台)	第41・ 42図
大谷津B	1	A2区a8・a9・b8・b9	3.7	円 形		20~ 35	20 (10)	地床炉			深鉢	縄文時代 前 (浮島)	第52~ 56図
	2	A2区b0 A3区a1・b1	3.0×2.65	橢 円 形	N-30°E	12~ 25	29 (9)					縄文時代 中 期 (阿玉台)	第57・ 58図
	3	A3区a1・a2	2.9×2.7	隅 丸 方 形	N-90°	10~ 15	8					縄文時代 前 (浮島)	第59・ 60図
	4	A2区a0 A3区a1	1.9×1.6	橢 円 形	N-75°E	10~ 13	5					縄文時代 前 (浮島)	第61・ 62図
	5	A3区c1・c2・d1・d2	3.7	隅 丸 方 形	N-28°W	10~ 13	24 (10)	地床炉			深鉢	縄文時代 前 (浮島)	第63~ 66図
外 山	1	A2区h9・h0・i9・i0	4.5	方 形	N-22°W	65	5 (4)	カマド		○	甕, 坏, 土玉	古墳時代 後 (鬼高)	第77~ 79図
	2	A2区i8・i9・j8・j9 A3区a8・a9	6.45×5.8	隅 丸 方 形	N-30°W	30~ 35	7 (4)	地床炉	○		壺, 器台 敲石	古墳時代 前 (五領)	第80~ 83図
	3	A2区j7 B2区a7	4.5×3.75	隅 丸 方 形	N-32°E	45~ 50	5 (4)	地床炉			甕, 紡錘車 敲石	古墳時代 前 (五領)	第84・85 87・88図
	4	B2区b8・c8	5.4×4.7	隅 丸 方 形	N-42°W	15~ 30	9 (6)				壺, 紡錘車	弥生時代 後 (十玉台)	第86・89 90図
	5	B2区b4・b5・c4・c5 c6・d4・d5・d6	7.0×6.1	隅 丸 方 形	N-42°W	40~ 60	9 (4)	地床炉	○	○	甕, 壺, 埴, 紡錘車	古墳時代 前 (五領)	第91~ 97図
	6	B2区b6・b7・c6・c7	3.8×3.1	隅 丸 長 方 形	N-35°E	20	6					縄文時代 前 (浮島)	第98・ 99図
	7	B2区c7・d7	3.6×3.2	隅 丸 方 形	N-38°E	10	16					縄文時代 前 (浮島)	第100・ 101図
	8	B2区c7・c8・d7・d8	4.0×3.5	隅 丸 方 形	N-47°E	10~ 30	14				尖頭器, 石皿	縄文時代 前 (浮島)	第102・ 104図
	9	B2区f6・f7・g6・g7	(5.7×5.2)	橢 円 形	N-10°E	10	3 (3)	地床炉				縄文時代 前 (浮島)	第103・ 105・106 109図
	10	B2区h5・h6・i6	3.4×3.2	隅 丸 方 形	N-18°E	15	8	地床炉				縄文時代 前 (黒浜)	第107・ 108図
	11	B2区g6・g7・h6・h7	(5.8×5.0)	隅 丸 方 形	N-70°W	20~ 25	30	地床炉			尖頭器, 石斧	縄文時代 前 (浮島)	第109~ 112図

遺跡名	住居番号	調査区	規模(m) 長軸×短軸	形状	主軸方向	壁高 (cm)	P数 (柱穴)	炉 カマド	貯蔵穴	壁溝	出土遺物	時期	関 連 図 版
外山	34												
	35	B3区 b7・b8 c7・c8	3.4×3.2	隅方 丸形	N-0°	15~ 20	10 (4)				石皿	縄文時代 前期 (浮島)	第193・ 194図
	36	B3区 c7・c8 d7・d8	3.8	円形		10~ 20	8 (6)				磨斧, 磨石	縄文時代 前期 (浮島)	第195・ 196図
	37	A3区 i4・i5 j4・j5	6.0×5.5	隅方 丸形	N-43°W	10~ 20	21				凹石, 敲石	縄文時代 前期	第197~ 200図
	38	A3区 i4・i5 j4・j5				10~ 20		地床炉			凹石, 敲石	縄文時代 前期 (浮島)	第197~ 200図
	39	A3区 d6・d7 e6・e7	5.4	方形	N-40°W	30~ 70	5 (4)	カマド	○	○	甕, 壺, 甗 高坏	古墳時代 後期 (鬼高)	第201~ 203図
	40	A3区 j3・j4・j5 a3・a4・a5 B3区 b3・b4	6.6×6.3	隅方 丸形	N-30°E	30	30	地床炉		○	磨斧, 凹石 石皿	縄文時代 前期 (浮島)	第182・ 204~ 206図
	41	A3区 f1・f2 g1・g2	3.5×2.6	長方形	N-83°E	70	18 (10)	カマド	○		壺, 甗, 坏	古墳時代 後期 (鬼高)	第207~ 209図
	42	A3区 j1・j2 B3区 a1・a2					22	地床炉				縄文時代 前期	第210・ 211図
	43	B3区 a5・a6 b5・b6	3.7×3.2	不整 隅方	N-6°E	5~ 7	6					縄文時代 前期	第212・ 213図
	44	B4区 h5・i5・i6 j5・j6	5.9×5.4	隅方 丸形	N-55°W	30~ 40	7 (4)	地床炉	○	○	紡錘車 敲石	弥生時代 後期 (十五台)	第214~ 216図
	45	C4区 a2・a3 b2・b3	5.45×4.85	隅方 丸形	N-30°W	50~ 60	6 (4)	地床炉			壺, 紡錘車 砥石, 石斧	弥生時代 後期 (十五台)	第217~ 219図
	46	B3区 i0 B4区 i1	(4.0×3.8)	隅方 丸形	N-60°W	40					壺, 高坏 土玉	古墳時代 前期 (五領)	第220~ 222図
	47	B2区 h6・h7 i6・i7	3.6×2.7	隅方 長方形	N-0°	5~ 10	7				深鉢, 凹石	縄文時代 前期 (浮島)	第223~ 225図
	48	C4区 a9・a0・b9・b0 c9・c0	6.5×5.8	隅方 丸形	N-45°W	55~ 65	13 (10)	地床炉	○		壺, 高坏 敲石	古墳時代 前期 (五領)	第226・ 227図
	49	C4区 e0・f0 C5区 e1・e2・f1	4.5	隅方 丸形	N-87°E	10~ 30	9 (4)	地床炉	○		甕, 高坏 磨石	古墳時代 前期 (五領)	第228・ 229図
	50	C4区 f8・f9・g8・g9 h8・h9	6.55×6.0	隅方 丸形	N-20°W	30~ 60	11	地床炉	○		碗, 器台	古墳時代 前期 (五領)	第230~ 232図
	51	C4区 f6・g5・g6・g7 h5・h6・h7	6.45×6.0	隅方 丸形	N-62°W	75	8 (6)	地床炉	○		壺, 碗	古墳時代 前期 (五領)	第233~ 236図
	52	C4区 f1・f2・f3 g1・g2・g3・h2	6.2×6.1	方形	N-62°W	45~ 50	7 (4)	地床炉	○		甕, 壺, 碗 器台	古墳時代 前期 (五領)	第237~ 239図
53	C3区 a0・b0 C4区 a1・b1	4.6×4.0	隅方 丸形	N-3°W	20~ 40	11 (4)	地床炉	○		凹石	弥生時代 後期	第240・ 241図	
54	B3区 i0・j9・j0 C3区 a9・a0	5.4×4.4	楕円形	N-2°E	5~ 30	12					縄文時代 前期 (浮島)	第242~ 244図	
55	B3区 j0・j0 B4区 j1・j1	6.0×4.0	楕円形	N-85°W	10~ 20	10 (5)					縄文時代 前期	第244・ 245図	

遺跡名	住居跡 番号	調 査 区	規模(m) 長軸×短軸	形 状	主軸方向	壁高 (cm)	P数 (柱穴)	炉 カマド	貯蔵穴	壁溝	出土遺物	時 期	関 連 図 版
外 山	12	B2区 f7・f8・g7 g8・h7・h8	4.5	円 形		5~ 20	21					縄文時代 前 期 (浮島)	第109・ 113・114 図
	13	B2区 f5・f6・g5・g6		不定形		15~ 20	8				土器片 鉢	縄文時代 前 期 (浮島)	第109・ 115・116 図
	14	B2区 a9・a0・b8・b9 b0・c9・c0	7.0×5.5	隅 丸 台 形	N-41°W	20~ 30	30	地床炉			深鉢, 凹石	縄文時代 前 期 (浮島)	第117~ 123図
	15	B2区 c6・d5・d6				5~ 30	8				深鉢	縄文時代 前 期 (浮島)	第124~ 127図
	16	B2区 c9	3.3	円 形		20~ 30	9	地床炉			深鉢, 鉢, 礫器	縄文時代 前 期 (浮島)	第128~ 131図
	17	B2区 e8・e9・f8	(4.6×4.4)	隅 丸 方 形	N-8°E	20	12	地床炉				縄文時代 前 期 (浮島)	第132~ 134図
	18	B2区 f7・f8			不定形		10	5			礫器	縄文時代 前 期 (浮島)	第132・ 135図
	19	B2区 f0・g0 B3区 f1・g1	4.35×4.2	隅 丸 方 形	N-60°E	15~ 50	14 (8)	地床炉			壺	古墳時代 前 (五領)	第136~ 138図
	20	A2区 i0・j0 A3区 i0・j1・j2	4.6×4.4	隅 丸 方 形	N-36°W	10~ 40	17 (4)	地床炉	○		紡錘車, 磨斧	弥生時代 後 期	第139~ 142図
	21	B2区 i4・i5 j4・j5	5.1×4.9	隅 丸 方 形	N-55°E	20~ 40	7				鉢, 凹石 石斧	縄文時代 前 期 (浮島)	第143~ 149図
	22	B2区 a0・b0 B3区 a1・b1	4.3×3.3	隅 丸 方 形	N-63°E	20~ 30	16	地床炉	○		敲石	縄文時代 前 期 (浮島)	第150~ 152図
	23	A3区 e7・e8・f7・f8	3.5×3.2	不 整 円 形		10~ 15	9 (4)	地床炉	○		壺	弥生時代 後 期	第153~ 155図
	24	A3区 h7・h8・i7・i8	5.6×5.4	隅 丸 方 形	N-47°W	30~ 40	24	地床炉			紡錘車, 小型磨斧	古墳時代 前 (五領)	第156~ 158図
	25	B2区 j9	3.0×2.5	不定形		5~ 10	0					縄文時代 前 期	第159・ 160図
	26	A3区 j8・j9・j0 B3区 a8・a9・a0	6.0×5.3	隅 丸 方 形	N-10°W	50~ 60	16 (4)	地床炉			壺, 紡錘車, 砥石	弥生時代 後 期	第161~ 165図
	27	B3区 a0・b0 B4区 a1・b1	3.6×3.2	楕円形	N-28°E	10	10	地床炉			深鉢	縄文時代 前 期 (黒浜)	第166~ 168図
	28	A3区 h1・h2・i1・i2	4.2×3.3	楕円形	N-65°W	15	10					縄文時代 前 期 (黒浜)	第169・ 170図
	29	B3区 c1・c2・d1・d2	5.1×4.2	不 整 楕円形	N-5°E	10~ 15	21 (7)					縄文時代 前 期 (浮島)	第171~ 173図
	30	B3区 b2・b3・c2 c3・d2	4.7×4.4	隅 丸 方 形	N-80°E	25	18				礫器, 敲石	弥生時代 後 期	第174~ 176図
	31	B3区 a1・a2・a3 b1・b2・b3	5.7×5.5	隅 丸 方 形	N-86°E	10~ 25	37 (12)	地床炉	○		凹石, 石皿	縄文時代 前 期 (浮島)	第177~ 181図
	32	B3区 a2・a3	5.0×4.7	隅 丸 方 形	N-9°W	30~ 40	18	地床炉			深鉢, 磨斧, 凹石	縄文時代 前 期 (浮島)	第182~ 185図
	33	A3区 j2・j3	5.4×5.0	隅 丸 方 形	N-0°	40~ 50	10			○		縄文時代 前 期 (浮島)	第182・ 186~ 192図

遺跡名	住居跡番号	調査区	規模(m) 長軸×短軸	形状	主軸方向	壁高 (cm)	P数 (柱穴)	炉 カマド	貯蔵穴	壁溝	出土遺物	時期	関連 図版
外山	56	C3区 d ₉ ・d ₀ e ₉ ・e ₀	4.2×3.9	隅丸 方形	N-55°W	25~ 55	7 (4)	地床炉			壺	古墳時代 前期 (五領)	第246~ 248図
	57	C3区 g ₇ ・g ₈ ・g ₉ h ₇ ・h ₈ ・h ₉	5.0	円形		25~ 35	16	地床炉			凹石	弥生時代 後期	第249・ 250図
	58	C3区 d ₂ ・d ₃ e ₂ ・e ₃	4.5	円形		5~ 20	11 (6)	地床炉			深鉢 小形磨斧	縄文時代 前期 (浮島)	第251~ 253図
	59	C3区 c ₂ ・c ₃ d ₂ ・d ₃	4.4×4.2	不整隅 丸方形	N-15°E	15~ 20	13					弥生時代 後期	第254・ 255図
	60	C3区 c ₀ ・d ₀ ・e ₀ C3区 c ₁ ・d ₁ ・e ₁	6.0	不整 方形	N-37°W	15	15	地床炉				縄文時代 前期	第256・ 257図
	61	C2区 c ₈ ・c ₉ ・c ₀ d ₈ ・d ₉ ・d ₀	4.3	不整 門形		10~ 20	14 (6)	地床炉	○		紡錘車, 石皿 片状耳飾	弥生時代 後期	第258~ 260図
	62	C2区 c ₀ ・d ₀ ・e ₀ C3区 c ₁ ・d ₁ ・e ₁	5.4×5.1	不整隅 丸方形	N-40°E	40~ 50	16 (6)	地床炉	○		小形磨斧 凹石, 石皿	縄文時代 前期 (浮島)	第261~ 265図
	63	C4区 c ₃ ・c ₄ ・d ₃ d ₄ ・e ₃	4.6×4.4	隅丸 方形	N-25°W	55~ 60	7 (4)	地床炉	○		台付甕, 壺 砥石	古墳時代 前期 (五領)	第266~ 268図
	64	C4区 h ₈ ・i ₇ ・i ₈ i ₉ ・j ₈	5.1×4.65	隅丸 方形	N-59°W	20	11	地床炉			碗, 紡錘車	古墳時代 前期 (五領)	第269~ 271図
	65	C4区 j ₀ ・C5区 j ₁ D4区 a ₀ ・D5区 a ₁	4.2	隅丸 方形	N-65°W	20~ 35	10 (4)	地床炉	○		高杯	古墳時代 前期 (五領)	第272 273図

(1) 縄文時代

○縄文時代前期前半 (関山・黒浜期)

関山式土器を出土している「対馬塚遺跡」の1号住居跡, 黒浜式土器を出土している「外山遺跡」の10・27・28号住居跡の4軒が属する。外山の28号住居跡を除いてはいずれも地床炉を有している。長径方向も28号住居跡が大きく西側に傾いているのに対して, 他の3住居跡は東側を指している。規模は対馬塚遺跡の1号住居跡が長径3.2mで最も小さく, 外山遺跡の28号住居跡が長径4.2mと最も大きい。しかし, 石岡南台の住居跡群の中では小規模の部類に入る。形状をみると, 隅丸形状を呈す外山遺跡の10号住居跡を除いては楕円形状を呈している。これらを考えると, 外山遺跡の28号住居跡は遺物の出土も少なく, 他の黒浜期の住居跡とは時期的にも多少の隔りがあるのではないだろうか。

○縄文時代前期後半 (諸磯・浮島期)

「大谷津A遺跡」1軒(1号住居跡), 「大谷津B遺跡」4軒(1・3・4・5号住居跡), 「外山遺跡」32軒(6・7・8・9・11・12・13・14・15・16・17・18・21・22・25・29・31・32・33・35・36・37・38・40・42・43・47・54・55・58・60・62号住居跡)の計37軒の住居跡が属する。このうち, 炉を有さない住居跡は20軒, 地床炉を有する住居跡は17軒である。

長径（長軸）方向の在り方をみると、円形状の住居跡を除き、炉を有さない住居跡はN - 90° - W（大谷津B 3号住居跡）からN - 55° - E（外山21号住居跡）の範囲内に収まり、その間に145°の幅がある。炉を有する住居跡はN - 70° - W（外山11号住居跡）からN - 86° - E（外山31号住居跡）の範囲内に収まり、その間に156°の幅がある。そして、N - 0° ~ 10° - E間に8軒の住居跡が集中して存在している。そのうち6軒は炉を有さない。とにかく17軒の住居跡群の長径（主軸）方向は西側に傾くものと東側に傾くものとはほぼ同数で一定したものはないようである。

規模は、長径（長軸）が5 ~ 6 mを測る住居跡が最も多くて14軒、次いで3 ~ 4 mを測る住居跡が11軒とこの二つのグループで約68%を占めている。最も小さいのは大谷津B遺跡の4号住居跡で長径1.9m・短径1.6mを呈しているが、これは小竪穴状遺構と考えられる。また、大谷津B遺跡の3号住居跡・外山遺跡の25号住居跡も長軸3m以下と小さい。外山遺跡の14・40・60号住居跡は長軸が6m以上を呈す大規模な住居跡であり、いずれも炉を有している。これらの住居跡は出土遺物、2か所以上に存在する炉の在り方、大きさや配列に規則性のない数多くのピット群等から、増築や建て替えが行われ、かなりの長期間使用されたことをうかがわせる。

次に平面形状をみると、隅丸形状を呈す住居跡が15軒と最も多い。これらは、炉を有さないものと有しているものと半々である。次いで楕円形状が6軒、円形状が5軒、隅丸長方形形状が2軒と続く。その他には、隅丸台形状（外山14号住居跡）、不整形（外山60号住居跡）を呈している住居跡も存在する。不定形が7軒ある。楕円形状を呈している住居跡6軒のうち、外山遺跡の9号住居跡を除いた5軒は炉を有していない。やはり形状にも一定性はみうけられないようである。

外山遺跡について考えてみると、遺構に伴って出土する土器片は覆土中からのものが多く、床面上からのものは数少ない。また、埋甕等に用いられた土器の出土もない。したがって、住居跡が廃絶されてからある程度の埋積が行われた後に土器片が捨てられたと思われる。時期的には、住居跡の使用時期と出土土器の間にはいくらかの時間的ずれが生じていることになる。浮島期の住居跡にも、繊維土器や諸磯式土器の出土がみられる。何らかの混入であろう。大谷津A・B遺跡では単独で検出されているが、外山遺跡では重複が激しく、32軒が同時期に営まれたものでないことは明白である。また、先に述べたように一軒の住居跡でも炉を1か所以上有すものや、炉と柱穴の重複がみられるものや、数多くのピットが検出されているものなど、増築あるいは建て替えが行われたことがうかがえる。ところで、これらの住居跡は同時に何軒位存在していたのだろうか。浮島I式に比定される撚糸文を有する土器を出土している住居跡は22軒ぐらいある。しかし、住居跡毎の重複があるのでそれを考慮して、遺跡中央に2軒、遺跡北部に5軒、遺跡北西部に5軒ぐらいが1単位としてあげられるので、10~15軒ぐらいの集落が構成されていたのではないかと思われる。さらに遺跡の南側や東側は狩猟の場であり、北側・北東側・北西側の小支

谷には湧水点が存在していただろうし、漁撈の場でもあったことと推察される。だが、狩猟や漁撈に使用されたとされる石鏃や銛や土錘などの遺物がほとんど出土していないのはどういうことなのだろうか。使用されていなかったというよりは、棄てられずに移動の際に持ち去ったとも考えられる。

○縄文時代中期前半（下小野・阿玉台期）

「対馬塚遺跡」の2・3・4号住居跡と「大谷津B遺跡」の2号住居跡の4軒が属する。いずれも炉は有さず、長軸（長径）が3～3.6mと規模も小さい。長軸方向はN-75°-WからN-10°-Wと北西側に傾いている。平面形状は、不整隅丸方形（対馬塚2号住居跡）、隅丸台形状（対馬塚3・4号住居跡）、楕円形状（大谷津B2号住居跡）をそれぞれ呈している。確認面から床面までの深さは比較的浅く10～30cm程で、ロームの掘りこみもごくわずかである。おびたしい数のピットが検出されているが規則性もなく、支柱穴は不明である。

これらの住居跡はそれぞれ単独で検出されている。出土遺物は極少量でしかも細片が多く、床面もあまり踏み固められていないことから、1住居跡の使用期間はそれほど長いものではなかったと思われる。

（2）弥生時代

○弥生時代後期（長岡・十王台期）

「兵崎遺跡」の1軒の住居跡（1号）と「外山遺跡」の11軒の住居跡（4・20・23・26・30・44・45・53・57・59・61号）の計12軒が属する。

先ず主軸方向の在り方をみると、円形状の3軒を除き、外山遺跡の30・59号だけが東側に傾いているだけで、7軒の住居跡はN-55°-W（外山44号住居跡）からN-3°-W（外山53号住居跡）の範囲内に収まる。

規模は、ほとんどの住居跡が長軸4～6mを測り、最も小さいのは外山遺跡の23号住居跡で長径3.5m・短径3.2m、最も大きいのは外山遺跡の26号住居跡で長軸6m・短軸5.3mを呈している。長軸5m以上を測る住居跡は、増築や建て替えが行われて長期間使用されたものであろう。

平面形状は、75%にあたる9軒の住居跡が隅丸形状を呈し、3軒（外山23・57・61号住居跡）は卵形に近い不整円形を呈している。この期間の円形状を呈する住居跡の類例は少ないので、今後の類例の増加に伴って検討される問題であろう。兵崎遺跡1号住居跡、外山遺跡20・26・30・53・57・59号住居跡には、それぞれ10か所以上のピットが検出されている。支柱穴は規則的に配列されている4本が基本的のようであるが、6本の支柱穴を有している住居跡（外山4・61号住居跡）もみられる。また、確認面から床面までの深さは、最も深く掘りこまれている外山遺跡の26・45号住居跡が60cmを測る。残りの10軒は40cm以下である。

3軒の住居跡（外山4・30・59号住居跡）を除いた他の住居跡は、床面を10cm前後掘り窪め、焼土を含む楕円形状の地床炉を有している。

外山遺跡から検出されたこの時期の11軒の住居跡は、遺跡の北部に5軒、東部に4軒、中央部に2軒位置している。住居跡間の距離が最も接近しているのが53号住居跡と57号住居跡間で3.5m、最も離れているのが26号住居跡と30号住居跡間の20mである。北部の5軒と他の6軒の間には40mの距離があり、その間地は広場的な性格をもっていたのだろうか。しかし、その間地は地形的にみると1m程低い凹地を呈しており、腐植土が厚く堆積しているのが池か沼ではなかったかとも考えられる。凹地の南側に位置する住居跡は、ほとんどが十王台期に並行されるものであろう。

(3) 古墳時代

○古墳時代前期（五領期）

この時期の住居跡はいずれも「外山遺跡」から検出されており、15軒（2・3・5・19・24・46・48・49・50・51・52・56・63・64・65号住居跡）が属する。いずれも床面を10cm前後掘り窪めた楕円形状の地床炉を有している。

主軸方向の在り方をみると、19・49号住居跡を除いた他の13軒の住居跡はN-65°-W（65号住居跡）からN-20°-W（50号住居跡）の範囲内に収まり、その間に45°の幅がある。特にN-42°-WからN-65°-Wの23°間に9軒が集中している。つまり、当遺跡の五領期の住居跡は主軸方向がほぼ北西を指すように構築されていることが特徴となっている。

規模は、長軸が4～5mを測る住居跡が最も多くて7軒、次いで6～7mを測る住居跡が6軒とこの二つのグループで約87%を占めている。最も小さいのは56号住居跡で長軸4.2m・短軸3.9m、最も大きいのは5号住居跡で長軸7m・短軸6.1mを呈している。

平面形状をみると、この時期の住居跡は方形状を原則としているようで、52号住居跡を除いてはすべて隅丸を呈している。主柱穴は各コーナー内側に比較的規則正しく配列されている4本を有しているものが多い。しかし、各住居跡ともピット数は多い。また、確認面から床面までの深さは、最も深く掘りこまれている51号住居跡が75cmを測り、48号住居跡も60cm前後と深い。これに対して最も浅いものは64号住居跡で20cm程である。

出土遺物は5号住居跡から多くの土師器が検出されているが、他の住居跡からの土師器の出土は極端に少ない。しかもほとんどの住居跡から、土師器と弥生時代終末期の壺形土器や小形壺等が混在して出土している。編年の層準は示さず、床面からも同じように出土している例がある。5号住居跡の南側コーナー付近床面直上からは、土師器の甕形土器に重なった状態で十王台式土器の壺形土器が検出されている。このような遺物の出土状況、1住居跡としてピット数が多いことや2か所以上の炉を有していることなどを考えてみると、増築あるいは建て替えを行いながら、

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続的に生活が営まれてきたのではないのだろうか。十王台系の文化をもつ人々が当遺跡に長く住みつき、そこに新しい土器製作技術をもった人々が移住してきて旧人たちと交わり、この地域に新しい文化の胎動が起っていったのだろう。しかし、弥生時代終末期から古墳時代初頭への変遷の解明は今後に残された検討課題である。

○古墳時代後期（鬼高期）

「外山遺跡」から検出された1・39・41号住居跡が属する。3軒とも遺跡の北端部に位置しており、それぞれ単独で検出されている。各住居跡間の距離は、3軒のうち最も西方の1号住居跡から北東方向の41号住居跡まで8m、さらにそこから北東方向の39号住居跡まで15mを測る。直線に直すと23m間上に3軒が存在していることになる。

いずれもカマドを有し、1・39号住居跡は北壁、41号住居跡は東壁をわずかに切りこんで構築している。地形的にみると、カマドは小支谷に向かって傾斜している低い方に設けられている。1号住居跡は一辺4.5mの方形を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指している。39号住居跡は一辺5.4mの方形を呈し、主軸方向はN-40°-Wを指している。それに対し、41号住居跡は長軸3.5m・短軸2.6mの長方形を呈し、主軸方向はN-83°-Eを指している。1・39号住居跡はほぼ等間隔に規則的に4本の支柱穴が配列されている。41号住居跡は屋内に2本、屋外に8本の支柱穴を有している。明らかに形状・規模・主軸方向など前の2つの住居跡と異なっている。ところで、鬼高期の住居跡は五領期の住居跡に比して規模は全体的に小さくなっており、コーナーは隅丸からほぼ直角を示すようになり、確認面から床面までの深さも65~70cmを測り深くなっている。ロームを40cm前後掘りこんで構築されている。

出土遺物は土師器で、完形の坏や埴や甑などが検出されている。39号住居跡のカマドからは、支脚に使われたと思われる高坏も検出されている。また、3軒の住居跡の床面上に焼土・炭化材・焼土粒子・炭化粒子が堆積しており、焼失家屋ではないかと考えられる。

2 土 壙

「兵崎遺跡」16基、「大谷津A遺跡」28基、「対馬塚遺跡」71基、「大谷津B遺跡」46基、「大谷津C遺跡」5基、「外山遺跡」75基の計241基の土壙が検出された。これらのうち、対馬塚遺跡から検出された土壙のほとんどは重複関係にあり、本来の形状をかなり失っていると考えられる。

平面形状は、楕円形を呈しているものが土壙総数の56%にあたる134基と最も多い。各遺跡とも一番多い形状であり、特に対馬塚遺跡と外山遺跡ではその占められる比率が高い。次いで多いものが円形を呈しているもので58基を数える。そのうち大谷津B遺跡では、楕円形よりわずかに少ないだけで円形の占める比率は高い。その他には、長楕円形を呈しているものが対馬塚遺跡や

大谷津A遺跡から、隅丸方形を呈しているものが外山遺跡などからそれぞれ検出されている。

底面端から開口部までの壁面についてみると、立ちあがり緩やかなすり鉢状を呈しているものが142基と最も多く、土壌総数の59%を占めている。大谷津B遺跡では74%、外山遺跡では65%が緩やかな立ちあがりを呈している土壌群である。壁面がほぼ垂直に立ちあがっている筒状を呈しているものは63基あり、その中では対馬塚遺跡から21基検出されている。また、大谷津A遺跡ではすり鉢状を呈しているものより筒状を呈するものの方が多い。袋状を呈しているものは少なく、対馬塚遺跡から9基、外山遺跡から3基検出されただけである。

底面は平坦なものが圧倒的に多く、土壌総数の66%に当たる159基が該当する。各遺跡とも平坦な底面を有している土壌が一番多く、大谷津B遺跡の78%、外山遺跡の75%、大谷津A遺跡の70%の土壌は平坦な底面を呈している土壌群である。また皿状を呈している土壌も28基検出されている。これらの底面が平坦であったり皿状を呈す土壌は意図的に掘られたものであろうが、これに対して、底面に凹凸がみられる起伏状を呈している土壌も54基存在している。特に対馬塚遺跡に多くみられる。この底面に起伏がある土壌は、どちらかというとな根跡的な要素をもった攪乱ピットとみられる。出土遺物も皆無に等しい。

土壌の深さはどうであろうか。深さ21~30cmを測る土壌が最も多くて50基を数える。次いで41~50cm、31~40cm、11~20cmと続いている。この10~50cmの間の深さを有する土壌は、土壌総数の68%を占めている。つまり、石岡南台の土壌群は比較的浅いものが多いと言えるかもしれない。しかし、住居跡と土壌、土壌と土壌などの重複がみられて、上部が掘りこまれているものがあるので一概に断定はできない。深さ1mを超えるものも、対馬塚遺跡で5基、大谷津B遺跡で2基、外山遺跡で2基の計9基を数える。そのうち、大谷津B遺跡の26号土壌は1.8mと最も深い。

土壌総数の27%に当たる64基の土壌が底面に1か所以上の小ピットを有している。底面が平坦で、壁面がすり鉢状を呈するものが多く、比較的浅いものにもみられる。これらのピットは何を意味しているのだろうか。中央部にはほとんどピットは位置していない。

石岡南部の各遺跡から検出された土壌群を分析してみたが、外山遺跡の土壌群以外はほとんど遺物の出土がみられず、しかも遺物が出土している土壌でも縄文土器片が数点覆土中から検出される程度で、時期は不明なものが多い。また、土壌群を形状・壁面・底面・深さ・ピットの有無から分類しても、規則性や共通性が見い出せない。分布状況もほとんど散在的で、住居跡と土壌の関連性も見い出せない。土壌のもつ性格についても、貯蔵用説・土器製作に関する説・墓塚説・居住説などいろいろ言われているが、土壌の機能や性格なりを解明すべき確証は得られなかった。今回の発掘調査で検出された土壌群は、一定の機能を有していたものではなくて様々な用途のために掘られたものであろうと思われる。

3 方形周溝状遺構

「兵崎遺跡」から2基、「大谷津A遺跡」から3基、「外山遺跡」から4基の計9基の方形周溝状遺構が検出された。いずれも現況では墳丘をもたずしかも主体部も確認されず、遺物の出土も兵崎遺跡2号方形周溝状遺構の溝内から須恵器の検出をみただけである。ここでは墓と断定できないので、「方形周溝墓」と呼ばずに「方形周溝状遺構」と名称した。

方形周溝墓の研究は1964年の東京都八王子市「宇津木遺跡」に始まると言われている。その後^{注1}全国で発掘調査の報告がなされ、関東でも南・西関東を中心に発見例が増加し、1970年代になると東・北関東でも増加の傾向がみられるようになった。茨城県でも「小野崎城跡」^{注2}、「須和間古墳」^{注3}、「向井原遺跡」^{注4}、「津田天神山遺跡」^{注5}、「下高場遺跡」^{注6}などの各遺跡から相次いで方形周溝墓が検出され、さらに茨城県教育財団が調査を実施した「北今城遺跡」^{注7}、「志筑遺跡」^{注8}、「大塚新地遺跡」^{注9}からも調査報告がみられる。

ところで、石岡南台の9基の方形周溝状遺構のうち、「兵崎遺跡」の1・2号、「大谷津A遺跡」の1・2号、「外山遺跡」の1号は形態が比較的明確にとらえられたもので、その他のものは削平や重複が激しく不明な部分が多い。特に外山遺跡の4号は不明な点が多く、ここでは触れない。

溝が全周しているものは兵崎遺跡の1・2号、大谷津A遺跡の1・2号、外山遺跡の1・2・3号である。2辺を欠くものは大谷津A遺跡の3号である。正方形を呈しているものは兵崎遺跡の1・2号、大谷津A遺跡の1・2号、外山遺跡の1・2号で、外山遺跡の3号は台形状を呈している。これらの遺構は共通点が多く、南北方位はほとんどが西側を指し、溝の掘り方も「┘」形を呈している。長軸は8～15m弱、周溝の上幅は0.5～2mと比較的小形である。方体部側の立ちあがりは外周側の立ちあがりより急でほぼ垂直を呈し、各辺とも直線的であり、各コーナーは隅丸形状を呈している。また、主体部として認定できる土壌の検出はなかった。墳丘の関係が考えられ、高く盛りあげられた上から構築された主体部であって、墳丘が崩れ落ちたり、開墾時に削平されたりして破壊されているのだろうか。それにしても、方体部・溝内・周辺部からこの遺構に関する遺物の出土がみられないのはどういうことだろう。

これらを考えてみると、近年関東地方に新しい時期の所産物と呼ばれている「方形周溝状遺構」そのものではないだろうか。この遺構は、方体部がほぼ平坦で主体部もなく、溝も凹凸はなく、壁面も鋭角に掘りこまれ、平面形状も整然としていられる。石岡南台の遺跡から検出されたものも墳丘はなく、壁面の立ちあがりも急であり、プランも明確であるし、さらに主体部をはじめ溝中埋葬施設もないため、やはり「墓」というより「方形周溝状遺構」と呼ぶのが妥当と思われる。

奈良時代末から平安時代にかけてのものと思われる「兵崎遺跡」の2号方形周溝状遺構は、古

墳時代前半の首長墓あるいは族長墓的なものではなく、性格など異なる埋葬施設の一つであろうと考えられる。

注1 大場盤雄「東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構」日本考古学協会 昭和39年

注2 茨城県立太田一高史学部報「史考」19号 昭和40年

注3 茂木雅博「須和間古墳」茨城県史料・考古資料編 昭和49年

注4 水戸市教育委員会「向井原発掘調査報告書」昭和49年

注5 } 勝田市教育委員会「勝田市埋蔵文化財調査報告書」昭和50年
注6 }

注7 茨城県教育財団「南守谷地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」昭和56年

注8 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」昭和55年

注9 茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」昭和56年

4 溝状遺構

「兵崎遺跡」の東端を南北方向に伸びる溝が1条検出されている。溝幅30～80cm・深さ25～40cmと細く浅い溝であるが、自然遺構か人工遺構か不明である。出土遺物が皆無であるため時期も判明しないが、現時点では国分期の遺構と思われる2号方形周溝状遺構を切りこんでいるので、それ以後の時期のものであると解釈できる。遺跡の西側部から16基の土壘が検出されているが遺構の存在は希薄であり、溝から東側のエリア外の地域については発掘例がなく不明の状態ではあるが集落が存在する可能性もある。この溝は、予想される東側の集落と西側を何らかの意味で区割する性格を有していたものではないかと考えられる。

遺物について

1 土 器

石岡南台の各遺跡から出土した遺物の量は相対的に多い。特に「大谷津B遺跡」の北端部と「外山遺跡」は覆土中からも多量の縄文土器片が出土している。「兵崎遺跡」・「対馬塚遺跡」・「大谷津C遺跡」からの遺物の出土は希薄である。土器群の中で主体をなすものは総量からみても縄文土器で、その中でも特に浮島式に比定される土器が主流を占めている。

(1) 縄文土器

第1群 条痕文系土器

口縁部に沈線文・刺突等の文様帯を配する条痕文系の土器で、外山遺跡の8号住居跡から出土している。また、尖底部もグリッド発掘時に検出されている。縄文早期の茅山式に比定される。しかし、この時期の遺構は確認できなかった。

第2群 羽状縄文系土器

○関山式土器

対馬塚遺跡1号住居跡床面上から、多量の繊維を含み黒褐色を呈す深鉢形土器が検出されている。波状口縁を呈し、瘤状の小突起を有し、幾何学的に連続爪形文を施した上に瘤状文を貼付し、胴部にかけては0段多条縄文を施文している。また、半截竹管具によるコンパス文も施されている。関山式に比定される土器群である。

○黒浜式土器

外山遺跡10号住居跡から、胎土中に砂粒と繊維を含み灰褐色を呈す縄文土器片が検出されている。地文に縄文を有し、斜縄文・付加条縄文・羽状縄文が施文されている。縄文の上に半截竹管具による沈線文や有節平行沈線文を施文している。黒浜式に比定される土器群である。

第3群 前期後半の土器

○諸磯式土器

浮島式土器を伴出する外山遺跡の住居跡から数点出土している。細かい縄文を地文にもち、円形竹管文・半截竹管具による平行沈線文・孤線文・有節沈線文などを組み合わせて曲線と直線をおりなしている。有節沈線文は三角形の文様を施しているものがある。半截竹管具による肋骨文や木葉状文もみられる。さらに、連続爪形文ないしは有節平行沈線文間を縦位に円形竹管文を押捺しているものも検出されている。これらの土器群は、諸磯a式に比定される。

また、諸磯a式土器よりやや厚手で細い粘土紐を貼り付けて意匠文としている土器もみられる。この浮線文の上に斜状にキザミが施されている。これらは明らかに諸磯b式土器と考えら

れる。

しかし、この群の土器はまとまって出土しているものではなく、量が少ない。しかも浮島式土器と層準を示しているわけではなく、混在して出土している。何らかの意味で混入したのだろう。

○浮島式土器

石岡南台の各遺跡から出土した遺物の中でも圧倒的に多い土器群である。実測をした個体や拓影図の土器片については個々に説明を述べてきたので、ここでは全体的なことについて触れたいと思う。

この群の土器系式は、通常、浮島Ⅰ式～Ⅲ式に大別されている。今回は一括して浮島式土器として取り扱ってきたが、当然細分化が必要であることを痛感している。石岡南台の各遺跡から出土している浮島式土器の概観とⅠ～Ⅲ式に分類した文様構成について述べてみたい。器種としてはほとんど深鉢形土器である。胎土に砂粒・砂礫などを含み、繊維は有さない。器厚は5～10mmぐらいで、橙色・明赤褐色・灰褐色・にぶい褐色・にぶい橙色などを呈している。平縁が多く、波状口縁もみられる。粗製土器もみられ、無文あるいは口縁近くに輪積痕を残し、その下端から指頭圧を連続的に施文、また口唇部にキザミを施すものもみられる。

先ず浮島Ⅰ式に比定されると思う土器について考えてみよう。これは「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」(学研究,昭和41年)のAトレンチ第5～7層, Bトレンチ第2～4層の土器を標準とするものである。この系式の特徴とするものは、まばらな撚糸文を地文に有している。変形爪形文・稚拙な波状貝殻文の文様構成と思われる。また、頸部に凸帯を有しその上に刺突を加えているものもみられる。浮島Ⅰ式土器に比定される文様構成について類別化してみると次のとおりである。

第Ⅰ類 半截竹管具による平行沈線を有するもの

これは、無文地に施されるものと撚糸文を地文にもちその上に施されるものとある。平行沈線文は太目の半截竹管具を用いて、横走・斜行・孤状・波状・木葉状に施文している。時には有節平行沈線文が加えられているものもみられる。この類に属するものは多い。

第Ⅱ類 連続爪形文を有するもの

平行沈線文と組み合わせて文様構成をしているものが多く、地文に撚糸文や貝殻文をもつものも若干みられる。口縁直下に口縁部に沿って施文されたり、胴部と区画するために施文されている。

第Ⅲ類 波状貝殻文を有するもの

第Ⅰ類と同じように出土が多い。ハマグリやハイガイ等の貝殻腹縁を用いたジグザグ波状文で、稚拙な感じをうける。主に胴部に施文されている。

第Ⅳ類 変形爪形文を有するもの

半截竹管具を交互に作用させて、狭幅の変形爪形文を連続させている。地文をもたないものと地文に撚糸文をもつものに分けられる。口辺部や頸部に施されている場合が多く、その間は平行沈線文が施文されている。

その他には先にも述べたように、無文または輪積痕を残す土器群が検出されている。しかし、この土器群はⅠ～Ⅲ式に含まれるものである。

次に浮島Ⅱ式土器をみると、浮島Ⅰ式に多くみられた撚糸文が全くみられなくなる。底部は下端が外へややみ出してくるようである。文様構成について類別化してみると次のとおりである。

第Ⅰ類 半截竹管具による平行沈線を有するもの

施文具が細く、沈線間隔は密になり、多条に施文されている。平行沈線文を横走・斜行・爪状に施文している。また、有節平行沈線文は若干曲線化してくるようである。

第Ⅱ類 連続爪形文を有するもの

やはり平行沈線文との組み合わせによる文様構成が多い。Ⅰ式より爪形文の幅が広がる。口縁部に数条にわたって施文したり、頸部に胴部と区画するために施文されている。半截竹管具による刺突文が加えられている場合もある。

第Ⅲ類 波状貝殻文を有するもの

比較的細く明瞭な貝殻文を呈し、数段にわたって底部に至るまで施文されている。サルボウ・ハイガイ等の貝殻を使用している。

第Ⅳ類 変形爪形文を有するもの

変形爪形文は幅広となる。Ⅰ式と同じように平行沈線文との組み合わせが多い。

その他にやはり輪積痕をよく残し、その下端に指頭圧を施しているものもみられる。棒状具の圧痕を加えている場合もみられる。

浮島Ⅲ式土器は量的には極端に減少する。長期間にかけての生活は行われなかったのだろう。この系式を代表する三角文を呈する土器は、ほとんど検出されていない。貝殻腹縁を用いたジグザグ波状文は数段にわたって施文されており、口縁付近にも達している。しかし、貝殻文はⅡ式に比して不明瞭になってきている。連続爪形文の施文間隔は密になり、連続爪形文の上に竹管の先端をそいだ施文具を連続的に同一方向から刺突している。変形爪形文も退化し、扁平化して端部が列点状に残る感じになってくる。幅は広い。これらは、石岡南台の各遺跡から出土している浮島Ⅲ式土器に比定される土器群にみられる文様構成である。

特に住居跡内から出土している浮島式土器を中心に述べてきたが、グリッド発掘中にも多量に出土しているので、それらを含めて再吟味する必要がある。層による出土状況・遺構の分布

状況・土器片の復元状況など時間的な問題でできなかった次第で、大いに今後検討されなければならない問題である。

第4群 中期前半の土器

前期末葉から中期初頭の下小野式土器と中期前半の阿玉台式土器が極少量出土している。下小野式土器を伴出する住居跡は確認できなかったが、「対馬塚遺跡」の4号住居跡は出土遺物等からも阿玉台期の住居跡と考えられる。多量の雲母片を含み、比較的無文地が多い。また、縄文が施文されているもの、太い沈線による区画文を有しているものなどもみられる。

(2) 弥生土器

第1群 沈線文系土器

1本描き沈線あるいは半截竹管による渦巻文を呈する弥生土器片が、「外山遺跡」の20・24・30号住居跡の覆土中から各1点ずつ出土している。これらは、中期後半の足洗式に比定されるものである。また、同遺跡の53号住居跡の覆土中から、「S字状結節文」を施文している弥生土器片と3本の平行沈線で波状文と懸垂文を施文している弥生土器片が出土している。前者は千葉県の日井南遺跡の出土土器に比定されるもので、後者は東中根式に比定されるものである。しかし、この群の土器の出土はほとんどみられず、数点が他の遺物と混在しているだけであり、遺構とは関連性がないものと思われる。

第2群 瘤状貼付文系土器

県南地方にみられる土器系式で、複合口縁の下端部に小瘤を貼付している一群である。「外山遺跡」の45号住居跡から出土した壺形土器をみると、口縁部は複合口縁を呈し、その下端に刺突を施している。さらにその上に小瘤2個を1単位にして6対の貼付文を施しており、複合口縁部は異なる縄文原体を替えて二重に施文されている。頸部文様帯はⅠに付加条縄文を施し、Ⅱは無文帯を構成しており、靱痕が認められる。内面はナデ整形がなされている。口径16cm・器高29.6cm・底径8cmを測り、肩部がはり出している。器厚5mm程で、砂粒を含み、にぶい黄橙色で焼成は普通である。十王台式土器に並行される土器群であろう。

第3群 櫛目文系土器

櫛歯状具による波状文・懸垂文・横線文などを施している一群で、弥生時代後期の長岡式や十王台式に比定される。「外山遺跡」の弥生時代後期あるいは五領期の住居跡から出土している。器種は壺形土器や小形壺である。ここでは、出土量の多い十王台式土器について触れてみたいと思う。

実測した土器の個体については、各住居跡の出土遺物表で説明しているので省略し、全体的に包括してみることにする。口唇部にはキザミや縄文原体による押捺がみられるものがある。口縁部は、複合口縁を呈しているものと呈さないものがある。前者の場合は、その下端にキザミの装

飾を施している。複合口縁の部分は、縄文が施文されているか無文である。後者の場合は、口縁部に縄文か櫛目の波状文を施文しており、頸部との境に微隆帯を設け、指頭かヘラ状具による押捺がなされている。頸部は、十王台式土器の特徴がよく表現されている。2ないし3条の櫛目による懸垂文を施し、土器円周を3～6区割し、区割された間に櫛目の波状文を施している。懸垂文の中は無文である。胴部との境目には、櫛目による横線文が施文されている。胴部は付加条縄文で羽状を呈しているものが多い。底部は、無文・木葉痕・布目痕がみられる。

これらの土器は、先にも述べたように五領の住居跡からも検出されているので、弥生時代終末期に位置づけられるものと思う。

(3) 土師器

「外山遺跡」の18軒の住居跡から土師器の出土がみられる。5・39・41号住居跡は出土量も多く、完形を呈しているものも検出されている。器種は、甕形土器・壺形土器・坏・高坏・塊・埴・甑等である。五領式土器は、刷け目調整とていねいなヘラ磨きで整形されている。鬼高式土器は、ヘラ磨きやヘラ削りと口縁部の横ナデなどの整形技法がみられる。

(4) 須恵器

「兵崎遺跡」の2号方形周溝状遺構溝内覆土中から、須恵器の坏が6個体出土している。そのうち1個体は高台付坏である。器形は、平底の底部からまるみをもって立ちあがっている。ロクロ整形によって量産化されたものと考えられ、やや粗雑である。整形技法や形態の特徴からして、「安房西古墳群」出土の須恵器と同一時期に比定されよう。

注1

注1 茨城県教育財団「鹿島線関係遺跡発掘調査報告書」昭和55年

2. 石器類

石岡南台の各遺跡から石器類の出土がみられたが、数は少ない。しかし、生活に必要な種類は揃っている。「外山遺跡」では遺構からの出土がみられるが、他の各遺跡ではグリッド発掘中に出土したものがほとんどである。石器類のほとんどは縄文時代のものと思われるが、「外山遺跡」の39号住居跡の砥石は古墳時代に属すると思われる。

土器の総量と比較して石器および石片の出土点数が少ないのは良好な原材に恵まれなかったためであろう。そのことは、石皿と凹石、敲石と磨石というように1つの石器が両方の用途に使われていることから推察できる。また、石器の出土状況からみると、床面に密着した状態で出土している石器がほとんどない。これは、石器の「吹上パターン」ととらえられはしまいか。だが、石器群の組み合わせや人間の生活行動から検討を加えていかなければならない問題なので、ここで

は指摘だけに留めておきたい。

各石器の法量および出土地点については一覧表にまとめた。

石器実測表

器種	No	出土地点		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	挿図番号
敲石	1	兵崎	B3i1	10.6	6.7	5.3	532	花崗岩	第301図-1 PL64-1
	2	〃	D3e3 I・III層	8.3	7.0	4.9	414	〃	第301図-2 PL64-2
	3	大谷津A	C1h0 I～III層	10.2	8.3	5.6	653	〃	第301図-3 PL64-3
	4	〃	C2j3 I～III層	8.3	6.6	4.5	380	〃	第301図-4 PL64-4
	5	〃	D2c5 I～III層	11.1	6.2	3.9	440	〃	第301図-5 PL64-5
	6	大谷津B	A2e7 I層	10.0	4.8	3.7	218	流紋岩	第301図-6 PL64-6
	7	〃	A2e8 I層	10.6	6.9	3.8	412	硬砂岩	第301図-7
	8	〃	A2f7 I層	8.6	7.5	4.3	415	アブライト	第301図-8 PL64-7
	9	〃	A2f8・f9 X	6.0	7.0	4.2	240	砂岩	第301図-9 PL64-8
	10	〃	B2e1 II層	12.7	7.8	5.7	672	〃	第301図-10 PL64-9
	11	〃	B2g7 II層	11.5	8.8	5.8	882	流紋岩	第301図-11 PL64-10
	12	〃	B2g9 II層	8.9	7.1	5.7	426	アブライト	第301図-12 PL64-11
	13	外山	SI-2 4区X	9.5	6.8	7.2	842	流紋岩	第301図-13
	14	〃	SI-3 1区	9.8	6.4	3.4	317	砂岩	第301図-14 PL64-12
	15	〃	SI-3 4区	15.0	7.5	5.5	835	硬砂岩	第302図-1
	16	〃	SI-5 4区X	12.7	7.3	5.5	731	花崗岩	第302図-2 PL64-13
	17	〃	SI-11 X	9.9	8.3	4.8	515	流紋岩	第302図-3 PL64-14
	18	〃	SI-14 X	5.8	7.4	4.2	255	〃	第302図-4 PL64-15
	19	〃	SI-14 1区X	12.5	8.4	7.3	1015	花崗岩	第302図-5 PL64-16
	20	〃	SI-14 3区X	9.6	8.8	3.0	342	砂岩	第302図-6 PL64-17
	21	〃	SI-14 3区X	9.7	7.0	4.7	490	花崗岩	第302図-7 PL64-18
	22	〃	SI-21 3区X	5.9	4.0	3.0	100	砂岩	第302図-8 PL64-19

器種	No	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	挿図番号		
敲石	23	外山	SI-22 1区X	10.7	5.5	4.7	410	半花崗岩	第302図-9 PL64-20	
	24	〃	SI-24 4区X	7.7	7.3	4.7	345	硬砂岩	第302図-10 PL64-21	
	25	〃	SI-26 2区X	9.2	8.7	5.3	530	砂岩	第302図-11 PL64-22	
	26	〃	SI-26 2区X	9.4	6.2	3.5	270	花崗岩	第302図-12 PL64-23	
	27	〃	SI-30 1区X	5.8	5.8	3.8	180	流紋岩	第302図-13 PL64-24	
	28	〃	SI-33 3区X	12.5	10.5	7.0	1230	砂岩	第302図-14 PL64-25	
	29	〃	SI-33 3区X	8.9	7.6	6.4	655	半花崗岩	第302図-15 PL64-26	
	30	〃	SI-37・38	9.0	5.8	3.5	262	アプライト	第302図-16 PL64-27	
	31	〃	SI-40 X	7.6	7.2	5.8	515	砂岩	第302図-17 PL64-28	
	32	〃	SI-40 X	10.7	6.1	3.5	365	アプライト	第303図-1 PL64-29	
	33	〃	SI-40 X	10.9	6.3	3.1	355	砂岩	第303図-2 PL65-1	
	34	〃	SI-44 3区X	8.5	5.0	2.4	150	花崗岩	第303図-3 PL65-2	
	35	〃	SI-48 4区X	9.3	5.0	1.7	125	砂岩	第303図-4 PL65-3	
	36	〃	SI-51 2区X	8.7	7.0	8.8	530	アプライト	第303図-5 PL65-4	
	磨石	1	大谷津C	A1a1 I層	5.4	4.2	2.4	74	砂岩	第303図-6 PL65-5
		2	大谷津A	C2j5 I~III層	10.7	7.1	6.7	765	〃	第303図-7 PL65-6
3		〃	D2a5	10.3	9.0	4.4	563	流紋岩	第303図-8 PL65-7	
4		対馬塚	A2j5 II層	7.5	10.2	4.0	470	砂岩	第303図-9 PL65-8	
5		〃	B3g1 I層	9.0	5.4	4.9	519	流紋岩	第303図-10 PL65-9	
6		大谷津B	A2a8 II層	4.8	4.2	1.9	58	砂岩	第303図-11 PL65-10	
7		〃	A2g1 II層	11.8	6.8	5.1	606	〃	第303図-12 PL65-11	
8		〃	B2g9 II層	6.9	5.6	4.1	231	〃	第303図-13 PL65-12	
9		〃	B2区 Z	5.5	5.1	3.1	124	〃	第303図-14 PL65-13	

器種	No	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	挿岡番号	
磨石	10	外山 SI-5 3区X	13.5	8.2	4.0	560	砂岩	第303図-15 PL65-14	
	11	〃 SI-21 4区X	11.5	5.8	4.5	440	流紋岩	第303図-16 PL65-15	
	12	〃 SI-33 1区X	12.7	5.5	2.8	335	砂岩	第303図-17 PL65-16	
	13	〃 SI-33 3区X	8.6	5.1	1.9	140	粘板岩	第303図-18 PL65-17	
	14	〃 SI-36 2区X	9.0	6.9	3.6	340	半花崗岩	第303図-19 PL65-18	
	15	〃 SI-40 X	10.2	7.0	5.5	760	砂岩	第304図-1 PL65-19	
	16	〃 SI-40 X	9.4	8.5	7.3	953	硬砂岩	第304図-2 PL65-20	
	17	〃 SI-40 4区X	10.0	6.8	3.0	305	〃	第304図-3 PL65-21	
	18	〃 SI-47 2区X	9.1	8.5	4.5	452	砂岩	第304図-4 PL65-22	
	19	〃 SI-48 3区	8.7	7.7	5.7	425	〃	第304図-5 PL65-23	
	20	〃 SI-49 4区X	7.7	7.6	6.0	576	硬砂岩	第304図-6 PL65-24	
	21	〃 SI-63 3区	8.0	3.4	2.0	71	〃	第304図-7 PL65-25	
	礫器	1	兵崎 C3d3 表土	9.0	6.2	2.2	190	硬砂岩	第304図-8 PL65-26
		2	大谷津A C2d4 I層	9.6	10.0	2.9	430	砂岩	第304図-9 PL65-27
		3	大谷津B B2g9 II層	7.0	5.8	2.2	102	粘板岩	第304図-10 PL65-28
		4	〃 B2g9 II層	4.5	5.7	3.1	145	砂岩	第304図-11 PL65-29
		5	〃 B2g9 II層	8.9	7.0	4.6	424	花崗岩	第304図-12 PL66-1
		6	〃 B3g1 I層	8.7	3.7	2.6	126	砂岩	第304図-13 PL66-2
		7	外山 SI-5 3区X	11.0	8.4	4.0	480	砂岩	第304図-14 PL66-3
		8	〃 SI-16 X	8.5	7.5	2.4	182	〃	第304図-15 PL66-4
		9	〃 SI-18 1区X	7.8	4.8	3.0	180	〃	第305図-1 PL66-5
10		〃 SI-21 2区X	5.9	3.5	1.8	60	チャート	第305図-2 PL66-6	
11		〃 SI-21 3区X	10.4	5.9	2.9	255	安山岩	第305図-3 PL66-7	

器種	No	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	挿図番号
礫器	12	外山 SI-21 3区X	6.3	5.4	2.4	115	砂岩	第305図-4 PL66-8
	13	〃 SI-21 1区X	7.5	6.3	4.5	265	〃	第305図-5 PL66-9
	14	〃 SI-24 3区X	7.9	7.0	5.5	420	硬砂岩	第305図-6 PL66-10
	15	〃 SI-30 4区X	5.9	5.5	2.7	116	砂岩	第305図-7 PL66-11
	16	〃 SI-37・38	10.5	6.9	3.0	340	〃	第305図-8 PL66-12
	17	〃 SI-40 X	12.0	9.1	3.8	600	〃	第305図-9 PL66-13
	18	〃 SI-45 3区	7.9	5.5	2.0	125	片麻岩	第305図-10 PL66-14
	凹石	1	大谷津A C2g I～III層	7.6	4.8	1.4	76	砂岩
2		〃 C2g1 I～III層	8.7	7.8	5.7	493	アブライト	第305図-12 PL66-16
3		〃 D2a5 I～III層	11.6	8.0	3.2	420	安山岩	第305図-13 PL66-17
4		〃 D2a5	12.2	10.0	5.7	1011	砂岩	第305図-14 PL66-18
5		〃 D2a5	8.7	5.7	3.4	252	〃	第305図-15 PL66-19
6		外山 SI-14 4区X	11.5	8.9	4.3	720	安山岩	第305図-16 PL66-20
7		〃 SI-21 3区X	8.2	6.9	4.8	412	花崗岩	第306図-1 PL66-21
8		〃 SI-31 4区X	22.0	11.4	3.4	635	安山岩質熔岩	第306図-2 PL66-22
9		〃 SI-32 3区X	8.7	7.5	2.3	190	〃	第306図-3 PL66-23
10		〃 SI-33 3区X	16.5	15.1	4.6	2150	花崗岩	第306図-4 PL66-24
11		〃 SI-37・38	10.4	8.7	3.2	412	安山岩	第306図-5 PL66-25
12		〃 SI-40 5X	8.0	4.8	3.7	210	花崗岩	第306図-6 PL67-1
13		〃 SI-47 3区X	8.7	6.8	4.2	333	流紋岩	第306図-7 PL67-2
14		〃 SI-52 3区X	11.2	9.8	4.9	985	砂岩	第306図-8 PL67-3
15		〃 SI-53 X	12.1	8.0	4.8	898	アブライト	第306図-9 PL67-4
16		〃 SI-57 2区X	4.0	7.2	2.0	71	熔岩	第306図-10 PL67-5

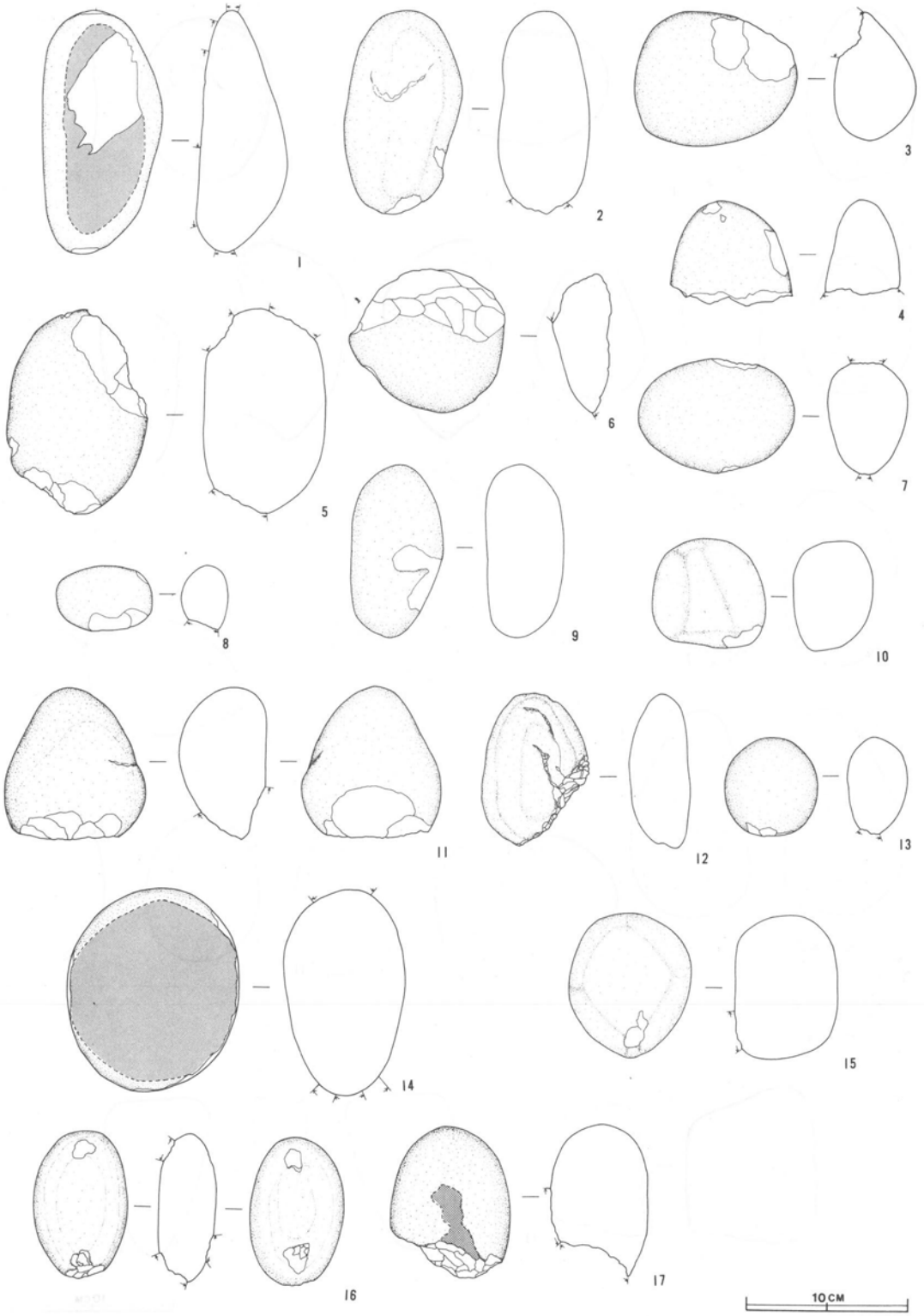
器種	No	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	挿図番号	
凹石	17	外山	SI-62 2区X	4.0	7.2	3.8	198	安山岩	第306図-11 PL67-6
	18	〃	B3a3	21.4	27.0	7.9	7520	砂岩	第306図-12 PL67-7
石皿	1	大谷津A	D2a5 I~III層	5.8	5.8	4.4(縁) 3.1	121	安山岩質熔岩	第307図-1 PL67-8
	2	大谷津B	A2b8 I層	7.7	4.3	3.1(縁) 1.4	73	熔岩	第307図-2 PL67-9
	3	〃	A2e8 I層	9.9	6.0	4.5(縁) 3.2	225	安山岩質熔岩	第307図-3 PL67-10
	4	〃	A2e9 I層	8.3	6.0	2.7(縁) 1.8	120	熔岩	第307図-4 PL67-11
	5	外山	SI-8 1区X	11.0	6.4	3.4	465	砂岩	第307図-5 PL67-12
	6	〃	SI-31 2区X	6.1	6.3	7.9(縁) 1.8	270	安山岩質熔岩	第307図-6 PL67-13
	7	〃	SI-31 2区	9.0	7.8	1.9	80	〃	第307図-7 PL67-14
	8	〃	SI-35 2区X	8.0	4.9	2.0	125	砂岩	第307図-8 PL67-15
	9	〃	SI-40 X	7.8	7.3	3.0(縁) 2.2	115	熔岩	第307図-9 PL67-16
	10	〃	SI-61 4区X	7.5	6.6	4.8(縁) 3.0	362	〃	第307図-10 PL67-17
	11	〃	SI-62 2区X	10.5	7.9	4.3	436	〃	第307図-11 PL67-18
磨製石斧	1	大谷津A	CI10 I~III層	3.9	4.7	2.1	68	流紋岩	第307図-12 PL67-19
	2	〃	D2b7 I~III層	8.7	4.3	2.3	165	緑泥片岩	第307図-13 PL68-1
	3	対馬塚	A2h6	4.4	5.0	2.3	85	花崗岩	第307図-14 PL68-2
	4	大谷津B	A2a8 II層	5.8	2.9	1.5	36	チャート	第307図-15 PL68-3
	5	〃	A2d7 I層	5.1	2.9	1.3	31	ホルンフェルス	第307図-16 PL68-4
	6	〃	A2f6	7.2	4.3	2.3	121	〃	第307図-17 PL68-5
	7	〃	A2i2 III層	5.8	4.6	3.8	171	砂岩	第307図-18 PL68-6
	8	〃	Pit13 4X	8.5	3.2	0.9	36	アブライト	第307図-19 PL68-7
	9	大谷津C	Ala2 I層	5.4	4.2	2.4	74	砂岩	第307図-20 PL68-8
	10	外山	SI-11 炬跡4号内X	7.8	3.8	1.2	59	粘板岩	第307図-21 PL68-9

器種	No	出土地点		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	挿図番号	
磨製石斧	11	外山	SI-14	4.5	2.9	0.8	18.5	緑泥片岩	第307図-22 PL68-10	
	12	〃	SI-20 1区	9.8	4.5	3.3	315	〃	第307図-23 PL68-11	
	13	〃	SI-21 1区	4.1	3.2	2.3	65	〃	第307図-24 PL68-12	
	14	〃	SI-24 4区X	5.4	3.5	1.4	50	〃	第307図-25 PL68-13	
	15	〃	SI-30 4区X	7.9	8.2	2.6	325	砂岩	第307図-26 PL68-14	
	16	〃	SI-33 X	9.7	6.0	1.2	150	粘板岩	第307図-27 PL68-15	
	17	〃	SI-36 2区X	4.5	4.1	2.7	90	斑糲岩	第308図-1 PL68-16	
	18	〃	SI-40	12.0	5.0	3.2	350	緑泥片岩	第308図-2 PL68-17	
	19	〃	SI-40 X	6.5	4.8	2.5	135	〃	第308図-3 PL68-18	
	20	〃	SI-58 2区X	5.5	3.4	1.0	32	チャート	第308図-4 PL68-19	
	21	〃	SI-62 4区X	5.1	3.5	1.0	27	緑泥片岩	第308図-5 PL68-20	
	打製石斧	1	外山	SI-32 4区X	8.5	7.4	3.3	290	粘板岩	第308図-6 PL68-21
		2	〃	SI-45 1区X	15.2	7.2	1.7	290	点紋粘板岩	第308図-7 PL68-22
	ハンマー ストーン	1	外山	SI-58 1区	13.2	8.1	3.0	516	硬砂岩	第308図-8 PL68-23
	砥石	1	対馬塚	B2e9 I層	10.0	4.2	3.3	254	砂岩	第308図-9 PL68-24
		2	外山	SI-26 1区X	10.0	7.5	3.7	470	緑泥片岩	第308図-10 PL68-25
		3	〃	SI-39 X	9.2	3.9	3.1	96	凝灰質砂岩	第308図-11 PL68-26
		4	〃	SI-45 2区X	10.0	5.2	4.5	375	砂岩	第308図-12 PL68-27
		5	〃	SI-63 3区	9.1	5.5	6.2	539	硬砂岩	第308図-13 PL68-28
	石鋤	1	〃	SI-24 4区X	26.7	6.6	2.6	1145	粘板岩	第308図-16 PL68-29
	石錘	1	兵崎	C3e7	5.0	2.2	1.3	21	粘板岩	第308図-14 PL68-30
2		外山	SI-13	4.0	3.7	1.8	34	砂岩	第308図-15 PL68-31	
石鏃	1	外山	SI-25	1.5	1.3	0.3	0.5	チャート	第309図-1	

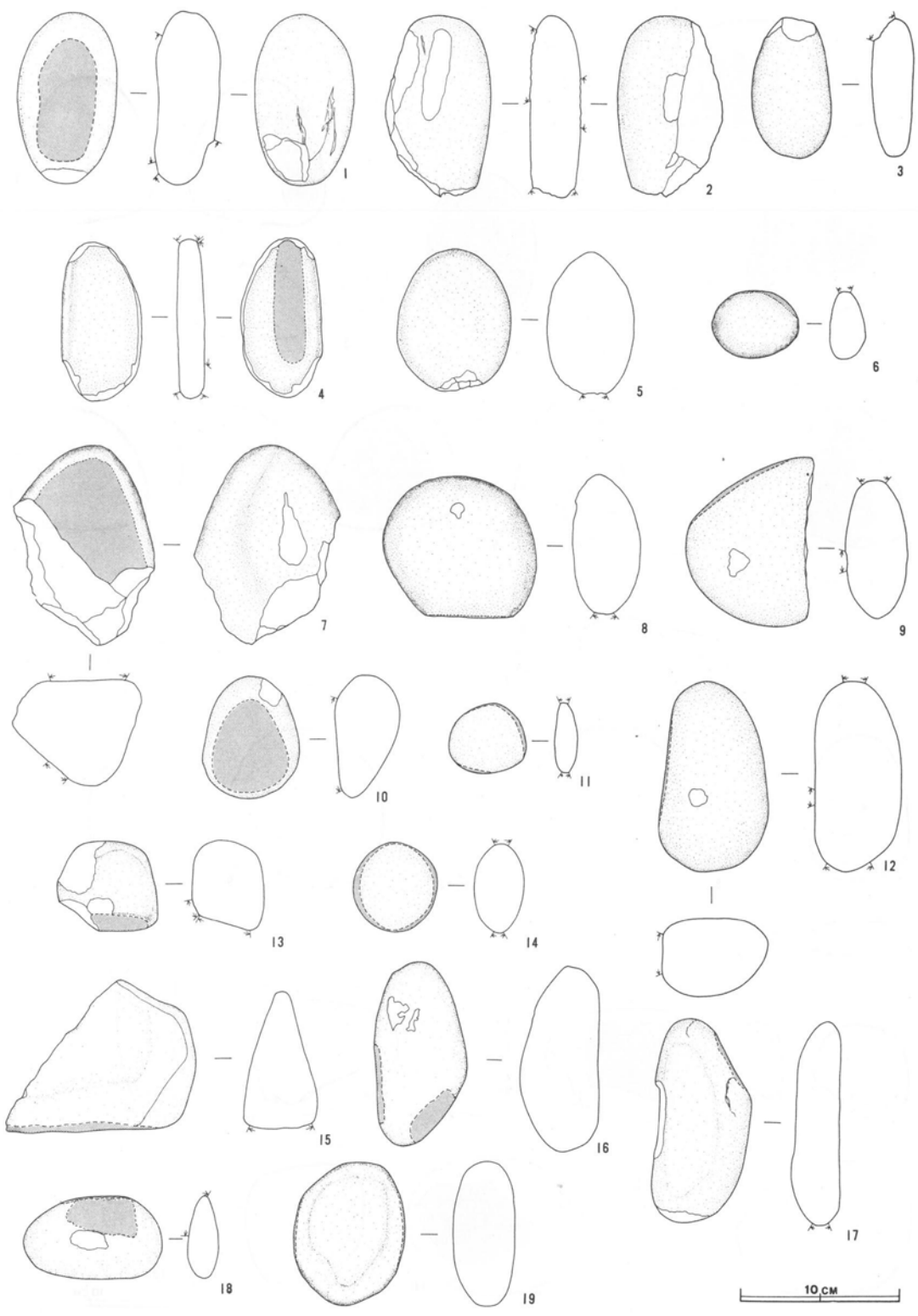
器種	No	出土地点		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	挿図番号
石 鏃	2	外 山	SI-33	1.4	1.5	0.3	0.5	チャート	第309図 - 2 PL 69
	3	〃	SI-33	2.1	1.8	0.4	1.5	ホルンフェルス	第309図 - 3 PL 69
	4	〃	SI-40	3.0	1.6	0.6	3.0	チャート	第309図 - 4
	5	〃	SI-42	2.7	1.8	0.4	1.0	ホルンフェルス	第309図 - 5
	6	〃	SI-46	3.6	1.5	0.4	1.5	チャート	第309図 - 6 PL 69
	7	〃	SI-58	1.7	1.0	0.3	0.5	〃	第309図 - 7 PL 69
石 錐	1	外 山	SI-8	4.2	2.2	0.9	7.5	ホルンフェルス	第309図 - 8 PL 69
	2	〃	SI-30	2.4	1.3	0.3	1.0	チャート	第309図 - 9 PL 69
	3	〃	SI-31 4区X	2.8	0.9	0.4	1.0	〃	第309図 - 10 PL 69
	4	〃	SI-33 3区X	5.7	1.6	0.6	3.0	〃	第309図 - 11 PL 69
石 匙	1	外 山	B2fi II層	3.5	3.5	0.7	7.0	ホルンフェルス	第309図 - 12
尖 頭 器	1	外 山	SI-3	4.6	2.3	0.8	0.7	チャート	第310図 - 1 PL 69
	2	〃	SI-11 X	10.4	2.2	0.8	19.0	粘板岩	第310図 - 2 PL 69
	3	〃	SI-62	3.9	1.8	0.6	4.5	安山岩	第310図 - 3
	4	〃	C3as IV層	12.2	2.9	1.2	48.5	チャート	第310図 - 4 PL 69



第301図 石器実測図 (敲石)



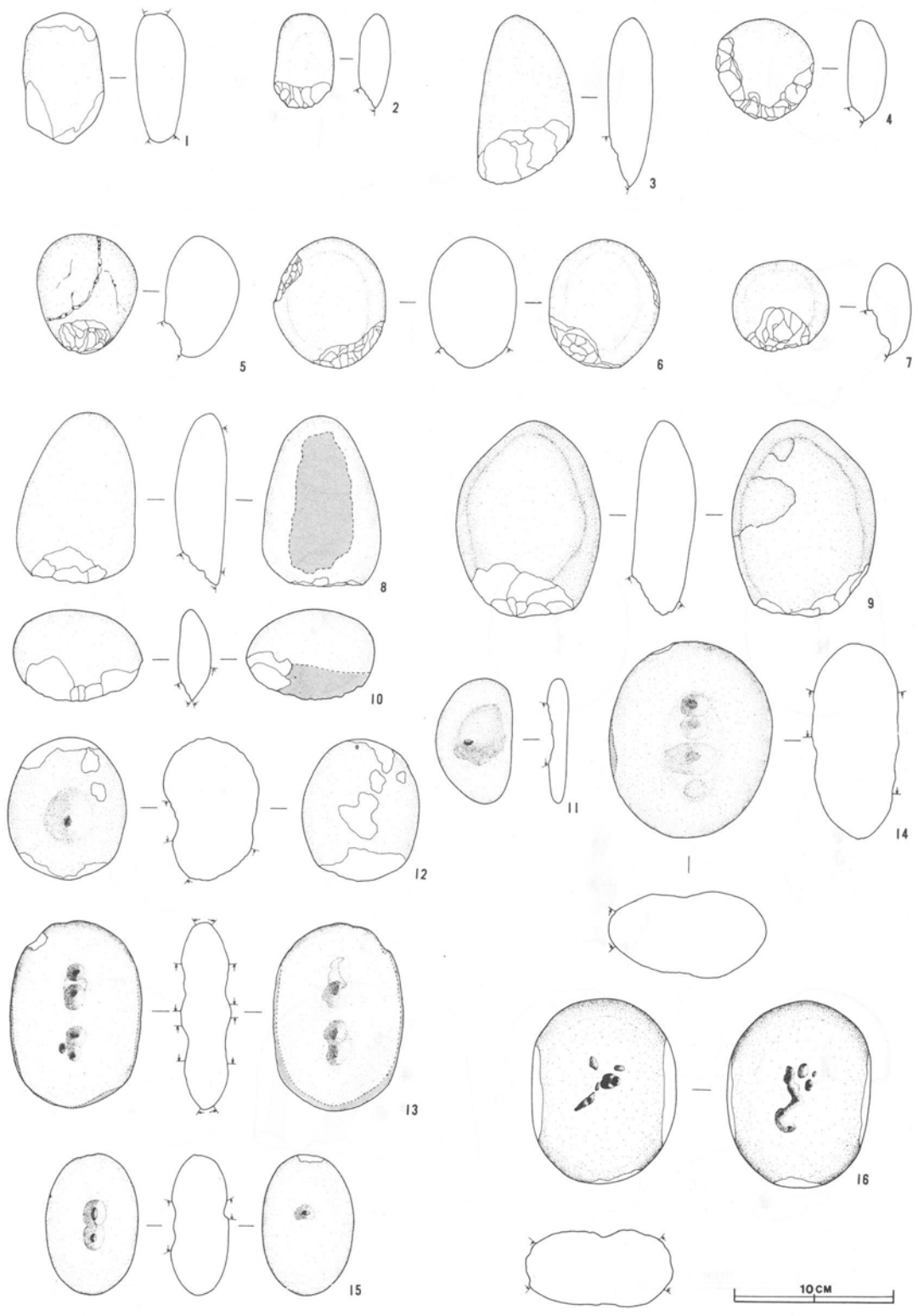
第302図 石器実測図 (敲石)



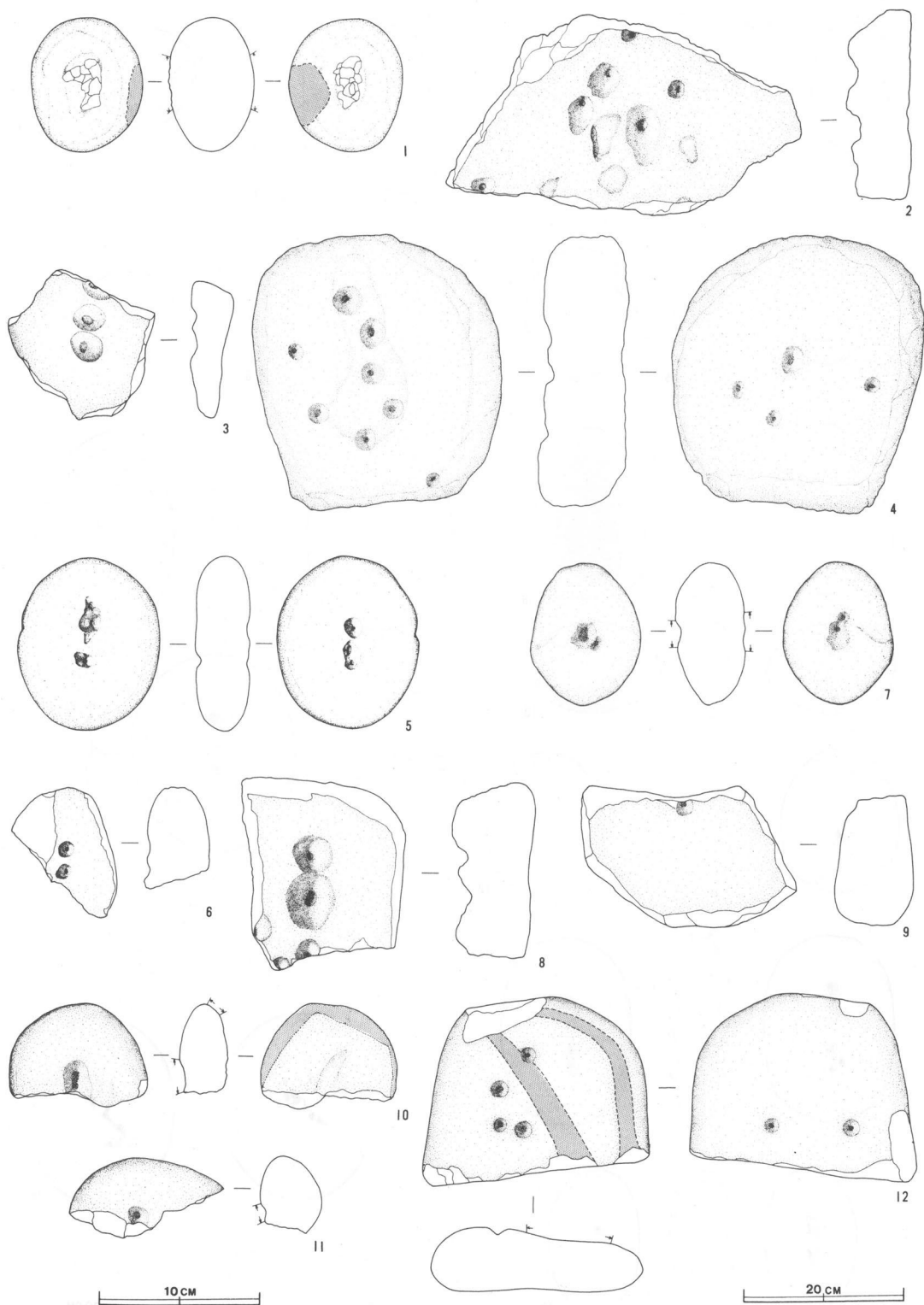
第303図 石器実測図 (敲石・磨石)



第304図 石器実測図 (磨石・礫器)



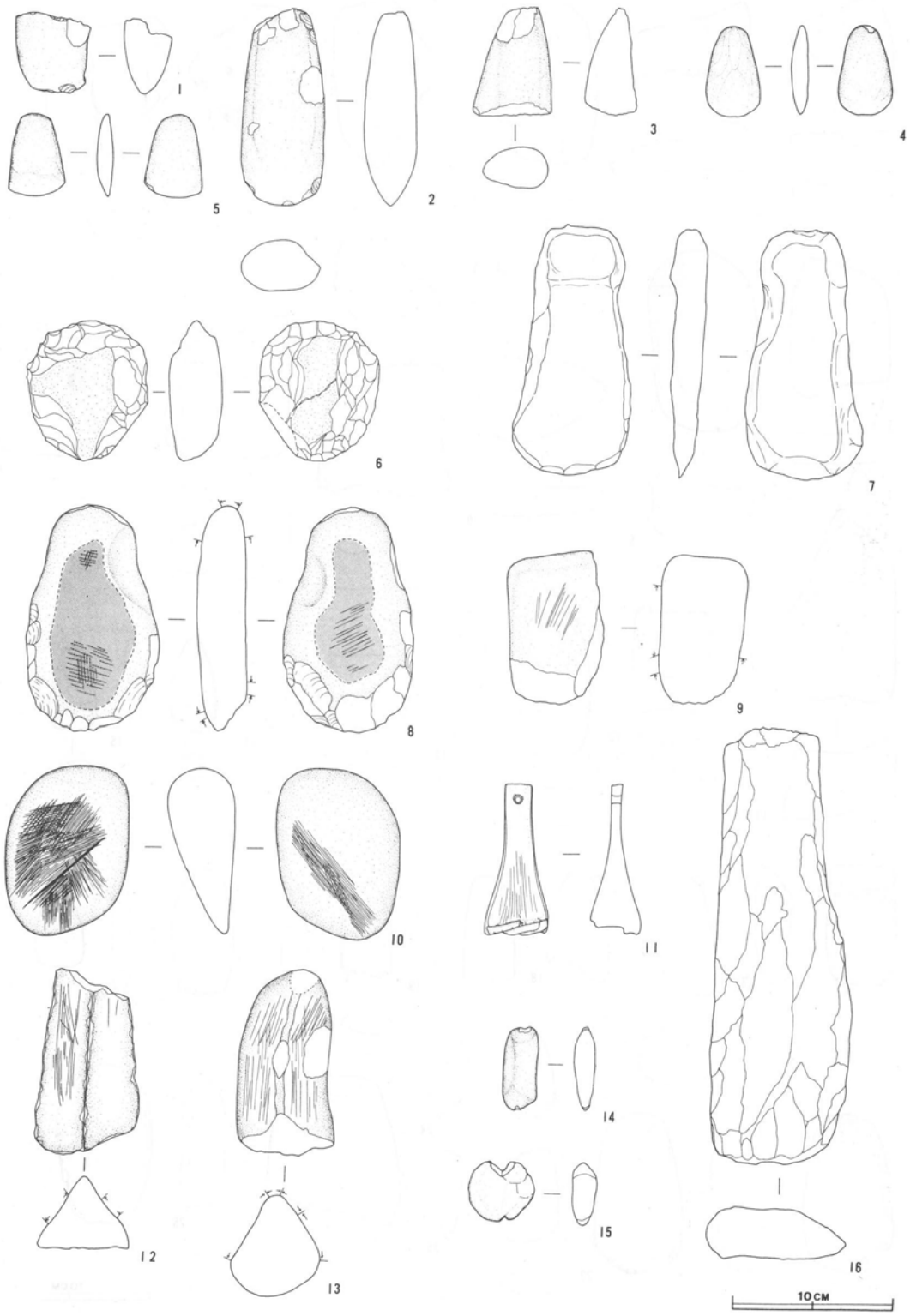
第305図 石器実測図 (礫器・凹石)



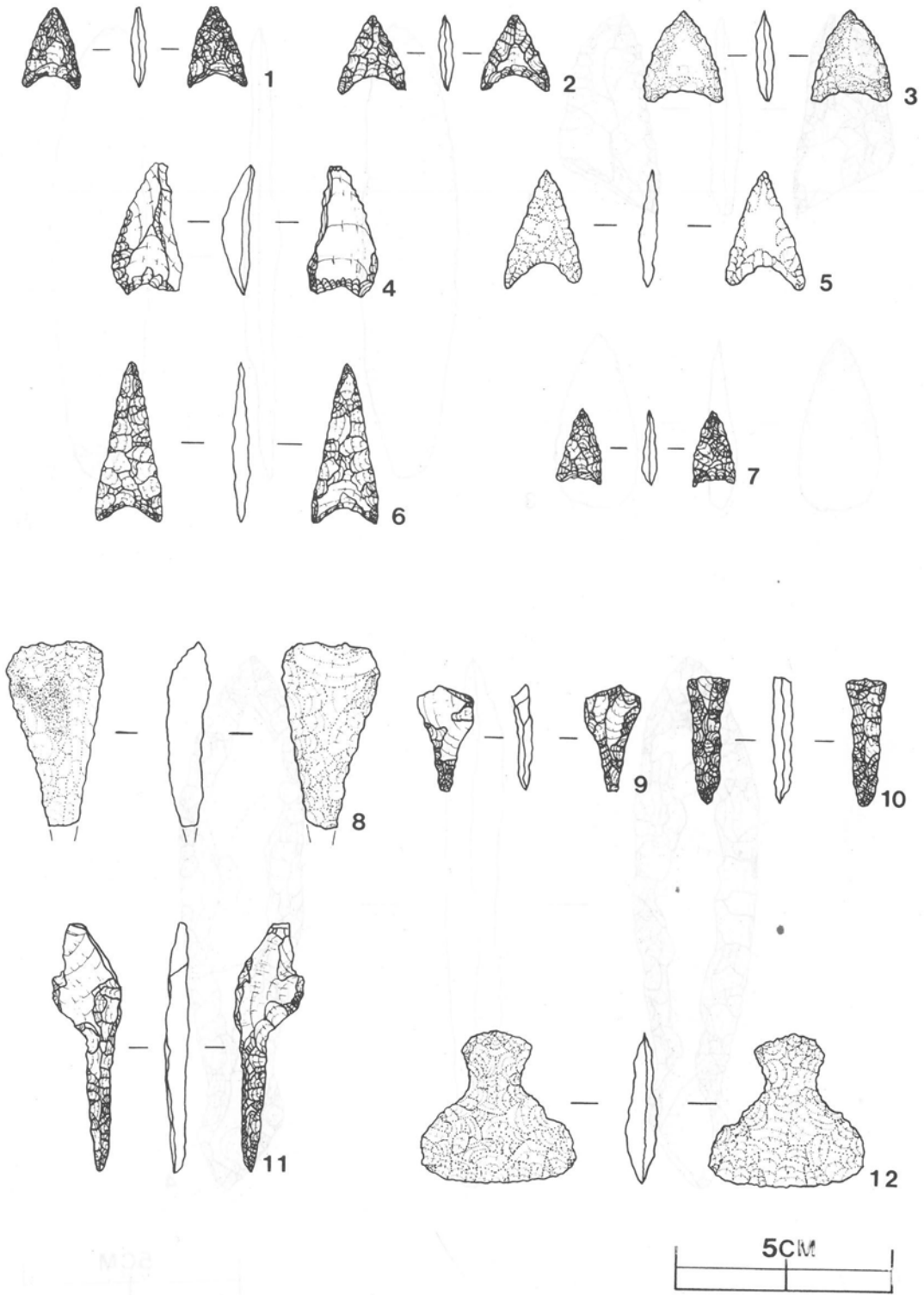
第306图 石器实测图 (凹石)



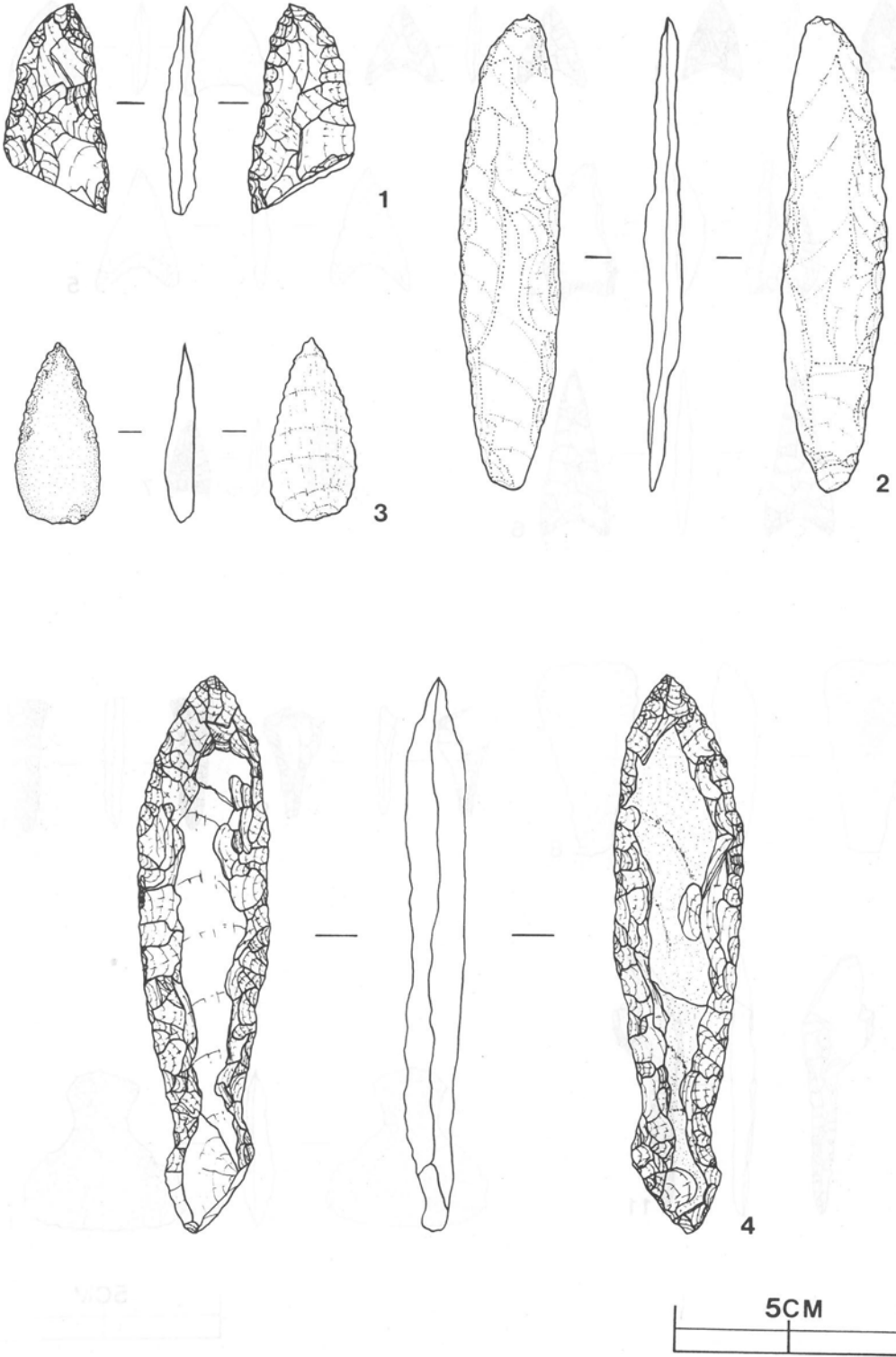
第307図 石器実測図 (石皿・磨製石斧)



第308図 石器実測図 (磨製石斧・打製石斧・ハンマーストン・砥石・石錘・石鋤)



第309図 石器実測図 (石鏃・石錐・石匙)



第310图 石器实测图 (尖頭器)